Crash×Clash

野平

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
Ｃｒａｓｈ×Ｃｌａｓｈ

【Ｎコード】
Ｎ５５８９Ｍ

【作者名】
野平

【あらすじ】
この世界には、強大な魔力を秘めた謎の存在”星の記憶”というものがある。
それがどういう見た目をしていて、どういう代物であるかを研究している少年がいた。
少年の名前はショウタ。２年前からの記憶しか持たず、自分がどういう人間で、どういう本名で、どこに住んでいたかも全く思いだせないい。
彼は”星の記憶”の強大な魔力が人間の願いをかなえられる代物だ

と知ると、それを手に入れることを最大の目的とする。
はたしてショウタと仲間の６人は”星の記憶”を手に入れることができるのか。

（※タイトル変更してみました）

0話　紅の逃走

まだ日の昇らぬ朝方。
その森は靄につつまれ、明りもなく薄暗い。
湿気を多量に含んだ空気はただ重く、冷たく、走り抜ける人物の身を撫ぜては後ろへ流れていく。
靄を振り払い、走るその人の足には迷いがない。
そして、その人物の後ろで、靄は残酷にも切り裂かれた。
音もなく空が切れ、靄が、木々が、自然にはない直線的な形状になっていく。
走る人物は後ろを決して振り返らない。
だが、後ろの光景はしっかりと把握している。だから、彼は迷うことなく走り逃げるのだ。

森があけて、ざく、と地面と靴がすれる音を立てて、その人は足をとめた。

目の前は崖。普通の人なら背筋が凍るほどの高さだが、その人物はひるむことなく、静かに振り返った。
ヴェール越しの白んだ空。その下にいる彼は、息も上がらず、恐ろしく落ち着いていた。
癖のある茶髪と中性的な顔立ち。はっきりとした瞳が靄の中をにらむ。
その奥、影が次第にくっきりとしていき、森の中から人が出てきた。

その数４人。
一番前に立っているのは、黒髪の精悍な顔立ちをした青年だった。
後ろには鼠色の軍服を身に纏っている３人が直立不動で青年の後ろに構えていた。

お互いの張りつめた空気を裂いたのは、黒髪の青年だった。

「せっかくの再会だというのに、こうも全力で逃げられてしまってはかないませんね」

黒髪の青年が場にそぐわない、穏やかな声色で喋る。
にこり、と笑い、すらり、と背中の大剣を抜いた。優しげな面持ちの中に、狂気を孕ませて。
目だけがギラギラと、茶髪の青年をにらんでいる。
声と表情がアンマッチだった。
この二人の置かれている状況を今は誰も把握できないだろう。だが、間違いなく黒髪の青年は茶髪の青年を狙っていることは確かだ。
しかし、茶髪の青年は自分の身に起こる危機に対して、恐ろしいほどの落ち着きを払っていた。

その表情に絶望や恐怖、怒りは一切ない。

ひたすらに強く、まっすぐだった。

黒髪の青年は満面の笑みを浮かべ、片手ではとても持てそうにない大剣の切っ先を軽々と茶髪の青年に向けた。
大剣が、わずかに昇った太陽の光を受けて鈍く光った。

「さぁ、選びなさい。
連れ帰されて殺されるか、今ここで殺されるか」

言葉づかいはひたすら丁寧なのに、話している内容はひどく物騒だった。
茶髪の青年は、静かに目を閉じ、小さくため息をついた。
すぅ、と開いた瞳が一瞬悲哀を帯びたことに、黒髪の青年は気付か

ない。
黒髪の青年はそんなことには気付かぬまま、大きく踏み込み、大剣を茶髪の青年の頭めがけて振り下ろした。
軍服を纏った人物たちは誰も一言も発さず、身動き一つとらなかった。
目の前で人を殺そうとする青年に、無反応だった。
黒髪の青年はあと少しで形のいい頭をつぶせることに期待を抱いたのか、どこか危ない光を帯びた瞳で恍惚と茶髪の青年を見た。
その時、
息をのんだ。

茶髪の青年の瞳が、ちっとも揺るがなかったのだ。

今殺されそうとしている人間の顔ではなかった。その理由を、黒髪の青年は絶対にわからない。
そして、流れが変わる。
決して黒髪の青年はためらわなかったわけではない。
なのに、剣が振り下ろせなかったのだ。
ぐぐ、と力を込めているのに。動かない。
剣は青年の頭上あと少しのところで止まり、びくともしていないのだ。
さすがに後ろの軍服の人間たちも狼狽し、各々剣を抜いた。
黒髪の青年は、気付いたのだ。この力が何かを。

「貴方・・・！」

それ以上の言葉を言う前に、茶髪の青年から漆黒の影が出た。
目をくらまされ、黒髪の青年は二、三歩後ずさり、体勢を立て直した。

「くそっ・・・」

悪態をつき、黒髪の青年は茶髪の青年のほうに手を向け、指を鳴らす。
すると、ざぁっと竜巻が巻き起こり、影が空へ巻き上げられ、霧散した。
幾分か時間も経ったのだろう。日はいつのまにか辺りを明るく染めた。

夜明けだった。

黒髪の青年はゆっくりと崖下を覗き込み、振り返って森の方へ歩き出す。
そこに茶髪の青年の姿はない。

「い、いったいどこへ消えたというのです！？」
軍服を纏った人間の一人が、この事態に驚きを隠せない様子で尋ねる。
黒髪の青年は足を止めず、少し残念そうに答えた。
「さぁ。わかりかねます。でも、そう遠くは逃げられません」
大剣を仕舞い、青年は元来た道を歩いて戻る。

「一旦戻って、また探しましょう。
大丈夫です。彼は私から逃げられませんから。絶対私は彼を見つける」

確固たる自信。その根拠について、軍服の人間たちは何も言わない。
それは当然のことであり、事実だから。
日が昇り切っても、森は薄暗いままで、

靄は晴れる気配がなかった。

1話　裏庭の珍客

少年が錆びついた窓を外に向かって思いっきり開けば、埃が辺りに巻き散り、主の帰宅を歓迎した。
盛大にむせて、少年は窓枠に肘をついて、思わず笑みをこぼす。
朝の日差しは明るくて、青青しく茂る草が光にあたってきらきらと輝いた。
そんな少年の視界遠くに、人影が手を振っているのに気づく。
その人物が大声で少年に向かって喋る。
恰幅のいい女性で、手に籠を抱えている。

「あれまぁ！おかえりなさい！さっき？」
「セルシャおばさん！ただいま！
昨日の真夜中に帰ってきたんです。留守の間、ありがとうございました」
「いいえぇ。それじゃ後で預かっていた郵便物とパンを焼いて持って行ってあげるわ。
町の人にも帰ってきたわよって伝えておいてあげるからね！」
「ははは。ありがとうございます」

ディタクミナ国南部の小さな町。フォル。　少年の家はそこにある。

少年は黒に近い茶髪に降りかかった埃をはたき落とし、小さな家の窓をすべてあける。
帰ってきて間もないが、やることはいっぱいある。
布団を抱えて、庭に出る。
ばさっばさっと埃をはたいて、手製の物干しざおに干す。
次に、持って帰ってきた洗濯物を桶に入れて、井戸の水を桶に満たす。

少年はなかなかおおざっぱな性格らしい。固形の石鹸をそのまま水の張られた桶にぼちゃんと投げ入れた。
そして今度は箒とモップを取りに裏庭の倉庫に向かった。

そこで、少年は固まった。

ぼろいベニヤ板でできた縦長の倉庫の前に、人がいたからだ。
扉に背をつけて、ぐったりと座り込む様は、まるで死んでいるようだ。

「うっ・・・・・・・・・・・・・・わぁあああー・・・
いや、さすがに2週間留守にはしてたけど、こんなまさか過ぎる展開は初めてだ。　家なしさんかな・・・」

少年は少々どぎまぎしながら、でもためらいなく人に近づく。

まだ少しでも生きているのなら、病院か診療所に連れて行ってあげるのがこの家の主としてのせめてもの情だ。
とはいっても、青天の霹靂すぎてどうしていいのか少々混乱気味だ。

少年がしゃがみこんで、辺りを見る。
ぼろぼろの服で、彼もまた埃っぽい臭いがした。
風がふわりと吹くと、それに乗って生臭い匂いが少年の鼻孔をかすめた。
どこから血が出ているのか確認しようと、手を伸ばした。

そして、少年は気付いた。

ぼろぼろの手袋。ところどころ破れている。
その下の白い手に、まるで血のような紅を確認したからだ。　でも、

それは血ではない。
爪自体が真っ赤だった。そして少年はそれに見覚えがある。
再度よく見ようとしたその時、手に痛みがはしった。

ばしり、と弾かれたのだ。
次に腹部に痛みが走る。風景が前に遠ざかって、蹴飛ばされたのだと理解した。

「いった！」

地面に体を打ちつけて、あいたたた、と呻いた。
どうやら目の前の人間は生きていた。ある意味安堵したが、この仕打ちはひどすぎる。
少年は自分を蹴飛ばした人物を見る。
自分よりも明るい茶髪。中性的ではっきりとした顔立ち。
恐らく年上だろう。背の低い自分よりも幾分か背は高いが、線が細すぎる。
見開かれた紅い瞳は、警戒心むき出しだった。
青年はとっくに立ち上がっていて、辺りを一瞬見渡すと、少年を見てかすれた声でこうつぶやいた。

「お前、誰だ・・・」
「それは俺が君に言うべき台詞だよ・・・」

腹を押さえてゆっくりと立ち上がりながら、少年は声を振り絞った。
青年は据わった目で少年を見たまま、懐の短剣を鞘から抜いた。
さすがに少年も驚き、両手を広げた。
数歩後ずさりながら、早口で叫んだ。

「ちょっとまって！俺は君に危害を加えたいわけじゃない！
ただ、ここは俺の家だし、いつの間にか君がいたから・・・！」

必死の訴えに、青年は少し動きを止めて一度だけ深呼吸をした。
短剣を持つ手を下ろし、もう一度辺りを見渡した。
切り替えの早い人物だったのが、少年の幸いだった。

のどかな田舎町。小さな家の裏庭だと把握すると、青年は短剣を仕舞い、歩き去ろうとした。
しかし、少年はそれを引き止めた。
先ほど脅されたことなど気にしていないのか、果敢に少年ははっきりと喋った。

「待って。足引きずってる。
それに・・・血、流れてる。そんな怪我して・・・
訳ありそうだし、行くところあるの？」

少年は決しておせっかいではない。だが、確信を持って、青年に近づいた。

「俺はショウタっていうんだ。ただのしがない考古学者だ。
君が思っているような敵ではないはずなんだ。研究所とかそういうの、関係ないから。
だから、どうか怖がらないでほしい！」
「お前・・・？」
「早く中入って」

少年はそう言って青年を引き入れた。

勢いよく扉を開けて部屋に入りこむと、まだ外に出切らない埃が舞

って、青年が咳きこむ。
ベッドを埋めていた荷物を床に引きずり落とすと、ショウタは青年をベッドに座らせた。
それから、大きなリュックサックの中から簡易的な治療道具を取り出す。
箪笥から何枚かタオルを取り出し、水でぬらして絞って、血を丁寧にふき取っていく。
顔も、腕も、埃と血が付いていて、すぐにタオルは汚れきった。
ショウタはもう一度、ちらりと青年の手を見た。
破れた手袋の下。やはり、紅い爪をしている。

「おい」

まじまじと見ていたときに声をかけられ、はた、とショウタが顔を上げた。そこには不快そうに眉を寄せる顔があった。
ショウタは顔を真っ赤にして、やってしまった、と小さくつぶやいた。

「ご、ごめんなさい・・・その・・・性格で・・・
あの・・・貴方、”ハシャナール”でしょう。紅い目と、紅い爪・・・」

沈黙が支配する。
いたたまれなくなって、ショウタはちらりと目線を上げた。
また蹴られるかと思っていたが、そうではなかった。
青年は静かに、訪ねた。

「お前は”ハシャナール”のこと、詳しそうだな。どこまで知っているんだ?」

ぽた、と、顎を伝って血が流れた。
その血しずくはショウタの右手に落ちた。
ショウタは言うかどうかためらった後、淡々と語った。

「”ハシャナール”は突然変異の、人。
”ハシャナール”は、すぐれた運動能力と高い魔力をもつ人種。
紅い目と紅い爪という身体的特徴をもっていて、研究としても、戦力としても、コレクションとしても、狙われやすいって聞く。
・・・俺も、分野は違えど研究者のはしくれだから、どういうことなのか、わかる気がする。
今君を目の前にして、君を引き止めた理由は、そうなんだ。
ごめん、正直、君を間近で見たかった。興味本位だった。ごめん」

最初は淡々とした喋り方をしたが、最後は声がどんどん沈んでいって、ぺこりと頭を下げて何度も謝罪を繰り返した。
青年は暫く黙っていたが、静かに言った。やはり、感情の起伏がなかった。
静かできれいすぎる表情が、ひやりと冷たいものだった。

「・・・俺は、偽善者が嫌いだ。
お前ほどはっきりと下心を認めて近づいたやつのほうが、嫌味なくていい」

気まずい空気が流れる。

その間も、ショウタは血を拭き取り、消毒をしてガーゼを貼る。
ほかの場所もその繰り返しをする。幸いなことに切り傷はどれも深刻そうなものはなかった。
額にもガーゼを貼って、顎を伝った血をきれいに拭いてやる。
先ほどの殺気はなく、青年は静かだった。

むしろ、赤の他人にこれほど触れさせるのも珍しいくらい、彼は従順でおとなしかった。
ショウタにとっては治療しやすくてこの上ないので、さほど気にはしなかった。
先ほどまで引きずっていた右足首を見る。ひどく腫れていたので、何か薬がなかっただろうかとショウタは棚をあさりだす。

そのとき、玄関がノックされた。

青年は瞬時に反応すると、ベッドから飛びのき、腰の短剣を抜いて構えた。
だが、足を痛めているのでバランスを崩し、後ろに倒れて壁に頭をぶつけてしまった。
過敏すぎる反応に、逆にショウタが驚いてドアと青年を交互に見やった。
ショウタは声を最大限抑えて青年に叫んだ。

「ちょっと！落ち着いて。今確認してくる。
・・・はい、誰ですか？」
「ショウタ君、セルシャおばさんですよ！おいしいパンが焼けたのよ！」

先ほどのおばさんの声に、ショウタは大きく安堵のため息をついた。
青年に大丈夫だと告げると、ショウタは玄関を開けた。

「ありがとうございます。おばさん。申し訳ないです」
「何言ってるんだい。がんばる若者にこの町の人間として面倒見ることは当然じゃあないか」
「いつも助かります。あの、聞きたいことがあるのですが」

「なんだい？」
「捻挫に効く薬草ってなんでしたっけ。あの、大きな丸い葉っぱの・・・」
「あぁそれはヴェルヌ草だねぇ。今の季節なら川べりにあるだろうね」
「川ですね！ありがとうございます」
「なんだい怪我したのかい？」
「いや。俺じゃなくて・・・」

ひょい、とセルシャはショウタの後ろを覗き込む。
隠すつもりはなかったが、なんとなくセルシャを制そうとするショウタだが、意味はなかった。
部屋の隅にうずくまる青年とセルシャの目が合った。
きょとんとしている青年は、突然の訪問者にどう対応していいのかわからない、といった風だ。
そんな困惑している彼とは反応を間逆に、彼女はおやおやと声を上げる。

「あれまぁ。ショウタ君、旅のお友達かい？」
「え、あ、そ、そうです！」

セルシャは遠慮なく部屋に入ると、青年に近づいた。
対する青年はすぐに両手を隠し、ずるずると壁伝いに逃げようとする。

「お前さんかい、捻挫しているのは」
「・・・」
「どぉれ。おばさんがオクセンおじさんにたのんで薬をもらってきてあげようね。
その間にショウタ君たち、おばさんが焼いたパンでも食べて待って

なさいね！
パンは焼きたてを食べるのが一番だからね」

突然の申し出に、ショウタは目を丸くさせる。
驚いたのは青年も同じで、顔をあげてセルシャを見る。
その眼には疑惑と混乱がありありとにじんでいた。

ショウタはセルシャに駆け寄る。
「セルシャおばさん、そんな、悪いです・・・」
「気にすることはないよ。
そうだ、お前さん、お名前は？」

セルシャが何気なく尋ねた言葉に、ショウタはそういえば、と思い出す。
自分は彼の名前を聞かなかった。
幸いなのは、その質問がショウタに向けられなかったことだった。
青年は暫く黙っていた口を開いた

「・・・テレジー。
テレジー・レナードスタン」
「レナードスタンって、あの歴史に残る著名な作家と同じ名字じゃないか。いいねぇ！
それに、テレジーってのは古ニニ語で奇跡を意味するテルジエからだね。いい名前じゃない。大事にしなさいね」

そういうと、セルシャはご機嫌に家を出ていった。
残されたショウタとテレジーは、暫く沈黙していた。
最初に動いたのはショウタで、テーブルに置かれたバスケットを持って、テレジーの横に座った。

「・・・食べてないでしょ。朝ごはん。セルシャおばさんのパンは町一番なんだ。これでも食べて、待とうよ」
「・・・・」

まだ暖かい、焼きたてのパンは小麦の味が口いっぱいに広がって、おいしかった。
この味も二週間ぶりだなぁと、ショウタはお腹だけでなく心も満たされる気がした。
隣でゆっくり少しずつ、パンをかじる青年のほうをみて、ショウタは尋ねた。

「・・・テレジーっていうんだ。名前聞かなくて、ごめん」
「・・・いや」
「ねぇ君、もしかして研究所を追われてきたの?」
「どうして」
「いや、その・・・”ハシャナール”だし、怪我してたから・・・」

「・・・」
「・・・俺さ、あと3日はここにいるから。そうしたらまた次の調査場の下調べしにいこうって思ってる。
その間さ、療養を兼ねてここにいなよ。
フォルは田舎町だし、みんないい人ばかりだから、全然気にすることはないよ」
「それはお前のさっきの、知識欲から来る提案か?」

テレジーの言葉に、ショウタは一瞬声が出なくなる。
だが、静かに首を横に振った。

「今は、人助け、だと思ってる。

人を助けるために、理由はないでしょう。
俺の庭で倒れていたのも何かの縁だし。君が良くなるまで面倒みるよ」

暫くして、セルシャが薬を持ってショウタの家に再びやってきた。
その後ろには小さな子供が二、三人くっついてきていた。どうやら話を聞いて新たな来訪者を見にやってきたらしい。
ショウタは庭に家にある中で一番きれいな椅子を出すと、テレジーにそこに座ってのんびりしていてと言った。
そして、今日一日の大切な予定である、大掃除を再開した。
埃が風に舞っていささか煙たかったが、もう青年はむせなかった。
静かに、黙ってショウタが掃除する様を見ていた。
一言もしゃべらず、あたりを警戒する雰囲気はそのままに。
ショウタはそれで仕方がないと思った。なぜなら、彼は”ハシャナール”。
普通の人とは違い、訳ありなのだから。

その程度の認識を抱いていた青年が、何の変哲もない普通の少年の人生に、これから大きくかかわっていくことになる。

2話　追撃

テレジーはにこりとも笑わない人だった。
それでも今は共同生活を営んでいるので、ショウタは口数少ない彼から少しずつ話を聞きだしていった。
まず、
年はショウタの二つ上の１９歳であること。
嫌いな食べ物は酸っぱいものであること。
ディタクミナの南西に位置するダニア国から来たということ。
そして、彼は語らなかったが、ショウタが感じ、知ったことがいくつかある。
氷の魔術が使えること。
テレジー・レナードスタンという名が偽名であろうこと。
何か大切なものを失って、今この場にいるということ。
そしてその理由が、今は誰にも言えないということ。
ショウタはそんな彼に苦手意識を抱いておらず、不快感も感じていなかった。
ただ漠然と、不思議な人だなぁとは思っていたが。

「これはなんだ？」

大して広くない家の間取りは、木造平屋建て。
部屋は二つ。普通なら小さい方の部屋にプライベートな空間を作るだろう。
しかし、ショウタの家は違う。
一番広い部屋にテーブルやベッド、箪笥などを置いて、すべての生活をその一部屋でできるようにしている。

そして小さな部屋は、それこそショウタにとってのプライベートな空間と言えた。

「あぁ。ここは俺の研究室みたいなもん」

本棚自体がもはや壁で、四方八方本で敷き詰められた部屋だ。中央のテーブルにはレポートが積んであった。
テレジーは本棚から一冊本を抜きとり、ぱらぱらとめくった。
ほかにも本棚には、地理、地誌、歴史について書かれた本が多く並んでいる。
しかし、テレジーが手に取った本は、そのどれにも当てはまらない、神話集だった。
考古学者の本棚におとぎ話が点在していることに、テレジーは気付いたのだ。

「神話が好きなのか？」

ショウタはレポートをまとめる手を止めて、テレジーのほうに振りかえった。
まさか自分のことを質問されるなんて思わなかったから。
しかも、なかなか確信めいたところを突いてくるところが、ショウタにとって複雑なところだ。

「そう・・・でもないかな。
俺が調べていることは、”星の記憶”だから、神話も少しは研究していたんだ」
「”星の記憶”・・・」
「そう」

手を完全に休め、ショウタはテーブルの下に丸められていた古い紙

を取り出すと、それを広げた。
古ぼけた地図とところどころ絵画のような絵が描かれているそれは、見覚えがある。
テレジーが今手に持っている神話集の表紙だ。
ショウタはその大きな紙をなでながら、説明を始めた。

「聞いたことはあるよね。この星の生い立ち。
この世界、”ソーラテネル”は、女神ソーラテネルによって造られた。
女神が１０００年祈り続けて、その最後の満月の日にこの星に命が誕生した。
この星の最初の命が誕生した時、”星の記憶”は鮮やかな七色を放ちながらこの星に吸収された。
その”星の記憶”は女神とこの星の命をつなぐ存在で、女神の愛するこの世界の命を守っている。ここまでが神話の大まかな話。
それから１０００年たった今、それは神話じゃなくて本当に存在しているみたいなんだ。
俺が二年かけて調べたんだけど、どうやらその記憶ってのは動く記憶みたいなんだ」
「・・・？」
「それは強大な魔力を秘めたもので、手に入ればどんな望みでも手に入るっていうんだ。
でも、どうしてそんな強大な魔力が形を持って存在しているんだと思う？
いや、そもそもどうして魔力は人の体の中や生物に脈絡と存在しているのかも俺は疑問に思う。
魔力が強大な物体として存在すれば、意思を反映させることができるという魔科学原理はまだ研究途中だけれど・・・」
「どうして」
「え？」

ショウタの話を中断する。
テレジーは本を仕舞うと、先ほどの紙にざっと目を通し、顔を上げずにショウタに問うた。

「どうして魔力があることに疑問を抱く?
俺たちの体に血が流れるのと同じように、魔力が流れていることは当然ではないのか?」

ショウタは肩を落とした。この質問は今に始まったことではない。今まで何回もそれを言われ、研究に意義を見出さないものは、大勢いた。

「そうだね。ほかの研究者からもよく言われるよ」
「仮に”星の記憶”が生きた物を媒介として存在する強大な魔力そのものだとし、原理が明らかになって、本当に願いがかなうものだとしたら、お前はそれをどうするつもりなんだ」
「・・・」
「この世界を手に入れたいか。それとも破壊したいか。
富を手に入れたいか、名誉が欲しいか、そもそもそれを知るだけで十分か」
「違う・・・
・・・でも、俺は確かに俺はそれを手に入れるために研究している。それが手に入ったらほしいものがあるんだ・・・それは・・・」

だんだん、ぼそぼそと落ちていく声色。
ショウタはそれを質問されると思っていたし、テレジーはちゃんと質問をした。
広げた紙を丸めて握りしめ、紐で巻きつける。延々と手を動かしたまま、

そして、ショウタは答えた。

「・・・記憶」

今度はテレジーが黙る番だった。
強大な、それこそ世界を手に入れられるほどの魔力への夢物語に抱く希望の小ささに驚いたのだと、ショウタは感じた。
テーブルに紙を置き、窓を開く。カーテンをまとめて、空気を入れ替える。
ショウタはテレジーのほうを振り向くと、どこかばつの悪そうに、はにかみながら言った。

「俺、2年より前の記憶がないんだ。
気がついたらこの町、フォルの入り口にいたんだ。年とか、名前は覚えていたけれど、ほかのことは何にもわからない。
両親の顔も思い出せないんだ。どこで生まれたのかも。
でもね、考古学っていうのかな。”星の記憶”について調べなきゃってことは覚えていて。
おかしいよね。肉親の記憶よりもこんなものの記憶の方が残るなんて。きっと本来の俺は勉強馬鹿だったのかも。
・・・だったら、うんと勉強してやろうって。それでもってその強大な魔力が願いをかなえられるほどのものだったら、
俺は迷わず、記憶を取り戻したいな、て。
軽蔑した?自分の私利私欲のために研究している研究者なんて」

テレジーは静かに首を横に振った。

彼はショウタが今まで出会った人物の中で二番目に常識にとらわれない角度をもった人間だと思った。

それが今は救いだった。
でも、ショウタはこのことを言ってしまって軽蔑されてもかまわなかった。
他人ただ一人の意見で変わるほど、軟な心は持っていないと信じていたからだ。
ショウタはふ、と息を吐いて、よし、と小さく声を出した。

「そろそろ昼食にしよう。さっきマルベニーニさんがきたでしょ。この辺で昔からある郷土料理を持ってきてくれたんだ。もう町のみんなも君のこと受け入れてるから、たまにはあいさつしに外に出なよ。
ここは街道の終着点で、俺みたいなよそ者に驚くほど寛大なんだ」
「・・・」

窓だけを閉め、部屋から出て居間に向かうその時、
遠くの方で爆発があったような音と、衝撃が二人を襲った。

「な、何!?」

ショウタは思わずテーブルに手をついてしまう。

「町の中央だよね・・・」
「!」

がきんちょが暴れているのかな、と思ったショウタだったが、テレジーにとっては違った。
彼は顔を真っ青にすると、そのまま家を飛び出してしまったのだ。
突然のことに声すら掛けられず、ショウタはテレジーを追った。
どくん、と心臓が動く。走る足がじん、と痺れるのを感じた。

嫌な予感がする。それは今までに感じたことのないものだった。

大きくない町の中。すぐに広間にたどりついた。
人だかりを建物の影から遠巻きに見やる。その中央にいた人物たちを見て、ショウタは眉をひそめた。

「軍人・・・あの軍服は、確かどこだったっけ・・・」
「ダニア軍だ」
「そうそれ・・・ってテレ・・・っ！」

思わずショウタが叫びそうになるのを、テレジーが口を押さえて制した。
先ほどの狼狽は全く見せず、彼は至極落ち着いていた。
しばらくすると、町人の一人が声を上げた。

「お前たち、いったい何のつもりだ！」
「町の噴水を壊しやがって！この噴水は主教様から頂いた歴史あるものなんだぞ！」
「それにお前たち、ダニア軍か！？ここをどこだと思ってるんだ！ディタクミナだぞ！」
「そうだそうだ！お前らみたいな弱小国家がいったい何のつもりだ！」

投げられた野次は次第に大きくなり、批判が宙を舞う。
そのとき、人が数人、後ろに吹き飛んだ。
息をのむよりも早く、さぁっと声がやんだ。
風の音だけが、耳に痛い。
軍人の前にいた黒髪の青年が何かをしたらしいが、突然のことで理解するには時間がかかっているようだ。
その青年だけは軍服を着ておらず、白いマントをばさりとはためか

せ、目を細めてあたりを見渡した。
口元だけを薄く、にぃっと引いて。

「さっきからぎゃいぎゃい煩いです。
私はただここにいる人間を引き渡してほしいだけなんですよ。
ここ数日のうちに、紅い目をした茶髪の男がここに来たでしょう。
それはいま、このちっぽけな町のどこかにいるはず。さぁ、言いなさい」

一瞬で心臓が氷漬けになったような錯覚に陥った。
ショウタは震える目で自分の間隣にいる、険しい顔をした青年を見た。
町の人たちは誰一人、口を開かない。
彼の言うその人物がだれを指すのかなんて、全員知っているのに。
こんな不届きな侵入者相手に喋ることなどない、と、腹をくくっているものもいれば、
さっさと面倒事を回避したいがために、言うべきかどうか迷っているものもいる。
考えていることは間逆なのに、行動としては全員沈黙をとっていた。

それはもちろん想像の範囲内だったから、黒髪の青年がにこり、と不気味に微笑んだ。
そして、ぞっとするような雰囲気をまとわせて、静かに言った。

「ゴミに興味はアリマセン。この町を地図から消されたくなければ、さっさと引き渡しなさい」

ショウタはテレジーの服の裾をきつく握りしめる。
自分のことじゃないが、心臓が早鳴りしていて恐怖が足元から脳天にめがけて昇って行くのを感じた。

そのとき、後ろから肩をたたかれた。
心臓が激しくろっ骨をたたいたが、すぐに落ち着きを取り戻す。

「（セルシャおばさん・・・！）」
「（こっちへおいで）」

恰幅のいいセルシャは二人を引きずると、路地裏に引き込んだ。
そこには騒ぎに参加していない女子供が数人いた。

「あんた、ショウタ君と一緒に来た時に訳ありだとは思っていたけれど、軍に追われていたんだね」

テレジーはうつむくと、小さく、申し訳なかった、と言った。
そして、すぐに出ていくとも言った。
そんな彼の肩を、セルシャは強くたたいた。

「なに、あんなやつら、男たちが追っ払っちまうよ！」
「そうだよそうだよ。山歩きで鍛えた男たちをバカにしちゃあいけないよ！」
「テレジー、行っちゃだめだよー！」

子供までもそう言い、テレジーはぎゅっと口を横一文に結んだ。
踵を返し、路地から出る。
セルシャの制止を振り切り、ショウタは彼の後を追った。
広場に現れたテレジーに、町の男たちが息をのんで、彼に道をあける。
黒髪の青年と、テレジーが向き合う。
テレジーに対し、青年は両手を広げて愛おしいものを見るように、感嘆の声を上げた。

「会いたかったですよ。捜すのに3日もかかるなんて・・・」
「テレジー！！」

人だかりを分けて、ショウタが彼の斜め後ろに現れると、黒髪の青年はショウタに気付き、目線を向けた。
その目を見て、ショウタはぞっと背中が粟立つのを感じた。
テレジーと同じ紅い目をしているのに、その目の奥の危ない光に腰が引けた。
これは、すごく、よくないと、本能が訴えている気がする。
青年はショウタからすぐに目線を外すと、再度テレジーに向かって言った。

「テレジー・・・そう、その名を。
貴方は徹底的に私から逃げたいのですね。許さない。貴方は私から逃げるなんて、そんなこと・・・」
「わかった。もう逃げるのはやめる」

テレジーはそういうと、ゆっくり短剣を抜いた。
遠巻きの声が一瞬で遠のいたような、眩暈に似たものを感じたショウタは、彼を引っ張って逃げようとしたが、びくともしない。
こんな町の真ん中で、いくら”ハシャナール”でも、この人間とやり合うのは恐ろしいと。
だが、テレジーの行動はショウタの想像とは違った。
もちろん、黒髪の青年が抱いていたものとも。

「逃げるのはやめて、お前を追い払うことにする」
「・・・テレジー？」

途端、大きな悲鳴が耳をつんざいた。

人々が逃げまどう。ショウタも逃げたかった。だけど、目の前の事態に体が動けない。
テレジーが何かをしているのはショウタにも分かる。それが何かはわからない。
彼から真っ黒い影が生き物のように放出されたかと思ったら、それは黒髪の青年とその取り巻きの軍人をとらえた。
屈強な軍人たちが、その影から逃れようと心を乱しているのが分かる。
辺りがぞっとするほど寒い。体をさすような彼の魔力が痛くてたまらない。
ただ一人、黒髪の青年は最初驚きで目を見開いたが、すぐに紅い瞳を細めて、テレジーに叫んだ。

「己の身を削ってまで引き離すか！2年も逃げておきながらいい加減学ばないことだ！
そろそろ自殺行為だということを自覚なさい！」

黒い影は彼らをすっぽりと包みこむと、霧散した。そこに彼らの姿はない。
影が消えると同時に、テレジーはがくりと膝を追って、地面にしゃがみこんでしまった。
辺りが静かすぎたと思っていたが、徐々に音を取り戻していくようだった。
子供の泣き声、大人のうろたえる声、風の音。
ゆっくりとショウタはテレジーに近づいて、彼の肩に手を伸ばそうとした。
その時、視界がぐらり、と揺れた。

3話　シュカの医者

彼のただでさえ色白の顔がこれでもかと言うほど真っ白だったが、こっちだってそう変わらない色に違いない、とショウタは思った。ぐったりとして浅い息を繰り返すテレジーの腕をつかんで引き上げようとするが、彼はしゃがみこんだまま動かない。目がうつろで、額にじわりと汗がにじんでいる。

「はなせ・・・」

「今この状況でよくそんなことが言えるね。まず俺は知りたいよ。ここはどこ?」

「・・・」

「もういい。ここで待ってて」

ここ、というのは、人通りが全くない街道の休憩所だった。街道の名前はシュケル街道と言うが、それだけでは場所を判別することは不可能だ。

シュケル街道はドギ大陸をぐるりと円を描くように通っている、大陸一長い街道だ。

この大陸のおもな国は、北半分を大国ディタクミナが占め、残りの西南部がダニア国、東部がコアッダ国といった風になっている。シュケル街道の始発点はディタクミナのフォル。そして、東周りにコアッダを抜け、最後はダニアの港町、バルベルに通じている。

そんな長い街道のどこにいるか、はたまたここがいったいどこの国かなんて、突如ここに来てしまった彼らには見当もつかない。おそらく現在位置を示す看板があったのだろうが、今は水分を含みすぎて腐った木が転がるのみ。

「ありえない。いったい何が起こったっていうんだ」
ショウタはどちらか一方の方向を選び、歩き出した。
のどか過ぎて変わり映えのない田舎道をしっかりとした足取りで歩く。

「どうして、いきなり俺たちがこんな訳のわからないところに飛ばされるんだよ・・・
・・・やっぱり、さっきのテレジーの魔術が原因かな。
あぁでも、俺魔力とか魔術とかまじないとか、そんな詳しくないし。
それに”ハシャナール”だって、名前と特徴以外はまったくわかんないしなぁ。
ていうかあいつら何なんだよいったい。信じられねぇ。なんで他国の軍が田舎町に来るんだよ」

テレジーと別れてから、ショウタはたまりにたまった疑問を独り言という、なんとも情けない方法で発散する。
暫く歩いて、人と出会わなかったら引き戻そう。
それか、テレジーを背負ってでも村もしくは町を捜そう。
そうしなければ、ポーチの中身以外何も持っていない、丸腰状態で野宿になってしまう。それは避けたい。
太陽はまだまだ真上に位置していたが、あっという間に傾いてしまうだろう。
今までさまざまな国で野宿を経験してきたショウタだが、それは道具あってこそのこと。
少々焦り気味に街道を歩くと、一人の人間がこちらに向かってきていることに気付いた。
歓喜でとび跳ねるよりも、安堵で体ががくりと重く感じた。そんな体に活を入れて、ショウタはその人物に駆け寄った。
だが、近づけど近づけど、その人は幾分小柄。
ようやく把握できたころには、その人物が少女であることがわかっ

た。
たった一人。少女は白いアタッシュケース一つでこの長すぎる、誰も通らない街道を歩いている。

「すみませーん！」
それでもショウタは声をかけた。
少女はきょとんとした表情で、ショウタを見た。
肩ほどの長さもない、ウェーブのかかったピンクベージュの髪の毛とウィスタリア色の大きな瞳。
白いケープを羽織り、大人っぽい雰囲気を持ちながらも、その顔はまだ若く、ショウタとそう年齢は変わらないだろう。
「はい？」
声をかけられた少女は小首をかしげて立ち止まった。
「ここの場所を知りたいんだ。できれば詳しく。
俺たち訳ありでここに今いて。一人病人も抱えていて・・・」
ショウタの言葉に、少女は手に口をあてて、驚いて見せた。
驚くところがあっただろうか、とショウタが思う。少女は透き通った声でショウタに言った。
「病人？それは大変ですね。どこにいるのです？」
「え・・・あそこの休憩所に」
「わかりました。行きましょう」
混乱するショウタをよそに、少女は大きな目を一回閉じて、うん、とうなづくと、ショウタをぬかして行ってしまった。
ショウタの先をいろんな意味で行く少女に、ショウタは目を瞬かせ、ただついていくことしかできなかった。

そして。
休憩所の隅にうずくまっていたテレジーは、少女を目にすると、飛びのいて懐の短剣を抜いた。
もうその反応にショウタは慣れ切ってしまった。フォルでいったい

何人の人の前で剣を抜いたというか。
彼の警戒心は並外れている。いや、異常と言い切ったほうがいい。
こんなどう見たって人畜無害そうな大人しい少女を目の前によくこんなことができるものだ。
ショウタはふと、旧知の情報屋が自分に少しは警戒心を持て、と言っていたのを思い出す。
きっと自分とテレジーを足して二で割れば平均的になるのだろう。
いろいろと。
少女は剣を向けられているが、息を少し詰めただけで、すぐにテレジーにつかつかと歩み寄った。
最初は警戒心むき出しだったテレジーは、後ろにいるショウタに気付いたのか、剣は下ろしたが、明らかに少女相手に顔が怖い。

「・・・酷い体力の消耗ですね。貴方、立っているのもつらいのでは？」
「・・・」
「ここの近くにシュカっていう町があります。そこに私の家がありますから、診て差し上げましょう」
「診てって？」

ショウタが質問すると、少女は振り返って自信に満ちた目で言った。

「この白いケープでわかりません？
私、医者ですよ」

ショウタたちはコアッダ国の王都オリフォンの西部に位置する小さ

な町、シュカに到着した。
大街道からほど近く、また、王都からの道もあるので、町の規模はそれなりに大きい。
しかし、シュカの近くに街道と街道の交わる大きな街があるので、シュカのにぎやかさというものは控え目で、つつましやかなものだった。
その町のはずれに白い壁の小さな家がある。それが少女の家であり、シュカ唯一の診療所だった。
近くに大きな街と王都があるから、大きな病院はないが、その町ではそれでちょうどよいものだった。
診療所のドアには休診の立て札が立っていて、少女はドアを開けると同時に立て札を入れ替える。
カーテンを開けて、窓を少しだけ開けた後、レースのカーテンを閉めた。
治療用のベッドと椅子が一つずつ、入院は基本的に受け入れていないだろうが、一応一つだけちゃんとしたベッドもある。
アルコールのにおいがつんとして、実際の気温よりも肌寒さを感じた。

「クインはここに一人で住んでいるの？」
「いいえ。祖父と私の二人暮しです。彼も医師ですが、今の時間は往診に行っています」

少女の名前はクイン・ナタリラ。
ショウタと同い年の１７歳。そこまでは普通だが、彼女には輝かしい称号がある。
それは、最年少医師免許取得者。
最難関の教育機関である医術学問所を飛び級し、一発で卒業試験をパスし、卒業と同時に行われる国際試験に合格しなければそんな記録など立てられるわけがない。

彼女は普通の人がストレートに行っても２０歳で取得する医師免許を若干１７歳で取るという常人ではなしえないことをなしえた世界でただ一人の少女だったのだ。

「実は”ハシャナール”用の気付剤が残っていたんです。点滴をしますが、大丈夫ですか？」

「ここで嫌とかいわないでよね。俺が代わりに言うよ。よろしく」

「・・・」

細腕の少女は手際よく、一切の迷いもなくぱっぱっとテレジーの腕をまくると、肘より上をひもで縛った。

「血管見えにくいですね。やはり、”ハシャナール”の方は線が細い方が多いですね」

「君は”ハシャナール”を知っているんだ？」

「はい。それに、ここ数日前まで、この診療所に”ハシャナール”の女の子がいたんです」

ぶすり、と彼女はためらいなく注射針を刺す。

素人目にはわからないが、彼女の腕前は相当のものという噂だ。だけれど、なんとなく、怖い。

感情の起伏が少ないテレジーだが、彼もそのためらいない一突きに思わずぎょっとしたようだ。

落ちる液剤の量を調節して、クインは彼を横に寝かせる。

「ファドキア国から亡命してきたみたいです。街道で倒れていました。

それを私が保護したのですが・・・もう・・・。１２歳です。若すぎますよね」

「・・・”ハシャナール”は早死にだからな」

点滴で顔色が良くなったテレジーがぽつり、と呟いた。

クインはその言葉にうなづいて、ショウタたちに説明をする。

「体に負荷のかかるほどの魔力を持ち、常人以上の身体能力で肉体を酷使できる。
昔から”ハシャナール”は道具や兵器として人とはいえない扱いを受けてきた歴史があります。
私が診た少女も、若干１２歳にして戦争の道具にされていましたから・・・
ですが、体の中は結構脆い。肉体が強すぎる力に耐えられないのでしょう。
・・・だから、医者として貴方にいます。あまり無理な魔力の使用と酷な運動を避けてください。長生きしたいのなら」

クインの大きくて、少しだけ目じりの下がった優しい目が、まっすぐに強く、テレジーを見る。
ショウタは先ほどのテレジーの魔術を思い出す。
今まで見てきた魔術とは比べ物にならないほどの、大きくて難しいものだった。
あんなことができるのは王宮魔術師でもそうはないのではないか。
しかし結果として、彼はこうして動くのも困難なほど体力を消耗してしまったのだが。
クインは振り返り、ショウタに向かって言い放つ。

「貴方も、連れならちゃんと言ってあげてください。無理するなと」

「連れって・・・なんていうか、成り行きでそうなってしまったからで・・・
そうだ。どうして俺もテレジーと一緒にいるんだろう。それに、どうしてこんなところに飛ばされたんだ?」

首をひねるがわかるわけがない。テレジーに視線を向けても、彼も

首を横に振った。
発動者であることは明白だが、彼も分からないのなら仕様のない話だ。

「・・・とにかく、暫く貴方は絶対安静です。この点滴は1時間ほどでなくなります。
腕が痛くなったり、気分が悪くなったらこのベルを鳴らしてくださいね。
さぁ、ショウタさん、私たちは出ましょう。テレジーさん、おやすみなさい」

クインはてきぱきとテレジーに布団をかけると、ショウタを部屋の外へ誘導する。
ぱたん、と扉を閉めて、クインはショウタを手招きする。

「お茶でも入れます。話を聞かせてもらえないでしょうか」
「え？俺、彼についてはそんなに詳しくないけど」
「そうなんですか？でもかまいませんから、その魔術が発動したときについて聞きたいのですが」
「う、うん・・・？」
「仕事柄、さまざまな人を診る機会があるんです。”ハシャナール”について、ちょっとでも知りたいと思って」
「わかった。せっかく助けてくれたしね」

なんて勉強熱心なんだ、とショウタは感心する。

二階の居住室に通され、ソファに座る。クインの入れたお茶は甘さがあって疲れた体にしみわたった。
ショウタは自分の職業と、テレジーと出会ったいきさつについて簡単にクインに話した。

時計を見ると、１８時。日も傾いてそろそろ夕時だ。
彼女は行くあてもなくこんな場所にいる二人に部屋を提供すると申し出てくれた。
医者は慈悲深い。

「ほんと、なんてお礼を言っていいか」
「気にしないでください。事情はわかりました。
それにしても・・・彼らはテレジーさんを軍に引き入れるつもりだったのでしょうか？」
「にしても礼儀なしのめちゃくちゃな奴らだったけれどね」
「ショウタさんはこれからどうするのですか？」
クインが尋ねる。
「テレジーさんはこれからもダニア軍から逃げ続けるのでしょう。
ショウタさんは彼と別れて、普通の生活に戻った方がいいと思います。
その、言いづらいのですが・・・このまま”ハシャナール”にかかわるのは、その・・・」

彼女の言いたいことは分かる。
この状況はまさにとばっちりだ。だが、

「だけどなぁ・・・このまま、はいさようならってのも後味悪い」
「優しいんですね、ショウタさん」

ゆっくりと笑うクインの表情は、やはり大人びている。
その表情に含まれている感情は、決してショウタの行動のすべてをよしとするものではないかもしれない。
クインは壁にかかった古い時計を確認すると、席を立つ。

「そろそろ点滴も終わるころだと思いますから、テレジーさんの様

子を見てきますね」
「ありがとう。あの、治療費は・・・」
「そうですね・・・ショウタさんの研究論文が完成するまで、待ってますよ」

にこりと笑みを返され、ショウタは照れくさそうにぼりぼりと頭を掻く。
一階に降りて、治療室の部屋を開けて。
その中の光景を見て、ショウタは大方想像していたが、本当にそれを実行すると思っていなかった自分を悔いた。
目を丸くして絶句しているクインの横で、ショウタは静かにため息をついた。
たった数日しか一緒にいなかったが、なんとなくわかる。
彼が自分に黙って逃げ出すことなど、想像に足る行為だった。

ここがコアッダ国だとわかったテレジーは、二人が部屋を出ていったのを確認すると、起き上がって点滴に手を伸ばした。
ゆっくり、ぽた、ぽた、と落ちる液剤のスピードを速め、わずか４０分で点滴をからっぽにした。
その手つきは慣れたもので、針を抜いてそこらへんにある治療具で簡単に止血をする。
その後、彼は窓から家の外に出た。もう日は傾いていて、辺りは薄暗い。
村人も家に入っているのだろう。人通りは皆無だった。
彼はそんな村を横切り、看板と太陽の位置だけを頼りに足を進める。
向かう先は東。そこには王都がある。

立ち止まると、くらりとした眩暈が彼を襲う。
大きく深呼吸をすると、足にじんとした痺れを感じた。
それでも、立ち止まることなど許されない。彼は東へ向かった。

もぬけのからになってしまった診療所で、ショウタはベッドの上に放り投げられた点滴の針を見た。
真っ白いシーツに染みた血は、とても薄い赤をしている。

「点滴の調節の仕方を知っているなんて・・・」
空っぽになった液剤の袋をゴミ箱に捨てて、クインは窓の外をのぞく。
「どこへ行ったかわかる？」
「こんな田舎です。日が落ちれば外を出歩く人なんてめったにいません。
彼を目撃している人は少ないでしょう」
「くそっ。何してるんだよいったい・・・」
「・・・捜しましょう」
「え？」

クインが白いケープを羽織る。
簡単に荷物をまとめると、ショウタの方を振り返る。
先ほどまでのクインとは、とても思えない。
彼女なら彼が黙って出て行ったのだからこれ幸いにかかわるなと言うのかと思ったからだ。
そんな彼女から、彼を捜そうというのだから、ショウタはいよいよ訳が分からない。
理由を問えば、彼女は簡潔に言った。

「患者に逃げられたら追いかけるのが筋です」
そんなわけない、と言いたかったが、どうやら逃げられるのは初めてじゃないらしい。
きっと理由はさまざまだろうが、彼女の診療から逃げ出した人々がいるらしい。

「でも、いったいどこへ行ったんだろう」
「そこが問題ですよね」
「・・・あいつに聞いてみようかな」

ショウタがそういうと、クインは首をかしげて話の続きを促した。
ポケットから小さな手帳を取り出したショウタは、診療所の入り口に置いてあった固定電話の受話器を取った。
素早くボタンをプッシュして、コール音が数回なった後、電話はつながった。
暫くショウタは相手と会話を交わすと、すぐに受話器を戻す。

「ショウタさん、誰と喋っていたんですか?」
クインが尋ねると、ショウタは手帳を戻し、彼女に苦い笑顔を向ける。
「俺の数多い知り合いの中の数少ない友人の一人と。
彼にテレジーを捜してもらえるか頼んだらちょうど近くにいるからOKだって。
まぁ、たんまり巻き上げられるんだけれど」
「情報屋ですか?」
「うん。腕は認めるんだけれど、その・・・」
「その?

ショウタはうーん、とうなった後、はぁ、とひとつため息をついて呟いた。

「・・・俺より性格が厄介かも」

4話　臆病と無謀と

一晩足を休めずに歩きとおしたテレジーは、朝の日が昇るのと同時に王都オリフォンの城門をくぐった。
まだ早朝だというのに、王都は人が多かった。
それはここ、コアッダ国が観光大国ということもある。
歴史のある国に加え、温暖な気候と綺麗な東海岸が人気なのが、コアッダの特徴だ。
王都の人の間を俯き進むと、一人の人間がテレジーにぶつかった。
彼はひょろひょろだが”ハシャナール”。よろけることなく歩き続ける。
ぶつかられた相手もよろけず、ただテレジーの後ろ姿を見て、暫く立ち止まった。
そして、にっと口角を上げて笑った。

「おはようございます。ショウタさん」
「・・・・・・・・・・・・・おはよう、ございます」

ショウタはなんとも言えない複雑な表情を浮かべたまま、クインにあいさつをした。

ここはシュカから王都オリフォンに続く街道の途中にある小さな小屋。
あの後ショウタたちとその情報屋は合流するという話になった。
とりあえず王都オリフォン、そこに向かうことにしたのだが、近いとはいえ王都はしっかり歩くほど遠い。

半日は歩きつめることになる。それならと、昨日のうちにわずかに進んで、この小屋に泊まったほうがいいと、土地勘のあるクインの提案によりそうすることにした。
ショウタ自身職業上、簡易的な結界を張って野宿をすることなど頻繁にあるが、まさか年頃の少女とともに一夜を過ごすなど思いもしなかった。
クインはおっとりとしていて大人しいが、ところどころ図太い。全然気にしていないという風で、にっこりとほほ笑んでくる。なんとなく、心臓に悪い。

「このままのペースなら、日が落ちる前に王都に到着できるでしょう。
運よく馬車が捕まればもっと早く到着できるんですけれど・・・」

旅立つ準備を整え、クインは朝食のパンをショウタに渡す。
この少女、旅慣れしている、とショウタは感じた。
しかし、彼女は医者。どうして旅をする必要があるのか、ショウタには分からない。
小屋の外に出ると、朝日が昇って間もなく、うっすら肌寒い。
一瞬体を縮ませて、ショウタたちは東へ向かった。

そして、王都オリフォン。
大きくため息をついて、テレジーは路地裏の壁に背をつけると、ずるずるとその場にしゃがみこんだ。
懐から錠剤の入った瓶を取り出し、おもむろに飲み込む。
その中身はもう少ない。

華やかな王都でも少し道を外れれば、影の部分がある。
彼と同じように地べたに座る人間が、細く長い路地に3，4人いる。

一人は朝から酒を飲んでいるのか、顔を真っ赤にして、テレジーに向かって口笛を吹く。
こんなところには似つかわしくない、彼の姿がこの中ではもっとも小奇麗だったからだ。
あまり長くここにはいられない。かといってゆっくりと人前に出られるほどの気もない。

顔を見ただけで、テレジーを”ハシャナール”と判断することはできない。
紅い爪を見て、何人かは珍しいと思うだろう。能力を見て恐れおのくく人はいるだろう。
だけれど、”ハシャナール”を知っている人間は、そう多くない。
知っていなければ、知らない。だが、それが警戒心を怠る理由にはならない。
いつどこで命を狙われるかわからない。
しかし、テレジーが恐れているのは追いはぎでも研究所の人間でも軍人でもない。
自分を追っている、彼の存在だった。
つかまるわけにはいかない。殺されるわけにはいかない。他人を巻き込むわけにはいかない。
あの少年から逃げ出したのは、そういう理由だった。
己の願いをかなえるために。

息が落ち着いてきたとき、ふとテレジーは昨日の出来事を思い出す。

あまりに色々なことがありすぎて、その出来事が昨日であったことに彼は驚く。

思いだしていたのは、己の能力のことではなく、ショウタが言ったこと。
この世にあるという”星の記憶”はすさまじい魔力を持つもので、それを手にしたものはどんな願いも叶うという。
それを自分が手に入れられれば・・・

そのとき、彼はふと顔を上げた。
わずかに入っていた光が遮られている。
顔を上げると、そこにいたのは背の高い男だった。

「ンだよ～・・・お前。そこは俺の島だぁ。どけよ」

うっとする臭いを纏い、ぼろぼろの靴とコートを身にまとった男。
へたれた帽子をかぶっているので顔までは把握できない。
テレジーは顔をゆがめることなく、黙って路地裏から出ようとした。

その時、強く腕を掴まれた。
目をかっと見開き、テレジーはその手を振り払おうとした。しかし、それができなかった。
男の力が強すぎた。
ぎちぎち、と握られる。とうとう顔をゆがめ、うめき声をあげた。

「お前～・・・珍しい光り方する目だなぁ。それに身なりもいいし。金、金持ってんの？」

めんどくさい。
テレジーはぎっとにらむが、男は笑うだけ。
路地裏にいた浮浪者たちもなんだなんだと近寄ってくる。
男はテレジーをつかんだまま、のらりくらりと喋る。

「なぁに、兄ちゃん。怪我したくなければちょっとお金を置いていきゃあ万事おっけーってやつさ。
社会ってのはうまく立ち回んなきゃだめなのよー。これも大人の常識ってやつね」
「ふざけるな。下衆が」

最大の侮蔑をこめて吐き捨てるように言うと、男はそれさえも喜んでしまう。
ただの追いはぎなら今までだって簡単に片づけてきた。だけれど、この男はただの浮浪者じゃない。
深々と被った帽子の下の表情こそ読み取れないが。
万全の体力ではないにしろ、テレジーの力を軽々超えるほどのそれが、何よりの証拠だった。

「お、兄ちゃん。きれーなピアスしてるじゃねぇかー。高そうだなぁ」
「っ！」

別の男がテレジーの左耳にぶら下がっているピアスに気付く。
そのピアスは乳白色で、美しくカットされた錐型をしている。
テレジーをつかんでいた男もそれに気付く。そのとき、男はなぜか不意に手を緩めてしまった。
そのチャンスを見逃さず、テレジーは男の手を振りほどくと、全力で走り去った。
力の入らない足を叱咤しつつ、向かう先は駅。
電車に飛び乗って逃げてしまうつもりだった。
しかし、それは失敗する。

「待てって」

先ほどまでテレジーの腕をつかんでいた男だった。
振り切ったはずのその男が彼の目の前に立っていたのだから、テレジーは息をつめた。
男はテレジーをつかむと、ぶんっと彼を路地裏に投げ込んだ。
どさりと体を地面に打ち付けた。起き上がろうとしたその時、男が馬乗りになってテレジーの体の自由を奪った。
さらに手早く、テレジーの両腕を男は自身の両足で押さえつけた。
その一連の動作に無駄は一切なかった。
テレジーは混乱していた。この男は一体何者だと、頭ががんがんとそれだけを訴えている。
研究所の人間か。あいつの刺客か。

「・・・なるほど。訳ありねぇ。確かに珍しいもん身につけてるじゃん」
先ほどまでのだらけた口調はどこへ行ったのか。男はひどくまじめに呟いた。
右手をテレジーの耳に近付け、そのきらりと光を受けたピアスをつかむ。
「こりゃあまいったな。お前、もしかし・・・んぎゃあ!」

途端、男の背中に衝撃が走る。
唯一自由だったテレジーの足が彼の背中に蹴りを入れたのだ。
彼は足を前に投げ出していたので倒れることはなかったが、あまりの痛さに体を傾ける。
その隙にテレジーは男の下から這い出た。
しかし逃げ出すテレジーの足を尚も男は捕まえて食い下がった。
地面に這いつくばる二人の姿はかなり滑稽だが、その光景を見る者はいない。
後ろを振り返り、テレジーは珍しく怒鳴り声をあげた。

「しつこい！」
「しつこくて結構！」
その根性が逆に嫌だ。テレジーは声の大きさをいつものように戻して、男に問うた。
「お前・・・何者だ？ただの浮浪者ではあるまい」
「ふふ。俺か。やっと聞いてくれたな。俺はだな・・・」

男が帽子を脱ぐ。
その下にあった顔は、決して悪くない。
年はテレジーよりもそれなりに上。高い鼻と切れ長の細い目をしている。
帽子の上でまとめられていた髪が垂れ下がる。長さは肩すれすれで、色は薄暗い路地裏でも目を張るようなピンク色。
やはり、浮浪者じゃない。浮浪者のふりをしていたのだ。
そんな演技をしたところで、彼がお芝居にでる役者であるはずがない。
かかわったら絶対よくないことに巻き込まれる、という考えが彼の頭を占めた。
テレジーは男が自己紹介をする前に、さっと右手を突き出すと、ぱちんと指を鳴らした。
瞬間、男の目の前に氷の柱が三本突き刺さる。
「うわっあぶねっ！」
ひるんだ隙にテレジーが再度逃げようと立ち上がるが、次はそううまくいかなかった。
足がもつれ、転んでしまったのだ。
何度も何度も立ち上がろうとするが、体に力が入らない。
焦るほど、無様にもがいているのが自分でもわかるのに。
男は今度は追いかけない。
その姿を見て、その必要がないとわかったからだ。

はぁー、とため息をつきながら頭を押さえ、男は呆れ半分で言った。

「まったく、落ち着いてくれよ。
俺はお前の善良なる味方である奴からの依頼でお前さんを捜していたんだから」

「・・・」

「頼まれてるんだよ。紅い瞳と茶髪の若くて綺麗な顔をした男を捜してるって。
シュカから逃げ出してそう遠くに行ってはいないから、コアッダにいるなら捜してほしいってさ。
あぁもちろん、あんたが”ハシャナール”ってのも知ってる。
逃げ出す人間だったらまぁまず王都で探そうと思ってみたら、まさかのビンゴだ。いやぁ俺って女神の加護があるねぇ運がいい」

男は話しながら持っていたごみ袋を広げる。
ぼろぼろのごみ袋の中から出てきたのは、似つかわしくない、綺麗な服と鞄と帽子。
目の前で男は汚く、ぼろぼろである服を脱ぎ捨てると、本来の自分の姿に戻っていく。
黒いジャケットと細身のパンツ、踝ほどあるブーツを履いて、黒いベルベット生地の中折れ帽を被れば完成だ。
先ほどまでのぼろ着をごみ袋に詰め込むと、そのままごみ箱にぐいぐいと押しこんで捨ててしまった。
そして再度テレジーの方を振り返り、男は地面にはいつくばっている彼を見てため息をついた。

「まったく、ショウタもどうしてこんな暴れ馬と友達になったのかねぇ」

「・・・友達じゃ、ない」

「そういうなや。さて、”ハシャナール”の小僧。

お前さんをショウタに引き渡す前に、いくつか質問をさせてもらう。

そうすればショウタに会うまでの身の保障はする。

俺はただ働きってのが嫌でね。かといって友人である依頼主からたんまり巻き上げるのも実に後味が悪い。ま、常識の範囲内には払ってもらうんだが。

そこでだ。もともとの根本原因であるあんたからちょっとばかしもらえるものはもらおうってね。

なに、金が欲しいわけじゃない。俺は情報屋。情報がほしいのさ」

「・・・俺はあいつの元には戻ら」

「それは俺がお前をショウタのもとに引き渡した後の話だ」

尚も退路を捜すテレジーに、男は苦笑する。

やはり警戒心の強さは普通じゃないな、と。

テレジーの前にしゃがむと、男は指をぴっと立てて言った。

先ほどのぼそぼそと聞き取りにくい喋り方はよくできた演技だった。

今の男の声はハッキリ澄んでいた。

「ひとつ。どうしてそこまで衰弱している?

薬はどうした。”ハシャナール”なら薬をたんまり持って発作に備えているだろう。

ふたつ。お前のそのピアス。ダニア地方でしか手に入らないホワイトオーカンスっていう鉱石だろう。

それを持っているのは貴族以上の上流階級に限定される。それに、その彫り方はちょっと珍しい。

どこの出身だ?名字は何だ?親は誰だ?

みっつ。お前はどこへ向かおうとした?

逃げるにしてはどうも行き先があいまいなくせに目的だけが先走りしている感じがある。何がしたかった?」

どの質問にも答えられるわけがなかった。

テレジーには自分のことを告げる術もなければ、そんなこともできない。

そもそもショウタが依頼したというこの男の素性を知るわけがないのだから、テレジーには自分のことを話すということがそもそも理解できないことだ。

余計なことを、と思うが、恨みたい相手はそこにはいない。

テレジーはこの男がこの場を借りて自分と初めて会った時からのわずかな時間で感じ取った疑問を質問しているだけにすぎないだろう、と思った。

要はショウタと同じで、興味本意が招いているのだろう、と。

半ば強引。自分中心。

そんな彼に対し、ただ沈黙するしかない。強烈な拒否。

しかし相手は情報屋。情報を吐かせる為に身につけている技術がある。無理やり吐かせる術を。

そんな手腕で吐かされるなら、死を選ぶのがましだと聞く。

もちろん非合法だが、この男ならなんだか破りそうな気がする。

紅い目が戸惑うように流れる。

握りしめた拳をさらに強く握ると、手袋の布が石畳の上で擦れる音がした。

そして顔を下に向けたまま、小さな声で、呟くように言った。

「・・・何も言えない」

「お？」

ぼそりと呟いたテレジーに、男はかがんで彼の顔を見る。

ゆっくりと上げた顔。迷いも葛藤もない、澄んだ紅が男を見ている。

彼はふらふらながらも立ち上がり、しっかりと二の足で体を支えると、男を見下ろしてはっきりと言い放った。

「俺のことを喋ることはできない。それに、俺はあいつの元には戻らない。
逃げさせてもらう」

「おやまぁ。頑固者だねぇ。
だけど、そんなことで納得はできないってゆう」

突如、テレジーは腹部に衝撃を感じる。
そのままあっという間に意識が遠のき、力が抜けた。
いとも簡単に、男がテレジーの腹部に一発入れたのだ。
気を失った体を男は抱えて歩き出した。

「悪く思うなや。俺もあいつらも、もしかしたらお前とは無関係じゃないかもしれねぇ」

その言葉をテレジーがきくことはなかった。

5話　望みのままに

オリフォンのはずれの安宿にショウタたちはいた。
ベッドを囲むようにしてショウタとクイン、そして情報屋の男がいた。
そのベッドの上に、気を失ったままのテレジーが眠っていた。
数時間ぶりにあったその顔は真っ白く、薄く開いた口から浅い息が漏れている。
ショウタはその顔を見て、安堵よりも沈む気持ちがした。

「かわいいお嬢ちゃん、改めてはじめまして。
俺の名前はラルゴ・ダイアロット。アイマナにある情報支部局のトップだ」
「はじめまして。私はクイン・ナタリラと申します。一応医者です」

「へぇ。若いのにすごいな。ってまてよ。
クイン・ナタリラと言えば、今年初めて医師免許を最年少で取得したっていう、あの天才児のことか？」
「もう、ラルゴ！話を逸らさないで。
クインのことも確かにすごいけれど、今は話を元に戻さなきゃ」

ショウタの叱咤にラルゴが肩をすぼめる。
やれやれ、とため息をつくと、ショウタはラルゴに尋ねる。

「ねぇ。本当に”軽く”殴っただけなの？」
「疑うんじゃない」
「にしては、大分眠りが深いです。というか、意識が落ちている？
ラルゴさん、少々打ちどころがよすぎたようです。
ですが、今までに相当な疲れがたまっていたのでしょう。そのまま

眠ってしまったみたいです。
よかったです。どうあれ体が休まっているのならこのまま寝かせて差し上げましょう」

クインが見解を述べると、ショウタはうんうん、とうなづく。
そんなことはどうでもいいらしく、ラルゴはショウタに尋ねた。

「しかし、軍がたった一人の人間を全力で追いかけるなんて聞いたことないぜ。
いくら”ハシャナール”とはいえ。しかも殺そうとするなんて論外だ。
研究所、軍関係なら絶対生け捕りにする。殺そうとするのはコレクターに雇われた追いはぎぐらいだ」
「しかも、2年近く逃げているみたいだ。
2年前に、いったい何があったんだろう」

2年前と言えば、ショウタの記憶が始まったのがその辺りだった。
もちろん関係ないとはいえ、きっかけが同時期だとなんだか他人事には思えない。
彼に抱いている感情は、同情。でも、それ以上に何かもっと大切なつながりを感じている。
ラルゴはショウタにもうひとつ尋ねた。

「なぁショウタ。こいつ、本当にただ偶然知り合ったのか？」
「え？そうだよ。
この前さ、俺フェルデン行ってたじゃん。それから帰ってきて朝起きたら庭にいた」
「庭・・・」

クインがひきつった笑顔を向ける。

でも間違いではない。偶然はまるで青天の霹靂。それでいてあからさまなきっかけ。
こんな普通じゃないことが起こるということは、これからも自分には普通じゃないことが起こるという前触れに違いない。
それを裏付けるように、ラルゴがテレジーをちらりと見た後、言った。
グレーの細い目を一層真面目に細めながら。

「ジャスリーンの旧市街地を調べているとき、妙な碑文を発見した。今までこんなことは多々あったが、それはソーラテネルにまつわるものばっかりだっただろ？
でも今回のは違った。
”紅き瞳を纏いし異端の者。星の記憶を求める者の前に降り立つとき、この世の望みをすべて手に入れる交わりとなる”」
「・・・」
「それって・・・」
「”ハシャナール”だろ。俺はそれを知って、とりあえずコアッダ経由でお前んところに行こうとしたら、昨日の電話だ。
紅い目の男を探しているなんて、もしかしたら”ハシャナール”かと思えばビンゴだ。
でもま、こいつ、一般人って感じじゃないが・・・」

そのとき、テレジーが目を覚ました。
数回瞬きをした後、彼を見下ろす顔の中にラルゴがいて、テレジーはとび起きようとした。
が、三人が全力で押さえつけたのでそれは叶わなかった。

「っ・・・!?」

「よぉクソガキ。お目覚めか？」
「ラルゴ。相変わらず意地悪いよ。おはようテレジー。そんでもって」
「よくも逃げてくださいましたね。患者さん」
「クイン・・・」

テレジーが抗うことをあきらめたのと同時に押さえつける力を弱める。
辺りをよく見渡したテレジーは、大きく息を吐くと、ショウタのほうに目を向けて、顎を一回だけ上げる。
言葉はないが、なんとなくわかる。
説明しろ、ということだ。

「テレジー、君を捜してもらおうと思って情報屋に頼んだんだ。彼の名前はラルゴ・ダイアロット。頭もろもろ全部おかしい奴だけど」
「ちょっと」
「俺は君を見つけたかった。なんていうか、君との縁（えにし）は普通じゃないと思う。
勘なんだけど。なんでだろう」
「・・・そんなこと、知るか。お前の都合など俺には一切関係ない」

「そうは言うなよ。クソガキ。
確かに俺はこいつに頼まれたことをやっただけだ。
だがな、どうやらそれだけじゃないらしい。お前、俺らにとって必要な奴だからな」

ラルゴの言葉に、全員が注目する。
彼は言葉を続けた。

「俺は情報屋でありながら、ショウタの”星の記憶”についても調べていてな。
まぁ言うならば協力者で仲間だ。今まで別々で情報収集にあたっていた。そんでもってあるものを見つけた。
”紅き瞳を纏いし異端の者。星の記憶を求める者の前に降り立つとき、この世の望みをすべて手に入れる交わりとなる”
ジャスリーンの遺跡に書かれていた暗号だ。
ぞっとしない話だろう？まるで誰かのようだ。
とはいっても、”ハシャナール”なんてお前だけじゃないし、”星の記憶”を求めているのはショウタだけじゃないだろう。
だがな、俺はそんな些細なことでも可能性があればやってみるのが必要だと思う。
よって、お前がこいつから逃げ出した理由はもはや関係ない。
俺がお前を買う。俺たちに全面協力して”星の記憶”の調査に付き合え」

その言葉にショウタもクインもぎょっとした。
ラルゴは仕事、つまり情報集めにはかなり貪欲だということをショウタは知っていた。
類まれなる運動神経と現場と状況を選ばないその果敢さを持って、若くして支部局長の椅子を手に入れたのだ。まぁ、大人しく座ってはいないが。
仕事熱心に加え、私利が絡めば決してあきらめることを知らない。
とくに彼は、どうしても”星の記憶”を手に入れたい理由がある。
その剛腕さはショウタにとって頼もしいことだが、彼の標的になったらたまったものではないだろう。
テレジーはそんなラルゴの要求に、全力で嫌悪感を示した。
不快そうに眉を寄せ、唸り声にも近い声を出した。

「・・・最低だな。情報屋。

金で情報のすべてを買うつもりか」
「金がなけりゃ必要なものも手に入らないさ。
俺は”星の記憶”を手に入れる。すべての望みがかなうといわれる
それを手に入れる必要が俺にはある」

部屋の中が重くなる。
じわん、と空気が足元を這う。
沈黙を壊したのは、クインだった。

「それによって本当に望みが・・・叶うのでしょうか」
ショウタは暫く無言で考えて、もう一度はっきりと”星の記憶”に
ついて説明を始める。
「”星の記憶”は、強大な魔力を秘めた何か、であり、それを手に
したものはその魔力によってすべての望みがかなえられるという。
そこまでが神話の話なんだけれど。
俺が突き止めたのは、その”星の記憶”の存在。それは動く魔力。
原理解明はまだ先だけれど、ただのおとぎ話ではないはず。
・・・テレジー、俺と一緒に来てほしい。ラルゴに買われるとか、
そういうんじゃなくて。俺と一緒に。
これから先に見える真実を突き止めるための力を貸してほしい」

テレジーは先ほどまでのとげとげしい雰囲気を少しだけおさめて、
ショウタのほうをにらんだ。
ショウタは静かに目を伏せて、ゆっくり開く。そして、紅い目をし
た彼を見た。
今その紅に映る自分はどんな顔をしているのか、部屋が暗くてわか
らない。

「考古学者としてそれを明らかにしたい。そして、それを手に入れ
て俺は望むものを、記憶を取り戻したい。

ラルゴもそれを望むゆえ俺と近づいて、仲間になった。テレジーも、望むものがあるんでしょう。
君の纏うものは、重く暗く冷たい。誰にも何も言えない何か。
何かわけありだって、わかっている。
そんな君には、必要なものじゃないかな」
「・・・」
「望みを持つ俺とラルゴ、紅い瞳をもった君。
俺達でそれを手に入れることができるかどうかは分からないけれど、一緒に捜さない？」

テレジーの表情は変わらない。
うろたえもしないし、もはや不快そうに眉を寄せてもいない。
不安そうに見守るクイン、腕を組んで答えを待つラルゴ、まっすぐな瞳で見つめるショウタに背を向けて、
テレジーは暫く沈黙した。
そんな彼を気遣って、ショウタは部屋を出ることを提案する。

「・・・30分後にまたここに来る。
俺に付き合えないなら、また出て行ってほしい。今度はもう追いかけない。
もし俺と一緒に”星の記憶”を捜してくれるのなら、ここにいてほしい」

ぱたん、と扉を閉める。

ため息をつかせる間もなく、ラルゴはショウタとクインの腕をぐいぐいと引っ張って階下に降りる。
一階の談話室の椅子に座ると、ばしんとショウタの前でテーブルをたたいた。
それは決してショウタに激怒しているものではないのだが。

「お前、どういうことだよー。
どうしてそこで引いちゃうわけ?俺すっごいビッグニュース持ってきたのによぉ!
あいつのあんな性格からすればすぐにお前から逃げ出すぜ?そうしたらどうするんだよ」
「・・・きっと、付いてきてくれるよ」

ショウタはうん、とうなづいて、言った。
その確信めいた言葉に、ラルゴとクインが不可思議そうな顔をする。
そんな二人を気にせず、ショウタは落ち着いていた。
少しだけ天井を仰ぎ、そしてゆっくりと言った。

「碑文が仮にも俺と彼が出会うことを記しているなら、そうなるはずなんだ」
「そんなまじないめいたことを信じるのかよ」
「そもそも”星の記憶”自体が不思議なものじゃないか。
大丈夫。放っておいてもことはあるべき方向に進むと思う。
・・・ただ、やっぱり気が引けるよね。半ば脅しているようだ」
「そうか?俺はあるべきことであるなら気の毒に思うつもりはさらさらないな」
「ほんと、俺たちって意見合わないよね」
「今更だろ?」

そう言って、ショウタとラルゴは苦笑する。
ひとしきり問答が終わった後、今まで黙っていたクインが口を開いた。

「あの・・・ショウタさん」
俯いたのち、顔をまっすぐにあげて、ショウタのほうを見た。

普段よりも少しだけ、強い意志が入っているそれが、ショウタをじっと見ている。そして、
「私もついていっていいですか？」
「いっ！？」

突然の申し出に、ショウタは奇声を上げる。
まさかと思っていたのだ。
そんなショウタの代わりに、ラルゴが彼女に質問をした。

「お嬢ちゃんも何か欲しいものがあるの？」
「望みのない人が、いるでしょうか」
「そりゃそうだ。でもよ、最年少で医師免許を取得し、金も実力も将来的に約束されてんじゃん」
「・・・それでも、欲しいと願うのは欲深いでしょうか」
「・・・質問してるのは俺なんだけどね。
どうする？ショウタ」

ショウタはうん、とうなづいて、クインに向き合う。
優しい彼女のウィスタリア色の瞳は、曇りがない。
どこか、テレジーに似た瞳のまっすぐさに、なんとなくショウタは悪い気がしない。

「わかった。一緒に行こう？」
「ショウタ・・・」
「クインの願いはどこか身に迫るものを感じるんだ」
「ありがとうございます」

にっこりと彼女は笑う。
ふぅー、とラルゴは長い息を吐くと、彼も意を決して大きくうなづいた。

「よし。じゃあ俺もこれからは一緒に行こうかな」
「え？」
「だってよ。あいつが付いてくるんだったらこれから展開がありそうじゃねぇか。
だったら今後別行動をするのは意味がないんじゃね？」
「ふふ、なんだか賑やかな旅になりそうですね」
「もー・・・ラルゴはやかましいし頭おかしいから疲れるんだよね」

「それをお前が言う？」

しばらく休憩しながらお茶を飲んで、時計を見て、ショウタは一人で二階に上がった。
きっと彼はそこにいる。
扉を開けたら、満面の笑みで部屋に入って、彼の手を引いて階段を下りるのだ。
もう一度自己紹介をしあって、おいしいご飯を食べに行こう、と考えながら、彼は階段を一歩一歩のぼっていった。

一方。

黒髪の青年は真っ白く広い部屋の中央で、しゃがみこんで気を集中させていた。
その部屋の窓は一つも開いていないのに、風が巻き起こる。
白いマントをはためかせ、それが落ち着くと、彼の背後にいた人物が声をかけた。

クリーム色のつやのある金髪は腰ほどまで長く、色白の肌に深海を煮詰めたような深い碧眼が印象的な美女だった。

「見つかりましたの？」

耳に心地いい声が彼の耳に入る。
彼は立ち上がると、人のいい笑顔を彼女に向けた。
どこか少年のようなあどけなさを残したその笑顔は、底抜けるほど悪意がないところがたちが悪い。
大きく両腕を広げると、ぶんぶんと振り回して彼女に近づいた。

「もちろんですよ。セラー。
今はコアッダ国にいるようですが、すぐにこの国からも出るでしょう。
彼一人だったらまだ予測もできますが、厄介なことに同行者もいるようです。気配が非常に探りにくい。
あの中に特殊な人がいるようです。
いったいどこへ逃げるというのでしょうね」
「・・・”星の記憶”を求めているのかもしれませんわ」
「”星の記憶”？」

青年は女性、セラーに尋ねる。
詳しく話を聞かせてほしいといわんばかりに目で訴える。
女性は静かに、淡々と感情なく言葉を紡いだ。

「知っています？この世界、”ソーラテネル”にはすべての望みがかなうとされる”星の記憶”というものが眠っているのですわ」
「それは・・・神話の話じゃなかったのでは？」
「実在するとしたら？」

黒髪の青年は顎に手を当てて、うーん、とひとしきり考えると、へらっと笑って言った。

「欲しいですねぇ」
「素直で結構ですわ」

セラーは黒髪の青年に大きな鎌を手渡した。
死の使いを彷彿させるようなそれは、丁寧に手入れができている。

「彼が置いていったものですわ。いずれにせよ必要になるでしょうから、次出会ったときに届けて差し上げなさい」
「彼、大切なものを置いていっていたんですね。どうして・・・」
「まぁ今はそんなことどうだっていいですわ。それでは、お気をつけて」
「はい」

青年は大きな鎌を数回回転させると、それを手のひらの中に消してしまった。
ばさっとマントをはためかせ、彼は白い部屋を出て行った。
セラーは部屋に残り、先ほどまで青年が座っていた場所に腰を下ろす。
そして、両の手を合わせ、祈りを捧げる。
先ほどまでの表情とは打って変わって、どことなく心痛を抱いているような表情で。

6話　4人で旅立ち

「ところで、ラルゴさんはおいくつなんですか？」
「俺？２８歳の男盛りさ」
「・・・おっさんか」
「おいおい若造。男ってのは３０過ぎてから本来の魅力が現れるものさ」
「じゃあお前はただのおっさんじゃないか」
「・・・こいつ」
「あ、すみませーん、本日のおすすめパスタ追加で」
「ショウタさん、よく食べますね・・・」

ひょんなことから一緒につるむことになったショウタ、テレジー、クイン、ラルゴは未だにコアッダ国の王都オリフォンにいた。
一夜明けて、向かうべき先を話し合うついでに食事を取ることにした。
オリフォンで安くておいしいと評判のレストランに入ると、４人はあっという間にテーブルを皿で埋め尽くした。
平均的に見て身長の低いショウタだが、どうやらかなりの大食漢らしい。
ラルゴもよく食べる上に昼間から酒をあおっているし、テレジーは好みの差はあるものの着実に食べ物を口に運んでいる。
比較的小食なクインはとっくに手を休めていて、お茶を飲むぐらいしかしていない。
クインはぼんやりと会話に参加しながら、テレジーに話しかけた。

「そういえば、どうしてテレジーさんは私の診療所から逃げ出したんですか？」
テレジーはスプーンを口に運ぶ寸でのところで手を止め、目線だけ

を彼女に向ける。
仏頂面だが、テレジーは分かりやすい。三人に抱いている感情が手に取るように分かる。
ショウタはなんだかんだで嫌いじゃないようだ。それに比べラルゴは毛嫌いしている。性格的なものが嫌なのだろう。
そしてクイン。彼女は医者であり礼儀正しくかつ図太い少女だから、頭が上がらないのだろう。
おそらくそのことに気づいているのは現時点でショウタだけで、二人には相変わらずの鉄仮面に見えているのだが。
テレジーは彼女の質問に答えようとして、やめたのか、食べる手を再開した。
無視されたと感じたクインがショックを受けたような顔をすると、ラルゴが耳打ちをした。

「お嬢ちゃん、まぁそれはおいおい喋ってやるよ」
「ラルゴさんわかるんですか？」
「俺はどんな人間の繊細な気持ちだってわかるのよー」
「本人はガサツなのに大した特技だ」
「お前・・・」
「すみませーん、このびっくりアイスっての、６つくださーい」

クインとラルゴががっくりと肩を落とす。
話に全く参加していないショウタはマイペースに延々と食事を続けている。
そろそろお腹いっぱいになってきた一同は一斉にショウタのほうを見る。が、彼は黙って食べ続けている。
少々心配になったのか、ショウタを目の前にしてクインはラルゴに話しかけた。

「あの、そろそろ大切な話をするのでは・・・」

クインが切り出すが、ラルゴは最初っから諦めていて、ひらひらと手を振った。
「あぁ無理無理。こいつどんなことでも集中しちまうと周りを遮断する癖があるから。
あとストレスたまるとこいつドカ食いするんだよ。聞くところによると今まで落ち着く暇もなかったらしいしな。気がするまで放っておいたほうがいいぜ。
よく食うくせにちびだけれどなぁ」

やれやれ、とため息をつくラルゴ。
そんな声さえも入らないのか、テーブルの上の食べ物はどんどんショウタの胃袋に消えていく。
結局ショウタ抜きで話をすることになる。
ラルゴは空の皿を積み上げ、そこに懐から取り出した地図を広げた。

「今まで当たりだったところだ。
最初はダニア、ディタクミナ、コアッダの三国で碑文を発見した。
とはいっても最初はディタクミナでショウタが見つけて、その後数珠つなぎみたいに見つけていった、が正しいな。
そのあとドドニア大陸に移ってアイマナに来た時、俺がこいつに会った。
あとは分担して調べたがさっぱり。俺が最近まで行っていたジャスリーンが最新だな。
しかもその碑文は他とは違って別の碑文の行き先を示唆するものなんかじゃない。特別なものだった」

地図を見ながら、ラルゴは大きくため息をついた。
ソーラテネルの大陸は4つ。小さな順からスーロン大陸、ディタクミナやコアッダのあるドギ大陸、オレーヌ大陸、アイマナやジャス

リーンがあるドドニア大陸。
紙の端はぼろぼろになっていて、多くの書き込みがあった。そして、多くのバツ印と丸印も。
それが意味することはクインとテレジーにはぱっと見わからないが、ひとつだけわかることがある。
二人がかなりの時間を使って調べ歩いていること。
それ以上にラルゴの地図には彼が独自に調べたことが事細かに記載されていた。
ラルゴの望みを知らない二人は、ここまでしてラルゴの手に入れたいものが何か、興味がわいた。
思い切ってクインは聞いてみた。が、

「ラルゴさん。ラルゴさんの願いって何ですか？」
「ん？」
「うっは～ごちそうさま！」

盛大に話の腰を折られて、クインはショウタのほうを向いてあからさまに不機嫌な顔をした。
ぷいっと頬を膨らませてそっぽを向いたが、ショウタには理由が分からない。

「？？？」
「まぁまぁ。さて、ショウタも話に入れ。
今後どこへ行くか、お前さんなら宛てがあるんじゃないか？」
「・・・うーん・・・宛かぁ。
本当はタスニアキードに行くつもりだったんだけれど、ラルゴが見つけたっていうジャスリーンの碑文が気になる」

先ほどまでとは打って変わって、ショウタは真面目に会話に参加している。

未だ頬を膨らませたままのクインとそれに気付かないショウタ、そしてうまく話をはぐらかすことができたラルゴをみて、テレジーはふぅ、と一つだけため息をついた。
こんなまとまりのない４人でうまくいくのか。
不安に思っているのはきっとクインだけなのだが。テレジーはそういうことを考えることはない。
ショウタはふぅん、とうなった後、地図に視線を向けたまま、喋った。

「正直俺がディタクミナにいたからそこからスタートした研究なんだ。
そしたら次はコアッダ、次はダニアと来て、アイマナに飛んだんだ」

「・・・ショウタさん、碑文はどんなことが書いてあったんですか？」

クインが尋ねると、ショウタは左足にくくりつけてあるポーチの中からぼろぼろのメモ帳を取り出した。
そこに書きなぐられているのは暗号。それをしっかりと解読したものが暗号の下にさらさらとメモされていた。

「ディタクミナにあった碑文はこの国の建国の話。びっくりするかもしれないけれど、ディタクミナは星ができたのとほとんど同時期に出来ている」
「そんなことあるのか？」
「星ができるのと同時に文明ができるなんて、考えられません」
「だから、人間が作ったんじゃないってことさ」

信じられないといった表情をするクインとテレジーにショウタは話を続ける。

「ディタクミナは5番目に出来た国らしい。その前にいったい何の国があったのか、調べたらコアッダがその碑文に名前を出した。そんな感じでコアッダに行けばダニアの名前と今はない、よくわかんない国の名前があったんだ。

ダニアの碑文はものすごく難解で、実は半分しか解読できなかった。半分はまったくわからないのに、残りの半分はディタクミナやコアッダとほとんど同じように解読できたんだ。

それで解読できた部分に記載されていたアイマナに行ったんだ。でも、そこでほかの国の名前が出てこなかったんだ。

とにかくね、この碑文ってのがこの星で最も古い物質であることは、物質の状態とかから調べても明らかなことなんだ。

それを捜すことにしたんだけど、これがまた見つからない見つからない。

人々の伝手とか文献で結構古い国を当たって見たんだけれどね」

ぺらぺら、とメモ帳をめくり、ダニアの碑文のページで止まる。

ぎっしりと書かれた暗号の解読跡を見れば、ショウタがどれほどの時間を費やしたのかがわかる。

それでも解けなかった半分の碑文。それをショウタは睨むようにして見た。

「やっぱりこれを解かなきゃだめなのかな?」

「・・・ジャスリーンでいいんじゃないか?」

不意に、視線がテレジーに集まる。

ティーカップに口をつけて、彼は初めて今後の方針についての意見を口にした。

ショウタは最初はびっくりしたが、どうして彼がそう言ったのかわかると、メモ帳を仕舞った。

「そうだねぇ。今までの碑文とは明らかに違うし。もしかしたら何か出てくるかもしれないよね」
ショウタの意見にクインもうなづいた。
「私もその碑文、気になります。ほかのももちろん知りたいですが、本当に私たちのことを指し示しているのか。それははっきりさせたいですよね」
「じゃあ決まり！よしよーし！それじゃこのまま海行って船乗ってドドニア大陸に行っちゃおう！思い立ったら即行動！ハイハイハイ！」

妙にせかすようなショウタの行動。
４人は急いで立ち上がって会計を済ませると、駅まで歩きだす。
その道中、ラルゴがショウタのわき腹を思いっきりつついた。
ぎゃあと叫び声をあげる寸でのところでラルゴがショウタの首に横から腕をがっとまわして耳打ちした。

「お前さぁ、あのクソガキにずいぶん甘いじゃん」
「え？なんのことーかなー？」
「とぼけんじゃねぇよ。あいつ、ダニアから来たんだろ？」

前を歩くテレジーとクインには聞こえていない。
二人は何か会話をしながら歩いていて、気付いている風ではない。

ショウタはゆっくりと目だけをラルゴに向ける。
その目は、何の感情もない。足を止めず、ショウタは無言で理由を問うた。
ラルゴはその目をよく知っている。
髪の色と同じ、黒に限りなく近い茶色のそれは、ラルゴがショウタに初めて会ったときに向けられた目だ。

ラルゴは一回だけ前を向くと、彼もまた同じく目だけをショウタに向けて口を開いた。

「あいつの耳についてるピアスについて教えておいてやるよ。あれはホワイトオーカンスをまんま削った高級品だ。片方だけとはいえ、あれを身につけているのはダニアの上流階級だけだ。ただな、あれだけの大きさのものを削り取ってるのは俺も初めて見る。あいつはダニアでそこそこいいところに住んでいたやつってことさ」

「・・・さすが。目利き得意だね」

「お前、あいつがダニアから来たって知っていただろう？」

「確信持って言えることは、彼がダニア軍から追われてここにいるってことだけさ」

思わず歩みが乱れて、ラルゴはショウタの足を踏みつけてしまった。さすがにそれにはショウタも悲鳴をあげてしまい、通行人たちの視線を十二分に浴びてしまう。

振り返ったテレジーとクインも足を止める。クインが声をかけるが、ショウタはラルゴが足踏んでさぁ、とだけ伝えると、再び足を動かす。

なんだったんだ、と言いたげな前を歩く二人だが、彼らもまた歩きだし、それと同時に会話が再開した。

いったいあの二人、会話が成立するものなのか、と思いながら、ショウタは横目でラルゴをにらんだ。

「めちゃいたい」

「悪い。なに、あいつ自分の国の軍から追われてんの？」

「あぁごめん。訳ありってだけしか伝えてなかったね」
「おいー、性格悪いぜ。
そうか。あいつも大変なんだなぁ。だけどよ、よく考えろって。
”ハシャナール”は突然変異で親を選ばず生まれてくる。だけど、
”ハシャナール”が生まれてきたときの反応ってのはいくつかに分類できる。
ひとつは訳が分からず病院に連れて行ってそのまま研究所行き。
ひとつは自力で育てようとするが体が弱くて以下先ほどと同じ。
ひとつは分かっていて軍や研究所に高額で売り飛ばす薄情もん。まぁ全部行きつく先は大体似通っているよな。
つまりだ。身分を分けるなら”オルフェナール”と同じっくらい”ハシャナール”は低い」
「わかってるよ。まったく、ほんと歯に衣着せぬ物言いだね」
「お前、どうして考古学以外のことだと頭が働かないんだよ。
あいつがあんなもん身につけて、あれだけ身なりが小奇麗ってことを考えろ。な、おかしいだろ。
ダニアの金持って言えば古くから王族と関係のある貴族ぐらいだろ。
貴族だったらすぐに軍に入れちまうじゃねぇか。だがあいつはそういった経緯はない。
それについ最近までは普通に生活していたのに、いきなりっていう状況の変わりっぷりにも疑問を抱くな」
「はいはい。どうだっていいよ。
とにかくさ、あんまり変に勘ぐらないでよ。せっかく協力してくれてるんだからさ」

そういって、ショウタはラルゴの腕を振り払うと、走り出して前を歩く二人に追い付く。
何を話していたのかを聞くと、医療の話らしく、クインが話をしてそれにテレジーがうなづくといった具合だったらしい。
前を歩く三人を見て、ラルゴは苛立たしく息をついて帽子を脱いだ。

わかってないな、と呟く。
それは情報屋の勘だった。ラルゴにはどうしてもテレジーの謎がただの個人の事情ですまされないような胸騒ぎを感じていたのだ。
もっともそれが確信めいたものになるには、今の自分では無理だった。
ショウタはそういうのに俄然興味ないし、自分のことさえも包み隠すクインもきっと他人に踏み入ろうなどしない。
ラルゴもその点ではクインと同じだが、それとこれとは話が別。

「しばらく・・・探ってみるか」

電車に乗って一時間も経たないうちに、港町に到着した。
漁船から一般ボートなど様々な船が停泊している波止場に、旅客船がいくつもある。その中にひときわ大きくて綺麗な船がある。
早く船に乗るためにも、一同は足早に切符売り場に向かう。

「こんにちは」
「ちっす。大人二枚子供二枚。どこでもいいからドドニア大陸行きでお願いね」
「・・・子供・・・？」
「・・・失礼な」

大分おおざっぱな注文だったが、切符売り場の女性は嫌な顔一つせず、にっこりと笑ってその要求に返事をする。

「それでしたらお客様、現在停泊中の長距離旅客船”シェリーン”

はいかがでしょう」
「・・・長距離旅客船」
「・・・しぇりーん？」
「あれか？」
「なんだそれは」
「はい。グライナー国で最近完成した旅客船です。
我が国とグライナー国との国交１５００年記念を祝しまして、グライナー国からこちらへ来たばかりでございます。
それが今グライナー国に戻るのですが、最初の一往復は切符代を７０％オフいたしております」

すらすらと言い放った女性を前に、４人は相談を始めた。

「どうしよっか。７０％オフはかなり魅力的。この機会を逃したら一生あんな豪華客船乗るなんてできないよ！」
「素敵ですね。ああいうの、一度は乗ってみたかったんです」
「うーん、早いのならそれに越したことないんだが、それにしても高いぜ切符代。３等客室が７０％オフで銅貨３０枚だとよ。
あーでもグライナーからだったらジャスリーン行きやすいな・・・
あぁー、どうすっかな・・・」

考えあぐねている３人を見て、テレジーはポケットの中から何かを取り出し、売り場の女性に渡した。
それはきらめく銀貨４枚だった。
目を丸くしたのは女性だけではない。後ろで話し合いをしていた三人もだった。
彼らはテレジーの後ろからその銀貨を覗き込む。
テレジーはそんな視線お構いなしに、ぶっきらぼうに女性に言い放った。

「この値に見合う切符をさっさと用意しろ」
「は、はいっ！」
先ほどまで落ち着き払っていた女性が慌てて銀貨を四枚をつかむと、椅子の横にある通貨換算機と呼ばれる機械に銀貨を入れた。

紙幣はその国独自のものであり、国によって単位が違うので、両替機に入れる必要がある。
しかし硬貨はデザインこそ国によって違うが、配合されている金属によってその価値はおおよそ共通のものとなる。
ただ、その時その時の価値によって金額も若干変動してしまうのだが。
ちなみに普段の表記における硬貨１枚は純度８０％を基準としているので、たとえば先ほどの３等客室における銅貨３０枚を買うのなら、純度の低い銅貨だったら３０枚以上払わなければならないし、純度の高い銅貨だったらおつりがくる。
そういった事情もあり、いちいち通貨換算機に入れなければならないのは忙しいことだが、仕方がないことだ。

しばらくして女性は銀貨４枚からはじき出された数字を見てさらに驚き、慌てて切符を手配する。
そして出された切符は・・・

「うそ・・・一等客室」

切符を持ってわなわなする子供二人を差し置いて、ラルゴはテレジーに言った。
「あれだけ質のいい銀貨をいとも簡単に出しちゃうなんて、お前さん金持ちー」
「・・・行くぞ」
ラルゴの意図を含んだ感想に、テレジーは興味を示さず、船乗り場

へ向かった。
その後を若干浮足立ったショウタとクインがふらふらとついて行く。

まったくなぁ、な感想だが、前の二人はそんなことまったく気にしていない。というか、気にする余裕がなさそうだ。
生まれて初めてのセレブな体験を前に緊張で頭がパンク寸前なのだろうから。

7話　落とされた水

部屋に入って暫く、ショウタはその場から動けなかった。
そこは塵ひとつ落ちていないスイートルーム。新しく、いい香りがする。
いつも経費削減のため貨物船の隙間に乗っていたようなものだから、こういうことには免疫がない。
こういうときはどう反応すべきだろうか・・・

「うわわ、わわ、わ。やべぇ。ど、どうしよう。俺の家より広いんだけど」

細やかな刺繍が施された絨毯の上を歩き、艶のある木製のテーブルの上・・・はなんだか気がひけたのでその足元に荷物を置く。
着の身着のままで住んでいた町を飛び出したショウタだったが、オリフォンで少々荷物を増やすことにした。
今流行りだというニッチではなく、普通の鞄を。
ニッチは見た目は小さな鞄だが、その中に入る量は軽く家一軒分という、質量保存の法則を無視した代物だ。
クインの持っている鞄もそれなので、あの白いアタッシュケースの中身は彼女が軽い医療行為を行なえるだけの十分な道具がそろっている。
テレジーもラルゴもそれを利用してかなり身軽になっている。だけれど、ショウタはなんとなくそういうのは向かないだろう、と思っていた。
自分にとって必要なものがいったい何なのかを深く考えない性質だ。
ショウタは願いこそあれ物欲には乏しかった。
これからこの小さな鞄にいったい何が増えていくのかは謎だが、とりあえず今のところすかすかだった。

というか、何も入っていない。
「・・・これ、もらっていいやつだよね」
ふと、テーブルの上にあるもてなし用のお菓子に気が付き、それを鞄の中に入れる。
なんとも情けない初めて入れるものだった。

そのとき、コンコンと扉がノックされる。
「はーい」
返事をして扉をあけると、クインがそこにいた。
きらきらと宝石のように輝く二つの瞳が大きく見開かれていて、ショウタを見ている。
その目を見ただけで、クインの感情がハッキリと伝わってくる。
さっきそれぞれの部屋に別れたが、彼女はいつの間にやら小奇麗な服と鞄を持ってショウタの前にいた。
ニッチの中にはどうやら医療道具以外のものもあったらしい。
いつも白に近い、無彩色に近い服を着ているが、今は淡いコーラルピンクのツーピースを着ている。
全体的に落ち着いた印象を受け、同い年のショウタと比べても彼女のほうが年上に見えてしまう。
いつも肩から掛けている医者を表す白いケープも、おそらく鞄の中におさまっているのだろう。
この絢爛豪華な船に乗船するにあたって全く恥じぬ姿だった。
彼女の心は大分浮足立っている様子で、興奮で頬を赤く染めていた。

「ショウタさん、すごいです。すごすぎます！
あんなすべてが整っている部屋なんてもうこれから二度と泊まることなんてできないです！
ジャグジー見ました？湯船の上にあんな色とりどりの花弁が浮かべられているなんて。

あのお花はきっとファドキア産のアカシャクジンとフェルヴァルと・・・」

「ストップ。なんか感動がずれてる」

「あ、すみません・・・」

クインがこんなにも饒舌になることはショウタにとって珍しいことだった。

こんなに表情豊かなふるまいをするのが新鮮だ。

思わずショウタも表情が緩むのを感じた。

その後ラルゴを誘って船内を散歩することになった。テレジーも誘うため彼の部屋をノックしたが、彼はうっとうしそうに一回顔を出しただけで部屋に引っ込んでしまった。

豪華客船であることには間違いないが、期間限定で価格が相当抑えられているからか、中流階級ほどの人々が目立つ。

船内の人の会話からして、一等客室は完全予約制だったらしい。

それでもショウタたちが一等客室に乗りこめたのは、キャンセルがあったからか、金で無理やり手配したのかは、知る由もない。

コアッダを出港して早一時間。船旅がこんなに快適になるなんて想像もしていなかった。

暫く歩いた後、甲板に出てゆっくりお茶を飲むことにした。

青い空の下は太陽も穏やかで、辺りを見渡せば結構な人たちがこの極上大パノラマの中、思い思いの時間を過ごしている。

「でも、こんな贅沢していいのかな」

「気にすんなよ。俺らの金じゃないし」

「だから、気にするんじゃん」

「たしかにそうですね・・・」

「そんなことよりさぁ、いや～こりゃあ退屈しないな。カジノあるし」

「ショッピングもできますし」

「飯食い放題だし」
「テレジーさまさまだな」
「治療費上乗せしてもだいじょうぶそうですね」
「・・・」
「さて、あいつはなにしてるって？」
「本を読むんだって」
「けっ。場所にふさわしくない奴」
「うーん・・・テレジーってこういうの、絶対興味ないと思う」
「じゃあなんで一等客室取ったんだよ」
「部屋でゆっくりしたかったから、じゃないですか？」
「あぁ。なるほど」
「すごしやすい部屋ならどうでもよかったんじゃない？」
「あいつ・・・」
「・・・あ、すみません、ちょっと私失礼します」

綿々と紡いでいた会話をクインが遮る。
彼女はそそくさと立ち上がる。ショウタがどうしたのかと尋ねると、彼女はにっこりと笑って言った。

「さっきホールでミュージカルのチケット買ってきたんです。興味があって。
そろそろ始まるので行ってきますね」

いつの間に・・・。
彼女は二人にあいさつをした後、船内に入っていった。
その後ろ姿を見送った後、ショウタはぽつりとつぶやいた。

「クインって、もっとこう、サバサバで淡々としてるかと思ったけれど、
いろんなことに興味を持ってて行動力も結構あるし、実は表情豊か

だし、なんだか・・・」
「惚れたか？」
「怒るよ？」

他愛のない話をしていると、なんとなく雲行きが怪しくなってきたのに気づいたのか、甲板にいた乗客たちが少しずつ船内に移動していく。
ふと天を仰ぐと、ものすごい勢いで雲が広がっていく。暗くなってきて、肌寒さも感じてきた。
冷たい風に思わず鳥肌が立った。
「うぶ・・・中入ろうよ」
「おう」
ショウタたちも他と違わず、船内に避難した。
「なんか腹減ってきたね。飯食いに行こうよ」
「・・・まだ食うのかよ」

一人部屋にこもっていたテレジーは数回部屋の中をうろうろしたのち、ソファに横になった。
手持ちの本は読み終わってしまった。新しいものを買うために一回外に出たが、これといってぴんとくるものもなく。
テレビはもともと好きではなく、かといって音楽にも興味ない。
でもあの3人と仲良く船内散策なんてする気にもならなかった。
このまま昼寝でもできればいいのだが、残念なことにここ数年の不眠から簡単に眠りに入れることはなかった。
それでも、久々に訪れた平穏な時に心は確実に落ち着いてきている。

しばらくこうしていれば、いつか眠れるだろう、と思う。

そんなささやかな望みは、簡単に断たれるのだが。

ベランダの窓が、どんどんどんどんどんどんどん、とそれは乱暴にたたかれたのだ。
頭に血が上るのを抑えながら、テレジーは音のする方に足を向けた。

あの非常識な情報屋か、考古学者か、医者の女か。まぁクインはそんなことをしないとは思っているだろうが。
選択肢を頭に受かべるが、返す反応はもう決まっている。
ばんっと勢いよく窓を開ける。が、怒声が飛び出すと思われていた彼の口は一瞬止まる。
そこにいたのを見て、ようやく一言。

「・・・誰だ」
「やーん誰か分かんないけれどすごい助かったぁー！
とにかく早く入れてちょうだい！ってぐぁあ！」

彼にしては少々反応が遅かった。というのも、突然のこと過ぎて思考が停止していたからだ。
こんなことでは今後命を落としかねないな、とテレジーは反省し、先ほど投げ飛ばした人物を確認した。

ソファに逆さまに座るような、というか、ソファにだらりとかかっているその人物。
女性だった。
たとえ女性だろうが子供だろうが老人だろうが、彼の反応は変わらなかったからそこはどうでもいい。
逆さまの女性にどのような容姿であるとは今はコメントできず、テレジーはそのまま窓の外を見た。

この船は一等客室にだけそういう仕様がされているのだが、小さなバルコニーが設置されている。
観葉植物と小さなテーブルとリクライニングチェアのあるくつろぎの空間が船旅を最高のグレードに引き上げてくれるらしい。
そのバルコニーから望むものはもちろん海。そして他者の部屋とは隔離されている。
先ほど行動を共にする三人だろうか、と思ったが、あの情報屋以外にはここに来ることは不可能だと今になって冷静に判断できるほどだ。
しかし今逆さまになって伸びている女性はどう考えたってその不可能である荒技を成し遂げてここにいる。

・・・絶対ろくでもない状況に巻き込まれる。

その前に、と、テレジーがとった行動は実に合理的で彼にとっての常識的なものだった。
部屋に戻りぐったりした女性を片腕で担ぐと、そのままバルコニーに出て、そのまま・・・

「っふごおぁあああああ!!!!」
「ちっ。起きたか」

なんと、女性を海に落とそうとしたのだ。
あと少し、というところで女性が運よく目を覚まし、バルコニーのフェンスにしがみついた。
目じりに涙をため、とても冷静ではない形相でテレジーにまくしたてる。
アーモンドのような瞳をこれでもかというほど釣り上げて叫んだ。

「なにするのよ!」

「むしろ、何しに来た、お前。誰だ。
速やかに何者か名乗れ。さもなくばフェンスごと海に蹴落とす」
「ぐぼぁあああそれはまじで無理無理！
やばい部屋間違った！でも外から侵入できる場所なんて一等しかないし！」
「蹴るぞ」
「すいません！
私の名前はハイドラ！ハイドラ・ウォーンと申します！」

怒りは恐怖に変わったのか。半分パニックになりながら女性は名を名乗った。
それを聞いてとりあえずフェンスに乗せていた右足を退かした。
彼女、ハイドラは半狂乱になったままもがくようにフェンスから下りて、バルコニーにしゃがみこんだ。
ぜえぜえと息を整え、ハイドラは再度テレジーにしがみついた。
その目は先ほどの仕打ちなど忘れたかのようで、身に迫る何かを訴えている。

「ね、ね、お願い！今ちょっと危ない人たちから追われているの！
かくまってちょうだい！そうしたら貴方が”ハシャナール”であること、誰にも言わないから！」

テレジーは確信した。やっぱりろくでもないことに巻き込まれそうだ。
無意識に言った一言が、テレジーによってつかまれた自身の命運を分けようなど、冷静に考えられないハイドラにはわからない。
テレジーは黙って再度ハイドラをつかむと、そのままもう一度海に落とそうとした。

「ひぎょあああ！なぜ！？」

自分を落とそうとするテレジーの腕に必死にしがみつき、彼女は叫んだ。
冷たい目はそんな弱い彼女を踏みにじるというよりも突き落とすといった感じだ。
淡々と、テレジーは言う。

「理由は二つ。
俺は面倒事に巻き込まれるのが嫌だ。そして、俺の体質を知っているような奴はろくでもない奴に違いない。よってこの場でお前を排除しようと思う。
・・・まぁ、お前が何者かわかれば、俺に害をなさないと分かれば、少しは考えてやってもいいが」
「いいます！いいます！
私は製薬会社”エルデナ”の第2営業部の人間でございます！
貴方様を捕獲しようだとか、狙っての侵入では毛頭ございません！
！職業柄貴方様の身体的特徴を知っているだけなのです！！
自分の身かわいさに生きるため必死こいて外の壁を伝ってきたところ、一番近い貴方様の部屋に侵入したわけでございます！！
お願いです迷惑はかけませんだからちょっとだけこの部屋にいさせってください！それだけでいいんですいいんです！
あぁていうかここで大暴れしているとばれる！見つかる！お願いでございます！！」

だんだん耳が痛くなってきたのか、テレジーはハイドラをつかんだまま、部屋の中に入る。
窓を閉め、鍵をかけ、カーテンを閉めて、ぺっと彼女を床に落とす。
顔を涙でぐちゃぐちゃにした彼女は化粧が禿げていて、ちょっと怖い。
再度テレジーはハイドラの容姿を確認する。

白に近いパールグレイの髪の毛は短く、横髪が長く垂れ下がっている。
本来なら綺麗な輪ができるほど艶があるだろうに、一連のごたごたのせいでぼさぼさに乱れている。
ダークグリーン色の瞳からはぼろぼろと涙が零れおちていて、容姿は決して悪くないが、今の状態は彼女の魅力を9割減させている。

テレジーはそんな彼女を無視して、ソファにどっかりと座る。
そしてハイドラのほうに手のひらを向ける。持っているものを渡せというジェスチャーだ。
ハイドラは上着のポケットからさまざまなものを取り出した。
かくまってもらっている手前上、刃向かうことなどできない。
半泣きで企業秘密にかかわることだけは勘弁してほしいと訴えて、とりあえずそれは飲み込んでもらえた。
力なくしゃがみこんでいる女性、それを見下ろしソファにどんっと座っている男。はたから見ればえもいえぬ光景だ。
彼は数枚の書類に張り付いたお菓子の屑をぞんざいな手つきで払い落し、ざっと目を通した。
確かに。普通の営業の資料だ。
だが、この書類が普通であればあるだけ、疑問が生まれる。

「お前はなぜ追われているんだ？」

それに答えようと女性が口を開いたとき、まともな言葉よりも先ほどのように奇妙な悲鳴が部屋中に響いた。
船体がぐらり、と傾いたのだ。
思わず体がソファから落ちそうになるのを耐えると、地面にはいつくばったハイドラのほうに立ち上がる。
何が起こったのかを確認しようとしたとき、テレジーは顔をひきつらせた。

「うがぁあああっ！ぎにゃあああぁぁぁああ！
もう無理だ！あいつら、あいつらが来るよぉぉおおおお！！！！」

がさがさ、という効果音が似合いそうに、彼女は女を捨てて四つん這いでベッドルームのほうに逃げる。
そして、ベッドの上ではなく、そのベッドの下のわずかな隙間に無理やり滑り込んだ。
この部屋の中にずっといて、外のことには全く無関心だったが、何かがこの船の中で起こっているのかもしれない。
テレジーはベッドの下から出ているハイドラの足をつかむと、そのまま引きずりだした。

「のぉお！？」
「行くぞ。何があったか調べに行く。どんな奴が何をしでかしているのか」
「嫌よ嫌！絶対に嫌！私はここに残るの！
第一貴方面倒事は嫌だって！」
「お前はさっきの揺れの原因がわからんのか？」
「え？」
「もういい。いいから来い」
「いやぁぁあああ！」

ハイドラは綺麗に毛並みの整えられている絨毯をめちゃくちゃにかきむしり、己を引っ張るテレジーに反抗する。
この反応からして、相当の恐怖が室外にあるらしいが、彼女はどうやらオーバーリアクション気味なのであまりその点は信用していない。
テレジーが彼女を連れていく理由はただ一つ。

「お前を追っているという人間が俺に危害を加えようとしたら、お前を盾にしておけば万事解決だろう」
「最低！人間の風上にも置けない！」
「お前からの評価なんてどうでもいい。お前がらみでこの事態が起きているのなら、詳しいはずだろう？」
「間違えた！絶対に間違えた！こんな部屋に来なければよかったわぁあああああ！！！」

尚も絶叫するハイドラに少々引き気味のテレジーだが、少々退屈もしていたところだ。
そしてテレジーはどう見たって問題を放り込んだ爆弾女を抱えて、居心地の良い部屋を離れた。

8話　Shadow under the sea

ショウタとラルゴが船内に入って暫くして、船はぐらりと大きく揺れた。
人々が騒然とする中、待てど暮らせど船内放送が流れない。
だが、外を見るとまるで先ほどの揺れがなかったかのように普通に航海を続けている。
混乱した人々が行き交う廊下を歩きながら、ショウタはラルゴに訪ねた。

「なんだか、嫌な予感がしない？」
「来たよ。お前の第六感」
「だって、さっきなんだか妙な揺れじゃなかった？船からはなんのアナウンスもないし」
「今天気悪いだろ？ちょっと揺れたぐらいじゃいちいち放送してられねぇじゃん」
「天気の所為ならもっとずっと揺れていたっていいよ」
「・・・確かにそうだけど。どうしたわけ？」

あまりにも不安そうに語るショウタにラルゴが立ち止まって尋ねた。
ラルゴ自体、ショウタのこういう意味深な会話を無視することはできないところがある。
今までショウタがなんとなくつぶやいた言葉で命を救われた、とまでは行かなくても危険を回避することができているのだ。
表立って具現化できる魔術を使えないショウタだが、こういう不思議な感性は魔力によるものなのかもしれない、とラルゴは思っている。
さて、どうしたものかとラルゴは思うが、具体的にどうできるとい

うのだろう。
その時、ショウタの不安を裏付けるように、後ろから声をかけられた。

「船は揺れていませんよ」

この船に乗る３００近い乗客が同じように共感したその感覚を全否定される。

そんなバカなことがあるか、とラルゴが言いながら振り返ると、そこにいたのはラルゴよりも長身の男だった。
こげ茶色の髪の毛は無造作にぼさぼさ。恐らく寝癖だろう。
細いたれ目の目じりにはしわがうっすら見える。
服もちょっとだけ小汚い。この豪華絢爛の船にふさわしくない。まったくもって。
手になにか小さな生き物を抱えている。そういえばこの船、動物同伴ってどうだったか？
にっこりと笑って、いや、この場合はへらり、といったほうがいいだろう。男はラルゴとショウタに向けて手を振った。
胡散臭い。第一印象はそれだった。

「おじさん、どちらさま？」
「・・・俺はユピっていうんだけれどね。
君たち、なんだか面白い会話してるなぁーって」

小動物は毛が長く、耳が大きくて目も大きい。
素早い動きでユピと名乗った男の腕、肩、背中を走り回って頭の上で止まった。
そして、そのまま素早く下りて、ショウタの肩によじ登った。
わ、わ、と驚きながら体をじたばたさせるが、小動物はなんの警戒

心も抱かず、ショウタにじゃれている。
ユピはへらへら笑いながらその生き物を指さして言った。
「その子はウルル。ケナガウブキノソノソシソクって種類なんだ」
そんなことはどうでもいい。
ショウタはそのすばしこい小動物を右手だけで相手しながら、ユピに声をかけた。

「そんなことよりおじさん。
俺たちおじさんに背を向けていたんだけれど、どうして会話聞こえたの？」
「・・・」
「ショウタ、ユピって呼んでやれよ」

少々しょげながら、ユピは二人に近づいた。
その距離１０歩。この距離では自分のほうを向いていない人間の会話なんて絶対聞こえないはず。
ショウタの肩に乗っていたウルルがユピの肩に飛び移る。
よくよく見れば、ラルゴとそう歳は変わらないかもしれない。
悪いことをしたな、と思いながら、ショウタはユピのほうを見た。

「すみません、ユピさん。ところでどうして船が揺れていないっていうの？」
「スペルインパクトって知ってる？」
聞きなれない言葉をユピが言い、ショウタは首を横に振った。
だが、ラルゴは理解できたのか、なるほどなと呟いた。
一人だけ理解できないショウタは、隣に立つラルゴをつつきながら問いただす。
「スペルインパクトって、何？」
答えたのはユピだった。
「船とか海の上で起こりやすい現象だよ。

君にわかりやすいように説明するとね、魔力っていうのは個々に相性ってのががあるんだ。
その中でも極端に相性の悪すぎる強い魔力同士が魔術をぶつけてしまうと、辺りに強い影響を与えてしまう。
人間の体内に脈々と流れる”気”がその魔力のぶつかりに押されてバランスが歪んでしまう。
それが海の上みたいに足場が不安定な場所ではよく起こりうることなんだ。
ほら、見て御覧。調度品とか装飾品とか落ちてないでしょ。お店の方見た方が早いかもね」

言われて、船内にある小さなショッピングモールのほうに視線を向ける。
確かに、人々は混乱しているようだが、店の商品は一つも床に落ちていない。

「なるほどな。確かにそういうことなら船が揺れているわけでは決してない。
・・・さてと、お前さん何者？」
ようやくといったところか。当然の質問をラルゴが向ける。
ショウタは今まで変な人や普通じゃない人には多くかかわってきたが、この人は何か違う。
殷懃無礼なラルゴや不可解が人の形をしたようなテレジーとはまた違う。
むしろ、人間としてなんだか異質な気がしてならないのだ。
もしかしたら脳味噌が二つあるのではとか突拍子のないことが一瞬浮かぶが、そんなわけはない。別に頭の中を視たわけではないが。
違和感はどんどん強くなっていって、ショウタはユピをそれこそ穴が開くぐらい、凝視した。
だが、ユピはただへらへらと笑うだけだった。

「俺？別に、ただのしがない小説家だよ。
今回はのんびりこの船に乗って旅行でもしようと思ってね。
経験を得ないといい文章ってのは描けないんだよね。文字を書けても」

へぇと感心する。わけがない。
この人もまた、人に言えず何か特別なものを抱えているのだろう。
警戒心を怠らないまま、ショウタはそうなんだね、と返事を返す。

だが、ユピはそんなショウタたちの心中など全く気にしないように、
一言言い放った。

「でもさ、てことはとても強い魔力を持った相性の悪い者たちがぶつかったってことだよね。
こんな船内でなんだか物騒な話だね」

その言葉を聞いて、ショウタとラルゴは顔を見合わせる。
相性なんてショウタたちには詳しくわからないが、強い魔力を持った人間を知っている。
ショウタはラルゴに耳打ちをする。
部屋に戻らないか、と。もちろんラルゴもそれにうなづくと、二人はユピに軽くあいさつをして、足早に一等客室に向かって歩いて行った。

窓際の椅子に座ったユピはじゃれるウルルに優しく声をかける。
キュウと鳴いたウルルの言葉がわかるのか、普通に会話を始めた。
「そうか、君はあの子にあったことがないんだよね。

じゃあちょうどいい。ウルル、彼らの後、ついて行くんだよ」
キュウキュウ、とウルルは鳴き声を立てると、ユピの手を離れ、勢いよく走って行ってしまった。
一等客室のほうへ。
ユピは穴のあいた胸ポケットから煙草を取り出すと、指を軽く鳴らす。すると、煙草の先に火がついた。
数回ふかした後、ゆっくりと煙を肺の中に取り込んで、ふぅーっと長く煙を吐いた。
その煙は決して辺りに霧散せず、彼の胸ポケットの中に吸い込まれていった。灰さえも落ちないが、着実に燃えている。
煙草が半分ほどの長さになるまで、ゆっくり時間をかけた後、ぽつりとつぶやいた。

「よかったね、テレジー。いい仲間に巡り合えたようだ。
だけれど、時間は思ったよりも長くなさそうだ。できることなら、彼に見つかる前に”星の記憶”の真実に気付いてほしいけれど、それはやっぱり無理な話だよね」

そのつぶやきも煙と同じように、彼のポケットの中に吸い込まれていくようで。
誰もそれを聞くことはない。

ミュージカルの舞台に向かう途中、激しい立ちくらみのようなものを感じたクインは壁に手をついてその場にしゃがみこんだ。
そして、顔を上げると、人々が混乱しているのが見えた。
みんながみんなすごい揺れだったとか、何かにぶつかったのか、などと話している声がする。
それを聞いて、クインはふらふらと立ち上がると、急いでその場を

立ち去った。舞台とは逆方向に。
まるで先ほどの空間から逃げるように。
さっきの瞬間、自分を見てしまった人がいたなら、その人から逃げるために。
彼女の心は恐怖に支配されている。赤の他人という目撃者に対して。

青ざめた表情のまま、彼女はあたりを見渡す。物は一切落ちていない。
それがスペルインパクトであることを彼女は瞬時に判断できたのだ。

スペルインパクトは、体の中の気を他者の魔力によってぶつけられてしまうこと。
ぶつかる力が大きければ大きいほど、そして足場が不安定であればあるほど、衝撃は大きくなるという。
クインにとってそれは恐ろしい事態であり、決して遭遇してはいけないことになっている。
彼女の中では。

・・・決してその場に居合わせてはならない。その場に私はいてはいけない。

震える足をもつれさせ、とうとう転んで倒れてしまった。
ふ、と目の前に靴が現れる。そして、上から声をかけられた。

「お姉さん、だいじょうぶ？」
「・・・っ！いやっ！」

差し出された手を思わず弾いてしまう。
だが、少年が戸惑った雰囲気を感じ取ったのか、クインは冷静さを取り戻した。

我を失うほど、彼女は混乱していたことを今自覚したのだ。
息を整え、冷静に冷静に、血液を全身にゆったりと送り込む。

ゆっくり顔を上げると、そこにいたのは自分よりも少し幼い少年だった。
立ち上がってみると、その身長はクインとほとんど変わらない。これから成長期、といったところか。
大きなくるんとした印象的な目なのだろうが、明るい鳶色の髪がそれをほとんど隠してしまっていた。
どこか人懐こそうな印象を受ける少年だが、一人でここにいるのはさすがに疑問だ。

「あ、ありがとうございます。一人?ご両親は?」
「迷子じゃないよ!失礼だねお姉さん」
「ご、ごめんなさい。
あ、私は大丈夫です。心配してくれて、ありがとうございます」

たとえ年下であろうとも彼女は敬語を崩さない。
まだ冴えない顔色のまま、歩き出そうとするが、どうも気分がすぐれない。
ため息を飲み込んで、そのとき彼女もあることに気づいた。
この船内で誰かが魔術を行使しているのでは、と。
もしかしたらテレジーではないか、と彼女は思う。

いや、もしかしたら・・・

さまざまな疑惑を抱いて、状況を整理しようといったん部屋に戻るため足をそちらに向けようとした。
少年に背を向けようとした時、彼はひとつため息をついて、呟いた。

「まったく、はやくあの人たち捕まえないと今度こそ怪我人が出ちゃうよ」

その声にクインが振り返る。
そして、歩き去る先ほどの少年の腕を掴んだ。
少年はぎょっとして彼女のほうを見た。

「お、お姉さん？」
「貴方、先ほどのスペルインパクトの原因を御存じなんですか？」

少し押し殺した声。辺りに聞こえないように。
少年は暫く黙って、にっこりと笑顔を返した。
そして、クインに提案した。

「ねぇ、お姉さん。僕に協力してくれない？」
「え？」
「実はね。この船にちょっと悪い人たちが乗っているんだ。
僕はその人たちを捕まえて、奪われたものを取り返さなきゃならないんだ」
「貴方一人で？」
「そうだよ」

クインは考え込んだ。
スペルインパクトそれ自体は彼女にとってはどうでもいい。
問題は、それを引き起こした人間にある。
クインには目的があった。それはショウタたちには明かしていない。
そのために、その人物が誰か知ることは必要なことだった。

「それは、どういう人たちなんですか？」
「今から捕まえればわかるよ。どうするの？お姉さん気になってるんでしょ？スペルインパクト引き起こした人のこと」
「・・・わかりました。協力しましょう。でも、ほかの人に迷惑をかけたり怪我人を増やすことに気のりはしませんが」
「それは僕も同じだよ！大暴れしないで悪い奴らだけ捕まえようね！
僕の名前はルーマ。ルーマ・ミッドロア。よろしくね！」
「・・・クイン・ナタリラと申します」
固い表情のままのクインとは対照的に、少年は太陽のようににぱにぱと笑っている。
少々不安だが、彼女は少年、ルーマの後をついて行った。

ぐすぐすと泣くハイドラをそのまま無視して、テレジーは人気のない廊下を歩いていた。
そこは機関室に向かう道。関係者以外立ち入り禁止となっている場所だが、彼にとってそんなことは重要ではない。
なぜここかというと、彼女がその相手と遭遇したのがここだというからだ。
ハイドラは少々落ち着きがなくて少々ガサツな性格らしく、なぜかこの廊下を迷子となって歩いていたらしい。
誰も通らないから道を間違えたのだと引き返そうとしたとき、奇妙な二人組に出会ったという。
若い男女で、年頃は彼女と同じくらいだという。つまり、彼女の一つ下であるテレジーとも歳が近い。
この際年齢は意味がない。意味があるのは、若い男女がこんな場所にいたということだ。
ハイドラがいたことはどうでもよく、その男女は意図的にこの場に

いたのだ。
そして、彼女に接触してきたという。
人通りのない廊下を歩き、壁や床を調べていくと、テレジーはあることに気付いた。
青いインクのようなものがうっすらと細く、廊下を分断している。かすれていてところどころ消えてしまっている。ボルドー色の絨毯に溶け込んでしまって見過ごしかけてしまった。
壁との接地点に目を凝らせば、半円とそこから放射線に伸びる9本の線。そして三角を二つ合わせたような文字が描きこまれている。
何?、と声をかけたハイドラに、テレジーは呆れ半分の顔で彼女をにらんだ。

「お前、魔術は使えるのか?」
「もちろん。とはいってもちょっとだけど・・・日常生活を便利にする程度には」
「これを見てみろ」
「・・・?・・・・・・・・・・・・・・あ」
「まじないだ。おそらくお前の所有物にこれと同じ文様が描かれていれば」

そう言われたハイドラはごそごそと懐を探る。
ニッチの中から出てきたのはどれもお菓子の屑にまみれていたが、その中から一枚ぺらっとした紙が出てきた。
黄ばんだ薄い紙に描かれていたのは、先ほどと同じ文様。

「うっそ・・・こんなものいつの間に?」
「俺はまじないには疎いが、これはかなり初歩中の初歩だろ。引斥のまじない。青で書けば引き寄せ、赤で書けば引き離す。つまり、お前は馬鹿だから迷子になったわけではなく、無能だからここに引き寄せられてしまったわけだ」

「待って。私今すっごく馬鹿にされているの!?」
「結局お前を追いかけている二人の人間の仕業だろう。ここまでされて心当たりが本当にないのか?」
「ないわよ!」

ぎゃいぎゃい煩いハイドラから耳を遠ざけつつ、テレジーは半分消えているまじないの印をげしげしと足で消し、ハイドラの持っていた紙をパチンと指なり一つで燃やしてみせた。
未だテレジーに文句を言うハイドラを無視しながら、テレジーは一人考える。

ハイドラの命を狙っているのかどうかは彼女の主観が強すぎて今のところ判断しかねる。
また、まじないが初歩的すぎて相手の力のほどは図れない。
彼女は製薬会社エルデナの一営業人だというが、”ハシャナール”を知っているなら普通の営業の人間とは思わない方がいい。

テレジーの頭は一つの仮説を打ち立てる。
彼女、ハイドラは何かを握っているか、握らされている。
その後ろにエルデナがいる。
狙っている人物はエルデナのその裏の何かを必要としている。
もしくはそれがあることが非常に不都合だから彼女を消したがっている。
どれも当たりきりでどうしようもない仮説だが、それ以外に情報が少なすぎる。
もしかしたらここにあるまじないを消しにその謎の二人が戻ってくるのではないかと期待したが、気配は一向にない。
気配がない。
このことに、テレジーは違和感を抱いた。

「馬鹿女、少し黙れ」
「馬鹿とは何!?もー貴方口悪すぎる!」
「いいから黙れと言っている。
死にたくなければ息を止めるつもりで口を閉じろ」
凛とした声が幾分かトーンを下げてハイドラに突き刺さる。
背筋までそれが達した瞬間、ハイドラは両手を口に、それこそ息を止めて黙った。
テレジーはうっすらと目を閉じる。そして、5秒とせず目を開けて言った。

「人間の気配がない」
「・・・?」
「ここは機関室が近いはずだ。機械にまぎれて多少は薄まるが、それでも人間の気配がしない。
これだけのでかい船を動かすのにたった一人の人間だけのわけがないだろう」
「・・・ぶふぅおぉ!
ってことは、どういうこと?」
「少しは頭を使え。いくぞ」
息を止めていたせいで顔を真っ赤にしながら、ハイドラはテレジーの後をついて行く。
辿り着いた機関室。そこの扉はあっさりと開いた。
そして、そこにいたのは・・・いや、そこにあったのは・・・

無人の空間だった。

「そんなバカなあぁぁあああ!!!??」
耳がきぃん、となった気がする。
今度は顔を真っ白にして、ハイドラは辺りを見渡した。
彼女の知識ではとうてい理解できない機械が決して広くない機関室

に備え付けてある。
そして、椅子の数を見るだけでこの船を動かすためには7人の人間が必要であることがわかる。
なのに、その椅子には誰も座っていない。
それでも彼女たちの体に伝わる振動は、この船シェリーンが間違いなく動いていることを証明している。
これだけの大きい船なのだからオート操縦でもしているのだろうか。
だとしても無人なんて絶対にありえない。
混乱する彼女をよそに、テレジーはやはり冷静なまま、もう一度目を閉じる。
そして、

「お前らか。この馬鹿女を追いかけているのは」

入口の影に声をかけた。
ハイドラがぴたりと騒ぐのをやめて、恐る恐る振り返る。
彼の視界の隅に入る彼女は、これでもかというほど怯えきっていて、落ちてしまうのではないかと思うほど目を見開いている。
入口にいたのは、若い男女。
ハイドラを追っている人物たちだった。

9話　壇上の円舞

機関室。
そこに現れたのは確かに若い二人組だった。
男のほうは髪の毛をワックスで固め上げている。首にストールを巻いているが服はタンクトップだった。
いったいどっちの気温に標準を合わせているのか不明だ。
女のほうは挑発的な大きな目が印象的だった。肩すれすれの髪の毛をさらりと揺らせている。
ひざ丈よりも少し短いワンピースを着て、屋内だというのに日傘をさしている。
もっと極悪人かと思ったら、とくに問題のない二人組、といったところだ。
だが、ハイドラの様子はあからさまにがらっと変わった。
先ほどまでのかしましい様子はなく、テレジーの後ろに隠れて震えてしまった。

かつん、とヒールを鳴らした女性は、猫なで声でテレジーに話しかけた。

「お兄さん、その女をこっちに渡してくれないかしらん？」
女のほうはご機嫌そうだ。薄紅色の日傘をくるくるとまわしてテレジーに問うた。
「何故だ？」
「それはお兄さんにとってどうでもいいことだわん。
その女はね、私たちにとってとぉーっても邪魔なのん。だから排除するのん。
わからない？邪魔で危険なものは力を得る前に消しておかなきゃだめなのよん」

「それには一理あるな」
「ちょっ！テレジー君！」

ハイドラがそれに驚いて、思わずテレジーをつかむ。
真っ青になって首をぶんぶんと横に振っている。
ハイドラにとって敵ではないテレジーは味方のような位置づけらしい。彼にとってはいい迷惑だったが。
だが、一応テレジーはハイドラをかばうような位置に立ち、二人の男女に話しかけた。

「この馬鹿女が将来的にお前たちにとって異物になるということか」
「そうなんすよぉ。なんてゆぅかぁ、その女はマジやばいってゆうか」
答えたのは男。髪の毛をいじりながらテレジーの質問に答えているが、内容は全くない。
テレジーは男のほうを無視して、まだ会話が成り立ちそうな女性の方にのみ視線を向けた。
女はテレジーににっこりと笑いかけて、目を細めた。
あからさまに上から目線。彼女は言った。
「お兄さん、私たちは訳ありなのよん。って、見てわかると思うけどん。
私たちは私たちの願いをかなえるために、その女を見過ごすことができないのん」
「だそうだ。お前、再三聞くが心当たり本当にないのか？」
「ないないないない！！！
今までおとなしーくまじめーに生きてきたのよ！？」
「そう、今まではねん」

女の声のトーンが少しだけ落ちる。

もともと読めぬ声の色をしていたが、ようやく感情のようなものが浮かび上がる。
冷酷で、残酷な何かとして。

「貴方の過去なんかどうでもいいのん。
私たちにとっては貴方のこれからが困るものなのん。だから、ごめんなさいねん」

なるほどなと思って、テレジーは懐から短剣を取り出した。

この二人組がいったい何をたくらんでいるかは分からないが、彼は少なくとも二人、こういう不可解なことを口にする人物を知っている。
そのどちらもが、彼の想像の範囲外の能力を持っていたから、今更驚く必要がない。
世界は広い。変な奴やおかしな奴はごろごろいる。
テレジーの中で、この二人もハイドラも、自分にかかわってきた旅の同行者たちも変な奴に認定されている。
カルチャーショックを受けることもなく、この二人の言い分に、そうか、という反応を示した。
だが、その意見に同意できるかどうかは別問題だ。

刃渡り５０センチほどの短剣は身幅も広く、白銀色の刀身が美しく光る。
テレジーは目の前の二人が先ほどの船体の揺れを引き起こした人物だと確信した。
ハイドラは気付いていないが、テレジーには先ほどの揺れが魔術の衝突、スペルインパクトによるものだと気づいていた。
その後現れた二人と会話をして、（正確には目の前の女一人だが。）テレジーはこの二人の力をなんとなく感じ取った。

2年間の逃亡生活はテレジーを確実に逞しくし、半ば野生の勘ともいえる妙な特技を身につけるに至ったらしい。
それはともかく、二人がハイドラを狙うということは、彼女が今後何かを起こすことを意味している。
それがテレジーにとって幸か不幸かは今のところ測りかねる。
それを知ってからでも遅くないのではないか、というのが今のところの判断だったので、謎の二人組に剣を向けることにした。

もしかしたらわずかながらに彼女に情があるのではという可能性を限りなく無視して。

テレジーの臨戦態勢に男は拳を握り、女の前に立つ。
とん、とん、とステップを踏むが、それはまるでアトラクションを目の前にしてうきうきと体を動かす子供のそれに似ていた。
「まじっすかまじっすかぁ！
フィオさんこんなところで暴れちゃうとかゲキアツじゃないっすか！」
「クリーマ、どうやらこのお兄さんをやっつけない限りあの女を殺すことはできなさそうだわん。
ちょっとだけ貴方時間を稼いでちょうだいん」

先に床を蹴ったのはクリーマと呼ばれた男だった。
彼は思った以上に素早い動きでテレジーの懐に入ると、そのまま掌底を彼の細い体に打ち込んだ。
そのままテレジーはハイドラを巻き込んで壁にぶつかってしまう。
すぐに立ち上がり、痛みよりも恐怖で動けなくなってしまったハイドラを抱え、テレジーは反対の手で短剣を握りしめる。
クリーマの奥にいるフィオと呼ばれた女は傘をくるくる回しながらぶつぶつ何かを唱えている。
それが魔術ではなくまじないであることに気づくと、テレジーは彼

女に向かって素早く剣をふるった。
まるで氷の花弁のようなそれはフィオめがけて舞ったが、それはすべてクリーマによって撃ち落とされてしまう。
クリーマはたんっと再度床を蹴りあげると、そのまま身軽にテレジーの横腹に蹴りを入れた。
しかし今度は吹き飛ばず、その攻撃をいなしてテレジーは剣を振った。
いっそハイドラを下ろせばよかったのだが、そうすれば二人は現時点で無力なハイドラを一気に襲うだろう。
クリーマは強かった。魔力の纏う拳と足をまともに食らえば大怪我を食らうだろう。
テレジーも力を持っているが、ハンデありきでは十分に発揮できるわけがない。

そして、そうやって考えを巡らせている間に、フィオはまじないを結んでしまった。

「”父より受け継ぎし命の赤さ、母より受け継ぎし命の青さ。肉の塊に気を宿し命を結ぶ言の葉をわが手に”」

はっとしたときにはもう遅かった。
テレジーは反射的にハイドラを投げ飛ばした。
「きゃぁあ！」
どさっと地面に尻もちをついたハイドラははっとテレジーのほうに顔を向けた。
フィオの口から青白い光が紡がれたと思えばその光は意志を持ち、テレジーに蛇のごとくまとわりついた。
「っ！」
さすがのテレジーもぎょっと目を見開いた。振り払おうにもそれはしっかりと体にひっついて離れない。

「やりぃ！マジぱねぇ！」
フィオの隣でガッツポーズを取ったクリーマを無視して、フィオは傘をトントンと肩にたたいた。
光の蛇に対する感想は、気持ち悪いだった。
ぬっとりとした物が全身を這う気持ち悪さに反魔の魔術を唱えようとしたが、それは叶わなかった。
「テレジー君！」
ハイドラが叫ぶ。それにフィオは素早く反応すると、ぱたんと傘を閉じ、その先端をテレジーに向けて言った。
「”テレジーという名を引きずりだしなさい”」
バチバチっと体に電撃が走り、思わず膝をついてしまった。
ハイドラがテレジーにしがみつく。そのとき彼女にも電撃が直撃する。
意識を持って行かれそうになるほどの痛みに耐えて、ハイドラは何度も何度もテレジーの名を呼んだ。
だが、顔色が変わったのはテレジーでもハイドラでもなかった。
そのまじないをかけた、フィオだった。

「なんでなのん？？？」
「フィオさん？どうしちゃったんすか？」
「まじないが発動しないのよーん」

それどころか、ばちんっとさらに大きな音がして、青白い光は消滅した。
うろたえるフィオとクリーマが一瞬気を分散させたその瞬間をテレジーは見逃さない。
荒い息のまま、頭をまるで鈍器のようなもので殴られたような衝撃を感じながら、
勢いをつけてクリーマにきりかかった。
「んぎゃっ！」

致命傷を避けんと反射的に体を逸らしたが、クリーマの腹部から鮮血が飛び出す。
その光景にはっとフィオが顔を上げたと同時に、彼女の細い体が吹き飛んだ。
テレジーが彼女の腹に蹴りを入れたのだ。

「んんんっ・・・いたすぎるわん・・・」
「・・・っ、・・・お前、俺に何をした」
「貴方、それ、本名じゃないでしょん？」

お腹を押さえながら、フィオが立ち上がる。
傘の骨が一本折れてしまったが、フィオはそれを再度さしなおして、テレジーに向かって言った。
事実だったが、彼は無言を貫いた。
フィオは先ほどの狼狽を消し、最初に彼らに見せた、自信に満ちた顔をした。

「私はねん、”人の名前を奪う”ことができるのよん。ま、奪えない人もいるんだけどねん。
貴方、もともとの自分の名前をとっくに捨ててるのねん。それじゃあまじないが発動できないのよーん。
私は自分で手を下す、なんて野蛮なことだいっきらいなのん。だったら名を奪ってうまいこと動かしちゃえばことが早いわねん」
「卑怯者の鑑だな」
「褒めないでちょうだいん。
さて、貴方の名を奪えないのなら、あの女の名を奪うが一番いいわねん。テレジー君、あの女の名前を教えてちょうだいん」

そんなことするのはめんどくさい。
テレジーは再度剣を構えなおし、無防備なフィオに切りかかった。

それでも彼女はとん、と飛び上がると華奢な傘で応戦した。
お互いがお互いに大怪我を追う手前のぎりぎりの線を行く。だが、徐々にフィオが押され始める。
「まずいわん。クリーマ！とにかく体制立て直すわよーん！！逃げるのよーん！！」
きゃぁきゃぁ言いながら、フィオが扉の方に走っていく。怪我を負って呻いているクリーマを放って、だ。
逃がすか、とテレジーが後ろから魔術を放とうとしたとき、フィオの体が再び宙を浮いた。

はっとすると、扉から出てきたのはピンク色の髪の毛。

長いきらめき。長剣だった。それが彼女の傘を真っ二つに割ったのだ。
自分の体を真っ二つにされることは防いだらしいが、フィオは吹き飛ばされてクリーマの倒れている傍の壁に背中を打ちつけた。
「フィオさん！
てっめぇなにしやがって・・・！」
ようやく負傷から立ち上がったクリーマも、後ろからの衝撃に指一本動かせないまま、そのままどさり、と倒れた。
倒れたクリーマの後ろから、また別の影。

「テレジー！ここにいたんだね！」

先ほどクリーマの頸椎に手刀を食らわせた彼、ショウタがテレジーに向かって叫ぶ。
少しだけ眉を寄せて、テレジーを見ている。
そのショウタの目がなんとなく嫌で、テレジーは目をそらしてしまった。
「まったく、何面倒事引き起こしやがってんだよバカ」

呆れ半分の顔を向けるラルゴは、右手に剣を握り、左手を腰にあてて、テレジーとハイドラを交互に見た。
グレーの瞳がうっすらと細められ、彼を、次に目を白黒させている女性を。
ハイドラを見て、ラルゴは眉をじんわりと寄せた。

・・・この女・・・どっかで見たことあるような・・・

ラルゴが口を開こうとしたとき、
「うわぁ！」
「なっ！」
「きゃあああああ！」
「っ！」
どんっという爆発。
近距離で爆発したのは、火薬ではなく、人間だった。

「もおぉぉおおぉぉぉぉ！こんなことになったのもみんなみんなあいつのせいなんだからーん！！
クリーマ！文句言いに行くわよん！」

ライムグリーン色だったフィオの髪の色は現在、真っ赤に燃えている。
本当に火を吹いている。先ほどの爆発を引き起こしたのは彼女のようだ。
体中から煙が出ていて、まさしく彼女自体が火山だった。
起き上がったクリーマは軽々しく了解というと、フィオとともに機関室を出ていった。
ハイドラのことなんてどうでもよくなったのか、彼女はどうやらここにはいない誰かに怒りの矛先を向けている模様。
火事場の馬鹿力を出され、４人はそれなりにダメージを受けてしま

った。

「うぅ・・・痛い。人間爆発まじで危険」

「おいおいおい、この女気絶してるんだけど」

ラルゴが呆れ気味に言う。目線の先には目を回したハイドラが情けなくも体を大の字にして伸びてしまっていた。

「まったく、いったいあの頭のおかしな連中はなんなんだ・・・」

苛立ち半分でテレジーにそれを問いただそうとしたが、彼の姿が見当たらない。

気がつけばショウタもいない。さっきまで痛いと言っていたではないか。

あの二人を追いかけて行ったテレジーを追いかけていったのだろう。

なんて行動の早い。

「・・・若いっていいね」

ラルゴはこのままハイドラを置いて行くわけにもいかず、どっかりと彼女の横に腰を下ろした。

そして、まじまじと彼女の顔を見た。

この髪の色といい、顔といい、どこかであったことがあることには間違いない。なのに、思い出せなかった。

歳かな、なんていうが、そんなことで切り捨てるのなんだか後味悪い。

目覚めるまで待とうか、など悠長に構えようとしたとき、

「・・・船が加速している?」

強烈な違和感。わずかな違和感が強く鮮明に感じられる。

確実に少しずつ、速度が速まっていた。

「それもこれもあれもどれも、みーんなみーんな、あの人が悪いのよーん！」
「そうっすよ！あの人マジありえねぇってゆうか、何考えてんのか訳わかんねって感じっすよ！」
「私には貴方のその言葉づかいもわからないんだけれどねーん」
「マジっすか！？」
「そんなことはどうでもよくってねん」
「話振ったのフィオさんじゃないっすか。そのテンションの切り替えついていけねぇっす」
「こうなったら失敗の元凶のユピを捕まえて文句の一つも言ってやんなきゃ気が済まないのよーん！」
「でもこんな超でかいっていうかありえないでかさの船の中でどやってユピさん捜すんっすか？
俺の魔術もフィオさんの魔術も人捜しには向かない的な」
「そうなのよねーん。でも、なんとなくで捜すしかないじゃないのん？」
「はぁ、マジやってらんねぇっす」

だだだだ、と、二人は人が全くいなくなった甲板に走り出た。
雲は真っ暗で、海風の所為か、この天気の所為か、酷く寒い。
フィオの日傘は風にさらわれそうになるが、彼女はその細い片腕だけで傘を押さえつけている。
ばこん、と傘が反転しても、彼女は微動だにしなかった。
そもそも先ほどラルゴによって真っ二つにされたはずだったが、その部分はいつの間にやらテープで補強されている。
風にあおられて飛ばされないのは偶然か。

「はーぁ、マジ風ぱねぇ。セット乱れるし！」
「うるさいわねん。さぁ、捜すわよん。

こんなどでかい船の中を延々と捜しているうちにあの血の気の多いお子様たちと鉢合わせになるのは御免こうむるわん。
だから、ちょっとぐらい時間がかかっても、まじないに頼るのよん」

「え？俺もやるんすか？」
「二人でやった方が早いわよん」

壊れた傘をばたんとたたみ、フィオは木材でできた床にがりがりと跡をつけていく。
大きな円を書くと、いくつも線を引き入れていく。
クリーマもそれに線を書き加えていく。まじないが少しずつ紡がれていくのか、床が光りだす。
あと少しで完成するところで、フィオは手を止めた。
クリーマも同じく手を止めて、立ち上がり、入口の方を見る。

「まさか捜す前に自分から来てくれるだなんて」

入口には人が立っていた。
寝癖でぼさぼさの髪の毛は風にあおられ一層ぼさぼさになっている。
両手をズボンのポケットに突っこんだまま、その人物は二人を見ている。
長く息を吐くと、へらりとも笑わずに二人に問いかけた。

「懲りないね馬鹿なことばかり。よく言うでしょおいしい話には裏があるって。
堅実な道っていうのが意外にも成功の近道じゃないかな」
「”あなたみたいな若い子”にはわかんないわよん。
幾度となく繰り返された失敗とそのたびに味わう苦い気持ち。
ここ数年は”星の記憶”を信じようなんてことのほうが馬鹿げてる

と思われているわん。もう、普通にやってちゃ二度と”叶わない”わよん」

「そうかな・・・俺は、あの子たちを信じてみようかな」

「もっと信じられるものを信じた方がいいわよん。貴方もそれなりに生きているんならいい加減合理的な方に考えた方がいいわん」

「ま、その話は、また今度ということで」

「逃げるのん？」

「お客さんだよ。君たちにね」

ユピはそういうと踵を返し、三歩歩くうちに姿をすう、と消した。入れ替わるように、甲板に飛び出してきたのは、ショウタたちではなかった。

息を切らして走ってきた、ルーマとクインだった。

10話　胸中

数時間前。
クインはルーマの後ろを静かに、黙って歩いていた。
船内の雰囲気はスペルインパクトなど忘れたのか、落ち着きを取り戻していてゆったりとした時間が流れている。
二人は人があまりいないテーブルにつくと、しばし沈黙をする。
クインは緊張している風ではなく、どちらかというとまっすぐすぎる目でルーマをただじっと見ているだけだった。
ルーマはにこっと笑うと、クインに話しかける。　子供とは思えぬほどの淡々とした口調で。

「僕、この名前本名じゃないんだ」

クインは黙ったままだった。
名がない。これが意味することを彼女は理解している。

名前。それは自身を確立するもの。
家の名にはまじないがかかり、その名前自身が意味を持つ。
家など、クインにとってはほとほとどうでもいいことだが、このナタリラという家の名は決して軽んじることはできない。
それこそ何百年と紡がれた名であればまじないは強くなる。
そして、名は両親が愛というこの世界でもっとも複雑なまじないをかけられてしまっている。
クインの母親、父親はとうにこの世にいない。
そして、”クインがどういう人間であれ”、最初に名前をつけたときに彼女に向けられた愛は本物だった。
言い返せば、愛がなければ名をつけることもまじないをかけることもできない。

クインは両親が好きではない。
むしろ、いなくなって清々としている節もあるので、愛されたくはなかったとさえ思ってしまっている。
つまり何が言いたいかというと。
まじないのかかった名は無形のものだろうと軽々しく捨てることはできない。
捨てるとなると、それは大きすぎるリスクを体や魂に背負わざるを得ない。

彼女がこの旅の途中で聞いたことだが、ショウタやテレジーは自分の名を持っていない。
ショウタは記憶がないので彼自身が名乗っている名は便宜上の物だと本人が言っていた。
そして、テレジーは自分が本名を捨てたことを彼女と二人で会話をしているときに、ぽつりとつぶやいた。
事情があるのだろうと思って、クインはその時聞けなかった。
名を捨てるなど、普通の事情ではないからだ。
クイン自身のように、親が嫌いだという理由だけで捨てるには割に合わないことだからだ。
ルーマはどうだろうか。
彼がここにいる理由と関係するから言ったのだろう。
ルーマは少しだけ冷たい目をして笑いながら、あくまで笑顔のまま言った。

「取られちゃったんだ。名前。悪い奴らに」

驚いた。そんなことができる人間がいるとは。

「その女はね、人の名前を奪うことができる。どうして奪ったかは残念ながらつきとめられなかったんだけれど。

名を奪われた人は記憶、心を失い、廃人のようになってしまう。
でも、僕はこうして生きている。なぜか。それもわからない。
僕はつい最近までのふわふわした記憶の中から、どうにかこうにか這いあがって、名前を自分に与えた。
それからどうにかうっすらと思い出して、あぁそうだ。あの女に名を奪われたんだって思い出したんだ」
にわかに信じがたいことだが、クインはルーマの言っていることを信じようと思った。
彼女にはルーマという名が本名か偽名か判断することができないので、最初は信じるかどうか疑問だったが、ルーマが嘘を言うような人間かどうかは、数多くの人を見てきたクインにはわかることだ。
彼女はゆっくりとした口調で、ルーマに尋ねた。
「ルーマさんは、名前を取り戻すためにその人物をつけてこの船に乗ったんですね」
彼は強くうなづいて、言った。
「そう。僕はすべてを取り戻したい。
両親の名前も顔も、友達も、何もかもをぼんやりとしか思い出せない僕にとって、名前は必要なんだ。
それを取り戻せるためなら、なんだってするよ」

クインは、ショウタのことを思い出していた。
ショウタももしかしたら、名前を奪われていたのではないか。２年前に。
でも、先ほどのルーマの話を聞けば、名を奪われた人間が生きている確率はかなり低いそうだ。
しかし、彼女でもわかるほど、彼、ショウタは珍しい力を持っている。そのわずかな確立に入っていそうな気はする。
彼のその力に嫉妬する手前のところで、彼女はルーマの記憶のないという現在の状況に同情していた。

「クイン？」
「・・・」
不安そうに彼女を覗き込むルーマ。
もしかしたら、いけないことを言ってしまったのではないかというような。
クインは静かに首を振ると、淡々と言いそうになる口をゆっくりと動かして、できるだけ感情がこもる、そのように聞こえるよう喋った。
「ルーマさんは過去を取り戻したいんですね。
取り戻したものが、そこまでの価値があるもの、とは限りませんよ」
今度はルーマが黙った。
その沈黙だけで、クインはルーマが相当聡い少年だということを再認識した。
だが、ルーマは怒ることもなく、にっこりと笑うと、クインに言った。
「それでももちろん、取り戻したいよ」
たったひとこと。それだけ。
それ以上言わなかったのは、クインにとっても幸いだった。
先ほどの自分の発言を否定されたくない。変に食い下がってほしくない。彼女も変な意地があった。
それを汲み取ったわけではなさそうだが、クインは何も言えなくなり、ただただ黙った。
そんなとき、船の中を走り抜ける二人の男女に気付いた。
ここは人通りがなく、落ち着いた空間だったので、二人の乱入者は

かなり異質だった。
クインが眉をひそめると同時に、ルーマが席を立った。
勢いよく、そして、先ほどまでの笑顔を一瞬で消して、走り出す。
その横顔が、少しだけ険しかった。
二人の男女は足が速く、気がつけば入り組んだ廊下を曲がってどこかへ行ってしまった。
それでも、ルーマは走って後を追いかけた。
あわててクインも追いかけた。

「ルーマさん？どうしたんですか？」
「クイン、あの二人。あの女のほう。
僕の名前を奪った奴だよ！」

そして、話は現在にもどる。

吹きすさぶ寒い風がクインに、ルーマに容赦なく当たる。
眼前に立つ二人の人間は、そんなクインとルーマを見て、にっこりと笑った。
女のほうは大きな目をうっすらと薄め、いやらしく柔らかい声で話しかけた。

「貴方達、なんの用かしらん？」

まるで見知らぬ他人を相手にするような口調に、ルーマが不快感を表す。
眉を潜め、侮蔑するような目線を彼女に向ける。
そして、彼は両手をズボンのポケットの傍に持っていく。

ルーマは二丁拳銃を携帯している。いつでもホルスターから抜けるように手を添えた。。
女はぼろぼろの傘を手から離す。
傘は風にあおられあっという間に視界から消えてしまった。
ばさばさと風が強い。倒れる、とまではいかないが、彼女はよろめくこともなく、優雅に立ち続けている。
それが妙に不安感をあおっている。
クインは心の底に意識できない心臓の動きを感じた。
ゆっくりとしていて、体の中心から叩かれている、そんな感じ。
それが今は不快感を引き起こし、心臓が今目の前にいる人物たちに向けられて鼓動しているのではと錯覚さえ抱く。

女の隣に立つ男は首をうーん、と捻りながら二人の珍客を見渡した後、クインのほうを見て満面の笑みを浮かべた。
そして、女にこそこそと言った。
「あの子、まじかわいいってゆうか、いい女って思いません？あいたっ！」
女は男の足を思いっきり踏むと（しかも高いヒールで、だ）体をくねっと曲げて笑った。
「わかんないわーん。貴方達、さっきの血気盛んな男の子たちのお友達？」
「わかんない・・・だって・・・？」

ルーマの声が静かな怒りに満ちた。
小さな拳がわなわなと震えて、前髪の奥の大きな瞳がかっと見開かれている。
その先に映る女。でも、女の眼には彼が映っていない。
女はルーマの怒りに気づいていないのか、話をそらす。

「さて、どこいっちゃったのかしらんユピ。今までまったく協力な

んてしてくれなかったけれど、邪魔されたのは初めてだわん。
仲間と思っていたけれど、限界だわん。私、あの子嫌いなのよん。
お仕置きしなくちゃ」

わずかに女が体をあちら側に反転させようとしたとき、ルーマは飛び出していた。
クインは制止することもできず、その光景をただコマ送りのように見ることしかできない。
ルーマは両手に拳銃を握ると、女のほうめがけて発砲した。
だが、その弾は彼女にかすりもせず、男の拳によって叩き落とされた。
正確には、男の拳が纏った気によって。
男はルーマを殴り飛ばす。少年の小柄な体は船の縁に当たる。
呻く間もなく、ルーマは再度拳銃を構えて発砲する。
クインははっとして、懐に数本仕込んでいたメスを男に向かって投げる。
男はそれを避けて、二人から間合いを取った。そして何かに気づいたのか、大声で言った。

「あぁ！フィオさん！あれっすよ！ウェイ国のガキ！射的がうまかったあの！
フィオさんがぶっこわした町の町長のガキだ！生きていたなんて！」

フィオはその言葉にあぁ、と納得したようだ。
「クリーマって記憶力いいのねん。すぅーっかりわすれてたわん」
「・・・町を・・・壊しただって・・・！？」

ルーマの頭に血が上るのが早かったか、発砲するのが早かったか、
怒りで我を忘れたルーマは叫んだ。
言葉ではない、純粋な怒りの塊が二人に向けられている。

びりびり、と震える空気を感じながら、クインは頭が少しずつ冴えていく気がした。
なんとなく、話の流れが分かった。
おそらくこの二人はウェイ国の一つの町を何かしらの理由があって攻撃した。
ルーマはその町の人間だった。
生き残ったのは、彼だけかもしれないし、まだいるのかもしれないが、それはわからない。
おそらくルーマも今はわからない、だろう。
名を奪われ、町を奪われた彼の復讐の相手は、そんなことさえ忘れている。
そこまでわかっていても、クインはルーマに対して至極冷静な自分に気付いた。
かわいそうだとは思う。こんな小さな子供なのに、と。
でも、それだからと言って自分が何をできるわけでもない。当事者でもないから。
それに、奪われたものを自分が返してあげることなどできないのだから。

・・・私はやはりおかしいのだろうか。

クインは自分の本来の目的である、スペルインパクトの原因を考えることにした。
この二人は不思議な人間だ。
彼らがスペルインパクトを引き起こしたのだとしたら、それはいったい何がきっかけだったのか。
大きな魔術を使わざるを得ない理由は何か。

「っ・・・！クイン！」

そのとき、名を呼ばれて、クインは思考を止めて振り返った。
そこにいたのはショウタ。息を切らせている。走ってここまで来たようだ。
どうしてここにいるのだろう。彼女がそれを尋ねようとショウタの方を振り返ったとき、
きんっと冷たい魔力を感じた。
足元から感じる冷気。ぞくりと鳥肌が立った。

「うぎゃあ！」
その時、男の、クリーマの悲鳴。
ざざ、ざ、と床を転がるクリーマ。吹き飛ばされたのだろう。
そして、吹き飛ばした張本人は華奢な女性に剣をふるった。
その人影は、鋭かった。
「テレジーさん！」
「テレジー！」
どこから現われてきたのか、人影、テレジーは謎の女、フィオの体を真っ二つにしようと切りかかった。
応戦する傘はない。彼女はうんざりとした表情で叫んだ。
「あぁんもう！貴方しつこいわん！」
「黙れ」
横に薙ぎ払った剣は彼女に当たらず、フィオは素晴らしい脚力を持って飛ぶと、クリーマの横に着地した。
着地したとき、ぱきんと床が音を立てた。
薄氷が張ってある。いつの間に。
その薄い氷が波打ったと思えば、それは鋭い棘としてフィオとクリーマに向かって地面から伸びた。
思わず串刺しになる寸でのところでの回避。彼女はクリーマを抱えて船首のほうに逃げた。
細い体の割には怪力だ。
氷の矢がそんな彼らを後ろから狙い撃つ。

「逃がすか」
「なんでよん！貴方関係ないじゃないん！
もういいわよーん。あの女はまた今度にしてあげるからん！貴方嫌いよぉー。放っておいてちょうだい！」
「お前に聞きたいことがある。大人しくつかまれ」
行き止まり。フィオはテレジーにきいきいとした声を浴びせる。
テレジーはその声にいら立ちながら、彼女の言い分を一刀両断すべく、再度剣を振るった。
もちろん彼女はそれを回避する。
だが、
宙を浮いたフィオの肩から、鮮血が吹き出した。

「うそん・・・」

驚愕で目を見開いたまま、クリーマを抱えていたフィオはそのままバランスを崩し、荒れる海の中に落ちた。
風に乗ったわずかな硝煙のにおい。
ルーマの撃った弾が当たったのだ。
それを確認せずに、テレジーとショウタはさきほどまでフィオ達が立っていた場所に駆け寄る。
はっとして海のほうを見たら、落ちていく二人の影。
その体は海にのみこまれることなく、寸でのところで止まった。
浮いた彼女は目をつり上げて、口角をぐっとつり上げて、笑いながら言い放った。

「貴方達の顔、わすれないわん。
私たちの邪魔をするあの女も、貴方達も、みんなみんな、私が始末しちゃうんだからん！」

そんな捨て台詞を吐いたかと思うと、彼女が背を向ける海に大きな

魔法陣が現れた。
そして、二人の姿はその陣術に飲み込まれ、消えた。

「消えた・・・？」
「・・・余計なことを」

テレジーはがんっと縁をたたくと、ようやく後ろを振り返った。
ルーマは尻もちをついて、未だ拳銃を握った手を下していない。
そのそばにしゃがみこむクインと、フィオに一撃を与えた張本人に近寄る。
そして、ぎろりとにらみを利かせた。
ルーマも負けじと、テレジーをにらみ返した。
ショウタは二人の間に割り入ると、ちらりとルーマを見た後、テレジーに問いかけた。

「あの二人、何者か知ってるの？」

どれほどの時間、テレジーは黙っていたのだろうか。
でも、彼は喋った。
こんなに長く喋ったのを聞くのは、初めてかもしれない。

「・・・あの女の力を知っている。
実際にあの女に会ったことはない。だが、その力を使っている男を知っている。
その男は、あの女からそのまじないを借りたと言っていた。
・・・不思議な男だ。俺の想像を超える力を持っていた。
俺には今、俺の常識を超えるだけの魔力が必要だ。だから、あの女

の力を知る必要がある。
最初はただの変な奴らかと思った。偶然出会ったとはいえ思わぬ収穫だったんだがな・・・」

「あんな・・・あんな忌まわしい力・・・知ってどうするの」

ルーマが声を振り絞って言う。
二人はお互いににらみあっているが、ルーマはじりじりと燃えるような、テレジーは底冷えするような目をしている。
テレジーは静かに、ルーマに言った。

「名を奪われたらしいな。あの女を殺せば失くしたものが返ってくると思っているのなら、その考えを改めておけ。
覚悟のないものは魔術を行使しない。愉快犯だろうがなんだろうが、あの女は奪うという覚悟を持たなければ魔術を使うことはできない。
あの性格だ。戻す気もないだろう。
覆水盆に返らず。変わってしまったことは、失ったものは、そう簡単に取り戻すことはできない」

絶望だった。
それでも、ルーマは撃たざるを得なかった。
憎かった。すべてを失ってでもあの女を殺したくてたまらなかった。
実際殺すことは駄目だ。記憶の戻し方を聞かねばならない。
そうは思っていても、やはり憎い相手に対して向かう感情は残酷で、負のものだ。
それをあっさりと否定され、言葉も出ない。

そのとき、ぱしん、と乾いた音がした。

じんわり、と、テレジーの左頬が紅くなっていく。

テレジーの頬を殴ったのは、ルーマでもクインでもなく、ショウタだった。
空気が、止まった。
とげとげしさも、居心地の悪さも、そのすべてがなくなって、ただただ空気が固まった。
クインが、ルーマが、口を開けたままその光景を見ている。
そして、見られていることにようやく気付いたショウタは、

「うぉあ！」

奇声を発してテレジーから後ずさった。
なんだこの状況は、と言いたげなテレジーの口は、何かに気づいたらしく、別の言葉を発した。

「船が、加速している」

「・・・そう？」
「わかりませんよ？」
「・・・俺、機関室見てくるよ」
ショウタはそういうと、足早に船内に入っていった。
ちょうどいい言い訳だったと思う。なにはともあれあの場に居続けることはできない。

ショウタは自分のことをどちらかといえば冷静な方だと思っていた。
この歳で何を生意気かと思うが、ああやって体が先に動くなんてこと、そうそうあるわけではない。
普通の生活において、そんなことのほうが少ないのだろうけれど。
とにかく、ショウタは混乱していた。
テレジーがあの少年に言い放った言葉に、妙に心がざわついたのだ。

名を奪われるがどうとかこうとか言っていたが、そのことについてショウタはなんとなく知っていた。
こんな身の上だから、もしかしたら自分も名前を奪われている可能性が無きにしも非ずで調べたのだ。
だいぶ古いまじないで、非常に難しく難解なもので、今使える人間はほとんどいない、とか。
もしかしたら自分も名を奪われた故に、記憶喪失になっているのかもしれない。

だから、テレジーが彼に言った言葉は、自分に向けられているも同然のことだ。

それが、ただただ心をざわつかせてたまらなかった。息がつまりそうだった。
これから先、俺は自分が誰ともわからないままなのだろうか。
いや、そんなことはない。
”星の記憶”を手に入れて、俺は過去を手に入れる。
ゆるぎない決心は、たとえ得体のしれない人間たちに出会おうが変わらない。
ショウタは走りながらも息をなるべく深くゆっくり吸って、船内を走り抜けた。

ばたん、と機関室の扉をあけると同時に、がんっという固い音が響いた。
みるとそこには操舵輪がくるくると宙を回る絵。
「んな・・・っ」

「お、ショウタ」
ラルゴの右足が上がっている。どうやら彼が操舵輪を蹴飛ばしたらしい。苛立ったからといって蹴飛ばすことはないだろう蹴飛ばすことは。
そんなラルゴの粗暴な行為をみて、目を覚ました女は口をあんぐり開けて固まってしまっている。

「ショウタ、まじぃことになったんだが」
「もしかして、船が言うこと聞いてくれないとか？」
「御明察。勝手にどんどん速度が上がっていくんだよ。見てみろこの速度計」
そう言って中央に置いてある速度計を見ると、針は緩やかに右に向かって動いている。
そのそばにある、透明のカバーが掛かっているボタンを見ると、それはしっかり押されていてランプがついている。
自動操縦のボタンだ。
自動操縦状態とは、方位磁石と海図がコンピューターの中にインプットされていて、それによって正確に目的地に最適な速度で動くことができるためのシステムだ。
とはいっても、それは普段の大掛かりな操縦を楽にするにほかならず、刻一刻変わる天気における海の状況を見定め、航海の安全に努めるのが、熟練の航海士や船乗りの使命だ。
ショウタたちがこの部屋に来た時には、すでに船内の関係者は一人もいなかった。
あの二人に消されたのか、そんなことは今となってはわからない。

「なんで自動操縦なのに速度が上がってんの？」
「それが分かればこんなもん蹴飛ばさねぇよ」
「いや、わかろうがわからないだろうが蹴飛ばさないから」
「ねぇ、もしかしてこれって・・・」

暴走？

「いやぁああ！まだ死にたくない！
彼氏いない歴２０年！仕事初めてまだ１年！夢も希望もお金も手に入れてないっていうのにこんなところで溺死なんてぜったいにいやだぁああ！」

「落ち着いてよお姉さん。
どうしようか。とりあえず・・・」

ショウタは先ほどまでの心の乱れを無理やり落ち着かせると、辺りを再度確認する。
そして、透明カバーをあけると、自動操縦のボタンをオフにする。
今度は床に転がる操舵輪をラルゴに渡した。

「くっつけて」

「おうよ」

「何よ何よ・・・いったい何を始めるっていうの？」

がこん、と荒々しく取りつけられた操舵輪。
それをぐるんっとまわすと、ラルゴは操舵輪をしっかりと握った。

「つまり、こういうことだろ？ショウタ」

「まったく。こんなおっきいもの動かすのは初めてだよ」

女はひやり、と背中を汗が伝うのを感じた。
そして、恐る恐る二人に訪ねた。

「もしかして貴方達、この船を動かそうなんて考えているんじゃ・・・」

「「もちろんだけど？」」

11話　出発でオーライ

一番上、ではない甲板。
船尾に近く、ベンチに座れば船が通った軌跡が白く遠くまで青い海を左右に分断する光景がみられる。
今はどちらかというと、海は黒に近い色をしているのだが。

ユピは両足をだらりと前に投げ出し、ほとんどベンチから落ちそうな姿勢でぼんやりその白い線を見つめていた。

数分前、この船から二つの気配が消えた。
それはユピにとっての旧知の知り合いの二人だった。
この船で偶然を装ってその二人に遭遇した。ちょっとちょっかいを出してしまえば思わずうっかりミスって魔力が衝突して、スペルインパクトを起こしてしまった。
そう、３００人近い乗客のほとんどが感じた揺れを引き起こした張本人は、ユピと、消えた一人のフィオの仕業だった。
だが、実はその少し前にも、ユピはフィオ達にちょっかいを出している。それがきっかけだった。
彼女たちが狙っていた女性、ハイドラを逃がすために。

数時間前。
まじないの気配を感じて、ユピはちらり、と人ごみから離れていく女性を見つけた。
ハイドラだった。
彼女はふらふらとエントランスを抜けると、機関室に向かって歩い

て行った。
ユピは気配を消しながら、夢心地な彼女を追う。
なーんか、嫌な予感だな、と思ったらそれは的中する。
ハイドラは人気のないところに呼び出された。そして、呼び出した張本人は”数十年来”の知り合い。
フィオと、クリーマだった。

「（何してんだろう、あいつら。あの子に何か用なんかね）」

最近行動のおかしかった二人だから、ここで何かがつかめるかもしれない。
ユピはそう思って暫く黙って何をしだすか見ていた。
はっとしたハイドラは、辺りをきょろきょろと見渡している。
「わ、私なんでここに？」
人気もない場所にいることに不安になったのか、彼女はあわあわとうろたえる。
目の前に立つ二人組は見た目は普通だが、なんだか嫌な感じがする。

彼女は引き返そうとするが、体が動かない。
恐怖で顔を真っ白くして、じわりと脂汗をかいた。

「逃げちゃいやよん。仲良くしましょ。
とはいっても、貴方はすぐに死んじゃうんだけれどねん」
「な・・・で・・・」
「なんつーか、おねぇさんの名前とかどういう人なのかとかスリーサイズとかぶっちゃけどうでもいいんすよぉ」
「私たちにはね、目的があるのん。
そのために貴方にはこれから生きていてもらっちゃ困るのん。
とまぁ、ほかにも困る人はたぁっくさんいるんだけれど、たまたま居合わせちゃった貴方を狙うことにするわん。

貴方弱そうだし」
「う・・・ぐ・・・」

ぎぎぎ、と体が鳴りそうなほど、ハイドラは力を込めて足を動かそうとしたが、それは叶わなかった。
目がうるんできて、恐怖でがちがちと歯を鳴らす。
ユピはふむ、と顎に手を当てて、考えた。
もともと愉快犯的なところがある二人だが、誰かを狙って、しかも計画的に将来のことを考えて行動するなんて姿、

「（２０年ぶりぐらいに見たかも）」

なんて、気楽なことを考えるのはやめて、
ユピは彼女が殺されればあの二人にとってとても状況がいいことを裏返して考える。
それはつまり、ろくでもないことに違いないだろう。
だったら、いまこの場でそれを止めてあげるのが、世のため人のため。
いや、それは便宜上に過ぎない。何より、自分のため。

それからなんだかんだあって、

取り込み中のところ立ち入って、彼女を逃がして、ちょっと彼女にまじないをかけてやった。
安全が確保できるところまで逃げることができる、というまじない。
どうやら一等客室のほうに外から侵入したらしい。まじないをかけ

られた体は恐るべきパワーを発揮した。
そして、侵入した部屋がまさかテレジーの部屋だとは、おもしろいこともあるものだ、と思う。

ユピは煙草を吸い終わると、立ち上がり、安全のために備え付けられた柵に座った。
海のほうを背にして。
二人がこの船からいなくなってしまったのなら、ユピはここにいる必要が半分は無くなった。
このままこの豪華客船の旅を悠々と満喫するのもよかったが、そんなことをしていたらいつかテレジーに見つかる。
彼にはまだまだこれから頑張ってもらわなければならない。

「さて、これからどこに行こうかな」

もう旅の小さな小さな同行者はいないのだから、それを呟くこと自体に意味はない。
ユピはゆっくりと体重を後ろにむけて、天を仰いで。
そして、船上から姿を消した。

一方、機関室。

「お姉さんはそこの画面を見ててね。
そこに白い点みたいなのあるでしょう。それ、障害物だから。当たったら乗客の命はないと思って」
「責任重大じゃないの！」
「変なものが近付いてきたり、この線の中に反応が見えたら、お姉

さんが放っておいてもぴこぴこ音が鳴るはずだから。
でもまぁ一応それをみて、何かあったらすぐ知らせて」
「わ、わかった・・・」
「ラルゴはこのまま北西に針路を取ったままでお願い。
まだまだグライナーまでは距離があるのが幸いだよ。そのうちに俺は」
「そこらへんいじるんだろ？」
「しかないよね」
「こ、こんなアナログな操作、とうの２００年前なら普通だったのかもしれないわ・・・でも」
「そう、今は現代。
中途半端にオートメーション化されたこの船をどこまで動かせるのか不安だな」

コンパスと地図と、レーダーで大体の位置をみながら、ラルゴはショウタに話しかけた。
ショウタは二人に簡単な操舵を任せた後、機械をいじって操舵するうえで足りない機能だけを復活させる。
速度を落とすためにはどうしたらいいんだろ、と、ショウタは繋がっているパソコンを打ちながら考える。
そして出てきた文字列を見て考えて、それでまた打つ、ということを同時並行に行いながら、異常のある箇所を捜そうとする。
ハイドラは集中してしまったショウタではなく、後ろでのんきに舵を握るラルゴに問いかけた。

「ねぇ、この子って何者？」
「考古学者さ。この道たった2年の」
「・・・考古学者って、こういうことできるの？」
「んなわけないだろ」

不安だ、不安すぎる。
ハイドラはレーダーの画面だけをじっと見ている。
なんで私がこんなことをしているのだろう、とその問いは未だに答えが出ない。
ここ数時間のうちに、平凡だった２０年間が終わりを告げたような気がしてしまう。
とはいってももう時間は相当経っていて、すべてが遠い遠い過去のような気がしてしまう。

・・・私は無事にグライナーに到着できるのかしら。

「おっ！」
「なんだよ」
「何何何！？」
「間違っちゃった」
「・・・」
「・・・」
「ごめん、速度上がった」

がくんと船体が揺れる。
雲の流れが速くなったのは、天気が悪いわけではない。
速度計は今までわずかな動きだったが、今はしっかりとその変化を見極められる。
まずったなぁ、とショウタは頭をかくが、そこまで焦ることはしない。
とうとうハイドラはポケットからお菓子の油がしっかりこびりついたメモに何か文字を書き始める。
それに気づいたラルゴが問うと、ハイドラは顔を真っ白にして言った。

「遺書、書いてるの。田舎にいるパパとママに」
「その歳でパパママかよ」
「私のことをかわいがって育ててくれてありがとう。下っ端中の下っ端として今後の希望に満ちた展望を夢に見、描いていた仕事の途中、私は不幸な事故に見舞われてこの世を去ることとなります」
「ははっ。芸術性のかけらもない遺書だな」
「貴方は怖くないの！？」
「別に」
ラルゴはそういうと、目線を画面に集中させているショウタの方に向ける。
「俺、あいつ信じてるし」
きっぱりと言い放つ。
そう言われた本人はラルゴの声など今は耳に入っていないが。
ハイドラは小さくうえっとうめき声を上げると、めでたいわね、とだけ言った。

速度が上がって暫くして、ショウタはひとつ成果を上げた。
傍にあったインカムを拾い、喋りだした。

「あ、もしもし、管制塔ですか？
こちらコアッダ国発グライナー国行きの客船”シェリーン”です。
自分は乗組員ではないのですが、訳あって今この船を動かしています。
はい、はい、そうです。今受送信機の切れていた回線を戻したんです。
こっちは現在少しずつ速度が上がってしまっているんです。そちらから遠隔操作ってできますか？
はい、・・・はい、ありがとうございます。
こちらでも少し調べてみます。はい、回線は入れておきます。お願

いします」
「すごい・・・」
思わずハイドラはため息をついた。
どうにかこれで管制塔と連絡がつくことになった。
「電波が妨害されていて”シェリーン”と管制塔がつながらなかったけれど、とにかくこれで安心だね。
さて、問題はどうして少しずつ速度が上がっているかなんだけれど」

「まさかこの船ごと全員どっかーんとか」
「うぎゅぉお！やめてよぉおお！」
「うーん、あの二人のせいだよねぇ。今いない悪い人たち。
でもま、結構速度は上がっちゃっているけれど、まだまだグライナーまでは時間があるから大丈夫でしょう」
ショウタはそういうと、再度画面上を上に流れていく文字列を追う。

ぼんやり、と時間が流れていくその時、ハイドラが目の前の画面に気づく。
レーダーに何かが映っている。
上から白いものが広がっていく。
でも、音が鳴らない。障害物なら船とか岩だろう。それにしては大きすぎる。
というか、画面に入りきらない。
まるで上から絵具がだらり、と広がっていくような感じだ。

「君ー、えっと、ショウタ君？」
「・・・・・・・・はい？」
「なんか映ってるのだけど」
「え？」
「何が見えてんだ？」
「白くてもやーっとした・・・」

ショウタとラルゴは機関室の窓から見える風景を肉眼で確認した。
暗くてよく見えない。だからレーダーに頼っていた。
結果として、それがよくなかった。

「ラルゴ、君の素晴らしい視力であの奥に見えるものを言い当てて」

「ん・・・あれは・・・
島だな」
「島かぁ」
「そっか。島だったのね」
「はっきりしてよかったな」
「よかったぁ」
「うん、よかったわ」

・・・。

途端、機関室が絶叫で包まれたのは言うまでもない。

ひとしきり叫んだあと、ショウタはだだだだ、とパソコンを叩く。
そして、管制塔と何度も何度も連絡を取り合った。
ラルゴも思いっきり舵をぐるぐる回すが、島を避けられる速度ではない。
これ以上回せば事故を引き起こしかねない。
果たして乗客はこの異常事態に気づいているのだろうか。わからない。
２０分、せめて１５分早くこの島の接近に気づいていれば、と、過

ぎたることを悔やむしかない。

「・・・とりあえず全力で助けてくれって訴えたけれど・・・」

「船、とまんねぇな。

ねぇちゃん、俺も遺書書こうと思うよ。ねぇちゃん？」

「お姉さんならここにいるよ」

目線は画面を見たまま、ショウタは足元を指さしながら言った。

ショウタの足元に、がくがく震えて縮こまっているハイドラがいた。

人は確定した死の前で、こうしてただただ恐怖し、絶望することしかできないかもしれない。人にもよるが、ハイドラはそういう人らしい。

だが、ショウタはそんなことをしている暇があればとにかく普及作業に取り掛かるのが先決だと考える。

これだけの速度で急に止まったら何が起こるか、力学に詳しくないショウタには想像がしづらい。

でも止まるもしくはそろそろ減速しないと確実に大事故を引き起こす。

魔術系に頼るのがいいのだろうか。でもそれならこの船に乗っている人間全員の力が必要になるが、そんな時間はない。

いよいよ手づめになってきて、ショウタもじわりと焦り、そして苛立ちが体を這いあがる気がした。

何か打開策はないのか。

「ショウタ、焦るなよ。いざって時は乗客にゃちょっと肝を冷やしてもらうしかないぜ。

死ぬよかましだってね」

そう言ってぎりぎりのところまで舵を回してラルゴが言う。

決断するなら早い方がいい。島に近づきすぎれば曲がる角度が強くなってしまう。

どうしたら、どうしたらいいのだろう。

そのとき、

「キュウ！」
「んわぁ！？」
「なんだ？」
「ぶきゃぉう！」

突如現れた小動物。ウルルだ。
ウルルは出会ったときと同じようにすばしこくショウタの体を走り回ると、飛んだ。
文字どおり、ぴょーんと飛んだのだ。
ショウタがあっといって手を伸ばしても、遅かった。
ウルルは目の前のパソコンのキーボードの上にがんっと飛び乗った。

そして、縦横無尽に走り回ったのだ。
言葉も出ない。というか、動けない。
ショウタも、ラルゴも、ハイドラも、すべてが終わった、と思った。

そのとき、船ががくんがくん、と動いた。
次に、見たこともない画面がどんどん開いていく。
ショウタはそれを慌てて追う。
そして、がくがくん、と数回揺れた後、速度計は緩やかに左に針を動かし、
不気味なほど穏やかに船は停止した。
それも、島の岸壁にぶつかるほんの手前で。
あと5分遅かったらばらばらになっていただろう。
もう肉眼でしっかりとその岩肌が確認できる。
あんなのにぶつかっていたら、と思うと、そして、無事その最悪の

事態が避けられたことに、ショウタは安堵のあまりへなへな、と床にしゃがみこんだ。

「うそ・・・うそよね・・・？
こんなマンガみたいなこと・・・」
「現実だよ、お姉さん。少なくても海に放り出されずに済んだみたい」
「はぁー・・・やっぱお前といるとなーんか助かっちゃうんだよな」

「御守りみたいに言わないでよ」
「よ、よ、よかったぁ・・・よかっだよぉぉお・・・」
「うわっ、涙と鼻水ひどっ」

とかく、最悪の事態を回避することができた豪華客船”シェリーン”は、
誰もが想像をしなかったモノの介入によって救われたのだった。
そんな命の恩人はショウタたちのこの数時間の苦労を全く気にすることもなく、床でちょこまかちょこまかと走り回っていた。
こんなにも穏やかに事態が収束するなんて。
なんだか拍子抜けになりながらも、やっと張りつめた気が緩んで、ショウタたち三人は大きく大きく、声を出してため息をついた。

12話　仲良しこよしとは程遠い

そして。

”シェリーン”が停止した場所の近くを航海していたグライナー国の軍艦によって、乗客全員が救助された。

後々聞いた話だが、シェリーンの客室乗務員は全員船底倉庫に閉じ込められていたらしい。

彼らはどうしてそこにいたのか覚えていなかったというが、おそらくハイドラがかかったまじないと同じ原理だろう。

乗客たちは3隻に分かれた。グライナー国の港、コーラルに到着したのはそれからおよそ2日後。

港は彼らを迎え入れる予定だった人々と、情報屋や軍関係者など、とかく人で埋め尽くされていた。

予定到着日を半日遅らせて、乗客たちはグライナー国に降り立った。

揺れない足元に、久しぶりの安堵を感じる。

「まいったなぁ。クインたちどこにいるんだろう」

きょろきょろと、ショウタは辺りを見渡しながら仲間を捜した。

クイン、テレジーとは船が別だったので、結局あの後甲板で別れたっきりになってしまっているのだ。

早めに見つけてジャスリーンに向かわなくては。

管制塔の職員たちから逃げたショウタたち。

いわば乗客の救世主だが、事細かに説明するのは正直めんどくさいしそんな時間はもったいないと判断し、管制塔には名前を告げていないし、もちろん顔もばれていないので無視することにした。

別に英雄になりたいわけではないからだ。

「貴方達には本当に助かっちゃった。
ここにいること自体、なんだか奇跡みたい」

ここ数日ですっかりげっそりやつれたハイドラはそれでも笑顔でショウタとラルゴに感謝を述べた。
ストレスから解放された彼女の表情は眩しいほどだ。

「よくわかんないけれど、なんか色々なことに巻き込まれちゃったみたいだよね、お姉さん。
テレジーと一緒にいたみたいだけれど、会わなくていいの？」
「グライナーに着くのが遅くなっちゃったから、知り合い待たせてるの。急がなくちゃ。
名残惜しいけれど、またいつか会おうね！これ、私の私回線番号だからお近づきのしるしに持っといて。
あ、そうだそうだ。テレジー君に会うならぜひぜひ伝えてほしいことがあるの！」

ハイドラはそういうと、目をキラキラと輝かせて二人を見た。
なんか面倒そうだ、と思いながらもショウタは彼女の言い分を聞いておこうと思った。
彼女はすぅ、と深呼吸をした後、手を組んで上目遣いで、これまたキラキラした声で言った。

「テレジー君、貴方がいなかったら今頃私は海の中で泡となって消えるところだった。
でも、貴方が私を助けてくれたおかげで、私は自らの足で再び大地を踏みしめることができたわ。
私、貴方を絶対忘れない。だから貴方も私を忘れないでね！」

ショウタとラルゴはコメントもできず、言い切ったことで大満足し

てしまったハイドラを遠い目で見た。
どうやら彼女、テレジーに気があるらしい。
彼らが機関室に現れるまでの間、おそらく彼女を守ったのはテレジーだろう。
残念なことに、彼女が気を失っている間に彼はハイドラを気遣うことなくさっさと目標を追いかけて行ったのだが、そのことは伏せておいた方がいいだろう。
ハイドラの中では船が暴走しているときの記憶は薄らいでいるらしい。
ショウタたちにその熱烈な想いが向けられなかっただけ良しとするか。
唖然としたままのショウタとラルゴを放って、彼女は大きく手を振ってその場を去っていった。

嵐が去った。

ショウタとラルゴは、そう強く思った。

こうして、ハイドラと別れた後、はたとショウタはあることを思い出す。
「・・・お姉さんの名前聞き忘れた」
「・・・別にいいんじゃね？あいつに言えばわかるだろ」
「そうだけどさ」
「キュウキュウ！」
ふと、ウルルはショウタの肩から飛び降りると、人ごみの中を駆け抜けて行った。
「あぁっ！待ってよ！」
ショウタたちは慌てて小さな彼（彼女かもしれない・・・）を追いかける。
放っておけばいいのに、なんかもう自分のペットのような扱いだ。

ショウタとラルゴがウルルを追いかけて暫くして、それは最初にショウタにしたように、テレジーの体を這いまわっていた。
港の隅にいたのは、テレジーとクイン、そして、甲板で出会った少年だった。

「テレジー！クイン！」
「ショウタさん、ラルゴさん」
「おい、なんだこれは」
がしっとウルルを捕まえると、テレジーはギュウ、とつぶれた鳴き声をしたそれをショウタの目の前に突き出した。
「お、俺のじゃなくて・・・
でも、なんか俺たちに付いてきちゃったんだよ」
「そうだぜ。こいつがいたおかげであの時俺たちが機関室に行くことができたんだからよぉ。とりあえず感謝しとけって」
「何のことだ」

話をすると、こうだ。
スペルインパクトの直後。
ユピと別れたショウタとラルゴは一旦テレジーの部屋に向かった。
だが、そこから反応はなかった。
どこへ行ったのかと思った時、ユピのペットであるウルルが現れて、機関室に彼らを案内した。
さらに、操舵の効かなくなった”シェリーン”を止めたのもこのウルルのおかげであったと説明すると、
クインと少年はへー・・・と感心した。
説明する上で面倒くさいのでユピの名は出さず、変なおじさんとだけ言った。
だが、ウルルはその変なおじさんのところに戻ろうとせず、ずっとショウタの傍に居続けている。
仲間になる、ということだろうか。彼（彼女かもしれない・・・）

が喋れればいいのだが。
とにかくついてきてしまった手前、どうすることもできないから今はショウタが飼い主扱いだ。

「待て」
ショウタたちの話を聞いて、なおテレジーは彼らに食い下がった。
「俺とこれが会ったのは今が初めてだ。
どうしてこの生き物は俺の行方を二度も当てるんだ？」
「あ・・・」
「そういえば」
「キュウ！」

謎の生き物、ウルルは全員からの疑惑の目を受けながら、ルーマにだっこされてご機嫌そうな声を上げた。気楽なものだ。

そういえば、彼は一体どうすべきだろう。
ルーマは次に自分に目線を向けられていることに気づくと、人懐こい笑顔で自己紹介した。

「改めて、はじめまして。
僕はルーマ・ミッドロア。あの変な二人組の被害者っていうか・・・」
「あぁ・・・あのとき甲板でなんとなく聞いたよね。あのさ、」
ショウタはほかの人の方を見ることなく、まっすぐぴっと立って、
ショウタはハッキリとルーマに言った。
「来ない？一緒に。これからの予定がなければの話だけど」
「へ？」
「え？」
「・・・」
「ええっ？」

声を上げたのはルーマだけでなく、ラルゴと、クインもそうだった。

ルーマはその申し出に驚いたが、ラルゴとクインはショウタのその行動に驚いた。

ルーマが望むのなら旅に同行させるという強めの意志を感じた。

そこまでしたい理由は、ラルゴ以外は分かっている。

甲板でテレジーが言ったこと、まだショウタは不服らしい。

ぽかんと口を開けたままのルーマを放って、ショウタはテレジーの前に立った。

そして、まるで宣戦布告するような勢いで言い放った。

また殴るのか、と思ったが、彼は手を上げず、ちょっと口をとがらせながら豪語した。

「”星の記憶”はなんだって叶えてくれるんだから、見つける努力さえすればなんだってできる」

「なんで俺に言う」

「失ったものが返ってこないなんて、俺は思わないからね」

「・・・そうか。それは俺に許可を取ることか？」

「ふ、ふふん。

”星の記憶”を手に入れたらー俺だってぇールーマと同じように記憶取り戻すもーん」

「気色悪い言い方をするな。癇に障る」

ラルゴはクインとルーマに何があったのかを聞く。

甲板で起こったことを聞くと、なるほどねぇと納得した。

テレジーには悪気がなかっただろうが、それはショウタに取って死活問題だったのだろう。

なにはともあれ。

どうやらルーマを連れていくことは決定になっているらしい。

そして、総勢５人になった旅の同行者を見て、ラルゴはぽつりとつ

ぶやいた。

「でもよぉ。俺たちってなんか、仲間って感じじゃないよな」

ぴたり、と時が止まった。

当然だとテレジーが口を開く寸でのところで、ルーマが彼の口をふさいで叫んだ。

「僕、こんなたくさんの人と旅をするなんて新鮮で楽しいと思う！わくわくするよね！うわー、たのしみー！話はクインから聞いてるから大丈夫だよ！よろしくね！よろしくね！よーしがんばろうー！」

なんとなくルーマの必死さが伝わって、ショウタたち一行は多くを語らず、とりあえず駅に向かうことにした。

向かう先はまず、グライナー国王都のトレンウェイ。

その後ジャスリーン国に向かう。

同時刻。

大陸変わってダニア国。

王都グーズの”とある場所”に、フィオとクリーマはいた。

目的は目の前の女性に文句を言うため。

「あら、お坊ちゃんはどこかしらん？」

「どこか遠くへ行きましたわ」

「セラーちゃん興味ないのん？」

「わたくしに手を出す権限はありませんので」

塵ひとつ落ちていない、手入れの行き届いた部屋。
華奢な持ち手のティーカップに口をつけたフィオは、目の前に座る女性、セラーににこやかに話しかけている。
数日前、ルーマに撃たれたことなど彼女はとうの昔に忘れているようだった。
カップを置いて、両肘をテーブルについて、上目遣いでセラーを見た。

「そうそう、今日来た目的だけどねん。
セラーちゃん、こうなることわかっていたんでしょ？」
「・・・さぁ、どうでしょうか」
「とぼけないでちょうだいん。
先視の力で”シェリーン”に乗るのを勧めて、エルデナの社員の女について喋ったのは貴方よん？
貴方ならユピが私たちを妨害しにくるってわかっていたんじゃなくてん？」

セラーは一口紅茶を飲み、イエスともノーとも言わない。
次に口を開いたのは、フィオの同行者、クリーマだった。
口をとがらせ、右手を顎にあててまるで考えている風なポーズを取って。

「なんつうかぁ、セラーさんの言ったことちょっと考えてみたんすけどぉ、
本当にあのエルデナの女って俺らの敵になっちゃったりするんすか？
あーんなに何にも出来ないびびりっちが？」

クリーマの言ったことにはフィオも同意しているらしく、目でセラーに問う。
さらり、と金髪が肩から落ちて、セラーは碧い瞳を二人に向けた。
まったく感情のない、人間味のある目ではなかった。
今に始まったことではなく、彼女は二人が出会ったときからこういう人なのだ。
にこりともしない、かと思えば泣きも怒りもしないのが、彼女だ。
セラーはカップをソーサーに置くと、淡々と語った。

「すべては何百年も前から決まっていることですから。
わたくしたち先視はその決まっている道筋をちょっとだけのぞき見ることができる存在にして、それを遂行する義務があるだけ。
放っておいても勝手に進む未来を、無駄なく理路整然と交通整理をしているだけに過ぎませんわ。
わたくしと、ユピと、ソンダクと、ほかにも数人」
「つまり、私たちはみーんなみーんな知ってるんだから余計な心配や口出しをしないでちょうだいって言いたいのねん？」
「そこまで言っていませんわ」
「ふふ・・・いいわん。
貴方はユピと違って敵でもなければ味方でもない。
でもいつか貴方だってわかるはずだわん。だって貴方はかしこいもの。
私たちについて行けば、貴方だって幸せになれるのよん。忘れないでちょうだいねん。
さてと、クリーマ、行きましょう」
「え、もう行くんすか？
このソファまじたまらないっすよ。セラーさんいいなぁ毎日こんなふっかふかに座れて・・・」
「いいから行くわよん」

くーっとお茶を飲み干したフィオはクリーマのストールをぐいぐいと掴んで部屋を出て行った。

部屋に残されたセラーは、一人フィオの捨て台詞を思いかえす。
まるで怪しい宗教勧誘のようなそれ。
でも彼らはいたって本気なのだ。
しかし、どの宗教においても信者は真面目なのだ。それをバカにすることは彼女もさすがにしない。
ただ、行きつく場所が本当に幸せなのか。
そもそも、セラーは幸せとは何か分からない。
いや、彼女は自分の望む幸せが分からなくなっているだけだ。
何がしたい、これがしたい、こうなりたい、ああなりたいと願ったのはいったいいつまでのことだったのか。
彼女はこの建物からは出られない。
力を持っていても、彼女は願いを叶えられない。
何かが変わっても変わらなくても、もう願うこともできない。
ただ、時間だけはすべての者に平等に流れていく。
何をしても、しなくても。それは人にとっては残酷かもしれない。
彼女はただ静かに、座ったまま窓の外を見た。
はっとするほどの、青空がそこにあった。

13話　背後から迫る手

ドドニア大陸。
ジャスリーン行きの列車にどうにかこうにか乗ることのできた一行はコンパートメントでお菓子を広げて居心地がいいとは言い難い椅子に座っていた。
今までのいきさつや個人のことをぽつぽつと喋る程度で、何か盛り上がりには欠けたが、
とりあえず寄せ集めパーティにしては少しだけ打ち解けることに成功した、らしい。

「そうそう、テレジーが助けたお姉さんから伝言を預かっているよ」
先ほどの火花を散らすようなぎすぎすはとうの昔に解消して、ショウタは普通にテレジーに話しかけた。
面識のないルーマとクインはお姉さんって誰かと思うが、テレジーの顔を見て、なんとなくどういう人なのか察しがついた。
「・・・・・・・・・・・・なんだ？」
その沈黙は聞くか聞かないか迷った時間だろう。
ショウタはちらり、と横目でラルゴに合図を送った。
ラルゴはすぅ、と深呼吸をすると、目をキラキラさせて、声を高くして、こう言い放った。
おまけに手を組んで、長身をかがめてわざと上目遣いにしてテレジーを見ながら、だ。

「テレジー君、貴方がいなかったら今頃私は海の中で泡となって消えるところだった。
でも、貴方が私を助けてくれたおかげで、私は自らの足で再び大地を踏みしめることができたわ。

私、貴方を絶対忘れない。だから貴方も私を忘れないでね！っていてぇでえぇえ！」

ラルゴの目の前に座っていたテレジーは思いっきりラルゴの足を踏みつけた。

無理もない、とあきれ顔のクインと、大爆笑しているルーマとショウタ。

なんとも熱烈なラブコールだ。

「っ・・・ははっ・・・面白い人だねぇ」

「・・・」

「テレジーさんは命の恩人なんですね」

「その後俺たちもお姉さんと一緒にいたのに、すっかり印象には残らなかったみたいだよ」

「いいんだよ。お前、あんな変なのの印象に残りたかったのかよ」

「それは・・・遠慮しておくよ」

列車を乗り継ぎ、時折宿に宿泊して、ようやくジャスリーン国、王都コラーレに到着した。

ジャスリーン国はドドニア大陸北東部に位置する小国だ。

もとはドドニア大陸一の大国、タスニアキード国の一部だったが、１００年前に独立をした。

とはいっても、軍や通貨、物資のほとんどをタスニアキードと共有している。

独立した理由は文化の相違。これから国際社会でどのように活躍していくか期待されている国家だ。

王都コラーレから列車で2時間かけて行き着いた場所は、今は使われていない坑道だった。
無人駅を下り、山肌にいくつも開けられた穴のあるその町は、人気は少ない。
とっくに鉱山物質を取りつくした後であり、駅の近くにあった店の多くはシャッターを下ろしてしまっている。
一応国が管理しているらしく、まったくの無人の町、というわけではなさそうだ。
炭鉱関係者はいなくなったが、もともと住んでいる人々が細々と生活を続けており、坑道は子供たちの遊び場になっているようだ。

「よくこんな場所見つけたね」
「ジャスリーンがタスニアキードの一部だったってのを思い出してな。
タスニアキードも古くからある国だから、もしかしたらこの国にも何か残ってるんじゃないかとね。
んで調べてみたら、この山が当たった」
「文字通り山勘だね！」
「・・・なんだか、違うと思いますよ」
「こらそこテレジー！勝手に入んないで！」
「・・・」

相変わらず足並みのそろわない一行だが、ようやく目的地に到着した。
思えばコアッダ国を出てから相当時間がかかった。
ショウタは長旅の疲れよりも、今また自分の目的に近づいたことに対して喜びを感じていた。
ラルゴが言う、その碑文の条件をそろえてやってきたのだ。
何か進展があるといいのだが。

中に入ると、昼間だというのに光が全く入らない暗闇だった。
奥から冷たい風が吹き抜けてくるから、どこかに通じているのだろうが、それはここからはわからない。
天井には豆電球がいくつかくっついているが、大分前から使われている気配はなかった。
「テレジー、何か出来ない？」
ルーマがテレジーにねだる。
彼は暫く考えた後、パチンと指を鳴らした。
すると、使われていなかった豆電球が暖かな光をともした。
「ほんと、便利だねぇ魔術って」
ほう、とラルゴが感心する。
「お前たちはまったく魔術を使えないのか？」
テレジーが尋ねると、一同口ごもる。
「お、俺は・・・魔術の使い方忘れているのかもしれないし・・・」

「僕も・・・！まぁ、多少は・・・」
「俺は魔術の勉強よりも体動かしている方が・・・得意だったし・・・今の職業においてその選択は間違ってないぜ！」
「わ、私も・・・医者ですから！どっちかというとそっちの方にかかりきりというか」
「・・・」
彼らはテレジーから冷めた目を向けられたが、気にせず中に進んでいく。

ラルゴを先頭に、どんどん中に入っていく。
風がなんとなく、強くなっていく気がする。
「おかしいな、前来た時こんなに風吹いていたっけ？」
ラルゴが頭を掻きながら、道間違えたかなぁとメモを見ながらつぶやいた。
一旦足を止め、現状をもう一度確認する。

ルーマは落ちている石が気に入ったのか、どんどんポケットに入れていく。彼のポケットもニッチだから、彼が満足するまで石を入れることができる。
クインとテレジーは黙って座ったまま、ショウタは辺りをうろちょろうろちょろしていた。
道が右、左、まっすぐ。さて、どちらへ進むべきか。
ラルゴのメモでは右に曲がるのだが、右の道からは風が強く吹き抜けてきている。

「テレジー、魔術が使える人ってある程度、魔力の気配とかって感じるの？」
「何だいきなり」
「いや、なんだか不自然だなぁって。
ラルゴ、その碑文があった場所って坑道の外じゃないよね」
「中だ。奥に一応部屋みたいに整備されている場所があってな。
この町の奴に聞いたら、坑道を掘ったときに碑文の安置されている空間が出てきて、その当時はまだ何が何だかわからなかったからとりあえず安置しているらしい」
「てことは、行き止まりなんでしょ？
なんで目的の場所に向かっているのに風が？」

ショウタの発言をしばらく反芻したのち、テレジーは立ち上がると、眉をひそめて言った。
「出るぞ」
「え？」
「どうしたんですか？」
何事かと騒然とするが、テレジーはそれを無視してきた道を引き返そうとした。
「まって、どうしたの？」

ショウタがテレジーの手を握った。
その手は恐ろしいほどひんやりと冷たかった。
ふわり、とテレジーを中心に冷気が体を覆う。
しかしそれはすぐに収まり、彼の手に体温が戻ってきたと同時に、
テレジーはショウタの方を振り返る。
どうしてもっと早く気付かなかったのか、と後悔が支配する中、
テレジーは行動を共にする４人と一匹の顔を見た。

・・・つかまるわけにはいかない。殺されるわけにはいかない。他人を巻き込むわけにはいかない。
願いをかなえるために。

言葉が少なく、誰かに積極的に話しかけるわけではないテレジーがショウタのほうをじっと見ている。
ショウタはそこから、テレジーが何かをいいたのだと汲み取る。
紅い目を見て、そして、ショウタは尋ねた。
「もしかして、あの人？」
「・・・」
ショウタの問いに、テレジーは否定しない。
ラルゴたちがなんだなんだ？と寄ってきたその時、
突風とも言えるほどの強風が奥から吹き付けてきた。
息が詰まる。目が開けられない。
風がやんで、うすらと目をあけると、握っていたテレジーの手が震えていることに気づいた。
彼の顔を見るが、手のふるえとは正反対にまっすぐな瞳に恐怖はなく、ただ入口のほうを射抜くように見ていた。
ラルゴが剣を抜き、ルーマもホルスターに手を添えた。
ウルルは毛を逆立てて威嚇している。
ショウタはゆっくりと全員が見ている方を見た。

そこにいたのは、ショウタの町で騒ぎを起こした張本人。
黒髪の青年だった。

時間は少しばかり巻き戻り、場所もグライナー国に戻る。
人気の少ないレストランの角っこの席で、ハイドラはグラスに入った飲み物のマドラーをいじりながら、ため息をついた。
思い返すのは、船での惨事。
凄惨な出来事だったが、一つ良いこともあった。
自分を助けてくれた青年の存在だった。
あの時は必死でめちゃくちゃだったが、思い返せば思い返すだけだんだん彼に対する気持ちが芽生えてくる。
口と態度はあんまりよくなかった気がするが、見た目はハイドラの好みだし、何より強くて、私を守ってくれた。
過去の記憶はたとえ自分の体験だろうが少しずつ形を変えてしまう。

ハイドラの中でも、多少テレジーのイメージが都合よく変わっているのだが、彼女はもちろん気付かない。

「そろそろ話を始めてもいいか？ハイドラ・ウォーン」
「・・・っ！すみません！」

ハイドラは慌てて姿勢をただすと、目の前でため息をついた男のほうを見た。
ウェーブのかかった茶髪を耳の上で一つにまとめ上げた、涼しげな顔をした若い男だった。
ロングコートを着て、襟にはリボンタイを締めている、きっちりきっかりとした身なりだ。

対してその男の隣に座るのは別の男。
紺青色の襟足の長い髪の毛。服装はなぜか用務員のようなつなぎ。
切れ長の目を細めてハイドラに向かって笑っている。

「なにニヤニヤしてんのハイドラ」
「うるさいよ、オーレン。ていうかなんであんたもいるのよ」
「俺もドゥドゥーさんに呼ばれたの。そういうあんたこそなんでここにいんの」
「だから、私も呼ばれたんだから。あーもう、二度とあんたとは仕事したくないって思っていたのに」
「・・・それ一応の上司に向かって言うことかよ？」
「歳は離れてるけれど、たった2期上じゃない」
「社会人ってのは一分一秒でも早く入った奴は先輩！敬意示せよ。だからお前部署内で浮いてるんだよ」
「そんなことない！」
「うるさい！」

ドゥドゥーと呼ばれた茶髪の男が一喝すると、ハイドラと、オーレンと呼ばれたつなぎの男は黙った。
いくら人気がなくても、わずかにいた客がそちらの方をちらちら見ている。

「まったくお前らはその歳になってもどうしてそう落ち着きがない」
「若いって言ってくれよ」
「黙れ。
さて、ハイドラ・ウォーン。ただの一営業人であり少々問題児であるお前を俺が特別に呼びだしたのには理由がある」
「わ、私って問題児だったんですか・・・！？」
「今後お前は生物研究開発部署に異動してもらう」

ハイドラは思わず口を開けたまま黙った。
そんな部署、聞いたことない。
だが、そもそも目の前の上司、ドゥドゥー・ルージュ、彼は一体どこの部署だっただろうか。
入社式の時、中高年の上層部に混じって座っていたのを見たことがある。
あまりの若さにこの会社も実力があるもののしあがるのかぁと思ったぐらいだ。
そんな若手エリートが今目の前にいる。
そして、自分によくわかんない部署に異動しろと言ってきた。
あれ？普通異動ってもっと時間が経ってからじゃなかったか？
そもそも問題児が異動ってことは左遷ってことか？てことはこの部署は相当やばいところなのでは？
ぐるぐると廻る思考を押さえつけて、ハイドラは小さく手を挙げて質問をした。

「あの、ルージュさん、その、生物研究開発部署って、何をするところでしょうか」
「はーい、はいはい。俺もそれ知りたいです」
「え？どういうこと？」
「俺も異動命令なんだよ。その部署に」
「でぶぇせぇえ！なんであんたと同じ部署に異動なのよ！」
「・・・説明していいか？」

放っておけば言いあいを始めてしまう二人に呆れながら、ドゥドゥーは話に入る。
性格的にはどちらも引けを取らず問題のあるハイドラとオーレンだが、ドゥドゥーはこの異動になんの異論もない。
彼に命じた人の意見を最大に尊重しているから。

ドゥドゥーはお茶を一口飲んだ後、ちょっと驚くことを言った。

「まず、お前ら二人にはこの人間を捕まえてほしい。
傷をつけるな。絶対に」

そう言ってテーブルに出したのは、二枚の写真。
人攫い!?とぎょっとしたハイドラは、二度驚くことになる。
「て、テレジー君!?」
写真の片方を手に取ると、ハイドラはドゥドゥーに確認を取った。
ドゥドゥーは名前に関しては何も言わなかったが、とかくこの二人を捕まえてこいというのだ。
「そっちの茶髪には協力者をつけている。
もし必要があるならそいつからの情報をお前たちに渡してやってもいい」
そういってまた新しい写真を取り出す。
それがドゥドゥーの協力者であり、テレジーの傍にいるというのだが・・・
「く、クインじゃないの!?」
さらにハイドラが叫ぶ。
声は大分押さえてはいるが、とても冷静とはいえない。
「なんだよさっきから。何?どっちもお前の知り合い?」
オーレンが尋ねると、ハイドラは二枚の写真を握りしめながら、言った。
ふるふると震えて、今にも写真を破りそうな勢いだ。
「テレジー君は、殺されそうになった私を助けてくれたんです。
命の恩人です。そんでもって・・・私が好きな人なんです!」
「その部分はいらないだろう」
「クインは、彼女は・・・私の同級生で、友達です」
その告白に、ドゥドゥーはなるほど、と一言。
オーレンはハイドラとは正反対で、少女にも茶髪の青年にも興味を

示さなかった。
逆に、もう一枚の写真を手に取り、尋ねた。
その写真に写っているのは、黒髪の青年。
「ね、俺この人知ってますよ」
にやにやと笑ったまま、オーレンはドゥドゥーのほうを見て、言った。

「この人、ダニアの王子様でしょ」

時間も場所も、坑道に戻る。
ショウタたち一行の前に現れた黒髪の青年は、ばさりと肩にかかったマントを後ろに払い、
射抜くような目線をしたまま、笑みを浮かべた。
口を開いたのは、ラルゴが早かった。
びしっと人差し指を向けて。失礼な行動だが、ラルゴがすれば今更、という気もする。

「おま、ちょおまっ！お前・・・」
「どうしたの？」
「どうしたもこうしたもねぇよ！こいつ、ダニアの王位継承権持ってるやつだよ」
「わかりやすくどーぞ」
「だから！ダニアの次期国王、現王子だよ！」
テレジー以外が信じられない、といった顔で再度、黒髪の青年をみた。
王子か・・・なんとなく納得できるというか。
やはり人前に出る人は雰囲気とか顔とか、そういうようにできてい

るのだろうか。
しかし今はそんなことどうでもいい。
慌てふためく彼らを無視して、青年は口を開いた。
高貴、がどういうものを言うかはショウタにはさっぱりだが、彼は綺麗に笑って見せた。
その笑い方が、なんだか人間味がない気がして、不気味だった。

「私の顔、知ってるっていうか覚えているんですか。とてもいい記憶力の持ち主ですね。
確か私が公務として人の前に出たのは１０カ月以上前ですよ」
「・・・っ情報屋だからな」

黒髪の青年は一人ひとりの顔を見渡した後、テレジーに目線を合わせた。
にっこりと笑顔で微笑むと、柔らかい口調でこう言った。

「久しぶりに見ないうちに大分顔色が良くなったじゃないですか。
それにしても、２年近く逃亡してきて初めてお友達をたくさん作りましたね。
優秀なボディーガードたちですか？
今までとばっちりを食らわせたくなくてたった一人で逃げ回っていた貴方にしてはずいぶんなこころがわ・・・」

黒髪の青年が言葉を突如遮ったと思ったら、その体が横に吹き飛んでいた。
ショウタが黒髪の青年にとび蹴りを食らわせたのだ。
吹っ飛んだ彼を見て、逆にテレジーが真っ青になってしまった。
彼にしては珍しく、狼狽した声でショウタに声をかけた。
「お、お前・・・何を・・・」
「よくもフォルでは騒ぎを起こしてくれたね。今のはその腹いせ。

ていうけど、ぶっちゃけ君がここに現れるまで君の存在忘れてた。
でもなんか腹立つから蹴っとく」
「ショウタさん・・・支離滅裂です」

青年は立ち上がると、ふむ、とショウタのほうを見た。
そして一言。
「・・・貴方誰でしたっけ」
「・・・むかつくこいつ」

全く気にもしないといった風に、黒髪の青年はぴっと指をテレジーに向けて言い放った。

「話は中断されてしまいましたが、戻しましょう。
私は貴方を見つける方法がいくつでもあるのですよ。貴方はそれを知っていながらも2年逃げ回っていますが」
その言葉を聞いて、
「うわっストーカーかよ。俺とんでもない情報手に入れちまった」
「僕知ってる。ストーカーって確か国際司法取引所で裁かれるんでしょ」
「その前に、警察に引き渡されてしまいますよ」
ラルゴ、ルーマ、クインはひそひそと喋る。が、その声は全員に聞こえている。
黒髪の青年は咳払いをひとつして、再度、気を取り直して。
「とかく！
貴方は私の傍から離れられません。そういう運命なのですから」
といえば、
「やべぇ。そっち系かよ」
「僕知ってる。同性同士って結婚できないんでしょ」
「国にもよりますね。でも、結婚が認可されている国ってほんのわずかですから、難しいですねぇ」

「違いますよ！」

だんだん話が変になっていく。
ショウタがとび蹴りを食らわせたのをきっかけかどうか、とにかく真面目だった空気がどんどんゆるくなっていく。
青年は咳払いを再びしたのち、だが勝気な笑みはそのままで、テレジーに言った。

「とにもかくにも！
また私を魔術で遠くに飛ばしますか？そんな力は残っていないでしょう。
それとも貴方一人が逃げれば彼らに危害を加えないとでも？そういう甘い考えはよしていただきたい」

その言葉に、一気に空気が張り詰めた。
ようやく真面目さを取り戻したが、テレジーは先ほどから一言も発していない。
ショウタは不安になって彼を見た。
あの時と同じ表情。恐怖も絶望もない、だが、いつも以上に何かを考えている、そんな表情だ。
頭がフル回転していて、それ以外のことに気が回っていないような。

ダニアの次期国王とテレジー。いったいどういう縁なのだろうか。

だが、どういう事情であれ、テレジーをここで失うわけにはいかない。
彼が自分の願いをかなえるための人なら。

ショウタのそんな心の内を読みとったのか、青年は手のひらから剣を取りだした。

刀身の幅が広く、彼の身長ほどある大剣を。
それをみて、テレジーが体を前に乗り出そうとしたとき、ラルゴに後ろに突き飛ばされてしまった。

「お前は引っこんでろ。国王だろうが王子だろうが、邪魔する奴は容赦しないぜ」
「やめろ・・・お前らには関係がな」
「そんなこと言ったって、王様のほうがやるきまんまんだよ」
ルーマも二丁拳銃を青年に向ける。
最初に仕掛けたのはラルゴだった。
細身の剣をしっかり握り、青年に向かって突進した。
後ろから援護するようにルーマが拳銃を撃つ。
やめろとテレジーが叫んでも、彼らは止まらなかった。
クインはどうしよう、と一瞬狼狽するが、すぐに目を閉じて神経を集中させる。
そして、ぱちんと指を鳴らすと、水でできた槍が青年めがけて飛んで行った。
かなりの初級魔術だが、彼女がはじめて見せた魔術だった。
その行為が、クイン自身も黒髪の青年に敵意を向けていることが分かる。
ショウタはテレジーが握っていた短剣を奪い取ると、そのまま鞘から抜き、黒髪の青年に向かっていった。

何を考えているんだ、とテレジー愕然とした。
絶望的だった。
止めなくては。だが、体が動かない。
恐怖ではない。
それは、躊躇だった。

その時間わずかに数秒の間だった。その数秒が、事態を急変させた。

黒髪の青年はたった一人、大きすぎる剣一本でまず、ラルゴとの力勝負に勝った。
つばぜり合いでラルゴを押しのけると、そのまま彼のみぞおちに強烈な蹴りを食らわせた。
次に体を反転させて、狭い坑道の壁を蹴ると、剣の柄でルーマを殴った。
再度魔術を繰り出そうとするクインにたった数歩で近づくと、その細い腕をひっつかんで、坑道の壁に彼女をたたきつけた。
そして、
方向転換と同時に勢いをつけて、ショウタに対して回し蹴りを。
彼の小柄な体もクイン同様吹き飛び、だんっとその身を強く壁に打ちつけた。

あっという間だった。そして、圧倒的だった。

痛みで呻く４人をみて、テレジーはさぁっと血の気が引くのを感じた。
魔術を使わなくては。ただ、何を使えばいいのかわからない。
カタカタ震える手だけがむなしく宙に浮く。

「まったく、冗談じゃないですよ。魔術を使うまでもない」
「っ！」
「さて、逃げられないですよ？」
テレジーの首を右手で抑え込むと、青年は彼の体をどんっと壁に押し付けた。
思わずテレジーは彼の右腕をつかむが、ぎりぎりと喉に指が食い込んでいく。
「・・・っ・・・っ」
苦しくて、テレジーはとうとう彼の腕を握っていた両手を下ろして

しまう。

「て、れ・・・」

背中を強く打ちつけすぎたショウタは、ふらふらと立ち上がると、彼の短剣を再度握りしめ、後ろからよろけながらも突進した。

だが、それはあっさりと反撃されてしまう。

青年は左手をショウタに向けて突き出す。そして、ぱちんと指を鳴らしたかと思ったら、ショウタの体は突風によって吹き飛ばされてしまった。

「かはっ・・・！」

「っ・・・！」

顔をゆがめ、テレジーは青年をにらんだ。

その顔を見て、青年の目の奥がギラリと光ったと同時に、彼は右手の力を強めた。

ぎりっと音がして、より一層テレジーの白い首に青年の指が食い込んだ。

「や、めろ・・・！」

地面に顔を半分くっつけた状態で、ショウタは呻くように叫んだ。

喉から振り絞ったその声が届くよりも早く、

坑道内の温度が急上昇した。

「燃え上がれ炎！舞い踊れ私！」

突如として聞こえてきた声。若い女の声だ。

青年は手を離し、声が聞こえてきた方を振り返った。

ようやく解放されたテレジーは盛大にむせて、空気を一生懸命肺に取り込もうとするが、空気が薄くてうまくいかないようだ。

そのまま気を失って倒れてしまった。

ショウタは地面を這い、テレジーの傍にたどりつく。
「テレジー、テレジー」
生きていることを確認すると、今度は彼の傍に倒れていたクインの体を抱える。
「いったい、何事・・・？」
再度坑道内に熱波が流れてきた。
肺に満たされる熱気。魔術だということはすぐに分かった。

「だれです？」
黒髪の青年が一歩足を踏み出した途端、坑道の奥が爆発した。
土ぼこりが迫ってきて、一瞬にして全員の視界を奪った。
「何・・・！？」
「いっけぇツァイ！」
「あぁ！」
先ほどの若い女の声。次に聞こえてきたのは、その女よりは年上の女の声。
青年はぱちんと指を鳴らす。
すると、風が巻き起こり、土ぼこりが入口に追いやられていく。
だが、それよりも早く、視界の外からそれはあらわれた。
大柄な女性だった。
黒髪の青年をつかんだかと思えば、そのまま彼女は青年を低い天井の真上に投げ飛ばしてしまった。
「なっ・・・！？」
「行くよっ！そぉれ！」
晴れた土ぼこりの中から現れたもう一人。
幼い少女だった。
ぱんっと手をたたくと、炎の球がいくつもいくつも、黒髪の青年に直撃した。
どさり、と青年の体が床に落ちた。
そのままとどめをさすのか、と思ったその時、

彼の体を黒い影がどろり、と覆った。
「何！？」
「わぁ！」
女性と少女は驚き、半歩後ずさった。
そのまま、黒髪の青年は黒い影に飲み込まれ、その場から消えてしまった。

「んん・・・ショウタ、さん？」
ショウタの腕の中にいたクインが、眉をよせながらも目を覚ました。

「クイン、大丈夫？」
「私は大丈夫です。ラルゴさん、ルーマさん、テレジーさんは？」
「テレジーは大丈夫。気を失っているだけ。
ただ首を絞められて・・・苦しそうだ。ラルゴとルーマは」
「この二人なら大丈夫だぞ」

大柄な女性の声を聞いて、ショウタとクインは顔を上げた。
まるで戦士のような女性だ。金髪を一つにまとめ上げて、にっこりと二人に笑いかけている。
「しっかり気を失ってはいるが、ちゃーんと生きている！」
「あ、あの、貴方方は？」
ショウタが恐る恐る尋ねると、後ろから小柄な少女がひょっこり顔を出した。
「今はそんなことじゃあないでしょう。
ねぇねぇ、ツァイ、彼らを宿まで運んであげようよ」
「さすがマリ。私もそう思っていたところだ」
「人助けー人助けー」

結局誰か教えてもらえなかった。
クインはショウタに支えられながらも、どうにか立ち上がることに

成功した。
ツァイと呼ばれた大女はラルゴとルーマを抱えると、マリと呼んだ少女とともに入口に向かって歩いて行った。
なんともたくましい。

坑道の中に残されたのはショウタ、クイン、そして気を失っているテレジー。
とりあえず彼を起こそうと、ショウタはテレジーの体を起こす。
白い首にくっきりと赤く、絞められた跡が残っている。なんて痛々しい。
「クイン、テレジー大丈夫かな・・・」
「・・・脈が弱い、ですね。早く連れ出しましょう」

その時、坑道の中に声が響いた。
あの青年の声だ。

『まさか赤の他人にこうも邪魔されるなんて。
心外ですが、撤退させていただきますよ。
そうだ、セラーから預かっていますよ。貴方のもの、お返しします。
次に会うときはそれでお相手願いますよ』

かしゃん、と何かがそばに落ちた。
クインがそれを手に取ると、彼女には大きすぎるほどの大鎌だった。
死者を狩るようなそれを持って、クインがショウタの傍に座ると、テレジーの手ががっと伸びてきた。
「うわっ！」
思わずショウタが声を上げる。
テレジーはうっすらと目をあけると、大鎌を握りなおす。すると、

きらきらと光を霧散させるように、大鎌は姿を消した。

「・・・テレジーさん、大丈夫ですか？」

浅い息をしたまま、テレジーは何も言わない。
ただ目線だけが遠く、彼を覗き込むショウタとクインのほうを一度たりとも見なかった。
漠然と、心だけが沈んでいく気がする。
ショウタはじっと、自分が手に握っていた短剣に気づくと、それを鞘に戻すと、テレジーに手渡した。
この感情は、いったいなんだろうか。ショウタは考えても考えても、わからなかった。
虚無感。
ぽっかりと何かが空いてしまったような気がした。
どうしてそんなことを感じるのだろうか。
感情に理由を求めることは、それだけでショウタを思考の奈落へと落としていった。

「確か名前は、えーっと、シュヴァイリン。シュヴァイリン・レントっていうんだよ」
グライナー国トレンウェイのレストランで、オーレンは黒髪の青年の写真を指さしながら言った。
「ちょちょちょっと、ルージュさん！どうしてですか！？」
ハイドラは真っ青になった顔をドゥドゥーに向けて言った。
「どうして人をさらうんですか？しかもどうして一人は一国の主だなんて・・・
私たち、いったい何をされるんですか？」

まるで犯罪の片棒を担がされているように絶望したハイドラの表情とは対照的に、
オーレンは面白いことになってきたぞ、と言わんばかりの期待顔だった。
その二人の全く違う顔を見て、ドゥドゥーはお茶をすべて飲み干し、席を立った。
彼を見上げる二人の視線など気にせず。

「今後私回線を通じて連絡を入れる。
給料は今までの倍払ってやろう。しっかり働くよう」

そういうと、彼は店を出ていってしまった。
途方にくれたハイドラはそのまま深くソファに体を沈めた。
「・・・何か注文する？金置いてってくれたし」
「・・・私の気持ちなんか分かんないなら放っておいて。
信じられない。
国王を、命の恩人を捕えるなんて。
しかもそれに友人が協力してるなんて・・・」
「気にしたって仕方ねぇじゃん。仕事なんだから」
「どうしてなのよ・・・クイン・・・なんでこんなこと・・・」
「すいませーん、ランチ一人前」
「どうしてエルデナがこんなことをしようとしてるの？」
「・・・」
「やらなくちゃ、いけないの？やめれば、こんなことしなくていいの？」
「・・・思うんだけどさ、俺、やった方がいいと思う」
ぽつり、とオーレンがつぶやいたのを引き金に、弾かれたようにハイドラは立ち上がって叫んだ。
「あんたみたいな、・・・あんたみたいな人を傷つけても平気な奴ならいいでしょうね！」

店の中が静まりかえる。
オーレンはグラスに入った水をそのまま、ハイドラの顔めがけてかけた。
ばしゃり、と頭から水を被ったハイドラは、暫く何が起こったのか分からないといわんばかりに固まった。
そして、今度こそヒステリックに叫ぶかと思ったが、それはなかった。
彼女を見上げるオーレンが、不気味なほど落ち着いていたから。
頭から水を被ったことも相まってか、どうやら頭に上っていた血の温度が下がったようだ。
ハイドラは黙ってソファに腰を下ろした。

「・・・じゃあさ、調べてみようぜ？」
「・・・？」
「今のお前は会社に対する不信感で仕事なんて手がつけられないっていういっちょ前に偉そうなことを言っていると。
だったら、ドゥドゥーさんがいったい何を考えているのか、何をさせたいのかをやっぱりはっきりさせてみようってこと」
「・・・そんなこと、できるの？
ドゥドゥーさんは、テレジー君のことも、クインのことも知っている私に何一つ言ってくれなかったのに」
「あきらめるなハイドラ！
真実は追い求めない限りその手に掴むことはできないって俺の友人が言ってた！
ま、どうせこれからやる仕事はかーなーりでかいってやつだ。それぐらいの前準備必要だろ。
よし、行こうぜ！
おばちゃーん、ごめんランチ包んでくれる？持って帰るわ！」
オーレンはそういうと、ずぶぬれのハイドラの手を引っ張って、タッパーに入れられたランチを受け取ってレストランを出た。

「さーて、ダニアの王子様シュヴァイリン君と、ハイドラの王子様テレジー君。
ドゥドゥーさんは一体この二人で何をしようとしているのかねぇー」

真っ青に晴れ渡る空のもと、元気よく歩き出すオーレン。
彼の後ろをついて行くハイドラは、ただただ心がざわつくのを感じていた。

望むなら、もうあんな恐怖のない生活だけ。だが、それはどうやら暫くはあきらめた方がよさそうだった。

14話　捻転―outside―

ラルゴの部屋の斜め向かい。
どんどん、とノックをするが、返事がない。
と思ったら、暫くしてがたん、と音がした。
不機嫌そうな足音が近づいてくると、これまた不機嫌そうな顔が扉の向こうから出てきた。
「・・・何」
「その反応は見慣れてもひどいもんだね。
シャワー浴びてたの？」
真っ暗な部屋の中をショウタは遠慮なく入る。
湿気を含んだ空気は生暖かい。
部屋の中にいたテレジーは、ショウタの訪問を快く思っている様子が全くない。
彼は今まさに風呂場から出てきたというように、首にタオルをかけたまま、髪の毛も癖っ毛が水を含んでいていつもよりも長く見える。

「暗い。電気つけていい？」
「なんで入ってるんだ」
「あ、もしかして寝てた？布団ぐっちゃぐちゃ」
「おい！」
「・・・これ、クインから」
テレジーを無視して、ショウタは突如話を戻す。
彼は懐から白い錠剤の入った瓶を取り出すと、テレジーに突き付けた。
それをちらり、と確認すると受け取って、テレジーは瓶をテーブルの上に置き、ショウタのほうを向かずに声をかけた。
「・・・何をいらついている」
ショウタは最初何を言われているのか分からなかったが、そなえつ

けられていた鏡を見て納得した。
この顔は確かに怖い。
ショウタは一つため息をついて、ベッドの上に腰を下ろした。
頭の中がすっきりなればいいのに、と思いながら、ショウタはぽつり、と呟いた。
「・・・ここにきてから、今まで。なんだか色々あったじゃない。俺、みんなほど大人じゃないからなんていうか・・・色々考えて、疲れたんじゃないかな」
「・・・」
「・・・どうしたの？」
「・・・聞かないんだな。俺と、あいつの関係を」
「・・・」
「聞いても構わん。どうして国王と知り合いなのか、と。なぜ国王に命を狙われねばならないのか、と」

しん、と静まりかえった室内。
ショウタは立ち上がると、テレジーの前に立った。
テレジーは彼が目の前に立った時、ショウタがどういう表情をするか気になった。
ばつの悪い顔をするか、聞いていいのかと探るような顔をするか。
だが、どの想像もすべて外れる。
ショウタがテレジーに向けた表情は、まるで子供が怖い夢を見ることを恐れる、それに近い。

「・・・知りたく、ない。できれば」

その反応にいつも興味のない表情が、少しだけ変わった。
それに気づいたのか、ショウタは再度腰をおろして膝に肘をつき、手を組んだ。
額に手を当てて、顔を下に向けたまま、ショウタは呟いた。

「俺、あの人、だめだ。
怖いとか、気持ち悪いとか、そういうわけじゃあないんだ。
ただ、あの人を見て、気持ちがかなり落ち着かなかったんだ。
なんでだろう。俺の中で、俺を拒絶するような、なんだか・・・すべてを否定されるような・・・」
「・・・？」
「ねぇ、テレジー」
ショウタは顔を上げず、テレジーに声をかける。
うっかりすれば聞きそびれそうな声をしていた。

「君に会ったこと、願いをかなえるために君に協力をしてもらうことを、肯定してくれ。
お願い・・・」

「どうして、そうする必要がある」
「・・・ただ、君に、肯定してもらいたいだけなんだ。
テレジー、君がここにいることを」

テレジーは答えなかった。

これを肯定しなかったら、どうなるのだろう。
ショウタの発言は、テレジーの存在がまるでショウタ自信の身の上にかかわってくることのように聞こえてならない。
それは願いをかなえるための必要条件だからだろうか。
みすみす見つけた”ハシャナール”を手放すのが惜しいからだろうか。
いや、違うとテレジーは決定づける。
ラルゴがショウタに話をする前から、ショウタはテレジーとの縁を切るつもりがなかったように思えてならない。

そんなテレジーの考えを読み取ったわけではないショウタは、ゆっくりと立ち上がって、無理やり笑顔を取り繕った。

「・・・ごめん、俺、疲れているみたい。どうかしてるよ。まったく。
・・・明日あの二人を連れてもう一度坑道の中に入ろうと思う。ゆっくり体を休めて。お大事に」

ショウタはテレジーの返事を聞く前に自己完結させてしまうと、黙って部屋を出て行った。

部屋に一人残されたテレジーは、ショウタが持ってきた瓶をあけると、2，3粒錠剤を取り出し、水で一気に飲み込むと、上着を着てそのままベッドに倒れこんだ。
首にずきりと痛みが走った気がしたが、もうほとんど跡は残っていない。
ぼんやり、と薄暗い天井を眺めながら、テレジーはショウタの言った言葉を反芻する。
やはり何度考えても、彼の内は読みとることができなかった。

テレジーの部屋を出たショウタは、ラルゴの部屋から聞こえてきた甲高い声に振り返った。
時間がない、と少女が言っている。彼女たちも相当焦っているらしい。
もう打つ手がなくなったか、それとも確実であるからか、とにかく”星の記憶”に飛びついてしまったのだろうか。
そうだとしたら自分も同じだが。

ショウタは自分の部屋の鍵を開け、真っ暗な部屋の中に入った。

電気もつけず、靴も半分脱ぎかけたまま、そのままベッドにうつぶせになった。

瞼を閉じると、目の裏がちかちかと痛い。

体中の怪我はとっくに治療されているが、やはり痛みはまだある。

ずきずきと体中を走る痛みを感じながら、ショウタはゆっくりと天井を仰いだ。

圧倒的な力で自分たちを蹴散らしたダニア国の王子、シュヴァイリン・レント。

彼を見たのは二度目で、はっきりとお互いに顔を合わせたのは、恐らく初めて。

目の奥にある怪しい光がじとり、と自分の心の奥に刺さる。

前回は感じなかった、だが、今回は感じた。

彼はテレジーを否定している。

殺したいのではない、消したいのだ。

何故なんてわからない。だが、それはショウタにとってとても嫌なことだった。

その目を向けられたとき、ショウタにまるでこう語りかけてくるような気がしたのだ

・・・お前は、偽物である、と。

それを思い出した時、ショウタは心臓をどんっと撃たれた気がして、布団に慌てて潜り込んだ。

体を丸め、深く深く布団をかぶって、ショウタはそのまま強制的に

眠ってしまおうと、瞳をしっかりと閉じて。

その日、ショウタは夢を見た。
ふわふわとした、心地の良いまるで綿の上で眠っているかのような。

暖かくて、優しい。
その中で、誰かが立っていた。
顔を覆い、下を向いたその人は頭からすっぽりとフードをかぶっていて個人が特定できない。
近づいて、手を伸ばそうとしたとき、その人物の前でショウタは落ちた。
冷たい空気が体を刺していく。落ちて、落ちて、墜ちて、堕ちて。

聞こえたのは、すすり泣く声だった。

15話　捻転―inside―

坑道を出てから数時間後。
ショウタたちは二人の女性によって窮地を脱することができた。
一行は町に唯一あった宿屋に身を寄せた。
怪我を治療し、一息つくころには日も落ちていた。
ラルゴにあてがわれた部屋にはショウタたちと、その二人がいた。
少女は長い、オレンジ色身のある茶髪をしている。
くりっとした大きな朱色の瞳は少しつり気味で、人の印象に強く残りそうな、そんな少女だ。
隣に立つ女性は背が高いだけではなく、格闘家のような鍛え抜かれた肉体をもった人だった。
金髪をひとまとめにして、活動的なイメージを与えるが、化粧をはじめ、ところどころに女性らしさをしっかりと感じさせる。
二人とも頭にまんまるいガラス玉のような髪飾りをつけていた。

「・・・さっきは本当に助かったよ。ありがとう。
俺の名前はショウタ。
あっちから、ラルゴ、ルーマ、クイン」
ショウタが端的に紹介をする。
その時にはもうテレジーは部屋からいなくなっていた。
紹介されて、少女がにっこりと笑った。
そしてふわりとしたワンピースの裾をもって、愛らしく、また丁寧に挨拶をしてみせた。

「私の名前はマリフォルナ・ルーセント。マリって呼んでね。
彼女はツァイ・リン」
「よろしくなっ！」

マリとは対照的に、ツァイは右手をすっと上げて、快活に言った。
人当たりのいい雰囲気を持った二人だった。
だが、ショウタたちはそれだけではない、と早々に感づいていた。
腹に何か一物を持っている、と。
もっともその考えには根拠はあった。
それに気づいて告げたのは、ルーマが早かった。

「で、教会関係者がどうして僕たちを助けたの？」

マリとツァイはその発言に少しだけ驚きを示し、そのあと何もしゃべらなくなった。
その反応が、この一連の人助けを奇異なものであると認めてしまう。

ショウタはなんとなくそうだろうな、と思っていた。
教会関係者があんな辺鄙なところにわざわざ出向くわけがない。
きっと理由があって助けられたんだろう、と。

「よく知ってたな坊主」
気づいていたラルゴがそう言うと、ルーマは頭を掻いて首をひねりながら、言った。
「なんでかはわかんないんだけれど、きっと昔の僕が知っていたんだよ。
二人が頭につけている髪飾り、クリアマテルマっていう宝石だよね。
聖職者とそれに準ずる人がつけなきゃならないっていうものだよ」
「・・・どうして、教会関係者さんがあそこにいたんですか？」
全員の興味を集めてしまった二人は、しばし黙り続けた。

「もしかして、二人も”星の記憶”を探りに来たの？」

ルーマが問う。
わずかに動いた表情がイエスを物語っている。
やっぱりそうかと思って、ショウタはふぅ、とひとつだけため息をついた。

本当なら助けてもらったからちゃんと彼女たちの言い分を聞いて、ちゃんと己の身の振りとの算段をして応えるべき、だが、今のショウタにはそんなことよりももっと別のことで頭がいっぱいだった。
そんなショウタを気遣ったのか、ラルゴがショウタに代わって話を切りだした。

「さて、どうして二人は”星の記憶”を探る上で俺たちに接触しようと考えた?」
答えたのはマリだった。
「・・・異端の者を捜していたし、それに、あの碑文をすべて解読するためには7人の人員が必要なの」
「何故ですか?」
「あそこには古ニニ語が書いてあってな!
私たちが途中まで解読したが、7人そろわないと資格を得られないらしい」
ツァイの補足になるほど、とラルゴは呟いて言った。
「さすが教会関係者。古ニニ語も読めるとはな。
確かに、俺たちの中で古ニニ語を読めるのはショウタだけだ。残念ながら俺は詳しくは読めないからそこまで確かめられなかった。
よって、お前たちの言うことが本当か信じることはできない」
ラルゴがそう言い放つと、マリは顔を真っ赤にして怒った。
「わ、私たちの言うことが信じられないの!?」
「いきなり赤の他人が言うことを信じろっていう方が無理がある」
「そんなっ!」

「まぁまぁ、落ち着け、マリ。もっともだ」
癇癪を起しそうな勢いのマリをなだめたのはツァイだった。
彼女は笑顔のまま、ラルゴたちに話かけた。
「私たちは”星の記憶”を手に入れるためにここにきて、私たちだけではそれを手に入れることが不可能であることを知った。
君達を助けたのは、君たちがいれば私たちの願いをかなえることができる、打算的な理由があったからだ。そこは認めざるを得ない。
だが、私たちは決して足手まといにはなるまい。それは君達もわかるんじゃないかな。
どうだ?手を組まないか?
なんなら確かめた後でも遅くはない。君たちの目で碑文を確かめて、そのあとに決めてくれても構わない」

ツァイの言葉に、ラルゴは返事をしかねる。
ツァイの人柄だろうか。彼女の声に嘘偽りを感じなかった。
だが、信じるには情報が少なすぎた。
ラルゴたちはショウタのほうをちらり、とみてこの状況をどうするか相談しようとした。
しかしショウタはまったく集中しておらず、むしろこのタイミングで席を立ってしまった。
そのまま部屋に戻ってしまうのか、おやすみと一言言って出て行こうとしたので、慌ててラルゴが彼の襟首を引っ張った。
ルーマとクインも後に続く。

「ちょちょちょい待て。
お前、この状況をどうするつもりなんだよ?」
「ん。みんなに任せる」
「ちょちょちょっと待って。
これからはどうするの?」
「ん。明日になったらまたね」

「ちょ・・・と・・・ま、待ってください。
・・・では、これをテレジーさんに渡してください」

クインは先に引き止めるべき言葉を言われてしまったがため、結局彼のしたいようにさせてしまうことにした。
彼女がショウタに差し出したのは小さな瓶だった。
ぼんやりとしたままの表情で、ショウタはその瓶を見た。
白い錠剤がたくさん入っている。ラベルはない。
すこしだけ不安そうな表情をしているクインのほうを見て、ショウタは尋ねた。
「何これ？」
クインは少し声のトーンを落として、短く言った。
「渡せばわかりますから。その、おやすみなさい、ショウタさん」
ショウタはそれをポケットに仕舞うと、挨拶もそこそこに部屋を出て行ってしまった。

「・・・なんか、ショウタ君心ここにあらずって感じだったね。
あの茶髪のお兄さんもそうだったけれど」
ふてくされた表情はとっくに消えうせたマリが、それでも少し口をとがらせながらそう言った。
事情を知らぬマリたちにはショウタたちがいったい何を抱えているのかは分からない、
ただ、見ず知らずの赤の他人に強盗のような（だが単独犯である）人に襲われていた、と言うわけではなかった。
興味本位で聞きだそうとするマリを制して、ツァイが声をかけた。
「マリ、彼らの問題は彼らが話しかけてくるまで聞かない方がいい」

「えー、ぶーぅ、そうだけれど・・・
でも、気になるよぉ。だってあの人とあの人、すっごく変なまじないかかってるんだもん」

マリがさらりと言い放った言葉を、ラルゴたちは聞き逃さなかった。

「どの人とどの人だって？」
「え？この部屋に来なかった茶髪のお兄さんと、私が追い払った黒髪のお兄さんだよぉ」
「まじない、とはどういうことですか？」

マリは暫くどう説明しようか、とでもいうように考えた後、指をぴんと立てて言った。

「茶髪のお兄さんと黒髪のお兄さんには封印のまじないがかかっているの。それも結構かなり複雑でめんどくさいのが。
どっちのまじないもすっごく高度な魔術師がしかけたのねぇ。
中身まではちょっとわからなかったけれど」

その若さでそこまでいいあてられるとは恐ろしいものだ。
ラルゴはその事実を何度も何度も繰り返し、内にとどめた。
彼は魔術にとんと疎い。それはルーマとクインにも言えることだ。
そのまじないがいったい何を意味しているのか、ラルゴたちには見当がつかなかった。
それが今回の件に繋がっているのだろうか。
たとえば、黒髪の彼、シュヴァイリン・レントがテレジーを必ず見つけ出せることと。
聞けば早いが、ことがことであるし、何よりテレジーは口が堅い。
真実を聞きだすことは困難だろう。

だが今は当の本人はいない。
今話の中心に据えるべきはマリとツァイをどうするか、である。

「ね。私のこのすばらしい魔力とツァイの戦闘センスの高さをもってしても私たちを仲間にすることはすっごい利点じゃない？」
身を乗り出さんというほどの勢いをもったマリだが、ラルゴたちはどうもそのテンションについていけていない。
ラルゴは彼にとっては珍しく、ハッキリしないまま返事をした。
「そうだな。とりあえず、・・・保留にさせてくれ」
ラルゴがそういうと、マリはさらに不満そうだった。
この幼い少女が、そこまでして願いにこだわる理由なんてどうせくだらないことに違いない、とラルゴは思っていたから、聞きもしなかった。
だが、マリは少し怒気を含んだ調子で言い放った。

「私は早く”星の記憶”を手に入れたいの！時間がないんだから！」

きぃん、と部屋が鳴った気がした。
彼女の高ぶった魔力が部屋を揺らしたのだ。
わなわなとふるえて、感情が高ぶったのか、マリは目を潤ませたままラルゴ、クイン、ルーマを交互にみている。

「・・・時間がないって、どういうことなんですか？」

張りつめた空気を、クインの穏やかな声が柔らかくつつんだ。
とはいっても、クインの表情はどちらかというと固く、マリの話の続きが気になって仕方ないという興味本位が瞳にちらついている。
それを極力ばれないようにしつつ、目配せをすれば、マリは気持ちを落ちつけようと数回無理やり深呼吸をして、椅子に腰を下ろした。

彼女の横にいたツァイがマリの背中を優しくさすっている。さながら母親のようだった。
肩をがっくしと落としたマリは、まるで息を吐くようにつぶやいた。

「・・・ママを、助けたいの」
「お母様、ですか。
事情を聞いてもいいですか？」
「・・・やっぱり言わない。気にしないで。
貴方達は自分が今から叶えたいこと、軽々しく口に出せるの？」

マリの言葉に、ルーマは少し首をひねった。
だが、ラルゴとクインは違った。
そういえば、ルーマは二人の願いを知らない。
今まで行動を共にしていた5人のうち、ショウタとルーマは記憶を取り戻すことを目的としているのは周知の事実だった。
しかし、テレジー、ラルゴ、クインの願いは一体なんだっただろうか。
そしてマリの発言で二人は似たような反応をした。
感情の見えない、据えた瞳をマリに向けた二人を見て、ルーマは胃の底がひやりと冷えた。

クインが、ラルゴが口を開くよりも早く、ツァイが長い腕をぶんぶんと振って笑顔で言った。
「まぁまぁ！みんな願いをかなえればお互いに幸せになれるんだろう！
とりあえずそれまでは結託して仲良くやっていけばいいじゃないか！
ラルゴ！明日はいい返事を期待しているぞ！」

そんなツァイに、マリは今度こそはっきりとため息をついた。
「ツァイ・・・なんだか貴方って・・・本当にあっけらかんとしているというか・・・」
「そうか？」
「そうよぉ」
「いいじゃないか。抱えた事情がそれぞれ違うんだから、すべてを知る必要はないじゃないか」

あっけらかんとしている分、発言がストレートだ。
ツァイの言ったことは実際今までラルゴたちがそうして行動してきたものだった。
再度、ラルゴ、クイン、ルーマはお互いの顔を見た。
そして、お互い何も知らないことを再認識する。
今この場にいないショウタのことも、テレジーのことも知らない。
今後の行動において、それは知るべきことかどうでもいいことなのか、今は何とも言えない。

かといって、ラルゴもクインも自分の内を明かすことは現段階では不可能だった。

なんだか、気まずい。

「わ、私・・・そろそろ寝ようかと思います。もういい時間ですし・・・すみません、失礼します」
クインが立ち上がり、半ば逃げるようにしてラルゴの部屋を出て行った。
「ツァイー、行こう。なんか疲れちゃったよぉ」
「あぁ！」
マリとツァイも部屋を出て行った。
最後に残ったルーマも、少々気まずそうに笑うと、おやすみ、と言

って部屋を出て行った。
部屋の主であるラルゴは全員を見送った後、ぼーっと部屋の真ん中で立ちつくした。
「・・・寝るか」

そんな彼に唯一飛びかかる存在。
ずっと部屋の隅でまるまっていたウルルがラルゴの背中に飛び乗った。
「キュウ！」
「うぉお！そういやお前いたなぁ。
ウールルちゃん、今日は俺と寝るかー？」
「キュウ！」
「・・・はぁ、お前は言葉が分かるのかねぇ。
俺の悩みを聞いて・・・いや、聞かないでほしいかな」
「キュウキュウキュウ」
「なーんでもねぇ」
ラルゴはウルルを抱えると、そのまま布団の中に入った。
電気を消して、布団の中で丸まったウルルの高い体温に、ほどなくして眠気が襲う。
思考を中断させて、ラルゴは深く眠りに落ちていった。

ただ、その日、眠れなかった人がいた。
もともと眠りの浅かったテレジーと、
一晩中布団の中で目を開けたまま朝を迎えた、クイン。

朝になって、結局ショウタの判断によって、7人で坑道に向かうことになった。

16話　fenser

翌朝。
気持ちを入れ替えた（つもり）のショウタは布団から出て、部屋のカーテンを開けて、洗面所の鏡を見た。
なんだか気持ち顔がむくんでいる気がする。
目の下に影ができてて、それが隈だと気付いた時には、自分が寝不足であったという事実を認めた。
いつもよりも念入りに顔を洗って、軽くストレッチをしたのち部屋を出た。
階下の食堂に行けば、テーブルに着き、眠そうにあくびをしたクインと目があった。
宿泊客はショウタたち以外にいないから、とても静かで穏やかな朝だった。

「おはよ。寝不足？」
「おはようございます。
その、ちょっと眠れなくて。やっと眠気が来たらもうこんな時間で。
一番乗りしちゃいました」

彼女が食べている美しいクリーム色のオムレツを見たらなんだかお腹がきゅう、とした。
突っ立っているショウタに宿屋の女将がにこりと朝の挨拶をして、テーブルにプレートを置いた。
テーブルの真ん中には保温ポットに入っているコーヒーと氷が入ったクーラーに入れられたジュース、籠に入った焼きたてのパンが置いてあった。
ショウタはカップにジュースをついでそれを一気に飲み干し、ふぅ

とひとつため息をついた。

「なーにためいきついてんだよっ！」

「うわぁ！」

突如、後ろから首に腕を引っ掛けられて先ほど飲んだ物を吐きだしかけた。

後ろを向くまでもなく、ラルゴがショウタの首に腕をまわしてそのまま隣の席に着いた。

「おはようございます、ラルゴさん」

「よぉ。クインも顔色わりぃな」

「ラルゴ、君はテンション高いんだね」

「それがよぉー。

昨日ウルルと寝たんだよ。そしたらあいつまじでふわふわふかふかでさ。そりゃもう安眠」

「・・・そう、よかったね」

「おはよぉー」

今度はルーマがやってきた。

明るい鳶色の髪の毛をぴこぴこと跳ねさせて、大きくあくびをして入ってきた。

ここ数日ルーマも一緒に行動しているが、彼はとてつもなく朝が弱い。

だが、弱くてもちゃんと起きてこようと努力するところが偉い。

一応約束の時間である7時半はとうにすぎているのだが。時計の針は8時を目指している。

「みんな、おはよう！」

朝食をつついている最中にやってきたのは、マリと行動を共にしていたツァイだった。

肝心のマリは一緒にいないが。

「おはよー」
「おはようございます」
「よぉ」
「おはよーう」
「マリさんは？」
「まだ寝てる！」
「・・・いやいや、起こしてこいよ」

ぽつぽつと会話をしつつ朝食を取っていて時計が８時を回ったころ、
次にやってきたのはテレジーだった。
「おはよー」
「おはようございます」
「よぉ」
「おはよーう」
「おはよう！」
「・・・」
「・・・あのさ、朝一発目でためいきはよそうよ」
「お前が言うかね」

さらに時間が経って８時半。
全員とっくに朝食を取り終え、コーヒーポットが空になってお代わりをもらいに行ったとき、
ようやくマリが起きてきた。

「おはよー」
「おはようございます」
「よぉ」
「おはよーう」
「おはよう！」

「・・・」
「おひゃよぉ」

相当眠いのか、ろれつの回らないマリは運ばれたご飯をそれはゆっくりと口に運ぶ。
籠いっぱいにはいっていたパンはショウタがすべて食べつくしてしまってマリの分はなかったが、
朝起きぬけにそんなに食べられないのか、彼女はプレートの中身を半分残した。
もちろんショウタがすべて平らげたが。

ようやく全員が食事を追え、落ち着いて、話ができる状態になったのは9時を過ぎていた。
予定よりも一時間遅くなってしまっている。
もうそれに関して誰もとやかく言うつもりもなくなってしまった。

全員の顔を見渡したショウタは、静かに深呼吸をしたのち、落ち着いた声で言った。

「マリフォルナ・ルーセント、ツァイ・リン。
二人とも一緒に坑道に行こうと思う」

ショウタのその決断に、誰も文句は言わなかった。
むしろマリとツァイは喜んでいる。
ただそれは一緒に行動ができることがうれしいというものではない。
もちろんそれはショウタたちも同じだった。
互いに腹の内を隠したままどこまでうまくいくか。
そこは今は捨て置いておく。

ショウタの下した答えにマリとツァイは満足したし、クイン達は異

論を唱えなかった。

とかく、急いで坑道に行きたかったのが本音だったから。

ぽつ、ぽつ、とすべてがこま切れのように心がさみしい気がした。
そう感じたのは自分だけだろうか、とショウタは全員の顔を見たが、わからなかった。

話が盛り上がらぬまま、ショウタたちは目的地に到着した。

坑道の奥深く。空洞のようなその場所。
青白い光が辺りを薄ぼんやりと照らしていた。
「これ、なんですか？」
クインがその幻想的な光景にほう、と恍惚とした表情を浮かばせながら尋ねる。
ショウタは落ちていたそのひとかけらをつかみ上げると、クインに手渡した。
石自体がぼんやりと光っている。
「ブルーサイトルっていう石。
なんでか碑文が置いてある場所にあるんだよね。
ただ、この明りだけじゃ視界が悪いって言うのが不便だよね」
「きれい・・・」
「・・・そこは、認めるよ」
クインがその石を大事そうに手のひらにつつむ。
「この石には邪を祓う力があるっていうらしいよ」
「おまもりにします」
「そこー、もどってこーい」

ラルゴが声をかけ、７人は碑文の前に立った。

碑文の大きさはこの中で一番背の低いマリの胸の高さほどだった。
結構分厚い長方形のそれは、風化が進んでところどころ欠けていたしひびも入っている。
ただ、これがこの星ができたのとほぼ同じ時から存在しているとしたら、保存状態はかなりいい。
艶のあるダークグレーの岩肌をなでて、ショウタはふむ、と碑文を見渡した。
まず最初、暗号と称している部分。
３行ほどのその短い暗号はラルゴが以前言ったことと同じだった。
この部分は古ニニ語とはまた違う言語の流れをくんでいて、とうの昔になくなった言語だとショウタは推測している。
メモ帳を取り出してその暗号をとりあえずメモしておく。
「・・・
”紅き瞳を纏いし異端の者。星の記憶を求める者の前に降り立つとき、この世の望みをすべて手に入れる交わりとなる”ね。
確かに。ただ、これが君のことを言っているかどうかはまだわかんないけれど」
「ふん」
「で、次が古ニニ語か。
えぇっと・・・
”星の記憶を求めし者よ。
お前たちが・・・７つの光と闇を宿し・・・”うーん・・・ちがった。
”７つの光と闇をその７つの体に宿し時、願いは・・・”えっと・・・」
つっかえつっかえそのまま読むショウタ。
マリが感嘆の声をあげて言った。
「すごい！辞書なしで読めるの！？」

どうやらマリとツァイは辞書を片手にこつこつと時間をかけて解読したらしい。
これだけ風化が進み欠けていて読みづらく、この世に現存する言語の中でもっとも難解である古ニニ語。
短い一文を読むだけでも相当の時間を要する。
ショウタは唸りながらも目を碑文からはずさずに言った。
「なんかいろいろ碑文読んでたら少しは読めるようになったかなぁ・・・」
「あ、私たちそこらへんで力尽きたの」
「・・・全部読んでないの？」
「うん」
「・・・」

しばらくたった。
解読中暇になったのか、ルーマとツァイはブルーサイトルを拾い始めた。
そんなルーマを少し呆れ気味に見ているクインは、碑文の傍にいて話を聞きつつ先ほどショウタからもらった石を未だに手の中に握りしめていた。

ショウタは途中まで解読できた分を読みなおした。
ふぅー、と息を吐いて、肩を動かしながら。
「”星の記憶を求めし者よ。
お前たちが7つの光と闇をその7つの体に宿し時、魂は引き継がれる”。
マリたちはここまで読んで、7人必要だと思ったんだね」
「そう」
「俺もその判断は正しいと思う。ただ、全部解読するにはかなり時間かかりそうだ」
「私とツァイも手伝うから」

「そうだね・・・手分けして・・・」

マリが辞書を取り出しながら話を全く聞いていないツァイを碑文の前に引っ張り出した時、
今までショウタの後ろでぼーっと碑文を眺めていたテレジーが口を開いた。

「”朝に祈り、昼に歌い、夜に想え。
そして、朝に嘆き、昼に沈黙し、夜に苦悶することを忘れてはならない。
すべてのソーラテネルの子供たちよ。
背後から迫る甘美なる声を振り払い、目の前に手を広げる快楽から逃れる覚悟を持つのなら、
我の名を呼ぶがいい。
望む願いを叶えようぞ。”」

古ニニ語をそれなりに読めると言われていた三人が一斉に振り返った。
ツァイはすごいなぁ！と感心しているが、ショウタとマリはそんな簡単な反応をすることはできなかった。
「うそ・・・」
「・・・どうして読めるの？」

何もつっかえるところなく、むしろ普通の言語のように、テレジーは残りの古ニニ語を読んでしまった。

マリの目が恐ろしいものを見るような、凍りついたようになっても、テレジーは彼女のほうを一切見なかった。
食い付いたのはラルゴだった。
「大分勉強熱心だったんだなぁー。

これくらいすらすら読めるんだったら高等学術所の教授にもなれるんじゃね？」
「・・・小さいころから読んでいれば身に着く」
「ふぅん。小さいころからねぇ。熱心な親御さんだこと・・・いってぇ！」
「いちいちつっかかっちゃだめだってショウタが言っていたでしょ！」
どんっと背中をたたいたのはルーマだった。
どうやらショウタのポジションを確実に身につけていっているらしい。
「いてて・・・まぁいいけどよ。
で、誰の名を呼べって？」

テレジーは暫く黙った後、ぺたり、と碑文を触った。
首をかしげ、捜しているらしい。
「俺も手伝うよ」
ショウタもぐるりと碑文の周りを回った。
しかしほかに暗号らしきものは見当たらない。
「呼べってことは書いてあるはずなのに・・・」
なんだよこれ、というようにショウタが手を碑文に乗せたとき、碑文がまるでブルーサイトルのように光った。

「うわ！」
「！？」
「きゃあ！」
「おぉ！？」
「わぁ！」
「なにー！？」
「んん？」

全員が悲鳴を上げたときには光が空間いっぱいに広がった。
思わず手を離した二人だが、光は一向に消えない。むしろ強くなっていく。
ショウタは恐怖を感じながらも、この心臓の高鳴りがそれだけでないことに気づいた。
今までになかったことだ。
もしかしたら・・・

強くなった光は視界を奪ったが、すぐに落ち着きを取り戻し、気がつけば辺りは先ほどまでの明るさに戻っていた。
ショウタとテレジー以外の全員は碑文から離れた場所に逃げていた。

そして、気付いた。
さきほどまでいなかった人が碑文の上にちょこんと座っていることに。

「・・・・・・・・・・・誰？」

最初に口を開いたのは、ショウタだった。
碑文の上に座っているのは、クインよりも年上だが、ツァイよりは年下のようにみえる女性だった。
大きな瞳は吸い込まれそうな、美しくもあやうい何かを秘めている。
ドレスを身にまとっていて、ちょこんと両の手を膝に乗せている。

長いダークブラウンの髪の毛はブルーサイトルの光を受けてきらり、と光った気がする。
この世のものとは思えない、人だった。

『よく参りましたね。お待ちしておりました』

やばい、となんとなく思った。
こういう類はきっといい感じにことが進んでいることを示している。

ただ、胡散臭さはぬぐいきれないのだが。
女性は碑文に座ったまま、一人ひとりの顔をじぃっと眺める。
結構な時間をかけて、最後にショウタのほうを見て、表情を一つも変えずに言った。

『・・・私は目が見えません。
ですが、貴方たちが”星の記憶”を手に入れるべき資格を有していることは認めましょう。
その胸に秘めし願い、叶えたいですか?』
もちろんだと体を乗り出す。
今まさに目の前に欲しかったものがあるのだから、ためらうことなどない
だが、女性はすぐには叶えてくれなかった。
少しだけ、悲しそうな表情をしたようにも見えた。
『残念ですが、それを与えるためには貴方達にはやってもらわなければならないことがあります』
「仕事?」
『はい。
これから先、残り6個の碑文をすべて解読してください。
さすれば、願いを叶えましょう。
ただし、条件があります』

女性は静かで流れるような声で、全員の反応を見ながら言葉を紡いでいることが分かった。
誰もが何も言えず、ただ彼女の次の言葉を待っている。
女性は話を続けた。

『どの碑文においても、貴方達7人、絶対に欠けてはいけません。
今この場で貴方達は登録されました。
一人でも欠ければ碑文は貴方達にこたえてはくれないでしょう。
もうひとつ。お互いを知ってください。
どの順番で碑文を回ってもかまいませんが、回るたびに貴方方の絆の深まりを見させていただきます。
仲良くやっても、喧嘩をしてもかまいませんが』

彼女がそこまで言い終わると、ショウタは確認をした。
「つまり、俺達7人がよき仲間よき友として結託して世界を回ってくればいい、ってこと?」

それってかなり・・・

無理がある。

お互いの顔を見やった7人は、どこか胡散臭そうな目線を交差させた。
だが、それがやらねばならぬことならしかたがない。
それ以上に”星の記憶”を手に入れることが最優先事項であることは変わりない。
もっとも、冷静に考えればその条件が願いをかなえること、つまり”星の記憶”を手に入れることとどういう関係があるのか甚だ疑問だったが、

こんな状況ということもあり、半ば浮足立った思考はそれさえも内包してしまった。

『いかがします？やりますか？』

「やる！」

全員がうなづくのを彼女は見えていないのに、それを了承とちゃんと受け取ることができて。

女性はふわり、と体を宙に浮かせると、両手を広げた。

そのとき、ショウタたちの体を白い蛇のようなものが取りまいた。

はっとする。

この光景に似たものを知っていたから。

それはテレジーがつかった魔術に似ていた。ただ、その時影は黒かったのだが。

体が左右上下に引っ張られるような感覚がした。

ここから別の場所に飛ばされる。

そう確信したとき、ショウタは最後に叫んだ。

「ねぇ！貴方、貴方は一体誰なの！？」

女性は少しだけきょとんとしたが、少しだけ穏やかな表情をして、言った。

『私は”導く者”。リネと申します。

また会いましょう。次会うときには・・・』

そして、彼らの姿は坑道から消えた。

17話　絆の行方

若草と土のにおいが鼻に入ってきて、ショウタはゆっくりと目を開けた。
うつぶせに倒れる自分の目の前に、白い蝶がふわり、と羽をはばたかせて飛んで、視界の外に消えていった。
重たい体を起こすと、ほかの6人もショウタの傍で気を失って倒れていた。
ここはどこだろうか。
草原が辺り一面に広がる田舎風景は、この世界ではありふれた光景だ。
ここがジャスリーンか、それとも別の国かどうかも分からない。
リネは一体自分たちをどこへ送ったのだろうか。
えらい目にあったな、と思いながら体を伸ばそうと両手を組んだそのとき、左腕に何かが付いていることに気がついた。
それは腕輪だった。

「なんだろう、これ」

切れ目のないガラスでできたそれはショウタの腕にちょうど良く、色は透明。沈みゆく太陽のオレンジ色の光を受けて光った。
その腕輪は他の者にもついていて、どれもが余裕を持ってはめられているが、決してそれを抜きとることはできなさそうだった。
ただ、テレジーだけは違った。
細い腕にまるで戒めのように巻きつけられているそれは、腕輪ではない。
焼かれた細い鋼をぐるぐると巻きつけられた跡のようなそれは決して穏やかなものには見えなかった。
色身のない、真っ白い顔をしたまま気を失っていたテレジーだった

が、ショウタの次に目を開けた。

「・・・体、大丈夫？」

「・・・・」

数回咳きこんだ後、テレジーはゆっくりと体を起こす。

”ハシャナール”ゆえ、体の弱い彼は一瞬ぐらりと体を傾けたが、すぐに呼吸を整えた。

辺りを見渡して、ショウタと同じような反応を示した。

真っ白い顔をしながらも、口調は決して弱っていなかった。

「おい、ここはどこだ」

「知っていたら苦労しないよ。

君が俺をコアッダに飛ばしたのとおんなじさ」

「・・・・」

「・・・あのさ、腕、痛くない？」

「腕・・・」

言われて初めて気がついたのか、テレジーは左腕を見た。

確かに、痛そうだが彼はぴんぴんしている。

とはいっても、怪我などの外傷を素直に痛いと伝える人物ではなさそうなのだが。

テレジーはそれを気にも留めず、さっと服で隠してしまった。

彼はあたりを一瞥し、倒れている5人を確認すると、ショウタに言った。

「さっさとそいつらを起こせ」

「なんで命令するかな。

・・・まぁいいけど」

とんとん、と全員の肩を叩いて起こす。

緩慢な動作で起き上がると、誰もが目を丸くしてこの状況を驚いた。

左腕の腕輪がいったい何を示しているのかも含め、いったいわが身に何が起こったのか、誰も分からなかった。

「テレジー、これってなんていう魔術なの？」
ショウタが尋ねる。しかしテレジーは何も言わなかった。
魔術に詳しいマリが興奮しながら分析した。
「リネってすごい！さすが人外！」
「いや、まだ人じゃないって決まったわけじゃ・・・」
「空間転移の魔術っていうのは魔力の強さだけで行使できるわけじゃないの！
魔術の中には禁術っていうのがいくつかあるんだけれど、そのうちの一つが空間転移の魔術なの。
置換魔術に似ているけれど、空間転移とはまたちょっと違う。
普通の人間がたやすくできない魔術をリネは私たち7人にそれをしてみせた。
しかも7人を同じ場所に送るなんて。すごい。うらやましいなぁ。
私だってもっと頑張ればあの魔術、使えるようになるのかしら。ううん、絶対に使えるようになってみせる！」

話を本題に戻す。
いったいここはどこなのだろうか。
前回ショウタとテレジーがクインと出会ったように、誰か通りかかるのを待つか。
しかし日が落ちかけていて、人通りは皆無だった。
そんな中、クインだけがひとしきり辺りを見渡し、少しだけ近くを歩いて、太陽とは逆の方向、東を指さした。

「あっちの山を越えればジャスリーンの王都、コラーレです」

迷いなく言い放った言葉。

ルーマが尋ねた。
「どうしてわかるの？」
クインは暫く黙った後、静かに言った。
「私、ジャスリーン出身ですから。
特に、ここら辺は・・・地元に近いんです」
へぇ、と感心するが、どうやらクインは帰郷に心を躍らせているわけではなさそうだった。
むしろ、その表情と言葉からは嫌悪がうっすらとにじみ出ている気がした。
穏やかなウィスタリアの瞳が、落ちゆく日のように、影を落として。

「この近くに少しだけ大きな街があるんです。
日が落ちて山越えは危ないでしょう。一旦その街に宿泊する方が望ましいと思います」
「そうだな。ショウタ、行こうぜ」
「うん」

その時にはすでにクインの表情はいつもどおりに戻っていた。それも含め彼女の表情の変化にだれも気づいていなくて、ショウタは首を静かに振った。

街は確かに大きく、日が落ちても街灯が赤々と光っていた。
夜でも人が出歩くような街は、王都以外に訪れることが少なかったから新鮮だ。
足早に宿を予約する。7人もいて飛び込みだから部屋が取れるか不安だったが、どうにか一人一部屋あてがわれた。

夕食がまだだったので街に出て食事をしようと提案をすると、テレジーだけが部屋に残ると言ったので、そのまま彼だけを置いていくことにした。

「ほんと、テレジー君って誰ともつるまないよね。ああいうのを一匹オオカミっていうんだよね」

マリが言うと、ショウタははぁとため息をひとつついた。

今に始まったことではないが。

レンガ通りの上を歩きながら、ツァイがあまり緊張感なく発言をした。

「彼は”ハシャナール”なんだろう？一人で放っておいても大丈夫なのか？」

苦笑気味に答えたのは、ラルゴだった。

「”ハシャナール”だから、一人でほったらかしていても大丈夫なんだよ。あいつは口も悪いが手も悪い。涼しい顔して、歩く暴力だありゃ。

飼い主様が傍にいない相手には容赦なく切りかかるような物騒な奴なんだよ。

だから放っておいても全然問題ない」

「確かにそうかもね」

「そうですねぇ・・・」

「へぇ～え」

「なるほど！」

「・・・なんで俺を見るかな」

適当に入ったレストランは人が多く、活気づいていた。

店員がせわしなく給仕をしている。もちろんショウタたちのテーブルに来る回数は自然と増えた。

底なしの胃袋を持つショウタがいるからだ。

ショウタがちょうどお腹を半分ほど満たしたと感じたころには、全員とうに手を休めてしまっていた。
どうやら以前と同じように彼は黙々と食べ続けているらしい。
再びショウタ抜きで話を始める。

「この腕輪、いったい何を意味するのでしょう」
クインが自らの腕にはまった腕輪をさすりながら言う。
「関節外さないと取ること出来ないでしょうね」
「・・・こわいこというなぁ。
リネさんが登録したって言っていたじゃん。きっとそれだよ」
「だとしたら、どうしてテレジー君だけあんな痛そうな傷になっちゃったの？」
「そりゃあ奴が”ハシャナール”さんだからだよ。
ほれ、異端の者。７人のうち俺らはともかくあいつは別格扱いなんだよ」
「とげがあるな・・・
しかし、これはまるでオリエンテーリングだな！楽しそうじゃないか」
「もぉ！ツァイ！」
「本当に・・・オリエンテーリングだったらいいけれどね」

しん、と心が落ちていく気がした。
絶対面白おかしく愉快な旅になるわけがないからだ。
しかし、リネの提示した難題はあまりにも中身が少なかった。
ただ残り６つあるという碑文を解けばいいだけ。
条件は７人が欠けないこと。絆を作ること。
具体的に何をしろというわけではなかった。
それがよりこの難題に裏があるのではないか、と勘繰らせてしまう。

「読み解けばいいって、でもいくつかは解読しちゃったんでしょ？マリたちはいったいどれくらい回ったの？」
「私たちが一発目に来たのはジャスリーンよ」
ルーマの質問に、マリは自身のカップにお茶を注ぎながら言った。
ちなみに彼女はポットを指一本くるくる動かしながら、魔術で器用に浮かせていた。
「私とツァイはオレーヌ大陸の南部、シャリディン国からきたの。占いで一番最初にジャスリーンを指し示したからここに来ただけ。ショウタ君やラルゴ君みたいに世界中自分の足で回るなんて疲れるもん」
「お嬢様か」
「ということは、現時点で見つかっているものでここから一番近いのはアイマナ、ですね。
確かショウタさんとラルゴさんはほかにもディタクミナ、コアッダ、ダニアで碑文を見つけて解読しているんですよね」
マリが注いでくれたお茶に口をつけて、クインはあることに気づく。

「・・・どうしてドギ大陸の三大国すべてに碑文があるのでしょう。世界最大の大陸、ここドドニア大陸では未だ二つしか見つからないというのに」

ラルゴが懐から地図を取り出す。
現在見つかっている碑文の数は五つ。
あと二つ見つけるのも骨が折れることだが、リネの言った”解読しろ”という言葉。
今までショウタやラルゴが読んできた以上のものをそこから見つけ出さなければならないかもしれない。
場所が分かっているだけまぁ良しとできるが、ほぼ振り出しに戻ったも同然だった。

そして、全員が気乗りしない〟互いを知りなさい〟。
他人からそう言われると、なんとなくそうしたくなくなるのが人間の心理。
別に互いが互いに嫌悪を抱いているわけではない。
しかし改めてそう言われると、今までの関係がやんわりと否定されているような気がしてならなかった。

リネの言ったことを考えても答えは出ず、だが今この状況のことを考えればリネの言ったことを思い出してしまう。
誰もがため息をつきたいこの状況で、ようやく口を開いた人物がいた。

「・・・ドギ大陸に三つあるって分かっているから、最後にそこに回ればいいとして、
とりあえずめんどくさいドドニア大陸を制覇していったほうがいいとおもうんだよね。
幸いにもここはジャスリーン。ドドニア大陸最東部。んで、アイマナが最西部。
ほら、じわじわ西に向かえば万事解決」

テーブルの上の物をすべて平らげたショウタが、普通に会話に入ってきたのを見て、
別に初めてそれを見たわけではないラルゴがなんとなくこいつ、殴りたいなぁと思ったその感情をクインは素早く察知して、彼をなだめた。
ショウタはそんなこと露知らず、広げられた地図をとんとんと指さしながら言った。

「俺が調べていない国はタスニアキード、ウェイ、グライナー、リオネルダ、コキ」
「あ、リオネルダとコキはなかった」
「じゃあこの三国を調べればいい。ほかの国にはなかったから、バツしておくね」

そして、広大なドドニア大陸だったが、気がつけば回るのはそんなに大変そうではなさそうだ。
というのも、すべて大陸横断鉄道が通過する国だったからだ。
「すっご！偶然かな」
「ここまできたら必然にしておこうよぉ」
「そんな簡単なことで済ませていいのでしょうか」
「ぶぅー、気まじめすぎるよクインちゃん。うまくいくんならこれおっけ！」
「さて、大将さん。今後の方針を決めてくれ」

ショウタはうーん、といつものようにまた唸って考えて。
それも見慣れた光景になりつつあって、全員次の言葉を待っている。

「じゃあ・・・
のんびりしつつ、急ぎつつ。
お寝坊さんの多いことだから、明日のお昼にここをでて王都コラーレに行こう。
そして大陸横断鉄道にのって、とりあえず一番近い、っていうか隣国のタスニアキードに行ってみよう」

この寄せ集めのいいところは、とりあえず主導権を握る人間を全員が把握しているところだろう、とショウタは思う。
これも目的がはっきりしているから、だろうか。

反乱をおこそうなんて考える人がいないだけ事はうまく進むことがある。
大変なことも多々あるだろうが。

レストランを出ると、大分時間も遅くなり人通りも落ち着いてきた。
煌々と光るランプの規則正しい配列が街を赤く穏やかに照らしていた。

ふと、ショウタは振り返った。

「・・・だれか見てる?」

気づいたのはショウタだけではなかった。
ラルゴとツァイも同じ方向を見ていた。そのときにはその気配がなくなっていた。

「誰だろう?」
「さぁな。身に覚えがない。
ルーマが追っかけていた女たちか?」
「・・・」

ルーマの表情がこわばった。
だが、マリはそうは思っていなかった。

「その人って確か、ルーマ君の名前を奪ったんでしょう?
そんな特殊なまじないを使える人ってことは相当魔力の強い人だよ。

そういう人が傍にいたら、私気付くもん」
「・・・自信たっぷりですね」
「もちろん。だって私だもん」
「私はマリを信じるぞ！しかし、だとしたらだれだろうな」
「またなんか知らない人たちがかかわってくるんだとしたら、めんどくさいなぁ」

とにかく普通に何事もなくオリエンテーリングを終わらせたいショウタにとってはできることなら面倒はごめんだった。

しかし、ショウタにはなんとなく気づいていた。
こうしてスタート地点に立ったいま、何か大きなことに巻き込まれるんじゃないか、ということを、どこかで感じ取っていた。
なんだか心がざわついて、足早に宿に戻った。

18話　望みのために見るもの

ふらり、とマリが道を逸れそうになったその後ろから、クインが声をかけた。
「目、合わせてはいけませんよ」
どうして、という前に彼女の腕をツァイが引っ張って歩き出す。

一行はコラーレで一泊したのち、大陸横断鉄道に乗ってタスニアキードの王都、ニキに到着した。
到着してしばらくして、一行は二手に分かれた。
女性陣は食材を始め、生活する上での必要最低限の物を抱えて、王都の石畳の上を歩いていた。

今後の長旅を7人で行うことに当たり、できるだけ宿は避けて、素泊まりの部屋を借りることにした。
居心地の良さが少々減るし、食事も自分たちで行わなければならないが、節約は大切だ。
衣食住環境をまったく気にも留めない男性陣だったので、率先してクイン達がその辺を整えることにした。
そんな買い出しの最中、王都の路地裏から光る何かを見つけたマリが、目線を向けると同時に体をそちらに向けた。
それをクインが咎めたのだ。
光るそれは、人の目だった。

「タスニアキードは確かに大国です。王都はとても大きく、貴族の数も多い。

ですが、貧富の差がとても大きいのです。なぜかわかりますか？」

紙袋を持ちかえながらクインが問う。

その間も彼女は前だけを見て、マリとツァイのほうを見なかった。

マリが首を横に振るのを感じると、クインは静かに言った。

「いくつか理由があるのですが、まずこの国の成り立ちです。

大きい国ですが、最初から大きかったわけではありません。近隣の小国やそこに住んでいた民族を取りこんでいって今の領土があるのです。

元あった国の人たちの身分を保障し続けた結果長い間を経て、いびつにゆがんだ階層ができあがったのです。

王都に職を求めてきても、住むことさえできない人たちがいるのです。それが彼らです。

そして、もうひとつ」

路地裏から声が聞こえた。

子供の声だった。

泣き叫ぶ声と、暴言を吐く声。

髪を引っ張られ、足を蹴られ、体を突き飛ばされたその少年は、ほかの少年たちと変わらぬ見た目をしているのに。

「マリさん、彼らの何が、上下を決しているんだと思います？」

「え・・・わからないよぉ。

強さ？魔力？お金？」

「・・・マリ、彼らの話声を聞いてみろ。顔は向けずに」

落ち着いた声色でツァイがいう。

マリは静かに意識を路地に向けた。

「”オルフェナール”のくせに食べ物持ってんじゃねぇよ！」

「やめてよ・・・お願い！」

「お前みたいなダメ人間が食べられるものなんかないんだよ！」

「・・・”オルフェナール”」

マリがつぶやいた言葉を、クインが拾った。

「マリさんは”オルフェナール”、知っていますか？」

「少しだけ。えっと、”ハシャナール”とは正反対の人間」

「分かりやすく言えばそうですね。

強靭な筋力と類まれなる魔力を持ち合わせていながら、紅い瞳と爪をもち、虚弱で寿命の短い人間を”ハシャナール”といいます」

「テレジーがそうだな」

「えぇ。

そして、筋力にも魔力にも秀でるものがなく、それなのに普通の人間に混ざり生き、長寿である人間を”オルフェナール”といいます。

”オルフェナール”は”ハシャナール”同様、突然変異で生まれてきます。

ここタスニアキードの東部、王都を周辺とした地域には、”オルフェナール”がなぜか多いんです。

いびつにゆがんだこの王都では、下を見ないと生きていけない。”

オルフェナール”は蔑むにはかっこうの存在です」

「・・・そうなんだ」

マリはその残酷でありながらも、人間の心の引き起こす行動に、ただその一言しかもらさなかった。

酷いとも、当然だとも言わずに。

少しだけ顔を俯け、マリは眉を下げてぽつりと言った。

「教会の人からは、ニキは大きくて、豊かな都だって聞いてた。欲しいものはなんでも手に入るし、見たいものは全部見られるって」

「間違いではないですよ。ただ、こういう面もあるんです。今後、マリさんがそれを見ようと見まいと旅に影響はないと思います。選ぶのは自由ですから」

「・・・クインちゃんは、選んだんだね」

クインは答えなかった。

ショウタとルーマ、テレジーは王立図書館にいた。

地誌や地理の書物を読みあさり、現在の領土でもっとも古い場所や、人の立ち入らぬ場所、古くから口伝えで知られている場所を調べる。外で情報収集する方法に慣れているラルゴだけが別行動だった。

ショウタはうんと伸びをして、重たい痛みを生じた背中と肩の筋肉をほぐした。

王立図書館ということもあって、人は多かった。

学者風の人もいれば、旅人のような人もいる。誰もが欲しい情報をここから得ていた。

ショウタは読んでいた本にしおりをはさむと、席を立った。

そして傍でショウタと同じような本を読んでいたルーマに声をかける。

ショウタが西部を調べ、ルーマが東部を調べていた。

彼も読みなれぬ書物に悪戦苦闘しているのか、姿勢が若干歪み、目が資料に対してかなり近い。

「どう？」

小声で声をかけると、ルーマはうーん、と腕を伸ばして、声を押さえながら言った。
「いくつかそれっぽいところメモしているよ。あとでメモしたところを重点的に調べ上げてみるからね」
「俺の方もいくつか見つかったから。あとでラルゴの情報と合わせて一番一致度が高い順から調べていけばうまくいくと思う」
「だけど、やっぱり疲れるよね」
「俺ちょっと休憩がてらテレジーのところ行ってくる」
「いってらっしゃーい。僕あと少しで切りよくなるから、もちょい頑張るよ」
「無理しないで」

静かな館内を、できるだけ靴音を押さえてショウタは歩く。
絨毯の敷き詰められている館内だが、なんとなく雰囲気からか、ゆっくり静かに歩いてしまう。
天井の高い館内は、二階まで吹きぬけていて、本棚も相当高いから、まるで自分が小人になってしまったような気分だ。
そんな本棚と本棚の間、もっとも人通りのない奥の場所に、彼は座っていた。
別に地べたに座るなとは言われていないが、彼はどうやら人にじろじろ見られるテーブル席にいく気にはなれなかったのだろう。
図書館に入ってから、ルーマに手渡された黒ぶちの伊達メガネをかけて、彼は眉間にしわを寄せながら何かの本を読んでいる。

「何読んでんの？」
テレジーはちらり、と目線だけを上げたがすぐに本に目線を戻した。
最初から彼になにか仕事をしてもらおうなんて考えていなかったが、ここまで非協力的だとなんだか悲しくなるものだ。
ショウタは目線を上げて、その本棚のコーナーの案内書きに目を向

ける。
禁術、まじない、と書かれていた。
「禁術とかまじない、本から習得できるわけ？」
「・・・」
「あのさ、確かに俺、魔術は詳しくないよ。でもそんなバカを見るようなため息はやめてほしいな」

テレジーは本を閉じ、ショウタをちらり、とだけ見た。
紅い瞳はメガネのレンズによって少しだけ印象を変えて、目線散らしにぴったりだと思う。
彼は何も言わず、ショウタの横をすり抜けて行った。

人が増えてから、テレジーはより一層誰かと行動を共にする、ということを嫌がるようになった気がする。
自分が関わらなくても会話が進むから入る必要がなくなって清々したのだろうか。
そういうわけじゃないはず、とショウタは思っていた。
自分に人を近づけたくない、という意識のように感じる。
メンバーの中でもっとも長くテレジーといるからだろうか。
気難しい彼の心が、少し見えたと思えば、ふいと手を離れていってしまう。
今だってそうだ。
ショウタはテレジーを引き留めず、彼がさっきまで読んでいた本を本棚から抜いた。
テーブル席にそれを持っていくと、ルーマが大きな目をくるんとさせて問うた。
相変わらず前髪が長くて、それは本を読むうえでは邪魔じゃないのだろうか、と思うが、ショウタその点については何も言わない。

「ショウタ、なにそれ？」

「ん・・・テレジーが読んでた本」
「えー・・・もう時間ないよ？あとちょっとで閉館するって」
「ごめん。ちょっとだけ」
頬を膨らませて、ルーマは先ほどまで読んでいた資料に目を戻した。

ショウタは古くて、端が黄ばんだページをめくる。
使われている文体が確かに古い。ちょっと眠気を催すような文面だ。

テレジーがどのページを読んでいたのかは分からないが、この本自体は禁術とまじないの本。
彼は自分でまじないに疎いと言っていたのに、それを読んでいるのはいささか疑問だった。
そういえば、と、ショウタは昨晩のことを思い出した。

コラーレで宿に泊まり、翌日の午前中に発車する大陸横断鉄道に乗るため、早めに床に就こうとしたとき、ラルゴに呼び出されたのだ。

テレジーに封印のまじないがかかっているという。
彼は自分にかかった封印を解くために旅をしているのだろうか。それをシュヴァイリンに阻まれているのだろうか。
それはどんなに考えても想像の域を出ず、真実は禁術よりも強固な彼の心の内に秘められているのだ。
知る瞬間は、永遠に来ない気もする。

ざぁっと目を通したが、結局ショウタには理解できず、すぐに本を閉じて先ほどの資料を時間いっぱい読み込もうと気持ちを切り替えた。

ショウタの横をすり抜け、図書館を出たときにはすでに日が落ちて空がだんだん濃い色をしてきていた。
タスニアキードに到着したのはお昼過ぎだったから、まだそんなに長い時間ここに滞在していない。
素泊まりの貸し部屋の場所は女性陣に任せきりだったため、テレジーは一人でどこに行くこともできない。
王都ニキは時間が遅くなればなるだけ、影からまるで手が伸びてくるような薄気味悪さを感じた。
いくら王族のおひざ元とはいえ、それが治安の良さとイコールだなんてテレジーは思っていない。
自分を上から下までじろりと舐めまわすような視線に気づいたので、わざと人通りの少ないところを歩き出す。
曲がって、曲がって、まっすぐ行って、曲がって。
足を止めるのと振りむくのは同時だった。

そして完全に日が落ちた。

「点呼ー」
「ショウタ、います」
「ルーマいます！」
「クインです、います」
「マリ！いるよぉ！」
「ツァイいるぞー」
ショウタたちが出た後、館長らしい人が扉に閉館の札を立てた。

時間は１９時。
このまま全員でクイン達が借りた部屋に戻り、彼女たちが用意した夕食を食べて、本日の成果を話すというのが今日の流れだった。
だが、一人足りない。

「ちゃんとしろよ保護者」
「そうだよ保護者」
「そうだよぉ！パパ！」
「そうだそうだ！親御さん！」
「・・・えっと、ショウタさん？」
好きかって言う彼らのその無駄な結束力に自棄になったショウタは街中だというのに大声を出した。
「あぁーもうっ！
わかった！わかりました！俺が捜してくるから先帰っててよ！」
じたばたと腕を振りながらショウタはそういうと、ラルゴに右手を突き出す。
「私回線！貸して！」
「え、お前まだ持ってないの」
「持ってない」
「いやいや威張るなや」

私回線、とはいわば持ち運びができる電話だ。
手のひらほどの丸い形の凹凸のないそれが私回線。
ラルゴの私回線は艶のある黒で、ショウタはそれを数回操作すると、見慣れた名前を見つけた。
「じゃ、見つかったらマリの私回線に電話するから。よろしく」
「ちょっと、ショウタ君！」
「待ってくださいショウタさん！」
「俺一人でいいから、先帰ってて」

だが、クインだけがついてきてしまった。
別にショウタは突き放すような言葉をしているわけではない。
しかしクインはそういうのを放っておかない人だ。心配してついてきてくれたのだ。
「ショウタさん、どこに行ったかわかるんですか？」
「分かると言えば嘘。でも、なんとなくわかるかも」
「どうしてですか？」
「・・・勘だよ。クインだってわかってるでしょ。俺、そういうのよくあるって」
「勘・・・」

ショウタはそういうと、路地裏から奇異の目で自分たちを見てくる目を振り切って歩く。
ふと、すたすた歩きになってしまっていたのに気づいて、後ろを振り向けば一生懸命ついてくるクインがそこにいた。
思わず立ち止り、こんな治安の悪い場所で悪いことをしたと思い、手を差し伸べようとする。
しかし、それよりも早くクインはショウタの横に立って、行きましょうとだけ言った。

「ラルゴ君、放っておいていいの？」
ある意味放っておかれているような状況の４人。
マリがちらり、とラルゴを見ると、彼は至極真面目な顔をしたまま、ショウタたちが去っていった方向を見ていた。
「・・・ちょうどいい。お前たちにだけでも耳に通しておいた方がいいことがあったからな」
「それはショウタやテレジー、クインに聞かれたくなかったことか

？」
「クインはどちらかというとここに残ってほしかったんだがな。
ショウタのことについてだ。
とりあえず今日の寝宿に戻ってから話をする」
「・・・わかったよ」
「はぁい」
「あぁ」
三人はそれが今日ラルゴが仕入れてきた情報や、今までの情報で、
自分たちが知らなければならないことなのだろう、と察すると、うなづいて歩き出した。

ずいぶん人通りの少ないところに来てしまったことに気づいて、ショウタはちらちらとクインを見る回数が増えた。
こんなところに連れてきてしまって、と思ったが、彼女は顔色一つ変えずにショウタの横を堂々と歩いていた。
女の子だから、とは思ってはいけないと思いつつも、ここまでタフだと逆にショウタよりも彼女のほうが勇敢なんじゃないか、と思うほどだ。
路地に座りこんだ人でさえ少なくなってきた。
廃屋ひしめく古びた通りで、あまり人の気配がしなかった。
そんななか、夜風に乗って生臭い匂いが鼻についた。
「血の匂い、ですね」
さすが医者、とでもいうように、彼女は動じることなくただ事実を淡々とした表情で述べた。
ショウタもそれにうなづくと、足早に奥へ歩みを進めた。
そこだけ風景が切り取られてしまったかのようで、ショウタとクイ

ンは声も出ずに立ちつくした。

ショウタたちに気がついたのか、路地の真ん中に立っていたテレジーがゆっくりと振りかえった。
その顔は血が付いていて、据わった瞳だけがぎらぎらとこちらをみている。
彼の周りには、もうよくわからないものが転がっていて、それが人だと分かっているのに脳が認めたくないと叫んでいる。
テレジーの手には、あの時、坑道で彼に渡されたものだった大きな鎌があった。
振り回せば今ショウタたちのいる場所まで届きそうなほどの錯覚を与えられる。
その刃には、血と脂がべっとりとついていて、通りから漏れるわずかな光に不気味な反射をして、ショウタとクインの目に己が存在を焼きつけていた。

テレジーには目立った外傷がない。しかし、少々衣服が乱れているところを見れば、恐らく彼がしとめたのは彼のその紅い爪もしくは紅い瞳目当ての人間だろう。
密猟者か、ディーラーか、ブローカーかはわからない。
暗く、中に刃をひそませたその瞳は、まるで野生の獣のように人に慣れぬ冷たさを持っていた。

ショウタは激しく後悔した。
これが彼の生きてきた世界であり、彼と同族が生きなければならぬ世界なのだと。
どうして彼が必要だと碑文は記したのだろうか。
ずっとずっと考えてきた。だけれど、分からなかった。

ショウタは何も言わず、強く血のにおいを纏った彼の手を握った。

手袋越しのそれは、どんなに長い間握っていても、恐ろしく冷たかった。

１９話　蠢くもの

ダニア国は古くから敬虔なソーラテネル教の信者が多い国の一つと言われる。
教会の後ろ盾はもちろん国王。王族もソーラテネル教の信者である。

王位継承権一位の血筋は穢れ無き者とみなされ、生まれたときからそれはそれは手厚い保護を受けている。
彼もまた例外ではない。
２０歳まで人前に出ることは禁じられ、城の中でだけ生活をする箱入り人間という道が決まっていた。

「それは7歳まででしたがね」

遠い目をして懐かしそうにそうつぶやいたのは、ダニアの次期国王、シュヴァイリン・レント。
彼を王子と呼ぶ人もいれば、国王とも呼ぶ人もいるし、次期国王と呼ぶ人もいる。
シュヴァイリンはそういうことに関してはあまり気にしていないので、目の前に立つ女性が自分をどう位置付けようか気にもしなかった。

「7つの誕生日の前日に父と母が事故で亡くなったのです。
そういうことで私は早々に即位をする羽目になったのですが、問題がありました。
我が国では２０歳で即位するのが習わしであり決まりなのです。つまり例外ってわけですね。
私の今の状況ってのはなんだか中途半端。嫌になってしまいますね。

まぁ、あと数カ月で即位するので、この杞憂も晴れることでしょうが」

「そ・・・そうなの・・・」

「そういえば貴方、お名前は？」

「わ、私はエルデナのハイドラ・ウォーン・・・って、さっきも言ったけれど・・・」

「なるほど。で、何の用でしたっけ？」

思いっきり腕が重たくなったような気がして、ハイドラはやっぱり”こっち”に来たことを後悔した。

彼女の仕事は目の前の男を本社に連れていくこと。

今のハイドラはその理由と目的をしっかり理解しているから、人攫いも仕事と割り切っている。

そんな彼女が肩を落とす理由がある。

まず、国王という人間をさらうことへのためらいがまだ捨てきれていないということ。

それと、

「あー、無理ですそれ。私貴方に興味がないんです」

「・・・私に興味があるないは関係ないと思うんだけれど・・・。貴方の意思とか希望とか、そういうのはこの際重要視されないの。貴方が無抵抗でエルデナに来てくれればね、いいんだけれど」

「私にはやるべきことがあるのです。それをやり遂げるためには障害物は困ります」

さっきから話が通じないということ。

某所にいたシュヴァイリンにハイドラが現れてさほど時間はたっていない。

ハイドラが、貴方が国王、シュヴァイリン・レントですね？と確認したかと思えば、彼はまるで旧知の知り合いに合うような反応をした。
そして、世間話から天気の話、かとおもったらいきなり過去をつらつらと話し始めた。
もしかしたらこいつもオーレンみたいにどこかぶっとんでいるのではないか、と彼女は憂慮した。
しかし、ハイドラは彼の顔をもう一度見たが、そんなに危ない目をしているわけではない。
漆黒の髪はさらりとしていて手入れがいい。顔だって黙ってにっこりほほ笑んでいれば年頃の女が無視できるわけがないくらいだ。そして、しっかりと根性が据わっている紅い瞳がハイドラをまっすぐ見ている。

ハイドラは大きく深呼吸をしたのち、肩の力を極力抜いて、もう一度シュヴァイリンに声をかけた。

「抵抗されるであろうことはわかってるわ。だけれどね、私は貴方を捕まえなくちゃいけないの。
それが私のためであり、会社のためであり、世界のためなんだから」

「ほう。ずいぶん切羽詰まっているようですが、一つ聞いても？」
「一つでいいのなら」
「私が貴方達につかまることが世界のためというのなら、私はどうやら世界を乱しているとでもいうのでしょうか」

ハイドラは口を閉じ、そして、懐から一丁の銃を取り出した。
会社から支給されたそれは、未だに新しく、両手でしっかり握っていてもしっくりこない。
銃口を地面に向けたまま、ハイドラは静かに、彼女にしては珍しく

落ち着いた声で言った。
「今はまだ言えない。
私たちは来るべき最悪の事態を避けることができるのなら、無用な情報をむやみやたらに流さない。
だから・・・」

ねぇ、テレジー君。
今私がしていることを見たら、貴方は何ていうのかしら・・・

ねぇ、クイン。
貴方も私と同じ気持ちを今、感じているの・・・？

ゆっくりと、それこそ途方もなく長く感じたその時間。
下ろされていた腕がまっすぐと、黒髪の青年に向けられた。
自分で思った以上に震えていないことに、ハイドラは少しだけ戸惑いを感じたが、
重たいトリガーを引いて、かけていた右手の人差指に力を入れた。

はっと、ショウタは真夜中なのに突如目を覚ました。
夢を見ていたわけでもなく、何がきっかけなのかはわからなかった。
ただ、背中にぞくぞくと寒気が走り、後味の悪い胸騒ぎだけが残っている。
こういうことが今に始まったわけではないが、いつも原因が分からないでいた。
素泊まりの宿は長期の旅をする者にとってはうってつけの場所とい

える。
ダイニングキッチンと大きな部屋が二つとユニットバスだけ、という味気ないが格安の部屋だ。

一度目を覚ましてしまったら、再度布団にもぐっても眠気は訪れず、ショウタはこっそりと部屋を出ることにした。
同室で寝ていたのは、一緒に行動する男性陣。
ベッドがないので布団を敷きつめて雑魚寝といったところだ。寝心地は決して良くないが、疲れた体を休めるならどこでもいい。

部屋を出て廊下にひっかかっていた掛け時計を見れば、午前2時半。
向かいの部屋では女性陣が寝ている。できるだけ足音を立てずに歩く。
ダイニングキッチンに行って水でも飲んでもう一度部屋に戻ろうと、足を向けた。

その時、部屋から明かりが漏れていることに気づいた。

誰か起きているのかな・・・

ゆっくりと扉をあける。
静かに開いた扉の奥で、中の人物が息をつめ、一瞬殺気を向けた気がした。
どきっとして、それを確認するよりも早く、中の人物がショウタに気づいて声をかけた。

「びっくりしました・・・ショウタさん、どうなさったんですか？」

中にいたのは、クインだけだった。
彼女は台所に立って、カップを手にしていた。
先ほどの殺気は、気のせいなのだろうか。

「クインか・・・なんかさっき、目が覚めちゃって。クインは何していたの？」
「え？私ですか？
なんだか眠れなくて・・・その・・・暖かいものでも飲もうかと思って」
「あぁ・・・そうだよね。医者でも、ああいうものを見るのは嫌だよね」
そう言ってショウタが少しだけ顔をそむけた。
昼間の惨劇のことを言っているのだ。
眉間にしわを寄せたショウタを見て、クインがそうですね、と呟いた。
消え入りそうな小さな声だったので、ショウタは思わず聞き洩らすところだった。

クインはカップをもう一つ用意すると、ショウタにそれを手渡した。
暖かそうな湯気の立つそれはクリーム色をしていて、幾度となくクインが作って皆に提供してくれていた。
驚くほど料理ができないことが今日判明したクインだが、この優しくて甘い飲み物はショウタも気にいるほどだった。
「ありがとう」
「いえ・・・」

暫くお互いに沈黙が続いた。

クインは決しておしゃべりな方ではなく、どちらかというと大人しい。
この年頃の女の子がいったいどれほどの物言いをするのかをショウタは正直なところ分からない。
学問所に行っていた記憶がないので同年代の人との接し方に不安を覚えていた。
しかし、クインはショウタにとってちょうどいい温度を持つ人だった。
どちらかといえばショウタよりも低い温度の人かもしれないが。
本当は”シェリーン”で見せた一面もあるのかもしれないが、それは今見せることはないから、彼女にとってあれは本当の素であり、隠しておきたい素性なのかもしれない。あくまで推測だが。

そんな彼女が口を開いた。
カップの中の飲み物に視線を向けたまま。

「ショウタさん・・・ショウタさんは、リネさんをどう思いますか？」

誰もが彼女の正体を知らず、幾度となく話題に上がったがすぐに忘れてしまうこと。
クインはひとりでそれをずっと考えていたのだろうか。
ショウタはテーブルをはさんで彼女の斜め向かいに座り、暫く考えて言った。
きっと彼女はみんなで喋っているときの、軽い内容を望んでいないだろうから。

「・・・彼女は不思議な力を持っているんだろうってことしか、今は分からないな」
「そうですね。

・・・こうは思えませんか？
突如現れた私たちとそう歳が変わらないであろう彼女が、７人分の願いを叶えてくれるのですよ。
それも、対価もなく。
彼女自身が利益を得るわけではありません。何かをもらうわけではない。
私たちが世界を回るというちょっとした苦労を払えばそれが叶う。
・・・奇異だと思いませんか？」

ショウタは黙って、答えなかった。
なんとなく、クインが言いたいことが分かる。
だから、彼女の言葉を待った。
クインはずっと目線をカップに向けたまま、ショウタのほうをちらりとも見なかった。
とっくに中身は冷めてしまっている。

「本当に、どんな願いでも、簡単に叶えることができるものなのでしょうか」
「・・・」
「最初は、願いがかなうということに何の抵抗もありませんでした。むしろ、それを望んでいたのに・・・今はなんだか、恐怖を抱きます」
「恐怖？それは願いをかなえてもらえることが？」
「そうですが・・・違います。
彼女の力が、です。そんな力を持つ者がこの世にいるなんて・・・」

ショウタは彼女の言葉に返事をすることができなかった。
何となく感じた違和感。それがショウタは言葉として表現すること

ができず、ただ沈黙をすることしかできなかった。

そういえば・・・

「ねぇ・・・クインって、何か強い望みがあるから俺たちについてきたんだよね。
それって、リネみたいなものにしか叶えられないものなの？」

クインはしばし黙った後、ショウタのほうを見て、笑顔を向けた。

どうみたって同い年に見えない、大人びたそれ。
子供の直情的な表情ではない、いくつもの複雑な感情が混じっているそれを見たら、ショウタはこれ以上聞くのはやめよう、と思った。

クインは立ち上がり、カップを洗って、さっきとは違う、いつもの優しい笑みを浮かべて言った。

「旅が終わったら分かることですから、今は秘密です。
明日は早いですから、眠りましょう。お休みなさい、ショウタさん」

軽く会釈をすると、彼女は部屋を出ていった。

ショウタはカップの残りを飲み干し、軽く体をストレッチした後、さっさと寝るか、と部屋を出た。

明日の予定は、ラルゴが調べたこととショウタとルーマが書物で調べたことが一致した場所に行くことになっている。
ここからはちょっと遠いので、早起きをしなければならないのだが、どうせほとんどが寝坊してくるだろうと勝手に想像している。

寝室のドアノブに手をかけ、そのまま引こうとした瞬間、
左肩付近に強烈な痛みが走った。
「いっ・・・！」
声をあげそうになったところを寸でのところで飲み込むと、低いうなり声になった。
まるで銃で射抜かれたような、焼けるような痛み。
じんわり、と背中に汗がにじむような気がした。

その時、
ちかちかする目線がぐわん、と揺れた。
何があったのか脳がついていくまでに時間がかかった。
どうやら腕を引っ張られているらしい。
ずるずると引きずりだされ、肌寒い外に連れ出された。
真っ暗な中、街灯だけが明るい。
もちろん人通りなんてあったものじゃない。
街灯の薄ぼんやりとした赤い明りの下の顔を見て、ショウタはため息をついた。

「なんで起きてるの？クインの薬効いていたんじゃないの？」

ショウタを見下ろす表情は相変わらずのものだった。
「あの程度の薬がそうだらだらと体の中に残るものか」
「どんな・・・だよ・・・」

ショウタの腕をつかんで外に引きずり出したのは、テレジーだった。
この家にたどりついたとき、クインがテレジーを休めさせる為に薬

を処方していたのをショウタは知っていた。
そして彼は夕食も食べず、部屋で昏々と眠っていたのだ。

「どうしたの・・・？」
痛みは未だ続いていて、ショウタはしばらく立ち上がることもできず、座ったままテレジーに問いかけた。
彼はショウタをつかんでいた腕を離すと、おもむろにショウタの左肩を掴んだ。
ぎょっとして、今度こそ喉から火を吐きだすように、咽頭が痛むほど声を絞って叫んだ。
それとは対照的に、落ち着いた声がショウタの頭に降りかかった。
「どうしたんだ、それは」
テレジーが尋ねるが、ショウタは到底答えられる状況にない。
脂汗が額に滲んで、ショウタはめちゃくちゃに頭を振った。
ショウタがあまりにも痛むものだから、テレジーは掴んでいた手を離した。
なにをするんだ、と抗議しようとショウタがぎっと睨もうと顔を上げたとき、その感情が失せてしまった。

見下ろす彼の顔が、なんとなく悲しそうに見えてしまったからだ。
もちろん、眉が下がったりとか、目が細まったりとか、そういうわけじゃない。
まったく変わっていない顔の筋肉。そこからショウタは彼の感情を読み取った。

「・・・何かあったの？」
「・・・いや」
「いやだって、なんで俺の肩が痛いっての、わかったわけ？」
「・・・・」
「ねぇ」

「・・・なんでもない」

ふい、と顔をそむけた後、テレジーは屋内に戻ってしまった。

気がつけば、先ほどよりも肩の痛みは緩和されていて、うまく息もつけるようになった。

かいた汗が夜風に当たってぞっと寒気を感じさせた。

なんとなく動く気にならず、ショウタは玄関に座ったまま、膝に顔を埋めた。

できることなら夢見はいい方がいい。

そう願いながら、浅い眠りについた。

ほぼ同時刻。

ハイドラは呆然としたまま、その場に立ちつくしていた。

そんな彼女に近づく一つの影。

「どうしたよ、ハイドラ」

声をかけたのは、オーレンだった。

ハイドラはゆっくりと首だけを後ろに向けた。

血の気のない顔をして、まっしろい唇でつぶやいた。

「・・・逃がした」

「・・・ドンマイ」

硝煙を上げる拳銃を握っている感覚は彼女にはとうになく、だが、震える指がもつれて銃をずっと握り続けていた。

「撃ったのか？」
「・・・うん。怪我して、逃げてった」
「奇妙だな」
「そうなの。絶対、あっちの方が力としては強いはずなのよ。なのに・・・ど素人の私の銃に当たって、怪我して、反撃せずに逃げていったの」

オーレンは辺りを見渡した。

そして、さっぱりわかんねぇというようにお手上げのポーズを取った後、ハイドラに言った。
「とかく、ドゥドゥーさんに連絡しとけばよくね？俺は明日あっちのほうに接触すっからよぉ。次会うのは一週間後だな」
「そうなのね。あんたに会わないこの一週間、大切に過ごさなくちゃ」
「失礼な奴」
「それじゃあね・・・」

ハイドラはポケットから細長い、ペンのようなものを取り出すと、カチカチと数回動かした。
すると彼女の姿がその場から消えた。
ハイドラが消えて、暫くして、太陽が昇った。
辺りが薄明るくなると、地面に落ちていた血液に自然と目が入る。
オーレンがそれを一瞥したのち、振り返り、彼もまたその場から姿を消した。
願いを叶えるために。

20話　主のいない町

タスニアキード南東部。ほとんどジャスリーンとの国境沿いに、海を望む町がある。
もう名前さえなくなってしまったその町は、今から300年前に無人になってしまった。
崖に沿うように建てられた家々は人の手が入らず、また、潮風で大分風化が進んでいた。
近隣の街で、どうしてこの町が打ち捨てられたのかを聞けば、陸の牢獄のように閉ざされたここが不便だったからという。
それでも人々が住んでいたのだが、300年前に疫病が流行り、加えて飢饉に見舞われたため、なくなくこの土地を捨てたのだという。
すべては昔の噂話。詳しい原因は今でも明らかにされてはいない。

「うわぁ・・・すっごい眺め」
大きな通りもなく、町中の道は坂道もしくは階段がほとんどだった。
目の前に広がる視界いっぱいの海に心を奪われたルーマが感嘆の声を上げた。
それは彼だけでなく、坂を駆け下りるマリや階段に腰をおろして大パノラマの風景を眺めているクインやツァイも同じだった。
天気に恵まれ、異なる鮮やかな青に染まる海と空に、思わず本来の目的を忘れてしまいそうになるほどだ。

ショウタは王都の図書館から借りてきた資料を片手に、ラルゴに言った。
「なんだか不思議な場所だね。人がいないのに、まるでさっきまでここで多くの人たちが生活をしていたみたいだ」
「そうだよな。綺麗な場所だが、それだけじゃないって感じがする。

マリ、何かわかるか？」
とん、とん、と駆け回っていたマリがくるりと振り返った。
「うん。確かにここらへんはすごく魔力が強いよ。
世界中にはこういう、魔力が多く流れ出る土地ってのがあるみたいなの。
立地さえよければそこはたいてい教会が建つんだけれど、ここはちょっと場所的に向いてなかったんじゃないかな。
こういうスポットに教会をたてると力がコントロールされるんだけれど、ここは野ざらし吹きさらしって感じ。
それがなんとなーくふわふわとした感じを受けるんだと思うよぉ」
マリが分析をする。
確かに、疫病がはやったのはこの町だけだというのを聞いて、よほどここが外界から閉ざされた場所であるということに納得がいく。
それに平地も少ないからここに教会が建ったところで巡業には困難だろう。

「じゃ、とりあえず捜してみよっか。
この町でなにか手掛かりを捜しつつ碑文を見つけたら連絡してほしいけれど・・・」
「私回線持ってないのは誰だー？」
「・・・俺とテレジーだけだよ」
「テレジーさんはとっくに行っちゃいましたし・・・」
「じゃあさ、ショウタは僕と一緒に行こうよ」
「私はツァイと一緒に行くからね」
「おうっ！」
「クイン、余り者同士仲良く行こうぜ」
「はい」
「じゃ、何かあったら連絡ということで」

こうして、小さな広場で散り散りになった。

ショウタとルーマは坂を下りていった。
港に通じるロープウェイのところまでいくが、あいにく機械は壊れていて使い物にならない。
「あ、ショウタ。そこ、駐在所かな」
ロープウェイ乗り場の近くに小さな小屋が一つあった。
よく見慣れたそれは、確かにこの町の駐在所のようだ。
「何か記録とか残されてないかな」
ショウタはたてつけが悪くなっている扉を半ば力づくでこじ開ける。

ぶわっと巻き起こった埃とえもいえぬ臭いに顔をしかめる。
暫く小屋には入れず、ショウタとルーマは空気が流れるまで待った。

やっと埃も少なくなってきたところで、ショウタは再度小屋に入った。
机の上には放置されたノートが数冊と、ファイルが数冊だけだった。

ぼろぼろのノートは字が薄くなっていて非常に読みづらい。
しかも３００年前のもの。今とはわずかに文法が異なっているからめんどくさい。
日誌のようなそれは、どうにか最後のページだけが読めそうだった。

「えっと・・・なに。
”我々が生き残るためににもこの自然にあふれた美しい町を離れることが必要だった。
オトレアの時を刻んできたこの日誌も今では用済みだろう”

ふぅん。ここはオトレアっていう町だったみたいだね」
「不便でも、確かにこの土地を捨てるのはもったいないくらいだよね。この町の人たちは本当に、ここを大切に思っていたんだね」
「まぁ、そうだね・・・ん？」

ふ、とショウタは振り返って外を見た。
「どうしたの？」
「いや、誰か通ったような」
「テレジーじゃないの？一人でうろちょろしてるみたいだしー」
「違うと思う・・・」
「やめてよ。ここは観光地にもならないような場所だよ？僕たち以外に誰が来てるっていうの」
「・・・気のせいかな」
「そうだよ。
ここには何もなさそうだから、もう行こうよ」
そう言ったルーマに引きずられ、ショウタは駐在所を後にした。

確かに誰かに見られたと思ったんだけどな・・・

町の上の方では。
「お？」
「ツァイ？」
「あれ？マリはこっちにいるか」
くるりと振り返ったツァイが、おかしいなぁと言いながら頭を少し掻いた。
「どうしたの？」
「いや、さっきこっちに人影があっちへ行ったからな」

「それってみんなのうちの誰かじゃないの？」
「そうかもな！」
「って、早っ」
次の瞬間にはツァイはまったく気にしないというように、マリの横を歩き出した。
二人は階段を上がってもっとも見晴らしのいい場所に建てられている図書館跡に向かおうとしていた。

そのとき、後ろで足音がとん、とん、とした。
「誰ー？何か見つかったのぉ？」
ツァイとマリが振り返った。
が、

「・・・？」
「誰もいない・・・？」
「いないな！」
「嘘！だって気配したじゃない！あと、ツァイだって足音聞いたでしょ！」
「聞いたな！」
「だって、隠れる場所なんてないし、あんなに下まで続いている階段だよぉ？」
「消えたな！」
「・・・まさか」
マリがさぁっと青ざめる。
どうした？とツァイが顔を覗き込むが、マリの目には映らない。
両手を頬にあてて、わなわなと唇を震わせながら。

「きっとそうだわ。幽霊に違いない。
流行病や飢餓で死んだ人たちの幽霊なんだわ」
「マリ」

「私たちみたいなよそ者を追いだすためかも」
「マリーおーい」
「いいえもしかしたら私たちも仲間にするつもりじゃ・・・」
「かえってこーぉいー」

ツァイが話しかけてもマリには聞こえていなかった。
その時、

「あながち間違いじゃあねぇかもよ」
「きゃああ！」

これでもかというほどの絶叫をしたマリは、瞬時に傍にいたツァイにしがみついた。
気がつけばラルゴがマリの真後ろにいたからだ。
「ら、ラルゴ君！いったいどこから来たの！？」
「ん？俺たちは屋根伝いに」
「クインは？」
「あそこ」
そういって指さした先には、屋根の上で震えるクインがいた。
ラルゴの強硬策に付き合わされたんだろう。
かわいそうに、と思いながら、ツァイはマリから離れると簡単に家に昇ってクインを下ろした。
ツァイに抱えられて地面に降り立ったクインは、軽く震えながらも息を整えて、落ち着こうと努めていた。
「これだけ町に高低差があるのなら屋根を伝わなくても上がれば見晴らしがいいだろうに」
「スリルだよスリル」
「い、いい迷惑です・・・！」
「で、ラルゴ君。どうして間違いじゃないって思うの？」

マリが尋ねると、ラルゴはクインのほうを見た。
彼女はこくり、とうなづいた。
大分髪の毛は乱れているが、声の震えはもう消えていた。

「私たちも何度か人の気配を感じているんです。それも数人。
そのどれもが今いないショウタさん、ルーマさん、テレジーさんではなかったんです。もちろん貴方方でも。
ちょっと気になったので気配が消えた方にラルゴさんと向かったのですが、やはりわからなくなりました。
少し様子が不思議なんですよね。人間っぽくなかったんです」
「・・・そういえばそうだったかもなぁ」
「だからこの町は出るんだよ」
「やめてよぉお！」

ぎゃあっと叫んだマリだが、三人は彼女を落ち着かせようとはしない。むしろ放置している。
だが、あまりマリを放置しておける問題でもなさそうだ。
クインはマリに向かって言った。
「そこで私たちはマリさんたちを捜したんです。
7人の中で最も魔力を感知できるマリさんを」
「わ、私？」
ツァイにしがみついたままのマリが首をかしげながら問う。もはや半泣きだが。
「このへーんな気配が魔力を介したものかそうでないか。
魔力を介しているもんだったら幽霊じゃないかもしれないだろ。
それに、魔力は意図と意味と覚悟を持たなければ使うことができないって聞く。それを知ることが今後の何かにつながるんじゃねぇか？」
「な、なんだか行き当たりばったりなような気もするけれど・・・
だとしたら、ここじゃもう無理だよぉ。今は何も感じない」

心細そうにそう言ったマリに、ラルゴとクインはうん、とうなづいて、言った。
「じゃ、マリとツァイは幽霊探しを頼むわ」
「では、何かあったら私回線に連絡ください。あ、碑文は私たちで捜しますから」
「え・・・ちょっと、まって・・・」
「ツァイ、頼むぜ」
「まかせろ！」
「まってよ・・・ねぇ！
幽霊捜しなんて嫌だよぉぉおおおお！！！」
マリの悲鳴が響き渡る。
まだ幽霊探しと決まったわけではないが・・・。

しばらくして。
「つまり、この町は不思議なことになっているみたい」
クインからの連絡を受けたルーマがことの一部始終を聞いて、ショウタに伝えた。
ショウタはと言えば、民家あさりの真っ最中だった。
「そう・・・碑文の魔力か、誰かのまじないか、それとも本当に幽霊の住む町か・・・」
「ショウタ、相変わらず冷静だね」
「驚いたって仕方がないよ。
うーん・・・でも、碑文の魔力が外で何かをするなんて聞いたことない。
大体洞窟みたいな暗くて閉ざされた場所・・・まぁ、洞窟には限らないんだけれど・・・そういう場所に碑文があって、大体そこの周りにはブルーサイトルがあるからね」

「魔よけの石だね」
「そう。うーん・・・碑文には関係ないかもね。じゃあ俺は特に関わらないようにしておこう」
「・・・」
「障害になりそうだったらマリとツァイがどうにかしてくれるに違いないよ。あの二人は強いからね」
「・・・」

すっかり碑文に意識のすべてが向いているショウタはおそろしくそっけない。
こうなったら放っておくのがよさそう、とルーマは心の中でぽつりと思う。
ショウタがあさる家は家族４人暮しで、小さな子供がいた痕跡がある。
遠慮なく証拠を捜すショウタはまるで軍の治安部隊が国家反逆分子の家を調査するような強引さと無駄の無さがある。

ルーマはガラスの抜けた窓枠に手をついて、ぽつりとつぶやいた。
やる気に波のあるルーマは少しだけ飽きてしまったようだ。
「そういえば、テレジーはどこ行ったんだろうねぇ。誰とも会っていないみたいだし。町の外に出ちゃったのかなぁ？」
どうせまともな返事はかえってこないだろうと踏んで、それは限りなく独り言にちかい。
だが、ショウタはもごもご、と声をくぐもらせながらルーマの独り言に返した。
「テレジーはこの町にいるよ」
「なんでわかるの？」
「なんでだろう」
「なーんか、あのキチガイ王子みたいだね」
「やめてくれよ」

どしん、と音がしてタンスが倒れた。
いったい如何したらどっしりと立つタンスが倒れるのかはルーマには理解できないが、とにかくここには何もないとわかったのか、ショウタはルーマに、ほか行ってみようと提案して、家を後にした。

事実、テレジーはこの町の中にいた。
しかし、一人でいたわけではなかったが。

21話　保存された魂

マリはご機嫌斜めを通り越して、爆発寸前だった。
理由を知っているツァイはそれに対して不安に思ったり動じたりなどしない。
にこにことといい笑顔で彼女の隣に立っている。

「信じられない！信じられないよぉ！」

そう叫んだところでどうすることもできないのは、わからない歳じゃない。
マリとツァイに与えられた仕事は、先ほどから感じる気配を探ること。
魔術に長けているマリか、テレジーしかできない仕事なのだ。
だが、テレジーは先ほどから行方不明で、仕方なしにマリがやらねばならない。
その気配が魔力からくるのか、それとも本当にあの世の存在の者か。

しかしひとつ問題がある。
マリがとてつもなく、そっち系に弱いということだ。

「あぁ～・・・どうか魔術系でありますように・・・幽霊じゃありませんように・・・」
こうして怖がる様は、背伸びした振る舞いよりも十分年相応の少女に見えるものだ、とツァイは思う。
ツァイもマリの隣にいるが、彼女は魔術に詳しくなくて、魔力の気配はうっすらとしか感じることができない。
ただ、気配に関しては敏感な方なので、きょろきょろとあたりを見渡して探ろうとしている。

しかし、その動きが逆にマリを怖がらせてしまっているのだが。
小さいが、歩くには少々大変な町なので、歩き続けると膝に疲労がたまる。
あんなに美しいと思っていた海が、逆に憎らしいほどに輝いて見せた。
口を横に引いて、マリは恨めしそうに首を振った。

「マリ、疲れたか？休もうか？」
「・・・大丈夫。ただね、魔力ってのは大体どんな物質にも若干含まれているものだから、もっともっと神経研ぎ澄まさなきゃわからないかな」
「じゃあ休もう。疲れていては集中力も持つまい」
「ありがとう。ツァイ」

すとん、と階段に腰を下ろしたツァイは、懐からお菓子を取りだし、マリに手渡した。
甘いお菓子は疲れた体にちょうどいい。
ずっと歩き続けていて、腰を下ろしたときにようやく足限界に来ていたことに気づいた。
じぃん、としびれを感じる。

「やっぱりこういう魔力が吹き出す場所だと邪魔っけなものが多くて大変だよぉ」
「あ・・・」
「え・・・？」
「あれ」

つい、とツァイが指を前に向ける。
それにつられてマリが視線を向ければ、そこには小さな子供がぽつ

ん、と立っていた。
それも、目線のさきに。
マリたちが座るのは階段。そして、その階段は下へ下へと続いている。
つまり、その子供は浮いているというわけだ。しかも、足がない。
そして、マリとツァイは足だけを消す魔術なんてしらない。

うっかりそのまま気を失いそうになる寸でのところでツァイにばしんと背中を叩かれて、マリは勢いのまますっくと立ち上がった。
そして、両手を前に突き出すと、己の魔力を集中させた。
あ、とツァイが言うよりも早く、マリは目の前の子供に遠慮なしに魔術を放った。
両の手から出たのは赤い炎。火炎放射機のようにそれは勢いよく放たれ、子供をぐるっと取り囲んだ。
しかし、子供は浮いたまま、何の変化もない。
しばしそれを続けていたマリだが、ツァイがマリの腕を引っ張ってやめさせたとたん、とうとうヒステリックを起こした。

「幽霊だよ幽霊！私帰るー！！」
「待て、マリ。何か言いたそうな感じがしないか？」

ツァイの後ろに隠れてしまったマリが、恐る恐る小さな子供を見た。

背丈は5，6歳ぐらい。かわいい顔をした男の子か、中性的な女の子かはよくわからない。
すっぽりとフードを被っていて、大きな目だけが二人を見ていた。

ツァイがその子供の出方をうかがっていると、子供はふい、と踵を返し、すぅ、と宙を浮いたまま、行ってしまった。

「マリ、追いかけよう」
「い、いやだ・・・」
「面白そうじゃないか」
「本末転倒だよ・・・」

結局嫌がるマリを無視して、ツァイは子供を追いかけた。

図書館跡は町の上にある。
マリたちと別れたラルゴとクインはそこに向かった。
南京錠のかけられた鍵をラルゴは器用に開けると、埃と蜘蛛の糸でまみれた館内に入った。

「さすがに重要資料は全部持ち出してるっぽいな。なにかないもんか・・・」
図書館の棚はすかすかで、蔵書庫の扉は開け放たれていた。中身はない。
クインも何か捜そう、とあたりを回って残っている書物を開くが、特に有力な情報がない。
が、何かの記録に気づいた。
「なんでしょうか・・・これ・・・」
年と日付だけでなく、何かメモも残されている。
だが、手書きであり、さらに文体が古く、読むには難儀だった。
目を凝らして単語を拾っていく。

「海・・・死者、と、・・・？」
「どうしたよ」
「なんだか、気になる資料なんです。ラルゴさんこれ読めますか？」

「古ニニ語じゃなけりゃ多少の古い言語は読めると思うが・・・ちょっと借りるわ」
「お願いします。私は二階に行ってきます」

ラルゴに資料を託したのち、二階に上がった。
本棚自体が少ない。床の跡を見たら、どうやら人々が出ていくときに本棚ごと持っていったのだろう。
クインは窓を覆うビロードのカーテンを開け放ち、バルコニーへの窓を開けた。
日の光に当たった埃がキラキラ、と舞う中、手すりについた何かに気づいた。

「塩・・・？海が近いからでしょうか。でも、町の中では大分高地にあるというのに」
屋内に入り、何かが気になるけれど、それが何か分からない。
「クイン、さっきの資料読めたぞ」
「いかがでしたか？」
「たびたび町は津波とそれにもたらされる潮風によって飢饉に見舞われ、３００年前とうとうわずかな人を残して生きる者はいなくなった、とさ」
「そうですか」
「だが、実際は違う」
ラルゴがそういうと、クインは首をかしげた。
「確かに津波と飢饉には苦しめられていたらしいが、どうやらこの町、化け物が出るらしいぜ」
「化け物・・・？」

『そうです。海からくる、人を食らう化け物です』

はっとして二人が振り返ると、そこには青年が立っていた。
足のない、青年が。

町の中央に位置する広場は小さく、水の出ない噴水の中は緑色の苔が生え、ひび割れたコンクリートの間からは草が生えている。
「疲れたねぇ」
「うん」
腰を下ろしたショウタとルーマは、手に入らぬ証拠に悶悶としながらも体力的につらくなってきたのでこうして休息を取っていた。
噴水の中央にあるのは、手のひらに何か大事なものを抱いて祈る女神像。
潮風にあてられたからだろうか、ところどころ白く潮が付いている。
それだけでなく苔が汚らしくところどころについていて、美人が台無しだ。
きらめく海ではなく、町のほうを見て、祈っている。
水筒に入れた水を一口口に含み、ショウタはため息交じりに寂れた町を見渡して、言った。

「わかったことっていえば、ここがとてつもなく田舎であるってことかな。
１０００年前の反機械運動の名残なのかな。いくら３００年前に打ち捨てられたとはいえ、町に目立つ機械が全然ないなんてね。
やっぱりこういうところじゃ技術が入ってこないのかな・・・」
「そうかなぁ・・・僕はそう思わないかも」
「？それは勘？」
「違うよ！これ見てよ」
そう言ってルーマはポケットから手のひらほどの大きさの鉄くずを

取りだした。
ルーマと行動をして暫く立つが、彼は妙に落ちているものを拾いたがる。
そういえば何か拾っていたような、とショウタは思い出すと、ルーマが差し出した鉄くずをまじまじと見つめた。

「汚っ」
「・・・この鉄の精度、３００年前にしては相当成熟されているものなんだよ。
確かにこんな海に近いところじゃ多少の錆びは仕方ないけれど、それにしても綺麗なんだ。これでもね！」
「・・・汚いって言ったことは撤回するよ。
つまり、これだけの技術力を持っていてそれを日常生活に使っていると。
ロープウェイだけ別ん所からもらったんじゃない？グライナー国とかさ」
「甘いねショウタ。僕ちゃんと見たよ。製造元はこの国この町だった。
それにショウタ、家探ししているとき機械っぽいものを無視して捜索してたでしょ。
碑文にかかわることだから気づかなかっただろうけれど、生活水準的にはずいぶんハイテクだったよ」
「・・・気づかなかった。
まぁ、見た目じゃ判断できないってことがよくわかったよ」
「ただね、どうしてか町には確かに目立つ機械が一つもない。全部屋内に置いてあるんだよなんでだろうねぇ」
「碑文に関係ないなら、俺はどうでもいいかな」
「・・・。
さすがに海風にさらされるのが良くないから、かな。
でも世界各地には海に面している街なんて多々あるし、そういうと

ころでもちゃんと機械を使うことはできる。
直接海水につからなければ全然問題ないはずだと思うけれど」
「どうしてそこ気になるの？」
「わかんないけれど、すごく僕帝には違和感がある」
「そういうもんなのかな・・・」

ショウタは天を仰ぎ、太陽の傾き具合を確認した。
あまり時間は残されていなさそうだ。
この町で野宿はあまりにも気が進まない。寝床に戻るには遅くてもあと2時間ほどで作業を切り上げなければならない。
クイン達は収穫を得ただろうか。
ふい、とルーマに視線を送り、私回線で連絡を取ってくれ、と言おうとしたとき、
思わずぎょっと目を見開いた。

「どうしたの？」
「・・・」
首をかしげたルーマの後ろを指さしたショウタが震えていた。
なにごとかとルーマが振り向けば、そこにいたのは小さな子供だった。
年頃１０歳前後。女の子だ。
噴水の縁に、ルーマの横にちょこんと礼儀正しく座っている。
ショウタにしては珍しく青ざめていたのには理由がある。
少女の足が、透けていたのだから。

「・・・」
「・・・」
『お兄さん、旅の人？』

喋れるらしい。

ショウタたちはあまり関していないことだったが、ラルゴたちが言っていた言葉を思い出す。
この町に張られた視線。人か魔力の者かはわからない何か。
それがこれか、と納得する。
「・・・うん。ちょっと珍しいものを捜して旅をしているんだ。君はここの人？」
『そう。ミーシャっていうの』
ショウタはもう一度少女、ミーシャを頭からつま先（が存在していたらおそらくそこら辺にあるであろう場所）まで目線を渡した後、すぅと数回深呼吸をした。
思っていたよりもルーマも自分も落ち着いていることに驚く。
ここまであからさまにあると、まるでその存在が当然のように思えてくるものだ。

「ミーシャ、僕たちに何の用？」
沈みゆく夕日のような髪の色をした少女は、年相応の無邪気さはあまりなく、達観したような穏やかな微笑をたたえたまま、ショウタとルーマを見ている。
そして、すぅと表情をまじめにすると、ゆっくりと言った。

『ここから、すぐに逃げてほしいの。あいつが、やってくる』
「あいつ？」

「魔力に惹かれてやってくる無形の幻獣フォルセイトーン」

別のところから声がした。
ショウタたちがそちらに顔を向けると、マリとツァイ、そして小さな子供とその子供の後ろで優しい笑みをたたえた女性がいた。
子供の後ろから腕をまわしていて、まるで母親のようだった。
「マリ、フォルセイトーンって何」

『この海にすむ幻獣です。
普段はその姿をとどめることなく、海の中に霧散しており悪さをすることはないのですが、オトレアの町の魔力に引き付けられ、たびたび獣の姿となってこの町を襲っていました』
答えたのは女性のほうだった。
二人とも足がない。

「私たちもさっき聞いたばっかりなんだけれど。
信じられないことに、この町、疫病や飢饉で打ち捨てられたんじゃないの。
その幻獣に殺されたの。生き残ったのはわずかに5，6人。逃げて、この町のことを忘れるようにしたんだって。
だから、周りの街からはこの町が無人になった理由がわからなかった」
『お兄さんたち、逃げて。ここにいたらきっとフォルセイトーンに殺されちゃう』
「魔力に惹かれる幻獣・・・か・・・」
ショウタがぽつりとつぶやいた。
「貴方達はこの町の住人だった人？」
『はい。ミーシャと、私はフォンティーナ、この子はアルマン。この町の住人だったものです』
「そっか。
ねぇ、その幻獣ってのは次いつ現れるの？」
『そろそろ、かと思います』
「え？」
『死して、あれの現れる不規則なタイミングが分かるようになったから、そろそろ・・・』

突如、地震と間違えるほどの強い揺れが襲った。
暫くしておさまったが、何か空気が変わった、とショウタは感じた。

それを口にするよりも早く、マリが反応した。
「くるよぉ！幻獣だよぉ！」

ぐわんと海が波打つ。
海がまるで蛇のような動きをして空高く巻きあがったと思ったら、それは瞬時に町を襲った。
津波のようなそれはあっという間に町を飲み込み、体が持っていかれた。
死ぬかもと考えるよりも早く、体がぐっと引っ張られた。
強力な波にさらわれかけた体を引っ張ったのは、ミーシャだった。
次に訪れた引き波に体がぐいぐい引っ張られたが、どうにか浚われずに済んだ。
波が引き、びしょぬれの体と町を確認するよりも早く、ぞぞっと背筋に鳥肌が走った。

目の前に立っている6本足の化け物を見て、言葉を失った。

その頃、ラルゴとクインも元住人たちに助けられ、どうにか海にさらわれるには至らなかった。
「幻獣が現れるってことか？」
『そうです！早く逃げてください！』
事情を聞かされていたラルゴたちもまた、この状況を冷静に判断しようとしていた。
「津波ってもしかして幻獣によって引き起こされていたのですか？」

『・・・ええぇ。そうです』

「だから、あんな高い場所まで潮にあてられた跡があるんですね」
「おまけに機械も錆びちまうから家の外に出さないと」
『はい。貴方達の仲間も、私たちが守っています。だから早く・・・』
住人たちが二人を町の外に促す中、彼らは町の中心に向かって歩き出した。
『逃げてください。あいつらに殺されてしまっては・・・』
「死なねぇよ。
それに、この状況を見たら俺らの大将はきっとこの町に流れる魔力になおさら興味を示すに違いない。
俺たちはそういう不思議なものを調べなきゃならないんだ。行くぜ」

「はい」
住人達は不安そうに目配せした後、首を振って、説得をあきらめた。
図書館を出て、町の中心なる噴水の前に、同じように海水を頭っからかぶってずぶぬれのショウタ、ルーマ、マリ、ツァイと合流した。

そして、あまりにも大きすぎた化け物に思わず口をあんぐり開けた。

青色の固い鱗におおわれたそれは6本の足をした巨大トカゲのようなものだった。
大きさは小さな家一軒分ほどありそうだ。
たった一匹だけだが、見た目からしてかなり獰猛だ。
と思った瞬間、
大木と言ってもいいほどの太さの尻尾がぐわんと振るわれた。

「あぶなっ！」

間一髪でそれを避けることに成功したが、なんとも好戦的なトカゲだ。

『殺されちゃうよぉー！逃げてぇー！』

ミーシャが叫ぶ。

ショウタはどうしようか、とあたりを見渡すが、どうみたって逃げられそうにない。

逃げる前にその巨大な牙であっというま、だ。

「ここで死ぬわけにはいかないよね。仕方ないか」

「僕たちがこの町の人たちのかたき討ちって感じだね」

「幽霊はやっぱり怖いけれど、私たちに警告してくれたんだもん。いい幽霊のためなら頑張るよぉ」

「おっきなトカゲだな！」

「これが幻獣・・・魔力をもつ獣。初めて見ます」

「久々に暴れられるぜ」

それぞれが武器を構え、フォルセイトーンと戦う準備を整える中、武器を持たないショウタは辺りを見渡して、何か武器になりそうなものを捜した。

「どうしよっかな・・・」

そんな悠長なことを考えている間にも、フォルセイトーンは大暴れを続ける。

地面に手をつき、体をひねりながらも何か武器を捜そうとしたとき、視界の端に光を見つけた。

「あれは」

とん、とん、と足を動かし、その光が見えた方へ走ると、目の前にいきなりそれが突き付けられ、ショウタは急ブレーキをかけた。

影から見える人影から、血のにおいがした。

「テレジー。どうしたの、怪我してるの？」

光の正体は剣の柄だった。
テレジーが持っていた物で、ショウタにも見覚えがある。
彼は少しだけ怪我をしているが、その剣をショウタに手渡したのだ。

「いるなら、使え」
「い、いるけれど・・・一体」
質問は破壊音によって中断される。
ルーマの拳銃の発砲音と、マリの魔術の気配を感じ、ショウタはフォルセイトーンへ向かいなおした。

するり、と鞘から剣を抜く。
一度だけそれを手にしたことはあるが、やはり不思議な剣だと思う。
刀身は短いがなめらかで、刃こぼれ一つ起こしていない。
だが、けっして新しい剣ではない。どちらかといえば年代物だ。
恐ろしく手になじむ。
ショウタはラルゴやツァイほど戦闘に詳しくはないが、武器が人を選ぶことを知っている。
今までショウタの手にあった武器は一つもない。なのに、これは違う。
ショウタに握られることをよしとしている。他人の剣なのに。

しかし、今は考えるより行動を起こすことだ。
頭よりも体が先に動く、なんてことはめったにしないのに、ショウタは走りながら剣を構えた。

「ショウタ君！やけどしないでねぇ！」

フォルセイトーンから一番遠い場所にいたマリがぱちんと指を鳴らすと、火の粉が彼女の周りを取り囲んだ。

そして再び指を鳴らすと、火の粉が勢いよくフォルセイトーンめがけて放たれた。
マリの攻撃を避けて、ショウタはフォルセイトーンの後ろに回った。
尻尾の攻撃を避けつつ、正面から突っ込んでいるラルゴとツァイのタイミングを見計らった。
象牙色の巨大な牙をむき出しにし、前衛の二人に襲いかかっている。
ショウタはどこか弱点がないかと考えるが、攻撃を避けながらではうまい思考が働かない。

鱗は防弾かぁ・・・おまけに炎に耐性を持ってると見た。

ルーマの放つ銃撃をもろともしていない。かつんかつんと弾いている。
さらにマリの魔術も功を奏しているようには見えなかった。
これだけ固いのだ。ラルゴの剣、ツァイの体術も効くようには見えないし、ショウタの握っている剣もそうだろう。
弱点を捜さなければ、と思っているとき、ショウタはクインがいなくなっていることに気づいた。
逃げたのだろうか。辺りを見渡そうとしたとき、とん、と肩をたたかれた。

「ショウタさん」
「クイン。いつの間に」
「私に考えがあります。協力していただけませんか？」

耳打ちをされ、ショウタはその作戦に目を見開いて驚いたが、クインらしいと感じた。

ショウタは剣を鞘に仕舞うと、クインから2本のメスを受け取った。
そして、そのまま獰猛に地面をえぐる尻尾に向かって思いっきり突っ込んでいった。

「ショウタ！？」
ルーマが叫ぶ声が聞こえた。
バカ野郎と叫ぶラルゴの声も、悲鳴を発するマリの声も今ではずいぶん遠い。

止められるよりも早く、ショウタはその硬い鱗でおおわれた巨大な尻尾にしがみついた。
目の前のラルゴとツァイに気を取られていたフォルセイトーンはその突如とした奇襲に驚いたのか、天に向かって咆哮したのち、尻尾を思いっきり振るった。
振り落とされる前につぶされる。誰もがそう思ったが、ショウタはすぐにクインから借りたメスを鱗と鱗の間に突き刺した。
激痛だったのか、フォルセイトーンはとうとう飛び上がってしまった。
もう一本のメスも突き刺したそのとき、ショウタの体はとうとう振り払われてしまった。
「うわぁっ！」
宙に体が浮き、このまま落下するという寸でのところでツァイがショウタをキャッチした。
「まぁ確かに鱗の下が弱点だろうが、次の攻撃の一手が考えにくいな・・・」
ツァイがショウタを地面に下ろした後、彼女の腰に巻きつけられているナイフを取り出し、鱗に刺そうと構えるが、大暴れする幻獣にこれでは近寄れない。
ショウタに駆け寄ったクインが大きな声で全員に言った。

「皆さんすぐに離れてください！」
大暴れするフォルセイトーンは町を破壊しながら悶え続け、そして、とうとう動かなくなった。

その巨体が倒れたとき、ずん、と地面が揺れた。

「何をしたんだ？」
「メスに薬を塗っていたんです。眠らせていますが、そう長くは持ちません」
「よし。これでとどめをさせるな！」

「やめておけ」

低い声がして、ショウタたちが声のした方を振り向くと、テレジーがそこにいた。
息が荒く、怪我をしている彼をみて、クインが息をつめたが、テレジーは無視して話を続けた。

「そいつを殺せば、こいつらの願いはかなわない」

ふわりとテレジーの目の前に、ミーシャが現れた。
次にフォンティーナ、アルマンが現れ、次々と足のない人々がショウタたちの周りを取り囲んだ。
ざっと２００人ほどだろうか。
真っ青な顔をしたマリがツァイに抱きついてしまったが、さすがにこの光景に驚いたのはマリだけではない。
誰もがこの光景に息をのんだ。
「こ、こんなにいたのか・・・」
「テレジー、どういうことなの？どうしてフォルセイトーンを殺すのがよくないの？」

テレジーは鎌の柄を地面にかつん、と突き付け、息を整えた後、落ち着いた声色で言った。

「その幻獣がこの町の魔力を破壊するからだ」
「わかりません。それがどうして・・・あ・・・」
「気づいたか、医者。
この町を覆う魔力は、死者を引き止める」

そんなことがあるものか、と否定しようとしたが、ミーシャが、今自分たちを取り囲む人々が無言の証明だった。
ぞぉっと背筋が凍る思いをしたが、テレジーは尚も話を続けた。

「死者と生者が住まうこの町で、生者に訪れる死。
３００年前にほとんど生者はいなくなり、死者のみが住まう町になり、時が止まった。
長きにわたる時の停止に、町の人間の願いはいつしか本当の死になった。
そして、死者は海から幻獣を呼び出し、魔を食らわせようとした」
「本当？ミーシャ」
「フォルセイトーンの所為で滅んだのではないんですね」

ミーシャは沈黙を貫いた。逆に、フォンティーナが説明をした。

『この町の死者は、生者をこの強大な魔力から守るために存在していました。大きな魔力は、それだけで易であり害なのです。
この魔力を死者が無害化するおかげで、魔科学を進化させ、豊かな生活をすることができましたが、今となってはもはや意味のないこと。
すべてを終わらせるため、生者を入れぬよう、わずかに残った町の

人間を外に出し、この町を忘れるよう伝えました。
近隣には災害と飢饉で町が滅んだと伝え、二度と定住せぬように、住みにくい土地であると印象付けました。
図書館には改ざんした記録を残して、そして、貴方方みたいに踏み入れた者には・・・』
「ゆ、幽霊としてでてきて怖がらせたってこと？」
ツァイの後ろからフォンティーナを見たマリが言うと、彼女はこくり、とうなづいた。
『さらに、図書館の資料から化け物がでることも書いてあれば、こんな町に誰も踏み入らないでしょうと』
「何重にも俺たちに嘘をついていたことになるな」
『はい』
「幻獣が町を襲うのを知っているから、僕たちを逃がそうとしていた、の？」
『生きている人たちを私たちと同じようにさせたくなかったの。ここで死ねばこうして幽霊になってしまう。
もともと私たちはこうして、生きている人たちを守ってきた存在だから』
ミーシャはそう言って、ショウタたちに頭を下げた。
さっきから黙って聞いていたショウタは、静かに首を横に振ると、つぶやいた。

「魂を引き止める魔力。負の魔力かもしれない。おまけに害も為すとはね。
碑文の纏う魔力は正の魔力。ここに碑文はないだろう。
ミーシャ、君たちを妨害して悪かった。俺たちはもう、ここを出ていくよ。どうか、安らかに」

踵を返したショウタに、ミーシャは声をかけた。
『咎めないの？』

足を止め、ミーシャのほうを見ずに、ショウタは静かに言った。
「生きている俺たちに、死者を想像することはできないから。
君たちが選んだのなら俺たちはそれを事実として受け止めておくよ。
非難することも、咎めることも、ましてや悲しむことも、すべて違う気がする。
・・・ただ、感謝するよ。
生者を想ってくれて。ありがとう」
『・・・お兄ちゃん、これを持っていって』
ふわりと、ショウタの前に何かが落ちてきた。
手のひらほどの大きさで、私回線か何かかと思ったが、それとは少し違う。
「これは？」
『お兄ちゃん達の探し物をきっと見つけてくれると思うの。
魔力を測るようなものだから。オトレアの魔科学だから、保障するよ』
「ありがとう。いいの？」
『生者を想うのが、死者の務めだよ』
気がつけば、少しずつ住人たちの姿が消えていき、残ったのはミーシャ、フォンティーナ、アルマンだけになっていた。
『行ってください。もうすぐフォルセイトーンが目覚めます』
『バイバイ』
そして、ミーシャ達の姿も消え、町に残されたのはショウタたち7人だけになった。
先ほどまで荒れていた海は、恐ろしいほど穏やかに戻っていた。
背中を押されるようにして、ショウタたちは町の外に出た。

暫くして、町の中からばりばり、と音がして、幻獣が暴れている姿が想像できた。

「魔術師、お前は気付かなかったみたいだな」
「確かに魂をとどめていたのは魔力だけれど、それは町中で蔓延していたからわかんなかったし、第一幽霊は幽霊。魔力で作られたものじゃなくて、もともと生きていた人間の魂なんだから。わかんなくって当然だよ」
「まだ子供というわけか」
「むかつくー！テレジー君嫌いだ！」
顔を真っ赤にして怒るマリを制したツァイが、ゆっくりと町の方を振り返った。

「死者が存在し続けることは・・・苦痛なのか・・・」
「ツァイ？」
「人によるのではないでしょうか。生きていて死を望む人がいるように、死しても生を望む者、死を厳粛に受け止めたい者」
クインがそういうと、マリはすたっと彼女の前に立ち、溌剌とした声で言った。
「ソーラテネル教は生きる者も死ぬ者も、魂の価値を同じとみなすの！こうすればいいああすればいい、って考えじゃなくて、その人の魂にもっともよいものを与え続けるんだから。というわけで、みんなぜひぜひ我が教会に」
「ふふ・・・遠慮しておきます」
さすが教会関係者。こういうところで布教活動をするとは。とはいえ、ずっと顔色が悪かったマリに笑顔が戻ったのはよかったことだ。

音がやみ、大きな波音がした。幻獣が海に帰ったのだろう。
この土地の魔力を食らいつくした後、ミーシャ達は消えるだろう。
それが彼女たちにとっての望みとはいえ、あまり気のいい話ではない。
そして、さもわかっているかのように冷静に言い放ったショウタでさえ、今なお悩んでいた。
だが、それは自分が悩むことで解決することではない。
受け取った機械をポケットに入れると、ようやくテレジーのほうに向いた。
「そういえば、どこに行っていたの?そんなに怪我をして・・・」

「俺と一緒に遊んでいたんだよ」

は、と声のする方を向いた。
だが、それはかなわず、ショウタの体はあっという間に宙に浮いた。
何かの衝撃波で吹き飛ばされたということを理解したときには、体は地面にたたきつけられていた。
ばっと飛び起きると、横に呻き倒れるクインがいた。遠くにはラルゴたちも倒れている。

そして、顔を上げると、
紺青色の髪をした男が後ろ手でテレジーの手を縛りあげ、首にナイフをつきつけていた。

22話　縁の導く先に

立っていたのは、テレジーと同年代そうな青年だった。
紺青色の髪の毛は襟足が長く、一つに結わえている。
釣り目で、背は高くどちらかといえば細身。
つなぎのようなズボンをはいて、上着として専門職が着るようなケーシーをだらしなく羽織っていた。
その足もとに落ちているのは、テレジーの鎌とほとんど大きさは変わらないであろう、つるはし。
先ほどショウタたちを吹き飛ばしたのはそれか、と思うと、全員がようやく起き上がった。
どう考えたって敵だ。味方であるわけがない。
だが、一人だけ反応が違った。

「嘘だろ・・・おい、お前。なんでここにいんだよ、ていうか、何？どういうこと・・・？」
「ラルゴ？」

ラルゴが青い顔をして、指を青年に向ける。
青年はにいと笑って、ラルゴに答えた。
「ラルゴ、久しぶり。１０年ぶりかな。いや、その間に１，２回会っているかな。
だが、俺は再会を喜べない。俺は、お前ともう分かり合えないかもしれないからね」
「何言ってんだよ」
「ラルゴ、簡潔に紹介してよ。あの無礼な友人をさ」
ショウタが言うと、ラルゴは苦々しい顔をして、言った。

「オーレン・ヴァイセンハイン。ファドキアの学問所の同級生だ。

とはいっても二つ下なんだが。
頭は切れるんだけれど、切れすぎて若干イッちゃってるやつ」
「失礼なー」
「確か卒業して一番最初に就職したのは・・・」
「ファドキア国のＳＰ。でも寝坊しすぎてクビになってさ。
次に学問所の教授。先生らしくないってクビになった。まぁ当然か。
雇うなって話。
んでもってお次は長距離輸送船の貨物係。飽きてやめた。
で、今のお仕事は、製薬会社のエルデナさ」

エルデナ。聞きなれた単語と目の前の男の行動が一致せず、ショウタたちは混乱した。
どうして世界大手の製薬会社がテレジーを捕まえているのだろうか。

ラルゴはとりあえず地面を蹴って二人にめがけて回し蹴りを食らわせた。
だがその蹴りはオーレンのつるはしによってあっさり止められた。
それだけでなく、彼は片手でそのまま彼を弾き飛ばしたのだ。
わずかによじろいだテレジーの手をさらに強く締めあげれば、皮が締められる音がした。
体制を立て直したラルゴが、オーレンに訪ねる。

「エルデナには生物実験するような過激な部署が存在するって聞くな。
お前、そこでハンターとして雇われてんのか？」
「半分正解。
だが俺は”ハシャナール”を研究するためにこいつを捕まえたんじゃない。
俺の目的は、テレジー・レナードスタンと、シュヴァイリン・レントを捕えること。

捕えて、研究所の地下に閉じ込めて、お互いがお互いに干渉できないけれど一番近い場所に保管する」
「どういうこと？」
マリが恐る恐る尋ねると、オーレンは彼女の左腕に光る透明の腕輪を指さした。
ルーマ、ツァイ、クイン、ショウタ、ラルゴの腕輪も指さし、最後にテレジーの左腕を取って、痣をあらわにした。
「まぁつまりね、それだよそれ。
願いを叶えるために碑文を解き明かされるのは、困る。
だから俺はお前たちを妨害するし、こいつを捕える。お前たちの契約を破棄させてみせる」
「テレジーにこの町のことを伝えたのは、君？」
「まぁね」
「どうしてそんなことをしたのか教えてくれないか？」
「それは暇つぶし」
「そういうやつなんだよ、ショウタ。こいつは」

エルデナがどうして自分たちを妨害するのかは置いておいて。
このままテレジーが大人しく捕まっているのになんとなく納得いかない。
ラルゴが彼のことを歩く暴力だと言っていたのを思い出すが、そこまでいかなくても一方的にやられるほど弱くはないはずだ。
薬が切れたのか、となんとも危ない表現のようにも聞こえる発言だが、そうかもしれない。となると、納得はいく。
だが、それにしても、いくつか聞きたいことがある。
テレジーの身の安全もだが、ショウタの心に引っかかってしまったことが気になって仕方がなかったのだ。
ショウタはオーレンに一歩だけ近づいて、問うた。

「ねぇ、どうしてダニアのバカ王子も関係すんの？」

バカ王子・・・ねぇ、とオーレンが苦笑すると、彼はショウタの質問に答えず、テレジーに聞いた。
「言ってないの？あいつとお前さんの縁」
「言う必要がないから言わなかっただけだ。今後に何の関係もない」

「ふぅん。よし、少年」
「ショウタだ」

オーレンは切れ長の目を細め、自信に満ち溢れている、そんな表情をした。好奇心と残虐さが垣間見えて不愉快だ。
「ショウタ。教えてやろう。ただし、その腕輪を俺によこしてもらおう」
何を言っているのか。一瞬、戸惑った。
この腕輪は自分の意思でつけたものではない。
オーレンの話によると、契約というのはおそらくリネとのことをいい、その証が腕輪にあると推測できる。
つまり、この腕輪を渡せば、自分はその契約を切ってしまう。
契約を切ってしまっては、”星の記憶”を手に入れられないだろう。

「なに、ショウタだけじゃなくていいよ。
腕輪一つとこいつとこいつに関係すること。交換しようじゃないか」

しぃん、と静まりかえった。
テレジーは何も言わず、ただ黙ってオーレンに拘束されていた。
何か言ってくれればいいのに、彼はショウタたちの行動を待っていた。静かに目を閉じたまま。
わずかな沈黙が、途方もなく長く感じてしまった。
沈黙を壊したのは、オーレンの高笑いだった。

「マジで受けるな！さすが願いを叶えるためだけの寄せ集め！なーに本気で考えちゃってるわけ？
割にあわねぇじゃん。腕輪を失えば願いはかなわない。でも、こいつも連れ返さなければ願いはかなわない。
だったらお前らのすることはただ一つ。俺からこいつを奪うまで。
なーに本気で物と交換しようとしてるわけ。
忘れたのかよ。一蓮托生だってこと。7人一人でも欠けることはできないんだろぉー？
欲の強い人間の損得勘定ってのは、素直でいいね」

かぁっと、ショウタは全身の血が顔に集まったのに気づいた。
怒りではない。それは身を焦がすほどの、恥ずかしさだった。
ショウタだって人間がすべからく汚いわけでも、美しいわけでもないことを知っている。
だが、生きているうえでそれは隠されていて、それを露呈されることがこんなにも恥ずかしいことだなんて、気づかなかった。
ショウタだけではない。
マリとクインは表情をすべて落っことしたような顔をしていたし、あんなに穏やかなツァイは今まで見せたことのない険しい顔になっている。
ルーマは口をぱくぱくと動かしているが、肝心の声を出すことはできず、ラルゴは拳がわなわなとふるえている。

これ以上何かを言う前に、ショウタは手に握る剣でオーレンにきりかかろうとした。
そう思った時、大人しく立っていたテレジーが目を開けた。
そして、一瞬でオーレンの拘束する手を振り払い、そのまま体を反転させて蹴り飛ばした。

一度バウンドした体は勢いを殺して倒れ伏せ、いてて、とうめき声

を上げた。

「うぅー・・・逃げられるんだったらそう言ってくれりゃあ足を砕いていたってのに。

まぁいいや。今日はあいさつってことで見逃してやるよ。

次からは本気で妨害すっからね。

ラルゴ、気のりはしないけれどさ、俺はそんなものに頼るお前をなんとなく許せんよ」

ぱんぱんと服についた土ぼこりをはたき落とし、オーレンはラルゴに背を向けて話をした。

「とっくにあんたたちのこと調べていたんだよ。俺ら。

ラルゴの願いは分かんないけれど、もしかして、アイリーンのこと、じゃないか？」

「・・・」

「やっぱりそうか。

俺もどうにかなるといい、って思っていたよ。でもさ、俺は”星の記憶”を手に入れることは絶対に許さない」

「なんでだよ」

「今にわかるさ。いや、わかる前に止めてやる。

そうだ、ショウタ。出血大サービスしてやる。

今後の旅に関係ないことだってテレジーは言ったけれどさ。教えてやるよ」

つるはしを肩に担いだまま、オーレンはくるりと振りかえり、未だ表情の作り方に迷っていたショウタに向かって言った。

「こいつとシュヴァイリン・レントの関係をさ。

テレジーはシュヴァイリンの双子の弟だよ」

ショウタが何かを言う前に、オーレンは目の前から姿を消した。

ゆっくり、オーレンの言ったことを頭の中で噛み砕いても、何を言っていいかわからない。
テレジーは言われたことを気にもしないというように、ひねられていた手をさするだけだった。
ショウタはショックを受けている仲間に向かって、帰ろうとだけ一言告げた。

帰りの電車は、誰も何も言わなかった。
それぞれが離れた場所に座り、まるで魂が抜け落ちた後のような表情をしていた。
オトレアのこと、テレジーのこと、そして何より自分たちのことで頭がいっぱいになり、誰もが口をきけなくなっていた。
心の整理をつけるために、それぞれが自分に向かって対話している中、ショウタはぼんやりと暮れゆく夕日を見て向かいに座るテレジーに話しかけた。

「なんかさ、いろいろあったよね」
ほとんど独り言に近い言葉。
テレジーが返してくれるなんて思わなかったが、彼は淡々と言った。

「聞かないんだな。俺とシュヴァイリンの関係」
「・・・聞く資格がないよ。
でも、君と俺の縁ってのは普通じゃないって思っていたからさ。なんだか変なところが繋がっちゃったっていうかさ。それがショックかな・・・
いや、それはさすがに失礼か。
今は何も聞けないし、わからないから、そういう事実があるって受

け止めておくよ」
かたん、と電車が揺れる。
ショウタはテレジーのほうを見ずに、またつぶやいた。
「俺さ、たまにわかんないんだよね」
「・・・」
「”星の記憶”を手に入れるためなら汚いことでもしてやる、ぐらいの覚悟を決めていたのにさ。
実際なんかいやーな部分をつきつけられるとさ、決心してても嫌なことには変わりないっていうか。
・・・俺たちのこと、責めないの？」
「他人を責めるほど暇してない」
「ははは・・・
そうだよな。俺たちって・・・一体どういう関係を築いていくべきなんだろう・・・」

「ここでしたか」
別の席に座っていたクインがショウタたちのほうに近づいてきた。
テレジーの隣に座った彼女は、さも当たり前のようにテレジーの左手をつかみ、淡々と脈を取った。
「具合はいかがですか」
「悪くはない」
「傷は化膿していませんか」
「どうだか」
「抗生物質を投与しておきます。何か変わったことがあったら、言ってください」

そういってクインは立ち上がり、だが立ち止まって、くるりと振りかえった。
不安そうにうつろぐ彼女の視線が、何かを言いたいのに言えない、そんなもどかしさを抱えていることに気付いた。

暫く迷った後、クインはしどろもどろになりながら、言った。

「皆さん、やはり第一に願いを叶えたいと集まった人たちです。
ですが、このメンバーでいることに、誰も不満を抱えていないと、思います。
だからその・・・あのとき、オーレンさんの言葉で、みなさん迷ったんです。
彼は腕輪一つと貴方、とみなしていましたが、私たちにとっては、願いと、テレジーさん、なんです。
願いを簡単に捨てられるなら、最初からこの旅に参加はしていません。
ですが、貴方を失うことは、決してあってはいけないんです。
それは貴方が私たちの旅に必要な”ハシャナール”だからではなく、私たちの仲間だから、です。
どちらも捨てられるような心持ちなら、この旅はうまくいかないんじゃないか、と思います。
その・・・何が言いたいかと言いますと・・・」
「知っている」
テレジーがぽつり、とクインの言葉をさえぎった。
「知っているから、俺は自力で逃げた。
あいつも底意地が悪い人間だ。どちらも捨てられないことをわかっての質問をしたのだからな。
俺も願いを叶えたい人間の一人だ。お前らに腕輪を捨てられてはかなわん」
「テレジー・・・」
「・・・」

彼女はぺこり、と会釈をして、自分の席に戻っていった。

規則的に揺れる電車がスピードを緩め、停止した。

再び動き出すまでのわずかな時間、ショウタはテレジーに聞いた。

「テレジーの望みって、何？
あいつに関すること？」

かたん、と揺れた後、電車は動き出した。
あと数十分足らずで王都に到着するだろう。
長い沈黙を経て、テレジーはショウタの質問に答えた。

「俺の願いは、あいつを元に戻すこと」
「元に・・・？」

元にとはどういうことか、聞こうとしたが、テレジーはこれ以上の会話を望まないのか、腕を組んで首を傾けた。
外に視線を向けると、ガラスに映った冴えない顔がこちらを見ている。
ショウタは、どうしてエルデナがたった7人の願いを叶えることを妨害しようとしているのかを考えた。
いくつか案が挙がったが、どれが正解かはわかるわけがない。
ただ、これからエルデナの人間が、オーレンが邪魔をしてくるのだということは分かった。

ミーシャからもらった機械を取り出し、電源を入れると、センサーは西を指した。
もうここ、タスニアキードには何もなさそうだ。
明日には荷物をたたんで、次の国に行こう。
できるだけ早く、できるだけ無事に、旅をすすめたいと、ショウタは願って、あとわずかな時間、電車に揺られることにした。

電車と電車の連結部分に、クインはいた
私回線を取り出し、入っていた着信履歴にかけなおす。

『よぉ。ついさっきぶりだな』
「・・・オーレンさん、ずいぶんな御挨拶でしたね」

会話の相手はオーレンだった。
『まぁね。あれはお前も演技か？』
「・・・私たちが町の中にいるとき、いったい何をしていたんですか？」
オーレンの質問には答えず、クインが尋ねると、彼は鼻で笑った後、言った。
『外にいたのさ。俺とテレジー。
あんたらに話をしたことをもちょっと長く説明した後に、あいつとちょっとやりあったのさ。
で、地震が起きたと。
あいつ俺に聞いてきたんだよ。一体町中で何が起こっているのかって。
俺は答えるかわりに条件を突き出した。
6人を助けること。あんたらをね。そうすれば暫く見逃してやるとね。クイン、君たちに死なれちゃ困るからね。
なぁクイン。鱗と鱗の間にメス入れるって作戦。なかなかだっただろ？』
クインは沈黙する。
そうやって黙っている間にも、オーレンはぺらぺらと会話を続けた。

『ま、あの町の魔力が負とか生とかは俺にとっちゃどうでもいいことなんだけどさ。

とにかく、今後も定期連絡よろしくー』
「待ってください」
切ろうとするオーレンをクインが引き止める。
「エルデナがテレジーさんを欲していたのを私は知っていて、協力をしています。
ですが、”星の記憶”を手に入れることを妨害するなんて、聞いていません」
『おや、クイン。君は本当に”星の記憶”を手に入れたいの？』
「でなければ、こんな酔狂に付き合いません」
『あれまぁ。頭数合わせただけかと思っていたよ。
答えから言おうか。理由は言えない。これはかなりのトップシークレット。
ただのスパイである君に、エルデナの人間ではない君に言えることはこれ以上ないな』
「それでは、今後の仕事に支障が出ますよ」
『そういうなよ。そんなこと言ったって、俺らとの協力をやめるわけじゃないだろう。
と、あしらうのはあまりにもかわいそう。
俺がドゥドゥーさんに掛け合ってやるよ。彼の答え次第ではその理由が教えられるんじゃないかな。
君の目的は、テレジーを死なせず、彼の行動を把握し、そして俺らに君のいる場所を報告すること。
これからもよっろしっくねぇ～』
そう言って、オーレンは私回線を切った。

ため息をひとつついたクインは、暫く手の中で私回線をいじった後、車内に入った。
そして何事もなく席に着き、目的地に着くまで仮眠をとることにした。
眠りに就く前に、ふと、なぜか友人の言葉が頭をよぎった。

クインなら絶対素晴らしいお医者様になれるね！患者さんはクインに見てもらえれば幸せだよ！

クインは笑って、静かに目を閉じた。

こんな姿を見て、誰がそう思うのだろうか、と。自嘲気味に。

23話　雨音

かた、と車窓を開けると、ひやりとした空気が頬に当たった。
長すぎるルーマの前髪がいたずらに風に遊ばれて、彼は思わず目を細めた。
遠くに見える空はどこまでも鈍く、重い雲が低い位置に漂ってる。
ひと雨きそうだ。
早く目的の場所につきたい、と思った矢先、車がぼすん、と停止した。

「何何？どうしたの？」
「んあ？ちょっと待ってろ・・・」
横で運転をしていたのはラルゴで、彼は車を降りた。
「あぁー。ぺちゃんこだぜ」
「うっそぉ。何か踏んだの？」
「いや、ぼろだしな・・・ったく、ショウタがレンタカー代ケチらなければこんなことにならなかったのになぁ」
「仕方ないよーカツカツだもん。こーいうのを、しゅせんど、って言うんだっけ？」
「ちげぇよ倹約家だって」
ラルゴはトランクの中からスペアのタイヤを取り出すと、ルーマに下車するよう促し、タイヤの交換に取りかかった。
手際良くジャッキで車体を上げ、タイヤのねじを外した。
「早くしなきゃショウタたち待ちくたびれちゃうよ」
「んなこといったってよ・・・」

ルーマはラルゴの背後に立って、彼の作業をぼんやりと見ながら、他愛もない話の一つをしようかな、と考えた。
だが、ここに来るまでにもあってないような内容の話をつらつら続

けてきたのだ。いまさら何を、と思う。
それでも手持無沙汰なので、ルーマはその背中に声をかけた。

「・・・ラルゴって家族はどうしているの？」
「んー？死んだ」

一瞬言葉に詰まったことは、ラルゴも背中で感じた。
がちゃん、とすべてのネジが舗装された道路に落ちた。
真っ黒のジャケットを脱いで、腕まくりをし、丁寧とは思えない手つきでタイヤを強引に取り外す。
「・・・いないの？」
「あぁ。いないな。８つの時に死んだ」
「ごめん」
「俺にとっちゃ今更なことだ。気にすんな。気にしてねぇからよ」
「そのあとどうしたの？」
「ファドキアの従姉ん家に引き取られた」
「従姉いるの？何歳？」
「同い年だよ」
「そっか。いいなぁ～」
「んだよいきなり」

苦笑しながら、ラルゴは新しいタイヤにネジをしっかり締めなおす。
手際がよく、かつ器用なその動作には無駄がない。
ラルゴはルーマとの会話をするうえで、作業のペースを全く落とさなかった。
もうすぐにでも、車はもとのように走れるようになるだろう。
「んー・・・僕にも兄弟いたのかなぁって思って」
「あいつの話を聞いて、思ったのか？」
「テレジー？」

「そう」
「そうかもね」
「そうか」
「そうだよ」
「・・・」
「でもね、さすがに困るような兄弟だったら嫌だなぁ。命狙われたり、とかさ」
ぎぎっと対角線状にネジをしっかりと締めていく。
ラルゴは暫く黙った後、言った。

「しかたねぇさ。王位継承権をめぐって兄弟が殺し合うなんて今に始まった話じゃねぇよ。
とはいっても、あいつらはそういうことじゃないとは思うが・・・」

「王様になるのに、どうして殺し合うの？」
「んなの簡単だろ。王になれば金も名誉も普通の人間の想像するものとはケタ違いのものが手に入るんだからよ」
「僕さ、どうして人がお金とか権力とか、欲しがるのかよくわかんないや」
「無欲だな」
「もともとなにも持っていないからね」

タイヤを元に戻し、ジャッキを外し、車に再度乗り込む。
エンジンをかけ、ゆっくりとアクセルを踏めば、快調に車は前に進んだ。
ぽつ、ぽつ、とフロントガラスに雨が当たる。とうとう降り出してしまった。
暫くは小雨だったが、ふいに雨は勢いを増してきた。
軋んだ音をしながらワイパーがぎこちなく水を避けていく。
よほどの田舎道なので対向車はいない。しかし道路は綺麗に舗装さ

れていて、とても走りやすくなっていた。
ルーマは何本も筋を作って流れる水を見ながら、話をはじめた。

「ショウタたちと一緒にいろんなところを行くようになってね、ちょっとずつなんだか思い出せそうなんだ」
「過去をか？」
「うん。そのうち本当の名前も思い出せそうな気がするよ」
「そうか。お前名前さえも思い出せないんだっけ？」
「そう。町中で拾った単語をつなぎ合わせて名乗ってるんだ」
「確かお前、ウェイ国の出身かもしれないんだったな」
「・・・みたい」
「グライナーの次を指すのがウェイだったら、どうする？」

車が止まる。今まで長い長い田舎道だったが、ようやく横断歩道が登場した。
そう長く待たずに車は再度動き出したとき、ルーマはラルゴの質問に、いつものように人懐っこい笑顔をたたえて答えた。

「でも、今はみんなで”星の記憶”を見つけるほうが、早そうじゃない？」

そうとは限らない、ともいえず、ラルゴは静かに、そうかとだけ言った。

ショウタたちには告げていないことがある。
ラルゴの学問所時代の友人は多くいたが、その中で最も仲が良く、いつもつるんでいたのが彼の従姉とオーレンなのだ。
オーレンとああいう形で再会して、彼の目的を聞いて、ラルゴは嫌な確信を抱いていた。
彼は本気で自分たちを妨害しにくるに違いない。そして彼にはそれ

だけの実力と覚悟がある。
しかし、ラルゴだってみすみす邪魔されるわけにはいかない。
今はこのじんわりと感じる嫌な胸騒ぎを誰にも告げず、ただ自分のうちにだけ仕舞っておくことにした。
今のうちは。

雨の中、視界は悪くなっていたが、うっすらと遠くに建物が見えてきた。
「やっとついたねー」
ぐんぐん近づいてくる高層ビル群が、グライナー国王都トレンウェイの姿だ。

「おそい」
「うるせぇ」
トレンウェイの素泊まり部屋でなんとなく不機嫌さを醸し出しているショウタは、ソファに突っ伏していた。
「ショウタどうしたの？」
「体調がすぐれないみたいなんです。
どこかが痛いとか、そういうわけではないんですけれど。今は横になって安静にしてもらっています」
「疲れがたまったんじゃないかなぁ」
「無理はしないことだな！」
クイン達はテーブルについてのんびりお茶をしていたらしい。横に病人がいても気にはしていないらしい。
彼に寄り添っているのは小さな仲間、ウルルだけだ。
この国は魔科学、工学が非常に発展していて、こうした借家でさえテレビが置いてある。

どうやらクイン、マリ、ツァイはテレビを見る機会があまりないらしく、興味津津といったところだ。
病人よりも。
「ほれ、車持ってきたぞ。行くんだろう」
「ゆめみのやかた！」
「うーん・・・行く、行くけれど・・・あとちょっとしたら」
「なんでさっき遅いって言ったんだこら。お前、雨の中俺らが苦労して持ってきたっていうのによぉ」
「ごめん」
どうやら体調が悪いのは本当らしい。
だらだらとソファの上で体を動かしているが、起き上がる気配がない。
そうこうしていると、テレビを見ていたマリが画面を指しながら言った。

「あ、夢見館がでてるよー」

その声に、全員がテレビに映る奇怪な形をした建物に視線を向けた。

ショウタたちは二日前にグライナー国の王都に到着した。
今回はミーシャからもらった機械（というのもなんなので、ショウタは探知機と呼んでいる）も使うことにした。
どうやらこの探知機、映像を取り込むことでその魔力を測ることもできるという。
そうして資料を片っ端から読みこんでいくが、やはりそう簡単にはうまくいかず、全員でさまざまな方法で碑文について当たるも時間

がかかりそうな気配を漂わせていた。
そして昨夜、探知機をぼんやりといじりながら、映るテレビを見ていたとき、「夢見館」というアミューズメントパークのコマーシャルが出た。
ふざけた色彩とバランスを持った屋敷で、最近できたばかりだという。
全く興味ないものだったが、探知機が光を放って反応してしまったのだ。
嘘だと思っていたが、探知機はそのコマーシャル以外では反応を示さない。
半信半疑だが、探知機の性能を一応信じているので、一行はその胡散臭いアミューズメントパークに乗り込むことにしたのだ。
そして翌日、つまり今日の朝、ショウタからレンタカーの情報と少なすぎる金を持たされた免許保持者のラルゴが話し相手にルーマを連れてそこへ行くための車を調達させられたという。
ちなみに、ほかの免許保持者はツァイとテレジーだが、ショウタは彼らの運転を信頼できなかったのだろう。それにはラルゴも賛同する。
そうして現在昼過ぎ。今に至る。

「今日は雨だしショウタ君体調悪いみたいだからさ、明日でもいいんじゃない？急ぐ旅じゃ・・・」
「急ぎだろ」
「・・・でもさ、そんな一日二日遅くなったって大丈夫だよぉ。女神さまは急ぐことばかりがすべてじゃないって言ってるもん」
ショウタは伏せたまま、手だけをひらひらと振った。
「マリ、助かるよ・・・」
「どうするのラルゴ？」
「ま、仕方ないか・・・じゃ、俺出かけるわ」
ラルゴはジャケットを羽織ると、そのまま部屋を出ようとした。

「どこにいくんだ?」
「せっかく車があるんでね、王都をぐるっとしてこようかなぁと」
「あんなぼろ車で?」
「・・・うるせぇ。あぁ、そういやマリ」
部屋を出ていく寸でのところで、ラルゴがテレビの前で行儀よく座っているマリに声をかけた。
「なんで車なんて調達させたんだ?普通に電車で行けるだろうに」
きょとんと、大きな瞳を丸くさせたマリは、少しだけ困った様に目を動かした後、小さな声でポツリ、と言った。

「ピクニックみたいで楽しいと思うし、それでみんな、仲良くなれるかなぁって思って」

今度はラルゴが面食らう番だった。
この一番幼い少女が前回のことをショックに感じ、周りを思った結果なのだろう。
なんだか聞いたこと自体が無粋だったなぁと、ラルゴはバツが悪そうに頭を掻いて部屋を出ていった。
マリの気づかいを知っているツァイが、満面の笑みを浮かべながら、マリの頭を優しくなでた。
「明日は晴れるといいな。私がお弁当を作ろう。遠出だからな」
「ツァイ、ありがとう」
「じゃあ僕は食べるの手伝ってあげるよ」
「キュウー!」

ショウタも力なく俺も―、と言った後、彼はふらふらとソファからようやく起き上がった。
唇の色が白く、顔も心なしか血流が悪い。
長く息を細く吐いた後、ショウタはゆっくり扉に向かって歩いた。
「ショウタさん、大丈夫ですか?」

「今日はもう寝る。夕ご飯は俺抜きでいいから・・・お休みなさい。クイン、薬ありがとう」
「・・・お大事になさってください」

ショウタが部屋を出ていったあと、未だ立ったままのクインに、ルーマが声をかけた。
「心配なら付いていけば？」
「え！？え・・・そ、それは・・・遠慮しておきます。ほら、あそこは男性の方々が寝る場所ですし、それに部屋にはテレジーさんがいますから心配いりませんよ」
慌てて言い放ったクインはそそくさとソファに座りなおし、テレビのチャンネルをかちかちと変えた。
マリがその反応にいち早く気づくと、クインの横に座って、にやぁっと顔を緩めながら訪ねた。
「何何、クインちゃんってショウタ君が気になってんの？私はてっきりテレジー君かと思ったぁ」
ぎょっと、マリの反対側にとび跳ねたクインは、勢いよく立ちあがり、顔をぶんぶんと振った。
「わ、私は医者ですから。体調を悪い人を気遣うのは当然です！そんな・・・不真面目なことを考えているなんて一切ありませんからね！」
最後は少しだけ語尾を強くして、彼女は部屋を出ていってしまった。

出ていく寸での彼女の顔は図星だからか、照れからか、憤慨からかはわからないが、ほんのり頬を桃色に染めていた。
おやおや、とツァイが言うと、マリとルーマの頭を軽く小突いた。
「いたい」
「いたぁいぃ」
「あんまりクインをいじめるな。あの子は真面目で一生懸命なんだ」

「ぶぅ。そんなのわかってるもん」
ふてくされたマリに、ツァイはにこりと笑い返した。
「さて、晩御飯の準備でもしよう。マリ、ルーマ、手伝ってくれるな？」
「えぇー・・・テレビ見たぁい」
「僕帰ってきたばっかりだよー」
「今日は二人が好きなちり鍋だぞ？」
「手伝う！」
「しかたないなぁ～」

雨足は勢いを増したが、ショウタとテレジー以外が食卓に着いた時には止んだ。
ショウタはそのまま起きてこず、翌朝もマリよりも遅く起きてきた。
まだ冴えない顔をしたままだが、これ以上予定をずらすこともできず、一行は準備を整え、ぼろ車に乗り込んだ。

胡散臭いアミューズメントパーク、「夢見館」に向かうために。

２４話　夢見館にようこそ

ぼろ車に乗って走ること2時間。
途中クインが酷い乗り物酔いでグロッキーになったり、体調すぐれないショウタが寝落ちしたり、そもそも最初からテレジーは寝ていたり、と相変わらずだったが、
にぎやかに明るく楽しく、マリのささやかな願いは成功したと言えるだろう。

グライナー国北部の郊外に大きなアミューズメントパーク、夢見館が存在する。

その姿はテレビで見るよりもやはり奇抜だった。
来客人数は思っているよりも多い。そしてやはり子供が多い。
パークの中心にあるのは夢見館本館であり、その周辺には５つのエリアに区切られている。
アトラクションをメインにおいているエリアには、グライナーの工学技術が余すことなくつぎ込まれている。
スピードと重力を楽しめるコースターや、カヌー、ゆったりと回る観覧車など数多くのアトラクションが観客の心を魅了していた。

「うわぁー！」
「わぁー！」
感激して思わず声を上げたマリとルーマが一歩踏み入れた瞬間、まっすぐにアトラクションに向かおうとした。
それを慌てて引き止めると、彼らは不満そうに声を上げた。
何故責められねばならない、と思うのは間違いだろうか。
「本来の目的、忘れてない？」
ショウタが二人をを咎め、そして探知機を取り出した。

「ほら、なんか反応してる。
やっぱりここに何かあるのかな」
「碑文に関係していることだといいですね」
「じゃあさ、あっちいこうよ」
「やだあっちがいいよぅ」
「いや、だからさ・・・」
「・・・くだらんな」

何か反応がないか、とか、怪しいところはないか、と園内を歩いていると、
さまざまな色の生地をつぎはぎしたような服をした人間たちが多いことに気づく。
それらの全てが顔を白のどうらんを塗り、元の顔がわからないようなメイクを施している。
小さな子供たちがきゃっきゃとそれらを囲んでいるが、ショウタにはどうしても怪しい人にしか見えなかった。
純粋な子供には何か、夢を与えるものだろうかと思い、ラルゴに訪ねた。

「なに、あれ」
「しらねぇの？クラウンだよクラウン。ここのメインキャラか何かじゃねぇの？
奇抜な格好をしたひょうきん者でな、みんなを楽しませるのが仕事だよ」

張り付いた満開の笑顔の彼らが、ショウタたち一行に手招きをする。
あっさりついていったのは、マリとルーマだった。
そのあと何かをもらって、彼らは小走りにショウタたちのもとに戻ってきた。

テンションがかなり上がったらしく、顔を赤く上気させている。

「飴くれた！」

「・・・・・・・・・よかったね」

ふぅ、とショウタはため息をついた。確実にこの園内の空気に流されかけている。

大分体調を持ち直してきたので、歩くことは苦ではないし、園内を流れる明るい音楽も耳ざわりではない。

楽しいならいいかな、とショウタがぼんやりと思っていると、クラウンのほうをじぃっと見ているクインに気付いた。

目がキラキラとしていて、でも胸の前あたりで手を仕切りにいじっている。

「・・・クイン、行ってきていいよ。クラウン呼んでるし」

「・・・！？」

ぼんっと顔から火が出たような反応をしたクインは、声を出すよりも早く、ツァイに引っ張られた。

ツァイもクインが何をしたいかに気づいたらしい。それで気を利かせたのだ。

「飴もらおうじゃないか！な、クイン」

「え・・・え・・・つ、ツァイさんが欲しいのなら、その、ついでに私も・・・」

照れ気味でそういうクインに、ツァイは相変わらず笑みを浮かべている。

誰もクインがそこではしゃごうが咎めないのに。

「もっと笑ってもいいと思うんだよね」

「クインのことか？」
ショウタがそういうと、ラルゴが返す。
「うん。なんていうか、クインってただ落ち着いているっていうより、どちらかというとそういう明るい感情を抑えているって感じがするんだよね」
「そうか。よく見てるんだな」
「俺、みんなが思っているよりみんなを見てるつもりだよ。もちろんラルゴ、君もね」
そういうと、ラルゴはそれが何を意味するのか捉えにくいように、にやっと笑った。

「おい、捜すんじゃないのか？」
「あ、うん。そろそろ行かないとね」
長いため息をついたテレジーにショウタは謝ると、クイン達を引き戻し、先に進むことにした。
ようやくちゃんと目的を遂行しようと7人が歩き出した時、ラルゴがショウタをつつきながら言った。
「おい、あいつ珍しいな。普通こういうところにきたら真っ先に一人で捜しに行っちまうっていうのによ」
「愚問だな情報屋」
「げ、聞いてたの」
「まぁ、こいつが俺に探知機を渡すなら今すぐにでもこの観光まがいなことから抜けさせてもらうがな」
「けぇーっ！かわいくねえやつ！」
「まぁまぁ落ち着いて。みんなー、いくよー」

かたやアトラクションに心を奪われる者、かたやあまり仲のよくない者。
これを体調の悪いショウタが取りまとめるのだ。

こっそりと、ショウタはみんなに見えないところでもう一つ、ため息をついた。

そして結局一周園内をぐるりと回り、残すところはただ一つだけになった。

「やっぱりメインの館かぁ」
「マリ、このアトラクションってのはなんだ？」
「えぇっとねぇ・・・このパンフレットによると・・・
まずは鏡の迷路をこえて、なぞ解きをしながら進んで、部屋の奥にある真実の鏡のお告げを聞くんだって」
つまらなさそうだ、と思って近づくと、探知機がマックスの値を出した。
「胡散臭いけど、一番怪しいのはここだね」
「行こうぜ。迷子になるなよ」
「そういうやつがまいごになるんだよー」
「うるせぇやい」

とん、と一足踏み入れると、そこは全面鏡張りの迷路空間だった。
「うっわ、気持ち悪い。ちょっと全員で歩くと無限に人がいるみたいでいやだ」
「いやだってお前な」
「少し間をあけて歩きます？ショウタさんについていけば大丈夫でしょうし」
「絶対迷子になると思うよぉ。それに私一人で歩きたくない」
「仕方ない。みんな、一緒に行こう」
「いや、いやって言いだしたのお前だよ、ショウタ」

歩くたび、ショウタはいやぁな気分になった。
自分が鏡の中に映っていて、さらにその鏡の光を反射した別の鏡がさらに自分を映して・・・を繰り返していく。

「こりゃどれが本物かわかんなくなるよねー・・・
・・・・・・あれ？」

さっきまで全員傍にいたはずなのに。
気が付いたら鏡の中にいるのはショウタだけだった。
「うっそ。こんな早くわかりやすく迷子とか・・・」
軽く混乱気味に足をすすめるが、あっさり鏡にぶつかる。
正しい道を捜しながら歩くも、たびたび鏡にぶつかってしまう。
気持ちも悪くなってきたし、踏んだり蹴ったりだ。
ショウタは半ば逆切れにも似たようなテンションで歩みを進めていった。
そのとき、ふと気配を感じ、そちらの方を見た。
そこに立っていたのは・・・

とっくに全員とはぐれてしまったことに気付いたテレジーは黙ってすたすたと歩き続けた。
彼は別に鏡に顔面衝突することなく、快調に足を進めていた。
そのとき、幾度となく園内で目撃したクラウンと鉢合わせた。

「ようこそはじめましていらっしゃいこんにちは！私はパイアロッテ。しがない道化の者にございます」

恭しく礼をしたクラウンは、他とは違ってどうらんではなく、真っ白い仮面をかぶっていた。
テレジーは彼が名乗るよりも早く、大鎌を取り出し、パイアロッテに向かって一振りした。
彼はふわりと浮いてそれを回避したのち、くるりと優雅に着陸してみせた。
なんてことはなかったというような反応。
頬まで釣り上った、三日月状に切り込みが入れられた口が、不気味な笑みをたたえているようだ。

「ごあいさつですね。一応なぜ？と聞いておきましょう」
「ただの従業員程度に鎌を向けるほど俺はいかれているつもりはない。お前からは人間の気配がなく、魔力のにおいがする」

テレジーがそういうと、パイアロッテはくっくっくと笑った。
そして、再度深々と礼をした。

「さすがにございます。テレジー・レナードスタン様。
私はアトラクションの案内係ではございません。
そう、腕輪と戒めを持つ貴方方7人を待っていた者です。
私に気付いたのは、貴方様とマリフォルナ・ルーセント様だけでございます」
「他の連中は魔力に疎いからな。
お前、俺らが”星の記憶”を求めていることを知っているな」
「もちろん。
私はとある人から頼まれて貴方方に御挨拶をするため向かったまでです」

テレジーは鎌を仕舞い、大人しくパイアロッテの前に立った。
その反応にパイアロッテは表情がない分、動作で疑問を表した。

「素直ですね」
「そのとある人は、先視の力を持っているやつだな」
「・・・なるほど。貴方様は私の言葉だけでそれを見抜いたというのですね。賢い方だ。
では、貴方は”どういう人”であるかもあらかた目星がついているのですか？」
「あぁ」

パイアロッテは両手を広げると、わかりましたとだけ言った。
すると、テレジーの足元にぽっくりと穴が開いた。
そのまま彼は落ちて、落ちた。しかし一向に床には叩きつけられなかった。
その時、声が降ってきた。パイアロッテの声だ。

「私の望みは、貴方方を知ることだけです。
気楽になさっていただければそれだけですぐに終わります」

ばかばかしい、と思いながら、テレジーはまじないのかかった空間を落ちていった。
落ちている、のかははなはだ不明だが、そのまま真っ暗やみの中にい続けた。
すぅと目を閉じて辺りの気配を探るが、ショウタたちの気配はない。

すると、落ちるスピードが緩まってきて、テレジーはそのまま無事に着地した。
しかしそこが果たして床なのかはわからない。何より真っ暗闇なので情報が少なすぎる。
パイアロッテがどういう手段を用いて自分たちを知るつもりなのかは大体分かる。
何が来ても動じるつもりはないが、こうやってまるで自分が歩く後

ろからその軌跡や行く末を見られているのは不愉快だ。

一歩だけ足を踏み出すと、ふわりと風が舞った。
それはいきなり突風のように強くなり、自身に吹き付けたので、思わず顔をそむけてしまった。
彼が首に巻く長いマフラーの先にはガラス玉が両端に付いているのだが、その二つが風であおられてぶつかってかつん、と音を立てた。

そして、ようやく突風がおさまり顔を上げたときには、先ほどまで何が来ても動じないと決めていた心がぐらり、と揺さぶられた。
だが、すぐに冷静さを取り戻して、テレジーは目の前の存在にまっすぐに向き合った。

そしてそれは、テレジーに優しく微笑んだ。

それを見て、やはりパイアロッテは悪趣味だったと再確認する。
ショウタたちも各々がこんな厄介事に巻き込まれているのだろうか。

だが、今は他人がどうとかはどうでもよく、テレジーはただその目の前の人物、
シュヴァイリン・レントをぎっとにらみつけた。

25話　決められた過去、仕組まれた未来

彼女は気がついたら真っ暗闇にただひとりそこにいた。
そのときになって初めて気づいた。やはり自分たちの存在はいくつかの者たちに知られているのだと。
少なくともクインはそれを二つ知っているが、それ以外にも自分たちに干渉してくるものがいるのか、と改めて気付かされた。

「それにしても、ずいぶんなところまで来てしまいました」

これまでの軌跡を懐かしむかのように、彼女はその場にしゃがみこんで、つぶやいた。
声は闇に溶けてしまって誰も聞いていない。

ここにくるまで、幾度迷ったのだろうか。
そして、幾度葛藤を抱いてきただろうか。
今のクインにはすべてが遠い過去のもののように感じてしまっていた。
自分にはもう、迷いはない。
今歩くことはすべて意味があり、これこそが自分にとって最善の方法でしかない。
たとえそのために誰かが困っても、関係ないと思えるほど割り切れるようになった。

しかし、クインは自分の行動をもはや悔いるつもりはないが、一つだけどうしても心に引っかかるものがある。
それは学問所時代の友人の言葉だ。
クインは飛び級をしているのでその人物は年上だが、クインを同級生として分け隔てなく接してくれたたった一人の人間だった。

成績優秀であったクインに、卒業式の時その人物は彼女を激励した。

　クインなら絶対素晴らしいお医者様になれるね！患者さんはクインに見てもらえれば幸せだよ！

医療行為を行う人を医者だというなら、クインは間違いなく医者だ。

しかし、人を本当の意味で癒すというのなら、クインはいつも迷う。

さらに、心に一物抱えている彼女が行う医療行為は、純粋に人を癒そうとする意味をもたないのかもしれない。

彼女の心は複雑で、そしてその悩みは誰一人にも相談することができない。

ましてや、ともに行動をする6人には。

そのとき、

きらきらとした光の粉がクインの目の前に集まった。

暗闇に慣れた瞳にはその光は眩しすぎて、クインはぎゅっと目をつぶった。

瞼を焼くような痛みが徐々におさまると、恐る恐る目を開けた。

そこに立っていたのは、二人の男女だった。

男は背が高く痩身。神経質そうな表情をしているものの、微笑をたたえている。

女は腰ほどまで伸ばした柔らかそうな髪をしている。目じりが優しそうに下がっていて、クインに笑みを向けている。

だが、クインは眉間にしわを寄せ、口を横に引いた。

普段の穏やかな彼女の表情ではなかった。

そして、クインは喉からかすれた声を振り絞った。
声帯が痛いほど震えて、咳きこみそうになった。
それでも、彼女は目の前の二人に、声をかけた。
１０年ぶりに。

「お父さん・・・お母さん・・・」

にこり、と微笑み返した二人は、クインの両親だった。

「パイアロッテの幻、ということですね。
貴方達は、私が最も会いたくないものの姿になるのですか？」

クインは立ち上がり、懐から薬瓶、メスを取り出した。
時間をかければ魔術も使えるが、相手は何をしてくるかわからない
以上、魔力に自信のないクインはその選択肢を捨てた。
そして、母親が口を開いた。
細くてそれほど高くない声が、クインの鼓膜に届いた。

『クイン、私たちの大切な子。
すごく、すごく、会いたかったのよ』

その言葉を聞いたクインは、かっと怒りが頭に昇ったのだろう。
彼女はヒステリック寸前のように叫んだ。

「やめなさい！私がそれを言われることがどんなに嫌かわかっている
でしょう！？」

言った後にクインは怒りを抱えたまま先ほどの言葉を反芻する。
わかっているもなにも、目の前にいる二人は当の本人ではない。
クインの両親は、１０年前に死んでいるのだ。

「・・・本当に、悪趣味です。
”貴方”に教えましょう。
私の両親は、嫌なことに蓋をして現実を見ずに、理想的な家族を演じようとしたんです。
虫唾が走る。自分たちを無理やりにでも幸せである、普通である、何もおかしいことはないと思い込んで、そうであるようにして、
私は・・・私は・・・」

『どうしてそんなこというの？クイン。
本当に、私たちは幸せな家族じゃない。
何が不満なの？お母さん、ご飯おいしくなかった？お父さんがいつも帰ってくるのが遅かったから？』

「不満なのは・・・」

途端、足元が泥のように不安定になった。
バランスを崩し、クインはどんどんと真っ暗闇に体を飲み込まれていった。
取り乱しそうになる心を押さえつけ、悲しそうにこちらをみる両親を見た。
どんどんとうとう首まで埋まってしまった。すべてが飲み込まれる前に、クインは両親の幻につぶやいた。
震えた声で。

「私が不満だったのは・・・
そんな風にされてしまえば、自分がいっそ惨めな気がしたんです。
親に、憐れまれているような・・・そんな気が・・・」

すべてが闇に飲み込まれ、クインはそのまま意識も深く落としていった。

次に気がついた時には、先ほどとは打って変わってすべてが白い部屋に移動していた。
部屋だと気付いたのは、テーブルや椅子がそこにあったからだ。
その色がすべて白色だったので、色を持っているのはクイン自身と、

「・・・皆さん」

先に部屋に来ていた、ルーマ、マリ、ツァイだけだった。
三人とも顔色がすぐれず、椅子に力なく座っていて、クインが現れたときにわずかに表情を変えただけだった。
クイン自身も、再会を心の底から喜ぶ半面、その感情がいま表に出てこないことに気づいていた。
空いている椅子に座る。彼女が座れば残りの椅子は3つ。
やはり、準備されている場所だった。
「皆さんも、その、見たんですね」
「・・・あれって、自分の会いたいものに会えるってこと?」
マリが大きな瞳を潤ませてクインに尋ねた。
その言葉にクインはショックを受けた。
なぜなら、マリと考えていることが逆だからだ。
「・・・私は、会いたくない人たちに会いました」
「え・・・」
「・・・だとすると、基準が別にあるということだな」
「みんなが揃ったら、ここから出られるのかな?」
ルーマが窓も扉もない部屋を見渡していった。

すると、次に現れたのはラルゴだった。
やはり彼も渋い顔をしていて、でもクイン達を見て少しだけ表情を緩めた。
「よぉ、その顔は」
「わかってるよ。言いたいことは」
「パイアロッテは一体何を私たちに伝えたかったのでしょう」
「僕たちを知るって言っていたね。何かわかったのかな？」

「わかりましたとも」

はっと、声がする方を振り返れば、そこには白い仮面をつけたパイアロッテがいた。
「残り二人は？」
「テレジー様はそろそろ来るでしょう。
ショウタ様は、少々お時間をいただいております」
「聞きたいことがいろいろあるんだが」
「それはまたいずれかの機会でも十分でございます。今はしばしの休息を」

手短に用件を告げたパイアロッテはくるりと一回転するとその姿を消した。
すると、先ほどまでなにもなかった真っ白いテーブルの上に、お茶とお菓子が用意されていた。
「出すのちょっと遅いんじゃない？」
一番にこの部屋に到着したルーマが早々とお菓子を口に放り込む。
「仕方ねぇ。待つか」
「・・・はい」
静かに全員がテーブルに着き、ゆっくりとお茶を飲んだ。

そして暗闇の中で。
シュヴァイリンはショウタたちが決して見たことがなく、そしてテレジーにとっては見慣れた表情で、彼の目の前に立っていた。
何かに取りつかれたようなそぶりはなく、穏やかに。
それは肉親に向ける慈愛と変わらなかった。

ゆっくりとシュヴァイリンはテレジーに近づくと、彼のその手を取った。
お互いに手袋をしているが、じわりと感じた暖かさに、思わず幻であることを忘れそうになるほどだ。
『どうしたんですか?』
ふわり、と笑ったその姿は、姿こそ今と同じだが、たちふるまいは2年前の、テレジーが知っているものだった。
暖かなその手に、声に、テレジーは彼を直視できなくなっていた。
「・・・いや、なんでもない」
『そうですか。よかった。
どこに行っていたんですか?私もセラーも心配していますよ。早く帰りましょう』
「・・・」
『テレジー?どうしたんですか?』

優しい声は、過去の穏やかで幸せだったときを思い出させる。
だが、テレジーはその手をゆっくりと振りほどき、彼に背を向け歩き出した。

『テレジー?』
「・・・お前は、俺をその名で呼ばないから」
『・・・』

「いい夢だったと思う。
おかげで俺の決心も鈍らずに済んだ。感謝する」

そしてゆっくりと振りかえると、少しずつシュヴァイリンが消えていった。
少しだけ悲しそうな顔をして、そして最後にテレジーの心を軋ませる、あの優しい笑みを浮かべた。

「お前を助けるためなら、どんなことでもしてやるよ」

ずぶ、とテレジーの体は闇の中に沈み、そして、
ラルゴたちがいる白い部屋へと導かれた。

あとはショウタだけを待つことになったとき、

「・・・私、ママに会ったの」
口火を切ったのは、マリからだった。
手を膝の上において、目線を落としてつぶやいた。
「私のママはね、私が生まれてからずっと眠っているの」
「眠っているって？」
「わからないの。原因が。
・・・私の願いは、ママを助けること」

マリの願いは、子供らしくでも、しかしとても切実だ。
母親を純粋に求めているのだろう、とクインは思った。本当にその程度にしか思っていなかった。
次に口を開いたのはクインだった。

「・・・私は、両親に会いました。私の願いに両親は関係ないと、思っています。
いえ、生んでもらったとはいえ、私にもう両親は関係ないんです。それを今更見せられました」
彼女は淡々とそれを告げた。
未だに目の前に立っていた両親を思い出すとぞっとした。
自分の何が知りたかったのだろう、とクインは考えるが答えを出せない。
彼女の告白に一瞬息をのんだが、ルーマも自分のことを話した。

「僕・・・記憶ないでしょ。
だから、正直なところ、誰にも会わなかった。
でも・・・変な場所に連れていかれたんだ。
知らない町。知らない人たち。きっとその人たちが僕の過去なんじゃないかな」

「そうか。で、ほかの面々は？」
ラルゴがまずツァイに振ると、彼女はにかっと笑った。
だが、その笑みがいつもと違うことに気付いた。言わないが。
「私は同じ道場の仲間だったな。ラルゴは？」
「俺は従姉だったな」
「なんで？」
「・・・世話になったしな」
「テレジーはもちろん・・・」
「・・・あいつだ」

しばし沈黙が支配したのち、クインが全員に問うた。

「皆さんは、その時、どう思いました？

私は意地でも願いを叶えたいと思いましたが・・・」

その言葉に、マリが目を丸くして驚いた。

「クインちゃんが熱い・・・
私も、もちろんだよ。ママを絶対に助けるの」
「僕も。見せられた世界を知るためにね」
誰もがうなづいたのをみて、クインは一つ考える。
「もしかしてパイアロッテは私たちが”星の記憶”を捜すことを知っているのかもしれませんね」
その仮説にラルゴが同意する。
「そうかもな。じゃなきゃあいつが今も帰ってこないのがうなづける」
「ショウタのこと？」
「あぁ。リーダーみたいなもんだしよ。でもお前は結構早めに帰ってきたよな。クソガキ」
「ふん」
「これからどうしよう・・・」

と、思った時に背景がざあっと遠さがった。
声を出す間もなく、その魔力にさらされてしまうだけだった。
気がつけばそこは何もない原っぱだった。
遠くに音が聞こえて、そちらを向けば、どうやら夢見館から遠くへ飛ばされたらしい。追い出された、のだろうか。
すでにそこには、7人、しかいない。

「ショウタ・・・」

ショウタが帰ってきたのだ。
だがその顔はまるで何が起こったのかわからない、というようにき

ょとんとしているもので、すこしだけ間が抜けていた。
「ショウタ、どうだったんだよ？」
「え？」
「だから、誰に会ったんだって？一体どんな奴だった？」
「それは・・・んがが」
ショウタが口を開こうとしたとき、彼の口が開くのを拒んだ。
誰もがその反応に疑問を示し、別の質問をした。
「何を話したんですか？」
「それ・・・んぐ」
「ショウタ君、まじないがかかってるんじゃないの？」
マリが言うと、ショウタはこくこくと首を縦に振った。
「んだよ、敵か？」
「ち、違う。敵じゃない。
悪い人じゃなかった。だけど、言えないんだよ。約束してる」
ショウタが頭をうなだれて、ごめんと呟いたので、これ以上の言及はできなかった。

ルーマはさきほどまで自分たちがいたであろう場所を見て、首をひねった。
「どうしよう・・・すっごく意味不明だった。
もう一度戻る？」
「あいつの首締めあげて理由を聞きだすってやつか？」
「そう」
しかし、それをショウタがとがめた。

「もう、あそこには何もないよ。
碑文もない。敵もいないし悪い奴らもいないんだ」
さすがにその言葉にラルゴが疑いの目を向けた。

「お前妙だぞ。
仮にだ。探知機が反応した魔力のもとにお前が会っていたのなら、お前はそれが何でありどういうものかを知っている。だからそう言える。
しかしショウタ、お前はまじないによりそれを俺たちには言えないんだな。
だけどそれじゃああまりにもお話にならない。俺たちが納得するように説明してくれよ」

ショウタは口を閉ざしたまま、俯いてしまった。
ラルゴの注文はめちゃくちゃで、言えないのに言えと言われたって、ショウタには無理な話だ。

困惑するショウタに助け船を渡したのは、意外にもテレジーだった。

「もういいだろう。
あそこに何もないならここにいる必要はもうない。次の場所に行くまでだ」

そう言い終わると、テレジーはショウタの肘を掴んで、ラルゴをちらりと見ていった。

「こいつを借りていっていいか？」

さすがにここまで来るとラルゴまでも驚いて、一瞬テレジーが何を言ったのかわからなかった。
ショウタもその申し出に目を丸くした。
今まで何をするでもなくついてきていた彼が珍しく行動した瞬間ともいえる。

「どうしたの？」
「いいからついてこい」

相変わらずぶっきらぼうに、テレジーはショウタをひっぱった。
そして、ラルゴたちの声の届かないところまで行くと、ショウタの目の前に立った。
テレジーのほうからじっとショウタのほうを見ることは珍しく、ショウタは目をすぐに逸らした。
しばしの沈黙を経て、テレジーは言った。

「口が利けぬなら首を振れ。
お前は幻を見せられてはいないな」
ショウタは頭を縦に振った。
それを確認したのち、テレジーは次の質問をした。
「そこにいたのは白仮面本人だな」
また、縦に振る。
そして、最後に質問をした。

「それに加え、お前が会い、重要なことを話し、お前にまじないをかけたのは、”大罪人”の一人か？」

ショウタはそのとき、初めて自分が拾った人物が最初からもっともっと大きなものと関わっていたのでは、と思った。
テレジーはまるでその場にいたかのように的確にショウタの心中に抱いていることを当ててしまったのだ。
震えが背中の奥から這いあがってくる。
それがおさまるまで、ショウタは首を縦に振れなかった。

26話　振り切った手

時間は巻き戻る。

「全員白の部屋に無事到着できたようですね」
「俺以外ってこと？」
「ええ」

せまく、丸いテーブルが一つと椅子が二つしかない部屋にショウタはいた。
ショウタは目の前に立つパイアロッテを再度見た。
相変わらず白い仮面をかぶったままだ。
彼は今従者のように、豪奢な椅子に座る女性の後ろに恭しく立っている。
ショウタはその席に招かれている。

薄暗く、ランプが部屋を赤く穏やかに照らす。
女性は赤毛を鎖骨ほどまで伸ばしていて、洗練された美女、ではなく、まだ垢の抜けきれないような印象を受ける。
年頃もそう変わらないだろう。なのに、そんな感じがしない。
落ち着いているからではない。それだったらクインだって年齢以上に落ち着いた人だ。
うっかりすると目の前の女性がショウタよりももっと歳が離れているような気がしてしまうが、これを言ったらかなり失礼だ。
「そんなに緊張しないで」
「いや、そんな、緊張しているというわけでは・・・」
「わかった。どうしてこんなことになっているか戸惑っているんでしょう」
「お嬢様、それはだれしもそう思うでしょう」

少しずれた人だが、パイアロッテがお嬢様と呼ぶこの人、名前をなぜか名乗らない。
先ほど名乗ったときに、お名前は？と聞いたが、秘密ですと言われた。
どういうことだ。
だがあの暗闇の中で現れた彼女は、ショウタをこの部屋に導いた。
いや、そもそも、

「俺たちがここに来るのを、待っていたの？」

問うと、女性はにっこり笑った。
「えぇ。貴方達がここに来るのを知っていたから、パイアロッテに協力してもらって、この場所に仕掛けをして待っていたの。
ううん。仕掛けなんかしなくったって貴方達がここに来るのは決まっていたことだから」
「じゃあ貴方も俺たちが”星の記憶”を見つけるために契約したことを知っているんだ」
「もちろん」
「・・・貴方もシュヴァイリンやエルデナの人間みたいに邪魔をするために俺たちに近づいたの？」
少しだけ纏った空気の変化にも、彼女は特に気にしていない。
・・・この人のことだから、あまり気づいていないのかもしれない。

「邪魔はしないよ。
ううん、邪魔できない、のほうが正しいかも。
でも、協力するって言うのもちょっと違うのかもしれない」
「わかりやすく端的に」
「見守ってる、ってことで」

「は？」

なんとも間抜けな声を出してしまったものだ。
そんなショウタを気にもせず、彼女は話を続けた。

「貴方、”大罪人”って知ってる？」

「・・・いや」
「そうだよね。
知ってるって言われちゃったらどうしようかって思っていたけれど」

「お嬢様。話をまっすぐに」
「はいはいわかってるわ。
私はとある人に頼まれてね、貴方達に会っているの」
「はぁ」
「その人にね、私たち”大罪人”についてのことをショウタ君、貴方に教えてって言われているの」
「もったいぶらなくていいから事実だけを言って」
「せっかちなのね。
ごめんなさい。”大罪人”ってどうも、急ぐっていう感覚に欠けていてね」
「お嬢様」
「はぁい」
なんだか話がうまくかみ合わない人だな、と思いながらも、ショウタはかなり心を広くして彼女の言葉を待った。
彼女は一口紅茶に口をつけた後、言った。

「”大罪人”はね、”星の記憶”を知る者って言った方がいいのかもしれない。
この星ができたときから、それをずっと引き継いで、見届ける人」

「・・・貴方も？」
「そう」

ショウタは少しだけ目を輝かせて彼女のほうに乗り出した。
自分が求める者を詳しく知っている人なんて、今まで会ったことがない。
何か新しいことを聞けるかもしれない。うまい方法を聞けるかもしれない。
ショウタのそんな言葉を汲み取ったのか、彼女はショウタが質問するよりも早く、彼の疑問に答えた。

「具体的に”星の記憶”がどういうもので、どこにあって、どうすれば手に入るか、は私の口からは言えないからね」
「え・・・？」
「私たちは干渉する数と範囲が決められているの。ここまでは言っていい、ここからさきは言っちゃだめってのがね」
ショウタは乗り出していた体を元に戻し、胡散臭そうに女性をにらんだ。
「つまり、ネタばれ禁止ってこと？」
「ふふっそうかも」
「なんだよ。期待させちゃってさ。結局私知ってるのよー、ってのを言いたかっただけじゃないか」
「そんなこと言わないで。まぁ結果的にもどかしい気持ちを感じさせちゃったのは悪いことだったけれど、こういう人がいるってことを覚えていてほしかったの」

ショウタはまるで目の前に餌があるのに食べられない小動物の気持ちがわかった気になった。
くーっと目の前に注がれた、冷めてしまった紅茶を飲み干すと、興奮でせわしなく動いていた心臓が落ち着いてきた気がする。

ふぅと息を少しだけはいて、ショウタは冷静になって質問をした。

「”大罪人”と俺らはどういう関係があるの？」

「だって貴方達、”星の記憶”を手に入れるつもりなんでしょう？」

「うん」

「だから、私たちも貴方達を知らなきゃならないの。あぁでも、貴方達は私たちのことを知る必要は今はないの」

そういうもんなのか・・・？と思いながらも、ショウタは半信半疑で彼女をみた。

大罪人、罪を犯した者。

何の罪かはわからないし、そもそも意味不明だ。

言葉の由来は聞くべきか、いや、聞かないんべきか。そもそも聞くことに意味があるのか。

時間は限られている。聞けることも限られている。だったら的を得て質問しなくては、と思ったものの、

わからないことは湯水のようにあふれてくる。ショウタはだんだん混乱してきた頭を抱えたくなった。

星の記憶、星の記憶にかかわる自分と彼らのこと、妨害する者、そのたもろもろ。

どれを聞いてもすっきりとした答えが聞けなさそうなのに、ショウタの心は聞く聞かないの挟間をさまよった。

そんなショウタの複雑な心境に気づいているのか、彼女とパイアロッテは何も言わず、ただ黙ってショウタの言葉だけを待った。

落ち着いたころ、ショウタは口を開いた。

「ねぇ、こんな手の込んだことしているんだから俺の質問には答えてくれるんだよね？」
「うん」
「俺の仲間には手を出してない？」
「怪我はしてないよ。ちょっとだけ質問をしただけだから、でも、私は直接会っていない」
「見守るだけってことは、これから俺たちに干渉してくることは？」

「少なくとも、私はしない」
「（気になる言い方・・・）
ほかの”大罪人”について教えてよ。あと、一体これから俺たちに何をするのかも。それは俺たちにとってどういう意味をなすかは、俺たちが考えるけれど・・・」

彼女はすっくと立ち上がると、いいよ、と言った。
ちょっと雰囲気が変わったかな、と思った時には、彼女はショウタの額に手を当てた。
すると、彼女は口を動かしていないのに、言葉がショウタの頭の中に流れてきた。

「私が貴方に伝えることは、決して口外してはいけないこと。
貴方はいまここで聞いたことを決して口に出すことはできない。意志には関係なくて、そういうまじないだからね。
まじないの範囲はちょっと荒いけれど、貴方がこの部屋に入ったときから出るまで。それを了承してくれたら、教えてあげる」
「わかった。いいから早く」
「うん。
じゃあほかのメンバーについて教えてあげる。
貴方はもう会っているはずよ。ユピ・レナードスタン、フィオルディシリア・ワーラン、クリーマ・パラエッダ」

「・・・」
三人の名前を頭の中で思いだそうとしたとき、ぱっと豪華客船”シェリーン”の光景が思い出された。
彼女がショウタの記憶を引き出したのだろうか。わからない。

寝癖のある、目じりの下がった男。ウルルの飼い主だったユピ。
ルーマの記憶を奪ったという女性、フィオと彼女とともに行動をする少々軽い男、クリーマ。
彼らが“大罪人”だったとは。
彼女はさらに話を続けた。

「そして、私と、セラー・ドートロイ、ソンダク・ハーンパイプ、リネ・コーレイシャオン」
「リネ・・・？
リネってあの」
「違う」

ショウタはジャスリーンの碑文から出てきた、リネと名乗った女性が”大罪人”なのかを問おうとしたが、女性はそれを否定した。
同じ名前の別人か、と思った時、
先ほどからもったいぶった言い方をする彼女が、さらにショウタを困惑させるようなことを言った。

「あれはリネの皮を被った別人だから。もっと別の存在。だけれど、同じようなもの」
「・・・」
「そして、私たちがいったい何をするのかだよね。それは言えない。けれど、貴方達が何をしようと、私たちはそれを知るという以上のことは特に期待されていないの」
「だれから？」

「そこまで聞くの？言えるのはここまで」

すっと、彼女は手を離した。そして席について、少しだけ真面目な顔をした。

今度はちゃんと彼女自身の口で言葉が語られた。

「これから貴方達は私たちに会うと思うけれど、その時どういう対応を取るかは任せるね。

あぁでも、私のことはいじめないでね。仲良くしましょうね。会っていきなり攻撃ってのはナシだからね」

「はぁ・・・（やっぱこの人も変な人だったか。”大罪人”ってみーんな変な意味で個性強いな・・・

まだあったことない人もいるのに、期待はできなさそう・・・）」

「ショウタ様、なんとなく貴方様が言いたいことが伝わってきます」

そして、パイアロッテは懐から懐中時計を取り出すと、彼女に時間です、と言った。

まだまだ聞きたいことがあったのでショウタはもどかしい気持ちになったが、あまり6人をまたせたくなかったのも事実。

どうしようと考えあぐねていると彼女は口を開いた。

「先視の力を持っているから、最後にふたつ。

エルデナとシュヴァイリン国王。彼らは今貴方達を干渉し妨害し、攻撃してくるけれど、まぁ死ぬことがなければ問題はないからね。

うん。むしろ無問題。安心していいわ。

そしてもう一つ。これからずっとずっと西に行けば、貴方達は大切なことを知ることができる。

そこで、大きな選択肢に気付く」

「選択？」

「本当に、”星の記憶”を手に入れるかどうかを選ぶことになる」
「何を言ってるの？
俺たちはそのためにこうして旅をしているんじゃないか」

彼女は静かに首を横に振った。
「もっともっと時間が過ぎれば、貴方達は必ず迷う。それは心が裂けそうなほど、苦しいこと」
「・・・」
「その時には、私たちが貴方達に干渉できる数が増えるから、また出会うよ」
「そう・・・」
「うん。
ほかに何か、質問ない？」

ショウタは立ち上がると、首を横に振った。
「俺が知りたいことは、多分貴方達の干渉を大きくしてしまうから」

「優しいんだね」
「ありがとう。あまりうれしくない言葉だね。
あ、じゃあ最後に。
”大罪人”は俺たちの旅を本当に邪魔しないんだよね？」
最後の質問はまずかったかもしれない。
ショウタが感じたときにはすでに遅く、彼女は困った様に顔を曇らせた。
言えないのだろう。その反応だけで十分憶測できた。
「私と、ユピと、セラーは、少なくても貴方達の邪魔はしないから」

「・・・ありがとう」
椅子を戻して、ショウタはきょろきょろとあたりを見渡すと、パイアロッテがすっとショウタの傍に立った。

そして、ショウタの真後ろに手を向けた。
「お出口はあちらでございます」
「あ、ありがとう」

部屋を出るとき、ショウタは最後に振り返った。
にっこり笑った彼女が、ひらひらと手を振っている。
ショウタは振り返さなかったし、笑顔を向けることはできなかった。
それでも、彼女に敵意を向けてはいない。

「ショウタ君、またね」
「・・・じゃあ」
短くあいさつを交わし、ショウタは部屋を出た。

ショウタがいなくなった部屋で、冷めた紅茶を飲んだ彼女にパイアロッテが暖かい紅茶を継ぎ足した。
「よろしかったのですか、お嬢様」
「何を？」
「名乗らなくて」
「・・・名乗れないよ。だって、ショウタ君の仲間に」
「ラルゴ・ダイアロット様がいるからでしょうか？」
「うん」
「ラルゴ様はお嬢様の従弟でしたね」
「・・・ねぇ、パイアロッテ」
「なんでしょう」
「今ならセラーさんの気持ちがわかるわ。
知っていても、干渉の制限があって、伝えられないこと。
わかっていることも、知っていることも、なにもかも。

彼らの幸せを願いたいだけなのに、できないなんて」

彼女はカップをテーブルの上において、立ち上がった。
パイアロッテは静かに椅子を引いて、彼女のコートをそっと肩にかけた。
「言えないのですか？
彼らに”星の記憶”を手に入れるのをあきらめろということを」
「言えないよ。
言ったって、それが本当に最終的にいいことかどうかなんて、まだ視えないもの」

こつ、とヒールが音を立てて、彼女はくるりと振り返って、少しだけ力のない笑みを浮かべた。

「彼ら7人と貴方がお話したこととか聞いたこと、セラーさんに送っておいてね」
「かしこまりました」
「これでセラーさんからのお願いもかなえられたし、私はこれからどうしようかな」
「お嬢様、聞いた話でございますが、
ユピ様がソンダク様の行方をつきとめつつあるということです。
その場所が、ファドキア北東部ということです」

表情が曇る。
彼女はパイアロッテにありがとうと言って、しっかりとコートの前を握った。
「わかったわ。ユピさんと合流してみる」
「お気をつけて」

そして、すっと彼女は部屋から姿を消した。

残されたパイアロッテも、ゆっくりと闇の中に姿を消した。

今あなたはまだ何も知らなくていい。
来るときにすべてがわかる。
そのときに、あなたが最善な判断を下せるように私たちは少しずつ
あなたのために準備をする。
そして、あなたのために願うのが、私たちのすべきこと。

私たちのためにも。

27話　静寂の狭間

いつまでも時間が止まっているような気がした。

いったいどうしてこんなにも体が固いのだろう。

どうしてこんなにも口の中が渇くのだろう。喉が痛いのだろう。

指先がぴりぴりと痺れるのだろう。

寒くはない。むしろ、体から汗が噴き出そうなほど熱くてたまらない。

ショウタは居心地の悪い今を、どうやってやり過ごしていいかがわからなかった。

テレジーは相変わらず表情がなく、冷めたものを視るような目線をショウタに向けている。

彼の紅く、美しい瞳に映るショウタ自身もまた、まるで人形のようで、ぴたりとも動いていなかった。

何かを言ってくれればいいのに、テレジーは無反応だった。

自分が先ほどまで出会っていた人たちのことを知っているなんて、思ってもいなかった。

これなら、ショウタが口にすれば、ほかの誰かしら”大罪人”のことについて知っているんじゃないか、とも思ったが、

ショウタはそうではないだろうと考えを改めた。

おそらく、”大罪人”という単語自体を知っている人は、世界中探したってわずかしかいないに違いない。

そしてそれを知っているということは、その人物たちにかかわっているということに他ならない。

それぐらいの秘匿されたものだということは、ショウタはあの女性と会話を交わした時に根拠なくそう思った。
そう思わせるほどの何かがあったのだ。

つまり、テレジーがそのことを知っていること事態が普通ではないので、ショウタはこうして何も言えずにテレジーが次に何を言うかを待つしかできない。

テレジーもまた、言葉を選んでいるのだろう。
少しだけ眉を寄せて、そして質問をした。

「お前が会ったのは、金髪の女ではないだろ?」

否定で質問をされたので、最初は混乱したが、ショウタはうなづいた。
ショウタがあったのは、赤毛の少女だ。
それを聞いて、テレジーは何を思ったのだろう。
もういい、というようにあっさりとショウタに背を向け、歩き出した。
なんだか申し訳なくなって、ショウタは俯いたまま、黙ってテレジーの後を追った。
彼の期待に添えなかったことはわかるが、何を期待していたかはわからない。
それでもショウタはなんとなく悲しい気持ちになった。
でもきっとそれは、テレジーもそう思っているんだろうな、とショウタはなんとなく感じた。
最後にうなづいたとき、わずかではあったが、テレジーの顔が曇ったのだ。
それがよくない知らせであったことは分かった。

しかしそれ以上に、自分が遭遇したことについて納得していないほかのメンバーに一体何を言えばいいのか、
その方が恐らく時間がかかりそうな気がして、ショウタは心がどんより曇るのを感じた。
この一件でほかの人たちから距離をおかれたり、不信がられたりすると、チームワークはがたりと落ちるし、ぎこちないのはマックスになるだろう。
まぁ今さらにチームワークとかぎこちなさとかはこの際放っておいて。
それでもショウタがこの状況において居心地を悪い、と感じてしまうのは、嫌だった。
そう思っている段階で居心地が悪いのだが。

ショウタは、はたと足を止めた。女性が言っていたことを思い出したのだ。
豪華客船で出会ったあの男、ウルルを託した男。
彼の名前は・・・

「テレジー、ユピ・レナードスタンって、知り合い？」

テレジーの空気が変わった。
が、すぐにもとに戻った。
彼はショウタを見ず、そうかと一言言った。
「ほかの”大罪人”の名前も聞いたのか。
だが、まじないで口を封じられたお前はどうしてあいつの名前を口にできる？」
「なんでだろう・・・確かに。一回会っているからかな？」
「会っただと・・・？どこで会った？」

テレジーは振り返ると、つかつかとショウタに詰め寄った。

そして目線だけでショウタを見下ろした。ハッキリ言って怖い。
だが、彼はショウタを怖がらせたいわけではない。
その先にある何かを必死に探し、求めているようなそんな印象がした。

「しぇ、”シェリーン”で・・・」
「”シェリーン”？」
「あれだよ。豪華客船」
テレジーはそれを聞いて、なるほどと思ったのだろう。
何かを考え始めてしまった彼はショウタから離れ、悶悶と黙ったままだ。

そんな彼にショウタは臆することなく声をかけた。
「ねぇテレジー。君に名前をつけた人って、もしかしてユピ？」
「・・・」
テレジーの沈黙はたいてい肯定と取れる。
彼は振り返って半ばふてくされたような顔をして見せた。こうしてみるといつもよりも幼く見えた。
こういう表情をこれからも見せればいいのに、と思ったときに慌てて頭を元の話題に戻す。
「やっぱりそうなんだ」
「・・・俺の思い出話なんて必要ないだろう」
「でも・・・”大罪人”と知り合いで、名前をもらうって・・・」

ふと、ひやりと冷感を肌が感じたのが早かった。
それがいつもの冷気ではなく、血の気が引いたのだとショウタは理解した。
真っ白い短剣の切っ先が、テレジーが持っていた短剣の先が喉につき当てられていたのだ。
剣を向ける彼はいつもの興味のない、冷めた目でショウタを見てい

た。
言いたいことは分かった。これ以上詮索するな、踏み込むなという牽制だ。

「・・・すいません。もういいません。とりあえず謎ってことにしておきたいと思います」

ショウタが降参と言わんばかりに両手を上げたとき、遠くからラルゴたちに声をかけられた。
そろそろ出発するというのだ。
一旦王都に戻り、そこでまた次の道を決める。なにはともあれあのぼろ車に乗ってまた帰らなければならない。
来たときは楽しい思いをしたのだが、帰りはなんとも気乗りがしない。
そんなことを言っている場合ではないのだが。

一方。ダニア国。

城の中にパイアロッテは招かれていた。
あの奇抜な格好をしたままだ。
深々と頭を下げた後、目の前に立つ金髪碧眼の女性にあるものを渡した。
それは丸いガラス玉のようなもので、無色透明。
なのに、中はまるで液体のように、何かがぐらぐらと揺れていた。

「セラー様にお渡しするよう仕って参りました」
「御苦労さまですわ。

さすが使い魔。仕事がお早いこと」

金髪の美女、セラーはそれを受け取ると、棚の上の片手で運べる程度の大きさの水槽の中に放り込んだ。
ゆらり、とそれは揺らめいただけで、あとは特に何の変化も見出さなかった。

そしてパイアロッテはそのまま姿を消し、セラー一人が部屋に残った。
彼女は先ほどの水槽を持って、部屋を出ると、迷いない足取りで目的地へ向かう。

ノックをして、返事を待たずに部屋に入った。

「御気分はいかがですか？」

そう言って彼女は天蓋がついたベッドのほうに声をかけた。
薄いレースの向こう側で、人影がむくりと起き上がった。

「・・・私はどれほど眠っていたのでしょう。
いや、何度か眠って何度か起きてはいるはずですが・・・」

さらり、とレースをめくり、セラーのほうに問いかけたのは、この城の主、シュヴァイリンだった。
いつものきっちりと着こまれた様子はそこにはなく、むしろ上半身は服をまとわず、白い包帯を巻いているだけだった。

「あぁ、そういえば傷口はふさがった気がします。もうこれ、外してもいいでしょうか？」
「左肩を射抜かれたというのに、やはり体だけは丈夫ですわね」

するする、とシュヴァイリンが纏っていた包帯を取り除くと、左肩に銃痕が残っていた。
もうすっかりふさがってはいるものの、痛々しい見た目には変わりなかった。

「貴方にしては珍しいですわね。どうして避けられなかったのです？」
セラーがそういうと、シュヴァイリンは苦々しい顔をして言った。
「私だって・・・あの女、エルデナの人間だと言っていましたが、彼女みたいなど素人が撃つ拳銃にまず反応できないはずがない。なのにあの時、不思議な感じがしたんですよ。なんていうか・・・あぁだめです言葉にできない」

シュヴァイリンは頭を抱えたが、セラーは一切何も言わず、シュヴァイリンが言えないのならそれでよいという風に彼の言葉をせかさない。
暫く黙っていたシュヴァイリンは、少しだけ心細そうにセラーのほうを見た。
そして、セラーに聞いた。

「セラー、私は本当に、元に戻れるんですよね？あの子を私の手で殺すことができたら、この体の中を凍てつかせる空虚感から抜け出せるんですよね？」

セラーは答えなかった。
なぜなら、それを吹きこんだのは彼女ではない、別の人だから。
ただ、それはすべてが嘘ではなく、真実もはらんでいる。だからセラーは何も言わなかった。下手に言うことができない。
静かに首を横に振って、テーブルの上に先ほどから持っていた水槽

を抱えたまま部屋を出ていった。

セラーが出ていった後も、シュヴァイリンは頭を抱えて一人自問自答を繰り返した。

「なのになぜ私はこうして迷っているんだ・・・？
どうして・・・？何かが私の心を引っ張っている。なんだ・・・邪魔だ・・・嫌だ・・・やめてくれ・・・
消えろ、消えろ消えろ消えろ・・・そんなことは考えたくないんだ・・・
あぁ、時間がない。急がなければ。
あとひと月もない。次の月が消えてしまう前に・・・私は・・・彼を、殺さなければならないのに・・・」

シュヴァイリンの部屋の前の扉でセラーは水槽を抱えたまま立っていた。

ゆらゆら揺らめく水の中には、パイアロッテが集めた6人の心を写したものと、もう一人の”大罪人”とショウタとの会話が入っている。
この城の外から出ることができない彼女は誰かの手を借りなければ外界の情報を手に入れることはできない。
それで、彼女に頼んだのだ。
本当はシュヴァイリンにそれを見せるつもりで持ってきたのに、セラーは結局見せずに部屋を出てきてしまった。

シュヴァイリンに、テレジーの心を見せたかったのだが、そんなことをしたってもう無理であることを彼女は先ほどの会話で知った。

過ぎゆく時間とは無縁に生きてきた彼女が、今はこうして一刻一秒が惜しい。

彼女は願う。

どうか、あと少しだけ時間を延ばしてほしい。どうかそれまでにテレジーが間に合ってほしい。

最悪の選択をしなくてもいいように。

先視の力を持っているセラーは先が見えていて、なのに手を出すことはできない。

それはどれほどの苦痛だろうか。

来るべき運命はいいものだけではない。それを知っていて回避することもできず、ただその時を待ち続けるのは、恐ろしいものだった。

「いずれわたくしも、貴方達に会いますわ」

セラーは水槽に向かって小さく、言葉をかけた。

「その時にはもう、迷っている暇はないのですが」

水は答えない。

今ここから遠い場所にいる彼らに向かって、セラーは祈った。

儚い、願いを込めて。

28話　銃刀法違反

おんぼろ車がその日4回目のエンストをした時にはすでに、次の目的地が見え始めているころだった。

「ラルゴ、もしかして俺ら、ゴミを売りつけられたんじゃないの？」

「そこ、妙に現実的にかつ的確に事実を俺に突き付けるな」

「でもさ、やっぱり車があった方がなにかと便利だよぉ。電車で行けないところだってすいすいすーいってね」

「いえ、すいすいとは程遠いような気がします」

「あそこのレンタカーのおっちゃん、その倍払えば車くれるって言ってもらってけれど、修理費を加味すればこの車かなり高くつく気がするんだよね」

「だがラルゴが修理をしてくれればなんの問題もないからいいな！」

「俺にとっちゃいい迷惑だっつの」

「・・・」

グライナー国で借りた車のボンネットを開けて、さながら技術職の人間のごとくせっせと修理に励むラルゴ。

そんな彼らをほほえましく見守るその他6人。

天気は上々。だが、このままのんびりしていたら夜の帳が下りてしまう。

そんな時間だった。

実は彼ら、あの後王都トレンウェイに戻った後、暫くして西へ向かって針路を取ることにした。

しかし未だここはグライナー国。ぼろ車のおかげで国を出ることさえままならない。

そんな彼らの次の目的は、グライナー国の西の要所である大きな街、ルイニ。
工業大国グライナーの中では唯一古都の風景を残しているそこは、歴史的に古い街らしい。
とにかく道中に古いものがあるのならそこに立ち寄ってみるのも悪くない。
探知機は微妙な判断をショウタたちに与えているが、確実に隅から潰していく方がいい時もある。
急がば回れ、だ。

ようやくエンジンがちゃんと動く時には、もう日は目線の高さほどまで落ちてきていた。西日が痛い。
そちらに向かって走らなければならないので、正直つらい。
ショウタはこれからの旅はできるだけ早いうちに移動して、午後は情報収集にあてよう、と計画を練った。
とはいっても、このメンバーでいる以上、計画がちゃんと遂行されるなんてはなから期待していない。
それでも今はショウタにとって、不満はなかった。

特に詮索されることなく、むしろ事実を知っているテレジーでさえ口を開かないということはさすがに気まずかったが、
ショウタが危惧するほどのギスギス感はなかったのでよかったことだ。
やることをやる。それでいいじゃないかということで、全員の意見は一致した。

そう、全員の願いは碑文の解読だ。

そのためにまず第一段階。初歩中の初歩。いろはのい。碑文を捜すことが先決だ。

「ようやく着いたか。ルイニ」

一日中車を運転していたラルゴはくたくただったが、まず街の中心から外れた素泊まり宿の案内所を捜す。

旅なんて珍しくないものだから、いたるところにこういう案内所は設置されていた。

7人プラスペットが泊まれる部屋はざらにあるから、場所に関しては困ることはない。

駅の近くがいいとか、部屋の数が多いほうがいいとか注文をつければもれなくショウタの冷ややかな視線を食らうことになる。

一番安くて居心地がいい部屋があるといいなぁと誰もが思いながら、全員が車から降りた瞬間、

「へ？」

ショウタは間抜けな声を出した。

本当に一瞬だった。

ずらっと、真っ黒い服を着た連中に囲まれたのだ。

それも、数はおよそ２０人。

「何ー！？」

取り乱したマリが慌ててツァイに近づく。

ウルルが毛を逆立てて警戒する。ツァイは臨戦態勢を取り、ルーマ、ラルゴ、テレジーが武器を抜いた瞬間、

甲高いホイッスル音がぴぃーっと鳴り響いた。

鼓膜がびりびりと痛い、そんなことを思った時には時すでに遅く、光の縄がラルゴ、ルーマ、ツァイ、テレジーに向かった。

「うぉ！？」
「わぁ！」
「何！？」
「っ！」

光の縄につかまってしまった４人はそのままずるずると前に引っ張り出された。
駐車場の物々しい雰囲気に、野次馬がちらほら集まりかけたその時、黒服集団の中から、一人出てきた。

「貴方達、ここがどういう街か知らないんですか？」

女の声だった。
凛とした、刃物のような切れのよさを持った声だと思った。
短い黒髪で、黒い服を身にまとったスレンダーな女性が、まるで代表であると言わんばかりに先頭を切ってショウタたちに声をかけた。
ショウタは彼女の言葉の意味がわからず、聞き返した。

「俺たち、さっきこの街に着いたばかりなんですが・・・」
「そうですか。ですが規則は規則。一人を許すことは他の者の心を乱す理由になる。
この４人を投獄します」
「えええぇぇ！？」

マリの甲高い悲鳴を無視して、光の縄に縛られた４人はそのまま光に飲み込まれ、その場から消えてしまった。
「あの、規則ってなんですか。それに、有無を言わさずにつれを勝手に拘束されるなんて、それこそ人権無視だと思うんだけれど」

ショウタが少しだけ声のトーンを落として聞くと、女性はぴしっと立ったまま、ショウタに答えた。

「私はこの街第2地区の保安巡査部長をしています、セレン・ラッソと申します」

「俺たちこの街に来て一時間と経っていないよ。その間に俺たちがいったい何をしたのかな？」

「この街の規則を破ったのです」

「なによ規則って！ツァイを、みんなを返してよ！」

食ってかかったマリにも動じず、淡々と彼女、セレンは言った。

「この街ではあらゆる類の武器でも持ち込みは禁止となっています。この街に入るときに貴方達がセンサーにかかっていることがわかり、このような処置を取らせていただきました」

唖然としたショウタは、信じられないと言わんばかりの表情だ。

「ぶ、武器を持ち込めないなんて・・・旅をしている人間からすればそれはいい迷惑です・・・」

「われわれの街に武器は不要。なぜならこの街で本当に必要なのは・・・」

そう言ったセレンが空を仰ぐ。

それにつられ、ショウタ、マリ、クインも上を向いた。

何もない、暗くなってしまった空は星も何もない。

だが、次の瞬間、きらりと一筋の光が川を創った。

街の街灯が煌々と光をともし始め、ふわんと甘ったるい臭いが鼻についた。

それに反応したのは、マリが早かった。

「魔術？」

「えぇ。この街は武力による争いは一切禁じられているのです。なぜなら、この街で本当に価値があるのは魔術だけなのですから」

ただそれだけを言った後、セレン達は颯爽と姿を消した。
呆然と立ち尽くすショウタたちは、一体どうしていいかわからない。

そのとき、宿屋の中から人が出てきた。
若い男だ。オレンジ色の髪の毛をぼさぼさとさせた青年が、ショウタたちに声をかけた。

「あんたたち、大丈夫っすか?僕二階で見ていたんです」
少し聞きなれぬイントネーションで話す彼はきょろきょろとショウタたちの安否を気遣う。
「はぁ。いきなりすぎてどうしていいかわからなかったところです。
あの、貴方は?」
「自分ここで宿屋やってるアスレイ・フールドヴォールっていいます。
旅人さん、仲間さんが掴まんの無理ないですわ。規則までもが変わってしまいましたのここ最近のことなんで」
「アスレイさん、詳しく教えてくれる?」
「はい。じゃあとにかく中に入りましょう」

そして、とらわれた彼らは。

「出してよー!出せー!このやろー!!!」

見た目わかりやすい牢屋に入れられていた。

鉄格子がはめられたそこは独房で、冷たいコンクリートがむき出しになっている。
天井近くに小さな窓が開けられていて、光は入ってくるがここが一体どれくらいの高さにあるかは測れない。

「黙っておけよ。今むやみに体力使うなよ」
ラルゴが暴れるルーマを制する。ルーマの牢屋からは向かいのラルゴと、斜め右のツァイが見える。恐らく右隣はテレジーだろう。
「だってこの御時勢武器を持っているだけでつかまる場所なんて聞いたことないよ」
「俺だってそうさ。くそ、恥だ。情報屋として名折れだ」
「ラルゴ、お前が知らないということはもしかしたら最近のことかもしれないぞ」
「フォローサンキュー、ツァイ。
まぁ、全員つかまらなかっただけ良しとするか。
クインは武器が医療道具だからつかまらなかったし、マリとショウタは手ぶらだもんな」
ルーマがふ、と疑問を感じて訪ねる。
「そういえばなんでショウタは手ぶらなの？一人で旅していたこともあるのに無防備だね」
「あいつは俺がいろいろ仕込んでんだよ。
体術だけでもそこそこできるし、武器もとりあえず一通り使えるようにはなっている。ああみえてセンスいいんだよ。
武器を持たない理由は確か、自分にしっくりくるものがないからとかなんとか」
「へぇー」
「そんなことより、ここからどうにかして出なきゃなぁ」

ラルゴは立ち上がると、鉄格子に手をかけた。
触ったところ、熱さも冷たさもないことから魔道具であることがわ

かる。
武器はもちろん全部没収されてしまっているからそれを使うことはできない。
そして持ち前の腕力でさえ、魔道具には敵わない。
出ることは困難だった。

だが、それは魔術の未熟なものを入れることを想定されている牢屋。
その中に一人だけ、高度魔術を行使できる者がいる。

「おい、起きてるんだろ」
ラルゴが斜め向かい、簡易ベッドの上で横になっていたテレジーに声をかけた。
彼はむくりと起き上がり、けだるそうにラルゴのほうをにらんだ。
「なんだ」
「お前、この状況察しろよ。
お前ならこの鉄格子をどうにかすることぐらい、わけないだろ」

人間には二つのエネルギーが存在する。
その一つのエネルギーが魔力にかかわり、もう一つのエネルギーが身体能力とかかわりを持つ。
二つにエネルギーは概念的に足すと１００になると言われている。
つまり、魔力の高い者は身体能力が低く、逆に身体能力が高い者は魔力を使うことは難しい。
その１００という概念がないのが、テレジーだ。つまり、”ハシャナール”。
武器を使う者はこの世に多くいるが、その大半は己の身体能力ひとつで危機を脱してきた者たちだ。
この牢屋が武器を持っていた者たちを収容するためにあるということから、多くの魔術を張らせて脱獄を不可能にしている。

魔術やまじないを使うことができる者以外は簡単にでることはできないように。

だが、テレジーはそれをわかっていて首を横に振った。

「脱獄は犯罪の中で最も罪が重い。お前は今後俺たちの旅を不自由にするつもりか？」

「だがこのままここにいたって何ができるわけでもねぇよ。いたずらに時間が過ぎるのを待つって言うのかよ」

ラルゴが言うと、テレジーは立ち上がり、冷えた目でラルゴをにらんだ。

「時間がないのはお前たちに限ったことではないからな。脱獄すればその倍以上に時間を奪われるまでだ」

「だったらお前何かしら頭使ってこの状況を打破する方法を考えろよ。賢い賢い王子様よぉ」

「あぁもうっ！喧嘩しないでよ！」

対角線上で火花を散らされてはかなわない。

ルーマが叫ぶと、ラルゴはふてくされたようにどかっと簡易ベッドに横になり、テレジーも奥の方に行ってしまった。

はぁ、とため息をついた後、ルーマは小さな窓を見ながら、つぶやいた。

「ショウタたち、助けに来てくれるよね・・・」

今はそれに頼ることしかできない自分を情けなく思う瞬間だった。

29話　脱兎

場面は監獄サイド。

牢屋はほかのフロアにもあるらしく、彼らは一日のうち二回外に出され、一か所に集められるらしい。
ラルゴたちも例外ではなく、広い部屋に集められた。
捕まっているのはざっと2，３０人。中には屈強な戦士のような人たちがいる。
物々しい雰囲気で、誰もがこの収監に納得いっていない様子だ。

「な、なんだかこわい」
ルーマがぽつりとつぶやく。
彼自身は卓越した運動能力があるわけではないから、この限られた狭い空間で間違っても殺し合いになったら一番最初にやられてしまう。
ラルゴたちの首にはここに入ったときからつけられているよくわからない首輪がはめられていた。
それが一体何を示すのかがわからない。

真っ黒い服を着た人間たちが彼らの身体を軽くチェックして、それに合格した者からもう一度あの暗く狭い部屋に戻される。
一列に並び、その順番を待っていると、囚人の中で最も体格のいい男が目の前の黒い服の人間を思いっきり殴った。
今までの不満怒りその他もろもろを込めているのは、それを見ていた人間たちには明らかだった。
額に青筋を立てて、男は怒鳴り散らした。

「ふざけんじゃねぇぞ！こんなところに閉じ込めやがって！なにか

んが・・・」

殴られた黒服の人間が地面に倒れると同時に、罵声を浴びせた男の声がやんだ。
そして、男の両隣りに立っていた人が、ルーマが聞いたこともないような悲鳴を上げた。
それをみたラルゴ、ツァイは目を見開き、ルーマは恐怖で固まってしまった。
テレジーは少しだけ不快そうに顔をそむけただけで、それ以外に反応はなかった。

ぐらり、と男が後ろに倒れた。どしん、と音がする前に、ごとん、という鈍い音が先に聞こえた。
倒れた男には、首がなかった。
からんからん、と先ほどの首輪が真っ赤に染まって転がった。

黒い服の人間は服についた血を魔術であっさりと消すと、作業を再開した。
別の黒服の人間たちが部屋に入ってきて、倒れた男に魔術をかけた。
すると男の体と首が消え、血もすっかり消え去った。

「なるほどねぇ。下手なことはするなってことか」
「う・・・ぅ・・・」
「ルーマ、大丈夫か」
「だい、じょうぶ・・・」

むごいことを。
ここまでして一体彼らは何をしたいのか、ラルゴはわずかな行動や動作をひとつひとつ見落とさず、眼に焼き付けた。

情報を得ようとしたとき、黒服はテレジーの検査に入った。
黒服は相手に触ることなく、ただちらちらと顔をあげて何かを記載するぐらいだった。
だが、黒服の手が止まった。

「貴様・・・まさか”ハシャナール”か」

ざっとテレジーたちの周りに黒服が集まった。
テレジーは何も言わず、ちらりとあたりを見渡した。
そして、ラルゴと目があった。
ふぅとため息をひとつついて、テレジーは指をぱちんと鳴らした。
すると、テレジーの首についていた首輪が凍り、ぱきんと割れて地面に落ちた。
次にラルゴ、ツァイ、ルーマの首輪も壊れた。

「やっぱお前はやってくれると信じていたぜ！」
テレジーの背中をばしんと叩いたラルゴは、さてどうしようかと黒服を睨みつけた。
黒服は後ずさった後、部屋から逃げていった。
そして入れ替わるように入ってきた人物に、全員が息をのんだ。

「なるほど。思わぬ副産物を手に入れることになろうとは思わなかったな」

入ってきたのは白い服を着た学者風の男。
ウェーブのかかった長い茶髪を左耳の上あたりでまとめている、目つきの険しい、線の細い男だ。
後ろに黒服を侍らせ、テレジーを頭からつま先までじろじろと見た。
そして、短く言った。

「こっちに来なさい。仲間も一緒でかまわん」
「仲間か？」
「お前・・・なんでそういうこと聞くかな」

招かれ、ラルゴたちは長い白い廊下を歩かされた。

一体どこへ連れて行かれるのだろう。と、思った時、突きあたりの部屋に入れられた。
ここが監獄であることを忘れるような、そんな雰囲気を出している。

観音開きの扉が閉まって、部屋の電気がつけられた。
一瞬目がくらんだのは、部屋が真っ白だったからだ。
つんと鼻についた薬品のにおい。天井はシミ一つない。
そこにあったのは簡易ベッドと、何やら薬品がたくさんのっている机。

「なんだよこれ」
「どういうこと？」

最初に部屋に入っていた茶髪の男に問いただそうとラルゴが一歩足を踏み出した時、
何かがかわった、とラルゴは肌で感じた。
それは的確に合っていて、彼の後ろにいたテレジーが顔色を真っ白にして立っていた。
「んだよ、どうした？」
「あ・・・ぁ・・・」
まるでラルゴの声なんて耳に入っていないようで、テレジーは目を見開いたまま、ただその部屋を見ていた。
そして、かたかたと震えて、二、三歩後ずさった。
もともと肌は白いのだが、今は蒼白、といったところか。彼の顔に

は恐怖がありありと浮かんでいた。
ぐらりと体が傾いて、寸でのところでツァイが引っ張ったが彼はそのまま地面に膝をついてしまった。

「テレジー、どうしたんだ?」
「テレジー!」
ツァイとルーマが声をかけても彼は返事ができなかった。
「てめぇ、何をした?」
ラルゴが茶髪の男に食ってかかった。
だが、男は顔色一つ変えず、ぱちんと指を鳴らした。
すると床から椅子が5つ出てきた。男は椅子に腰を下ろすと、彼らにも座るように促したが、ラルゴたちは立ったままだった。

「俺はここの監獄でいろいろなことをさせてもらっている学者に過ぎん。
大体やっていることは、ここに収監された人間を先ほどのように身体チェックをさせて素質がある者をここで実験させてもらっている」

「人体実験・・・一体何をしているのか教えてもらえるのか?」
ラルゴが尋ねると、男はさも何事もないように言った。
「ここに捕えられているのは魔力を持たないもしくは脆弱であるとされる人間たちだ。
そしてこの街は魔力こそが重要だと考えている。
俺の仕事は人間の体の中にある二つのエネルギーバランスを変えることだ。
まぁ、うまくいくことではないんだがな。失敗ばかりだ」
「し、失敗って・・・それってもしかして」
ルーマがかたかたと震えながら聞くと、男は言うまでもないだろうというような顔をしてみせた。

「さて、君たちを呼んだのはほかでもない。
君たちはなかなかに筋がよさそうだし、なによりそこの彼、”ハシャナール”である彼。
俺の実験の道具になってもらおうか」

ぱちんと再度指を鳴らすと、ラルゴたちが座らなかった椅子がすべて彼らの武器に変わった。
ツァイはグローブと短剣を素早く手に取り、次に二丁拳銃をルーマに投げた。

「ルーマ、行けるか？」
「うん。これさえあればこっちのもんだよ」
「ラルゴ、お前は力もあるし足も速い。テレジーを連れて逃げてくれ」
「な・・・！？」
「テレジー抱えて全力で逃げるなんて僕ら無理だもん。よろしくね」

ラルゴは混乱していた。ツァイとルーマをここに残すことができるわけがない。
相手は学者とはいえ魔術を使う。魔術が使えないツァイとルーマがうまくかわせるか。
「急げ！私たちがここにとどまることを無意味にするな！」
だが、ツァイにまくしたてられ、結局ラルゴはテレジーを抱えあげ、落ちていた自分の長剣を握りしめ、そのまま走って部屋を出た。

「くっそぉー！一体何だってんだこの街はよぉ！
しかも何が嬉しくって男を抱えて逃げなきゃなんねぇンだよ！
あぁーもうお前みかけによらずやっぱ野郎だな！重いんだよこんちくショー！！！」

ラルゴは片手一本だけで向かってくる黒服を切り捨て、警報が鳴り響く監獄の中を突破していった。

そして、

「逃げられたか。本命は”ハシャナール”だったが・・・君たちでもかまわんよ」

「あいにくだね。僕たちも逃げさせてもらうから。もちろん貴方を倒しちゃってね」

「私たちは誰一人欠けることはできない。つまり、私とルーマは己を犠牲にしたわけではない。
より確実に全員が助かるために取った行動だ」

まっすぐなルーマとツァイの視線に、鉄仮面とも言えるような無表情の男は初めてふっと笑って、両手を広げた。
すると、両の掌からばちばちと電撃が走り、部屋中に魔力が満ちていった。

「なるほど。先は見えずとも己の身の振り方がだんだんわかってきたようだな。
いいだろう。相手してやる。俺を交わすことができたらあの二人も逃がしてやる」

すぅっと体を一旦引いたのち、ツァイは己のばねを最大限に利用して男の懐に飛び込んだ。
それを援護する形でルーマがツァイの影から拳銃を構え、発砲した。

遠くに響く銃声に、ラルゴは言い知れぬ胸騒ぎを感じていた。
「なんてこった・・・くそ、一体どうすりゃいいんだ。
出口なんかわかんねぇし。つか一体ここはどこだ。
おい、起きてんのか寝てんのか!?歩けるんだったら降ろすぞてめぇ」

相変わらず口は悪いが、ラルゴはしっかりとテレジーを抱えている。
彼は小刻みに震えていて、何がきっかけでこうなってしまったかなんて、ラルゴにはわからない。
いつも食ってかかってくるほど威勢がいいテレジーとは思えないその反応に、ラルゴも少しだけ気にしたのか。
あらかた黒服もいなくなってきたところだったので、立ち止まってテレジーに声をかけた。

「おーい、お前、一体どうしちまったんだよ。発作か?」
「・・・」
「んだよ。あそこに何があったって言うんだ」
「・・・天井が、白かった」
「はぁ?」

思わぬ返答にラルゴが素っ頓狂な声を出した。
テレジーはラルゴの腕から抜けると、力なくふらふらと壁に手をついた。
その薄汚れた壁は埃っぽくて、先ほどまでいた清潔そうな、潔癖そうな空間とは対照的だった。
彼は細い声で、淡々とラルゴに言った。

「俺が覚えていないほど昔、俺は真っ白い部屋の中にいた。
明りが一つだけ。真っ白い固いベッドの上で俺は寝ていた」
「・・・ちょっと待てよ。
お前、ダニアの第二王子だろ。なんでそんな研究所まがいなところにいたんだよ」
「・・・」
「お前がダニアの皇族だというのが仮にも本当だとしたら、いや、本当なんだろうな。
そのピアス、ホワイトオーカンス。本物だしな。
いや、だけどよぉ、お前謎すぎるって。
なんか引っかかるんだよお前」

「ラルゴの勘もたまには当たるんだな」

声が背後からして、ラルゴとテレジーは振り返った。
主は、ラルゴたちにはかかわりが深い人物。
オーレンだった。
大きなつるはしを肩に担いで、相変わらず一体どこからわいてくるのかわからない自信たっぷりの表情でこちらを見ている。

「よ。また会ったな。ラルゴ、テレジー坊ちゃん」
「オーレン、なんでお前がここにいるんだよ」
「えー、うん。上司に会いに来たんだよ。そしたら今お取り込み中。
ほら、あんたらの仲間の・・・えっと・・・そいつらと手合わせ中なんだよ」
「あの長髪、エルデナの人間か！？」

「そうだけど、何か問題でも？」
「大ありだ！」
「えー？」
「ふざけんのもいい加減にしておけよ。
と、食ってかかりたいところだがこっちには万全じゃない奴がいるから退散させてもらうぜ」

ラルゴは話を途中で折ると、テレジーを再び抱えて走り出した。
「もういい、降ろせ・・・」
「走れないくせにがたがた言うな！黙って運ばれろ！」

走り去るラルゴたちを見て、オーレンはたったと走って追いかける。

肩に担いでいたつるはしを右手に持って引きずるから、地面に穴が開く。
がっがっがっと嫌な音が迫ってくるのは妙に恐怖を覚える。

「ついてくんなって！」
「そう言われたって、俺の仕事知ってるのにそれを言う？」
「くっ・・・
もしかしてこの街のへんてこな決まりもお前らエルデナの仕業か！？」
「俺たちに街一つの規則や自治をどうにかするほどの権利はないって。
それに俺たちはエルデナだけど、結構会社からは離れた仕事しているし」
「くそっ。なんでこうもめんどくさいことが多いんだ。一体俺らが何をしたって言うんだ」
「それはいいじゃんどうでもさ。
とにかく俺にそれを渡してくれれば万事解決」

「よかねぇよ！」
「物扱い・・・するな・・・さっきからお前らは・・・」

ラルゴから１０メートルほど離れた距離で走っていたオーレンだったが、どうやら飽きてきたのだろう。
だんっと左足で踏み切った後、廊下の天井すれすれまでラルゴに向かって飛んで、そのままつるはしを振るった。
つるはしの先はとがっている。貫かれればもちろん穴が開く。
だが、ラルゴがそれに反応できたのが幸いで、つるはしの先端はラルゴの長剣の刃に当たった。
鈍い金属音がして、大きな力の勢いでラルゴとテレジーは吹き飛ばされ、また反動でオーレンも後ろに倒れた。

「あいたた。さすがラルゴ。学問所の実技系の授業、俺一回も勝ったことなかったな。
時が解決してくれるって信じてたんだけれどな。いつか俺がラルゴを超える日をさ」
「あーんなずる賢い算段、今でもやられるつもりはねぇよ。お前人の背後ばっかり狙いやがって。
俺が耄碌するまで待っていたら、お前がさきにボケるんじゃねぇか？」
「俺らも歳をとったもんだね。
変わっちまうことと、変わっちまわないことが多すぎて、もう俺の掌からどんどん零れおちてしまう。
だからさ、俺はわかったんだ。悟ったんだよ。
とにかく今見えているものを見て、そこから手を伸ばしていこうってよ」
「それで行き着いたのがエルデナか？」
「まぁね。
さて、おしゃべりはここまでで。

ラルゴ、久しぶりに手合わせ願うよ。
最後に手合わせしたのは俺が１６の時だもんな。１０年ぶりだ」

ちゃきり、とつるはしを構えたオーレンと長剣を握りしめたラルゴが向かい合った時には、テレジーは気を失って床に倒れていた。

そして、彼はそのまま眠ったまま。
まるで死んでしまったように微動だにせずに、そこに横たわってしまっていた。

30話　レジスタンス

場面はルイニサイド。

駐車場からそう離れていない宿屋にショウタたちは招かれた。
テーブルいっぱいに並べられた料理は、アスレイが準備してくれた。

ショウタにとってはとてもうれしいことだが、今は食事よりも大切なことがある。
目をアスレイに向けて、ショウタは真面目に話を切り出す。

「アスレイ、この街のことについて教えて」
「そうやね。まぁまず腹ごしらえしてくれよ。これなんて僕の自信作なんよ」
「・・・それじゃあいただきま」
「ショウタさん」
「ショウタ君！」
「・・・はい。話を先にお願いします」

そうだな、とアスレイはうなづくと、窓を閉めカーテンを閉めた。

「ここ最近、この街の長が替わったんよ。
それからあんなおかしな規則ができるようになった。
ここは機械より魔道具を中心に発展してきたんだけれど、魔術至上主義思想派ではなかった。
長は魔術を使えない人間をこの街から排除することにしたんだ。
近々、武器を持っていなくても魔術を使えない者をも投獄するって」

「それっておかしいよぉ！」

「僕だっておかしい思ってますよ。
だから、今この街は秘密裏にレジスタンスを結成しているんだ」

一層、アスレイが声のトーンを落として言った。
何か警戒しているらしい。彼の目線が扉と窓に移った。
ショウタは目を追い、扉と窓の近くになにか模様が描かれているのに気づいた。それはまじないだが、ショウタには分からない。

「マリ、あの模様はなに？」
「あれは・・・えっと、結界の一種かな。結構高度だと思うの」
ぼそりと、私がわかんないものも少しはあるもの、とマリがつぶやいたが、ショウタは聞かぬふりをしておいた。
「そうです。この街には治安維持部隊が魔術を張り巡らせて監視している。それを避けるものです。
そうでもしてでも僕らはレジスタンスとして行動を開始してるんだ。

今のルイニは絶対におかしい。こんなのだめだって」
「そうですか。でも、私たちは貴方達の行動を開始するまで待っているほどの時間がありません。
ショウタさん、どうしますか？」

ショウタが口癖ともいえる、うーんと唸った後、アスレイに問いかけた。
「ねぇ、俺たちもそれに参加するってのはどう？」
「しょ、ショウタさん！？本気ですか？」
「ほんま！？」

ショウタの突拍子のない言葉にクインが思わず彼に近づいて声のトーンを落として咎めた。

「ショウタさん、そんなことをして万が一、その・・・よくないことになってしまったら、
彼らを助けられないばかりか私たちも捕まってしまいますよ。下手をすれば危険です」
「クインちゃん。私、ショウタ君の意見に賛成する」
しかし、ショウタがクインに言葉を返すよりも早く、マリがショウタを擁護した。
マリは小さくこくんとうなづいた後、まっすぐにクインを見て言った。
「待っていたって何も変わらないなら、動かなくちゃ。
それに、少しぐらい悪いことしたって・・・」
「マリさん・・・」
「そういうこと、なんだけど。
たぶん中にいる彼らは何もできないと思うんだ。だから俺たちが行動を起こさなくちゃ」
「・・・そう、だと思いますが・・・」
「あのぉー。僕はどうすれば」

会話におずおずと入ってきたアスレイは、この空気に困惑しているのがわかる。
ショウタはクインに目で訴えると、彼女はあきらめ、静かにうなづいた。

「アスレイ。俺たち、仲間を助けるよ。そのために君たちに協力させてほしい」
「ぼ、僕は全然構わないっというかむしろ仲間が増えるのはうれしいよ」
「うん。というわけでそろそろお腹すいたからいただきます」
「ショウタ君・・・」
「ショウタさん・・・」

「なんかよぉわかんないけれど、まぁよろしくな！ショウタ、クイン、マリ！」
「こんなので・・・大丈夫なんでしょうか・・・」

不安そうに懸念するクインだが、ショウタとマリはやる気満々だ。
「さっそくだけど、具体的にアスレイ達は何をするつもりなの？」
「話が早いなぁ。
よし。ちょっと早いけれど行こうか！百聞は一見に如かずってことで」

にこりと笑ったアスレイは立ち上がると、がたがたとテーブルをどけた。
ショウタはテーブルをどけられる前にいくつか食べ物を手に持ったそしてテーブルがどけられて見えてきた床にくぎ付けになった。

「・・・何これ」
「まじないの扉さ。ここから僕らのアジトに通じてるんよ。
今日の夜に暴動を決行するつもりだったから、ショウタたち運いいわぁ」
「え・・・今夜？」
「・・・あと」
「3時間後や」
「・・・急すぎですね」
「運がいいって言うレベルじゃない気がするよぉ」

床に書かれた魔法陣が光ると、床が消えて長い階段が出てきた。
アスレイを先頭にゆっくりと降りていく。3分ほど歩いたところで、空気の流れが変わった。
「なんだか広いところに出たよぉ」
「寒いです」

「この街の地下に結界を張ってこうしてアジトにしてるんさ。メンバーの人数は大体２００人ぐらいかな。若手で今までかなりの時間割いて計画を練ってきたんだ。今日こそあの長を引きずり落とす時だ！」

ぱっと明りがつく。

そこは広く、薄暗い空間だった。

圧迫感を感じたのは天井が低いだけではない。

若い男女が大勢、その空間に集まっていた。

誰もがこの街では違法とされる武器を持っている。だが、どれにも不思議なリボンが付いている。

おそらくまじないでセンサーに関知しないようになっているのだろう。

物々しい雰囲気の中心にいたのは、そんな彼らのぐらぐらとたぎった闘志をふわりと受け流す人物の存在に気付いた。

その気配にぴくり、とマリが反応した。

そして中心の人物が人だかりの中から出てきたとき、マリがそそくさとショウタとクインの間に隠れた。

「どうした、マリ」

「あの人、ちょっと違う人だよ」

「どういう意味ですか？」

その人物は、白く丈の長いコートのような服を着ていた。

青みがかかったグレー色の髪、糸のように細められた目、にっこりとこちらを見て笑うその雰囲気、物腰はとても柔和。

見た目は若いが、こういう類の男は年齢不詳と決まっている。

落ち着き方が大分大人だ。

男はゆったりとした声でアスレイに問うた。

「アスレイ君、こちらの方々は？」

「紹介します。ショウタ君、クインさん、マリさん。
大切な仲間が銃刀法違反で捕まっちまって助けたいらしいから連れてきたんす。
三人とも、彼は俺らの陣頭指揮を執るルーンさん」

ルーンと言われた男は礼儀正しくあいさつをすると、ショウタたちに向かって好意を示した。
「もしかして、貴方がアスレイの家のまじないをしかけた人？」
ショウタが尋ねると、ルーンはいかにもと落ち着いた声で言った。
「どうして魔術を使えてこの街では優遇されるべき貴方が、このような行動をするんですか？」
「確かに僕は魔術師だ。
だけどね、この街に昔から住んで、こんなにも変わってしまったのを見過ごすことなんてできない。
今の街では魔術を使う人たちの中にも反感を抱いている者もいる。
僕らの願いは、元の穏やかなルイニを取り戻すことだ。
そのためには、痛みを伴うのもやむなしだ」

ルーンの穏やかな声に、若者たちは染みいるように聞き入っている。
ショウタはこの人物のカリスマ性は未だに理解できないが、慕われていることには間違いないのだと思った。
そして、そんな崇高な目標はどうでもよく、問題は仲間を助けること。
武器を奪われた彼らが無事にいてくれることがショウタには気がかりだった。
それはもちろん、クインとマリも同じだ。
ショウタは意を決してルーンに向かって言った。

「俺たちは貴方達の計画とはもしかしたら違うのかもしれない。

でも、この街のへんてこな規則によって仲間を捕えられてしまった。
敵は同じだと思う。俺たちにも協力させてほしい」
ルーンはショウタの真摯な姿勢に気をよくしたのか、ゆっくりと頷いた。
「目的を同じとする者はみな仲間だ。
君たちには監獄を襲撃する計画に加わってもらおう。よろしく頼むよ」

どうにかスタートラインにこぎつけたことに安堵して、ショウタはふぅー、と長く息を吐いた。

これからしばらく計画の最終チェックを行い、いくつかの班に分かれて街を襲撃する。
極力被害を少なくし、長を捕まえて追い出すこと、らしいがそんなにうまくいくものだろうか。
ショウタは不安だったが、今はこれ以外にいい方法がみつからない。

こういう場に慣れていないマリとクインのことを心配するが、思った以上に女性はたくましい。
彼女らも慣れぬ武器をいくつか借りて、いざというときに備えるつもりらしい。
ショウタはぼんやりと、時間の経過が分かりにくい部屋の中で、監獄に入れられた４人を案じた。

「なんだかすっごい嫌な予感がする」
ショウタのつぶやきに気付いたクインが歩いてきた。
心配そうにのぞきこんで、ショウタの隣に座った。
「・・・みなさん頼もしい方々ですから、大丈夫ですよ」
「ありがとう。

でもね、やっぱり変な気分がするんだ。
ここら辺がざわざわして・・・」
「？」
「でね」

ショウタは表情に影を落として、クインのほうを見ずにつぶやいた。

「俺さ、俺の気持ちとか考えとかを無視した感情ってのが時折流れてくるんだ。
そういう時って必ずなんかよくないことが起こるような気がする」
「えっと・・・」
「ごめん、混乱させて。
監獄にいる４人、きっと今よくないことに巻き込まれているんだ。
だから、早く俺たちが駆け付けなきゃね」
「・・・そう、ですね。
私もできる限りのことはします。その、背徳感はあるんですが」
くすり、と笑ったクインは、そのままショウタの傍から離れ、どこかへ行ってしまった。

一人になったショウタは理解できない手の震えを握りしめて、壁に寄り掛かって時間まで仮眠をとることにした。
きっと出かけるときになったら起こしてくれるだろうからと甘え半分で。
思ったよりもすんなりと眠りに入れ、人々の声が遠ざかっていった。

何もない、真っ白い世界の中にショウタはいた。

ふわふわと浮かんで、また居心地のいいそこに。

また遠くに人がいる。今度は二人。
そこには床がないのか。白いフードを被った人の影のような位置に黒いフードを被った人がいる。
もうすすり泣いてはいない。
お互いを見て、そして、ショウタに気付いて顔を向けた。
とはいってもフードで顔は判別できないのだが。
今度は声をかけよう、とショウタは口を開いた。が、

「いたっ」
「ショウタ君、起きて。時間だよ?」

いいところで起こされたものだ。
ショウタはきょろきょろとあたりを見渡すと、すでに人が半分いなくなっていた。
出発の時間らしい。

「あぁあ・・・寝た気がしない」

「何言ってんのぉ。相当寝てたよ」
「いや、そうだけどさ・・・なんていうか・・・」
「おーい、行くよぉ」
アスレイが声をかける。
ショウタはそそくさと立ち上がって、この部屋に入ったときに使った階段に向かった。
監獄襲撃犯はほかにも何人かいる。
ショウタたちはほかの場所での暴動がおこった後一番最後に監獄に侵入する。
街の至る所で暴動をおこすのと同時にレジスタンスに参加している魔術師がまじないをしかけるという。
そして監獄の結界を解くらしい。
それで侵入することができればあとはどうとでもなるだろう。

「そういえばどうして監獄が重要ポイントなの?」
「ショウタさん、聞いていなかったんですね・・・
そこに前の町長さんがいるんですよ。
この革命を成功させるための重要人物なんです」
「ふーん。そっか。わかった」
「・・・興味ないんやね。まぁいっか。
君たちすごい腕が立つらしいし期待しとるわぁ」

アスレイも少しだけ緊張しているのか、ひきつった笑みをしている。

出会って数時間しかたっていない人間を信用できるものか、と思っていたが、アスレイはそういう人間らしい。
もうすでにショウタたちを信頼しているようなそぶりをいくつも見せている。

こういう人間がよい人になるのかな、とショウタはぼんやりと階段

を昇りながら結構適当に考えていた。

ようやく階段が終わり、扉を開けたとき、そこはアスレイの宿屋ではなかった。

ルイニの町中と思われる場所だった。

ショウタたちはこの街を観光したり探索したりする前にこんなことに巻き込まれていたので、ここがどこかは具体的にはわからなかった。

この街に来た時にちょうど日が落ちたぐらいで、結構時間は経っている。

時間は分からないが人の通りが少ないから時間帯は遅そうだ。

「さて、暫く固まらないで自由行動だね。

東の空に赤の信号弾が見えたらすぐにここに集合で」

アスレイはそういうと、フードをかぶって宵闇の中に消えた。

２０人足らずの人間が散らばって、時間をつぶすことになった。

ショウタたち三人は少しだけ歩いて、位置関係を把握しようとしたがやはりわからなかった。

その時、闇夜に浮かぶ大きな建物に気付いた。

窓がなく、建物と塀が一緒になってしまったようなものだ。

その傍まで来て、右から左から見てみたが、扉なぞない。

「なんだこれ」

「これがきっと監獄なんだよぉ」

「ぴーんぽーん。正解よーん」

ショウタの横で陽気な声が聞こえた。聞いたことがある。
というか、何故横一列の並びに彼女が参加しているのだろうか。
ショウタたちは彼女からそそくさと離れ、持ってきていた武器を構えた。
彼女が構えているのは、真夜中なのに日傘だ。

「お久しぶりねん。えーっと、お名前は聞かなかったわねん」
「貴方はフィオ・・・だっけ？」
「あらん、私名乗ったかしらん。まぁそんなことはどうでもいいわねん」

豪華客船”シェリーン”で問題を起こしまくって結局ルーマによって肩を射抜かれ退散した女性。
他人の名を奪うことができる魔術師、フィオルディシリア・ワーラン。
その人物が今、ショウタたちの目の前にいた。
当たり前に怪我は完治していて、上品に日傘をさしてくるくるとまわしている。

「そこの坊やとお嬢ちゃんは知っているわん。
でも、そこのおちびさんははじめましてねん」
「・・・ショウタ君、このおばさん、誰？」

ちびといわれたのが気に障ったのか、わざとマリはおばさんと強調してショウタに聞いた。
フィオはそう言われたことを全く気にしていない。
相変わらずにやりという擬音が似合う笑みを浮かべてこちらをみている。

「・・・後で説明するけれど、あんまりよくない人」
「それで十分」
「失礼な子たち。
で、貴方達ここに用があるのかしらん？」
「貴方には関係ないことです」
「つれなーいのねーん。
私はこの中にいるエルデナの人間を始末するためにきたのよん」

蛇のような目をする女だな、とショウタは改めて思った。
フィオはくるくると傘を回し、ショウタたちにご機嫌な笑みを浮かべている。
それは結構、不快だった。
ショウタはそれでも彼女に訪ねた。

「エルデナの人間がここにいるって、本当？」
「疑うのん？それは私がここにわざわざ来ていることを否定することよん」
「ショウタさん、どうしますか？」
「関わらないでおこうかな」

そう思い、ショウタたちが立ち去ろうとしたとき、フィオが何かに気付いた。
それはショウタたちが左腕にはめている腕輪だ。

「その腕輪、どうしたのん？」

フィオが尋ねるとショウタたちは内心ぎくりとしながら、無視してすすもうとした。
が、

「ふーん、そうなのねん。
貴方達が契約しちゃったのねん。それはちょっと予想外ねん。
ここに入れるまではまだ時間がかかるからん、あの坊やはいないけれど、時間つぶしに相手してあげるわん」
「いや、結構。遠慮しとく。それじゃあ」

ショウタたちがすたすたと立ち去ろうとしたが、そうはいかなかった。
フィオはもうやる気満々といった感じだ。
ぶわん、とあたりに重たい魔力が満ちた。

「そんなこと言わないでん。
貴方達の力、ちょっと見たいだけだからん」
「・・・そんなことしている場合じゃないけれど・・・」
「私やるよぉ。あんなおばさんよりも私のほうがすごいってことを証明してあげる」
「どうして張り合っちゃうんですか」
「あの人嫌いだから」

気のりできないクインと、フィオに敵対心を燃やしているマリ。
信号弾が鳴るまでまだ時間はあるが、こんなことをしている意味はないかもしれない。
しかし、クインとマリは知らないが、彼女は”大罪人”だ。
フィオなりに自分たちを試そうというのなら、ショウタ達は乗るしかなさそうだ。

「仕方ないか・・・」
「今日はクリーマはいないけど、貴方達3人くらいなら簡単に相手できちゃうわん」

余裕を見せるフィオがくるくると傘を回すと、ふわりと彼女の体が浮いた。
フィオの魔力に対抗するように、ちり、と皮膚を焦がすような熱い風が体を突き抜けた。
マリの魔力だった。
ショウタはふぅと一つため息をついた後、ポケットから革の手袋を取り出してそれをはめた。
考古学の発掘するときにたまに使うそれだが、素手よりはましだろう。
ぎちりと音を立てて手袋をはめた後、ショウタは背後の二人の動きとタイミングを合わせるようにして二、三歩足踏みをした後、
フィオに向かって突進した。

31話　天秤にかけたものは

場面は監獄廊下。

鈍い音と甲高い音が狭い廊下の中で混ざる。
服のあちこちが切れ、その下から細かな切り傷が増えていくが致命的な傷は負っていない。
それはラルゴだけでなくオーレンも同じだった。
力はほぼ拮抗状態。いたずらに時間だけが過ぎていく。
ラルゴは自分たちを逃がすために残ったツァイとルーマが気がかりだった。
ここではもう銃声は聞こえない。
きっと遠くに来てしまったから聞こえないだけだとラルゴは信じている。
具体的にここは一体どういうところで、何が起こっていて、そもそもどうしてエルデナが入り込んでいるのか。
情報屋の性だからか、今のこの情報不足がもたらす閉塞感が嫌だった。
だからといってオーレンが手を休めるわけではないので、彼の動きを抑えつつラルゴはちらり、と床で倒れるテレジーを見た。
せめて彼が起きていればこの場から逃げることができたかもしれないが、彼は一向に目を覚ます気配がなかった。

「よそ見しちゃダメだって！」

刹那の攻防。オーレンが叫ぶ。
彼が繰り出す大ぶりな一撃を慌てて剣で抑える。
至近距離で睨みあう二人。だが、お互いに口元は笑みをつくってい

た。
それは、お互いにこの勝負、引く気がないという意思の表れか。
がきんっと金属音がして、二人はまた間合いを取って離れた。

「っ・・・
口だけじゃあなかったみたいだな。１０年前のお前なら俺は楽々勝てたのにな」
「生きるために己を磨いたのはラルゴだけじゃないってことさ」
「だが相変わらずめちゃくちゃだな。正直言ってお前の攻撃はめんどくさい」
「まぁまそんなこと言わずに。
そいや、俺って結構紳士だよね。あれに手を出さないんだから」

そう言ってつるはしの先端をテレジーに向けた。
その間に割って入ったラルゴは再び剣を構え斬りかかる。彼の足を狙ったが、それも簡単に弾かれてしまう。
余裕の表情を作ってはいるものの、だんだん苛立ちと焦りから精彩を欠いてきた動きに気付いたのは、ラルゴ自身よりもオーレンが早かった。
オーレンは体をひねり、その遠心力を利用して下から上につるはしを突き上げた。
間一髪、致命傷は避けたが、左腕につるはしの先端が走り、今までの中で一番大きな斬り傷となった。

「ぐっ・・・」

とん、とステップを踏んで後退する。
どうにか動かない、というほどの傷ではないが、それは二人の間に大きな違いを生んだ。
優勢と、劣勢。それは傷ではなく、心理的なものも含んだ。

ラルゴはこういう危機的状況をそれは数多く経験してきた。
時には入院するほどの大怪我を負ったこともあるが、こうして現在もなんとか命がある身だ。
それがなぜか妙に、今は実感ができない。
もしかしたら大怪我を負うだけでは済まないかもしれない。

・・・やっぱり俺も人の子か。

自分を見おろすオーレンを再度見た。
ラルゴは自分の気持ちを認めた。自分はオーレンを斬れない。
そしてそれをオーレンもわかっていた。ラルゴは自分を斬れないと。

彼は口こそぶっきらぼうだが、本当は情に厚い。
きっと今も心の底で友人である自分へどうしていいのか戸惑っているのだろう、とオーレンは思った。
彼は非情には決してなれない。
そんな良心ともいえるラルゴの性格を知ってこの場で彼に斬りかかる。
オーレンはそんな自分を確かに彼が言うようにずる賢く、薄情なのだろうと感じた。
だが、

「そんな俺でも悪いな、とは思うよ。
昔の友人と対立するなんてさ。悲劇の常套句みたいでなんだかいやだし、まさかそんなことになるなんてさ、思わないわけだ。
そういえば、ラルゴの願いは、アイリーンを助けることでしょう」
「・・・」

少しだけ手を休め、オーレンは切れ長の目を細め、先ほどまでの殺気を消して、喋った。

「俺はアイリーンと最後に会ったのは卒業式の日。
それ以来１０年、手紙で時折喋る程度で全く会っていなかった。
１０年。いい歳の取り方をすれば、きっとアイリーンはぐっと美しくなっているんだろう。
それが、みられないなんてね」

ふるふると首を横に振る。
それは演技ではなく、オーレンの本心だった。
思いだすのは懐かしい学問所の友人。
自分がいて、ラルゴがいて、そして、アイリーンがいる。
その彼女の笑顔が、オーレンには張り付いたまま、動かないものとなってしまっていた。

「アイリーンが１０年前と全く変わらないなんて・・・
ねぇ、従弟であるラルゴは会ったんだろう？本当に、本当のこと？」

「俺だって・・・疑いたくなるさ。
変わってないって、歳を取っても顔や雰囲気が全く変わっていないという意味じゃない。
あいつ、時が止まってるんだよ。本当に。
どうしてかわかれば俺だって苦労しない。
１０年、世界中を捜しまわっても解決方法が見つからなかった。
そんななか、一年ぐらい前か。ショウタにあった。
半ばあきらめていた俺に最後に回ってきたツキだ。
お前がどうして俺らの邪魔をするのか、俺は理解に苦しむな」
「俺はラルゴの願いがかなえばいいと思うさ。それは俺も願うことだし。

だけどさ、駄目なんだよ。あれに手をつけちゃいけない」
「・・・この前と同じこと言うんだな。
ダニアの皇太子二人を捕まえることとそれが関係しているようだが」

「そうさ。だけど誰にも言えない。言ってはいけないことさ。
口止めされているからね」
「誰にだ」

今なら何かを聞きだせる。
オーレンに問いただそうとしたとき、ふと、空気が変わったことに
ラルゴが気付いた。

どうしたのかと状況を確認するよりも早く、現実が情報として目に
飛び込んできた。

「え・・・な・・・？え？？」

目の前でオーレンが目を白黒させる。
そして、彼の目とラルゴの見開いた目があるポイントで止まった。
本来右腕がある場所に右腕がなくなっていた。
ごとんとがしゃんという音が同時に聞こえて、つるはしを握ってい
た腕が床に落ちたことは理解した。
が、理解できなかった。
その腕は氷漬けにされていて、血も出ていなかった。
オーレンの肩も凍っていたことから、凍った腕を斬り落とされたこ
とに気づく。さらにおぞましいことに、斬り口まで凍っていた。

まるでバランスを崩したかのように、ゆっくり体をひねったオーレ
ンの後ろには、
先ほどまでラルゴの背後にいたはずのテレジーがそこにいた。

ただのガラス玉のような紅い目が、オーレンをじっと見ている。

「お、ま・・・ぇ、お前ぇえええ!!??」

オーレンが叫んだ。

混乱していて、彼は利き腕であろう右腕を伸ばそうとするが、二の腕の真ん中から先がなくなっているのでそれもかなわない。

バランスを崩し、そのままテレジーに行き着くことなく、オーレンは倒れた。

「あぁぁあああああ!!!??」

ラルゴはオーレンのこんな声を聞いたことがない。

人間の断末魔なんて聞きなれている。だが、それとはまた違う気がする。

初めて、背筋がぞっとした。

「お前、いったい如何して・・・」

ラルゴがかろうじてかけられたのは、その一言だけだった。

テレジーは両手で彼のもう一つの武器である短剣を握りしめていた。

短剣とは言ってもそれなりに大きさがあり、そして鋭利だった。

美しい白い刀身はつるりとしたまま、ついさっき人を斬ったとは思えなかった。

がくがくと変なけいれんを起こしているオーレンが、這いつくばったままテレジーに言った。

「き、さ、きさま・・・きさま、ふざけるなよおい。

俺の腕、あんなところに・・・

ちくしょ、なんでだよ。いったい何があったんだよ。なぁラルゴ。

何があった?お前、見えていたんだろう?」

混乱したまま、痛みさえも理解できない様子のオーレンがラルゴに尋ねるが、ラルゴだってわからない。

先ほどまで倒れていたテレジーがどうして起き上がっているのか。
そして、なぜラルゴとオーレンでさえ気づかないうちにオーレンの背後に立って彼の腕を斬り落としたのか。
脈絡がなくて、ラルゴだって混乱していた。

す、とテレジーが再度剣を構えた。
今度は命を狙うつもりだと、ラルゴは勘づいた。明確なまでにオーレンに対して殺意を抱いている。
突きの構えをし、彼はそのままオーレンに向かった。

しかし、突き抜けたのは、ラルゴの腕だった。

「・・・ラルゴ？」
「ぅ・・・」
かばわれたオーレンがラルゴの背に弱弱しく声をかけた。
左肘のすぐ下あたりに浅く刺さった短剣。浅かったのは、ラルゴがその短剣の柄を握っていたからだ。
「いっ・・・てぇ。
・・・オーレン、一旦引け。このままだと死ぬぞ」

振り返ることなく言ったラルゴに、オーレンは不服とかそういうのを感じる前に、落ちた腕を抱えた。
そしてペンのような機械を取り出し、素早くカチカチと数回鳴らすと、その場から姿を消した。

残された生臭い匂いだけが気分を害するが、テレジーは顔色一つ変えていない。
しかたがない、とラルゴはあきらめ、柄を握っていた右腕を素早くテレジーの手首まで伸ばした。
そして、思いっきり握った。

ごきり、という音が響いた。折れたのか、外したのかはラルゴもよくわかっていない。
その時初めて、呆然としていたテレジーがはっとした。
ぱっとラルゴから離れ、辺りをきょろきょろと見渡した。
彼が離れた瞬間に、ラルゴは短剣を腕から引き抜いた。
大事に至らなかったが血は流れる。
ニッチ（膨大な容量を誇る入れ物。鞄タイプやポケットタイプがある）である懐のポケットをあさって止血できそうなものを捜すが、手元がおぼつかなかった。
応急処置としてタオルを取り出すと、肘より上を縛り上げた。
ラルゴは手慣れたもので、次々と傷を治療して、ようやく止血に成功したとき、ようやくテレジーに意識を向けた。

「おい、これ返す」

そう言われ、テレジーに短剣を突き付けた。
が、テレジーはそれを受け取らなかった。
「あぁ、そうか。おい、こっちこい」
テレジーを招き、彼の袖をまくると、腫れた両手首があった。

「まいったな。ここ出るまで我慢しておけ。クインに診てもらえばいい」
「・・・俺は、一体」
「はぁ？
お前何その反応。拍子抜けを通り越して殺意がわくぜ。
お前はな、俺の旧友を殺しかけ、あまつさえ俺に怪我を負わせたんだよ」

そう言ってラルゴは止血をしている左肘をテレジーに見せつけた。
彼は辺りをぐるっと見渡して、オーレンがいないことにようやく気

付いた。

「そうか。あいつ、いなくなったか」
「お前に取っちゃいいことこの上ないか」
「・・・少なくとも、お前にとっても困ったことではなかろう」

ラルゴは何を言われるのかをなんとなく、感じ取った。
それを実際言われるまでは、手を出すまいと心に誓って。

「お前に願いがあり、それをやつが邪魔するのならそいつは敵だろう。
友情だの何だの、それは学問所の空気の中だけでしかなかったわけだ。わかってよかったな。
それともなんだ。お前の願いはたかがその程度のものであきらめがつくものだったのか」

すべてを言い終わる前に、テレジーは背中を強く壁に打ち付けられた。
襟首を掴まれ、そのまま再度壁に叩きつけられた。今度は頭も打って鈍い振動が鼓膜の奥でめぐった。
目の前には、眉間にしわを寄せたラルゴがいた。
彼はひたすらに冷たく、ひたすら低く、テレジーをにらみ、言った。

「てめぇはとことん人間ってのを信用していないようだな。
そんな人間にたかが友情でさえ語られるのが気にいらねぇ。
世間知らずのクソガキが。その歳で人生達観した気になるなよ」

静かなにらみ合いの末、ラルゴはそのまま彼から離れ、どかっと廊下に腰を下ろした。

殴られるかと思っていたテレジーは少しだけ不可解に思いながら、ラルゴの背を見おろしていた。
ラルゴは無言のまま、黙って考えていた。
結局、どうにもできない状況を形はどうあれ、テレジーが打破したのだ。
斬ることのできなかったラルゴではあの状況をどうすることもできなかったから。
確かに彼の言い分は癇に障るが、すべてが否定できなかった。

もしかしたら、オーレンとの友情なんてまやかしだったのかもしれない。
それを否定すれば、自分は１０年間かけて探し求めた従姉を救おうとした時間をも否定する。
しかし、だが、いや、
逆接の言葉ばかりが浮かんでは消え、ラルゴはそのまま頭を抱えたくなった。

しかし時間は無情にも過ぎていく。
今ここで仲たがいするのも無意味なので、何事もなかったかのようにラルゴは声をかけた。

「・・・行くぞ」
立ち上がり、ラルゴはテレジーの剣を持ったまま先へ進むため歩き出した。
だが、進んでも進んでもテレジーが付いてこない。
いらっとしながらラルゴは振り返った。
「おい、何してんだよ」
「・・・そっちじゃない」

そういうと、テレジーは不自由な手で来た道を指さした。

「あ？」
「さっきの通りを右ではなく、左に曲がらなければならない」
「なんでだよ」
「あっちから、あの考古学者のにおいがする」

テレジーの言う考古学者とはショウタのことだ。
訝しい気もしたが、ラルゴは今までのショウタの行動を思い出した。

彼はテレジーに関しては第六感とも勘ともいえるなんとも論理的には説明しにくいことをたびたび言っていた。
もしかしたら彼もそれを持っているのだとしたら、なんて変な仮説を唱えた。

「外れていたらこの剣もらうからな」
「外れてない」
「わぁったよ。そっちなんだろ。行くって」

来た道を戻るのはなんとなく心理的に好きではないが、仕方がない。
どのみちラルゴでさえここの出口を知っているわけではないのだから。
ともかく負傷はしてしまったもののテレジーが目を覚ましてくれたおかげで彼を担ぐ必要はなくなった。
ずきずきと熱を持って軋む左腕に顔をしかめながら、二人は再度出口に向かって歩き出した。

32話　凪

場面は監獄の塀の外。

フィオは三人がかりでもまったく引けを取らず、剣のごとく、華奢な日傘を振り回している。
それはただの傘ではない。
彼女が振り下ろせば舗装された床に穴が開いた。そんな攻撃を食らえばひとたまりもない。
ショウタはそれを避けながらせめてフィオの体勢を崩せないか、と模索するが、うまくはいかない。
そして、ショウタは気づかれないように、立ち位置を調整していた。

戦意をむき出しにしているマリの攻撃がフィオに致命的なダメージを与えないように。
あくまでこれは手合わせであって、フィオを倒すのが目的ではないからだ。
合図があるまでの時間を潰せればそれでいい。
だが、だんだんフィオの攻撃に押され始めてきた。
マリはフィオが嫌いだからガンガン炎を飛ばしてくるし、ショウタが体をひねれば後ろからクインが容赦なくメスを飛ばしてくる。
それでも、フィオはそれを簡単にいなし、ぱちんと指を鳴らす。
風でなく、圧をかけられ、ショウタが一瞬ひるめば、後衛の二人もダメージを負う。

「いったぁっ！」
「うっ・・・！」
攻撃の手が止まって、一瞬間が開く。
フィオはぱんっと傘を開いて雨も降っていないのに傘を差した。

「ふぅん、こんなものねん。
これじゃあ合格をあげられないわん。もっともっと頑張ってもらわなきゃ。
貴方達が思っている以上に楽じゃないわよん。この先は。
そんなんじゃあ大怪我どころじゃすまないわん」

肩に傘を当てて、くるくると柄を回しながらフィオは息一つ乱さず言った。
彼女にとっては一対三もたいしたことではないらしい。
むしろ役不足らしい。退屈しのぎにもならなさそうだ。
「まったく、結界が解けるまでの暇つぶしもならないわん。
暇だしちょっと派手なことしたいわーん。
そんなことしちゃだめって言われているけれど、だって退屈だものん」

すっと傘の先端ををショウタたちに向ける。
ショウタはそれにひるむことなく、落ち着いた声で問うた。
「誰に、言われているんだ?」
「?どうしてそれが必要なのかしらん?」

ショウタは思い出していた。
”大罪人”の女性が言っていた言葉。
少なくても、彼女、セラーという人、そして、ユピは敵ではないと言った。
それは裏を返せばそれ以外は・・・と勘繰ってしまう。
だが彼女が言っていたことをそのまま鵜呑みにすることもできまい。

ショウタはそれを確かめることが必要な気がしてならなかった。
フィオはショウタのその考えに気づいてはいなさそうだが、その質問に少しだけ疑問を感じたらしい。

ぴりぴりとする魔力を纏わせて、彼女が一歩だけショウタに近づいた。

が、その時、

「キュウ！」

ショウタの後ろからウルルが飛び出してきた。

そういえばこの街に来てからごたごたしていてショウタもウルルのことを忘れていた。

ご機嫌そうにフィオに飛びついた。じゃれたいのだろうか。

助っ人だとしたら実に賢い。とはいえ力になれるわけではない。

だが、フィオの反応は予想外のものだった。

「きゃあああああ！！！」

彼女はヒステリー寸前の悲鳴をあげて、体中を這いまわるウルルをはがそうと暴れた。

その行動に三人は目を白黒させて見ていることしかできない。

「ど、動物！毛！しかもそれケナガウブキノソノソシソク！わた、私動物アレルギーなのよん！やめ、やめてぇぇえええ！！」

間。

ぽかんと口を開けた三人は、動物たかが一匹相手に必死になっているフィオを見守ることしかできない。

「・・・どうなっているんですか？」

「・・・俺が知りたいよ」

「キュウキュウ！」

残念ながらフィオの叫びはウルルには通じていないようだ。

その時、
「信号弾・・・！」
ぱんぱんと数回空に音と光がはじけた。
空を仰いだ後振り返ったときにはすでにフィオは塀に傘を向け、
「壊れなさい！」
そのままの命令を下した。
爆発音とともに壁が崩れた。それに驚いたウルルがフィオから飛びのき、ショウタの肩に飛び移った。
そしてフィオはそのまま走って監獄の中に入っていった。
「ま、待て！」
ショウタが慌てて追いかけようとしたとき、フィオは振り返って叫んだ。
「遊びはここまでよん。お子様はさっさと帰るのよん！」
そう言って最後に一発魔術を放った。
途端崩れた壁が飛礫としてショウタに向かってきた。
それは想定外、とも言えないが、ショウタは意識が別のところに向いていて攻撃されることを忘れていた。
避け損ね、このままでは怪我をするという瞬間のところで、ショウタは体を横に押された。
石はショウタに当たらなかった。

弾き飛ばされ、一瞬何が起こったかわからなかったが、小さなうめき声がショウタの耳に入った。
「・・・クイン！」
「クインちゃん！」
ショウタを突き飛ばしたのはクインだった。
彼女はその場にしゃがみこんで、左肩辺りを抑えている。
じわり、と白い服が赤く染まっていく。
ショウタをかばって彼女がフィオの攻撃を受けてしまったのだ。
「クイン、どうして・・・？」

「ショウタさん、マリさん、合図です。
早くアスレイさんたちと合流して、みなさんを助け出してください」

「どうしてクインちゃんが怪我しなきゃなんないのぉ！？」
クインは首を横に振ると、少しだけ息をのんで言った。
「私なんかより、お二人が行った方がいいと思ったからです。
私はここで待っていますから。さぁ、早く」

ショウタは一瞬戸惑ったが、マリの手を引いて走り出した。
だが、進んだ先はアスレイ達との待ち合わせ場所ではない。フィオが開けた穴をくぐり、監獄の中へ進む。
走りながら、しゃがんでいるクインに振り返って声を投げかける。
「クイン、気をつけて。必ずすぐに戻るから。安全な場所にいて」
「はい」
「クインちゃん、ごめんね」

二人を見送った後、クインは傍に近寄って悲しそうな鳴き声を出すウルルを右腕で抱きあげた。
心細げな声を出し、彼女の怪我した場所と顔を交互に見やっていた。

ふわりと笑みを浮かべて、クインは小さな声で話しかけた。
「心配してくれるんですか？ありがとう。
でもね、こんな傷、すぐに治ってしまうから大丈夫。
心配はもっと別の人にしてあげてください」
ウルルの悲しそうな鳴き声と同じくらい、クインの声は静かで、穏やかで、
それでいてどこか悲しげだった。

あてずっぽうに走り続けるのはいたずらに体力を消耗してしまうというのに気持ちのせいか、足は止まらない。
しかしショウタは疑問を感じていた。
ここが監獄というのなら、監視員がいるはずだ。だが、それに出くわすことがない。
とにかく廊下が続いていて、扉も何もなく、まるで迷路に迷い込んできてしまったような気分だ。

「ショウタ君、場所わかるの？」
「わかると思ってる？」
「し、質問しているのは私だよう・・・」

と、曲がり角を曲がった瞬間、
ショウタは誰かとぶつかった。
思わず後ろに後退してしまい、敵かと身構えた。
しかしショウタは強運の持ち主らしい。

「ショウタ！マリ！」
「ラルゴ君！テレジー君！よかった無事だったんだね！」
曲がり角から現れたのは、ラルゴとテレジーだった。
マリは安堵しようとしたとき、二人が怪我をしていることに気付いた。
ショウタはそれにももちろん気付いたが、問題はもう一つある。
「ねぇ。収監されていたはずなのにどうしてこんなところにいるの？もちろん都合がよくて助かるけれど・・・」
「そうだな。だがゆっくり話している暇はねぇ。

いそがねぇとルーマとツァイが危ねぇからな」
「ツァイ!?一体どうして?」
しかしラルゴはマリの質問には答えず、話をどんどん進めていく。
「マリ、こいつをクインに診せてやってくれ。
俺とショウタで奥にいってルーマとツァイを助けてくる」
「い、いや・・・!
私も行くの!どうして私も外に出なきゃならないの!?」
「一体どうなってるんだよ・・・ねぇ、テレジー」
「・・・」
「あぁー、なんかもう色々あって面倒くせぇ」
「私抜きで行っていいわけないよぉ!」

相変わらずまとまりがないが、時間もない。
テレジーは不自由な手を動かすと、ラルゴから自分の剣を奪い返し、ショウタに手渡した。
不思議そうに目を向けるショウタに、テレジーは淡々と述べた。
「血の跡をたどって行け。血が途切れればひたすらまっすぐ進めばいい。
魔術師、お前も行け。動けるのなら、お前も行けばいい。
俺は戻らせてもらう」

「そうはいきません」

かつん、と固い音が響いた。
声のする方を振り向けば、そこにはラルゴたちを捕縛したセレン・ラッソがいた。
身の丈ほどある細身の杖を構え、仕事着のままだ。

「貴方方を脱獄罪、脱獄幇助罪により上からの処分命令が出ています。旅人であろうと情状酌量の余地はありません」

「ちっ・・・めんどくさい時に。
あんたはこの規則の裏を知らないのか！？あんたが守る規則ってのはその価値があるのか！？」
ラルゴが叫んでも、セレンは顔色一つ変えず、再び杖を床に突いた。

「お黙りなさい。
処分命令が出ていると言いましたね。この場で貴方方を始末いたします」

「冗談じゃないよ。殺されるなんてまっぴらごめんだ」
ショウタは借りた剣を構え、マリも魔術を発動させるために意識を集中させる。

そのとき、すぐ近くで爆発音が響いた。
暫くたって爆風が廊下を吹き抜け、舞い上がった粉塵が視界を不明瞭にした。
咳きこむほどではないが、一体誰が何をしたのだろうか。
「なんだよいったい立て続けに・・・」
「ショウタ君！マリさん！無事だったんですか！？」
声の主はアスレイだった。
どうやら爆発させたのも彼らしい。
「っと、おやぁ、保安巡査部長やないですか。
ははん、これはつまりそういうことかいな！」
「貴方は確か宿屋の息子のアスレイ・フールドヴォール」
「よしわかった！つまりこれは中ボスってことか！」
「待ってアスレイ話が」
「セレン・ラッソを倒して元町長を見つけ出して現町長を追いだしてハッピーエンドってか！」
「何こいつ頭大丈夫なの？」
「・・・」

計画が始まって頭に血が昇り切ってハイになっているアスレイに声が届いてくれない。
ショウタはむなしいを通り越してどうでもよくなりそうになりながらも、再度剣を構えた。
このままアスレイがセレンの相手をしている間、隙をついて奥にいるルーマとツァイ達のところに行けばいいだろうと考えながら。

驚くほどに手になじむ剣を強く握りしめ、ショウタは神経を研ぎ澄まして目をつむった。

33話　引き合えば

白い研究室。

幾度となく繰り返された攻防は小休止をはさんでいた。
ツァイはすっと短剣を握る右腕を降ろした。
しかしそれは隙を見せているわけではない。それは相手にもしっかりわかっていた。
ツァイはまっすぐな目線を男に向けて、問うた。

「どうして私たちに武器を返した？
まるでこうなることをわかっていたかのようだ。
お前の言っていることを実行するためにはこれは邪魔なものではないか？」
ツァイが尋ねると、男は肩を一回だけ上げてみせた。
その態度がしっくりこなくて、ルーマも聞いた。
「最初から僕たちを試すためだったの？」
「否定はしない」
「じゃあテレジーを捕えたいっていうのは？」
「それは本音だ」
「僕たちを実験体にしたいってのは？」
「可能な限りしたいものだ」

ルーマは頭をもういちどよく整理する。
それでもこの男の言動が矛盾しているように感じる。
「つまりさ、貴方は一番に何をしたいの？」
確信的なことを尋ねると、男は釣り目を細め、笑った。
そして、ルーマの質問に直接的な答えを下さなかった。

「もはや隠す必要もなかろう。
お前らも会ったことがあるオーレン・ヴァイセンハイン。あれは俺の部下だ」
男の告白は、ルーマとツァイの緊張感を高めるのに十分だった。
ルーマは拳銃を握る手を強めた。
「あの残酷で狂気じみたあの人が？」
「その性格には俺も手を焼いているんだがな」
「なるほど。それなら合点がいくな」
ツァイが納得する。
「私たちを試すのも、実験も、オーレンがやったようにすべてお前たちにとって必要なことか」
「そうだ」
「ついでにいくつか聞かせてもらおう。
どうしてエルデナは我々の行く手を阻もうとするんだ」

びり、と緊張感がまるで電気のように足元を走った気がする。
男は涼しげな顔をしていて、それでいて感情は冷たい。
それでいて、どこか人間的なものではない何かを感じていた。
ツァイは今までの経験で人の気配や脈というものを感じられるようになっている。
この男が纏うものが何か考える。
もはや武人の顔つきになった彼女の神経は今鋭く研ぎ澄まされている。
それゆえか、室内に近づいたもう一つの気配にいち早く気付いた。
入口ではなく、天井のほう。
ツァイの視線を追った男とルーマ。しかし男のほうが反応は早かった。
天井めがけて放った男の雷撃が天井を破壊した。

コンクリートの粉を頭からかぶり、破壊音とともに煙が巻き上がった。
一瞬目をつむっただけだったが、世界はあっという間に変わった。
男の目の前に、フィオが現れたのだ。
さぁっと、全身の血が落ちていくのをルーマは感じた。
再び現れた自らの記憶を奪った女に、ルーマの心は荒く乱れた。
だがフィオはルーマに気づいていないのかそれとも無視しているのか。
彼女はとっくに傘を閉じていて、そのまま素早い動きで男に肉迫した。
そして傘を剣のごとく構え、男を両断すべく振るった。
男は懐から護身用と思われる短剣を取り出すと、フィオの一閃を防いだ。
そして刃に己の魔術を纏わせた。びりっと火花が傘に伝わり、フィオは傘を落とした。
それでも彼女はひるまず、細い脚を繰り出した。
突如始まったやり合いの理由がわからないが、これは格好のチャンスだった。
このまま逃げてしまえばいいのだ。
「ルーマ、逃げるぞ」
「え、あ・・・」
ルーマの足は出口を向いていたが、体は逆を向いていた。
ツァイが声をかけてもどこかルーマは体と意思が離れていきそうな気がした。
「ルーマ、なすことにはそれにふさわしい瞬間というものがある。今は、ルーマが思っていることをするときではない。行くぞ！」

ルーマの考えを読みとったのか、ツァイは発破をかける。
彼女の有事の際の判断力は冷静さを伴っていて、途端に現実に引き戻される。
だがそれを男は許さない。
ばちんと指を大きく鳴らしたかと思えば、扉がバタンと閉まり、錠の落ちる音がした。

「あらん、私だけじゃ不満なのかしらん」
とん、と三人から間合いを取ったフィオが男に尋ねる。
「貴方と彼らを逃がさないために取った行動だ。
もっとも、意味はないとは自分でもわかっている。
これは俺の意思表示と受け取ってもらえばいい」
「ふぅん。やっぱり貴方が一番手を取りそうねん。
そうそう、あの女の子、貴方の部下ね。クリーマが相手をしたらしいけれど取り逃がしちゃったのよん」
「部下には手の引き方をしっかりと叩きこんでいるからな。死は無益を通り越して損に回ることがある」
「そ～う。でも、私は逃がさないわよん。
貴方達は私たちの敵となる人物。裏でこそこそ嗅ぎまわって”星の記憶”を邪魔しようとする。
そんなの、”大罪人”の私たちが許せるわけないわーん」

「何を、言っているの？」

ルーマのつぶやきに、フィオは笑って答えた。
「貴方達の願いをかなえるためには、この男たち、つまりエルデナの人間は邪魔なのよん。
そして私たちは契約者を見守るべくして存在する者。
ここまで言えば、おわかりよねん」
「・・・エルデナが敵で、貴方達が味方だって言いたいの？」

「ふふっそういうこと」
ルーマの腕が震えた。
背中にびりびりと神経が触れて、唇が冷えた。
誰がそんなことを信じれるものか。

ルーマの頭の中で、何かがぱちんと音を立てて、その瞬間すべての音が遠ざかった気がした。
気がつけば両の腕が上がっていて、銃口がフィオに向けられていて。

このまま指が勝手にこちらへ曲がればどんなに気が楽なのか。
しかし、指こそが鉄の引き金のように固まっていて、ルーマは硬直することしかできなかった。

ここまでして彼女を憎む理由を、ルーマは冷静に考えていた。
恐らく過去に相当ひどいことをされたのだろう。
それか、相当自分の逆鱗に触れることをフィオがしたのだろう。
そうでなければこの怒りを説明できない。

その時、遠ざかっていた音がまるで耳から水が抜けたように、ぱんと入ってきた。
ぱちんと男が指を鳴らし、電撃が矢のように走る。
飛び出したツァイがフィオに足蹴りを食らわせる。
ツァイの足技からよけようと地面をけったフィオは、足に電撃をかすめ、バランスを崩して落ちた。
そのまま体をひねらせ、男の方に向いたとき、
男はペンのようなものを取り出し、素早く数回かちかちと鳴らした。

「ちょっとん、逃がさないわよーん」
傘を男に向け、魔術を放つ。

だがそれは男に当たることはなく、向かいの壁を破壊した。
部屋から男の姿が完全に消えてしまったことを確認すると、ようやく静寂が訪れた。

かたかたと震えながら、あげたままの腕を降ろせないまま、ルーマはぼんやりとそのまま立ちつくしていた。

フィオは男が消えたあたりをきょろきょろと調べると、わざとらしくため息をついて見せた。
そしてゆっくりと振りかえった。
わざと体をひねらせて、満面の笑みで、どう考えたって人の勘に障るような態度を平気でして見せる。
もともと目つきがきつい彼女が目を細めれば、ナイフのような光を抱いているようにも見える。

「貴方達、あーんな人たちに負けちゃだめよーん。
聞くところによると貴方達まだ一つしか碑文解いてないんでしょ？
ここから一番近いの、教えてあげようかしらん」

ツァイがルーマの前に立って臨戦態勢の構えを取る。
彼女にはルーマとフィオの関係はさっぱりわからない。
だが、このわずかな時間でフィオがどういう人間かはなんとなく理解はしているようだ。
ツァイの中でフィオは何をしているかはとりわけ問題ではなく、人間的には相当性格が悪い、と位置付けられている。
よってツァイもフィオを信用などしてはいなかった。

そんなことはお構いなしに、フィオは軽やかに足踏みをして、話を続ける。

「ここグライナーから一番近いのはドドニア大陸最西端の廃墟の国、アイマナ国よん。
あぁそうだわん。途中でウェイ国を通過するわねん。
行ってみればいいわーん。なぜなら、貴方の生まれた国ですものん」

それだけ言い放つと、フィオは自分が落ちてきた天井穴に飛び移って、どこかへ行ってしまった。
ヒールのかんかんかんという音が遠ざかって、気配が無くなって、ようやくツァイが腕を下ろした。
ふぅ、と静かにため息をついて、振り返った。

「ルーマ、大丈夫か？」
ゆっくりとルーマの肩に手を乗せると、ようやくルーマは腕を下ろした。
彼を気遣うツァイの手をゆっくりと外すと、そのままふらふらと壁に手をついて、
そのまま右腕で思いっきり殴った。
拳銃のグリップ部分で殴られた壁は穴がわずかに空き、ぱらぱらと粉が飛び散った。

「くそ、くそ・・・なんなんだよ。あいつ。
どれだけ、人をバカにしたいんだよ・・・あざけって、面白がって・・・
悔しい・・・あいつ、絶対に、許せない・・・」

今まで聞いたことのないルーマの絞り出すような声を、ツァイは黙って聞いていた。
暫く怒りで肩がふるえていたルーマだったが、少しずつ落ち着こうとしていたとき、ツァイがようやく声をかけた。

その声は、これまた彼女らしくない、低く、冷たい声だった。

「許せないなら、許さなければいい。
そして、期を待てばいい。報いを受けるに値する人間は、いずれ罰を受けるのさ」

ふ、とルーマは振り返った。
そこにいたのは、いつもの表情のツァイだった。なのに、なぜか安堵できない自分にも気づいていた。
「それは・・・ソーラテネルの教え?」
「・・・さぁ、どうかな」
「・・・」

どこかいつもと違う気がしたけれど、それがいったいどんな違和感であるかを、ルーマは理解できるほどの生き方をしていない。
遠くで何か音がしている。
なんだかここは違う次元のことみたいだな、とルーマはどこか虚ろな感情でそれを認識していた。
が、

「ねぇ、なんか音、近づいていない?」
「そうだな。何かが大きく崩れ落ちる音っていうか、今にもここが崩落しそうな気配だな」
「やめてよ縁起でもない」

しかし、ツァイの予感は数十分後に的中してしまう。

３４話　空っぽの思考に埋まるは偽り

監獄廊下。

かつんとセレンが床に杖をつくと、どこからともなく憲兵たちがずらっと現れた。
数はそう多くはないが、手負いを含めたショウタたちにとっては面倒な相手であるには変わりない。
おまけにここは屋内。そして廊下。
狭くて動きにくい。が、それは相手も同じ。

「おいおいおい、なんだよなんだよ。
銃刀法違反なんか作っておきながら、お前らは平気でそんな物騒なもん振り回すのかよっ！」

ざっと一歩、左足をひいて、ラルゴが右腕で剣を顔の前に構える。
それは怪我を負った左腕をかばうかのようにも見えたが、彼の顔色は結構よさそうだ。
いつものようにちょっと悪そうな笑顔をしたまま、右腕一本で剣を振り回す。
そして体勢を立て直すとそのまま憲兵たちに突っ込んでいった。
それをサポートするのはマリの役目だ。
彼女の手の動きに合わせて火が宙を走り、彼らを飲み込んでいった。

二人は圧倒的に強かったが、相手は決して弱くはない。
さすが一つの街の治安を守っているだけあって、彼らの身のこなしは軽い。
また、後ろに立っているセレンが厄介だった。
杖を使って何かを唱えると、小規模だが水蒸気爆発が起こる。

それを食らい続けていればどうなるかなんて、わかっているからショウタたちはそれを寸でのところで避ける。
テレジーから借りた剣を使って身を守りながら、やはりいくつものことを考えてしまうのがショウタのいいところであり悪いところだ。

二つのことをいっぺんにできるほど、ショウタは器用ではないからだ。
うっかり足を滑らせ、憲兵に刺されそうになってしまった。
だが、その剣をアスレイが止めた。
彼はレジスタンスが隠し持っていた武器の一つ、オーソドックスで少しだけ古臭い剣を持ってきていた。
ショウタをかばって、慣れないながらも剣を振るって、目指すは一人。
セレンだった。
気合い一発。大声で叫んで彼女に斬りかかった。
セレンがその剣を杖で受け止めると、後ろから憲兵がアスレイに攻撃を仕掛けた。

「ショウタ、あいつは強いのか？」
ショウタの横にきたラルゴが尋ねるが、ショウタは首をかしげただけだ。
そこまでアスレイに関して詳しくはない。
だが、アスレイの動きは滅茶苦茶で、気持ちが先走って冷静さを欠いているようにも見える。
マリの援護する魔術が時折彼の頭を焦がしているのに気づいているのだろうか。

「さて、数は多いが雑魚には手取らないだろうな。
お前は奥に行ってくれ。で、早くツァイとルーマを連れ戻してさっさとここから逃げようぜ」

「わかった」
そう言われて、ショウタは憲兵を張り倒して、セレンの隙をついて通路の奥に走った。
そしてラルゴは憲兵を蹴り倒していたテレジーに気づくと、彼の襟首をつかんで、
「お前も行くんだよ！」
といってショウタの後を追わせた。
だが、テレジーはあまり乗り気ではない。
「なんで俺が・・・」
「お前がここにいたら足手まといなんだよ。ほれ、マリも行け」
「えっ、いいの？」
「ツァイを助けたいんだろ？」
「うん！行こう、テレジー君」
そう言ってマリがテレジーの肘辺りをつかみ、ショウタが走った方向に向かおうとした。
だが、さすがに二人目以降は逃がすつもりはないらしい。

「逃がしませんよ」

ばっと、セレンが杖を向けると、より大きな爆発が起こった。
壁が崩れ、天井が落ちて、廊下がふさがった。
煙がおさまると、ラルゴは、はっと崩落した方を見た。
瓦礫の傍、小さな体が転がっていた。
体が動くのと同時に、ラルゴは叫んでいた。
「マリ！大丈夫か！？」
「ぅ・・・」
倒れていたマリを抱え起こす。
怪我をしている。だが、どれも大事には至らなさそうだ。
だが、体を強く打ちつけていてすぐに気を失ってしまった。
問題はそれだけではない。マリの傍にテレジーがいない。

「マリさん！大丈夫！？」
アスレイが声をかける。
彼は最後の憲兵を延し倒すと、セレンのほうをにらんだ。

「テレジー！おい！生きてっか！？」
ラルゴが大声で叫ぶと、崩落の向こう側から、くぐもった声が聞こえた。
どうやらテレジーはあちら側に行ってしまっているらしい。
万事休す。まさか怪我人があちら側に行くとは想定外だ。
「仕方ねぇな。おい、歩けんだったら進め。歩けなかったらここから離れて倒れておけよ。
こいつらを退けた後瓦礫をぶっこわすからよぉ！」

それだけ言い残し、ラルゴはマリを抱えあげ、背中におぶった。
憲兵はすべて倒してしまったので、残るはセレンだけだ。
彼女は険しい表情をしたままで、杖を構えた。
そして、ここまでしてもピクリとも感情を揺らしている様子がない。
静かに口を開き、ラルゴの背後にいるマリのほうをみた。

「つぶれていればよかったものの。
これからさらに苦痛を味わうなんて、さすがに小さい子供相手に心が痛みますね」
「あんたが心痛いなんて。
巷であんたがどういわれているか知っとるん？冷徹機械女ってね」
アスレイがそう言っても彼女は涼しい顔をしたまま、杖を持ち上げて振り回す。
そして床に突きつけた。

「なんと思われていようが構わない。

私はこの街の平和を守る。ただそれだけ。
平和を乱すことがどれほどの罪か、死をもって償ってもらいましょう。
脱獄犯、脱獄幇助犯、そして、レジスタンスども」

テレジーは体を起こそうと手をついたが、手首を痛めていたことに気付き、思わずうめき声をあげた。
その声がラルゴに拾われたのは幸いで、生存を伝える手間が省けた。
彼の耳のよさには感謝しなければならない。
肘を使って体を起こす。怪我はほとんどない。
壁が崩れる寸前、テレジーはマリを突き放した。
あのままではマリどころかテレジー自身も下敷きになっていた。
彼女を突き放し、テレジーは転がり込むようにしてどうにか大事には至らなかった。

ラルゴの声を聞いて、テレジーに残された道はただ一つ。
ショウタを追って奥に向かうしかない。
自身の意志とは間逆の方向に事態が進んでいるが、嘆くわけにはいかない。
道は分かっているから、後は進むだけ。

そして結構進んだとき、人の気配を感じた。
ショウタではない。だが、その気配をテレジーは知っている。
曲がり角を曲がったとき、それが姿を現した。

「ぶふぉぉお！て、テレジー君！？」

「・・・どうしてここにお前がいる？馬鹿女」

現れたのは、テレジーが以前助けた女性、ハイドラ。
吹っ飛ぶほど驚いて、とととと、と後ろによろめいた後、情けなく後ろに転んだ。
慌てて立ち上がるも、彼女にとって予想だにしていなかった事態に驚きを隠せていない。
そんなハイドラは、頬に大判のばんそうこうを貼って、右手に包帯を巻いている。

「んご、いや、その・・・いや、えっと、人を捜していて」

しどろもどろのハイドラはテレジーの目を見なかった。
テレジーはふぅとため息をついてその様を見た。
どうせ彼は知っているのだ。彼女がエルデナの人間であることを。
「上司にでも会いに来たか？あの髪の長い」
「ぅ・・・そ、う。でもどっか行っちゃったみたいで・・・」
「なるほど。ここにいることができない理由ができたみたいだな」
「やっぱり・・・あいつらなんだ」
「・・・？」
「・・・ぁ、テレジー君、怪我してるの？」

ふと、ハイドラがテレジーの様子の変化に気付いた。
わずかな違和感だったが、それは見事に的中していた。思ったより鋭いのか？とテレジーはハイドラをちらりと見た。
「・・・手袋外していい？治療してあげる」
「結構だ」
「不便でしょう？お金なんて取らないから。
リーダーがいない今しかこういうことできないの。
この前のお礼、させてよ」

そういうと、彼女はウエストポーチからいくつか瓶を取り出した。
それを一つにまとめて振って、ガーゼにしみこませた。
テレジーの手袋を外し、手首にガーゼを巻いて、その上から包帯をぐるぐると巻いた。
ガーゼが当たっているところがじんわりと暖かくなっていくのを感じると、痛みが少しずつ引いていくような気がした。

「すごいでしょ。エルデナの製品って。いいものはいいのよ。
あと少しすれば動かせるようになると思う」
「・・・俺を捕まえたい割には丁寧なことだ」

少し毒を含んだテレジーの発言は、ハイドラに致命傷を与えるには十分だった。
驚くほどその言葉にショックを受けていることに、彼女自身は二度ショックだった。
ハイドラはオーレンとは違って、直接テレジー達一行に会っているわけではない。
だからここでハイドラがオーレンとは仕事が違うと言えばそれでよかったのだが、それを否定できなかったのは彼女の人のよさゆえ。
黙ってするすると包帯を巻いていく。
不器用なりにも一生懸命で、歪んでいてもテレジーは文句は言わなかった。
ただ、彼女が何を考え、どういう意図を持って行動しているかなんて理解できなかったから、反応を知りたくてそんな物言いをしたのだ。
ハイドラは包帯を結び終わると、顔を伏せたまま、今にも泣き出しそうな声で呟いた。

「今は何も、聞かないで」

治療は終わっているのに、ハイドラはテレジーの手を握ったまま。
まるで、懺悔するように、彼女は言葉を紡ぐ。

「こんなこと言えないのはわかってる。
ごめんね。私たちがしていること、今は理解されないってわかってる。
本当、ごめんなさい」

これ以上何も言えず、ハイドラは黙りこみ、そしてテレジーから離れた。
懐からペンのようなものを取り出して、その場を去ろうとしたとき、テレジーが声をかけた。

「馬鹿女」
「え？」
「世話になったな。感謝する」
その言葉に、ハイドラは思わず振り返りたくなったがそうすることなく、背後のテレジーに声をかけた。
「・・・ここで私を殺しておけば、いいかもしれないよ？」
テレジーは暫く沈黙した後、
「そうだな。お前らが俺たちを殺そうとする意思があれば、そうするだろう」

かちかち、とペンの頭を数回鳴らすと、ハイドラの姿が消えた。
消える寸前、彼女は最後にテレジーのほうに振り返った。
切れ長の瞳から、涙がこぼれたのをテレジーは見逃さなかった。
先ほどよりも動くようになった両手を見て、テレジーは奥に向かっ

て歩き出した。

すると、大きな音が今来た道の方から聞こえた。瓦礫を壊しているのだろうか。

そうだとしたらラルゴたちの方も片付いたということか。

これであとは残りのメンバーと合流すればこの長くめんどくさい脱出劇が無事終了する。

はずだった。

35話　大義のない正義

口を一番最初に開いたのは、アスレイだった。
彼はラルゴとの面識がない。
ショウタたちの知り合いであることは理解していたが。

「えっと・・・貴方は」
「俺？俺はラルゴ・ダイアロット」
「・・・さっきのことなんですけど、ラルゴさんはこの規則の裏ってのをしっとるんですか？
というか、なんすか裏って」

アスレイの質問にラルゴが答える前に、セレンがそれを切り捨てた。

「裏などあるはずありません」

そのあまりにもずばっとした物言いに、ラルゴが食らいついた。
「どうしてそう言える？
お前さんもよく考えてみろって。
そもそも規則ってのはなんのためにある？」
「集団生活における個々の制限によって得られる多数の幸福と自由の保障、ではないでしょうか」
「そんな小難しいこと言われたってわかるかよ。
お前はこの規則が作られた理由や背景がわかんのかよ」
「さぁ。
でも魔術の保護は重要かと思われます。
昨今我が国では機械工業の多大なる発展により、魔学が衰退しています。

保護するために伴う痛みと考えれば」

セレンの発言に、黙っていたアスレイがとうとうしびれを切らした。

「にしたってどう考えたって極論やないか！
工学が発展する前は魔術が使える人も使えん人も、ええバランスで生きとった。
確かにこの国はダニアやコアッダ、シャリディンみたいに魔術大国やない。
でも、すべての世界が魔術至上主義なわけない！
確かにルイニは魔術を結構ないがしろにしていたところもたくさんあった。
けど、今は今で魔術至上主義になってしまっとる。
左振りの針が、真右にふっちまってんのや。
僕たちがすべきは、その針をまっすぐにすること。
そのためには今の状況を変えなあかん」

「それが貴方達の行動目的ですか。
目的のための行動が暴力とはとてつもなく感心できませんね」

「わぁっとる。だがお前たちだって彼らにしたことを暴力じゃないと言えるんか？」

「おーい、言いあいはともかく。
なるほど、表向きはそうなっていて、真面目そうな人間に大志を抱かせていたってわけか」

マリを抱えたまま、いつの間にか蚊帳の外に半分体を押しやられていたラルゴがようやく声をかけた。
少しだけうぅ、とうなったマリだが、まだ気を失ったままだ。
あまりここに長居するのはよくないので、ラルゴは話をすすめる。

「だがよ、俺らは知ってるんだ。この規則の裏ってのをよ。規則を作った奴はそういうルイニの事情なんて気にしてないんだよ」

先ほどまでなら聞く耳持たずに攻撃を始めてもおかしくなかったセレンだが、アスレイと話をして聞く気になったのだろうか。

杖を下ろしたまま、険しい表情のまま、彼女はラルゴのほうをにらんだ。

「そういえば先ほどもそんなことを言っていましたね。聞いてあげましょう。貴方が知ったことを」

ラルゴはエルデナの人間と話したことをすべてセレンとアスレイに話した。

その内容は先ほどセレンがアスレイに向けて語った信念をすべて打ち砕きかねないものだった。

彼女は黙って冷静さを装って聞いていた。

思ったより見識が広いのか、と思ったが、それは結果として間違いだった。

ラルゴの言葉を信じて納得したと思っていたが、そうではなかった。

セレンは冷静という仮面をかぶったまま、激昂しているのだ。

杖を振り上げ、魔力を高めた。

「そんな与太話をどう信じろというのです。

よそ者である貴方方の空想話で、この街の問題を揺さぶるなんて、断じて許されることではない。

もともと貴方方には処刑命令も出ていることですし、その背中の子供も含め、今ここで消し炭にします」

ラルゴは背負っていたマリを今度は腕の中に抱えなおした。
ばちばちと火花を散らす杖の先端がぱっとラルゴとアスレイに向けられた。
そして、杖の先端に瓦礫のかけらが集まり、火花とぶつかりあって、真っ赤に焼けた。
杖を彼女が降った瞬間、その焼けた飛礫がラルゴとアスレイに向かって飛んできた。
狭い廊下をうまいこと逃げようと体をひねる。
焼けた石が壁に当たって、じゅっと嫌な音を立てた。
あれに当たれば・・・

「死ぬだろ」
「おぉおっ！」
「当然。最初からそのつもりです」

冷静なそぶりを見せるセレンだが、どうやら見た目とは裏腹。
それは攻撃を見てもわかる。
アスレイは飛んでくる焼け石を剣で殴る。
それは弾きかえったり真っ二つに割れたりして、やや危険だが死ぬよりはましだ。
ラルゴもそれにならって片腕で剣を振るった。
ばきんという音がした。思ったよりも重くて片手では困難だった。
割れた破片がセレンの腕や足に当たっても、彼女はそこから逃げることなく杖を振った。

「この規則は、ルイニの人々を正すためのものです」
「間違いなんて誰が決めたんや！」
「ゆくゆくは人は律せられ、秩序正しく生きていけるものです」
「あんたの言う秩序ってのは魔術だけが優遇される世界か！？

さっきも言ったが、この世界は決して魔術だけで成り立ってるわけない！
あんたは規則という言葉を理想と置き換えているだけや！」
「私は、規則がなければ人は守られないことを知っている。
貴方方も知っているでしょう。
人は他人のことを常に考えてはいられない。普通に生きれば、人の行動は他者にとっての害になりうる。
それを縛るのが法であり秩序であり、道徳です。
あるべき姿へ、あるべき形へ導くためのもの。
私は導くのです。人を、正しい方向へ」
「さっきから僕の話ちぃっとも聞いとらんね！
何が正しいかもわかんねぇくせにごちゃごちゃうっさいんや！
お前のそれは独裁に他ならん！
あんたの頭の中の理想の世界と人を傷つける規則を一緒にされるなんてはなはだ不愉快だ！
こんな世界、僕は認めん！」
「結構！今ここで消え去るべきは貴方なのですから！
私の世界に貴方はいない！」

ラルゴは二人のいい合いを冷静に考えていくと、ふとしたことに気がついた。
少しずつ、セレンの言っている言葉に違和感を感じてきたのだ。
最初は街の過去を変えるために、だったはずだ。
今の発言はまるでこの街のことを言っているにしては少々規模が大きすぎる。
違和感に明確な理由はない。どちらかというとラルゴの野生の勘だったが。
アスレイはそれに気づいているのだろうか。いや、そもそもセレンが。

そのとき、
思いっきり勢いをつけて地面をけったアスレイがセレンの懐に入った。
そして、切れ味の悪い剣をそのままセレンの右肩に刺した。
彼女は杖を落とし、噴き出した鮮血を声も出せぬ状態で見つめるだけ。
勝負あった。
アスレイはそのまま走り、壁に剣を突き刺した。
壁に縫い付けられ、身動き一つ取れなくなったセレンは、痛みにうめくこともなかった。
まるで壊れてしまったロボットのように、一言もしゃべることなく、瞬き一つせず。

不気味な静寂が辺りを包んだ。
それは決して心地のいい空気ではなかった。

「・・・えっと、あんた・・・」
「なんや」
「いや、セレンって子。最後いきなり豹変したよな。いきなりあんなこと言い出すなんて思いもしなかった」
「その理由を知れば僕が彼女に同情すると？」
「いや、おかしいって言いたいだけだ。なんかひっかかるんだよ。それに・・・」
「それに？」
「昔な、とある国で似たようなことをのたまって民衆から反発食らって処刑された王がいたんだよ」
「・・・」
「気になってな」

アスレイが頭に疑問を浮かべたとき、遠くから数人の人の声がした。

レジスタンスのメンバーだ。

アスレイと同じぐらいの年齢の男女で、それぞれが武器を手にしていた。

「アスレイ！お前一体どこ行っていたんだよ！合流ポイントにも来ないで！」

「いや、すまん・・・」

「って、おい！セレン・ラッソじゃねぇか！お前、やっちまったのか・・・」

「死んではない。連れて帰ろう」

「投獄されていたやつらも全員無事だった。もうここには用はねぇ。さっさとルーンさんたちと合流しようぜ」

そのとき、耳をつんざくような爆発音が響いた。

次に地面が揺れ、最初はあまりの衝撃に目の前が飛びそうになった。

そして、爆発音の次に、何かが遠くから崩れてくるような音がする。

「何事だ？」

「え？時間が早すぎる・・・」

「おい」

「全員救出が完了し、僕たちがここを出たら監獄を爆破する計画やってん。

でも、早すぎる・・・」

「おいおいおいおい。このままじゃ俺たちぺしゃんこかよ」

がきん、とセレンを貫いていた剣を抜くと、アスレイは彼女を抱えあげた。

残りのメンバーも憲兵をどうにかして担ぐと、入口の方に向かって

行った。
「ラルゴさん！はよ逃げんとつぶされる！」
アスレイが声をかけるが、ラルゴは足を反対方向に向けた。
「いやな、奥に仲間がいるから逃げられん。
ま、生き残る策は全員揃った後に考えるとするか。
じゃあな。レジスタンスども」
「な、無茶や・・・」
「無茶は若い時にしかできんのだ」

ラルゴはマリを抱えたまま、先ほどの爆発と揺れでできた瓦礫の隙間を蹴った。
人ひとり分ちょっとが通れるだけの穴をあけると、ラルゴはそのまま奥に進んでいった。
アスレイの声がどんどんと遠ざかるのを感じながら。

「さて、啖呵をきったもののどうしたことか・・・」

爆発音と地震、そして落ちてきた瓦礫に躓いて、ショウタは派手に前のめりに転んだ。
「いってぇ・・・なんだよまったく」
ここに来る途中憲兵に出くわすものの、華麗にそれを交わしてようやく目の前が行き止まりになった。
両手開きの扉がそこにある。
それがやっと見えて、安心して油断したから転んだのだと自分で言い聞かせる。
「あそこか」
立ち上がり、前に進んだ。

そしてようやく扉に手をかけ開くと、部屋の中にツァイとルーマがいた。
「あ、ショウタ」
「遅かったな！」

そんな言葉に拍子抜けしてしまったのは言うまでもない。

「あれ・・・？俺の予想だとかなりピンチで俺が駆け付けてなおかつ壮絶なバトルとなる展開だったんじゃ・・・」
「敵は帰っちゃったよ！
もうちょっと早く来てくれれば本当にかなりカオスーなことになっていたのに」
「いや、なんでそう明るく言うのかな・・・」
「気にするな！ほかのみんなはどうした？」
「みんなこっちに向かっているはず。ちょっとこっちもいろいろあってね。
クインは外にいるから。早くここを出てしまおう」

なんだよ一体と言いたい気持ちを抑えながら、ショウタは剣を鞘に仕舞った。
そして、部屋を見渡した。
荒れ放題破壊され放題だったが、なんだか不思議な感じがする。
胃が中途半端に浮いたような、中をかきまぜられているような気分がする。

「なんだよここ・・・気持ち悪い」
「え？どうして？」
ショウタが吐き捨てた言葉をルーマが拾う。
「好きじゃないんだ。すごく嫌なかんじ。
それに怒りとか、恐怖とか、そんなのも感じる」

「の割には冷静だな」
「いいや。さっさと出ちゃおう」
そう言って部屋を出ようとしたとき、扉が蹴り開けられた。

「テレジー？」
蹴り開けられた扉は蝶番ごと外れ、ばたーんという音を立てて倒れた。
蹴った張本人は一応いるべき人間を確認すると、相変わらずの不機嫌そうで不愉快極まりないと言いたげな顔で言った。

「出口はもうないかもな」
「っかぁー。相変わらずだな歩く暴力」
「ラルゴ！マリ！」

さらに、テレジーの後ろから現れたのはラルゴと、彼に抱えられて気を失っているマリだった。
ツァイはマリの様子にいち早く気付くと、彼女にしては珍しくうろたえたような表情でラルゴに駆け寄った。
「マリ！マリ！大丈夫なのか！？」
「んあぁ、気を失ってるだけだ」
ラルゴからマリを預かると、ツァイはマリの小さな体を背負った。
彼女は心配そうに眉を寄せると、マリに声をかけた。
「マリ、すぐにクインに診せてやるからな」
マリは気付かず、そのまま眠っていた。
「ちょっと待って。出口がないってどういうこと」
ショウタが尋ねると、ラルゴが説明をした。

「ここ、あと数分でこなごなのぺしゃんこになっちまうんだよ」
「・・・」
「・・・」

「・・・まじで」

だんだんと揺れも強くなってきた。遠くから物が崩れ落ちる音もする。

「さて、残された時間でやることは二つ。

一つは出る方法を考える。で、もう一つは実際に出る」

「ラルゴ、どうしてそう冷静なの」

「こういう時こそ冷静じゃなくてどうするよ」

「いや、結構絶望的じゃない？

ここはあいつらにとってもとっておきの場所みたいだったから、きっと入口とかからはすっごく遠いいんだよ」

「私も同感だな。ここは壁を破壊しながら突き進んでいくしかあるまい」

「この中で壁をぶち壊せられるのは三人だけだよ。時間内に脱出は不可能だ」

「あぁそうか。僕たちここで死ぬのか・・・」

「縁起でもないこと言わないでよ」

冷静に会話をしている割に、ショウタは焦っていた。

本当につぶされたらと考える前に、死ぬだろう。

それは困るし何より嫌だ。

そんな恐ろしいことを考える前に脱出する方法や、崩落しても無事でいられるような策を練ろうとするが、頭が動いてくれない。

他のメンバーはどうだろうか。

ルーマは若いくせに完全あきらめモードだ。マリが気を失っていたのが幸いだ。起きていたらパニックで叫びまくるだろうから。

ラルゴとツァイは壁を破壊する気満々だが、そんなのもちろん非現実的だ。

ふい、とテレジーに目をやると、彼は少しだけ目を伏せて、ぼんや

りと立っていた。

ただ立っているだけではないことに気づいたのは、それを知っているから。

「テレジー？」

「考古学者。ここから出たら、俺をあの医者にすぐに診せるんだな」

彼はそういうと、天を仰いだ。

風もないのにテレジーの髪が、長いマフラーが、コートの裾がはためいた。

そして、きらりとホワイトオーカンスのピアスが光ったかと思ったら、

黒い影がテレジーの体から噴き出した。

蛇のように長く、あっという間に体を取り巻き、すべてが真っ黒になったときに気付いた。

ディタクミナ国フォルで、テレジーがシュヴァイリン一味を追っ払った時の魔術だ。

ショウタは思わず叫びそうになったが、無音の闇に声は響かない。

そしてそのまま上下も分からないまま、ただただ無音の闇の中、

ショウタは一人で落ちていった。

36話　灰となる街

ゆっくりと目を開けたら、辺りの明るさに少しだけ眩しさを感じた。
ひんやりとした空気と臭いで、明け方だというのは理解できた。
一体ここはどこだろうと体を起こせば、節々が悲鳴を上げた。
そういえば、昨日の昼過ぎからあわただしく緊張状態が続いていた。
怪我もしているし、体が不自由な動かし心地だ。
辺りを見渡せば、小高い丘の上だった。
どこの丘だよ、と思いながら立ちあがったとき、ショウタは言葉を失った。

眼下に火に包まれた街が見えた。

古い、歴史のありそうな屋根の形から、そこがルイニであることは容易に理解できたし、
街の奥の方に崩落した大きな建物があって、おそらくあれが先ほどまで自分たちがいた場所。
監獄であることもわかった。

自分たちはあそこから脱出できたのだ。

ショウタは全員いることを確認した。
ラルゴ、ルーマは自分の近くで倒れていて、その奥の木の近くでツァイがマリをしっかりと抱えて倒れていた。
そして、木に寄りかかっているテレジーがいた。

あの魔術を食らったのは2度目だ。乗り物酔いをしたような気持ち悪さがまだ胃のあたりをめぐっている。

ショウタはテレジーに近寄って、声をかけた。

「大丈夫？」

「・・・」

真っ青な顔をして、こちらの声に反応するも声は出せない。

コアッダに降り立ったとき以上に調子が悪そうだ。

指一本動かすのも億劫そうだ。

マリやラルゴも大怪我を負っているから早くクインを見つけたいが、

ここはルイニから離れている。

むしろ、彼女が未だにあそこにいるとすれば、危険すぎるだろう。

捜しに行こう、とショウタが丘を降りようとしたとき、遠くからエンジン音を聞いた。

なんだろうと思っていると、遠くからぼろ車が近づいてくる。

それは紛れもなく自分たちが乗ってきた車だ。

妙に揺れながら、妙にバウンドしながら近づいてくる。

「な・・・？」

突然の事態にショウタは頭の回路が止まった。

そして車はショウタの目の前で急ブレーキをかけて止まった。

ばんっと一瞬後ろタイヤが持ち上がった気もする。なんて荒々しい。

恐る恐る車に近づくと、勢いよく扉を開けて出てきた人物に驚く。

クインだった。

「く、クイン？」

「ショウタさん、どうしてここに？」

「いや、俺が聞きたい。っていうか車運転できるの？」

「いえ。見よう見まねです。うまくいってよかったです」
「・・・」
「実は、あの後ルーンさんに会ったんですよ。
そしたら、アスレイさんたちも中に入ったから大丈夫、貴方は来た車で街の外に出なさいと言われたんです。
そして街から出たら大きな爆発音があって・・・驚きました」
「そうだったんだ。いや、俺たちはテレジーが・・・
そうだ。テレジーとマリとラルゴが怪我してるんだ。
いや、ルーマとツァイも怪我してるかも知んないし、っていうか全員か。
きて早々ごめん。診てもらえないかな」

ショウタの申し出に、クインは顔を引き締めてうなづいた。
「もちろんです。ショウタさん、手伝ってもらえませんか？」
「わかった」

全員分を診終わるまではそれなりに時間がやはり掛かった。
マリは脳震盪で、擦り傷や打撲が目立ったが、骨や内臓に異常はなかった。
ただこのごたごたで安静にすることができなかったことがクインの気がかりだった。
ニッチの中に入っている、ショウタには理解できない機械でクインはマリを何度も検査した。
その甲斐あってか、マリは今普通に眠っていた。
ラルゴたちも怪我を治療されればあとはぴんぴんしていた。
木の下でリラックスモードだ。
思えばこれだけの大惨事に巻き込まれておきながら大怪我を免れた

のは奇跡に近い。

マリとテレジーを車のシートに寝かせた後、クインは最後にショウタに言った。

「ショウタさんも怪我されてますよね。一番最後になってしまってごめんなさい」

「え？あぁそういえば。

でもあんまり大きい怪我じゃないし。大丈夫だよ」

「だめです。小さな怪我でもちゃんと消毒しないと化膿します」

そう言って彼女はさまざまな治療道具を取り出す。

仕事人に逆らうのは無理だ。ショウタは怪我をしている腕を差し出した。

黙って治療を見ている最中、ショウタはクインに尋ねた。

「クインの怪我は大丈夫なの？」

彼女の手が一瞬止まったような気がした。

クインは何事もなかったかのように、治療する手を止めずに答えた。

「えぇ。すぐに治療を施しましたから、もう痛みも引きかけていますし。

ありがとうございます」

そんな簡単な怪我には見えなかったけれどな、と思うが、素人目には何もわからんのだから、医者である彼女に納得をする。

「街は、どうなってしまったんだろう・・・」

ぼそ、と呟くと、クインは気まずそうに眉を寄せた後、静かな声で言った。
「あの後、状況を聞いたのですが、よくはありません。街のあちらこちらで暴動が起きて、それは住民を巻き込んで大きくなっていきました。規則がどれほど人々から反感を抱かせていたかがよくわかりますね」
「規則・・・か。俺はあんまり考えていなかったな。そういえばそういう話だったっけ」
「ショウタさんは皆さんを助け出すことを一番に考えていましたからね」
傷口にガーゼを当てて、テープでとめる。
クインの手つきは少々、いやかなり荒々しいが、最後はちゃんと丁寧にしてくれる。
「にしたって、やっぱり人が争うさまは見ていて気分のいいものじゃないよね。いや、街の人たちの気持ちってのがそれほどまで煮詰まっていたってことかな・・・」
「そうですね・・・しいたげられ、自由を奪われることは苦痛ですからね。抗うための力があるなら、表現としていいじゃないんですか？」
「？」
「そのための報いだと思います。相応の」
「・・・」
「すみません、いきなり」
何を思ってクインがそんなことを言ったのだろうか。
治療を完了させ、ショウタがクインに声をかけようとしたとき、車

内で影が身じろいだ。
テレジーが目を覚ましたのだ。
彼の腕には2本も点滴の針が刺さっていた。
車内に点滴台は置けないので、天井につりさげていた。
「テレジーさん、大丈夫ですか」
クインは立ち上がってテレジーに近づく。
「ショウタさんに聞きました。なんて無茶をしたんですか。
魔術に疎い私ですが、あれが危険であることは理解できます」
「テレジー、あれってどういう魔術なの？」

ショウタが尋ねると、テレジーは体を起した。
少しだけ角の取れた表情で、目の下に隈を作っている。
かさかさの唇が、痩せた声を紡いだ。
「・・・あれは、置換魔術。
物がそこに存在する事象を否定して別の場所の存在と置き換える。
ものだろうが人だろうが、な」
「へ、へぇ・・・すごいね。
そんなすごい魔術あるんだ・・・」
「古い知人に教えられた、古の魔術だ。もうほとんど残っていない」

「それにしても、貴方はあと少しで危なかったんですよ。わかっています？」

いつも穏やかなクインが、怖い。
テレジーはクインの言うことも素直に聞くので、刃向かうことなく黙って横になった。
くるり、と踵を返してクインはショウタのほうに向きなおった。
先ほどまでの険しい顔は、いつものようなやさしい表情に戻っていた。

「でも、テレジーさんのおかげでみなさん助かったんですから。本当に、よかった」
その表情は慈愛に満ちていて、でもどこか悲しみを帯びていた。
まるでそれは孤独を感じているかのような。

「俺たちのことを危険を冒してまで助けた、ってこと？」
ショウタが尋ねると、テレジーは暫く沈黙したのち、
「・・・別に。俺が死にたくなかったからだ」
「だったら見捨てればよかったじゃないか」
「・・・願いを叶えるために必要だろう」
と、相変わらずの口調でつぶやいた。
「ふふ、そうですね」
ふてくされたのだろうか、テレジーはまたふてくされた顔をした。
クインはショウタの手を取って、満面の笑みを浮かべた。
「さぁ、ショウタさんも皆さんと一緒に休んでいてください。
私はマリさんをもう一度診てきます」
「あ、あぁ」
ぽんと背中を押され、丘の上に足を向ける。
そしてもう一度、ちらりとルイニのほうを見た。
もう火は消し止められている。ここからは人を確認することはできない。

アスレイは無事だろうか。ルーンは無事だろうか。
それより、ショウタが別れた後、セレンはどうなったのだろうか。
懸念してもそれを確認する術はなく、ただこうして眼下に見るだけ。

「キュウ・・・」
ふと、ショウタの足元。ウルルがすり寄ってきた。
「ウルル。クインの傍にずっといてくれたんだよね。どうしてそん

なに悲しそうな声を出すんだ？」
「キュウ」
ウルルにショウタの言葉はわからないだろう。
だがショウタにはなんとなくウルルが自分に甘えたいのだということは感じた。
ウルルを抱えあげたショウタは、ウルルを抱き締めた。
「人は願いを行動に起こせばそれに見合う何かが必ず返ってくるんだな。
いいことも、わるいことも。
俺たちにも、いいことと悪いことが来るのかな。よくわかんないや」
ショウタのつぶやきに、ウルルはやはりさみしそうな声を上げるだけだった。

廃墟の街、ルイニ。
崩れ去った監獄の上から、街を見おろすのは、フィオだった。
日傘をさして、瓦礫の上にバランスよく立っている。
「派手にやっちゃったわねーん。まさかこんなにめちゃくちゃになっちゃっていたなんて」
彼女の顔に笑みはなく、冷めた目線が冷静に街の惨劇を記憶していく。
「貴方はずっとここの中にいたから気づかなかったでしょうね」

「当然だわん」
彼女のつぶやきに返す声あり。
アスレイ達を導き、ショウタたちに協力をした男、ルーンだ。
白い服は埃と血がついて汚れていた。
だが本人は穏やかに笑みを浮かべている。いつもどおりに。
それはフィオにとっても見慣れたものだった。

「そういえば、貴方が目にかけていた男の子と女の子、どうしたのん？」
「アスレイとセレンだね。
アスレイ達は僕が手を出すほどのこともなく勝手に暴走してくれたから助かったものだ。
セレンは少々時間がかかった。
だが、ここ数日は本当にうまく働いてくれたものだ。感謝せねば」

ぱちん、と、ルーンが指をならせば、汚れていた服がすべて綺麗に戻った。
白を基調としたそれは、荒廃した街になじまず、ただ光を反射して目を覆う。

「ほんと、貴方の魔術にはただただ圧倒されるだけだわん。
何て言ったって、この街の半分以上の人間に術をかけちゃうんだものん。
しかも街一つ破壊しちゃって」
「この街はエルデナの人間がもともと研究施設を持っていた場所。
あれがこのまま存在し続けるのは我々にとっては邪魔以外に他ならない。
彼らが僕の干渉に全く気付いていなかったのが幸いだ」
「つまり、
貴方の術にかかった人間たちが貴方の思惑で作った規則に、エルデ

ナの人間が利用されちゃったってことねん。
なーんて酷い人」
「貴方には言われたくないな」

くすりと笑って、ルーンは遠くに目をやる。
混乱の中、アスレイがセレンの応急処置をしている。
怪我はほとんど手当てされているが、セレンは目をあける様子がない。
他にも警官隊が倒れていて、そのどれもが気を失っている。
レジスタンスが刑務所から連れ出した人間の中にこの規則を作った長もいたが、同様だった。

「エルデナを追いだすために街一つ破壊しちゃうなんて、私でもしないわーん」
満面の笑みで笑うフィオは、ぱたんと傘を仕舞うと、とんとんと瓦礫を下りる。
「どこへ行くのかい？フィオ」
「もう用はないもの。私はクリーマと合流するわん。
この次は確かシャリディンに行けばいいのよねん？」
「そうだ。
その視えた先がいつのものかはわからないけれど」

最後に。
くるりと振りかえったフィオがルーンに声をかけた。

「そういえば、ユピが貴方を追ってファドキアまで行ったみたいだけれど」
「あぁ。彼もしつこいものだ。だから今回ばかりはちょっと怪我をしてもらいました。
さすがに仲間を痛めつけるのは気乗りしなかった」

「ほんとーに？」
「建前は重要です」

フィオは傘を斜めに降ろし、くるりと地面に円を描いた。
その円が光ると、彼女の体は地面に吸い込まれていった。

「それじゃ、ソンダク。またあとで」

ひらひらと手を振って、フィオが姿を消した後、ルーン、ではなく、ソンダクは街をもう一度一瞥した。
アスレイはじめ、レジスタンスたちが街中をあわただしく動き回る中、ソンダクは彼らに背を向けた。
二、三歩歩けば、そこにソンダクの姿はない。
残ったのは瓦礫と埃のにおい、そして血と物が燃えたにおい。

そして、混乱だけだった。

37話　深淵

日はどっぷりと落ち、真夜中。

「信じらんない。私が眠っている間に何もかも終わっちゃっているなんて・・・」

「そんなにショックを受けることかね」

「だって肝心なところから先が分かんないなんて。物語のクライマックスを知らないなんて残念すぎるよぉ」

「なんて軽い奴・・・」

マリの不満を半分聞き流しつつ、車を動かしているのはラルゴだ。残りのメンバーは全員車の中で眠っている。起きているのはラルゴとマリだけだ。

ルイニをお昼前に出発し、途中休憩をはさみつつ、ずっと車を西に走らせている。

現在夜。昼間ずっと眠っていたマリが目を覚ました時には他の面々は夢の中だった。

ラルゴにとっては話し相手がいるということは眠気覚ましにもなるからこれ幸いだ。

マリに今までのいきさつを話していたら、マリの感想はこれだ。

相変わらずだと思いながらも、これでようやく全員が揃った気分になれた。

山越え川越え谷越えて。

車は人通りのない田舎道からけもの道、山道をぐんぐん進んでいく。

「ラルゴ君、すごいところ通ってるけれど大丈夫なの？」

「あぁ。ドドニア大陸最西部のアイマナ国は国境が山脈なんだよ。周りは海で隣国のグライナーとウェイは山脈に阻まれている。隔離された土地なんだよ。
昔はもっと道はあったんだがな。この時間は通れない」
「どういうこと？」
「国の管理官が国道で検問してるんだよ。
時間外は国道が閉まっちまう。
まぁこういう田舎道は封鎖しようがないから通るのは自由なんだが、安全の保障はされていない。
土地勘があって危険を自分の責任にできる奴だけが行き来すりゃいいんだよ」

がたがたと、激しくはない揺れは眠っている人たちを起こすことはない。
むしろ心地よい揺れとなっている。
ヘッドライトは真っ暗な闇の中に吸い込まれて行って、マリには先が不明瞭だ。
ラルゴは魔力をほとんど持たない代わりに身体能力が卓越している。

彼にはマリの見えない先まで見えているのだろう。
いや、それよりも先ほどの言葉を思い返すと、
「ラルゴ君って、ここら辺詳しいの？」
マリが尋ねると、ラルゴは片手でハンドルを器用に動かしながら、くっくと笑った。
「そうだな。
一応俺の肩書は国際情報統制所アイマナ支部局長だからな」
「そうだったっけ？」
「詳しくは言ってなかったな。
あぁ、後ついでにな。俺アイマナ出身なんだわ」
「へぇー。それも初耳」

「だろうな。
どうせ国に入りゃわかることだしな。隠す必要もないことだ」

車はぐんぐん山道を進んでいく。
次第に木々が少なくなり、なだらかな下りを経て、ようやく普通の田舎道に出た。
それにしても、暗いのは相変わらずだ。
民家もこのあたりには見えなかった。

暫く走っていくと、ちいさな小屋が見えてきた。
ラルゴはそこで車を止めると、窓を開けて換気をする。

静かな夜だった。星さえ見えない。

助手席に座っていたマリは後ろを振り返る。
すぐ後ろの席にはクイン、ツァイ、ショウタがいて、さらにその後ろはテレジーとルーマがいる。
座りながらの睡眠は首や肩、腰に負担をかける。
安眠という感じはあまりしないだろう。少しだけ顔がこわばっていながら眠っている。

「今日はここに泊まるの？」
マリが尋ねると、ラルゴは窓を閉めた。
「んー・・・あんまり気のりがしねぇ。
マリ、結界張れるか？」
突然の質問に、マリは首をかしげつつも答える。
「もちろんできるにきまってるよぉ。
でもどうして？」
「ん、お前が結界をこの小屋と車に張れるんだったら今日の宿はこのぼろ小屋だってことだ」

「そんなに警戒することなの？」

マリが尋ねると、ラルゴはぺしりとマリの小さな頭を小突いた。
彼女が怒るよりも早く、ラルゴは言った。
「もう一度よーく考えてみろって。
一度は飲み込んで考えてみて、それで俺に質問してみろ。それも勉強さ」

腹が立ったが、マリは思い起こしてみる。
今までの会話で関係がありそうなことと言えば・・・

「そういえば、国道が封鎖されているって言ったよね。
アイマナって何かよくないことがあるってこと？」
その質問には満足したらしい。
ラルゴは彼女に答えを与えた。
「あぁ。まだ若いお前さんにはわからんだろうね。
アイマナはな、ルイニみたいに内部暴動が起こったのさ。
ただ、ルイニとは違ってアイマナは国全部を巻き込んだ。
今から２０年ぐらい前だな。国王は住民によって処刑されて、今は国際司法取引所の管轄下にある。
長い時間を経ても、国としての機能はほとんどなっちゃいない。
それが俺が警戒する理由だ。わかったか？」

マリは何も言えず、そうなんだ、とぽつりとつぶやいた。

ラルゴはシートベルトをはずすと、一人ひとり肩を叩いて起こした。

ツァイとテレジーは肩をたたかれる前に目を覚ました。さすが神経の鋭い二人だ。
マリは助手席から降りて、車の周りを一周、そして小屋の周りを一

周した。
そして目を閉じて、神経を集中させた。
見た目にはなんの変化もないが、目を開けたマリはこくんとうなづいてラルゴに言った。
「大丈夫。結界張れたよ。
後は私が小屋に入れば大丈夫。車も多分、少しは大丈夫。
ていうか、私が張ったから全然心配無用だよ」
「おうおう。心強いな」

まだ寝ぼけ半分のメンバーを小屋に押しやって、最後にラルゴが車のカギをかけて、
全員が小屋に入った。
少しだけカビ臭くて狭い。部屋という部屋はなく、暖炉と小さな水道が一つ。
トイレは外にあるらしい。
マリがぱちんと指をならせば暖炉の中に赤々と炎がともった。
寝ぼけ半分の彼らは動くことなくぼんやりと立ったままで、ラルゴがちゃっちゃと布団を床に敷き詰めれば、黙ったまま全員布団に入りこんだ。
相当疲れがたまっていたのだろう。
一言も誰も声を出さず、さっさと眠ってしまったから、マリは唖然とした。

「わ、私が起きたのに・・・誰も何も言ってくれない・・・」
「朝になりゃ全員がちやほやしてくれるから大丈夫だって。
ほれ、マリも寝ておけ。寝てても結界は大丈夫なんだろう?」
「うん」
「じゃあ明日は忙しいからな。寝れるときに寝ておけ」

そう言われて、マリはしぶしぶツァイの横の布団に入った。

ラルゴが一番入口近くの壁に背中を預け、布団をかぶった。横にはならないつもりだ。

静かに目を閉じるが、ラルゴの言葉がぐるぐる回る。

そんなにこの国は怖いのだろうか。

生まれ育ったシャリディン以外の外の世界を知らないマリは、この旅で十分色々なものを見てきた。

それでも持ち前の魔術に自信があったし、何より彼女が信頼を寄せるツァイが傍にいたのだから、怖くはなかった。

だが、なんとなく心臓の奥が震えた。

彼女はルイニの惨劇を目の当たりにしていない。

ただ、聞く話によればたった一晩で街が壊滅し、多くの人々が被害を受けたということ、これはマリの想像を超えている。

見ていないから、そして信じられないことだから、幼い彼女にはそれが未知の恐怖として残ってしまっている。

日が昇れば、アイマナがどういう国かわかる。

徐々に速さを上げていく心臓の音がラルゴに聞かれそうで、マリは深々と頭から布団をかぶった。

ぱちぱちと薪の燃える音がする。

この音に心臓の音がかき消されてしまえばいいのに、とおもいながら。

一方。ダニア国。

元々敬虔なソーラテネル教の国であるここには、城内に大きな教会が存在する。
天井が高く、ステンドグラスが月明かりを受けて地に鮮やかな模様を映し出す。
その下に、セラーはいた。

静かに目を閉じ、微動だにせず。

沈黙の音さえ聞こえそうなその空間を震わせたのは、荒々しい来客者。
ぼろぼろの服をより一層ぼろぼろにしたユピだった。

ずんずんと前へ前へと足早にセラーに近づき、そして彼女の数歩前でぴたっと止まって。
「やぁ、セラー」
普通にあいさつをした。
す、と右手を挙げて、細いたれ目が彼女を見おろす。
ただいつもと違うことがあるといえば、ユピがちっとも笑っていないところか。
彼は無責任にへらへら笑うことが多く、楽楽楽という感情を全面に出してくることが多い。
そんなユピが今はセラーに近い無表情でその場にいる。
珍しいことだが、もっともか、とセラーは思った。

ユピは一度だけ呼吸を整えた後、ぶっきらぼうに言った。

「あいつは本当に遠慮なしなやつだな。あと少しで俺は頭と体がグッバイするところだった」
「相変わらず治癒能力の高い方ですね。貴方は心臓を砕かなければ

死ぬことはないでしょうね」
「死ぬ？冗談はよしてくれよ。
話を本題に戻そう。あいつらの干渉についてだ」

苛立たしげに胸ポケットから煙草を取り出すと、数回吸いこむ。
黙って煙を上げるそれを盛大に肺に取りこんだ後、ユピは少しだけ
落ち着いたのか、先ほどよりも角の取れた表情で会話を始めた。

「ソンダク、フィオ、クリーマの三人がやっていることは干渉できる値を大幅に超えてしまっている。
あいつら、契約をした7人の周りをめちゃくちゃに淘汰して回ってるんだ。
セラー、ルイニの件、聞いたか？」
「えぇ。シュヴァイリンが知らせてくれましたわ」
「あれだってずいぶん前から手の込んだことをして、いくつも手まわしをして、
挙句の果てに幾人もの人間を利用している。
変だと思わないか」

セラーは静かに瞼を閉じた。
深海の色がその奥に隠れてしまって、彼女は今なにをみているのだろう。

「彼が生きていることが、本来あるべきことに影響を与えているのだとしたら」
「・・・」
「別の方法でその逸れてしまった道を元に戻さなければなりません。
絶対に、別の方法でなければならないのです。
でなければ、わたくしがシュヴァイリンを放置し、彼を逃がしたこ

とが無になる」
「そうだな」

二本目の煙草をふかした後、ユピは首をこきこきと鳴らした。
「早く答えを見つけないと、ソンダクどもの願った方向にしかことが進んでいかない。
現に今その一歩手前まで来ている。
このままじゃ本当にシュヴァイリンはテレジーを殺すだろう」
「えぇ。
その未来だけは、わたくしは絶対に視たくありませんわ」

くるりと、ユピに背を向けたセラーはステンドグラスを仰いだ。
「ユピ、貴方には苦労をかけますわね。
隠居生活をしていた貴方をこんな混乱に満ちた惨劇に引きずり出すなんて」
落ち着いた声のトーン。
何一つ表情を変えられない彼女だが、声には感情がこもる。
そのわずかな変化だが、ユピは彼女の心情をつかむことができた。
「気にすることはないよ。
どうせ遅かれ早かれ巻き込まれていたんだ。これは俺らの問題だからな」

煙草を携帯灰皿に捨てると、ユピは入口まで足を進めた。
そして去り際に一言。

「あの子たちはアイマナ国に到着したらしい。
ジャスリーンから大陸を横断して、このまま時間を開けずにファドキア国、シャリディン国に着くだろう。
アイリーンは今ファドキアにいるから、何かあったら次はアイリーンが報告に来るから。

俺は一旦スーロン大陸に渡ってみる。あそこは昔っから不思議文化のオンパレードだからね。
何かあったらまたすぐに連絡くれればかっとんでいくから」

そう言って、ユピは教会を後にした。
セラーはユピが出ていった後、入口の方を見て、小さく小さく、
「ありがとうございます」
と呟いた。

38話　デッドエンド

小屋の隙間から入ってくるわずかな光がたまたまショウタの目に入ったので、彼はそのままゆっくりと目を開けた。
布団にいつの間に入っていたのか、あまり記憶にはない。
真夜中、この小屋に着いたぐらいのことはぼんやりと覚えているが、相当眠かったのか。
布団にくるまったまま、ポケットの中から時計を取り出す。
朝の6時前だった。
自分の横にはうつぶせに眠っているテレジー、反対側には小さくうずくまるようにして寝ているクインがいた。
普段女性とは別の部屋で寝ているので、ショウタはクインを確認するとすぐにぐるんと体を反転させた。
条件反射だ。思わず見てはいけないような気がした。
だが、もう一度ちらりと後ろを振り返る。
穏やかに眠っているクインが、昼間以上に幼い表情を見せていた。
昨日は一日中働きっぱなしだったから疲れていたのだろう。眠りは深そうだ。
反対に、隣のテレジーは寝息が全く聞こえない。
姿勢もそうだが、実に眠りが浅そうだ。

首だけを持ち上げると、扉付近に座ったまま器用に眠るラルゴをみつけた。
あとはルーマと、マリの姿も確認できた。

そういえば、ツァイがいない。

起き上がって、再度辺りを見渡すが、やはり小屋の中にはいなかった。

外に出て（その際ラルゴは身じろぎ一つしなかった。見張り番としてはどうだろうか）、辺りを見渡した。

何もない田舎道。そこにポツンと存在する小屋とぼろ車はお似合いの風景だ。

外はまだうっすらと明るい程度で、朝の空気が気持ちいい。

大きく伸びをして、ツァイはどこへ行ったのかと足を一歩進めると、

「ショウタ、おはよう」

後ろから声をかけられた。

そこには捜していた人物が。

「ツァイ。早いんだね」

「あぁ。元々日ごろの鍛錬は欠かさないんだ。

ここ最近は色々あってどたばたしていたせいであまりできなかったから、今日から再開しようと思って。

それにしても、今日はちょっと収穫があってな」

そういうツァイに首をかしげると、ショウタは彼女に促されて小屋の後ろへ歩みを進めた。

そして、その光景を見たとき唖然とした。

鼠色の軍服を身にまとった人間が5人、伸されていたのだ。

彼らに近寄ろうとしたとき、ショウタは体にふわんと何かを感じた。

「？」

「結界だ。マリが張ったんだろう」

ショウタの疑問にツァイが答える。

「彼らは結界に阻まれてここから先に入ることはできなかったんだ

ろう」
「そうか。それはよかった。
でも・・・この軍服・・・」
「ダニアだな」
「知っているの？」
「あぁ」
「ツァイがやったの？」
「いや、私が起きたときにはすでに倒れていた」

ダニアの軍だったら、もしかしたらシュヴァイリンが近くにいるかもしれない。
ショウタは辺りをもう一度見渡した。
相変わらず何もないので見通しがよすぎる。ここからは不審なものは見当たらない。
しかしすでに自分たちの行動を把握されていることは理解した。

だが、ツァイはそれをわかっているのか、にかっと笑って言った。
「さて、いろんなものに追われているのは今更だ。
ショウタ、気にすることはない。不安に思うこともない」
そして、ばんばんとショウタの背中を叩いて笑った。
痛いと思いつつ、ショウタもつい笑って言った。
「ま、そうだよね。
ありがとう、ツァイ。できればそれ、テレジーに言ってあげて」
「おう？」
「たぶん、すっごく考えちゃうんだと思うんだ。
テレジーって俺よりも頭がいいから、一人でどんどん考えこんじゃうんだ」
そういうと、ツァイは少しだけきょとんとしたのち、太陽のような満面の笑みで答えた。
「もちろんだ！」

全員が起きて、軽い食事を済ませた後、再び車を走らせた。
次の運転手はツァイで、最初ははらはらしたものの、だんだんと慣れてくるものだから感覚は恐ろしい。
運転から解放されたラルゴは後ろの席で眠ってしまった。
負担はなるべく今後も分けた方がいいとは思う。

「マリさん、気分はもう大丈夫ですか？」
「大丈夫大丈夫！」
クインに心配されて、マリは元気に答えた。
「あーあ、せっかくの静かな旅が終わっちゃったなぁ」
「なによぉ、ルーマ君だってうるさいじゃない」
「僕はぴぃぴぃきゃあきゃあ言わないよ」
「私だって言わないもん！」
「そういうのがきゃあきゃあって言うんだよー」
「はいはい、喧嘩はその辺にしておけ」
なだめ役のツァイに言われたらマリは大人しく引き下がる、が、大人ではないので頬を膨らませたままだ。

朝の出来事を全員に伝えたら、確かに全員表情は引きつったが、しばらくすれば元の雰囲気に戻っていた。
ショウタはちらりとテレジーのほうを見た。
彼は彼で窓の外をずっと見ている。
何を考えているかなんて、人の思考は読めないから、推し量ることしかできない。
それでも今までよりは何かが違う気がする。

「俺も勘が鈍ったのかなぁ・・・」
「そうか？」
「ラルゴ、起きてたの？」
「今起きた」

ショウタのつぶやきに、隣の席に座っていたラルゴが答えた。
彼は数回首をこきこき鳴らして、狭い中少しだけ伸びをすると、グレーの目を細めて言った。
「確かに。お前と会った時は知らないはずのことを知っていて驚いたりはしたな。
お前も魔術師か先視の何かかと思ったが、そういうの、日を追うごとになくなっていったな」
「ほんと、なんでだろう。
いや、今思ってもどうしてそういうことができたのかもわかんない」

「まるで痴呆だな」
「すごく失礼だね」

舗装されていない道を進みながら、ショウタは窓の外を眺めた。
そして、徐々に近づいてくる石の塀に気付いた。

「懐かしいな。王都テセガニア。1年ぶり、くらいかな・・・」
「お前にとっちゃな」
「当然だよ」
「あれが王都ですか？」

前の座席にいたクインが体を反転させてショウタたちの会話に入ってきた。

「そうだ。あの中が王都。

今はちっちぇえが近づけばでかいぜ。一応」
「アイマナには碑文があるんだったな！ようやく2個目か」
「まだまだ2個目だね。この先大丈夫かなぁ・・・」
「大丈夫だって！」

あと少しで王都に到着する、というとき。

道端で誰かが手を振っている。
みすぼらしい姿の少年だ。
靴はぼろぼろで、穴があいている。服も薄く、この季節じゃなかったら確実に凍死するだろう。
「すいませーん、すいませーん」
「おう、どうした？」
律義に止まったツァイが窓を開けて尋ねた。
年頃はルーマやマリより下みたいだ。
大きなぐりんとした目は痩せた顔でひときわ大きく見えた。

「皆さん観光？王都に行くつもり？」
「あぁ」
「だめだなぁ。車に司法局のシール貼ってないね。
国道の検問、いい加減だからね。
王都はひときわ警備が厳重なんだ。徒歩の人間ならともかく、車ごと入るんだったら許可シールが必要なんだ」
「そうか。私たちは国道を通ってこなかったからな・・・」
「そのまま入っていたらテロリスト扱いを受けるところだったね。
僕はそういう人たちに声をかけて問題を未然に防ぐお仕事しているんだ。
シール一枚アイマナ紙幣４５枚もしくは銅貨2枚だよ」
「金を取るのか？」
「そうだよ。大丈夫、国道の検問とおんなじお値段だからインチキ

はしてないよ」

ばたん、と車のドアが開いて閉じた。
ショウタは何事かと思ったら、隣にいたラルゴがいない。
彼はシールをちらつかせている少年の背後に立った後、
思いっきり少年の頭をグーで殴った。

「な！？」
驚いた少年が何事かと思って振り返ったら、首根っこを掴まれて細い体はあっさり宙に浮いた。
「離せよー！」
「なぁにがインチキしねぇだ。んなシール自体がインチキだろうが」

「あぁ！お前っ！情報屋のラルゴ！
なんでこんなところにいるんだよー！！浮浪者めー！」
「俺がどこにいようが情報屋なんだから関係ねぇだろ。
ほれ、観光客相手にカモるのは一番性質がわりぃからさっさと帰れって」
「くっそおぉー、バカやろー！」

ラルゴがぱっと手を離すと、少年は一目散に逃げていった。
何が起こったのかわからなかったが、どうやらあと寸前で騙されるところだったらしい。
ラルゴは窓枠に肘をのせ、車内に顔を突っ込んだ。
「ツァイ、お前も人がいいなぁ」
「む、すまない」
「お前らも気をつけろよ。あんなのざらだからな。
特に美人の女と子供には気をつけろよ。色気と同情は人間の本能と道徳心に訴えてくるから厄介だぞ」
「は、はい・・・」

「びっくりしたぁ」
ラルゴに言われても、クインとマリは目を白黒させていた。
あまり騙されたりしないのだろうか。
アイマナ国に来たことがあるショウタは、特に驚くこともなく、冷静に言い放った。
「ここアイマナ国は治安がとにかく悪い。
行動も一人にならないように気をつけた方がいいね。
特に教会関係者であることが目に見えてわかるマリとツァイ、”ハシャナール”のテレジーはね。
教会関係者は富裕層とまではいかなくても、この国ではお金持ちに見られるから」
ショウタが言うと、全員がこくこくと首を縦に振った。

ラルゴが車に再度乗り込むと、再び動き出した。
ショウタは隣にいるラルゴに、小さな声で先ほど抱いた印象を伝えた。
「前よりなんだか困窮している感じがするよ。物乞いこそいたけれどあいうのはいなかったなぁ」
「一向によくならない街の環境と就業率の圧倒的低さがな。
俺もあんまりアイマナには戻らないんだが、結構ひどい有様だな」
「暫くここにはいることになるから、何事もなければいいけれど」
「だな」
二人の懸念がどうかここだけのものであってほしいと思いながら、
ようやく車は、王都テセガニアに到着した。

38話　デッドエンド（後書き）

39話　西日から生まれる影

王都テセガニアは今まで通ってきたドドニア大陸のどの街よりもみすぼらしかった。

ビルは目視できる範囲では4階建て以上のものがない。
壁はどれもひびが入り、傾いていたり崩れていたりするものもある。

道路も歪み、瓦礫が散乱していて車での走行は不可能だった。
そうすると、ここで車を捨てていくことになる。
駐車場なんてあったところで一日と持たずに盗まれるだろう。
かといってニッチに仕舞うなんて無謀なことは決してしない。
ぼろ車から下りて、傷だらけのボディを触りながら、どことなくしんみりとなった。

「今までサンキュ、ぼろ車」
「楽しい思い出をありがとう、ぼろ車」
「よかったぞ、ぼろ車」
「狭かったけれどよかったよ、ぼろ車」
「私のおかげでいっぱい旅ができてよかったね、ぼろ車」
「えっと・・・あ、ありがとうございます・・・その・・・」
「・・・無理して言う必要はないと思うが」
「・・・はい」

車を降りてラルゴを先頭にぞろぞろと歩けばそれはそれは目立った。

明らかによそ者だから、否が応でも視線は集める。
居心地の悪さを感じながらも、ラルゴは足を迷いなく進める。

中央駅から歩くこと暫く。
ぼろぼろの、コンクリートがむき出しのビルの前でラルゴは立ち止まった。
一階が店舗で、金物屋だった。
昼過ぎでお客はほとんどいない。中にいるのは恰幅のいい親父だけ。
しわが深く刻まれていて、口角が下がっているから気難しそうな顔をしているように見える。
ラルゴの顔をちらり、と見ただけで新聞に再度目を落とした。
お互い軽くあいさつをしたかと思えば、そのまま店舗の中の階段を上がっていくから他の面々は驚くばかりだ。
「他人の家に勝手に入っていいの？」
マリがラルゴを引っ張って尋ねる。
ショウタもここに来たのは初めてだったから、少々戸惑っている。
だがラルゴは困惑する面々に詳しい説明をせず、堂々たる歩きで二階に上がった。
そして、階段の上にあったのは鉄の扉が一枚だけだった。
「何してんだよ、早く来いって」
ラルゴが手招きをする。
そして懐に手を入れて、木製の鍵を取りだした。
鍵穴にそんなものが入るのか、と思ったら、簡単に鍵穴にそれは吸い込まれていった。
かちり、と音を立てて鍵が開いた。
扉を開ければそこは別世界だった。
白い壁はシミ一つなく、外からは想像がつかないほど広く清潔感にあふれていた。

洗練された空間は、廃墟の街とは思えない。

「何・・・ここ・・・」
「ここが国際情報統制局アイマナ支部の事務所だ」
「ひろーい！きれーい！なんかよくわかんないけれどすごーい！」
「何あれ！水出てる！」
「グライナーの城の中・・・みたいだな」
きゃっきゃとはしゃぎまわるマリとルーマ、そして純粋に感嘆するテレジー。
どういう原理なのか本気で疑問を丸出しにしているクインとにこにこと笑うツァイ。
ショウタもさすがにこうなっているのは知らなかった。
大分複雑な魔術なのか、それとも普通に改装しているのかなんて、わからないのだが。
こんな快適な空間なら仕事もはかどりそうだ。

ラルゴは暫くきょろきょろとあたりを見渡す。何かを捜しているのか。
ふと、彼の目線が部屋の奥に向く。
確かに部屋は綺麗だ。だが、ところどころに資料が山積みにされている場所がある。
その山の一つに近づいた。
「どうしたの？」
ショウタが尋ねるが、ラルゴは黙ってその山に手を伸ばす。
そして、
ざっざざっざと山をかき分け始めたのだ。
最初はその行動が意味不明だったが、その山の中から人の手が出てきたときは心臓もろとも一瞬止まったような気がした。
腕は暫く宙を掻いて、もぞもぞともがいていた。

「なっ・・・！？」
「よぉ、久しぶりだな、キャスラン」
手の主は少しずつ人の姿を現していく。
そしてその人物が山から出たとき、資料は派手に散らばった。
中から出てきたのは、女性だった。
歳はラルゴと同じくらいだろうか。
ぼっさぼさの短い髪の毛と、薄ぼんやりとした顔付きをみて、女版ユピみたいな人だな、とショウタは思った。
「あ、あの・・・なんだか状況がわからないのですが・・・局長、とりあえず彼らに私は無害であることをお伝えできませんか？」
気づくと、体が全部出きった瞬間から彼女は両手を上にあげている。
真横からテレジーが剣を突き付けているし、ツァイの背中に避難したマリは指を彼女に向けている。
テレジーは相変わらず他人に対しての警戒心が高いからだろう。マリは彼女の嫌いなお化けだと思ったのだろう。
なんだか気の毒な気分になりながら、ショウタはテレジーを彼女からひっぺがした。
気を取り直して。
ラルゴは全員のほうに向いて、彼女を紹介した。
「ここの副局長のキャスラン・ヘミルエスニ。いいやつ。以上」
「きょ、局長・・・久々に帰ってきたと思ったらなんですか・・・」
「いや、キャスラン、お前こそ帰ってきたらなんでまた埋もれてん

だよ。
言っただろ。誰か人がいるときに埋もれておけってよ。
実はさ、帰ってきたのはほかでもない。
俺たち7人、暫くここで寝泊まりするから。仮眠室貸してくれ」
「・・・」

キャスランはちらり、と全員の顔を眺める。
そして、うーんと頭をひねった後、あぁと、手をたたいた。
まるで何かを思い出した、というような感じで、次に無礼承知でぴっとクインに指を向けた。
「貴方は世界最年少医師免許取得者のクイン・ナタリラさん」
「・・・は、はい」
次はマリに指を向けた。
「貴方はソーラテネル教会総本山主教オルカナ・ルーセントの一人娘のマリフォルナ・ルーセントさん」
「な・・・、なんで・・・知ってんの？」
次はショウタに指を向けた。
「貴方は1年ぐらい前にシャリムで山漁りしていた考古学者の、ショウタさん」
「・・・うん」
「あぁー、よかったです。全員ビンゴでした。
間違ったら情報屋の名折れですからね」
最初は大丈夫だろうかこの人は、と思っていたが、彼女も情報屋であることを再認識する。
キャスランはふ、とテレジーのほうを見て、さらにじっと見て、うーんと唸って、
まさか情報屋にも王族はばれているのだろうか、と思ったが、キャスランの答えはその予想を別の方向に裏切った。
「貴方・・・この前来たダニアの国王様とお顔が似てますね。おん

なじ”ハシャナール”だからでしょうか」

キャスランのその言葉に、冷静に質問をしたのはラルゴだった。

「キャスラン、ダニアの国王がどうしたって？」

彼女は頭を少しだけひねり、あまり冴えなさそうな顔をしながら言った。

「二、三日前ですね。

黒髪のイケメンさんが街にいるってなんだか街が騒がしかったので局員に探らせてみたんです。

私は人の顔と名前を一回で覚えられるので、撮ってきた写真を見てすぐにダニアの国王、シュヴァイリン・レント氏だとわかりました。

以前はテレビ越しに見たっきりだったのですが、まさか本物がこの国にいるなんて思いもしませんでしたね。

ダニアの軍人を連れてちょっと暴れちゃいそうだったので、そうなる前に追っ払ってもらいました」

「追っ払ったって、どこへ」

ショウタが尋ねると、キャスランは肩をすくめて困ったような顔をした。

「そうですね・・・逃げてしまったので追うことができなかったんですよ。

何かを捜しているようでした。それが何かはわからなかったのですが」

恐らく今朝の襲撃とも関係する。

彼の捜しているものが、今ショウタの横にいる。

「現在他の局員を使って行方を追っていますが、さまざまな案件を抱えている以上、人員も避けないのです。

局長、何か理由があってここに来たのはわかりますが、時間があっ

たら手伝ってもらえないでしょうか」
「ん・・・あ、あぁ。そうだな。
わかった」
生返事を返した後、キャスランは書類の山をいくつか掴むと、ちょうど時間で用事があると言って外に出ていってしまった。

広い事務所にはショウタたちが来て以来誰も入ってはこなかった。
外に出ることもできず、半ば軟禁状態でここにいることは暇だった。

ラルゴは局長室にこもりっきりでパソコンに向かいあっている。
局長室はガラス張りだから中の様子は見えるのだが、なんとなく声がかけづらい。

ショウタは窓際のソファに座り、窓の外を見た。
夕方の街並みは、寂れていても王都だと思った。
人々が市場でせわしなく動き回り、帰路に向かうのだ。
まるで別次元に区切られてしまったようなこの街。1年前よりも状態が悪くなっている気がする。
国際司法取引所が管理しているとはいえ、すべてを掌握しているわけではなく民主主体を促すため今では干渉が減ってきている。
今はその転換期なのだろう。
なんとなく、気持ち悪い空気がこの街にはある。
そんな不安定な街に現れた不穏分子、シュヴァイリン。
シュヴァイリンは街が滅びようが人が死のうが、目的達成のためならすべてをいとわないだろう。
秩序や法が不安定なこの街なら多少の混乱はもみ消される。

この街から早く出たい。長居したくない。
ショウタがそう焦っているのは、どれくらい他の人に伝わっているのだろうか。

と、そんなことを考えていると、とんとん、と肩をたたかれた。

「ショウタ、ご飯買って来いってラルゴが」
声をかけたのはルーマで、なんだか分厚い紙幣を手に持っている。
「そんな金、どうしたの」
「アイマナは紙幣の価値が低いんだって。硬貨持っているのは金持ちだってばれるから持って行くなって」
「あぁそうか・・・」
ショウタは重い腰を持ち上げて、うんと伸びをした。
「日が落ちる前に行ってしまわなきゃね」
「どこか行くのぉ？」
「買い物」
「私も行く！」
「マリが行くなら私も行こうか」
「わかった。テレジーとクインはどうする？」
「・・・」
「私はここで待っていてもいいですか？」
テレジーとクインは待機、ということで４人で買い物に行こうとした。

その時。
ふと感じた違和感。
ショウタが１年前の状態だったら気がついていたかもしれない。
わずかな瞬間がすべての命運を分ける、なんてありふれた言葉だ。
ガラスが割れて、窓の傍にいたクインが振り返り状況を確認する間

もなく、
彼女の体が窓の外に消えた。
人影が彼女の体を捕え、連れ出してしまったのだ。

「っきゃあああああぁぁぁ！」
「クイン！」

クインをさらった人物の確認は誰もできなかった。
ここは二階。いったいどうやってやってきたのかはわからないが一瞬の出来事だった。
ショウタが窓の下を見るが、すでに影は人ごみの中に消えてしまっていた。

「何事だ！」
ラルゴが慌てて窓の下を見るが、そこにはなにもない。
追いかけなくては。ショウタが外に出ようと扉の方を向いたとき、部屋の中の影が外に飛び出ていった。
テレジーがそのまま窓から飛び出したのだ。

「なっ！？」
「テレジー君！？」
全員が止めるよりも早かった。
いつの間に彼は右手に大鎌を持っていた。追いかけるつもりなのだ。

こうしてはおられない、とショウタも窓枠に手をつけたとき、次は止められてしまった。
止めたのはツァイだった。

落ちようとするショウタの肩を掴んで、部屋に引き戻した。
「ショウタ！落ち着くんだ！
このまま行ったところで何になる！？」
「ツァイ・・・」
「どういうことだ・・・ここは結界が張ってあったはずだ。普通の人間ならここに入ることはできない」
「いるとしたら・・・
いやでもどうしてクインをさらったんだ・・・？なんでだよ・・・？」
「テレジーもどうしてあてずっぽうに追いかけちゃったんだろう」
「マリ、お前はまじないもできるのか？」
「・・・で、でき・・・」
「マリはまじないの類は苦手だ。いなくなった彼らを追尾することはできまい」

ぺたり、とショウタは再度窓枠に手をついた。
遠くに目を凝らしたって何も見えない。
日が落ちかけていてさらに視界は悪く、西日が廃墟を紅く染めた。
ショウタは目を閉じて、暫くそのまま固まった。
本当に微動だにしなかったので、ルーマがショウタに心配そうに声をかけた。
「ショウタ・・・？」
おそるおそるショウタに手を伸ばしたところ、それをラルゴが止めた。
「ラルゴ？」
「しっ」
静かにするよう指を自身の口にあてる。
全員が見守る中、ショウタは数回深呼吸をして、つぶやいた。

「みつかったよ」

ショウタの言葉に目を丸くしたのはマリだった。
そしてすぐに、唇をきっと横に結んだ。
何かを言いたそうに数回口をもごつかせ、眉を寄せたが、彼女は何も言わなかった。

ルーマとツァイはショウタの発言に驚きながらも、嬉しそうに駆け寄った。
「本当!?どこ!?どこにいるの!?」
「えっと・・・北のほう」
「ずいぶんと漠然としているな」
「たぶん歩けばわかるよ」

ショウタの発言に驚きながらも、ルーマとツァイは安堵しているし、ラルゴはこうなるのをどこか知っていたかのようで、ショウタの言ったことを信じている。

ただ、マリだけは困惑を浮かべたままだった。
そのもやもやとした気持ちが一体どういうものか、マリ自身は気づいていない。

ようやく落ち着きを取り戻した一行は、消えた二人を捜すため、ショウタを先頭に事務所を出た。

４０話　求められる存在

「は、離してください！！貴方は一体何ですか！？
私だって怒ると怖いんですからね！」
「いいい痛い痛い痛い！
本当にすみません！ごめんなさい！ごめんなさい！すみません！」

テセガニアをものすごい勢いで走り抜ける人影は、小柄な少女を担いでいた。
情報屋の事務所から謎の影にさらわれたクインだ。
クインはその人影の肩に担がれ、その人物の背中を先ほどからどんどんと叩いている。
懐にメスやらハサミやらを仕込ませているが、不安定な体勢ゆえ取り出すこともできない。
前へ前へ流れていく風景をただ見ることしかできないクインは、今自分がどこへ向かっているのかもわからない。
オレンジ色の空があと少しで暗くなる、そんな時間帯で、このままいけば夜になってしまう。
ぞくっと背筋に恐怖が走って、でも自分でそれを回避することができない。
クインは恐怖と困惑、それに加え、苛立ちを感じていた。
一体何が自分の身に起ころうとしているのか。
これを打破する力が欲しい。今すぐにでも。
そんなことを一体どれほどの時間、どれほどの回数考えたことか。

クインは悔しさで目をぎゅっとつぶった。
わずかな情報である、流れゆく風景さえも拒絶して。

だが、彼女の願いが通じたのか。

状況を打破する者が現れた。

「うわぁっ！」

クインを担ぐ者が突如叫び声をあげた。

何か、と思って体をわずかにひねらせると、体が宙に投げ出された。

あっと叫ぶ間もなく、彼女の体は別の方向に引っ張られた。

「・・・テレジーさん？」

クインが恐る恐る顔を上げると、彼女を左腕一本で抱えているテレジーがそこにいた。

白い頬が少しだけ赤く、息も上がっていることから彼がここまで走って追いかけてきたことがうかがえる。

クインはその時、ようやく自分をさらった人物を見ることができた。

布をあちこちにつぎはぎしたような上着、埃を纏った黒いズボンはもはや灰色だ。

天気のいい日に見れば、まばゆいほどのスキンヘッドだが、今は宵なので光を反射することも少ない。

傍に大きな黒い布が落ちていて、それを被って襲撃したのだろう。

その人物は男だった。頭を抱えながら起き上がり、いましがたの事態を整理している。

「いた、痛い・・・天罰・・・？」

「大丈夫ですか？」

「よくさらった人間を気遣えるな。俺には一生できん」

クインを地面に下ろし、テレジーは両手で鎌を握る。

そして倒れた男の頭上に構え、そのまま振り下ろそうとした。

先ほどまで何があったかわからなかった男は、目の前に立った断罪

者を見て絶叫した。
「ひぃぃぃぃぃ!?うわわあああぁぁあ!?おわあああぁぁあああ!」
男は全力で後ずさった。
腰が抜けて立ち上がれないらしい。恐怖におののいてがくがくと震えている。
よっぽどテレジーの顔が怖かったのか。実際彼は中々に険しい顔で睨んでいるのだ。
クインは鉛のように重く、固くなってしまった足をようやく動かすことができた。
そして思わず自分をさらった人間の前に果敢に飛び込んだ。
そうするだろうとなんとなく思っていたテレジーは、念のため彼女の行動の根拠を尋ねた。
「おい、そいつをどうしたいんだお前は」
「とりあえずなぜ私をさらったのかを聞こうかと思います。あと、貴方、誰かの力でここまでできたんですよね。誰か聞きたいです」
彼女は淡々と、だが、少しだけテレジーに威圧されて揺らぐ声で己の意見を述べた。
クインが振り返ると、男は真っ青な顔でクインを見た後、即座に土下座した。
行動が潔い。男は何度も何度も額を地面にこすりつけて大きな声で言った。
「すいませんでした!ごめんなさい!」
そういえば先ほどから男はこれしか言っていない。
ふぅ、とクインは肩の力を抜いて、辺りを見渡した。
ぽつぽつと街灯が等間隔に並んでいる、一応住宅街の中だ。
人通りがなく、家の中も弱い光がところどころあるが、あまり人が

住んでいる気配のない場所だ。
ひんやりとした風が肌に触れて、寒いと感じた。日はとっくに落ちてしまった。
むしろ一気に辺りは暗くなった。雲が広がっている。雨になったら嫌だ。

そんなことを思いながら、クインは再度男のほうを見て声をかけた。

「あの、貴方はどうやら話ができそうな気がします。
詳しく聞かせてください。ね？」

男が顔を上げた。
額に土がついた顔を見ると、歳はクインとそう変わらないだろうという印象だ。
鼻が高く、堀の深い、なかなか精悍な顔つきをした若者だ。
「本当に・・・ごめんなさい。
俺はタイム・ジャコウっていうんです。
実は、俺たちには貴方が必要なんです。クインさん」
ぎゅっと、タイムは目をつむった。
まぁ訳ありでない限りこんな行動に出るはずないと思っていたので、クインは別段驚きもしなかった。

「順を追ってきかせてください。
私がどういう人間かを知っていて、のことですね？」
タイムはぶんぶんと頭を縦に振った。
彼に髪の毛があれば非常によく乱れたことだろう。
「はい。貴方が非常に優れた医者であることは知っています。
貴方の力で、妹分を助けてほしいんです」
「妹分？」
「俺たち、家がないんです。生まれたときから孤児です。

もっと先、奥に俺たちが住む家があるんです。
妹分はハシュ・ロートコンって言うんですが、まだ１０歳なんです。
もう一週間も熱が引かなくて、食欲もなくて日に日に弱っていって・・・
医者にかかるほどの金ももちろん持っていないし、薬なんて高すぎて買えない。
お願いです。ハシュを助けてください・・・！」

再度地面に額をこすりつけるほど、クインの目の前で土下座をした。

彼女の後ろにいたテレジーが、いつの間にか大鎌を仕舞って、腕組みをしている。
タイムの言い分を聞いて、クインに声をかけた。

「どうするつもりか？お前は」

なぜか。
クインはゆっくりと振りかえった。
いつもの冷えた目がこちらをみている。
だがそれがいつもと違うのに、すぐに気がついた。
テレジーが意図的に、お前は、という言葉を強調したような気がする。
医者であれば病気の人間を放っておくことは忍びないし、社会がそうであるように職業的に期待をする。
だが、今は旅の最中。どう思われていようが今のクインにとってはどうでもいい。

・・・やはり、テレジーさんには、気づかれていそうですね。

クインはすっと目を閉じ、タイムのほうに向き直る。
そして、にこりともせず、静かに呟いた。

「わかりました。行きましょう。お互い同意の上なら貴方は私に危害を加えそうにありませんし」
「ほ、本当ですか？本当ですか？
ありがとうございます・・・なんとお礼を言ったらいいか・・・」
「そういうのは、いいです。
仲間が心配しているので、急いでいきましょう」

クインに促され、タイムは立ち上がり、潤む目をごしごしと汚い上着で擦った。
「ありがとうございます。こっちです」
ようやく彼にも笑顔が戻ってきた。
笑えばやはりいい顔をした。

テレジーはクインの下した決断に意義も何も唱えず、ただ黙って彼女の後をついてきた。
それがクインにとって何を抱かせたのかは、彼女しかわからない。

一方。

テセガニアの街中で、ショウタは空を仰いだ。
鼻の頭に何かが当たった気がする。雨かもしれない。

もう一度よく辺りのにおいをかいで、辺りを見渡して、もう一度嗅いでを繰り返している。

「犬みたいだね・・・」
呆れ半分でルーマが言う。が、当の本人は気づいていない。
「あっちからクインのにおいがする」
「ショウタ、それ問題発言だよ」
「あとテレジーのにおいも」
「聞いてないな」

ふらふらとくねくねと歩くショウタの後ろについていく。
ショウタは夕飯時のにおいを掻きわけて、捜している人間を（なぜか臭いで）追いかけている。
胡散臭いが、他に情報があるかと言われれば、ない。
ラルゴ曰く、ショウタにはなにか珍しい力があるという。
それが今は唯一の頼みの綱だ。かなり根拠はないがいくしかあるまい。

先頭を歩くショウタに、ルーマが声をかけた。
まぁ集中してしまって己の世界に入っているショウタに声をかけたところで十分な返事を期待はしていない。
「二人のにおいってどんなにおいなの？」
なんていういい加減な質問だろう、とラルゴは思った。
ツァイはこんな非常事態だというのに、それは気になるな、なんてのんきだ。
ショウタはその質問を聞いていたのか、首をひねって、答えた。

「クインもテレジーも、なんかにおいが似てる」
「似てる？」
「どんなにおいかって言われたら、表現しにくいんだけれど。
あんまり食べ物って感じのにおいじゃなくて、うーん・・・何に近いんだろう。

まぁ、二人とも、似てるんだ」
「その根拠はなぁに？」
マリが尋ねる。ショウタはぴたりと足を止めて、少しだけ目を丸くしていった。

「俺はあの二人と会ったときからなんだか似てるなぁって思っていたんだ。
似ている人間だから、においも似ているってことじゃないかな」

ショウタの言葉には誰も共感ができなかった。
「似てる？」
「いや、どっちもどこか一線引いているところはあると思うが」
「空気が似てるかどうかって言われたら、ぜんぜん似てないよぉ」
「特に二人とも独特だからな。私もちょっと首をひねらざるを得ないな」
「俺もだ」
「僕も」
「私も」

誰からも同意を得られなかったショウタは、少し頬を膨らませたが、すぐに二人の追尾を再開する。
ショウタとしては、みんなが自分と同じことを感じていると思っていただけにショックだった。
だが今はそういうことをしている時ではない。もちろん。

暫く歩いて、そして再びショウタが足を止めた。
何か見つかったのか、と思った時、
ショウタの様子のおかしさに、ラルゴたちは眉を寄せた。

「ショウタ？」

「ショウタ君？」

たた、と足早にショウタの前に回り込んだマリが見たのは、脂汗を滲ませて、がたがたとどこか遠いところを見て震えているショウタで、

ツァイがその肩に手を乗せたとき、彼は頭を抱えてしゃがみこんだ。

頭を警告音が鳴り響く。

ショウタは痛みに耐えながら、声を出した。

「あいつ、すぐ近くに、いるみたいだ」

41話　格子の外

アイマナ国は本来、雨が多い。
湿気を含んだ雲が南東に吹き、山に当たるので基本的に晴れが少ない。
また、風がよく吹くので、むき出しの土があおられて全体的に埃っぽい。
お世辞にもいい風土とはいえない。
よって、農業の発展は芳しくなく、特に国家が破たんしてから食糧事情もよくない。
人々の平均寿命は短く、病気にもかかりやすい。
生きるのに難しい国で、数回支援の関係でシュヴァイリンはこの国に訪れたことがある。

今彼は広大な土地の真ん中に立っていた。

そこはかつて城があった場所で、今は瓦礫をところどころに残す程度だ。
あるのは墓石。この国の人間が建てたものではない。
眠るはこの国最後の王族。
聞く話によると、見つかったとき彼らの体は細かくばらばらに刻まれていたという。

この国のかつての統治を知り、学ぶことは次期国王として必要な何か、かとは思っている。
国が転覆し、混乱し、長きにわたって疲弊するその様。
無形の物が破壊するその前触れは、目に見えない分加速度がつけば手に負えない。

「私もいつか断罪される日が来るのでしょうか。
国をほったらかし、ばれたら糾弾は免れないことを起こそうとしている。
それでも私はしなくてはならない。やらねばならない。
あと半月以内に」

市街地に向かって歩き出す。
閑静な住宅地で、蛇行する道に沿って小さな家が立ち並ぶ。
とん、とシュヴァイリンは屋根に乗ると、そのまま屋根の上を歩き続ける。
傾いた教会の屋根の上で止まると、遠くを眺めた。
とっくに日は落ちて辺りは薄暗く、市街地の赤い街灯が辺りを温かく照らす。
視界の先、遠くにいるのは、医者の証である白いケープをはおった少女と、彼の獲物。

変わったな、とシュヴァイリンは思う。

シュヴァイリンはテレジーを殺すためにここにいる。
今までハッキリとテレジーの表情を考えたことはなかった。
いつからそう思うようになったのだろうか。変わったときに気づかされた。
相変わらず人を寄せ付けぬ冷たさは残っているが、今は何とも穏やかだ。
そのわずかな変化。シュヴァイリンとセラーにしかわからぬ纏う雰囲気の変化。
テレジーの顔を見ると、シュヴァイリンの頭はまるで鈍器で殴られたような衝撃が走る。

顔をゆがめ、膝をついてしまう。
テレジーを見ると、心臓のあたりが温かくなる気がして、
それが妙に心地いい。
なのに、その心地よさは危うさもはらんでいて、背筋がぞくぞくと
粟立つ感覚も伴った。
どくん、と心臓が跳ねて、まるで一種の興奮状態のような気分にな
って。
殺したい、殺さなくてはと強く感じる。
今の温かな気持ちは、彼を消滅させればどうなってしまうのだろう
か。
悲しいのか、それとも・・・？
奪いたいという気持ちもあるが、奪うことが許されるわけがない、
と自制する心も同じように存在する。

こんなことはここ2年のうちでも本当につい最近のことで、
テレジーがよくわからない人たちとつるみ始めてからだとシュヴァ
イリンは思っている。

今まで感じることのなかった葛藤。
常識が何かがわからない。
じかじかと目を焼くような刺激に耐えながら、シュヴァイリンは大
剣を抜いて、

たんっと屋根を蹴った。

後ろからぐわんっと大剣を振り、そのまま彼はめがけたものを両断
しようとする。
だがその大きな一振りは彼の目標を仕留めることはなかった。
鈍い金属音の後、人影は屋根の上を後ろとびで逃げた。
シュヴァイリンの大剣を防いだその人物は、手に持っていた物を投

げ捨てた。
それはひしゃげたフライパンだった。

「貴方、誰ですか」
問われた人物は、腕を組んで首をひねった。
難しそうにうなった後、大きくため息をついて、ようやく声を出す。

「あぁあ・・・どうしよう。ミッチさんに怒られちまう。
・・・まぁいいか。
はじめましてシュヴァイリン・レント。俺はユピ・レナードスタン。
名前、ピンとくるでしょ」

月さえ見えない夜。
街の明かりに照らされたユピを、シュヴァイリンは目を細めて見た。
実際こうして会うのは初めてかもしれない。名前は幾度となく聞いたし、
何より彼のもう一つの情報源、セラーから幾度となく聞いていた。

「そうか。貴方が・・・
彼に”テレジー・レナードスタン”の名を与えた人物ですね。
何か私に用があって来たんですよね。何か？」

かちん、と、シュヴァイリンは背中にある鞘に大剣を仕舞った。
対話の姿勢を取る割には、表情は堅く、隙を見せない。
ユピはシュヴァイリンから十分に距離を取った場所で、ズボンのポケットに手を突っこんで、彼に話しかけた。
いつものへらっとした情けない笑い顔はそこになく、彼も彼で少し

だけ静かに、冷たいまま。
お互いに耳がいいので、風の音さえ気にならない。

「君のまじないが掛けられたのは今から１９年前。
そして、発動したのは2年前。
俺は最初から当事者じゃないから、それがどういうものか知るために来た。まぁ様子見だね」
「様子見・・・私がどうして貴方に関係するのですか？」
「まぁそう言わずに。
君は思考を今ほとんど動かすことができない。
君は君自身に掛けられたそのまじないが何を意味するのか知らない」

シュヴァイリンは目を細めると、苦い顔をしてユピをにらんだ。
そして、その顔のまま、余裕を見せるためか口元に笑みを作った。
酷く不自然に顔がゆがみ、憎悪に近い何かを感じさせた。
「貴方は私にまじないがかかっているというのですか？」
「それさえも気づけないんだね。
君、２年以上前の記憶、あるでしょう？」
「当然です。記憶喪失なんてなったことは一度もない。
私はダニア国第８６代国王、シュヴァイリン・レントです。
先代、ウィルツィッヒ・レントとその妻、イングレ・ミラドの間に生まれた第一子。
７歳のときに両親を失って、入れ替わるように体が弱く、病院からようやく退院できた双子の弟とともに・・・」

その時、
シュヴァイリンは言葉を失った。
紅い瞳を見開き、口をわなつかせて。
ユピはその変化を見逃さない。

少しだけ距離を詰めて、シュヴァイリンに問う。

「そうだ。君は初めてあった彼になんて言ったのか？」

「・・・」

「幼い二人に対し、セラーはどういう風に接してくれたか？」

「・・・」

「君はセラーにどんな感情を抱いていたか？」

「・・・」

「テレジーには？」

「・・・」

「君が体調を崩した時、テレジーは何をしてくれた？」

「・・・」

「君は即位を間近に感じたとき、どういう人間になりたいと思ったのか？」

「・・・」

「成人すると王位継承権を持たない皇族は城を出ていくのがダニアの習わしだ。

いずれ君のもとを去るであろうテレジーに、君は何を言ったか？」

「・・・」

ユピの言葉には、どれも答えられなかった。

思いだそうとすればするほど、頭ががんがんと鳴り響いた。

目を閉じてその光景を思い出そうとすればするほど、その映像はノイズが交じって、すべてが不鮮明になってしまう。

何も思い出せない。いや、違う。

思いだすことを、己が拒絶しているのだ。

一体なぜか。シュヴァイリンには分からない。

ユピが言ったこと。自分にはまじないがかかっている。

だとしたら、もしかしたら今の自分という自我は一体なんだ。

自分は一体誰だ。

今自分は何をしようとしているのか。なぜそうしようとしているのか。

そもそもどうしてここにいるのか。

「あ、あぁ、あ、あ、ああ、あ、あ、あ、あああぁ」

こま切れに、壊れかけたロボットのように無機質な声を上げながら、シュヴァイリンは頭を抱えてしまった。

視界が、聞こえるものが、そして、頭の中がノイズ交じりで滅茶苦茶で。

砂嵐の音はだんだんと大きくなっていって。

そして、ぷつりと途絶えた。

ユピはそのままシュヴァイリンに近づいた。

まるで止まってしまったロボットのようなシュヴァイリンの前に立って、ユピはポケットから小さな瓶を取り出した。

コルクで栓をされたそれは、中身は見えない。

それを開けようとしたとき、ユピははっと気付いた。

だが、体が反応するまではわずかな時間の差が生まれる。

その一瞬、ユピが反応できなかったわずかなその一瞬。

シュヴァイリンの体から魔力が吹き出した。

突風だった。飛ばされることはなかったが、そのままバランスを崩したユピは落下した。

地面に直撃する寸でのところで、ユピの体が先ほどよりも強い力で押し飛ばされた。

背中に何かが砕ける感触がある。壁かもしれない。
そんなことを考えている間もなく、ユピの体はずるずると壁伝いに落ちていく。

「つ・・・いてぇ・・・」
言葉を出すと同時に、口の中からどろりと血液が出てきた。
目の前が非常に見えにくい。指一本と動かせない。背骨をやってしまったかもしれない。

ざ、と足音。
ふらりとユピの目の前にたったシュヴァイリンは、もう一度大剣を抜くと、そのまま頭上にかざした。
そんな様子さえ、今のユピには見えない。
そのまま、黙って、
シュヴァイリンは大剣をユピめがけて振り下ろした。

ほぼ同時刻。

そこは中心街から外れていて、家同士の間隔が開いている場所だった。

ずいぶん古い平屋だった。
隣の家は扉に板が打ちつけられていて、人は住んでいる気配がない。

だが、それでよかっただろう。
なぜなら今クインとテレジーの目の前にあるその平屋からは、もの

すごい騒ぎ声が聞こえるからだ。
タイムはがらがらと扉を開けると、一発。
「うっさい！！！！！」
と、一喝。
結構声は通る方なので、部屋の隅々まで聞こえたのだろう。
実際そのようで、先ほどまでの騒ぎ声は一瞬で水を打ったような静けさに変わった。

ふぅ、とタイムはため息をついた後、クインとテレジーを部屋に招き入れた。
「すいませんすいません。どうぞ、入ってください」
すいませんとごめんなさいが多い人だな、と思いながら、二人は家の中に入った。
玄関は広いはず、だ。
ただ、小さな靴がぎっしりと敷き詰められていて、どこに靴をおけばいいのだろうか。
クインがおろおろしているのに気づいたタイムはがさっと靴を抱えあげると、そのまま玄関の外にぽいっと投げた。
スペースを確保されて、タイムはどぞどぞ、と招いた。が、

「靴、脱ぐんですか？」

そもそもの疑問。
靴を脱ぐときイコール寝るときなので、部屋に上がる時に靴を脱ぐなんてあまりないことだ。
タイムは恥ずかしそうに頭を掻いて、言った。
「いやぁ、実はちっちゃい子たちが床に直に座ったり遊んだりする

ので、土足を避けたいんです。
協力してもらってもいいですか？」

どんな人たちが住んでいるのだろうか。

クインとテレジーは靴を脱ぎ、タイムのあとに続く。
長い木の廊下を過ぎ、大きな部屋に入ると、
「タイム！お帰り！」
小さいのが部屋の中にたくさんいた。
ざっと２０人。３歳ぐらいの子供から、やんちゃ盛りの１０歳ぐらいの子供、タイムと同じぐらいの年頃の子供もいる。
見た感じ、一番年上はタイムみたいだ。
年少の子供たちがタイムと客人の傍にかけよった。

「タイム、誰これ？」
「誰連れてきたの？」
「あれだよ。ハシュのお医者さんだよ」
「本当にお医者さんなの？」
「お姉ちゃんだ」
「知らないのー？あの白いお洋服がお医者さんなんだよ」
「だってタイムよりもちっさいよ」
「女はちっさいんだよ」

わぁわぁきゃあきゃあと騒ぎ立てる子供たち。さながら学問所のようだ。

大きな部屋を見てみる。
部屋の中央には背の低い大きな机があって、勉強をしている形跡もあれば、落書きの紙がたくさんならべられてもいる。
床にはよごれたおもちゃやゴミが散乱していて、むしろ託児所のよ

うだ。
騒ぐ子供たちを再度タイムは静かにさせる。

「しぃー、な。
ハシュを診てもらうから、みんな大人しくしててくれよ」

子供たちは素直にタイムの言うことを聞く。大分子供から好かれているのだろう。
お互いに人差し指を口にあてて、しぃー、ね。といいながら子供たちはゆっくり足音を立てずに歩き出す。

「ごめんなさい騒がしくて」
「い、いいえ。ちょっとびっくりしましたけれど」
「さ、こっちです」

さらに奥の部屋に向かう。
ドアの前には絵やお花、おもちゃが置かれている。
早く元気になってね、というメッセージがあって、なんとなく察しが付く。

「ハシュ、入るぞ」

暗く狭い部屋には何もなかった。
真ん中にポツンと布団だけが敷かれていて、そこに小さなふくらみがある。
クインはゆっくりと部屋に入る。そして、布団の傍にしゃがみこんだ。
布団の中で小さな少女が、息を荒くして眠っている。
この子がタイムの言っていた助けたい少女、ハシュだ。
汗で額に張り付いた金髪をよけて、そっと手のひらを乗せる。驚く

ほど熱い。
次に布団の中に手を入れて、ハシュの手を握る。それはひんやりと芯から冷たい。

クインは難しい顔を彼らに隠したまま、立ち上がった。そして、入口に立つ二人のほうに向き直る。
彼女が医療道具を入れているアタッシュケースはこの場にない。白いケープの内ポケットもニッチになっているが、道具は限られている。
だが、任された仕事はこなすのが彼女の流儀だ。
たとえ患者が逃げ出しても、だ。

「タイムさん、氷と水を持ってきてください。あと、タオルをたくさん。
テレジーさんは・・・ここにいてください。助手になってください」

クインは腕をまくって大きく深呼吸をした。
あまり時間がない。それは自分のではなく、この今にも燃え尽きそうな命を懸命に燃やしている少女の、だ。
険しい顔をしたまま、それでも努めて優しい声で、眠り続ける少女に言った。

「私が貴方を助けますから、安心してくださいね」

42話　いつかを待ち続ける

クインはハシュの脈を測りながら本をめくった。
幸いに彼女は感染症の医学書を持っていたので、それを床に置いて、ハシュと本を交互に見た。
一週間とはいえ急性。タイムに聞けばその前からの予兆というものはなく、突如倒れたかと思えば高熱を発症したという。
潜伏期間の短さ、症状の激しさを考慮して、クインはハシュが何かに感染したとしか考えられなかった。
何故彼女だけが発症したのか。
話を聞くが、もともとハシュは外で活発に遊ぶというよりも、本を読むことが好きな子で、外に出るのは友達に誘われた時ぐらいだという。

「アイマナは湿潤気候地帯・・・この場所は衛生状態があまりよさそうではありませんから、細菌が繁殖しても何の問題もありません。

ハシュさんはもともと外で活発に遊ぶわけではないので、他の子供たちに比べたら病原菌に対する耐性が弱いと考えた方がいいかもしれません。
だとしても、どこから感染したかによるのですが・・・」

ぶつぶつと頭の中を整理するために、クインは独り言で見解を述べる。
タイムはハシュの枕元に座り、タオルを絞っては何度もハシュの額に乗せる。
乗せてもすぐに温かくなってしまうので、休む暇はない。
テレジーはというと、先ほどまでクインがニッチから取り出した薬

品やら道具を仕分けた後は、部屋の壁に背をつけてクインの行動をただ見ているだけだった。
タイムに医学の知識はもちろんなく、ただ目の前の天才にすがりつくしか術はない。
クインの一挙一動にいちいち反応をして、行く末を案じている。

感染症だとしたら、何かもっと決定的なものを見つけなくては。原因が分かれば正しく投薬ができる。
ただ、今血液検査機を持っていないので、結局触診や視診だけでそれを判断しなければならない。
さすがのクインも簡単にはいかない。
学問所で習ったことを思い出しても、十分ではないからだ。

医術学問所は6歳から14年間寮生活をしながら通い、最後の卒業に合わせて国際試験を受けて合格させるためにある。
いわば、医者という人材を作りだすために英才教育をみっちり施す機関だ。
入るのももちろん困難だし、著しく成績が悪ければ進級することもできない。
どの国にも最低一つは設置されていて、優秀な人物を全国から募り、未来の医者を育成する。
ストレートに進級をすれば、10歳までに基礎学力を身につけ、14歳までに医学基礎を学ぶ。
その後は実践的な授業も入り、卒業の年に国際試験が受験できる。
クインは優秀だったので普通の人が最初に8年かかるところをたった5年ほどで終わらせてしまった。
そして卒業をしたのち、祖父の診療所を手伝いながらそれなりに多くの人を診てきた。休みを返上して。
だが、いくら優秀とはいえ、彼女は若すぎる。
医者としての時間が短く、経験の絶対数が少ない。

「どこかに必ずヒントがあるはず・・・です。
きっとどこかに・・・」

クインは再度ハシュの体を触って診た。
やはり手足は氷のように冷たく、首から上は非常に熱い。
胃腸辺りに手を当てると、じんわりと冷たく、内臓が冷えてしまっていた。
これだけである程度は絞れるものの、まだ足りない。
首以外の大きな血管、足の付け根を触ってみる。やはり冷たい。
高熱とはいえ、首から上と首から下では症状に差が大きい。
医学書のページをめくりながら、クインはうんうん唸りながら頭を回転させる。

「タイムさん、何度も何度もすみません。
もっともっと細かく、ハシュさんが倒れた前後のことを教えてください」
「わ、わかりました。あ、他の子たちにも聞いてみます。待っててください、ごめんなさい」
「お願いします」

すいません、と言って、タイムは部屋を出た。
静かに扉を閉めた後、ものすごい勢いで走っていく音が聞こえる。
タイムの必死さが伝わってきて、クインもそれにこたえたいと、それらしいページをめくっていく。

「お前でも、何かに必死になることがあるんだな」

久しぶりに口を開いたかと思えば、またしてもそんなことを言うものだから、クインの手が止まる。

顔を上げることはしない。ただ、返事は返す。
「まがりなりにも一応医者であるプライドはあります」
「その子供を助けることは」
「テレジーさん」

タイムがいなくなって、クインが代わりにハシュの額のタオルを取りかえる。
テレジーの言いたいことは、わかっている。
もう取り繕うのも疲れた。
彼になら、どうせ言っても差支えはないだろう、とクインは決心し、言った。
テレジーは彼女にとってもっとも一緒にいる時間が長い。
ことあるごとにテレジーの治療や検査をかって出ている、半ば主治医のような存在だ。
口数の少ないテレジーは今まで治療中にクインに話しかけてくることはなかった。
思えばその間、聡い彼はクインを分析していたのかもしれない。

「そうです。貴方の考えている通り。
私は医者か法使委員、国際司法取引所の人間のどちらになってもかまわなかったんですよ。
ただたまたま家から出られるのが医学学問所という全寮制の学問所だったというだけです。
すっきりしましたか?軽蔑しましたか?思った通りの人物で清々しましたか?
・・・こんなこと話をしている暇はありません。私はタイムさんと約束をしました。
ハシュさんを助けると。
尊敬はされずとも、約束だけは守る人間です」

今度こそテレジーは黙った。
それだけでクインは十分だった。

部屋の中は、ハシュの荒い息遣いと、クインのページをめくる音しかしない。
再度テレジーが口を開いた。
今日の彼は饒舌だ、と思いながら、クインは耳に心地いい声を聞いた。

「お前は治療をするとき、複雑な顔をするな」

クインは顔を上げた。
そして、その顔で言った。

「そうならない日が来ると、いいんですけれど」

クインはその細い腕でハシュの体を反転させる。
冷えた体はこの数日で衰弱して、非常に痩せ細っていた。
ハシュを抱えて、背中に手を当てる。
心臓の動きは速くて弱い。

そのとき、クインは彼女の肩甲骨のあたりに気付いた。
小さな傷だ。肌色のパッドが貼ってあって、それを取るとそこには鋭利な刃物跡があった。
切れている場所は少ないが、見れば深さはあって、刺されたようだ。

傷はふさがっていない。乾いてもいなかった。
さらに、傷口がやけどをしたようになっている。
妙だった。

「テレジーさん、タイムさんを呼んできてください」
テレジーは黙って立ち上がると、部屋から出ていった。
暫くして、テレジーはタイムを連れてきた。
いや、正確にはタイムによってテレジーが引っ張られてきたと言った方がいい。
彼は興奮気味に勢いよく扉を開ける。
先ほどまで暴れる子供たちをたしなめていた人間のすることではないだろうが。
「クインさん！何かわかったんですか！？」
「お静かに。
タイムさん、この傷、どうしたかわかりますか？」

そういい、クインはハシュの背中の傷を指さす。
タイムはそれを見て、そういえばと思いだす。
「・・・！それ、熱を出す１０日ぐらい前に創った傷です！
なんで・・・まったくふさがっていない・・・俺も忘れていました・・・だって、もうとっくに治っていると」

クインはそれだけで、彼女の病気を理解した。
最後に確証を得るために尋ねる。

「そう、普通怪我は血小板が凝固し、肉芽組織が収縮して傷がふさがります。
ですが、彼女の場合そもそも血液が凝固作用を示していない。
体力の低下、感染症のような症状、首から下の血液循環不順。
さらに傷口がやけどのような状態になっている。刺し傷なのに。
似たような症状はいくつもありますが、最後に一つだけ聞きます。
ハシュさんは、
”オルフェナール”ですか？」

タイムの顔色がさぁっとなくなっていくのをみて、己の推理が当たっていたことを実感する。
やはり、とクインがつぶやくと、テレジーが広げた薬の中から、いくつかを取り出す。

「”オルフェナール”の血は特殊なんですよ。
類まれなる治癒能力があるんです。どうやら、豊富に栄養を蓄え、運ぶことができると考えられていますが実際はまだ研究段階と言います。
ですが、ある血と混ぜることで、血液がその本来の機能を失ってしまうのです。
今のハシュさんは熱こそありますが、それは生体反応として出ているだけ。
ハシュさんの血は栄養も酸素もほとんどと言っていいほど運ぶこともできず、また、傷を塞ぐこともできない。
今のうちに見つかってよかったですね。このまま放っておけば末端から壊死するところでした」
「く、クインさん・・・その血って・・・？
ハシュに誰の血が混ざって、ハシュはこうなってしまったんですか？」

かちかちと歯を震わせているのは、
ハシュの病気の原因がわかったことによる安堵か、それともハシュを”オルフェナール”と言い当てたことへの畏怖か、
クインとの距離を遠くすることも近くすることもできず、タイムは固まってしまっている。
彼女は入口に立つ二人のほうを見ずに、言った。

「”ハシャナール”の血ですよ」

ぽかんと口を開いたまま、あっけにとられたタイム。
彼の横にいるテレジーが”ハシャナール”とは知らず、名前さえも聞いたことがあったかなかったか曖昧なそれ。
一体どういうことか、タイムはクインに話の続きを促した。

「”ハシャナール”と”オルフェナール”は見た目も体質もその存在も、とらわれ方も全く正反対の存在。
今から２４年前、製薬会社エルデナとディタクミナの医術学問所が実験して成果を出しています。
まぁ最初は”ハシャナール”と”オルフェナール”の血をかけ合わせることで、お互いのいいところを取った新たな人間を作り出すと言ったところですが、まぁそこはいいとして。
結果として二つの血を混ぜることで、血液としての機能を失うことが判明しました。
それはお互いがお互いを滅ぼすことができると言ってもいいでしょう。
ハシュさんが受けた傷。
”ハシャナール”の血がついた刃物で彼女が切られたのでしょう。
彼女を殺すためかどうかは不明ですが」

どさっと、タイムが尻もちをついた。
「ハシュが・・・襲われた・・・？殺されかけたのか・・・？」
「まだ不確定要素です・・・と言いたいところですが、そのおつもりで考えていたほうがいいでしょう。
背中を切ることはもちろん本人には不可能。ましてや”ハシャナール”の血をつけていたなんて偶然にしてはできすぎています。
”ハシャナール”も”オルフェナール”も、この世界では少ない存在ですから。
さて、原因がわかりましたので、本格的に治療を始めます。
が・・・タイムさん、覚悟をしていてください。

医者は最善を尽くしますが、すべての病を治すことはできません」

クインの淡々とした言葉に、タイムはよろよろと立ち上がると、そのままハシュの枕元に座った。

苦しそうにしていたハシュが、うっすらと目を開けた。

「っ！・・・ハシュ」

熱に浮かされるその目は涙でうるんでいて、その奥の瞳の色は、うっすらとした紅い色になりつつある。

タイムはそれに気づかない。ただハシュが意識を取り戻したことで頭がいっぱいになり、急いでハシュの、その人とは思えない冷たさの手を握りしめた。

「ハシュ、俺だ。タイムだ。

大丈夫だ。医者のお姉さんがお前を助けてくれる。だからお前は安心してしっかり眠るんだ！

よくなったら、ハシュの好きなもんいっぱい食わせてやるから。

みんなもお前のこと待ってる。だから、今はお休みだ」

ハシュはその言葉が聞こえていて、火照る頬を緩めて、にこりと笑った。

そしてゆっくりと瞼を閉じて、眠りに着いた。

静かにハシュの手を布団の上に置いて、タイムは再度クインのほうを向き直った。

そして額を床につけて、肩を震わせながら言った。

「俺、クインさんを信じています。どうか、お願いします」

こくんと小さくうなづいたのち、クインは治療に取りかかる。

まずは足りなくなってしまった栄養を補うことからだ。

点滴を設置する。タイムやテレジーに指示を出して、さまざまなものを取ってきてもらい、とりあえずテーブルを置いて液剤を置いた。

次はいくつかのアンプルを注射器に入れていく。
ただ、これが有効な手立てかはわからない。
とんとんと注射器から空気を抜いて、ハシュの腕に刺す。
冷たいだけでなく、筋肉が委縮していて固く、こんなに注射をすることだけで緊張するのは初めてだった。
すべての液剤を腕に入れ終わると、彼女は残りの道具を確認する。
医学書は感染症しか持っていなくて、何かヒントになりうることはないか、と、近しいところをめくって、
とあることに気付いた。

クインの手が止まり、意を決したようにテレジー、タイムに声をかけた。

「すみません、ちょっとハシュさんの服をほとんど全部脱がせてしまいますので、お二人とも出ていってもらえますか？」
テレジーは何も言わずに部屋を出る。
タイムは少し心配そうにちらちらとハシュのほうを見ながら、しかしクインにお願いします、と言って部屋を出た。
部屋から二人が出ていき、扉が閉まったのを確認すると、
クインはメスを取りだした。

クインに追い出されて暫くは沈黙が続いていた。
タイムにとってその時間は非常に長く、ただただどうしようもなかった。
ただじぃっと、膝を抱えて顔を伏せて、時が来るのを待ち続けた。
どれくらい経ったかわからなくなって、タイムは顔を上げた。

ここにいるのは自分だけではない。
クインをさらったすぐ後に現れた青年。
黙って壁にもたれかかっているテレジーに、タイムは質問をする。

「貴方はクインさんの彼氏さんですか？」

と、

ぎろりとにらまれてしまったので、タイムはひぃぃっと声をあげて、

「すいませんごめんなさいごめんなさいすいません！」

と言ってうろたえる。

見た目はスキンヘッドで彫りが深いから、こんなに気弱だなんて誰が気づくか。

子供たちの前ではよき兄貴として責任感を持って行動しているようだが。

未だにテレジーに対してびくびくしているタイムは、しどろもどろになりながらも会話を続ける。

「あの・・・その、さらっておいてなんですが・・・まさか追いかけてくるなんて思わなくて」

「あれは俺の主治医みたいなもんだ。突如いなくなられたら困る」

「はは・・・そうですよね。

・・・テレジーさん、俺に魔術を貸してくれた人は、貴方が来ることを見越していました」

真面目に呟くタイム。

そんなの重々承知で、それゆえクインを追ったのもまた事実。

テレジーはタイムにわからないように、目を伏せる。

おそらくシュヴァイリンの仕業だろう。

あんな派手なことをするのは彼か、エルデナの紺青色の頭をしたいかれた男だけ。

ただ、エルデナの人間はルイニで重傷を負わせたらしい（ラルゴから聞いた）ので、すぐにはやってこないだろう。
どうしてクインをさらったのかまではわからないが、そうすることで自分がクイン追ってくることを見越していた。
お互いがお互いにわかりあっているから、行動の先を読めてしまうのかもしれない。
ただ、テレジーにはもうシュヴァイリンがわからない。
変わってしまった彼を、テレジーはもう追いかけることができない。

追われる一方。
自分に力があれば、追いかけることができるのに、今は逃げ続けることしかできない。
ただただ歯がゆかった。

口を開く、しかし先に開いたのは扉だった。
「入ってください」
クインに招かれて部屋に入ると、相変わらず真っ赤な顔をしたハシュがそこで寝ている。
だが、決定的に違うのは、息が大分落ち着いているということ。

「く、クインさん・・・一体どうしたんですか?」
「血液の本来の機能を取り戻しつつあります。
タイムさん、握ってください」

クインが差し出すハシュの小さな手。
タイムは恐る恐るそれを握った。
冷たい。でも、先ほどとは違うのは、その奥にじんわりと感じる温かさ。
それに気付いた時、タイムはぼろぼろと大粒の涙を流した。

ハシュは生きている。

それだけが彼のすべてだったようだ。

何度も何度も、頭を振って、ぐしゃぐしゃな顔で、タイムは感謝を述べた。

疲労を隠しきれないクインは真っ白い顔をして、一つため息をつくだけだった。

「まるで貴方は魔術師だ・・・ハシュを、ハシュを・・・なんてお礼を言ったら・・・」

「現代の魔科学で人を治癒することは不可能です。勉強さえすれば誰だってできます」

「しかし、それも才能だと思います。それは称賛に値する」

嗚咽をまじえながら、言葉をつっかえながらタイムは彼女をほめたたえる。

だが、ちっともクインはうれしそうではない。

散らばった道具を片づけながら、クインは手のひらに収まる大きさの瓶を3つ、ハシュの枕元に置いた。

透明な液体が入ったそれ。少しだけとろみがある。

「タイムさん、確かにハシュさんは一命を取り留めたと言ってもいいでしょう。

ですが、あとはハシュさんの体力にかかっています。予断は許されません。

”オルフェナール”は生体機能を取り戻せばあとは時間の問題で回復するでしょう。

この瓶の中身を二日に一回、朝に飲ませてください。

後は少しずつ栄養のあるものを摂取させてください。

最初は固形物は避けて。胃が慣れてきたら少しずつ噛ませて食事をさせてください。

これ、私の私回線番号です。なにかよくないことがあったらかけてきてください」

タイムが目を丸くさせ、さらに涙を流した。
よく泣く男だな、と思っていると、タイムはクインの手をがしっと握った。
ぶんぶんと振るものだから、痛いと告げるとようやく離してくれた。

タイムは涙をぐっと拭って、掠れかけた声でクインに尋ねた。
「なんで、なんでこんなによくしてくれるんですか・・・？
俺たちには、何もないのに」
「・・・一つ聞いていいですか？」

すべてを片付け終わり、あとは立ち去るだけとなって。
クインはタイムのほうを向いた。
彼女はいつもの大きくまっすぐな瞳を向ける。
心臓がどきりとなって、嘘がつけないような心境に陥らされる。
タイムはクイン相手に嘘をつくつもりはさらさらないのだが。

「どうして、”オルフェナール”と知っていて、ハシュさんを助けたんですか？」
「え？」

クインの質問の内容に、タイムはきょとんとしてしまう。
予想外のことで、最初はどうしたものかと考えていたが、素直にクインの質問について考え、答えた。

「なんでって・・・ハシュだからですよ」
「・・・」
「ハシュは、最初は”オルフェナール”であることを黙って俺たち

と一緒にいました。
どうしようもなく意地っ張りで素直じゃなくて、でも誰よりも働き者で。
一生懸命でほとんどこの家の中にいて一人だけれど、誰よりもみんなのことを考えていて。
そういうのって、”オルフェナール”って関係ないじゃないですか。

・・・ごめんなさい、俺、頭悪くて・・・
俺は、ハシュって人間が好きです。もちろん、他の奴らも。
それが理由じゃ駄目ですか?好きな人間を助けたいと思うのは当然だと思うんですが・・・」

「・・・そう、ですか」

クインの反応は非常に歯切れの悪いものだった。
きっとそういう理由じゃなきゃこんなことをしないとわかっていた。

わかっていたが、別の答えを望んでいたのかもしれない。

たとえばもっと残酷な何かとか。

「テレジーさん、そろそろ出ましょう。ショウタさんたち、心配しているどころの話じゃありません。
こんなに長い時間行方不明のままだと、よくありませんからね」
「思ったんだが、最初に誰でもいいから私回線で連絡を取っていればよかったんじゃないか?」
「・・・過ぎたことを言うのは好きじゃありません」
「あ、俺送ります。
せめて駅までは確実に」
「ハシュさんについていなくていいんですか?」

「命の恩人を最後まで責任もって送らないなんて、俺の道義に反します」
「人攫いが何を言う」
「すいませんごめんなさい」
「ま、まぁ・・・行きましょうか」

長い廊下を歩いて、タイムが居間にいる子供たちに軽く報告をする。

その間を待って、靴を履いて家を出た。
3人横一列になって、人通りが全くない道を歩く。

道を曲がって曲がって曲がって、
どんどんと明りも少なくなって、人の気配が皆無になっていって。

テレジーがつぶやいた。

「ここなら被害も出ないだろうな」

そして、顔色の優れないクインの手をひっぱる。
彼女は黙ってテレジーに手を握られ、タイムのほうをちらりと見た。

タイムは顔を上げない。
二人との距離はそんなにないが、近くもない。
肩が震えている。握る手も。
タイムは振り絞るような声を出し、そして、また謝った。
「・・・ごめんなさい、ごめんなさい」
「かまわん。どうせそうなることであるなら、抗いようがないものだ」

テレジーが右手を空にかざす。
光が集まって出来上がったそれは、彼の大切な武器である大鎌。
刃先を向ける方向は、タイムではない。
湿っぽい風が上空から吹いてくる。
雲が流れに流れ、月が見えた。

その月を背に、一つの影が降りかかってきたときには、
テレジーはクインの体を引いて、タイムを飛び越えて廃墟の屋根に
飛び移った。

先ほどまでテレジー達がいた場所は、レンガが破壊されて無残な光
景だ。
すとんと降り立った、生臭いにおいを纏うそれは、
身の丈以上の大きさの大剣を抱えて、人間味を感じさせない面持ち
でそこにいた。

43話　願いの裏の願い

辺りに立ち込める血のにおいに、タイムは顔をゆがめた。
だが、その顔を確認すると、はっとなる。
その人物がタイムに力を与えた人間だったから。
こんなにも、不気味な人だっただろうか。
今タイムの目の前にいる人物は、人の皮を被った人形のように見えたからだ。

「シュヴァイリンさん、その血は？」

テレジーの横にいるクインが少し困惑気味な声をかける。
無理もない。彼の服、顔にはいたるところに血がついている。
そんなことを彼は全く意に介していない。
手に持つ大剣にも血がべったりついていて、絶対に穏やかじゃない。

盛大に派手な登場の仕方をしておきながら、シュヴァイリンは呆然とその場に立ち尽くしている。
暫くぼーっとした後、首だけを左に向ける。
そこにいたタイムに気づくと、あぁ、と声をひとつ。

「御苦労さまです」

とだけ言った。
タイムは背筋がさぁっと冷たくなるのを感じた。
テレジーの視線が痛い。
耐えかねて、彼はことのいきさつを話した。

「ハシュを助けたくて・・・でもお金のない俺たちは薬なんて買えないし医者に診てもらうこともできない。
この人は、そんな俺の前に現れました。
かわいそうにって、じゃあ力を貸してやろうって。
そう言って俺をあの建物の前に連れて行ってくれた」
「建物・・・？」
「クインさん、貴方がいたところです。
俺にまじないを掛けてくれたんです。この人。
でも条件があって。
クインさんを無理やりさらうこと。窓から侵入すること」
「どうしてそんなことをさせた？」
テレジーがシュヴァイリンに尋ねると、彼はようやく表情を作った。
いつもの、人の悪い笑顔で。
「窓から侵入させた理由は私は知りません。そうするよう言われて、彼にそうするよう言っただけです。
彼女を窓からさらった理由は、貴方に強烈な印象を与えて追いかけざるを得ない状況を作りたかっただけです。
貴方は勘が鋭いからこんな状況になれば私だと思い、絶対に追いかけてくる。
でも、他の人たちがいては困るんです。特にあの考古学者の男の子はね。
ま、貴方と彼らを引き離すためなら私自身がやってもよかったのですが、たまたまおもしろいことを思いついたんで、そこの彼に協力してもらいました。
いかがでしたか？」
「おもしろいことって・・・？」

震える声で尋ねたのはタイムだった。
タイムにはこの3人の繋がりなんてわからない。
ただ、それに自分が関与してしまっていることが一体どういう運命のめぐりあわせか。それは知るべきだった。
シュヴァイリンは目を細め、綺麗に笑った。

「”オルフェナール”の子供と仲良くしている面白い人間に出くわしたので、実験したくなったんです」

未だに事態が飲み込めないタイムは、その言葉を何度も何度も己の中で反芻する。
結論を出すよりも早く、シュヴァイリンは彼に答えを与えた。
綺麗な笑顔で、にこにこと笑いながら。

「”ハシャナール”と”オルフェナール”。
その血が混ざるとどうなるのか、興味があったんですよ」
「・・・!?
貴方が・・・?
貴方がハシュを襲ったというのか!?」

激昂する前に、影がタイムの脇を切るように走る。
耳に痛い金属音。
テレジーの大鎌と、シュヴァイリンの大剣がぶつかりあった。
ぎちぎちと拮抗する力。タイムのほうからテレジーの顔は見えない。

ただ、シュヴァイリンがにっこりと笑顔を見せているだけ。
どうして笑えるのだろうか。
すべてを手まわししておいて、それがうまくいったからだろうか。
タイムには目の前の男が理解できない。理解したくない。
呆然と立ち尽くすしかできなかった。

テレジーはシュヴァイリンの目を見た。
己と同じ紅い瞳がそこにあって、でも、それは決して同じではない。
かちかちと金属が震えて音を出す。
震えているのは、それだけじゃない。

「なにを・・・考えているんだ・・・」
かすれた声がシュヴァイリンの耳には入っても、どこまで響いたのか。
彼はテレジーの大鎌を弾くとそのまま右足でテレジーの腹を蹴飛ばした。
はっと息をのんで、クインが手を口にあてる。
止めなくては。だが、クインは体を満足に動かせない。
先ほど大きな仕事をしてのけて、いけないとはわかりつつも安堵と疲労で体が弛緩していて、力が入らない。倒れたテレジーのもとに駆け寄ることもできない。
シュヴァイリンは固まっているクインを一瞥すると、大人びた笑みを浮かべる。
ころころ表情の変わるシュヴァイリンは、倒れたテレジーの腹部を上から踏みつける。
そして笑みを浮かべたまま彼を見おろし、言い放った。

「そろそろすべてを終わらせましょう。
貴方には死んでもらう。
そうすれば、私はすべてを取り戻すことができる」
「な・・・に?」
「気づいてないと?
貴方は私の物を奪っているのです。
それを取り戻すためなら、正当でしょう。ねぇ、リ・・・」

シュヴァイリンの言葉が途切れる。
がくんと頭が前に振れる。
痛いな、と言いながら、彼は後ろを振り返った。
その隙にテレジーがシュヴァイリンから逃れるが、彼の意識は自分を殴った者に向けられていた。

タイムがシュヴァイリンの後ろにいて、肩を震わせている。
シュヴァイリンの後頭部を殴ったのは彼だ。
殴られた後頭部をさすりながら、シュヴァイリンは先ほどよりも落ち着いた笑みを返す。
笑顔は連鎖反応。しかし、シュヴァイリンがいくら笑っても、誰もこの状況では笑うはずがない。

「何か？」
「お前は・・・あんたは・・・最初は俺に力をくれて、助けを差し伸べてくれた。
だけど、違う。あんたは、あんたは悪魔だ」
知的好奇心のために、まさかハシュを危険な目にあわせた。
それが自分に力を与えた。
愉快犯以外の何物でもない。
タイムはそれの心境が理解できない。振り絞るように言い放った言葉。しかし、シュヴァイリンは傷つくことはしない。

「貴方も私を憎むんですね。
貴方にどう思われようが構った事はないですよ。
赤の他人になんて、どう思われようが私の願いに影響はありません」

テレジーは耳をふさぎたかった。

そんな言葉をシュヴァイリンが口にするなんて、聞きたくなかった。

間合いを取り、右手をつきだす。

いつでも指をならせるように。魔術を放てるように。

テレジーの魔術は氷の属性を持つ。少しでも彼を足止めできれば。

しかしシュヴァイリンも”ハシャナール”。

その気配に気づくと、大剣を振った。

質量のある風が刃のように走り、そして。

「え・・・？」

ずっと屋根の上でテレジーから距離を取っていたクインの足元を崩した。

彼女の体はそのまま傾き、彼女が頭で理解するよりも早く、落ちていく。

その体を受け止めたのは、テレジーではなかった。

「こんにちは、優秀なお医者様。

彼にずいぶんとよくしてくれたようですねぇ。兄として感謝します。

が、もうその必要はありませんよ」

「しゅ、シュヴァイリン・・・さん・・・」

落ちるよりも早く、シュヴァイリンがもう一つの魔術を唱え、クインの体を引き寄せた。

彼女の腕を後ろで組ませ、いとも簡単に片手一本で拘束してしまう。

クインはさぁっと血の気が引くのを感じた。

これはつまり、人質だ。

絶望に打ちひしがれたタイムと、魔術を発動できず、腕がそのまま上がってしまっているテレジー。

クインは状況を受け入れることができなかった。

「さて、心やさしい私の弟なら、どうすれば彼女が助かるか、わかりますよね？」

タイムが先ほど叫んだことはどうやら当たってそうだ。
シュヴァイリン・レントは悪魔だ。
そう信じていないのはテレジーだけで、クインも、タイムも、

そして・・・

「馬鹿、言ってんじゃ、ねぇんだよ！
こ、の、腐れ外道がー！！！！！！」

突如現れた彼も、シュヴァイリンが悪魔、そう思っていたらしい。

「きゃあっ！」
クインの体が前に突き飛ばされる。
それをキャッチしたのは、今度こそテレジーだった。
テレジーが見たもの。
それは、小柄な人影におもいっきりとび蹴りをされて吹っ飛んだシュヴァイリンだった。

「・・・ショウタさん」
「まったく。今度こそ司法取引所に突き出そうかと思ったよ。
・・・クイン、テレジー、大丈夫？」

華麗にとび蹴りを決めたショウタが二人に声をかける。

きっとした表情をして、そのままシュヴァイリンを睨みつけた。

「またですか・・・とび蹴り少年。
貴方は嫌いなんですよ。貴方は私の邪魔をする」
「当然だよバカ王子。
最後のほうちょっと話を聞かせてもらった。
お前、テレジーの願い、知ってんのか？」
シュヴァイリンは地面に座ったまま、肩をすぼめて、さぁというようなリアクションを取る。
ショウタは努めて冷静になって、憎らしくもそれを極力出さずに言った。

「お前を取り戻すんだよ。
テレジーはお前を助けるために俺たちに協力してくれている。
なのにお前はそんなテレジーを殺すときてる。バカ以外に何があるってんだ」

シュヴァイリンは立ち上がり、ショウタを見る。
さも興味のなさそうなその表情。ショウタの言っていることは彼に響いていないようだ。

「へぇ。そうですか。いくつか言っておきましょう。
あまり下品な言葉を使わないでいただきたいですね。バカバカと失礼な。
それに、あいにくですが私は正常。通常運転。
どこもおかしいところはありません。
むしろ、私の気持ちも察してもらいたいものです。
私の願いは彼を殺すこと。それがすべてなんです。
私のことを大切に思う彼が、私の願いを叶えないわけないですよ。
ね？」

ショウタは手をぎゅっと握った。
ここまで話がめちゃくちゃでは、対話はありえない。
テレジーには悪いが、

「わかった。
お前を捕まえさせてもらうよ。力づくでね。これ以上他の人に不幸をまき散らすんだったら、やむを得ずってやつだ」

強硬策をとらせてもらうことにした。
ショウタが構えると同時に、屋根の上に４つの気配。

シュヴァイリンを囲むように、ラルゴたちが現れた。
ルーマは拳銃をふたつ、シュヴァイリンの頭に向け、ラルゴも切っ先を向けた。
マリはいつでも魔術を発動できる状態だし、ツァイも合図を感じ取ればすぐに飛び込める。

「だ・・・誰？」

タイムが狼狽するが、すぐに彼らが仲間同士だと理解する。
ただ、誰もが険しい顔をして、狂王子に敵意を示している。

シュヴァイリンはぐるっとそれを見渡すと、苦笑した。
「まったく・・・私は自力で願いをかなえなければならないんですね。
残念ですよ。わかってもらえないなんて」
「お前の願いなんて”星の記憶”でさえ叶えてくれないね」
「ばかばかしい。
ま、いいでしょう。今日は引かせてもらいましょう。

こちらの目的も果たせたことですし、瀕死の”オルフェナール”が生き返る一部始終も見られましたし」

そう言い、彼はちらりとクインを見る。
まるでそれは、秘密を掌握しているような底意地の悪い笑み。
クインは険しい顔でそれを返すと、満足そうに彼は笑って、指をパチンと鳴らす。

地面から噴き出す黒い煙。
それはシュヴァイリンを包み、彼の姿を隠していく。
「ま、待て・・・！」
テレジーが叫ぶも、彼の姿はもうそこにはなく、
静寂だけが残された。

シュヴァイリンが先ほどまでいたところを見ていたテレジーは、そのまま顔を伏せた。
未だ彼に支えられたままのクインがその顔を窺おうとしても、前髪に顔が隠れてその表情は分からない。
心配そうな視線を向けるクインに、いつの間にか屋根から降りてきていたラルゴが声をかけた。

「クイン、ちょっと離れてくれや」

彼女はそのままテレジーの腕から抜ける。
と、
すぐにラルゴはテレジーの頭を殴った。
殴られても、テレジーは無反応で、そのまま下を向いたまま。
ラルゴがテレジーに突っかかればいつも反論をするショウタが、今回は静かにその様子を見ていた。
ツァイ、マリ、ルーマも降りてきて、ショウタの傍に立っている。

そして、ラルゴはテレジーに向かって淡々と声をかけた。

「二重三重にかけられている事務所の結界をあっさり破られた。あいつの仕業だったんだな」

「・・・あぁ」

「そこの一般人。あいつに踊らされていたんだろ」

「・・・」

「あいつ、誰か殺すつもりだったんだろ」

「・・・殺すつもりじゃなかったんだろう・・・ただ・・・」

「悪意はないと思うか？」

「・・・」

ラルゴはテレジーの髪の毛をつかみ、顔を無理やりあげさせた。

全く感情のない紅い瞳が、奥に刃のような鋭さを持ったグレーの瞳がかち合う。

「お前の願いはあいつにかかわることらしいな。

だが、俺たちにこうも危害を加えてくるというなら、俺たちはあいつを敵とみなす。

殺されるぐらいなら、最悪俺はあいつをしとめる。

お前もそれぐらいの覚悟をしてもらおう。

てめぇの身は自分で守れ。あいつの行為にすべての責を負え。あいつをかばうんだったらな」

「いわれなくても・・・」

ふいに、紅い瞳に炎が宿る。

あぁあ？とラルゴが声を出すと、辺りの温度が下がる。

足元から冷たい冷気が立ち込めて、それは加速していくような気がした。

テレジーの魔力が高ぶってきているのだ。

彼は声の温度さえも落として、ラルゴに言った。

「最初から、そのつもりだ。
そもそも俺は貴様らの言うおとぎ話の存在がなくとも一人でまじないを捜していくつもりだった。
これだから誰かと行動を共にするというのは嫌なんだ。
うっとうしいだけじゃなく個人の行動を干渉される。
いい加減へどが出る。もう付き合いきれん。
さっさと別の”ハシャナール”を金でも使って雇って最初からやり直せ。
俺はもう抜けさせてもらう」

ラルゴが目を見開く。
まさかここまで言われるなんて思わなかったのだろう。
思わず緩んだ手からテレジーは逃れると、そのままラルゴたちに背を向ける。
落ちていた大鎌を拾い上げ、ショウタの制止の声を振り切って、
彼は屋根に飛び移って走り去ってしまった。

「うわー!!うわー!!おバカラルゴー!!!」
「うるせぇ!なんだよなんだよ!?
俺か!?俺がすべて悪いのか!?」
「おおおおお追いかけなくっちゃぁ!!」

慌てるルーマ、ラルゴ、マリ。
それとは対照的に、ショウタはどこか落ち着いていた。

悲しそうな表情を見せるクインの傍に立って、彼女の肩に手を置いて、声をかける。

「クイン、大丈夫だった？」

「え・・・あ、はい。私は、大丈夫です。

テレジーさんは」

「俺が後で捜しに行くよ。

ところで、彼は？」

ショウタの目線が呆然と立ち尽くすタイムに向けられる。

さぁっと、タイムの顔色が失せていく。

クインの仲間であることが理解できれば、彼の行動は早かった。

彼はずざざと後ずさり、土下座をした。

ごりごりと額を地面につけて、大声で、

「すいませんでしたすいませんでしたごめんなさいごめんなさいごめんなさい！」

息もつかずに言ったものだから、ショウタは唖然とした。

だが、すぐに勘づいて、なるほどねと言った。

「貴方がクインをさらった人か・・・

うーん、一番事情を聞かなきゃだね。クインは無事で良かったけどね。

そもそも貴方、敵ではないんでしょう。バカ王子の被害者だ。

どうしようかな・・・うーん、優先事項は・・・

バカ野郎を捕まえることか、テレジーを捜すことか、クインと貴方から事情を聞きだすことか。

あぁいや、放置した事務所も気になるな・・・

頭がパンクしそうだよ」

「ショウタさん、私にテレジーさんを捜しに行かせてください」

今後の方針を考えあぐねていたショウタに申し出たのは、クインだった。

落ち着いたのか、大分顔色がいい。

「クインちゃん一人で？私も行くよ」

マリがたたた、と駆け寄ってくる。

彼女はその申し出に、首を横に振ってこたえる。

「大丈夫です。今の私なら、彼を見つけ出すことができる気がするんです」

「そう・・・？」

クインはそう言って、踵を返した。

残されたショウタたちは、タイムの処遇もあるので、一旦場所を変えるべきだと考えた。

「そうだな、まずはあんたの素性が知りたいね。事務所も遠いことだし、あんた家近いんだろ？」

ラルゴが尋ねると、ようやくタイムが顔を上げる。

額が赤くなっていて、擦り切れているが。

「はい。はい。もちろん御案内します。ことのいきさつを、すべて洗いざらいお話します」

クインはなんとなくだけで足をすすめ、テレジーを見つけた。

「テレジーさん」

声をかけても、彼は振り向かない。
テレジーはじっと、その墓の前にいた。
アイマナ王家の墓。廃墟の中で、テレジーはただそこにいた。
「どうしてここに来たんですか？」
「別に。意味はない。
ただ広い場所に出ただけだ。さっさとこの国から出てもよかったんだが」
「そんなことしないでしょう？」
クインがそういうと、ようやくテレジーは振り返った。
目を細め、クインをにらむ。
だが彼女は、小首を傾げただけで、ゆっくりと声を紡ぐ。

「貴方が守りたいものたちが、相容れられないなんて、悲しすぎますよね。
それを私たちはちゃんとわかっているんです。
貴方を責めているんじゃない。
ただ、貴方が守ろうとすることは、そういうことなんです。ラルゴさんはきっとそう言いたかったんだと思います」
「・・・そういう勘だけは、お前は鋭いな」
「一体今まで何人の人を診てきたと思っているんです？
医者といえど接客業です」

静かな静寂ののち、
テレジーは観念したようにため息をついた。
やはり、この少女はただの少女じゃない。
己の内をひた隠しにし、偽るくせに、他人のそういう些細な感情や思考の端を読みとり、想像することができる。
「お前は、変な女だ。
俺があった中で、いちばん変だ」
「本当ですか？」

「お前がどういうふうにあの”オルフェナール”の子供を助けたかはこの際聞かないでおく」

彼女は口元は笑みを作ったまま、顔だけを伏せて、そしてもう一度上げた。

「さ、行きましょう」

テレジーを連れたクインがタイムの家の前に戻ると、ショウタたちがそこにいた。

「おかえりー」

にぱにぱと笑うルーマに出迎えられ、テレジーはあからさまにばつの悪そうな顔をする。

その表情が見られただけで、ショウタは十分だった。

戻ってくるとわかっていたからだ。

「おかえり。

タイムさんから事情はすべて聞いたよ。

なにはともあれ、クインが無事で本当によかった」

「みなさん、御迷惑おかけして本当に申し訳ございませんでした」

「なに、これ以上謝るな！

全員が無事ならそれ以上のことはない！」

「あぁ。ツァイの言うとおりだ。

むしろ巻き込んで悪かったな」

「そんな！

悪いのはあいつです。皆さんは悪くないです」

「まぁまぁ、責任の行方はこれで終わりということで。
俺たちは戻って今度の方針を考えなきゃだから。
タイムさん、ありがとうね」
ショウタがぺこりと頭を下げると、それ以上にタイムは頭を下げた。
「貴方方の恩、忘れません。皆さんの旅が無事でありますように」
こうしてタイムに別れを告げ、ようやく全員がそろいなおしたところで、事務所に戻る。
「なんかよくわかんなかったけれど、とりあえずみんなが無事でよかったよね！」
ルーマが言う。
結局事態を最初から最後まで立ち会ったのはテレジーとクインだけだ。
すべてを整理するにはまだまだ時間はかかりそうだ。
「まぁいいさ。さっさと事務所戻って結界張りなおさなきゃなー」
「そういえば、破れた結界はどうしてきたんですか？」
「全員でなんとか張りなおしてきたんだよ。
まったくよぉ、慣れないことすると疲れるな」
「みんなもうちょっと魔術に興味持ってよぉ！」
事務所に戻ったときは、宵もいい時間帯。
へとへとになりながらも、一同は二階に上がり、扉を開け、
中で優雅にお茶を飲んでいる客人に目を丸くした。

４４話　おいしい紅茶の飲み方

夜になって白熱灯が照らす屋内は、温かな光につつまれ、昼間とはまた違った雰囲気を醸し出す。
彼は部屋の中心で椅子に背をもたれて半ばふんぞり返るような形で腰をおろし、華奢なティーカップを持っている。
存分にカップの中の香りを吸いこんで、ほうとひとつだけため息。

「やっぱりファドキア産の紅茶は世界一だ。
紅茶のお伴はやっぱりクッキーだね。刻みアーモンドとジャムのクッキーは格別・・・」
「ユピ！！！」

叫んだのはテレジーだった。
人の名を呼ぶことをめったにしない彼が呼ぶほどの存在から親しい知り合いであることが分かる。
だが、何故ここにいるのだろうか。
全員の困惑を押し切り、テレジーは走り寄ってユピの目の前に立って、目を白黒させる。
おぉ、とユピは感嘆の声を上げると、カップをデスクの上に置いて立ち上がる。
そして久々の再会に喜んだのだろう。
テレジーにハグをして、へらへらと笑った。

「会いたかったよテレジー。久しぶり。また少し痩せたかな？
でも顔色がすごくいい。生き生きしてるねー」
「そんなことを言っている場合じゃないことぐらいわかるだろ！
何故お前がここに！？」

ユピの腕から抜け出すと、テレジーはユピの胸倉をつかんだ。
こわーい、と、尚もおちゃらけるユピだが、ようやく全員が事態に着いてきていないことに気づく。
未だに扉のところで固まったままの6人に向かってひらひらと手を振り、のんきに声をかけた。
「おーい、早く入ってきておくれよ。
君たちにはいっぱい話をしなきゃならないし、君たちも話を聞きたいだろ。
ささっ。おいしい紅茶もあるよー」

そういうと、ユピはぱちんと指を鳴らす。
すると、デスクが壁際に押しやられ、足の短いテーブルが部屋の奥から飛んできた。
椅子が8つ現れて、ティーカップとポットが空を飛んできた。
こぽこぽと紅茶が注がれる間、ユピはテレジーを無理やり座らせて、ショウタたちに早く、と声をかけた。
「いやいや、お前の家じゃねぇだろここ・・・」
未だ混乱したままのラルゴがふらふらと足を前に進め、椅子に座る。
全員が腰をおろしたのを確認すると、ユピはようやく腰を下ろした。

そしてまず、ユピのことを知らないクイン、ルーマ、マリ、ツァイのほうを見て自己紹介をした。

「はじめまして。俺の名前はユピ・レナードスタン。
テレジーの名付け親であり、しがない小説家だよ。
みなさんの名前も知りたいな」

垂れ目が細められて、人がよさそうとも情けなさそうともとれる笑

顔を向けられ、困惑してしまう。
しばし目配せをした後、マリが両手を膝の上に置いて、堅い表情のまま自己紹介をする。

「えっと・・・マリフォルナ・ルーセント。マリって呼んでくれていいから」
「ツァイ・リンだ」
「ルーマ・ミッドロア、です」
「クイン・ナタリラと申します」
マリを皮切りに全員の名前が把握でき、ユピはうんうん、と頷いて、まずラルゴのほうを見た。

「さて、困ったことになっちゃってね。
この場所の結界が破られてしまった。
つまり、この場所が”開かれた場所”になっちゃったんだ。これは非常に困ったことで・・・」
「待て。ちょっと待て」

ユピが話を始めた途端、ラルゴがそれを中断する。
「お前さんがここにいること自体疑問なんだが、その前にもっと聞くことがある。
なんでここが情報屋の事務所とわかるんだ？
あと、俺はお前に会ったのは一回きりで、俺のことはなーんにも言ってない。
そこからハッキリさせてくれ」
おっと、とユピが声を出す。
そういえばそうだったと言わんばかりのリアクションに、隣に座っていたテレジーがため息をついた。
「うーん・・・
ごめん、君たちに自己紹介してもらったけれどさ、俺君たち知って

るんだ。
”星の記憶”の契約者ってこと。
俺は小説家だけど、世界各地を転々としていろんな事を調べ回っているんだ。
今はテレジーに協力してシュヴァイリンのまじないを解く方法を捜している」

ショウタは声をかけなかった。
というのも、ユピが”大罪人”と言うことを知っているのは今のところショウタだけだからだ。
その調べ回っているということも、自分たちを知っているというのも、当然のことだ。
テレジーはこのことを知っているのだろうか。今は確認さえできないが。
ただ黙って、ユピの話に耳を傾ける。

「さて、そんなこんなで。
ここが”開かれた場所”になるってことはね、シュヴァイリン達にとって非常に有利に働く。
普通、情報統制局の結界は高度魔術だ。
魔術に疎い人たちのためにも、ちょっと説明を。
魔術は簡単な順から、基礎魔術、応用魔術、高度魔術、禁術にわかれる。
で、高度魔術を施工できるのはプロの魔術師以上の存在、王宮魔術師とか高等学問所の人間とか。
そんでもって、魔術を破るってのは、その魔術以上の魔力が必要なんだよ。
でもそんなことするなんてすっごく疲れるし普通の人はやらない。
割に合わないんだ。
それをしてまでも結界を壊したのは場を不安定にさせるためにある。

あいつらは他にもやることがあって、そのためにここを襲う必要があった」

「わざわざそれをやってのけたってことか」

「・・・それも、他人にやらせた。

シュヴァイリンがタイム君っていう男の子に力を一時的に貸した。

それで魔術は破られた。

気の毒に・・・彼もそう、長くないね」

がたん、とクインが立ちあがる。

顔が青ざめていて、どういうことかと口が動こうとしたとき、

ユピが視線を斜め下に落とした。

その動きだけで、クインは心臓が走るのを感じた。

「・・・魔力に耐性のない人間があれほどの魔力を手にして、無事でいられるはずがない」

「そん・・・な・・・」

ショックを受けたのはクインだけではなかった。

ほんのわずかな時間しか会わなかったが、タイムは悪い奴ではない。

それよりも、家族と呼べる人を助けようと必死になっていて。

だが、その一部始終がシュヴァイリンによって仕組まれたことが、

ただただ腹立たしい。

ぎり、と手を握る。

ふと視界に何かを感じた。

テーブルに目線を持って行っていたテレジーが一瞬こちらの手を見た気がする。

ショウタはその手を緩め、ユピのほうを向いて、聞いた。

「ねぇ、シュヴァイリンは誰と行動をしているの？
なんだか誰か仲間がいるようなんだ。
その結界を壊してでもやることって、その連れの目的？」

その質問は、テレジーも感じていたことだ。
シュヴァイリンはあの時、その作戦の一部は知らないと言った。誰かに言われて行動をしているようなそぶりだった。
ユピは暫く黙った後、紅茶を一口飲んだ。
すっかり冷たくなっているそれにもう一度指を鳴らすと、温かな湯気が出た。
沈黙が部屋の中に蔓延したのち、ユピは意を決して言った。

「・・・シュヴァイリンに術をかけている者たちと」
「誰なの？それ」
「・・・個人の特定はまだできていない。目的は、まだ確信が持てない。
だけれど、あれだけの術を長い時間かけるには、術者はシュヴァイリンの傍から離れられないはず。
仲間という暗示をかけて傍にいるのかもしれないけれど、すべては憶測だ」

なんとも歯切れの悪い答え。
再び沈黙が流れる。

そういえば、そもそもどうしてユピはここにいるのだろうか。
「ユピはここに何しに来たの？」
「おっと。それを言うのを忘れていたよ。
実はさ、ここの結界を張りなおしにきたわけだ」
「そんなこと誰が頼んだ？」
「いいじゃんいいじゃん。

破れた結界をお偉いさん達に修理してもらうには時間とお金がかかるでしょ。
俺ただでやるよ」
「ユピさんって、まじない詳しいの？」
マリが訝しげな目線を向ける。
そんなマリに、ユピは胸を張って答えた。
「こう見えても俺は魔術よりまじないのほうに詳しいんでね。
ただ、ちょーっと大変なわけだ。
君たちの力が借りたいなぁ」

何考えているんだ、と疑うような目線を向けるのは、テレジーだけじゃない。
ツァイとルーマ、クインはきょとんとしているが、そう簡単にはいそうですかと言える話でもない。
ユピはそんな警戒心を感じ取ったのか、手のひらを招くように動かすと、へらへら笑いながら言った。

「まぁまぁ。
ここで俺に力を貸してくれた方が、後々の君たちにとってもいいことだよー。
大丈夫。無理なことはしないから。
えーっと・・・場所は広い方がいいから・・・」

誰も返事をしていないのに、ユピはやる気満々だ。
そこまでして急いで結界を張りたい理由は何だろうか。
ユピは立ち上がると、ぐるっと部屋を見渡した後、数回深呼吸をした。
そして、ぱんっと大きく自身の目の前で手をたたいた。
途端、部屋の中のすべての家具が消えた。
「なっ！！！？？？」

もちろん、驚いたのはラルゴだ。
こんなことをされるなんて聞いていない。
むしろ、これだけの膨大な量の情報がいったいどこへ消えたというのか。
ラルゴはそれを質問するよりも早く体が動いていた。
ユピのよれよれのシャツの胸倉をつかんで、ごんっと額をぶつけた。
眉間にこれでもかというほどしわを寄せて、ぎらぎらとユピをにらんでいる。

「お前は俺をクビにしたいのか！？」
「たんまたんま！
大丈夫だってこの部屋からは何も消えていないから！
言うならばこの部屋でありこの部屋ではない空間に・・・」
「魔術的解説はわかるか！破れた結界であってもあれを外に出せばどうなることか・・・！」
「うわぁ怖い怖い！テレジー助けて！」
「なんで」
「マリちゃーん！詳しく！」
「えー。
詳しく言ったところでたぶんラルゴ君聞かないよぉ」
「ラルゴ、落ち着いて。
とりあえず大丈夫なんでしょ。さっさと終わらせよう」

ショウタはうーんと伸びをすると、ユピの前に立った。
あと寸でのところで殴られるところだったユピにとってはある意味助け舟。
ラルゴの腕から逃れると、彼は懐からチョークを取り出す。
描くは六芒星。その一端に立つと、ユピはまずは自分の対面にショウタを呼んだ。

「ショウタはそこに立って」
次は自分の右。
「そこはクインちゃん」
自分の左。
「そこはツァイさん」
次に、クインとショウタの間にマリを呼ぶ。
「マリちゃん、そこね。で、あっちにラルゴ」
そして、最後の場所。ショウタとツァイの間にラルゴを呼んだ。
「よし、これで完成」
「ねぇーユピ。僕たちは？」
余りになったルーマが円の外から尋ねる。
ユピはんー、とうなった後、
「テレジーとルーマ君はそこで待ってて」
とだけ言った。
しぶしぶ部屋の隅に座ったルーマは、ぼんやりとそのさまを見届けることにした。

「君たちはただ黙ってここで目つぶっててくれればいいから。
さぁーって、一仕事するぞ」

ユピはいちいち独り言のようなセリフを吐く。
ショウタは言われた通り目をつぶる。が、薄眼を開いた。
思ったより全員素直で、しっかりと目をつぶっていたので、つぶらない自分は性格が悪いと思う。
ユピも目をつぶっていて、その口がとても速く動いていて、何を喋っているのかはわからない。
こうなることを誰が想像できただろうか。
ショウタはようやく目をつぶり、どうしてこうなったかを考えた。

そして暫く経った。
ずいぶん深い思考の海で溺れていたらしい。
揺さぶられてようやくショウタは目を開けた。
「ショウタ、もういいぞ？」
声をかけたのはツァイで、気がつけば全員がこちらを見ている。
「あれ？」
「お前、いいって言われてもずーっとそんままだから、立ったまま寝たかと思ったぜ」
「・・・そうかもしれない」
「器用だねーショウタ」

辺りを見渡せば、事務所は元通りだった。
家具はすべて戻っていて、割れたガラスも破片は落ちていない。
「何か変わったっけ？」
「うーん・・・最初のまじないとは違うまじないが組み込まれたって感じ？」
そう尋ねたのはマリで、ユピはその答えに感心する。
「さすがだねマリちゃん」
「それくらいわかるもん。
でも、一度開かれてしまったこの空間が再び閉じることはできない。
外からの干渉を防ぐためには、これだけじゃ不十分、でしょ？」
「いやぁマリちゃんは王宮魔術師にでもなれそうだ。
ま、できることしかできないけれど、やらないよりはましだよね。
そうだ。できなくたってやっていた。
ん、俺今かっこいいこと思い付いた！
できるできないじゃなくて、やるんだ！くぅーいいね！」
「・・・」

一人で盛り上がっているユピをそろそろ止めようか、と思ったのだ

ろう。
テレジーが後ろから蹴り飛ばすと、彼はようやく黙った。
なぜ彼はここまでめでたいのだろう。
自分たちの旅の行く末にかかわってくる”大罪人”なのに。
「で、あんたはこれからどうするんだ？」
地面に倒れるユピの前にしゃがみこんで、ラルゴが尋ねる。
彼は暫くうーん、と考えた後、立ちあがった。
「そうだね。俺はこれからスーロン大陸に行かなきゃならない」
「スーロンって、ツァイの生まれた国のフェルデンがあるところ？」
「そうだな」
「何しに行くんだ？」
「言ったでしょう。俺はまじないを捜しているんだって。
かわいそうなテレジーのお兄さんを正気に戻してやるためにね」
「俺を憐れむな」
「そんなつもりはない！
さて、そういうわけで、俺は非常に忙しい。また会おう！
ウルルをよろしく頼んだよ」
そんなことを言って、ユピが立ち去ろうとするもんだから、慌ててショウタは引き留めた。
「待って、ウルルは持って帰らないの？」
「いやー、ウルルは君になついているみたいだから、親交代だ」
「無責任な親だったんだね」
「そんなこといわなーい。
じゃあショウタ」
去り際、ユピはショウタに耳打ちをした。

「テレジーのこと、目を離さないように見ていてくれよ」

ショウタはふいとユピの顔を追った。
どうしてそれをわざわざ耳打ちしてまで言う必要があるのか。
無責任なくせに、そこは親を気取りたいのだろうか。
彼はもう一発へらっと笑って、そのまま事務所を出ていった。

嵐が去り、ラルゴはソファにどっかりと腰を下ろした。
その顔は憔悴しきっていて、それ以上に何か悲観的なことを考えているような感じがする。
一番最初に気がついたのはルーマだった。

「どうしたの？」
「どうしたもこうしたもねぇよ。
一大事だってんだよ。
あぁもー、こんなんだったら局長セミナーちゃんと出てりゃよかったぜ。
いや、それよりも魔術の勉強を真面目にしておけば・・・後悔先に立たずってこういうことか」
がしがしと頭を掻いて、ラルゴは立ちあがった。
上着を羽織り、帽子をかぶり、扉の前に立った後、ようやく振り返った。

「わり、ショウタ。碑文に行くの、明後日にしてくれねぇか？」
「え？なんで」
「お偉いさんに報告に行かなきゃならんのだ。
一応俺、局長なんでね」
「今からどこへ行くの？」
「そんなこと言えるかよ。トップシークレットだ」
「ラルゴさん、もう遅いですよ。そんなに遠い場所なんですか？」

「遠い遠い。今から出発して帰ってくるまでを見越して明後日にしたいんだよ」

仕方がない。泊めさせてもらっている以上、それぐらいは飲まなければならない。

ショウタはうなづいて、ラルゴを見送った。

その後、クインがショウタの傍に来た。

伏し目がちに目を泳がせる彼女が言いたいことが、なんとなく想像できる。

「ショウタさん、私も、明日でかけていいですか？」

「タイムさんのところ？」

「・・・いったところできっと何もできないんでしょう。

ただ、様子だけは見たいと思って」

「いいよ」

クインは小さく頭を下げて、ありがとうございますと消え入りそうな声で言った。

そして翌日早朝。

ショウタが目を覚ますと、クインとテレジーの姿はなかった。

人の少ない事務所は、ショウタにしてみればやはり変化がわからなかった。

往々にして、見ているものは変わっていないように見えても、実は・・・ということがある。

変化は常にあり、それは目に見えるものとは限らない。

今のところは。

45話　明りのない街に

その日は横殴りの雨で、窓枠が悲鳴を上げていた。
クイン、テレジーはちゃんと傘を持って行っただろうか。
ラルゴがいるところは雨は大丈夫だろうか。
そんなことをぼんやりと考えながら、窓の下のソファから外を眺めるだけで時間は無駄に過ぎていく。

「酷い天気。ま、街中でも遊ぶようなところはないから、退屈なのはあんまり変わんないと思うけれどねぇ」
そう言って、両手にマグカップを持ったマリがショウタの横に座った。
一つをショウタに手渡すと、彼女は両手で自分のカップを包み込んで、ふぅふぅと冷ます。
「確かに。
そういえば、他の局員の人たちいないのってなんだか不用心な気がするな」
「きっとまだ結界が破れたことを知らされていないから、帰ってこないんじゃないかな。
だって普通だったらここはすっごく安全な場所だもの」
「安全、ねぇ。まぁそうだったね。今はどうか俺にはわからないけれど」

ショウタは部屋をぐるりと見渡す。
時間はお昼過ぎ。
ツァイは部屋の隅で筋トレを始めている。かれこれ一時間ほど体を動かしているが、飽きないものだ。
ルーマはテーブルの上に二丁拳銃の部品を広げてメンテナンスを行

っていた。
マリも先ほどまでは部屋の中の魔術書を読んだり調べたりしていたが、さすがにまだまだ理解できないこともあり、飽きてしまったらしい。
ショウタも漠然と今までのメモ帳を眺めていたり、探知機をいじったりしていたが、やはり今いない人のことを考えては手が止まる次第。
カップから口を話して、ため息をひとつつく。
それぐらいのゆるさで、ショウタの口から言葉もこぼれた。

「俺、まじないの勉強でもしてみようかな」
「どうしたの？」
「いや、なんとなく・・・だけど。深く考えてない」
「なにそれー」
「マリ、魔術とまじないの違いって何？」

突然の質問に、マリは驚く。
我ながら答えに困る質問をしてしまったと、あとからショウタは思った。
なんとなく違うことはショウタにもわかるし、マリにももちろんわかっている。
しかしそれを説明することはまた別。何気なく使っていることこそ、定義を説明することは難しいのだ。
マリは暫くうーん、とうなった後、彼女にしては珍しく、自信なさげに言った。

「たぶん、だけれど・・・
まじないは魔術式が必要で、対象、目的、動作、範囲、条件、えっと・・・他にもたくさんのことを順番を間違えないように組み込むことだと思うの。

昨日ユピさんが書いた魔法陣もね、たくさんの魔術式が入っていたの。
まじないはある程度の魔力は必要だけれど、あまりそこは重要じゃないはず。
でもね、教科書とか本とかに載っているまじないは誰かが作って一般化されたもの。
まじないは基本的な考えから派生するものだから、その種類はもう無限大にもある。
あ、魔術式って別に書かれていなくてもいいんだよ。言葉で描く人だっているし、魔力で描く人もいる。
これがまじない、かなぁ・・・」

自信なさげに言った割りにはしっかりとした口調で答えたので、シヨウタはやはりマリは魔術に関しては天才なのだと再認識する。
「じゃあ、魔術ってのは？」
「これはちゃんと言えるかな。
魔術は人が魔力を介して使える力の総称だよ。
魔術っていう大きなひとくくりの中に、まじないと属性魔術ってのがあるんだよ。
で、たいてい魔術って言ったらその属性魔術を指すの。
人は生まれたときからその魔力と相性のいい属性っていうのを持っているの。
それを自分の意思を使って何度も何度も修行をして、魔力の具現化をすると、属性魔術が使えるようになるの。
テレジー君の氷も、クインちゃんの水も、私の炎もそうやってできたの。
で、それは魔術式はいらないの。まじないは魔術式の必要な魔術だから、そこが大きな違いだね」
「なるほど。
ここまで大変だと魔術が使える人ってやっぱり珍しくてすごいんだ

なぁと思うよ」
「でも、魔術学問所は医術学問所よりは多いと思うよぉ。
私は将来いっぱい勉強して立派な魔術師になって、あわよくば王宮
魔術師になるの。
国王様お抱えの若くてかわいいカリスマ魔術師に」
「自分で言うんだ・・・」
「そんでもって国王様に見染められて、玉の輿に乗れたら・・・」
ほぅ、と妄想に浸るマリ。
頬に手を当てて、将来の自分の理想像を頭に浮かべているのだろう。
非常に幸せそうだ。
そんな彼女に水を差すような発言をショウタはためらいなく言った。

「でも、マリは教会継ぐんじゃないの？」
「・・・べ、別に義務じゃないもん。世襲制じゃないよ」
「兄弟いないの？」

ぴたり、とマリの動きが止まる。
何か悪いものに触れたか、と思った時、ツァイがいつの間にか近く
に来ていた。
にっこりと外の天気とは真反対の太陽のような笑み。
時々、何を考えているかわからないそれをショウタに向けている。

「そろそろお昼ご飯にしようか。
ショウタ、何が食べたい？
昨日のうちに買いだめした食材で作れるものなら何でも言っていい
ぞ！」

ショウタは気まずそうに頭を数回掻いた。
ここは会話に乗るのが一番いい。

「・・・そうだな。アイマナの郷土料理みたいなのって作れる？」
「ここにある本なら読み放題だからな。今調べてみよう！暫く時間をくれるか？」
「もちろん」

そういうと、意気揚々とツァイは簡易キッチンの前に立った。
彼女があのタイミングで声をかけたことの意図に気づかないほど、ショウタは無粋ではない。

「うーん・・・」
「どうしたの？ルーマ」
「グリスがない。どうしよっかな」
「グリスないとどうなるのぉ？」
唸っているルーマにショウタが声をかけると、マリもいつもの調子に戻って会話に入ってきた。
「ま、いっかな。ちょっと性能が落ちる程度」
「死活問題じゃん」
「どうにかなるなる」
「思ったけれどさ、ルーマ君って結構いい加減だよね」

ツァイが昼食を作り終え、後は食べるだけというとき、ちょうどいいタイミングでクインとテレジーが帰ってきた。
一応傘を持っているようだったが、それでも二人は頭から足先までずぶぬれだった。

「お帰り。まずはタオルだな」
そう言い、ツァイは二人にタオルを手渡した。
少しだけ震える手でそれを受け取ったクインはタオルで顔を抑え、次に髪の毛を拭き始めた。
結局それだけで十分であるわけがなく、シャワールームに向かおう

とする。
その途中、ツァイにありがとうございますと言った後、だんまりになってしまった。

頭からタオルをかけているだけのテレジーは暫く突っ立ったままで、マフラーとコートと靴を脱いだ。
そのまま洗面台の上でぎゅっとコートを絞れば、どぼぼと水が出てきた。
「ねぇ、タイムさんはどうだった？」
ショウタが尋ねると、テレジーはあぁ、とけだるそうに声を出した後、丸椅子の上にコートをかけた。
「別段変わったことはなかった。
いたって普通だ。いきなりそう変化が出るわけではないということか。
結局あの医者は死にかけた子供の治療のついでにさりげなくあのハゲを検診したが、わかるわけがあるまい。
あいつの見解は、少しずつ体の機能に障害をきたし始めるだろう、ということだ。
どのみち魔力が原因の病なら対症療法にしかならないしな」

淡々と言っていることが末恐ろしい。
テレジーが手のひらをぱんっと叩くと、ずぶぬれだったシャツやズボンが乾いた。
彼は持っていたタオルで雑に頭を拭いて、ソファに腰を下ろした。
抑えているようだが、疲労感は隠し切れていない。
ツァイがテーブルに昼食を並べ終え、食べるように促しても、彼はそのままソファに横になってしまった。
仕方なく、シャワーから上がってきたクインを待って、５人で食事を始めることにした。
その間もクインはタイムのことを喋らず、また、誰もが彼女にそれ

を尋ねなかった。

雨は夕方になっても止まなかった。

クインは読書、テレジーは昼寝を貫いていたが、朝から暇を持て余していたお子様二人は退屈そうにしていた。
遊び道具なんて持ち歩かないので、会話だけで時間をつぶせるほどのものも持ち合わせていない。
時折ツァイがかまってあげるが、現在彼女は今晩の夕食の献立を調べるのに専心している。
「テレジーの顔に落書きしたらどうなるかな？」
「くびちょんぱされちゃうよぉ」
「何くびちょんぱって」
「首と体がさよならしちゃうこと」
「あぁ。首はねね」
恐ろしいことを考えているさなか、扉が開いた。
ラルゴが帰ってきたのか、と思ったが、入ってきたのは知らない人間たちだった。
ぞろぞろと入ってきて、その光景にショウタたちが口をあんぐりと開けている間にも彼らは手際良く部屋に散らばった。
なんとなく、殺伐とした空気が流れている。

「あ、ショウタさんたち、どうもですー」
突如声をかけられる。人だかりの中からぴょこっと跳ねた寝癖が見えた。
「キャスランさん。彼らは一体？」
「ここの局員です。世界各地に散らばっていた、ね。

局長からの報告で慌ててみんな戻ってきたんです。そろそろスカーラーも来ると思います」
「何それ」
「結界師（スカーラー）です。破られたっていう結界を・・・」
「キャスラン副局長！なんか知らないんですけれどまじないかかってます！」
「結界が新たに張られています。どちらかというと無理やり上からかぶせたって感じです！」
「ていうか副局長、彼ら誰っすか！？」

あっという間に事務所内は混乱しはじめた。
個人行動の多い彼らがまとまるとこうなるのか、と思っていたとき、ようやくショウタたちが待っていた人物が部屋の中に入ってきた。
「うぁー・・・酷い人口密度だな」
「ラルゴ、お帰り」
「なんだぁ。冷静なんはショウタたちだけかよ」

明らかに疲労しきったその表情は、ラルゴを2，3歳老けさえてみせた。
身だしなみに気を遣う彼には珍しく、ピンク色の鮮やかな髪の毛はぼさぼさで、ジャケットにも埃が付いている。一体どこを通ってきたのか。
局長の登場に、キャスランを始め、局員たちが目を丸くする。
そして口から矢継ぎ早に質問が飛び出る。

「局長！1年ぶりですね！」
「どういうことか説明してください！」
「彼らはどうしてこんなところにいるのですか！？」
「もしかして結界を破ったのは彼らですか！？」
「局長今までどこ行っていたんですか！」

「いつになったら有休くれるんですか！」
「局長！自分が貸した銀貨3枚はいつ返してくれるんですか！？」
「この結界は一体誰が張ったんですか！？」

あっという間に局員たちに囲まれてしまったラルゴの姿がもう見えない。
このままここにいたって何ができるわけではないな、とショウタは思ったのか、そのまま事務所から出ようとする。
だが、外は雨。今日の予定もない。
結局ラルゴが事情説明を終えるまで、ショウタたちは居心地悪く部屋の隅に固まっていた。
時折向けられる視線が嫌だったが、居候の身である以上黙っているしかない。
殺伐とした空気にマリが少しだけ怯えている。
暫くすると話が落ち着いてきたのか、少しずつ人が出ていく。
誰もが腑に落ちない表情をしていたのが気になる。
最後に残ったキャスランだけが、ショウタたちに声をかけた。

「にわかには信じられない出来事だと思います。
でも、今回の件は全世界に点在する事務所での管理体制の徹底につながるでしょう。
ひとまず安心はしました。皆さんが無事でなによりです」
「俺たち明日ここを出ます。ほんと、お騒がせしてすいませんでした」
ショウタが頭を下げると、キャスランは首を横に振った。
「ここの事務所が襲撃されたこともあってはならぬことですが、なによりもここを襲った人のことが漏れることもあってはなりません。
世界が混乱してしまいます。
他の局員にもS級機密と言っておきました。

ですが、なんだか嫌な予感がします。
みなさん、気をつけてください。私も調べてはみますが・・・」

キャスランの不安はおそらく的中するだろう。張りつめた空気がびりびりと皮膚を刺激している。
何も言えなくなったショウタたちに、キャスランはより一層表情を曇らせた。

その夜雨はようやく止み、静かになった。
皆が眠る中、ショウタは事務所を出て一旦階下に降りた。
金物屋の親父も眠っているのだろう。店舗の中は明りがない。
外梯子に手をかけて昇る。濡れた梯子で手が滑りそうだ。
屋根にあがるともちろん先客あり。
ショウタは彼に用があったのだ。

「ラルゴ、改めてお帰り」
「おう。なんだお前、お子様は寝る時間だぜ？」
屋根に寝そべるラルゴは右手を上げただけで、体は起こさない。
その横にショウタは座ると、月も星も見えない空を仰いだ。
夜でも厚い雲のせいで、にぶい色をしていた。
暫く沈黙した後、ショウタが先に口を開いた。

「世界の秩序は国際司法取引所。
世界の制御は国際情報統制局ってよく聞くよね。
情報屋がうまいこと情報をコントロールするから混乱は起きない。
ま、その全部が全部いいことかどうかの議論は置いといて。
この二大柱と国際通貨換算所がえらいことになったら、世界はとん

でもないことになるかもしれない」
「お前もう少しは語彙力増やせよ」
「あいつ・・・何がしたいんだろう」
ショウタのいうあいつはもちろんシュヴァイリンだ。
ラルゴはさぁな、と言っただけだ。
たったそれだけしか言わなかったので、きっとラルゴはこのことを延々と考えていたのだろうとショウタは思った。
無理もない。一応自分が所属する場所が襲撃されたのだ。
ショウタは意を決して彼に問うた。

「あのさ、ラルゴ、旅のことなんだけれど・・・」
「行くぜ？もちろん」
ショウタの心配をよそに、ラルゴはきっぱりと言い放った。
それは何よりも助かることだが、こんな混乱を放っておいていいものか。
ふと、ショウタはラルゴにとってのこの場の価値が何なのか気になった。
彼は以前ショウタにこう言った。

願いを叶えるために、力を手に入れるために、望むものを知るために自分は情報屋になったのだ、と。

結局彼にとって必要なのは場ではない。それは上に立つ者としては責任を問われるような内容だが、それさえも含めてラルゴの情報屋という場なのだろう。
「なんだか、ラルゴらしいね」
「そうか？」
「そうだよ。明日早いから、ラルゴもさっさと寝なよ。疲れてんでしょ？
歳には勝てないっていうからさ」

「余計な御世話だコノヤロー」

ラルゴにあいさつを終えて、ショウタは梯子を下りた。
少しだけあくびが出て体が緩んだ瞬間、足が滑った。
「おわっ！」
大した高さじゃないから死ぬことはないだろうが、怪我するかもしれない、と構えた。
やっちまったな、と落ちながらもショウタは頭の中であきらめのため息をついた。

だが、いつになっても体に衝撃が走らなかった。

46話　自問自答

「また・・・かよ・・・」

独り言が耳に聞こえて、ショウタははっとした。
今までは夢の中のように声を出したり己の意思で動いたりすることはどこか他人事のように感じていたが、今回は違った。
今回は起きているときと同じように体が自由に動きそうだと思って、ショウタは白い空間の中で体をひねった。

ふわふわとした心地に思考を奪われそうになるが、そうなるわけにもいかない。
暫くさまよっていると、ようやくみつけたそれ。
何もない空間の中にだけ存在する二人。

「今日は二人並んでるよ・・・」

白いフードと、黒いフード。子供ぐらいの背丈だということに気付いた。
お互いに今回は背中合わせだ。
今回でこれを見るのは三度目。
一体どうしてこんなのを見るのか、ショウタは今日こそはそれを知ろうと思い、声をかけた。

ねぇ君たち、ここは一体どこ?俺は一体どうしてここにいつも招かれるんだ?
・・・もしかして白昼夢?

声は頭の上から出てきた。なんとなく気持ち悪い。

ショウタに反応したのは、黒いフードの子供だった。
顔を上げることなく、声だけで性別もわからず、淡々とした質問をされた。

『貴方は誰?』

質問したのはこちらだ。
ショウタは最初むぐ、と言葉をつぐんだが、そういえば名乗っていなかったことに気づく。
変なところで律義な性格だ。

悪かった。俺の名前はショウタだよ。

ようやく質問をし直そうとしたが、ショウタが口を開くよりも早く、白いフードの子供が今度は質問をした。
ちなみに白いフードの子供はショウタのほうを見てはいないのだが。

『貴方は誰?』

2度も聞かれると、ショウタはその意図をすぐに理解した。
だが、答えられるわけがない。
ショウタは暫く黙った後、得体のしれぬ存在に素直に己の身の上を話した。

俺は記憶がない。それを取り戻すために旅をしているんだ。
だから今俺は俺がどこの誰かを知らないんだ。だから君たちの質問には答えられない。

二人はショウタの答えを聞いて、沈黙の後、声をそろえて言った。

同じ言葉を。

『貴方は誰？』

「寝相が悪いな。そこで寝たいのならお前の意思を尊重するが」

別のところからの声でショウタの風景が一変した。

暗い。そしてなにより・・・

「つめたっ！なんだか背中冷たいんだけど！」

「・・・」

とび起きて背中を確認すると、びっしょり濡れている。

その時になって初めて自分が地面に寝ているのに気づいた。

ここがどこか把握しようとする前に、上からラルゴの声がした。

「何してんだよ、あんま夜中に騒ぐなて。近所迷惑」

「・・・こいつがびしょぬれの地面の上で寝ていたから起こしたところだ」

「は？ショウタ、お前とっくに降りて行ったじゃねーか。何してんだよホント・・・」

「・・・？」

かんかん、と今度はラルゴが梯子を下りてきた。

腕を組んで、びしょぬれになって地面に座ったままのショウタに呆れ気味のため息をついて。

「もういい時間だぜ。こんなところで寝てねぇでさっさと堅い床の上に敷かれた薄い布団の中で寝ろや。

ここよかました」
「好きでここで寝たいなんて誰も・・・」
「おうおう、じゃあな。風邪引くなよ」

混乱するショウタを無視して、ラルゴは事務所に入っていった。
そこにいるテレジーさえも放置して、だ。

ショウタはのそりと立ちあがり、濡れて泥のついた手を払った。
どれほど自分がトリップしていたのかなんてわからない。
隣にいるテレジーに聞いてみる。

「俺、いつから寝てた？」
「さぁな」
なんて味気のない答えか。
「じゃあ君はなんでここにいたのさ」
「別に」

はぁ、とため息をひとつついて、ショウタは先ほどのことを思い出す。
頭に残っている、あの言葉。
というか、それしか聞いていない。
どうして自分はあんな短時間にあんな場所に引き込まれたのか。
いや、短時間であったのは非常に助かることだったが、それならそもそも呼ばないでほしかった。
さらに言うと、あんな質問をされて、あれ以上の答えをどうやったら準備できるというのか。
このまま一人で考えても別にかまわないが、たまたまそこにいるのなら、意見を乞うのもまた一つ。
ショウタはテレジーに聞いた。

「ね、俺って本当、一体誰だったんだろうね・・・？」

あの二人は、自分がどこの出身でどこの誰かを求めているわけではない。

もう一つの意味で、自分を誰かと尋ねたのだ。たぶん。

突然の質問にテレジーはあからさまに不快そうな顔をすると、テレジーはショウタの頭からつま先までざっと目を通す。

テレジーは理解している。ショウタが聞いた言葉の意味を。

しかし、その答えを最初から期待はしていないから、このまま冗談だよ、といって立ち去ろうとした。

が、その前にテレジーが口を開いた。

やはりテレジーのことは理解できない。興味がない振りして返す時は返すのだ。

「そうだな。

お前は頭こそいいのに使い方がもったいない気がする。

一歩引いた、冷めたふりするくせに実は興味本位と好奇心を持っているからちぐはぐで奇異にみえるな。

己の感情よりも理知的で理性的な行動を取りたがる。が、あの医者とはまた違った感じがする。

言うならば、いい加減で中途半端だな。

ま、そういう人間だな。お前は」

「俺の性格のことを聞いたわけじゃないんだけれど。

しかも何気に結構傷つくね。それ」

「そういうことだろう？」

ショウタが首をひねると、テレジーはショウタの横をすっと通る。

すれ違って、ショウタは振り返った。

彼は振り返らずに言った。

「誰であるかという質問にお前は俺から記憶を失った一人間だ、とでも言われたかったか？
お前そのものを決めるのは出身地でも生まれおちたタイミングでもない。それは単なる個体の情報だ。
結局記憶を失っていようが持っていようが、誰かという質問をされれば、同じことだろう」
「わかってるよ。でもさ、それは今の俺じゃないか」
「じゃあなんだ？お前は記憶を失うと性格すべても失うと思っているのか？
とはいっても、俺は記憶喪失なんてなったことがないから想像の域を出ないが。
お前が考え、選んだその行動と意志、それはお前の本質じゃないか。
そういうもんはそう簡単に変わるものか、と思うが」
ショウタは返事をしなかった。
テレジーが屋内に入った後も、ただ立ちつくしたまま。
濡れた地面に街灯の光にあてられた自分の影が見えた。
いびつなそれに、ショウタはつぶやいた。
「でもさ、
それは生まれてからの時間の中の経験と、環境に対する俺の反応に寄るんじゃないかな。
何もない今の俺に、俺をどうしたいかなんて、そんなの無理だよ。
だから、やっぱり元に戻るしか方法はないんじゃないかな・・・」

翌朝。
雨はやんだが湿度は高く、気温も上がり不快指数はかなり高かった。
そんなことで文句を言っている余裕もなく、一行は中央駅からシャリム行きの電車に乗り込んだ。
向かうはシャリムの山。
小一時間ほど揺られ、昼前にシャリム駅に到着した。
駅のホームは水たまりというか、そこはもはや浸水状態だった。

「びっしょびしょ・・・」
「水はけ最悪だね」
「無人駅なんだ。手入れなんて誰もしねぇよ」

降り立てば、そこは非常に困窮した風景が広がっていた。
駅前通りの店はすべてシャッターが閉まり、そこを抜けてもぽつぽつと傾いた家が立ち並ぶ程度。
生活水準は非常に低そうだった。
そしてなにより、テセガニア以上に人の視線を集めた。
身なりの貧しそうな人たちが、ぎらぎらと光る目を彼らに向けて、でも最も遠い場所から彼らを見ている。

暫く歩いた後、ゴミ山が目に飛び込んできた。
旧世代の家電や生活用品、生ゴミや動物の死骸がいっしょくたに積まれている、近隣のゴミ捨て場と言っても間違いない。
マリが顔を真っ青にして今にもぶっ倒れそうだ。
綺麗なところで育った彼女には少々刺激が強すぎる。
衛生面は最悪。こんなところに神聖なる碑文があるなんて考えたくもないことだ。

「ショウタ、ここに本当に碑文あるの？」

鼻をつまみながら、こもった声でルーマが尋ねる。
ショウタもその異臭に顔をしかめて、うーんと唸った。
「1年前以上に汚いや。
まぁ・・・仕方ないか。そういう場所だし。
中も入口近くはそこそこ汚くて臭いと思うけれど、行くしかないね。
行くよ」
「ほ、本当に行くの・・・？」
真っ青になったマリが涙目で尋ねる。
「仕方ないでしょ。何のために来たのさ」
「そう、だけど・・・これは聞いてない・・・」
「マリさん、大丈夫です。私エチケット袋たくさん持ってますから、安心してください」
「そういう配慮いらないよ・・・」

ぬるぬるとした、濃い色をした水たまりを踏めば足の下から頭の上に鳥肌が走った。
中に入れば臭いがこもっていて、思わず胃から何かがせり上がってきそうだ。
ショウタは以前ここに来たことがある。
その時は一人だった。
一人で調べ事をしていたら、この国に帰ってきていた情報屋のラルゴと出会った。
そういう思い出も思い出しつつ、ショウタは奥へ奥へと足を進める。

すぐ真後ろにラルゴ、少し離れてテレジーが歩き、さらにその後ろはルーマ、マリ、ツァイ、そしてクインが歩いていた。
足元が不安定で、ぬめる地面に悪戦苦闘しているのがわかる。

だが、大分奥へと歩いていけば、その匂いもだんだんと薄れていく。

彼らが入ったのは山に隣接している南側の洞窟であり、厳密に言うとゴミ山の中に入っているわけではない。
足元もだんだんとしっかりしてきて歩きやすくなってきた。
気温が下がり、肌寒い。
肺いっぱいに空気を取り込む。思った以上に汚れてはいない。
ちらりと足元に目線を移せば、柔らかく青く光る石。
ブルーサイトルには空気を浄化する力があるのだろうか。
考えたが、ショウタはそういうのに興味がないので、その考えに答えを求めようとはしなかった。

「ついたよ」

開けた場所にたどりついた。
そこはジャスリーンの碑文があった場所とほとんど変わらない光景だった。
真ん中にぽつんと置かれている碑文にショウタは近づいた。

「また何か出てくるかな。
テレジー、ちょっとこれ触って」
「なんでだ」
「以前君がここを触ったら変なことが起きたじゃん。というわけでよろしく」

しぶしぶ、とでも言うのだろう。
テレジーはコツコツと靴音を立てて、碑文の前に立った。
ばっと両手を碑文に向ける。
しばらくどちらの手で触るのか迷った挙句、彼は利き手である右手をついた。
が、何も起こらない。
ルーマの肩に乗っかったウルルがキュウと鳴き声を上げる以外、無

音空間だ。

テレジーは右手を引っこめた後、何事もなかったかのように仕切り直し、左手を乗せた。
が、やはり何も起こらなかった。

もう一度テレジーは手をひっこめた後、踵を返し、
ショウタの頭をグーで殴った。

「痛いし！」
「当然だ。痛いよう殴ったからな」
「えー・・・どうすりゃいいんだろう・・・」
「ショウタさん、碑文に何か書かれてはいないのですか？」
「ちょっと待ってメモ取り出す」
「おい、前みたいに古ニニ語とか書かれていないのか？解読してくれよ」
「ここはジャスリーンよりも碑文の保存状態が悪い。
何かが書かれていたとしてもこの状態では読めん。掃除するなら読んでやってもいいが」
「やだねめんどくせぇ。ショウタ早くしろ」
「リネさんの言っていたことは碑文を解読すること、でしたが・・・」
「ねぇー、早く教えてよぅー」
「わかったわかった！はいはい見つかった！
えっと、まずは暗号の部分ね。
”繰り返される命と魂に紅い記憶が重なるとき、再生は訪れる。”
で、次が古ニニ語の部分。
”水鏡に映るは誰の顔か。浮雲に映るは誰の顔か。
願いの先にあるのは、どの顔か。”
・・・以上」

「短いな！」
「あー、そういやそんな内容だったな。
意味わからなすぎて記憶にも残ってなかったぜ」
「顔・・・？顔ってなんだろう。僕たちの契約と関係するのかな？」

「ショウタ君ー、どうしよう？」

取り出したメモを読み終えた後、ショウタは声をかけられていても
固まったままだった。

意味は今読みなおしたってわけがわからない。
だが、どこか心臓の底が冷える気がしたのだ。
まるで自分が誰かを問われているようで、落ち着かない。
この内容と、あの夢の中が変にリンクしそうで。
でも自分はそれを望んではいない。
ショウタは静かにメモ帳を閉じた。

ふぃー、と変な声でため息をついたラルゴは、お手上げとでもいう
ようなポーズを取って言った。
「まぁよ、短いにしろ何にしろ、一応解読は済んでいるわけだ。
まさかこれの意味を理解しろなんて言うんじゃないだろうな？
情報が少なすぎて詮索しようもねぇ」

そしてそのまま寄りかかるように碑文に手を付いた。
すると、ジャスリーンの時と同じく、ブルーサイトルのように淡く
碑文が青色に光った。

「なんだぁっ！？」

驚いたのはラルゴだけではない。

先ほどテレジーが触ってもうんともすんとも言っていなかったそれが反応を示している。
だが、それは光るだけで次に何かが起ころうとするわけでもない。
ラルゴはそのまま手を離さず、ただ光るそれを見て、ショウタに言った。
「おい、こりゃあれと同じだな」
「ジャスリーンと一緒だ。
テレジー」

ショウタがテレジーを呼ぶ。
恐る恐るテレジーがそれを触れば、光が空間内に満ちた。
余りの眩しさに目が開けられない。
遠くでクインとマリの悲鳴が聞こえた気がするが、なによりも遠い。

この空間内でたった一人ぼっちになったような気がした。
確か自分は碑文の近くにいたはず。
手をがむしゃらに突き出せば、ラルゴかテレジーに当たるかもしれない。

と、指先に触れたのは布の感触。
その奥に手を伸ばせば、腕と思しき感覚。
そこを握った途端、ショウタは息が詰まる気がした。
体が吹き飛ばされそうな感覚に陥ったと思ったら、まるで肉体は後ろに、残ったのは魂だけのようで・・・

「い、いやだっ!!!」

ショウタがそう思ったとたん、それは口に出ていた。

そして。

いつから目が開いていたのか、ショウタには分からない。
ただ、またしても目の前に現れた女性に、今しがたの経験はなんだったのか、と疑いたくなる。

また、リネと再会したのだ。

冷や汗を拭えば、同じように呆然と立ち尽くすメンバー。
だが、一人だけ違った。
リネが座る碑文にもたれかかるようにして気を失っているテレジーに気がつけば、ショウタは血の気が引く思いがした。
「テレジー！」
『御安心を。少し疲れて眠っているだけです』

ふわりと彼女は碑文の上に立ち、光の宿らない瞳をショウタのいるであろう方向に向けた。

『さて、大分待ちくたびれてしまいましたが、御苦労さまです。
これで二つ目の碑文を解読したと認めましょう。
さて、今までの旅はいかがでしたか？
これほどまで時間をかけたのです。お互いがどういう人間か、お分かりになりましたか？』

淡々とした口調で問う彼女に、一番最初に声をかけたのはルーマだった。
暫く唖然としていたショウタたちは、未だにリネの質問を脳内で処理するのに時間がかかっていた。

ルーマは早々に頭の中をすっきりさせていたらしく、リネの質問について考え、己の意見を述べた。

「なんていうか・・・それは無理な話だと思うんだ」

小首を傾げたリネは、ルーマの次の言葉を大人しく待った。
ふわりと地面に降り立ち、テレジーの横に座った。
近くに降り立ったのをみて、大分リネは小柄だと気づく。
ルーマは小難しいことを考えるような顔をして、暫く首をひねったあと、言った。

「僕たちはその、出会って間もないし。
いや、時間ってのはあんまり関係ないとは思うよ？でもね、
僕たちはその・・・普通の友達じゃないと思うんだ。なんていうか・・・その、言いたくないけど。
でも、それでも僕たちは僕たちなりの関係を築けたとは思っているし、これからもそうなるんじゃないかな。
みんなは、どう思う？」

ルーマが後ろを振り返る。
一番最初にツァイが満面の笑みで首を縦に振った。
次にマリが少しだけ考えた後、そうだと思うよぉ、と、いつものような口調で言った。
ラルゴが頭を掻いて、そんなもんかねぇと言いながらもルーマの言葉に賛同する。
ショウタも首を縦に振った。
最後にクインが首を振らずに笑みを向けたのを見て、ルーマは再度リネに向き合った。

「こんな感じだけど」

その答えにリネが納得したのかどうかはうかがい知れない。
結構ぼやけた答えだったが、彼女は再び碑文の上に浮くと、目を細めて笑みを浮かべた。
右手の掌を自身の胸の前に置き、透き通るような声で彼女は言った。

『それでは、追加でお願いを一つ。
貴方方の願いは、誰のための願いですか？
それを見つけてくださいね』

それはどういうことか、と問いただす前に、再び白い蛇のようなものが体を取り巻いた。
これは再び外に放り出されるということ。
慌ててショウタは前のめりにかけだす。
そして気を失ったまま白いそれに巻かれるテレジーの腕を引っ張った。

その時、リネと目があった。
いや、目があったという表現は正しくはない。彼女は目が見えないのだから。

ふいに、音がすべて遠のいた。
彼女から目が離せない。ショウタは口を開けたまま、固まった。

『貴方は、私たちにとってとても大切な存在。
貴方がいれば、世界は変わるの。

誰にもならない、貴方がいれば・・・』

それってどういう意味か、と問う前に、視界が白く埋め尽くされた。

掴んでいた腕が離れていく。

恐ろしいことだった。

ショウタは滅茶苦茶になりながら、叫んだ。

言葉は意味をなさず、ただただ絶叫。

声がかれるような喉の感覚だけが残り、あとはすべてがぼやけていってしまって、

このまますべてがわからなくなってしまうのだろうかということだけが頭の隅に残っていた。

47話　田舎に泊まりませんか？

「くっさぁ・・・」

ショウタは叫ぶ気にもなれず、そのまま気を失いそうになるようなテンションでつぶやいた。
彼自身がいるのは、シャリムのゴミ山の頂点。
右手に握るのはテレジーの腕で、彼は山の斜面に引っかかってはいるが未だに目を覚ます気配がしない。
山は実際大きくはない。
元々小高い丘程度のものだったが、ゴミが捨てられて山になったのだ。

その丘の南側にある洞窟から彼らは碑文の間まで歩いたのだ。
なので、実際この山の中に入ったわけではない。
にしたってなにもこんなところに出さなくてもいいのに、と、今ここにはいないリネに悪態をつく。
ショウタはそのまま立ち上がり、山の斜面を伝うようにしてテレジーを抱えながら降りる。
「ぎゃあっ！」
ふと右ひじのあたりについた何かよくわからない臭いものに気づいて、思わず悲鳴をあげてしまう。
生ゴミかもしれない。ほとんどドッキリだ。
ショウタの悲鳴のせいか、ようやくテレジーが目を覚ました。
彼は開口一番、
「お前、臭い」
というものだから、ショウタはぎっとにらんで、君もそうだよ！と言い放った。

「みんなどこだろう・・・」
「がらくたのなかに埋まっていたらどうする?」
「あながち冗談にもならない予感がするから言うのやめようよ。ほらよく言うじゃん。言葉は発することでそのとおりになっちゃうって」
「あぁ・・・そうだったな」

そう言ってテレジーが山のほうに指を向ける。
その先を追うと、白い服と細い腕が見えた。

「!!!?!?!?!?!?!?」

声も出ずに絶叫すると、ショウタはゴミ山に向かって一目散にかけだした。
周りのゴミを掻きわけ、その腕を引っ張ると、顔まで汚れてしまったクインがぐったりとしていた。

「う、うぅ・・・」
「クイン!クイン!しっかりするんだ!」
「く、くさく・・・て・・・きもちわる・・・くて・・・はきそ・・・」
「そこで吐くなよ。近くに誰か埋まっていたらどうするつもりだ?」

「テレジー!動けるんだったらクインを連れてってよ!」

ショウタに怒鳴られ、テレジーはやれやれと言った感じに軽快にゴミ山に登ると、クインの体を抱えた。
そして近くの小川（色が濁っているのはもちろんのことだ）まで彼女を運んだ。

そのまま辺りを見渡し、耳を使って気配を探れば、近くに再び物音がした。
ショウタはその近辺を探った。ゴミの隙間から明るい鳶色が見えた。

「ルーマ！」
「ん・・・？うげ、きもちわる・・・」
「大丈夫？今引っ張り出す」
「うーん・・・お願い」

ずるずるとルーマを引っ張り出す。
一緒に何かよくわからないものがくっついてきて、ショウタは目を半開きにしてそれを取り除いた。

その後はルーマとテレジーとともに埋まっていた仲間を引っ張り出した。
全員汚れがひどく、そして何よりも悪臭漂っていた。

「ラルゴ、この辺で綺麗な川とかないわけ？」
「ねぇよ。シャリムに期待すんな」
「このままじゃどこにも行けませんよ・・・」
「いやだよぅ！いやだぁあ！」
「仕方ない。テレジー、魔術」
「便利道具のような言い方をするな」
「いやー、でもまいったな。どうするかな・・・」

八方ふさがりの彼らだが、どこまでも幸運が味方するらしい。

「おやまぁ、ずいぶんと汚れちまって。ゴミ山漁りはするもんじゃないよ」

穏やかな声をかけられた。
ショウタが振り向くと、そこには小柄な老婆がいた。
背中はそこまで曲がってはいないが、杖をついている。
歳はそこそこいっているだろう。笑うと顔がくしゃくしゃと皺だらけになった。

「あの、俺たち好きで山に登ったわけじゃないんです。
でもこのままじゃ困るので、どこか近くに宿屋ってありますかね？
もしくは風呂場でも」
「そうだねぇ。２０年くらい前ならあったかもしれないけれど、シャリムも寂れちまってねぇ。
ほとんどの人が王都に流れてしまってね」
「おばあさんはこの辺に住んでるのぉ？」
「そう。今から小一時間ほど歩くけれど。
なんなら家に御招待しましょうかね？」
「本当ですか！？風呂だけでもいいので貸してほしいんです！」
「あと、ついでに洗濯もさせてもらえれば・・・」
「はいはい。その代わりと言っちゃなんだけどね、
ちょうど王都で買い物をしてきたところでね。それを運んでくれれば助かるねぇ」
「運びます！よろしくお願いします！」
「はい、お願いしますねぇ」

老婆の名前はマルシェンと言った。
シャリムから東に歩くこと小一時間。
小さな山の中。そこにマルシェンの小屋がぽつんと建っていた。
木造平屋建て。外に小さな畑がある。

土地の痩せているアイマナはあまり農業の規模が大きくないが、山肌に段々と作られたそれにはそこそこの大きさに野菜が育っている。

「さぁさ。汚れている中悪いんだけどね、その薪で風呂を沸かしてもらえんかね？」

マルシェンはそういうと、小屋の中に入っていった。

残された7人は暫く辺りを見渡した後、風呂を沸かそうとする。が、

「薪でどうやって沸かすのぉ？」

マリが尋ねた。

薪を抱えたまま、彼女はこれをどうするのか考えている。

「僕も知らないんだけど」

「え、俺も知らないよ」

「私も・・・ごめんなさい」

「・・・俺に頼るな」

若い面々が頭にはてなを浮かべているさなか、マリから薪を受け取ったツァイが小屋の後ろに回る。

「こっちだ。

マリ、手伝ってくれるか？」

「ツァイわかるの？」

「あぁ。

ここの穴に薪を入れて焼べるんだ」

「くべる・・・」

「とりあえず入れてみぃ」

後ろからラルゴが声をかけた。

「んで、マリの魔術で一発だな」

「え？何すんの？」

「マリ、燃やすんだ」
「はーい・・・」

ぱちんと指を鳴らすと、瞬時に薪に火がついた。
暫く放置していると、薪を入れた壁の上部から湯気が出てきた。
「ほら、お湯が沸いたな」
「まったく、今の世代ってのは便利な世の中だからな。
あれだよ。薪使ってお湯を沸かしてんだよ。わかるかー？」

ラルゴに言われたって、いまいちピンと来ていない若い世代。
廃れゆくものに救われることは多々あるものだ。

「お湯が沸いたようだね。
私一人で入るのに十分な広さだから、一人ずつになるねぇ」
「しゃあねぇ。順番決めるぞ」
「じゃんけんだねー」
「服は風呂場で洗うってことで。おばあちゃんいい？」
「その方がいいだろうねぇ。
洗濯機もこの家にはないから」
「よーし、じゃあじゃんけんだね」
「じゃーん」
「けーん」

数時間後。

最後に風呂から上がり終わったショウタは濡れた頭で風呂から出てきた。

ぎゅっと自分の服の水分を絞り終わると、他の面々と同じように物干しざおに服を干した。
再度小屋に入ると、全員ショウタに視線を向けた。
「おつかれさーん」
「いい湯でした。マルシェンさん、ありがとう」
「さぁさぁ、お茶を淹れましょうね。
貴方達、おかわりは？」
「いただきます」
「はーい！欲しいでーす！」

突然の来客にもかかわらず、マルシェンは穏やかだった。
むしろ大勢の客にどことなく楽しさと嬉しさを感じているような。
テーブルには全員が風呂の順番を回している間に用意された簡単な食事が並べられていた。
食糧事情や生活水準が厳しいアイマナの中では充足した生活をしているようだ。

「おばあちゃん、本当にありがとう！
おばあちゃんは一人で住んでるのぉ？」

食事にフォークをつけながら、マリが屈託ない笑顔で尋ねる。
マルシェンは優しい笑みを浮かべながら、そうだよと言った。
「5年前に旦那が亡くなってね。それ以来ひとりぼっちでね。
ここには20年ぐらい前から住んでいるのよ。
彼はアイマナ国軍の人間で、私も王都の上流階級が住む住宅地に大きな家を構えて住んでいたのよ」

ぴくり、とラルゴの手が止まった。
それに気付いたショウタは、この話をより聞くべきだと判断した。
「そうなんですね。

どうしてここに引っ越したんですか？やっぱり自然がいいってことですか？」

「そう・・・貴方達みたいな若い子たちは知らないだろうねぇ。アイマナはね、２０年前に内乱がおこったんだよ。原因は国王の独裁政権って言われているけれど、まぁそうなんだろうね。国王と軍の関係者が私腹を肥やし、市民は貧しいままと言われていたんだってね。恥ずかしい話、私はそういう現実を見て見ぬふりして、自分が幸せな生活を送ることで満足していたのよ」

いやね、年寄りは話しだすと止まらないわ、とマルシェンは言う。そんなことないです、とショウタが首を横に振った。空気が重くなったことに気付いたマルシェンは台所に向かう。新しいお茶を淹れましょうと言って。

その間ラルゴは黙ったままだった。ラルゴの事情は誰も詳しくは知らない。彼は自分のことをこれっぽっちも話したがらないからだ。少々付き合いの長いショウタだけが、その内乱でラルゴが家族を失ったことを知っている。ただそれだけだが。

マルシェンはお湯の入ったポットを持って再びテーブルに着いた。温かいお茶を淹れていくが、ラルゴだけがそれをもらわなかった。

「その内乱は私が幼い時のことで、情報屋のパブリックレターで知りました。実際はどういったものだったんですか？」

尋ねたのはツァイだった。

マルシェンは一つ二つと深呼吸をした後、語り始めた。
「ひどいもんだったねぇ。
反発する市民とそれを抑えようとする軍と国。
ここシャリムはね、もともと東の要所として栄えていたんだけれど、一面焼き野原になってしまったんだよ。
王都は目も当てられない状況だったね。
でも、たとえ軍に弾圧されても、街が炎に包まれても、人々は止まらなかったのを覚えているよ。
私はそのときに一人息子を失ってね」

ふと、マルシェンが棚の上の古びた写真に目を向ける。
利発そうな青年と、よく似た父親、そして今よりも若く美しいマルシェンが笑っている。
その写真から一番最初に目をそらしたのは、ラルゴだった。
そして、口を開いてマルシェンに尋ねた。

「で、からがら逃げ込んだここで今までどんな生活をしていたんすか？」
「ほとんどお金なんて持たずに逃げてね。
最初はシャリムで貧しい生活をしていたんだけれど、なにせ旦那は元軍人だから居づらくてね。
ここは人も住まないような荒れ果てた土地だったんだけれど、時間をかけて切り開いて小屋を建てて、畑も作ったのよ。
ちゃんとした野菜を作れるようになるのには時間がかかったけれど、ようやく物になってきてね。
今じゃこうして質素な生活をしながら、できた野菜をシャリムや王都で安く売ったり配ったりしているのよ」

その帰りに自分たちはマルシェンに会ったのか、と納得する。

「あの内乱で人々は多くのものを失った。
私に何ができるでもないけれど、わずかでも人々の生活の足しになれればと思って毎日を過ごしているの」
「すごい人なんだね、マルシェンさんって」
ルーマが言うと、マルシェンは首を横に振った。
「どうしてもね、何かしなくちゃという気持ちにさせられてしまうのよ。
こうやって復興の始まった今でも、まだまだ満足に毎日を生きられない人がいる。
そういう人たちを見ると、胸が苦しくなってね。
すごくすごく、責められているような気持ちになるのよ」
「そんな・・・マルシェンさんがそのような責め苦を感じるのは・・・」
「筋違いってやつだな」

クインの言葉につなげたのは、ラルゴだった。
カップの中身を一気に飲み干した後、彼は外に出ていった。

「ラルゴさん、どうしたんですか？」
「気を悪くしちゃったのかしらね・・・」
「あ、マルシェンさん、落ち込まないでください。
その・・・言っていいのかどうか悩むんですが・・・」

ショウタが口をもごもごさせながら言葉を捜していると、落ち着いた声でマルシェンが、おしえてちょうだいと言った。
先ほどのラルゴの行動に疑問を持っていたメンバーもショウタの話に耳を傾ける。
全員の意識が自分に向いたのをどこか居心地悪そうに感じたショウタは、ちらりと小屋の出口の方に目線を向けた後、マルシェンに向き合った。

「ラルゴ、アイマナの出身なんです。
８つの時に王都の内乱で両親を失って、ファドキアの従姉の家に引き取られたんです。
情報屋になって、どこの所属になるかの希望で、誰もが行きたがらないアイマナを志望したのも知ってます。
俺が知ってるのは・・・それだけ」

マルシェンが深く長く息を吐いた。
なんてことなの、と呟いて、先ほどよりもより心痛な面持ちで首を横に振る。

そうなんだ、と呟いたマリがショウタに尋ねた。
「ラルゴ君、聞きたくない話だったのかな。
おばあちゃんのこと、怨んじゃったのかな」
「違うだろ」
マリの懸念をばっさりと切ったのはテレジーだった。
「どういうこと？」
尋ねても、テレジーは答えない。

ショウタは再び出口の方に目線を向ける。
感じ慣れているラルゴの気配は近くにはなく、穏やかな陽光が次第に赤みを帯びて、日が落ちていくのを感じることしかできなかった。

48話　決意の剣

２０年前。

少年は年相応の無邪気さや素直さを兼ね備えてはいなかった。

たかが８つで世間を斜めに見る癖はどこでどう育て方を間違えちゃったのかしら、と親に言わせるほどのものだった。

「ラルゴは本当にまっすぐに育たなかったわねぇ」

「何を言うんだシェシリア。あいつもあいつで素直なところがあるさ。

あいつは人と違ってちょっと物の考え方とか見え方が違うだけさ。

同じ考えの奴がそう大勢転がってるわけじゃあないだろ？

何も特別なことはないさ」

「貴方はいつものんきね、グラット。

私はラルゴに落胆しているわけじゃないの。

ただね、あの子の将来が心配なだけ。そう、あの子が苦難や苦行に遭わないよう願うが故の、親の気持ちよ」

「それはそうだな」

両親はそんなことを言っているが、比較的ダイアロット家は平穏だった。

アイマナ国の王都、テセガニアの中流階級が住む住宅街の一角に、ダイアロット家がある。

その家の一人っ子であるラルゴ・ダイアロットは８つになったばかりだが、言われた通り少々変わっている。

徒歩２０分のところにある普通の学問所に通っていたが、両親はラルゴの一番親しい友人を知らない。

家に連れてきたこともなければ、ラルゴ自身が友人の話や学問所での話をしないからだ。
いじめられているのではと思い、シェシリアが学問所を訪れてこっそりラルゴの様子を見ていたが、そうではなかった。
彼は休み時間は本を静かに読んでいた。時折外に出たかと思えば誰とも会話することなく植物を見たり空を仰いだり図書館に向かったりとしていた。
時折フェンスをまたいだり一歩間違えれば数十メートル下にまっさかさまというところを歩いたりもしていて、シェシリアは心臓が止まるほどの思いをしたが、彼にとってはなんてことのない一人遊びのようだった。

職員室に呼ばれたシェシリアは、自分よりも若い担任が淡々と落ち着いて彼女に自身の見解を述べた。
「ラルゴ君は優秀です。その、ちょっと人とは違う雰囲気がありますが」
「そうなんですか？」
担任はそれをまるで研究成果の一端を発するようにさらりと言った。

ファイルをちらちら見ながら、不安そうに見てくるシェシリアに落ち着いた声色で話を続けた。
「えぇ。作文や答案、授業の発言や普段の生活を見てると。
どちらかというと、彼は天才肌なのでしょうね。考え方がもう普通の人とは違うのです。
他の人が1を理解するときにはすでに5について想いを馳せている。

全員が表を見ていれば彼は裏とその裏から見える世界を見ている。
そんな感じです。
彼の常識は人にとっての非常識になりかねないですが、もちろん彼もこの世界に生きている以上無関係な感覚は持っていませんよ。

将来どういう人になるのか、楽しみですね。お母様」
「はぁ・・・」

その日から両親はラルゴを注意深く見ていたが、確かにそうかもしれないと納得する点がいくつか見つかった。
悩みは尽きぬが、今は二人ともラルゴをありのままに育てることにした。
その性格やものの考え方が世間を生きるのにたとえ難しくとも、彼のその才能はいつかどこかで人のためになるのだと言い聞かせながら。

そんな両親の懸念を知らない当の本人は・・・

「ばっかじゃねぇの？
空が青いのは光が微粒子にぶつかって散乱した時、長い波長である青色が強く散乱されるから青く見えるんだよ。
ソーラテネルの涙なんて、おとぎ話もいい加減卒業しとけって」

しっかりひねくれていた。

「・・・なんかさ、ラルゴ君ってつまんないよね」
「つまらなくて結構。
物事は正しく知っておく必要があるってだけだ。俺は正しいことを知れればそれでいいんだ」

それがラルゴの口癖だった。
かといって彼は正しい行いをしたいとか、正義を貫きたいとかそういうことは言わないし興味もない。
８歳にして貪欲な知識欲とかなりの現実主義。
とはいっても、正論を言ったところで人間社会でそれがすべて受け

入れられるわけではない。
そんなことにうすうす気づきながら、ラルゴは相変わらず帰路を一人で歩いていた。

今日起こったことを思い出す。
特に変わり映えのない毎日。勉強は嫌いではないが魔術の授業は相変わらずつまらないと感じていた。
そして今日出された宿題について考える。
内容は将来なりたいものを挙げて、それになるためにはどうすればいいのかを作文に仕立て上げること。
立ち止まり、ふぅんと唸る。
「・・・将来、ねぇ」
ふと、家とは反対方向に体を向けた。
今日はなんとなく寄り道をしようと思い立った。
家で考えるよりは何かしらの答えが出そうな気がしたからだ。

テセガニアはここ数日、不穏な空気に包まれている。
それはラルゴにはわからない。ただ、人の往来がせわしないことには気づいていた。
一人で街に行くなと言われていたが、ラルゴはその中心街に用事があった。
豪華絢爛のアイマナ城を横切り、その向かいに立つ尖塔。
それはこの城ができる前から存在しているソーラテネル教のシンボル、物見の塔だ。
彼は無宗教だ。世界の8割以上が信仰しているソーラテネル教（ちなみに両親は信者）にも興味がない。
だが、尖塔は別だ。

白磁色をした、なめらかな手触りの石を丁寧に積み上げて作られたそれは綺麗に均してあり、まるで石をこの尖塔の形にくりぬいたか

のようだ。
扉のついていない入口をくぐり、天につながる螺旋階段を昇っていく。
昔はいたる所にあった尖塔は、今ではアイマナにはたった一つしかない。それがこれだった。
子供の足で１０分は昇るだろう。最後の一段を踏みしめたとき、足が地味に痛い。
熱心な信者である父に連れられてよくここを昇っていた。
今日の来客はラルゴだけだった。入口にいつもいる神官にも会わなかった。
そういう御時勢なのだろう、とラルゴは考えて、窓枠に手をついた。
等間隔に並ぶ窓枠から太陽の光が入り、塔の中心に集まる。
そしてフロアの中心にそれは球形となって浮かび上がり、キラキラと光り塔の中を照らす。
その光に触れて目を閉じれば願いがかなう、と言われたが、それをするためにわざわざ昇ったのではない。

「あっちが、アホのアイリーンがいるファドキア」
窓枠から海のほうを見る。
そして反対側に歩いて同じように外を見る。
「あの山の向こうがグライナーだな」

つまらぬ子供と言われている彼だが、それでもこの塔から見る世界は美しいと素直に言える。
海が見える。山が見える。街が見える。
小さな少年にとって、そこは世界の縮図のように見えた。
そしてここから見える世界を通して、本来の世界の広さを想像する。
強い風に短い茶褐色の髪が揺れて、思わず目を閉じた。

湿度の高い風を体に取り込んで、吐きだすと同時に声が出た。

「俺はこの世界のでかさに見合う人間になってやる。
すべての知識を得て、それからやりたいことを見つける。まずは世界一の知者になってやる。うん、いいでかさだな」

我ながら漠然とした考えだ。
同級生の夢が教師だったり、王宮魔術師だったり、国軍だったり、医者だったり、商人だったりと、ある意味はっきりとしたものに比べて、ラルゴの将来の夢は固有名詞を持たない。
だが、これが彼の答えだった。
どうすればそうなれるのか、ラルゴは知らない。なぜならそれを成し遂げたであろう人を知っているわけではないからだ。
だから学ぶのだ。知者になるのだ。
飽くなき探求心がラルゴに長い長い時間を与えながらも一刻の猶予もないようにせかしているようだった。
体の奥から響く振動に、どこかすっきりしたような笑みが自然と出た。

そうして、一体何分ほどそこにいただろうか。
少しずつ影が長くなりかけたとき、ラルゴは階段を下りた。
あまり遅くなると両親が煩いからだ。
やはり親には心配をかけたくない年頃だった。

右足が最後の一段を踏み終えたときだった。

体が横殴りに吹き飛んだ。
ラルゴの耳は一瞬すべての音を失った。
体がピクリとも動かない。いや、正確には痺れて動けなかった。

「何だったと思う？
スペルインパクトさ。かなり激しい、な。
足場がしっかりとした場所で、王都の中心で起こった。何が始まったかあの時の俺はわからなかった。
ただ、ぶんなぐられたのさ。強大な魔力によって。
それから先の俺の記憶はとぎれとぎれなのさ」

夜。マルシェンの小屋の中はろうそくの炎だけが部屋の中をともしていた。
あの後暫くして小屋に戻ってきたラルゴは、全員が起きていたことに驚いた。もちろんマルシェンもだ。
夕食は準備されていたのだろう。しかし誰も手をつけていなかった。
ただ黙ってラルゴの帰りを待っていたのだ。
彼はしばし口を閉ざしたままだったが、ふと、ぽつぽつと、思い出話を始めた。
誰も口を挟まずに。静かに一人の少年の物語を聞いていた。

ラルゴが目を覚ませば、そこは街の小さな音楽ホールの中だった。
大勢の人の中に、自分がまぎれている。
ゆっくりと体を起こせば、くらくらと目が回った。
「なんだよ・・・これ・・・？」
混乱する意識を振り払って、辺りの様子をしっかりと見た。
薄暗いホールの中、どうして自分はここにいるのか。

ホールの中に立ち込めるのは恐怖と不安、冷たい空気が流れている。

すると、

扉を大きな何かで殴る音がしはじめた。

どん、どん、どん。

ゆっくりだが、大きく。扉は今にも破られそうだった。

中にいた数人の大人が扉の前に手をつくと、それは淡い光を放った。

魔術でぶち破られるのを防いでいるのだ。

その光のおかげで、ラルゴは初めて中の様子をハッキリと見ることができた。

ホールの中にいる人のほとんどが怪我をしている。

そして、この中にいる人たちの服装や持ち物から彼らが上流階級の者であることが判明した。

外から聞こえてくるのは罵声。汚い言葉づかい。

怒声を一つ拾えたことで、ラルゴはすべてを理解できた。

金持ちども、今までのはらいせだ、というそれ。

「・・・もしかして、クーデター・・・なのか?」

子供のラルゴでさえそう勘づいたのだ。

大人の声が聞こえた。

「暴動は下流階級の人間たちが起こしている!

あいつらからの要求は王政と特権階級の廃止らしい!」

どこからか聞こえてきた声は辺りに広まり、さぁっと勢いよく人々の心を支配した。

ラルゴは一人でこっそりと集団の輪から抜け出した。

「一体、どうなっちまってるんだよ・・・

そうだ・・・家、どうなったんだろ・・・

一旦帰ろう。それからどうすればいいか考えればいい・・・よな・・

・」

ラルゴは自分の現在の状況を冷静に考えようとするも、非常時にそれは困難だった。
どうして自分がここにいるのか、おそらく城の近くに倒れていた自分が誰か善良な市民に拾われたからだろう。
だが運が悪いことに、クーデターの敵の中に現在自分がいる。
このクーデターはどこを境にしているのだろうか。
それによって、自分はどういう立場に位置するのかを把握しようとした。

ホールから出て、ロビーをつき進んで楽屋方面に走る。
裏口は楽器などの搬入口になっていて、小さな路地裏に通じている。
その横の小さな通用口ののぞき窓から外を見た。幸いまだ誰もいない。
だがそれも時間の問題だ。
ここに下流階級の敵がいることが分かれば、ここを封鎖されてしまう、そうなってしまえばラルゴは逃げられない。
彼は鍵のかかったそれを自慢の腕力で壊すと、そのまま外に出た。

辺りはいつの間にか真っ暗。街灯はところどころ破壊されていて足元は暗い。
このまま大きな通りに出てしまうのは危険だが、たかが子供一人を相手にするほどどちら側も暇ではないだろう。
子供さえもあっさりと殺す非情な人間がいれば、話は別だが。

「父さん、母さん、無事でいてくれよ」

じりじりと痛む体に顔をゆがめて、ラルゴは走った。

その時だった。
大きな爆発音と遅れてやってきた爆風。いよいよ衝突は本格的になった。
国軍と市民が衝突していた。
逃げまどう人々の悲鳴。通りから見たそこは、階級も関係なく逃げまどう人々。
言葉を失った。塔の上にいたときとは違う動きで、心臓が早鳴りしている。
ひるむ足を叱咤し、ラルゴは広場近くの細い路地を走った。
できるだけ衝突している場所を通らずに家に向かうことにした。

一瞬砲撃が止んだ時、巨大拡声器から声が聞こえてきた。
知らない人の声。男の声。
興奮していて、声が上ずっていた。
何を話しているのかは聞こえない。理解できない。
この状況の一つの情報であるのに、今のラルゴはそれを聞けなかった。
幼い体にスペルインパクトをもろに食らい、頭はふらふらとして吐き気があることも原因だが、今ラルゴは目的のため他のことを考えられなくなっていた。
休み休み足を進めていると、目に飛び込んできた光景に体が固まった。

住宅街が燃えている。

ラルゴの目には、武装市民も国軍も見えない。
炎の熱さも感じない。
ふらふらと足を動かそうとしたとき、強い力で引っ張られた。
大人の手だった。何かをラルゴに叫んでいるが、聞こえない。

それからまた、ラルゴの記憶はぷつんと切れる。

「何が起こってるのか、本当に理解できなかったんだよ。
俺の家を焼いたのは一体どっちだったのかも今となってもわからん。
俺にとっての敵が、下流市民か国王かもわかんなくてな。
・・・俺さ、自分がそうなるなんて思ってもなかった。
今思えば当然だ。８歳のガキなんだ。でもそん時の俺は、自分は冷静でどんな事態にも動揺しない人間っぽくない人間だと思っていたんだよ。
んなやついねぇのにな。なんだか街も壊れたが、俺の思っていたいろんなものも壊れた瞬間だったな」

その後数日。
ラルゴはどのように生活をしていたのかを全く覚えていなかった。
彼は今、広場の隅にしゃがみこんでいた。
学校も破壊され、見知った人間のいない街の中。
両親の安否さえ分からない。
街の中に上流階級の人間はほとんどいなかった。国軍も減っているような気がする。
先日の雨がラルゴの体から体温を奪い、寒さのあまり小さくカタカタと震えていた。
周りにはそういう子供たちが大勢いた。隣の子供はもうだいぶ前か

ら動かなくなっている。
腕時計はとうに止まっていて、太陽の位置からまだ午前中だということはわかるが正確な時刻までは把握できない。
うつらうつらとしていると、広場に人が集まり始めた。
ざわつきが大きくなって、次第にラルゴの意識もはっきりとしていった。
彼も中央に引き寄せられるかのように、ゆっくりと足を向けた。
足を地面につけるたび、びりびりとした痛みを感じた。
人にぶつかればあっという間に体がよろめき、何度も転んだ。

城前広場からは城のバルコニーが見える。
そこからたびたび国王の演説が行われる。
ラルゴも新年のあいさつを家族で見にいったことがある。
今そのバルコニーは、普段とは異なる雰囲気を放っていた。

背の高い、肩幅の広い男がそこにいた。
右腕に湾曲刀。そして左腕一本で男を後ろ手で縛りあげている。

捕えられているそれは当時の国王で、確か去年の暮れに即位していた。
３０代半ばなのに頬がこけ、口元と目じりに深い皺を刻んだ彼。
初めてこのバルコニーから姿を現した時は色艶のいい肌をしていたはずなのに、その面影はもはやない。
ラルゴは目の前の光景にくぎ付けになった。
男が何かを叫んでいる。聞こえているはずなのに、ラルゴには今が無音空間のように感じていた。
そして男が湾曲刀を持つ右腕を上げた瞬間。
民衆の悲鳴が地を揺るがせた。
ラルゴには目の前で人が死んだことよりも、もっともっと別のことに気付いた。

国が死んだのだ、ということを。

何故そう思ったのかはわからない。

ただ、もうここはラルゴの知っている場所ではない。

彼はふらふらと広場から出ていった。

ゆっくりと時間をかけて歩いた。ところどころで転びながらも、ゆっくりと。

燃えカスしか残っていない自分の家に再びやってきた。

毎日毎日、彼の短い人生の大半を過ごした家なのに、どこに何があるのかがもうわからない。

昨日の雨で湿り気を含んだ木をどかせば、きらりと光るものに気がつく。

それは母親が肌身離さずつけていた結婚指輪だった。

母親はどこへいったのか、わからないラルゴではない。

彼はその指輪をポケットに突っ込んだあと、何度も何度も瓦礫の山をひっくり返した。

どれほどの間、そうしていたか。

金属の箱を見つけた。

父親がたびたび言っていたことを思い出していたのだ。

何かあったらこの箱を開けなさいと。

まじないのかかっている箱で、ラルゴの声に反応するようにできている。

風に乗った小さな声が箱の中に吸い込まれた。

声であれば言葉は選ばない。ラルゴはここにはいない両親に声をかけるように、箱に話しかけた。

錠が外れ、中から出てきたのは、少しばかりのお金と宝石、ノート、両親の結婚式の写真、水と乾燥食料。

そして、小さな彼にはまだ大きな長剣。

ラルゴは剣とノート以外のすべてを、持っていた鞄に詰め込んだ。

ノートを広げると、電話番号と地図と行き方が端的に記されていた。
何かあったら従姉の家に身を寄せることになっていた。それはその行き方を記していた。

港まではとてもじゃないが一日で行ける距離ではない。
だが、進まなければならない。生きなければならない。
両親の死から生きる義務を見いだしたのではない。
一種の契機だったのかもしれない。
国が、国王が、街が、両親を失い、そして自分さえも失いかけた少年は空っぽだったが、それゆえに見出せた何かを抱え、彼は生きる道を選択した。
重い剣を引きずって、少しずつ少しずつ、歩いていった。

ここでラルゴの話は終わった。

彼はその後一言も発することなく、隣室に準備された寝床に向かった。
次々に全員が寝に向かい、最後に残ったショウタが、マルシェンのほうを見た。
椅子に座ったまま微動だにしない彼女に、ショウタはおやすみの挨拶をした後、小屋を出た。
ラルゴが言いたかったことがあと少しでわかるような気がして、ショウタはそのまま小屋の前に座って、目を閉じた。

目の奥に、剣を引きずる少年が見えて、思わず手を伸ばす。
もちろん触れられるわけがない彼に、ショウタはどんな声をかけら

れるだろうか。

自分を見返す少年の目は、まっすぐで透き通ったものだった。

答えが見つかった気がした。

49話　それでも来る明日

かし、という音を立ててリボルバーが回る。

早朝。朝早く起きたルーマは外に出て軽くストレッチをした後、二丁拳銃のメンテナンスをしていた。

アイマナにしては珍しい晴れの日で、森の中ということもあって空気は非常に澄んでいて心地が良かった。

ふわりとあたたかな風が吹くと、ルーマの明るい鳶色の髪の毛が揺れる。

ルーマは銃にサイレンサーをつけると、ポケットから緑色に塗られた弾丸を取り出した。

銃弾を装填して、手のひらの中でくるくると拳銃を回す。

「たまには練習しといたほうがいいよね」

数回深呼吸をした後、右腕を上げる。

自分の目の高さに構え、右指と右眼に意識を集中させる。

そして、

目の前の木からひらりと葉が落ちてきた。

それを見逃さず、ルーマはトリガーを引いた。

手のひらほどもない大きさの葉がこなごなになったのを確認すると、小さくガッツポーズをした。

いけると思って放ったその一撃が当たったので爽快だ。

「腕は落ちてないみたいだ！」

「大した集中力だな」

「うぎゃあっ！？」

喜んでいると、目の前の枝から首が出てきた。
さかさまになったテレジーの顔と目が合う。
思わず悲鳴を上げてしまったルーマだが、その姿を確認した後、はぁとため息をついた。
「もう、脅かさないでよ。何していたの？」
「別に。ここで寝ていたらお前が勝手に銃をぶち放したんでな」
「ここで寝ていたの？」
「悪いか？」
「悪かないけど・・・なんかもっと根本的な問題として・・・いや、いいや」
サイレンサーを取り外すと、ルーマはホルスターに銃を収めた。
すた、と降り立ったテレジーは服についたゴミを払う。
ちらり、と目線が合う。
先に口を開いたのはルーマだった。

「ねぇ、テレジーは昨日のラルゴの話、どう思った？」
「どうって」
「え・・・なんかこうさ、感想とか普通抱かない？」
「別に。
あぁそうだ。あいつ自分を天才って誇張しすぎだろう」
「あえてそこ？」
「じゃあお前はどうなんだ？」
「え？僕？
うーん・・・そうだなぁ」
「言っておくが、かわいそうだとか大変だったんだとかそういう感想は期待していない」
「・・・。
質問変えていい？」
「まだ俺から何を聞くつもりだ」

「どうしてラルゴはあんな話をしたんだと思う？」

テレジーの目が細められる。
その質問に答えたのは、テレジーではなかった。
テレジーがいた木とは別の隣の木から、また首が出てきた。

「ラルゴの話からはラルゴの感情ってのが入っていなかった気がするんだ」
「ぎゃあぁっ！」
「・・・、お前、いつからそこにいたんだ？」
「え、俺もここで寝てたけれど？」

声の主はショウタで、彼は木の上からすたんと地上に降り立った。
頭についた葉っぱを取ると、ふぅと吹いて、少し体を動かした。
限りなく黒に近い茶色の髪の毛を無造作になでつけて、ショウタは二人のほうを見て言った。

「たぶん俺たちにいかに自分が被害者であるかとか、いかに内乱が悲惨な惨劇だったかを伝えたかったわけじゃないんだよ」
「とすると、
お前はあれが自分の過去をただ語りたいだけだったとでも思うのか？」
「そうだよ。何か変？」
「・・・」

テレジーは顔を歪めて、ショウタを睨んだ。
その顔は全くその考えが理解できないというようなものだった。
そんなことお構いなしに、ショウタは己の見解をつらつらと続けた。

「俺たちってさ、きっといっぱいお互いを知らないんだ。
でも知ったからといって何もできることなんか何一つない。
だからといって知らないままってのはなんとなくいけない気がする。

そう思って俺たちに話してくれたんじゃないかな。
ま、ラルゴの話はあれだけで終わらないと思うけれど・・・」
「互いを知れって、こういうことなのかな・・・」
ルーマがぽつりとつぶやく。
リネの言っていた言葉を思い出す。
「そうだとしたら、僕にはそれはできないなぁ。だって語る過去がないんだもん」
あーあ、と言ってルーマが地面の石を蹴る。
声は明るいが、少しだけしょげている。
ルーマの態度はさらにテレジーの機嫌を損ねたのか。
彼は少しだけ語気を強める。そのとき辺りに冷気が立ち込める。
これは非常にテレジーの感情が荒くなっている証。一体何が逆鱗に触れたのだろうとルーマが振り返る。
「どうしたのさ」
ショウタが尋ねるが、テレジーは口を真一文に結んだままだった。
「・・・・・・・・・・・・別に」
「その間が気になるな」
「そっか・・・テレジーは嫌なんだね。自分のこと言うの」

ルーマが言う。
テレジーはちらりとショウタをにらんだ後、ルーマのほうを見て（しかし視線は合わせない）吐き捨てるように言った。
「・・・。
どうしてその人間を知る上で過去が必要なのか、と言いたいだけだ」
ルーマは少しだけ悲しそうにその大きな眼を細めたが、テレジーの

質問に彼なりの答えを返した。
「どうしてって・・・過去は必要だよ。
今までその人が経験したこと体験したことから、何を思ってどういう行動をしてっていうのができてくるんじゃないの？
それがその人の性分を決めるんだと思う」
「確かにそれもある。
だが俺自身は過去にこだわらないし、必要のないものだと思っているからだ」
「よく言うよ」
ぽつりとつぶやいたショウタの胸倉をテレジーはあっという間につかむ。
掴まれるのを覚悟して発したのだろう。ショウタは顔色一つ変えなかった。
ルーマがあっと声を上げるよりも早く、ショウタが彼に食らいつく。

「何が過去は必要ないだ。
だったら君の願いは何？兄貴を元に戻すことだろう？
取り戻すものは過去のものだよ。君は現在のシュヴァイリンを否定するから過去のシュヴァイリンを取り戻そうとしてるんだよ。
あんなひどいことされても、何一つ抗わない。
それは自分の中に過去のシュヴァイリンがいるからでしょう？
君の時間は過去で止まってるじゃない。
何が過去が必要ないだ。テレジーが手に入れたいのは過去の幸せだった時間だろう！？」

ごっ、とにぶい音がした。
ショウタは鉄くささを口の中で感じた。
不味い。最初の感想はそれで、次に左頬に火を吹くような痛みが襲う。

だが、ショウタは黙らない。
口の中が不自由だが、なおテレジーに言った。

「俺はあいつが嫌いだ。
まじないだろうが呪いだろうが、今のあいつはすべてを、テレジーを否定してる。
君が取り戻したい過去でさえ消滅させるつもりなんだよ。
俺はそんなシュヴァイリンが大嫌いだ。ていうかあいつが生理的に無理だ。
そんな奴に必死になっている君が理解できない」
「お前に理解されたいなんて思っていない。
お互いを理解しろなんて俺にははなから無理な話だ。
俺はお前らなんてどうでもいいし俺のことなんてなおのことどうでもいい！」
「嘘つけツンデレ」
「黙れ青臭いガキ」

「もー！やめてよ！！」

ルーマが叫ぶ。
気がつけば両手に拳銃が握られている。
はた、と二人の口が止まる。
ここでぶっ放されては困る。

「もう、よくわかんないけれど、駄目だってそんなんじゃ。
テレジーはつんつんしすぎ。ショウタもどうしたの、いつも以上につっかかりすぎだよ」
「放っといて。これは俺の問題だから・・・」
「・・・」

ようやく手を離され、ショウタは殴られた左頬に手を当てる。
思った以上に熱い。口の中も切れていたので、地面に血を吐き捨てる。
そして、
「ふんだ、バカヤロー」
言葉まで吐き捨てた。
そして、大股歩きでショウタは小屋の中に戻っていった。

ぽかんとした顔をしたルーマが、口角と眉を下げる。
「どうしたのかなショウタ。ショウタらしくない・・・」
「・・・」
「テレジーは相変わらずだね」
「なんだ。お前も文句があるのか」
「ないよ」

ホルダーに銃を仕舞い、ルーマは心配そうにテレジーを見上げる。
「そんな顔しなくても、ショウタはテレジーを恨んでるわけじゃないよ。
僕ね、こんだけ長く誰かと一緒にいたことってないから、なんだか色々見ちゃうんだよ。
なーんとなくね、ショウタはテレジーとシュヴァイリンが嫌いで言ったんじゃないよ。
だからさー、そんな沈んだ顔しないでよ」
「してない」
「してるよ」
「斬るぞ」
「そのまえに撃つから大丈夫」

にっこり笑ったルーマはそのまま小屋の中に入っていった。
一人残されたテレジーは、ショウタを殴った右手をみつめていた。

結局一人もやもやした気持ちを消化できず、そのまま彼は木を殴り倒してしまった。

数時間後。

荷物をまとめ、一行は小屋の前に揃っていた。
扉の前に立ったマルシェンが、少しだけ寂しそうな表情をしている。

「それじゃあ、気をつけてね。
久しぶりににぎやかだったから、なんだか寂しいわね」
「お世話になりました。マルシェンさん。お体には気をつけて」
「お前もごもごって、何言ってるかわかんねぇよ」

思ったよりも頬が腫れてしまったショウタは口を動かすのもきわどいらしい。
一応冷やされてはいるものの、暫くは顔を動かすのはつらいだろう。
横に立つクインがはぁとため息をつくと、テレジーはふん、とふてくされてみせた。

「貴方達、これからどこへ行くの？」
マルシェンの質問に、ショウタの代わりに答えたのはクインだった。

「これからグライナーの西の玄関口であるヴィレガ港に行ってオレーヌ大陸のファドキア国を目指します」
「ファドキアね。今の季節はきっと雪も酷くないでしょうけど、寒いからね。しっかり着こんでおくんだよ」

あいさつを終えると、ショウタたちはシャリム駅に向かって歩き出そうとした。
その時、マルシェンがラルゴに声をかけた。
「貴方、ラルゴさん」
「んあ？」
ラルゴの足が止まる。
声をかけたマルシェンは、ラルゴに話しをするのを逡巡しているようだった。
その様子を見て、ショウタは腫れた頬を抑えながら、全員に少し離れるよう促す。

マルシェンはラルゴを優しい目で見つめる。だが、それはどこか複雑な心境が見え隠れしていた。
悲しそうな、でもどこかほっとしているような。
ラルゴはなんとなく居心地悪く、頭を数回掻いて目線を泳がせた。
昨日の話のことをいいたいのだろうとはわかっている。
特に何を言われたいわけではない。だから困ってしまう。
このまま聞き流してくれればいいとは思っていたが、マルシェンはそんなことをするような人ではない。
だから覚悟をしてこうやって待っているのだが、彼女は未だに口を開かない。
暫くそうした後、ラルゴにとってはかなり長い時間に感じたが、マルシェンが動いた。
彼女は皺の刻まれたひんやりとした手でラルゴの武骨で大きな手をそっと握った。
まめができていてかさついている。細かな手傷が農作業で作ったものだと思われた。
だがその手は、優しかった。
久しぶりにこうして誰かと手を握ったラルゴは、暫く何も言わずに

マルシェンと手を取り合っていた。
彼女は静かに、少しだけ消え入りそうな声で言った。
「またアイマナには帰ってくるのでしょう?」
「ん・・・あ、あぁ」
「そう。
貴方に次会った時には、またお話を聞かせてちょうだい」
「そう・・・か・・・だがあれぐらいしか・・・」
「いいの。
貴方とお話したいのよ。帰ってきたときには寄ってくれると嬉しいわ」
「・・・わかった。長生きしてくれよ」
「優しいのね。ありがとう」
たったそれだけの短い会話だったが、マルシェンは満足したのだろう。
ゆっくりと手を離す。
それはどこか名残惜しく、少しずつ離れていく温かさをとどめたくて、ラルゴは手を組んだ。
どこか気恥ずかしくなり、ラルゴは手を軽く挙げてマルシェンに別れを告げて早々にショウタたちの元に走っていった。
マルシェンはラルゴたちが見えなくなるまで、ずっとずっと玄関の前から見送っていた。
一方、その頃。

ファドキア国のとある場所で、水槽を見つめる少女がいた。
ちょこんとアンティーク調の椅子に座り、目の前の水槽の中に揺らめく何かに気がつく。

「・・・つながりが、でき始めてる」
「お嬢様、どうなさいました？」

彼女のつぶやきに返したのは白い仮面の男、パイアロッテだった。
そしてその少女は、以前夢見館でショウタと一対一で対話した赤毛の彼女だった。
大きな瞳は水槽を見つめたままだ。

「この水槽、セラーさんから返してもらった水槽。
ここにはあの7人の心の一部が入ってるの。
彼らはあの存在の言うとおり、お互いを知りつつあるの。
それはつながり。まだまだ弱くてまだまだ浅いけれど、少しずつつながりができ始めている」
「お嬢様、それは憂慮すべきことでしょうか」
「そう・・・かもね」

赤毛の少女は立ち上がると、パイアロッテのほうをみる。
そして天を仰いだ後、決意した表情で言った。

「あと少しすれば、みんなここに来る。
私、会うよ。会ってくる」
「それではお嬢様・・・従弟に会ってしまいますよ？」
「大丈夫。会っちゃいけないわけじゃないから」

そう言った少女はパチンと指を鳴らす。

それまで真っ白いドレスを身にまとっていた彼女だが、瞬時に服が変わる。
白を基調にしているのはそのまま、スカートの丈が短くなり、ひざ丈のブーツスタイルに変わる。
ふわりとした髪の毛は腰ほどの長さまで伸び、先ほどよりも幼い印象を抱かせた。

パイアロッテはこれ以上は何も言うまい、と言うように首を横に振ると、扉の方に彼女を誘導した。
そして一礼して、言った。

「貴方の選択が最善でありますよう、心から祈っております。アイリーンお嬢様」
「ありがとう」

部屋から出た彼女は、雪の降りつもるファドキアの王都ルスィーヤを歩く。
真っ白い世界に立った彼女は、にぶい空を見つめて、誰にもばれないため息を一つだけついた。

登場人物まとめなど（前書き）

※小説本文ではありません

登場人物まとめなど

以前やっていたまとめを復活させました。きりがよかったので。
こんなんだったか、と思い出しながら読んでいただければ。

＜”星の記憶”を求める契約者一行＞

ショウタ

ディタクミナ国の田舎町フォルに住んでいる。記憶喪失の少年でここ2年以前の記憶は皆無。
自分が考古学者であること、強い魔術を秘めていると言われる謎の存在”星の記憶”を調べることと、自分の名前以外は何も覚えていない。
その“星の記憶”を手にしたら、自分が忘れていることを洗いざらい思い出したいと願っている。その願いは強く、叶えるためには一直線に行動する。
大食漢でさっぱりとした現実主義。しかし、テレジーのことになると感情をあらわにしたり彼を過剰に心配したりするが、本人にはあまり自覚がない。

テレジー・レナードスタン

ダニア国第二王子。双子の兄シュヴァイリンから命を狙われているさなかショウタと出会う。
半ば無理やり連れてこられたが、”星の記憶”が手に入ればシュヴァイリンにかけられているまじないを解くために使おうと思っている。
特殊な力をもつ”ハシャナール”であり、目と爪が紅色をしている。ぶっきらぼうで口が悪く、他人を寄せ付けない。しかし自分にずかずか踏み入ってくるショウタだけはそこまで毛嫌いしていない様子。
本名は別にあるが、逃亡生活中ユピに拾われた際に捨てている。現在の名をつけたのはユピで、本人もわりかし気に入っている。

クイン・ナタリラ

コアッダ国のシュカで祖父の営む診療所で働く少女。
世界最年少で医師免許を取得しており、その技術や知識は本物。しかし料理は壊滅的にできない。
おっとりとして物静かな印象を受けるが、結構言うときは言う。ちなみに逃げる患者は追いかける、というのが彼女のモットー。
願いがあってショウタたちについていくことになったが、行動や言動からショウタたちに明かせないことをいくつか持っている。

ラルゴ・ダイアロット

アイマナ国の情報屋。ショウタとは１０か月ぐらい前に知り合った仲。それ以降個人的に”星の記憶”について調査し、ショウタと連絡を取り合っていた。
歳の割に落ち着きがなく、結構自由にふるまう。ツッコミは常識人を思わせるが、ショウタ曰く頭がおかしい人物。

彼の望みは大切な人にかけられた呪いを解くこと。そのために何においても”星の記憶”を手に入れる必要があり、そのためには手段を選ばない。
生来の好奇心旺盛さは情報屋に向いているが、その知識欲故どんなものにでもずかずか踏み入る悪い癖がある。ちなみに本人に自覚はない。

ルーマ・ミッドロア

記憶と名前を奪われた少年。まっさらな状態でどこから自分が始まったのかもあいまい。
自身の名と記憶を奪ったフィオを追いかけるため旅をしているさなか、ショウタたちと出会う。
屈託なく素直で、周りの空気をさりげなく読んでいる若いのにできた子。
時折記憶を思い出していくが、未だ自分がどうして道端に落ちている石を拾い集めるのが好きなのかはわかっていない。

マリフォルナ・ルーセント

シャリディンにあるソーラテネル教会総本山の主教の娘。
生まれてすぐ眠ったまま目覚めない母親を助けるために、僧兵のツァイとともに”星の記憶”を求めてやってきた。
教会の外にほとんど出なかったため、結構世間知らず。何を見ても真新しく、はしゃぐのは年相応。
一行の中で最も若いが、卓越した魔術を駆使することができ、その実力はかなり高い。それに対する本人のプライドも申し分なく高いのが玉に瑕。

ツァイ・リン

ソーラテネル教会の僧兵。マリとは長い付き合いで、彼女の母親代わりのような様子もたびたび見られる。
格闘家ばりの身のこなしと快活な性格であまり物事を深く考えないのでは、という印象をいだかせる。
大家族の長女ゆえ、家事全般はなんでもできる。一行の中でもどこか安心感を抱かせるそんな存在。
あっけらかんとしてはいるが、彼女も過去に何かを抱え、”星の記憶”を求めようとしている。

＜契約者を阻むもの＞

シュヴァイリン・レント

本名はシュヴァイリン・ローレス・ルーファ・ウィルツィッヒ・レント・ダニア。つまりダニア国の第一王子にして次期国王。テレジーの双子の兄。
テレジー曰く、まじないをかけられて以降、テレジーを殺すために生きているらしい。
行動はかなり破天荒で性格も破たん寸前。テレジーとテレジーの周りにいるショウタたちを蹴散らすと同時に、誰からか指示を受けて行動している様子。

ドゥドゥー・ルージュ

製薬会社エルデナの生物開発研究部署のお偉いさん。
目的が二つあり、一つはショウタたち一行に”星の記憶”をあきらめさせること。もう一つはテレジーとシュヴァイリンを捕えること。
そのためにオーレンとハイドラを使っている。

ハイドラ・ウォーン

エルデナの営業だったが、突如異動命令でドゥドゥーの部下になる。
その前にテレジーやショウタと出会っていて、それを境に数奇な事態に巻き込まれてしまう。
クインの学友時代の友人であり、危機を救ってくれたテレジーに好意を寄せているので、現在の仕事に戸惑いを抱いている。

オーレン・ヴァイセンハイン

ドゥドゥーの部下としてハイドラと同時期に異動してきた。
ラルゴの学生時代からの友人。好戦的で血の気が多く、ドゥドゥーの目的にはあまり興味がない割に危険な仕事は率先してやる。
”星の記憶”を手に入れようとするラルゴを快く思っていない。

＜”大罪人”＞

セラー・ドートロイ

ダニア国の城の中にいる女性。
シュヴァイリンとテレジーを知る人物。何を考えてどんな行動を取っているかは不明。

ユピ・レナードスタン

テレジーの名付け親でしがない小説家。
セラーやアイリーンとつながっている節がある。本人いわく、テレジーに協力してシュヴァイリンの呪いを解く方法を捜しているというが・・・

アイリーン・マクベル

ラルゴの従姉。ユピやセラーとつながっている。
どうやら歳を取らなくなってしまった呪いにかかっているというが、そのことについて知っているのはラルゴだけ。

フィオルディシリア・ワーラン

お嬢様風に立ち回りする女性。
ルーマの名前を奪ったというが、実際その時何があったのかを語るつもりはさらさらない様子。
ソンダクとつながっている。

クリーマ・パラエッダ

フィオと行動を共にする言動行動思考が結構軽い青年。
彼もソンダクとつながっている。

ソンダク・ハーンパイプ

ルイニの街で自らをルーンと名乗り、街を革命させた男。
何かを考えて、フィオとクリーマに行動指示を出している。

リネ・コーレイシャオン

未登場。

＜導く者＞

リネ

碑文から現れた女性。”大罪人”のリネの皮を被った別人と言われている。
ショウタたちを導く存在。

＜ソーラテネル地理＞

大きい大陸順にいきます。国名は話に出てきて今後訪れるである場所のみご紹介。

～ドドニア大陸～

・ジャスリーン国
大陸最東端に位置する小国。以前は大国タスニアキードの一部だったが文化の相違ゆえ独立する。
クインの出身地。
（訪れた地名：王都コラーレ）

・タスニアキード国
大陸東部に位置する世界最大の大国。
（訪れた地名：王都ニキ、オトレア）

・グライナー国
大陸中央部に位置する国。工業大国。
（訪れた地名：王都トレンウェイ、ルイニ）

・ウェイ国
大陸北部に位置する国。ルーマと何かしらの関係があるとされる。

・アイマナ国
大陸最西部に位置する小国。２０年前の紛争により破綻し、現在復興中。
ラルゴの出身地。
（訪れた地名：王都テセガニア、シャリム）

～オレーヌ大陸～

・ファドキア国
大陸北東部に位置する国。一年中雪におおわれている。

・シャリディン国
大陸南部に位置する国。ソーラテネル教総本山がある。
マリの出身地。

～ドギ大陸～

・ディタクミナ国
大陸の北半分を占める国。
ショウタが住んでいる場所。
（訪れた場所：フォル）

・コアッダ国
大陸の南部の東側に位置する国。多くの島嶼部を抱える。
クインが現在住んでいる場所であり、診療所がある。
（訪れた場所：王都オリフォン、シュカ）

・ダニア国
大陸の南部の西側に位置する国。寒冷地。
テレジー、シュヴァイリンの出身地。

～スーロン大陸～

・フェイレン国
大陸の西部に位置する国。
ツァイの出身地。

とりあえず以上です。
今後ともお付き合いよろしくお願いします！

50話　金＞安全

グライナーのヴィレガ港から出発した長距離旅客船”アジューレ”。
コアッダ、グライナー間の倍はある船路になるが、この手段でしか
オレーヌ大陸には行けない。
昔はアイマナから船が出ていたが、それも今では叶わない手段だ。
ぶつくさ言っている暇もない。
ショウタたちは次の目的地、ファドキアに行かなければならない。

「ふぉおおおお！ひろぉぉおおおい！」
船内に入るや否や、興奮してはしゃぎだすマリ。
マリとツァイも船を使ってシャリディンからジャスリーンにやって
きたが、その距離は非常に短かかったのでこういう長距離船は初め
てだ。
エントランスは明るく、木目を基調としたシンプルなのにどこか高
級感が漂う造りはここが船の中であることを忘れてしまいそうなほ
どだ。
まだ客室には行っていないが、マリの期待値はかなり上がりつつあ
った。

そんなはしゃぐマリを若干放置しつつ、ラルゴが全員に声をかける。

「さて、またしても自由行動ってことにしておくか？」
そう言うや否や、クインは小さく手を挙げた。
「あの、そう思って私、美術展のチケット買ってきてしまいました。
もう向かってもいいですか？」
そう言ったクインは出港の汽笛を聞くと、ひらひらと右手を小さく
振って一行から離れた。

先ほどまでくるくると辺りを回ってはしゃいでいたマリがツァイの右腕にひっついた。
きょとんとした顔をしながら、クインの後ろ姿を見送って、ラルゴに尋ねた。
「クインちゃんって美術に興味あるんだ?」
「クインは多趣味だよ。この前はお芝居見に行くって俺たちから離れたんだ」
「その時に僕とクインが出会ったんだよ」
「そうだったのか!」

船旅と言えばコアッダからジャスリーンに向かう”シェリーン”を思い出す。
決していい思い出ではないが、というかハプニングしかなかったが、あの場でルーマと出会いこうして旅をしている。
人生何があるかわかんないなぁとショウタは爺くさい感想を抱いた。
その感想が顔に出たのか、ちらりとテレジーが呆れた顔をした。

暫くして船が動き出すと、人々が少しずつどこかへ集まっていくのに気づく。何かイベントがあっただろうか。
その時、ずっとショウタの肩に乗っていたウルルが耳をぴく、と立てて、颯爽と奥に走って行ってしまった。
ウルルはすばしこい。慌ててショウタが追いかける。
「どうしたんだろう?俺行ってくる」
「俺らも行ってみるか。おい、お前もたまには付き合えよ」
「嫌だ」
「いこうよいこうよテレジー君」
「なんでだ。おい離せくっつくな」

行き着いた場所は船の奥。メインホールから少し離れた場所。
そこは開けたスペースだった。

ウルルを抱えあげたショウタは辺りを再度見渡す。
数人ほど集まっている。どこかしら期待に満ちた表情をしている彼らは一体何をするためにここに来たのだろう・・・。
すると、中央においてあった円形のステージから、マイクを持った人物が右手を広げて大声で叫んだ。
一瞬ハウリングして、きぃんと嫌な音が空間を走った。

「レディースえーんどジェントルメーン！
さぁさ始まりました今回もやっちゃいますよ船内最強伝説！
長距離旅客船”アジューレ”の名物イベント！ガチサシタイトルマッチ！」
「何あれ？」

率直な感想を抱く。
その時、
「あっれー！？なんでお前らここにいるわけ―？」

どこか軽めの声をかけられ、全員が神経をとがらせて振り返った。
その声は癖があり、忘れようがない。
振り向けば紺青色の髪を後ろで一つにまとめた背の高い男、オーレンと、鎧で身を固めた人物がいた。

「オーレン！どうしてここに！？」
「いやいや、それは俺が聞きたいよラルゴ～」
「そこー！司会者の話はちゃーんときいててくれよっ！参加するならなおさらだぜっ！」

舞台から指さされると、一斉に周囲の視線を集めてしまう。
反射的に口を噤めば、司会者は話を続ける。テンションは非常に高い。

「さーてさて！もう知っている人たちも大勢いると思うが俺は優しい司会者だ。すべてを説明させていただく！
ガチサシタイトルマッチとは一対一の競技だ。
武器あり魔術ありの特設ステージ！ルールはただ一つ！人殺し、だめ、絶対！
それを守ってこの船で一番強いものとして君臨したものには金貨３０枚！」
「金貨３０枚！？」

目が飛び出るほど驚いたのはショウタだけではない。
そんな大金、それがあれば旅の資金繰りに困ることはない。
今まで節約しながら、時折持ち物を売ったりちょこちょこと仕事をしながらここまで食いつないできたが、それだけの大金があればぜひ手に入れたい。
ショウタは先ほどまで全く興味のなかった司会者のほうを食い入るように見つめる。
他にもトロフィーだとか、〝アジューレ〟乗り放題とかいろいろ特典はあったが、何よりも金貨が魅力的だ。

「さぁさこのマッチに参加したい猛者ども！
受け付けは今から一時間！こぞって参加してくれー！！」

ショウタは今ここにいるメンバーを確認して、そそそっと受付に走っていった。
慌てて止めたのはルーマだった。
ショウタの肩を掴んで彼を引き止める。
「ちょっとまってショウタ！もしかして参加するの？」
「あ、大丈夫。みんなの名前は俺が代わりに書いてくるから」
「全員！？」

「当然でしょう。６人で参加すれば確率がぐっと上がる」
そう言ってすり抜けたショウタはあっという間に受付所に行ってしまった。止めても無駄だった。
「なるほど！ショウタは金につられたな！」
「納得すんなよツァイ。いや、俺は別に参加してもいいけどよぉ」
「俺は断る」
「書いてきたよー。６人分」
「しょうがないな～。私の魔術なら向かうところ敵なしだよぉ～」

気乗りしないルーマとめんどくさそうなテレジーを除けば、比較的やる気には満ち溢れているようだった。

そしてようやく本題。

「オーレン、お前、腕は大丈夫なのか？」
ラルゴがオーレンに声をかける。
彼はグライナー国ルイニでテレジーに右腕を切り落とされている。あれから久しぶりに再会をしたが彼は五体満足でこの場に立っている。
むしろ健康そうだ。ぴんぴんしていた。
オーレンは指さされた右腕を前後左右にぶんぶんと振り回すと、にっと笑って言った。
「あぁもちろん。エルデナの技術をもってすればこんなもん。ただよ、体の傷は直せても、心の傷は治らないってもんだ」
「お前に心があるのか。それこそ心外だな」

毒を吐いたのはテレジーだった。
オーレンはそれを聞き逃さず、つかつかと歩み寄り、テレジーをにらんだ。
釣り目が細められ、口角がこれでもかというほどつり上がる。

笑っているのだ。だがその裏に隠された感情は隠せないほどにじみ出ている。
何も知らない他人が見ればそれは恐ろしいものだ。
しかしテレジーは全くひるまず、むしろ睨み返している。
眼鏡をかけている彼はいつもよりも目つきが悪く見えた。非常に険悪な光景だ。

「よぉ。残酷な王子様。
今日は非番で仕事はしないが、この借りこの場できっちり返させてもらうぜ」
「お断りだ。貸しにしてやる」
「そういうなって。受け取ってくれよ俺の気持ち。
ようは死ななきゃいいんだろ？死ななきゃ。
上までのしあがって来たら俺がお前の腕も足も斬り落としてやっからよ。覚悟しろな」
「ならお前も上まで上がってくる必要があるな。できるのか？」
「心配してくれんの？やっさしぃねぇぇええ」

ばちばちと火花の散る二人に、鎧の人物ががしょがしょと慌てる。
気づいてはいたが、無視していたその存在にラルゴが尋ねる。
「オーレン、これなんだよ？」
「これ？あぁこれね。俺の仲間。お友達」
「・・・ふぅん。こいつも出るわけ？」
「一応出してみる」
オーレンがそういうと、鎧の人間はかなり慌てて手を振る。本人は出るつもりがないようだ。
その人物は慌ててオーレンを説得しようとするが、喋る気配はない。
それをいいことにオーレンはさっさと話を進めてしまった。
「いいじゃんいいじゃん。
じゃー俺試合の順番見てくるし、つかあんたたち敵だから一緒にい

る意味はあんまりないから、この辺でじゃーねー」

振り返ることなく、手を挙げてオーレンは受付所のあった事務局のほうに歩いていった。

鎧の人物もオーレンを追いかけてがっしょんがっしょんと、緩慢な動きで去ってしまった。

腑に落ちぬ表情でショウタがため息をついた。

「まったく・・・あいつらなんなんだよ。

それにあの鎧、薄気味悪いなぁ」

「なんだ、お前あれに気付かなかったのか？」

「あれ？」

ショウタのつぶやきに質問をしたのはテレジーだった。

「テレジー、あの人知ってんの？」

「・・・・・・・・・・・・なんでもない」

そういうと、テレジーはそれっきり黙りこんだ。

暫くするとホールには人が増え、辺りがにぎやかになってきた。

見物人である身なりの綺麗な人たち、出場するであろう面々など様々な人たちがいるこの空間は不思議な空気を生みだしている。

ルーマがとある紙を握ってショウタたちの元に走ってきた。

「事務局からもらってきたよ～。

一発目で僕たちがかち合うことはないけれど、みんな勝ち進んだら第二試合でテレジーとラルゴ、マリとオーレンが当たっちゃうよ」

ショウタの顔が曇る。

それは身を案じる、というより、

「つぶし合いになっちゃうなぁ。確率が・・・」

「お前最悪だな」

「私の心配じゃないんだね、ショウタ君」
ショウタの頭の中は金貨以外いまあるのか、と疑いたくなるような発言だ。

暫くして壁にかかった時計をみやる。時間は１３時少し前。
ルーマが銃を取り出した。
くるくると手のひらで回すと、みんなににこっと笑って言った。
「第一試合がもう始まるよ。
僕なんだかトップバッターみたい。行ってくるよ」
「おう、無茶すんなよ」
「がんばれ！」
「がんばってねぇ」
「・・・ふん」
「優勝目指してね」
「もうやるって決めたからね。もちろんそのつもりだよ」
ルーマは軽く手を挙げるとリングのほうに向かって行った。
その後ろ姿を見送った後、ショウタたちも一旦客席に着くことにした。
ショウタはルーマに手渡されたトーナメント表を見る。
ふと、別枠に書かれた名前に気がつく。
「誰だこれ。なんで別枠なんだ?えっと、ジェレイド・スクイーダー・・・ね」
つぶやいた直後、ショウタの前を歩いていたツァイが立ち止まり、
ショウタはそのまま彼女の背中に衝突した。
ショウタよりも背の高いツァイががっと振り返って、ショウタの持っていた表を奪い取る。
「???」
ショウタは声をかけられず、ただツァイがそれを食い入るように見つめているのを黙って見ているだけだった。
ツァイは暫くそのまま固まっていたが、ショウタにそのまま大人し

く表を返した。
「ツァイ？」
「なんでもないんだ。気にしないでくれ」
そういってすぐに踵を返して歩いて行ってしまったツァイの表情はうかがえなかった。
ツァイにしては変だな、と思ってはいたが、特にショウタはこの場で問いただすことはしなかった。

そして、第一試合が始まった。

51話　一抹のなんとか

観客席に座りながらお菓子とジュースをほおばっているオーレンは、他人の試合を眺めながら自分の番を今か今かと待ちわびていた。
今回の試合もわざわざ休みを取って出向いたものだった。

オーレンのささやかな趣味は、合法的に暴れられる場所には積極的に参加して大暴れする、というもの。
もちろん彼の場合、どういう時と場であっても血気盛んであることに変わりないのだが。
彼の望みはショウタと違って金貨や物欲的なものではない。
純粋に望むのは力であり、自分よりも腕の立つものや珍しい人間には臆せず挑む。
生まれながらの戦闘狂であり、それはたびたび問題を起こしていた。

しかしそんなオーレンを知ってて、むしろその能力を買って彼を雇った殊勝な人物がいる。
それが現上司であるドゥドゥー・ルージュだった。
エルデナは製薬会社であり、研究のために実験体は必要だ。
それを狩る仕事、ハンターとして雇われた。
魔術をそんなに得意としないオーレンは、腕力一つつるはし一つで仕事をこなした。
動物や、人間を相手に。
仕事で十分なほど暴れている彼でも、こうやって非番の日には情報をかき集めてトーナメントに参加する。
段々その目的はわからなくなり、しかしオーレンにとっては当たり前の習慣となった。

「お、あのお嬢ちゃんも勝ったね。これでラルゴたちの仲間はぜー

んいん第一試合通過だ」

ぼりぼりとお菓子の屑を足元に落としながら、オーレンは隣に座る鎧の人物に声をかけた。

あの時のは冗談で、鎧の人物は結局トーナメントには参加をしなかった。

それには理由がある。

「なぁハイドラ。いい加減それ脱いだら？」

オーレンが鎧の人物に声をかけた。

それは暫く黙った後、わずかに声を反響させて答えた。

「うるさいなぁ。しかたがないでしょ。

だって・・・この船にはクインが乗っているし、あぁていうかテレジー君いるもん。恥ずかしくて顔向けできない」

「どっちが恥ずかしいんだよ。それよりも何言ってんだよ。もうテレジーにはばれてたんだろ？」

「・・・」

オーレンにそう言われて、鎧の中の人物、オーレンの仲間であるハイドラは口ごもった。

その中にいればより一層何を言いたいのかがわからないが、オーレンは取り合わない。

もうハイドラに対する興味が薄れたのか、次の試合を見始めた。

正直、ハイドラはまだ生きた心地がしなかった。

試合直前、彼女は声をかけられた。

彼女が最も会いたくて、でも今は再会を喜べない人物から。

『コスプレの趣味があるなんて知らなかったな、馬鹿女』

その声をかけられたとき、さぁっと血の気が引いたのを思い出すと、ハイドラはまた冷や汗が出そうだった。
『どどどどど、どどっどっどっどど？？？』
『俺がわからないとでも思ったか』
『いや、でも・・・おかしいな、魔力の糸は垂れ流してない・・・』

『俺にはバレバレだ。どういう意図だ？』
ハイドラの狭すぎる視界に見えたのは、色白の顔、縁が黒い眼鏡をした青年、テレジーだった。
その紅い目を隠すためだろうか。いつもとは違う視界と違う姿にハイドラはどこかこの会話に現実味がない。
ハイドラは口ごもりながらも、テレジーには素直に話した。
『ここに乗るつもりはなかったの。その、今日は非番ででも次はシャリディンに用があって。
嫌だけどオーレンと一緒に来たの。そしたら、貴方達がいるんだもん』
『いたら悪いのか？』
『そりゃあ・・・だって私たちはテレジー君を捕まえなきゃならないのよ？
オーレンはやる気満々だし・・・あぁそう、腕のこと、彼本気だから・・・。
こんなときに出くわすのは、その、気まずかった』
『お前もしおらしいところがあるんだな』
『・・・それに、貴方達がいるってことはクインがいるってことだから。
こんな狭いところで出くわしたら、私嘘つけないからきっとクインに怪しまれる』
ハイドラは自分の発言を特に問題視はしていない。
素直に彼女は自分が鎧を被っている理由をテレジーに喋った。

しかしそれは失言だった。
しばし沈黙した後、テレジーは静かにハイドラに尋ねた。
その声は非常に落ち着いていて、感情が何一つなく、ただ本当に素直に、言葉を紡いだ。

『なるほど。あの医者はお前らエルデナとつながっているのか』

さぁっと血の気が引いた。
しまった、と思った。なぜ言ってしまったのか。激しい後悔がうずまいた。
カタカタと体が震える。どうしようどうしようどうしよう、と頭の中はいっぱいで、この暗い鎧の中でも目の前が真っ暗になりそうだ。

そのとき聞こえた後頭部からの声。
呆れ半分、残りは冷静に。ハイドラに淡々と告げられる。
『安心しろ。言うつもりはない。
あの女が何を考え何をしようとしているのか、それは俺にとってはどうでもいい。
ついでに俺の体調をどういう意図を持って管理しようとしているのかも、この際関係ない。
お前らがどうこうしようと、今の俺は知る必要がない』
『・・・』
『じゃあな。口軽馬鹿女』

「あぁぁあああああぁぁあーうぅぅうーーー」
「何ハイドラ気持ち悪いんだけど」
そうしてこうして、現在ハイドラはこんなところにいる。
思い出しても後悔先に立たず。頭を抱えたいが腕が重くて挙げる気にもならない。

黙ってこうして座っていることしかできないのだから、地獄だ。
もう過ぎたことは仕方がない。こうなったらこの目的を完遂するまで。
クインに会わないこと。クインにばれないこと。
テレジーは深く聞かなかったが、ハイドラにとってクインは特別な存在だ。
クイン自身はどう思っているかは知らないが、ハイドラにとっては大切な親友だった。
しかし今はどちらも決して相容れぬ立場にいて、仲間ともいえるがそれはどちらも口には出せない。
勝手に葛藤していて、彼女の器量ではそれを処理できない。
「うぅぅおぼおぉぉえおう、帰りたいよぉぉ」
「あ、次俺の番だから。一応応援してくれよ！」
へこむハイドラを無視して、オーレンは軽やかに階段を下りていった。
彼女の心の葛藤など、オーレンにとっては関係のないことだから。

「はーい、全員ちゅうもーく」
第一試合が終了し、２０分の休憩が組まれた。
ショウタたちは集まり、彼の発言に一応注目する。

「なんだかあっさりみんな勝ち進んじゃったね」
「当然だって」
「みんな記念エントリーしたようなもんでしょ」
「お話にならないよぉ」
「だけど、こっから先は決して簡単にはいかないよ。
だってテレジーとラルゴが当たるでしょ。俺的にはショックだな。

ここで二人がつぶし合うのは。
あとマリ。相手は頭がいかれたスプラッタ狂だから」
「俺の級友なんだが、仮にも。
あとちょこちょこいろんな奴らから情報仕入れてきたぜ」
「さすが本職！」

ラルゴがショウタが持っていたトーナメント表を広げる。
すでに第一試合が終わって12人のメンバーが生き残っている。
だが、一つだけ別枠に書かれた名前がある。
ショウタが最初に気付いて口に出した時、ツァイが食い入るように見つめたそれ。
ラルゴは指をとんとんと指し、声を抑えて言った。

「聞いてきたんだよ。ジェレイドってやつのこと。
なんでも前回のこのトーナメントの優勝者らしいぜ。
で、特典のこと、覚えているか？
優勝者は次回シード権をもらえるってこと。
だが実際はシードじゃない。簡単に言えば自由ルールが通用するんだよ、あいつ」
「自由ルール？」
「この試合のルール、10カウントダウン制は基本だが、それ以外あいつの自由になるってこと。
あいつはこのトーナメントを勝ち上がった最後の一人と戦う。それで新しい優勝者が決まるってわけだが、必ずしもそうでなくてもいい。
まぁいきなり割り込んできたらまずいってことだな。こっから先は気を引き締めていく必要があるぜ。金貨のためにもなぁ」

全員がこくんと首を縦に振る。
すると、ツァイが口を開いた。

いつになく険しい顔をした彼女は、全員を見渡した後、言った。
「ショウタには悪いと思うが、全員、ジェレイドと当たったら棄権をしてほしい」
マリがきょとんとした顔をする。
「なんでだよ？」
ラルゴが尋ねる。
ツァイは表情を変えず、答えた。
「私はあいつを知っている。あいつの実力も知っている。
それを見越してのことだ。わかってほしい。
特に・・・」
そして、ツァイはテレジーのほうを見た。
一瞬眉をひそめたが、首を横に振りなんでもないと言った。
ツァイにしては煮え切らぬ、はっきりしない反応にどうも調子が狂う。
そんな彼女の態度を見て、マリの顔も曇る。
だが、それをそのまま良しとしない、職業病の人間がいる。
ラルゴは目を細めると、紙をくるくると丸めた。
肩にとんとんとそれを当てながら、ツァイに近寄る。
「はっきりしねぇな。
あいつが何者でどういうことをしてて、ツァイ、お前さんとどういう接点があったのかが分かれば納得するんだがなぁ」
「ラルゴ・・・」
一瞬ツァイの目線が下に泳ぐ。
だが、ここで時間が来てしまう。
第二試合を告げる合図に、ラルゴがちっと舌打ちをする。
早速、試合はテレジーとラルゴだ。
彼はそのままツァイに向かって、後からちゃんと聞くからな！と言った後、リングに上がった。
テレジーもその後をしぶしぶついていく。
だが、その手をツァイが取った。

驚いたのはテレジーで、彼が珍しく目を丸くしている。
ツァイは顔色をそう変えず、だが少しだけ心配そうに、小さな声で言った。
「テレジー、頼む。ジェレイドがお前に試合を挑んできたら絶対に逃げてくれ」
その声は、二人以外聞こえなかった。
テレジーは腑に落ちぬ表情のまま、一応あぁと返事はするが、彼女の真意はわからない。

「さぁさぁさぁ、みんな腹ごしらえ用足し終わったかー！？
始まっちゃうぜ始まっちゃうぜ第二試合ー！
勝ち上がった１２人はどんな試合展開を見せてくれるのか楽しみだ！」

相変わらずテンションの高い司会者は客席を大いにあおる。
それについていくことなく、ショウタはリングの上に上がったテレジーとラルゴを見た。

「聞く話によるとこの二人、なーんと知り合いだ！こんな早くにぶち当たっちまうなんて残念極まりない！試合とはそういうもんだ！軽く紹介するぜ！初戦で鮮やかな剣術を見せてくれた２．５枚目いい男！ラルゴ・ダイアロットー！」
「おい、誰が２．５枚目だ。．５がよけいだっつの」
「相手は高等魔術師顔負けのクールビューティー！テレジー・レナードスタン！」
「なんだそれは」
「１０カウントダウン制！れでぃ～～～～」

「ファイっ！」

巻きあがる声援。さすがに2試合目ともなるとヒートアップの仕方も半端ない。

声援に押されながら、ショウタたちは二人の試合をはらはらしながら見つめた。

懐のジャケットに手を伸ばしたラルゴは、そのまま細身の長剣を取りだした。

数回振り回した後、右手に剣、左手を帽子に添えて腰を落とし構える。

対するテレジーは初戦から武器を一つも使わず、魔術だけで戦うつもりだ。

”ハシャナール”であることをばらしたくない彼はラルゴと互角に渡り合えるだけの動きができるが、それは一切見せない。

つったったまますっと目を閉じた。

それが合図だ。

ラルゴが右足のばねで一気に距離を詰めた。

彼が蹴った足元の床にひびが入っている。すさまじい脚力だ。

剣を握る右手を左耳近くまで持って行くと、そのまま体をひねらせて遠心力で剣を払った。

突如、響き渡ったガラスが割れるような音に、会場が息をのむ。

ラルゴの剣が破壊したのはテレジーではなく、彼を守るように生えている氷柱だ。

そのままテレジーはたたた、と走り（ちなみにそれは見慣れたショウタたちからすれば手を抜いた走りだ）ラルゴと距離を取ると、振り向きざまに右手を突き出し、指を鳴らした。

ぱちんという乾いた音を合図に、リングに散らばっていた氷の粒が宙に浮き、ランダムにラルゴに向かった。

彼はそれを剣ですべて叩き落とす。
造作もないことで、そのまま二人の動きが止まる。
しばらくまた間合いを取る。

ラルゴは濡れた切っ先を払い、帽子を取る。
テレジーも乱れたマフラーの裾を整えると、一つ息を吐く。
あっという間の攻防に、司会者はあっけにとられていたのだろう。
再びマイクを握り締めた。
「すごいぞー！息を飲むこのスピード感！１０カウント取ることができるのかー！？目が離せないなー！」

ラルゴは構えるよりも前にテレジーに声をかけた。
少し挑発的に、というか挑発するために。
「おいお前、やる気ねぇな」
「・・・は？」
「勝つつもりあんのか？」
「どっちでもいい。ただ、ふっ飛ばされれば起き上がるつもりもないな。
とりあえず一つ勝ち進んでおけば、あの考古学者は文句をいわんだろう。
これ以上めんどくさいことに付き合いきれるか」
「うーわ。うーわー。
そういうことね。てっきりお前さんの実力ってこれぐらいだと思ったわけさ」
「・・・」
前列までなら声がどうにか聞こえる。
ショウタは二人の会話を聞きながら、あぁあとため息をつく。
ラルゴの悪い癖だ。何がしたいのかなんとなくわかる。
情報屋のくせに駆け引きや騙し合いが好きじゃない彼は実はある意味まっすぐだ。

しかしその方向は人の予想外のほうを向いている。
常識的な物言いはするがそれなりに付き合いを続けているショウタからすれば彼はやっぱり頭がおかしいという印象を抱く。
今だってそうだ。
テレジーを挑発して、やりたいことが分かるが、それをどうしてするんだろうかなぁなんてショウタは頭を抱える。

普通ならこんな挑発、相手にさえしないテレジーだが、今日の彼は機嫌が悪いようだ。
ぶわっと彼の魔力が敵意を持ってラルゴに向かう。
ラルゴが再び剣を構える。そして上着をばさっと脱いだ。
その顔は非常に好戦的で待ってましたといわんばかり。

テレジーは目を細め、ラルゴに淡々と感情なく言った。

「そうだ。お前は会ったときから気に食わなかった。
人の周りを嗅ぎまわり、真をさらけ出させようとする。今だってそうだ」
「あぁ。俺は情報屋だ。知りたいと思ったことを知るのが当然・・・」
「黙れ」

さっと、テレジーが右手を挙げる。
途端、びきびきっと床に薄氷が張る。
いや、薄氷というにはいささか分厚い。
ラルゴは足元がすくわれる前に飛びのく。そして着地すると同時に氷がばきんっと大きな音を立てて破壊される。
その破片が舞い上がるとランダムにラルゴに向かってくる。
彼は先ほど同様それを避ける、が、ひとつだけ避け損ない、左腹部に切り傷をつくった。

そのままバランスを崩すのをテレジーは見逃さず、両手を宙にかざす。
彼の上空で水が集まり、ばっとリングを雲が覆う。
すると、最初はぽつぽつと雨が降り出した。
ラルゴは剣についた水を払うと、そのままテレジーに肉迫した。
だが、突如雨が氷の粒に変わり、なんとそのまま雲からつららが降ってきた。
「うっわっ！あぶねぇっ！！！」
慌ててそのつららをぶった切ろうと思った、がそれはできなかった。
濡れていたラルゴの剣にいびつな氷が張りついていたのだ。
「げっ・・・」
ラルゴがテレジーのほうを見る。
その表情は暗く、だが目の奥にぎらぎらと敵意をむき出しにしていて、
百戦錬磨のラルゴでさえ気味が悪い、と思うほどだった。
ラルゴにしてみればたかが１９なんて子供だ。だが、そのたかが１９歳とは思えぬ表情に肝が冷えた。
なんとかつららを回避するが、このままテレジーの神経を逆なでしてしまえば殺されかねない。
どうするか、と思っていると、氷の塊が背後から飛んできて、ラルゴの背中を強打する。
「ぐっ・・・！」
そのまま彼は倒れ、ようやく司会者が１０カウントを取り始める。
テレジーは静かに倒れ伏したラルゴに近づくと、呟いた。
それにはショウタたちも気がついたが、テレジーが何を言っているかはわからない。
だが、テレジーが離れた後、ラルゴが少しだけにやっと笑ったような気がした。

結局そのままラルゴは立ちあがれず、テレジーが勝ってしまった。

「あぁー！ちっくしょー！」

「ふんっ」

そのままラルゴは大の字になって悔しそうに天に叫んだ。

「なんという！なんという圧倒的魔力！

決してラルゴ氏も劣ってはいなかったというのに、なんということか！

この勝負、非常に見ごたえがあるものだったー！俺は今、感動しているー！！！」

歓声がホール内に響き渡り、誰もが二人の健闘をたたえている。

ショウタは最初こそはらはらしたが、なにはともあれ大怪我することなく勝ち上がったことに安堵した。

司会者はすたたたっとリングに上がると、テレジーの腕を取って高々と掲げ、叫んだ。

「勝者、テレジー・レナードスタン！」

歓声が上がるが、テレジーは非常につまらなさそうな顔をしたままだった。

とりあえずショウタはひとつ心配事を終えて、ゆっくりと胸をなでおろした。

だが、その歓声が少しだけ雰囲気を変える。

近寄ってくる人物を見てテレジーが顔色を歪める。

基本他人に対していい顔をできない人だが、ショウタはその表情が物語るものが嫌悪だけではないことに気がついた。

そして近くにいたラルゴは、その表情を以前見たことがあった。

ルイニで見せた、狼狽に近い。

こういうときはたいてい彼にとって恐怖の対象であることが多い。
ラルゴもすぐに跳ね起きる。
彼はどんな相手を見ても、真面目さの中に余裕をはさむ。なのにそれをしない。
テレジーとラルゴを知らぬその人物からすれば、二人の表情なんて気にも留めないだろう。
だが、ショウタにはすぐわかった。

リングに立った男は、きっとこれからよくないことをひきおこすであろう、と。

52話　戦慄

その人物は背が高く、肩幅も広い。
がっちりした体形で彫りの深い精悍な顔つきをした男だった。
燃えるような真っ赤な髪の毛を逆立てていて、不敵に笑えば観客席の女性から黄色い悲鳴が上がる。
その場に立っているだけなのに、どこかざわざわと胸騒ぎを抱くような存在感を放っている彼は、目の前で固まったまま動かないテレジーを見ている。

「つっ・・・いてて、誰だ、あれ？」
いつの間にかリングを降り、ショウタたちの客席の下の方に来ていたラルゴが視線を男に向けたまま、ショウタに話しかける。
眉間にしわを寄せ、そいつをにらんでいる。険しい表情のままだ。
司会者は驚愕の表情をしたのち、マイクを握り締めなおして叫んだ。

「おおーっと！ここでなんと前回チャンピオンの登場だー！ここで出ちゃうのか出ちゃうのかー！？」

「え・・・？」
ショウタが目を丸くする。
つまりあれが、このトーナメントの別枠存在、ジェレイドらしい。
ツァイが絶対に棄権するように言った男だ。

ジェレイドはテレジーの目の前に立ち、ふっと笑った。
年齢はラルゴとそう変わらないか少し下だろう。だがその笑みにはかなりの余裕が含まれている。

決してテレジーも背が低いわけではない。が、ジェレイドが立つと彼が幾分小柄に見えてしまうほどだ。
余裕の表情を崩さぬまま、ジェレイドは固まったまま動かないテレジーに声をかける。
ぐっと低い声が、テレジーの鼓膜に響いた。

「手合わせ願いたいな。かまわんだろう？」
「何を突然。ことわ・・・」
「おぉー！！ここで特別タイトルマッチスタートだ！
連戦となるが、ここは見逃せないなー！！レディー、ファイっ！」
「おい、ふざけるな！」

テレジーの訴えを無視し、司会者は会場のテンションとノリだけで決定させてしまう。
現にジェレイドがそうしたいと言えばそれを覆すことはテレジーにはできないのだが。
「おいおい、まじかよ」
下にいたラルゴが困惑したような表情をする。
それよりも、ツァイが身を乗り出してリングを凝視した。
そして彼女はテレジーの名を叫んだ。
その声にいち早く反応したのは、ジェレイドだった。
ツァイと視線が当たった彼は目を細めると、再びテレジーに向き直って両手を前に構えた。
彼女と同じく、武器よりも体術を専門とするのだろうか。隙が一切ない構えにテレジーは半歩後ずさった。

「行くぞ。覚悟はできているな？」
「・・・やってやれるか」
「そういうな」

だんっと、ジェレイドが前に出てくると同時に、反射的にテレジーは両の掌を自身の前でぱんっと叩く。
それを開くと手のひらから無数の糸状の物が出てきた。
テレジーは手のひらをジェレイドに向けると、糸のすべてが彼に向かって巻きつく。
一瞬、ジェレイドの両腕を拘束するに成功する。が、
「脆弱だな！」
そう言ってすべてちぎり去ってしまい、勢い殺さずテレジーの腹部を膝で蹴りあげた。
「っ！」
それをもろに食らったテレジーはこのままではリングに体をたたきつけてしまう。
回避するため、テレジーは体をひねらせ、うまいこと着地に成功する。
その瞬発力を見てもジェレイドは驚いた風でもなく、さも当然のようにその動きを見ていた。
間一髪のところ、テレジーは腹部を抑えて立ちあがると相当の間合いを取り、唸るような声でジェレイドに言った。

「なるほど。前回優勝者はだてではないな」
「堅気では勝ち上がれんさ」
「くだらんな」
「生きるために鍛錬をしたまでさ。
そう、君が生き残るために力を身につけていったように。
まぁ俺の場合、狩られるのではなく、狩るために、だがね」

テレジーの動きが止まる。
二人の会話は歓声にかき消され、二人以外に聞こえない。
眼鏡の下の表情が変わったことに、ショウタたち全員が気づく。
「どうしたんだろう、テレジー」

ルーマが不安そうに尋ねるが、ショウタにもわからない。
隣でフェンスをぎり、と握りしめるツァイの表情が怖い。
ぎり、と綺麗な唇をかみしめているから、血が出てしまいそうだ。
こんな表情、見たことがなかったから、ショウタは嫌な胸騒ぎを感じずにはいられなかった。

一方テレジーは背筋に嫌な汗が伝うような気がしていた。
目の前にいる人間は、彼が最も毛嫌いし、苦手とする存在。
ハンターだ。
どおりで先ほど、初めて見ただけで嫌悪感と焦燥感が走ったわけだ。

目の前の男は、オーレンのように”ハシャナール”を生け捕りにして研究所に送る仕事ではない。
恐らく、紅い目と紅い爪、そして”ハシャナール”そのものを売買する存在。
テレジーの勘は当たっているのだろう。
目の前の男に近づいてはならない。逃亡生活で身につけた根拠のない勘が脳味噌に警鐘を鳴らしている。
全身からわき上がる恐怖を押さえつけようとしたとき、いつの間にか体が蹴り飛ばされていた。
思考に没頭したからか、こんな命の危険がある状況で隙を作ってしまったことの愚かさに、テレジーは体に激痛が走ってから気づかされた。

その後はテレジーの防戦一方で、どうにかこうにか攻撃を寸でのところで致命的にならぬよう回避するので精いっぱいそうだった。
簡単な魔術を放つ隙はあってもそれが決定的なダメージを負わせるには至らず。
かといって高度な魔術を練れるほどの暇はない。
ジェレイドの動きは軽やかで、かつ一つ一つの技が重い。

涼しい顔をして連続的に攻撃をたたみかける。
少しずつ傷だらけでぼろぼろになっていくテレジーの様子を見ていると、明らかに彼が疲弊していくのがわかった。
その異変に気付いたのはラルゴだった。

「まずいぜ。あいつ連戦だった。
あんまま放っておけば発作を起こすかもしれねぇな」
「あの試合、やめさせられないの？」

ラルゴとショウタの心配はすぐに的中する。
最後にジェレイドの攻撃を回避したテレジーはとうとう立ち上がらなくなった。
肘をついて、立ちあがろうとはするものの、息は絶え絶えだ。
事実、彼の視界はぐるぐると回っていて、不自然なコントラストのせいでちかちかと点滅する風景に負傷とは別で悪心がした。
ジェレイドはゆっくりとテレジーに近寄ると、そのまま彼の後頭部をつかみ、リングに顔から叩きつけた。
ばりんっという嫌な音を立てて眼鏡がひしゃげ、割れたレンズの破片が細かな傷を顔に創る。
そのままリングに落ちた眼鏡をジェレイドは踏みつけて、テレジーの体を引っ張り上げた。
相手を睨むことしかできないテレジーは、息を荒げたままゆっくりと右手を突き出す。
それもあっさり封じられ、今度は背中から叩きつけられた。

暫くジェレイドの攻撃を見ていたショウタが、あることに気付く。
それは、ジェレイドが必要以上にテレジーの顔、特に目に攻撃を仕掛けていたことだ。
最初は気づかなかったが、どうしてかと思えば非常に気になって仕方がなかった。

それは妙な不安感を抱かせる。試合とはいえ嫌な予感がする。
そしてその不安はジェレイドの行動でよりいっそう増す。
１０カウント寸前、ジェレイドはテレジーの胸倉をつかむと、そのまま彼を引き上げた。
宙に浮く形になり、１０カウントが止まってしまったのだ。
そう放っておけば、彼の華奢な体が再び投げ飛ばされてしまう。
反撃が弱まったテレジーがぼろぼろにされていくのは、彼らにとっては見るに堪えない光景だった。

「マリ、クインを呼んできてくれ」
ショウタがぽつりと、後ろに座って口を押さえながら絶句していたマリにいう。
彼女はゆっくりとうなづくと、その場から走り去る。
ショウタはフェンスの上に足を掛け、そのまま下に降りようとした。
が、
「結界？」
昇ったはいいが、見えない壁がそこにある。
ひたひたと手に当たり、これ以上体が落ちないようにするためか観客をあらゆるものから守るためのものか。
「どうしよ・・・」
そう思っているさなか、ばんっという打撃音が聞こえた。
ツァイが結界を殴っている。破壊するつもりか。

「おいおい、お前たち、何してるんだよ？」
「どうしたっていうんだよ？」
さすがに周りの見物人たちもただならぬ状況に気付き始め、視線をショウタたちに向けて問いただす。
「連れを助けるんだ。このままじゃ殺される」
代わりにツァイが言うと、観客たちの表情は戸惑いに変わる。
「何言ってるんだ。ジェレイドは殺しまではしないさ」

「そうだ。それにルールってものがある」
「まぁあれぐらいの激しさ、決勝に行けば当たり前に・・・」
「だめなんだ！彼は、テレジーは危ない！」
ツァイが切羽詰まった声で言い、尚も結界を殴り続ける。
彼女の拳が擦り切れはじめ、血がにじむ。
それでもツァイは結界を壊そうとする。
すると、黙って見ていたルーマが二丁拳銃を構え、ツァイの横に立った。
ショウタも懐からナイフを取り出して突き刺す。が、意味はなかった。
そうすると、下から仕方ねぇなぁと声が聞こえた。
「ラルゴ？」
「あいつ失格になるな。まぁそんなこと言ってる場合じゃあないな」
そう言って、あっという間にラルゴはリングの上に向かった。
右腕一本でテレジーの首をつかみ宙に浮かばせていたジェレイドの前に、ラルゴが立ちふさがる。
司会者が声を出すよりも早かった。
ラルゴは細い剣でジェレイドの腕を斬り落とそうとした。
その一瞬ジェレイドが手を離した隙に、ラルゴはテレジーの体を奪還した。
彼を抱えたまま後ずさり、間合いを十分に取った後、リングの外にいた司会者に叫んだ。
「おい！こいつを失格にしてくれ！負けだ！ジェレイドの勝ちにしろ！」

突然の乱入に戸惑う観客もいたが、ジェレイドの試合を見れて大興奮した様子で、ホールは歓声に包まれた。
司会者はあっけにとられたまま、一瞬ジェレイドのほうを見る。
ジェレイドは観念したように、薄く笑うとリングから降りた。

「な、なんという強さ！なんという力！
われわれは再び一年前の興奮を見る機会を与えられたー！
ジェレイド！次はどんな力を俺たちに見せてくれるのか楽しみだー！

おっと、俺はレフリーも兼ねているんだった！
勝者、ジェレイド・スクイーダー！」

歓声の中、ラルゴはテレジーを見る。
目の下に痣のような隈ができ、息も荒い。
額から血が流れ、目の上に打撲跡がある。指一本動かせないのか、ラルゴに掴まれていても逃げるそぶりを見せない。
というか、気を失っているのではないかと危惧するほどに。

ラルゴはそのままリングから降りると、一旦ホールから出ようとする。
それに気付いたショウタたちも観客席から去り、ラルゴの元に走っていった。

「ははっ。あいつもついてねぇなぁあ。
それにしても前回優勝者がそっちの人とはな。驚いた驚いた」
「・・・オーレン、どういうこと？」
「あぁ？あいつはコレクターを雇い主にもつハンターさ。

しらねぇの？”ハシャナール”の目と爪は紅い。その紅は裏のルートじゃ非常に高値で買い取られるのさ」

「・・・」

ずずっとジュースのストローの音を立てて冷静に淡々と喋るオーレンに、ハイドラは声を失う。

目の前でぼろぼろになっていくテレジーを見続けることは、彼女にはかなり耐え難い苦痛だった。

声を上げることもできず、ただただ目の前の光景に絶句するだけ。

ラルゴが助けに入った瞬間、固まっていた感情が目を覚ました。

カタカタと震えが襲ってきた。次に下まぶたいっぱいに涙がたまっていった。

喉がからからで声は出ず、口からは情けなくもか細い息しかでてこなかった。

一体何が起こったのか、わからなかった。

ハイドラはオーレンの言葉をもう一度頭の中で反芻する。

ハンターといった男、ジェレイド。

そして横にいる元ハンター。

元ハンターと自分がやっていることを考える。

彼は元だ。自分はハンターではない。

しかし、やっていることはハンターとたがわない。問題は生かすか殺すかの差。

・・・私がやろうとしていることは・・・そういうことなの？

会場の入り口付近の隅っこ。
マリが呼んできたクインがテレジーの容体を探る。
医務室に連れていくことはできず、そのまま壁に背をつけた状態のまま。
そっと、クインがテレジーの目の下の痣を触り、言った。
「蒼斑ですね。”ハシャナール”特有の症状です。
このままだと本当に命が危ないのですぐ客室に連れていって休ませた方がいいでしょう」
そう言って立ちあがると、クインはショウタの前にきた。
そして、ふわりと優しい面持ちである彼女にしては珍しく、極めて厳しい表情をした。
その表情はショウタを責めていると言っても過言ではないかもしれない。

「ショウタさん、どうしてこんなことになったのですか？
どうして止めなかったんですか？」
「ご・・・ごめんなさい」

それ以上に言えず、ショウタは表情を曇らせてうつむいた。
擁護するようにラルゴが口をはさんだ。
「いや、俺も早くにとめておけばよかったんだよ。なんかやばそうだとは思っていたけれど」
「ことが起こってからでは色々と遅いんです。今回は本当に危なかったと思います」
「・・・ねぇ聞いていい？あいつ、どうしてテレジーに興味を示したんだろう。強かったから？」

ふと浮かんだルーマの問いに答えたのは、暫く沈黙していたツァイだった。

「それは、テレジーが”ハシャナール”であることを知っていたからさ。
彼は、・・・ハンターだから」

俯いていたマリが、ぽつりと声を漏らした。
身長の低い彼女だから、誰もマリの表情が見えない。

「やっぱり・・・ツァイ、あの人のこと知ってるんだね」

ツァイが天を仰ぐ。
その表情はどこか嘆きに、放心に、諦観に見えた。
小さく息を吐いたツァイは、テレジーのほうを一瞬だけ見て、首を横に振った。
全員が彼女に視線を送る。その間ツァイは何を思ったのか。
そして口を開く。ツァイは先ほどのマリの質問に答えた。

「あぁ。古い知り合いだ。そう、知り合い程度に・・・知りすぎている」

そしてそれ以上何も言わなくなった。
その表情は今や落ち着いていた。その先に踏みこめないような、どこか強固なそれがツァイに張られていて、ショウタは言葉こそ選べど出てはこなかった。

53話　水面に映るもの

事実、やっていることは暴力に近いかもしれないが、一種のショーであるには違いない。
ある程度のルールや設備が整っていて初めてこういう催しはできる。

あの後、大会運営者にショウタは声をかけられた。
先ほどの試合で怪我をしたテレジーがどこに行ったのか、という内容だった。
この試合で怪我をすればすべて無償で治療を施してくれるのだが、ショウタはその申し出を丁重に断った。
仲間に医者がいて、その人を信頼しているので大丈夫である、と。
運営者は少しだけ残念そうに眉を寄せると、治療費代といって金貨を1枚手渡した。
すぎるほどの分だが、金ではどうも清算はできそうにない。
ショウタはその金貨を手のひらの中でもてあそびながら、観客席に戻った。

イベントを兼ねているため、ショウタ達が試合を放棄することはできない。
小さな足がリングを踏んだ。

「よーぉ、お嬢ちゃん」
「・・・」

かんっと、石のリングの上に響く甲高い金属音。
リングに上がったマリの目の前に、オーレンがいる。

「さてさて！次の試合もどうなるのか楽しみだ！
なぜなら逆の性質をもった二人だからな～！！
鬼神のごとき力を兼ね備えた戦いの申し子！オーレン・ヴァイセンハイン！
そして対するは若き才能はいつ満開に咲き誇るのか楽しみな最年少チャレンジャー！マリフォルナ・ルーセント！
レディ～、ファイ！」

相変わらずテンションだけで押し切る司会者の合図とともに、二人は歓声に包まれる。

マリは足を肩幅ほどに開くと、数回深呼吸をした。
大きな瞳がオーレンをじっと見ている。
その目を見返したオーレンは、にぃっと口角を挙げた。
そしてマリに向かって突進した。
オーレンはつるはしを持ち上げない。リングにそのまま引きずったままだ。
やかましい音を立てながら走り、右足で踏み切る。
彼の一撃は決まっていて、そのまま上に持ち上げるときの遠心力で強力な一発を一番最初に食らわせる。
マリはそこまで知っているわけではないが、それを瞬時に見越した。

彼女は近接戦は好まない。
だが、ある程度引き付けておくことはできた。
マリはそのまま両腕を肩の高さまで上げると、体を一回転させる。
すると、彼女の腕に炎が纏われた。
オーレンはそれを寸でのところで回避して、再び間合いを取る。

その退避の瞬間を見逃さず、マリはそのまま人差し指を天に向けた。

「いくよぉっ！」

そう叫べばマリの細くて小さな指先に火球が集まる。

指をオーレンに向ければ火球は勢いよく放たれた。

その火球を睨みつけたオーレンは今度はつるはしを両手で握る。

「あらよっと！」

迫りくる炎にひるむ様子を見せないオーレンはそのままつるはしをリングに突き刺した。

そしてそのまま持ち上げれば、彼が抱えるほどありそうな大きさの石がくり抜かれた。

そんなバカな、ということをやってのけたオーレンはそのまま体をぐるぐると回転させ、ハンマー投げのようにつるはしごとそれを投げた。

マリはすぐさま両手を突き出す。先ほど放たれた火球が彼女の前に集まり、炎の壁となった。

高温の壁にぶち当たり、石はあっという間に溶けてしまったがつるはしは無傷だった。

からん、と落ちたそれはしばらくするとふわっと宙を浮き、オーレンの手に戻った。

その様子を見て、マリが歳の割には落ち着いた声で言った。

「まったく魔術が使えないわけじゃないんだね」

「まぁ俺も得意な方じゃない。

お嬢ちゃんは魔術以外は結構だめそうだね」

「必要ないもん」

「必要ない、ねぇ。まぁいいけど。

そういやさ、あいつはどうなったの？」

オーレンがつるはしを構えなおす。

マリの表情が固まったことをオーレンはもちろん見過ごさない。
オーレンはいくつも考えうる言葉の中から、一つだけを選びマリに投げかけた。

「お嬢ちゃん、ハンターって知ってるか?」
「ハンター・・・」
「世間知らずの箱入り娘にゃわからんか」
「どうしてそれを聞くの?」

マリが再び手を挙げた。
円形のリングに沿って炎が上がる。
そこには炎を燃え上がらせるものはないのに、まるで物が燃える音がする。
いよいよ声は外に漏れず、マリはオーレンに尋ねた。

「テレジー君を傷つけたあの人のこと?」
「ジェレイド・スクイーダーって言ったか。
俺はあいつのことは知らないさ。でもさ、同じであるかどうかはわかる。
勘だよ勘。長年のってやつ」
「そう。あの人・・・ハンターなの・・・」

その表情の変化さえもオーレンは見逃さず、彼は一旦腰を落とすと再びつるはしを投げた。
はっとなったマリが慌てて体をひねる。
間一髪。彼女のスカートの裾がわずかに切れただけで怪我は負わなかった。
あんなものが体を貫通したらと思うと、一瞬肝が冷える。
マリは気を取り直して再び意識を集中させようとした。

しかし事態は本人の無意識のところで進んでいた。

纏わせた魔力はすべてマリの管理下にある。
だが、どこか違和感を感じる。
思わずマリは目を開けた。
先まで感じる魔力にムラがある気がするのだ。
すっと手を伸ばすと、彼女の腕に蛇のごとく炎がからみつき、放たれる。
オーレンめがけてそれは走る。が、
「うおりゃ！」
オーレンの気合い一発。
彼は大きくつるはしを振り下ろす。
宙を走った炎の大蛇はばんっという音を立てて霧散してしまった。
その光景にマリは一瞬ひるんだが、もう一度体勢を立て直そうと指を鳴らす姿勢を取る。
が、

「・・・っ」

ばちりと指に電気が走った感覚がマリを襲う。
右腕を抑えた彼女は一歩二歩と後ずさる。
オーレンはつるはしを肩に担ぐと、ちらりと観客席のほうを見た。
ショウタたちのほうを。
実際に彼が目を向けたのは、マリを心配そうに見つめるツァイだった。

彼は正面、マリに向き合うと、表情なく淡々と語りかけた。

「お嬢ちゃん、お嬢ちゃんは若いのにそれだけの魔力を練れて使うことができる。

いままで俺が出会った中で最も若く、指折りの才能を持っていると思うさ。
だけどさ、お嬢ちゃんはまだまだ駄目だな。
”その魔力を使わせることを意図されている”にもかかわらず、まだまだ未熟だ」
「何・・・？」
マリが大きな目を細め、眉間にしわを寄せる。
未熟といわれたことが勘に障ったのか。オーレンが強調した言葉に気付かない。

オーレンはつるはしをくるくると回転させた後、会話を続けた。

「感情のコントロールがまだまだだってこと。
お嬢ちゃんぐらいの魔術を使えるテレジーだが、あいつは感情によって動いた分の振れ幅さえもすべて把握している。
だがお嬢ちゃんにはまだまだそれはできていない。
お嬢ちゃんは今無意識に別のことを考えていて、それが気になって仕方ない。動揺している」
「・・・」
「あのハンター、というかジェレイドってやつ。
ハンターって知る前から気がかりで仕方がないってことでしょ」

マリの表情が一瞬曇る。
だが彼女はきっ、と顔つきを変え、両腕を振り上げた。

「関係ないもん！
適当なこと言わないでよ！私の魔術をバカにしないでよねぇ！」

最大限の魔力をぶつけてやろうとしたとき、マリの視界からオーレンが消えた。

消えたということに気がついた時にはすでに、マリの体はぐらりと揺れていた。
目の前が真っ暗になった。
ちかちかと暗闇に星が舞う。体を打ちつけた衝撃さえあいまいだった。

あれだけの大勢の中にいるのに、なぜかマリにはツァイの声が聞こえた気がした。

自分を呼ぶ声。聞きなれている声。
マリはその声に問いかけた。

・・・ツァイ、どうして、言ってくれないの？

途中で発動をやめたマリの魔術が彼女を中心に放出された。
結界で守られたショウタたちは、マリの体を案じた。
一瞬の出来事だった。
オーレンがマリの背後に立ち、彼女の頸椎に手刀を食らわせたのだ。

マリが気付かなかったのは、彼女にその才がなく、また魔術に集中していたからだと思われた。
彼女の小さな体はそのままリングに倒れ、司会者がカウントを取る。

このままマリが立ち上がれるとは思えない。

ショウタはある意味安堵した。
マリが五体満足で大きな怪我をしなかったからだ。
テレジーの件以来、ショウタはだんだん金貨に対する執着心が薄れていった。
これ以上怪我人が増えることはさすがのショウタも望まない。

しかし、カウントが8になったとき、会場がどよめいた。

「マリ・・・！」
ショウタの横にいたツァイが叫ぶ。
倒れるマリから離れたところに立っていたオーレンも少しだけ驚いたような表情をして見せた。

「お嬢ちゃん、立ち上がれんの？」

ふらふらとしながらも、マリが2本の足で立ち上がった段階でカウントは失効された。
「すごいぞー！若いってすごい！
なんというガッツ！まだまだ試合は続くってことだー！」
司会者がテンションを最大にあげて叫ぶ。
その声さえ今のマリにはつらいものだった。

視界は未だに冴えず、酷い吐き気がする。
マリは先ほど散らばらせてしまった魔力を回収するため、目を閉じる。
回復魔術はこの世に存在しないが、魔力を使って細胞を活性化させて身体の疲労回復はできる。
外に出した魔力を血に戻せば少しずつ気持ち悪さも回避できる。
それに気付いたオーレンはつるはしを捨てて、そのままたったったと走る。

あっという間に近づくと、右足で彼女の横腹を蹴った。
叫ぶこともできず、マリはそのまま飛ばされ、再びリングに体を打ち付ける。

「あんとき黙って寝てれば終わったのに。
俺、結構お嬢ちゃんのことは気にいってんの。
おもしろいからさ。だからお手柔らかにしてやってるけれど、あんまり刃向かうなら痛いよ？」

それでもマリは立ち上がる。
今度は魔力を攻撃に使う。
きっと大きな目がオーレンをにらむが、視線は定まらない。
右手を突き出し、指をパチンと鳴らせば空中で爆発が起こる。
小規模なそれだが、近くで感じたオーレンは決してバカにできない威力であることを知る。
「そんなこともできるんだ」
「・・・っ」
再び指をならせば辺りに小規模爆発を引き起こす。
ただ、目標が定まらず、オーレンに致命的なダメージを与えられない。
彼はどこで起こるかわからない爆発を間一髪のところで避けながらも、どこか余裕を感じさせていた。

「お嬢ちゃん、お嬢ちゃんはツァイって人とすごく仲が良かったね。
もしかして、不安なの？」
「なに・・・が・・・？」
「そこまで教える義理はないよ。
じゃ、悪いけど終わらせるよ」

オーレンはつるはしを構えると、ぶんっと振り回した。
マリの小さな体をそれで捕えると、彼はマリを投げ飛ばした。
今度ははっきりと、背中が堅い床にぶつかるのを感じた。
その衝撃は強く、マリはとうとう意識を失った。
カウントが１０を超えても起き上がれず、運営者がマリを運んだ。
はっとなってショウタが席を立ちあがったときにはすでにツァイはいなかった。
ラルゴもいない。彼らがマリの元に向かったのは明らかだった。

司会者が勝者であるオーレンをたたえれば、彼は緩慢に首をショウタのほうに向けた。

オーレンはショウタと目を合わせると、あまり興味なさげにすぐに視線を戻す。
そのまま彼はリングを降りていった。
ショウタはそれなりに目がいい。そのわずかな一瞬でオーレンの表情をみた。
みたところで何が分かるでもないのだが。

一方。

こじんまりとした客室。
一通りの治療を終えて疲れたのか、クインはソファでうつろうつろしていた。
その傍のソファから、人影が起き上がる。
ちらりとクインを一瞥すると、無造作に跳ねる茶髪を掻き上げる。
額に巻かれた包帯はうっとうしく、左目にあてられたガーゼが視界

を遮って不愉快だった。
頭が上がればまるで鈍器で殴られたような痛みが走るが、そんなことにかまっているほど彼は、テレジーは暇じゃない。
静かに床に足がつくのと同時に、細い声をかけられた。

「どこにいくんですか？」

声を無視して扉のほうに歩くと、かんっという音がした。
彼が今手にかけたドアノブ。そのドア。目の前数センチ先に刺さったメスがびぃんと揺れる。
その時になって初めて、テレジーは後ろを振り向いた。
ソファに座ったままのクインが笑み一つ向けずにテレジーを見ている。
その深いウィスタリア色の瞳が。

「2度私から逃げることは許しません。患者は黙って治るまで私の傍にいればいいんですよ」
「治ったら戻ってきてやる」
「意味理解してますか？
貴方はまだ動ける状態ではないと思うんですけれど」

テレジーはドアに刺さったメスを抜きとると、それを手の中に仕舞う。
わずかにひきずった右足にクインが気を取られていると、あっという間のことだった。
テレジーは左ひじでクインの頭を押さえつけ、右手に握るメスを彼女の白い左頬にあてた。
ソファに縫い付けるように押しつけられたクインだが、表情が一つも変わらなかった。
なぜなら彼女もテレジーの首筋にメスを突きつけていたからだ。

クインは淡々とテレジーの右目を見た。
そして、それに話しかけた。

「どうしても外に行きたいんですか？」

テレジーは答えない。
彼ならさっさとクインを振り切っていけるのに、黙ってクインの声を聞いている。
クインは少しだけ、メスを握る手に力を入れる。
そのまま1ミリでもずれれば皮が切れるだろう。
だがクインはそうはせず、テレジーに条件を突き付けた。

「貴方の血液を少々いただければ、ここから出るのを許しましょう」

にこりとも笑わずに言い放ったクインの言葉にテレジーは表情を変えた。
それは驚愕であり、思わず口がぽかんとあくほど。
しかし彼女の言葉を理解したのか、くっくとテレジーは腹を抱えて笑い始めた。
クインはテレジーが笑ったところを初めて見た。人並みの感情を持っているのか、と失礼ながら思う。
テレジーは彼女から離れると、手に持っていたメスを握り直す。
ひとしきり笑った後、テレジーは彼女に言い放った。

「瓶を用意しておけ。欲しいだけくれてやる」

クインは立ち上がり、懐から小さな瓶を取り出す。
テレジーはそのまま手袋をはずして手のひらにメスを滑らせた。
あっという間に小瓶を満たした赤をクインに手渡せば、テレジーは

さっさと部屋を出て行ってしまった。
その後ろ姿は決して健康体とは程遠いが、クインは声をかけなかった。
ただ黙って、手の中の小瓶を握りしめて、私回線の電源を入れた。

５４話　開かずの扉は鍵紛失

「ショウタ、ショウタ。何してんの。行くよ」

腕を掴まれ、ショウタはルーマのほうに振り返る。
ルーマは体がもう半分は後ろの出口を向いていて、早くマリの元に向かおうとしている。
前髪に隠れた丸い瞳が焦りを映していた。
ショウタはというと、未だ体はリングのほうを向いていた。
とっくに立ち去ったオーレンのことを考えていたのだ。
さっき、一瞬目があった。そんな気がした。

観客席に戻る通路の途中。
オーレンはハイドラに引き留められた。
彼女は相変わらず謎の鎧は着たまま。声は金属が響いて聞き取りづらい。

「オーレン、あの子、大丈夫なの？」
落ち込んだ声に、オーレンはため息をつきたい気持ちを抑えて答えた。
「なんで俺がそれを気にせにゃならんのだ」
「あんなに小さい、細いのに。かわいそう」

オーレンはつるはしを構え、そのままそれをハイドラめがけて投げつけた。

がしゃんという大きな音を立てて、彼女のすぐ横でつるはしは壁にぶち当たり、からりと床に落ちた。
ハイドラは絶句した。目線だけで落ちたつるはしを見つめる。
そのとき、ハイドラのスイッチが入った。
彼女はすぐに鎧を脱ぎ捨てた。そして被っていた兜をオーレンに投げつけた。
珍しくコントロールが良かったのか、金属の塊はオーレンの頭に当たり、かーんといい音を立てた。
避けられるのに避けなかったのだが、ハイドラにとってはどうでもいいことだった。
ハイドラはヒステリックに叫ぶ寸前のところで自制心を保ち、オーレンに唸るように吐き捨てた。

「やっぱり私、貴方を理解できない。
元々私はそういう世界で生きてきていないもの。
人が人を傷つけて、痛いことをしているのを、平気で見られない」

ハイドラは言葉をうまく紡げないのか、とぎれとぎれ、ぽつぽつと呟いている。
コントロールできない感情をただオーレンにぶつけることしか今のハイドラにはできない。
だが、彼女の立場を考えればその言葉は決して正しくないのかもしれない。
オーレンは指を鳴らし、魔術を用いて投げたつるはしを回収する。
それを肩に担いだ後、ハイドラに言った。

「そうだな。お前がそういう世界で生きてきていないのは知ってたさ。
だけどよ、この前お前さんはその世界に身を投じることを決意したんだろう。

納得したんだろ。
受け入れられないかもしれないけれどさ、かといってそれに葛藤し続けるのに時間がもったいないと俺は思うね。
あのお嬢ちゃんは俺たちと近い世界に入っている。
俺は目の前に現れたお嬢ちゃんと同じリングに立っていた。
俺のすべきことはなんら間違っていないさ。そこでフェミニズムを突きつけられたってお門違いだ」
「・・・」
「あぁハイドラが優しいってことは理解しようと思うぜ。
だがよ、もうそれが優しいってのは勘違いだからやめよう。
決めたんだろ?俺らがこの仕事を請け負った理由を知ったときに。
覚悟したんだろ?」

ハイドラは言葉に詰まったまま、俯いてオーレンの話を聞いている。
彼は持っていた兜をハイドラに投げ渡す。彼女の足元に転がったそれを、ハイドラは拾わない。
そんなことも気にせず、彼はにぃっと口角を挙げながらハイドラに言った。

「ま、俺とハイドラが組まされたのもまぁ運命だな。
俺がお前の覚悟を後押しすることはいつでもどれくらいでもできる。

ハイドラが俺といれば、そういう葛藤とかも麻痺してくると思うぜ。
今のうちだなこんなもやもやも」
「いやよ、そんなの・・・」
「これから先見るものは想像以上のものだ。
耐性つけとかにゃそのうちぽっきり折れるぜ」
「・・・」
「あきらめろ、ハイドラ。

お前が必要とされているんだからさ」

最後に、オーレンはハイドラの肩を数回たたいた。

「元気出せって。

一応医術学問所出てんだから血は大丈夫だろ。気にするな」

「そういう問題じゃない」

「ふぅ。俺だって暇じゃないんだ。手を貸すとはいってもある程度は自分で乗り越えてくれよ。じゃあな」

やっぱり冷たい奴だ、と思いながら、ハイドラは鎧を被った。

ショウタが医務室に入ったときにはすでにマリは意識を取り戻していた。

怪我を治療されて、ちゃんとベッドに腰をかけていて、思ったよりも大事には至っていない。

ほうと胸をなでおろしたが、どうやら別の問題があるらしい。

ラルゴが難しい顔をしてマリに問う。

「マリ、なんであんな無茶なことしたんだよ」

彼の質問にマリは答えない。

目線さえ彼らに向けなかった。

じぃっと大きな目を床に向けたままだ。

「確かに俺は魔術にゃ詳しくねぇけどよ。あれはちと力任せすぎないか？」

ラルゴの前にすっと手を出したツァイが、マリの前でしゃがむ。

小柄な彼女と目線の高さを合わせようとするが、マリはツァイのほうを見なかった。

口も横一文字。非常に不機嫌そうだ。

「ねぇ、どうしたの?」

ルーマがこそこそとラルゴに尋ねるが、ラルゴだってわからず首をかしげるだけ。

「ここにいたときから結構機嫌が悪いんだよ。負けたせいかね」

「まぁマリらしいけれどさ。気にしなくていいのかな?」

「そうかもなぁ・・・」

だが、彼女の不機嫌はそれだけではない。

「マリ、どうした?私には喋ってくれないのか?」

ツァイの質問に、少しだけマリの目が動く。

彼女は吐き捨てるように、少女なりに低い声で言った。

「・・・私は、物ごころついたときからずっとツァイと一緒にいたの。

私は教会の主教の娘、ツァイは教会を守る僧兵。

ママが眠ったままの私にとっては家族同然なの。

それなのに・・・それなのに、ツァイは私に隠し事をするの!?」

最初は静かに語り始めたが、どんどん語尾が強くなっていく。

ツァイは切なそうに眉を寄せて、再びマリの前にしゃがんだ。

マリは続けて喋った。

「今思い出せばね、ツァイは自分のことを私にはほとんど喋ってくれなかった。

知ってることもあるけど、知らないこともたくさんある。

ツァイはツァイのこと、すごくすごく大切な真ん中のところ、絶対

に私に言ってくれない！
今まで気づかなかった。そんなこと考えたこともなかったの！
でも、今回のでわかったの！
どうしてなの！？どうしてツァイ、何も言ってくれないの？
私のこと嫌いなの！？言いたくないの！？言う価値もないの！？」
「マリ・・・それは違う。誤解しないでほしい・・・」
「じゃあ言ってよ！ツァイが私に隠し事するなんて嫌！嫌なの！
あいつは誰なの！？ジェレイドは、ツァイのなんなの！？
なんでツァイはあいつのことになると、嫌な顔するの！？」

わなわなとふるえる唇と、ぱちぱちと静電気を帯びる長いストレートヘア。
マリの感情がかなり高ぶったとき、
ショウタはマリの頭にそっと手を乗せた。
ふっと、マリの怒気がおさまる。
どうして？と言わんばかりの顔でマリはショウタを見た。

「ショウタ君・・・？」
「あのさ、俺、マリとツァイの関係とかってあんまり深くは知らなかったんだよ。
うーん、なんて言っていいのかな。
客観的に見えるつながり、縁やきっかけっていうのしか俺たちにはわかんないんだ。
その人が自分にとってどういう意味があってどういう価値があるのか。
それはやっぱり他人には理解できない。こういうときに初めて知ることができるんだと、今思った」
「・・・？」
「だけどさ、マリ。
マリの言いたい気持ちはわかるけれど、マリのその気持ちは、少し

ツァイに気の毒な気がする」
「どういうこと？」
「どんなに自分にとって家族以上に大切な存在であっても、その人のすべてを知ることはできないってこと」

マリの表情がこわばる。
さらにショウタは言葉を続けた。

「ツァイはマリよりも何年もたくさん生きている。
マリの知らないことをたくさん知っていて、見たことのないものを見てきてる。
いいことも、いやなことも。
マリも、自分の嫌な過去とか、失敗とか、人に言えないだろ。
ツァイにももちろんそれがあるんだよ。
言いたくないのはマリのことを嫌いなわけじゃない。
ただね、人の心は複雑なんだ。マリはどう思う？」

ツァイの沈痛な面持ちをみて、ショウタは自分の言ったことを確信した。
優しくマリの頭をなでる。

「そういうものはね、別に一生言わないと決めたことじゃあないと思うけれど、
それをマリが知りたいとか教えろとか催促してはいけないんだよ。
ツァイを信じてあげて」

マリは暫く俯いた後、しかし首を横に勢いよく振った。
「やだ、やだやだやだ！
わかりたくなんかない！そんなこと関係ないもん！」
そう言って、マリはショウタの手を振りほどき、ベッドに横になっ

た。
頭からシーツをすっぽりとかぶり、壁のほうを向いてしまった。
宙に浮いたままの手をひっこめたショウタは、小さくため息をついた。
そして、三人のほうに振り返った。

「みんな、いったん外に出ようよ。
マリ、ゆっくり休んで」

優しい言葉をかけるも、マリは無反応だった。
医務室を出て、最初に口を開いたのはラルゴだった。

「なんだよ、お前真面目に語っちゃったりして。そんなキャラじゃないだろうに」
「うーん、そうなのかな。
でも、なんだかそんな感じがしたんだよ。
マリって、ツァイを一番近しい人として置いているだろ。
だけど、一番近しいからといってすべてを知っていて自分の思うどおりの人間関係を築けるとは限らないと思うんだ。
マリはまだそういうの、認めたくないんじゃないかな」
「お前、大人だな・・・」
「ショウタ、すまなかったな」
ツァイがショウタに礼を言う。その笑顔にいつもの溌剌さはなかった。
「元はと言えば、私がちゃんと言っていればよかったんだ」
悔いるツァイにルーマが声をかけた。
「無理しないほうがいいよー。言いたくないことなら無理に言わない方がいいよ」
「ありがとう、ルーマ。

私とジェレイドの関係は、あまりよいものではない。
それに、ジェレイドのことを知れば、奴の知り合いである私に疑問を抱かないわけがない。
マリもきっとそのことを不安に思っていたのだろうし、みんなもきっと不審に思っていることだろう」
ショウタは首を横に振った。
それが何を否定するのかは、曖昧だ。

「ツァイ、僕たちこれからどうすればいいかな」
ルーマが尋ねる。
「これからか・・・」

ツァイが腕を組む。
と、その時彼女は勢いよく振り返った。
廊下の先。全員の視線がそちらに向いた。

「やぁ。あの女の子の調子はいかがかな?」
「ジェレイド・・・!」

こわばったツァイの顔を見て、ジェレイドはこの場にそぐわぬ穏やかな笑みを向けた。
細い目が一人ずつに向けられ、ジェレイドはツァイに再度声をかけた。

「そういえば彼はどこに行ったのか、教えてくれないか」
「ジェレイド・・・それを私がするとでも思うのか!?」
「そうだな・・・俺がよく知るツァイなら」
「っ・・・!」

びりびりとした緊張が二人の間に走る。

その間に割って入ったのは、ショウタだった。
ツァイの前に立ち、ジェレイドと視線をぶつける。
ジェレイドは最初少しだけ驚いた表情をしたが、すぐにまた余裕を見せる。
ショウタは数回小さく呼吸を整えた後、ジェレイドに話しかけた。

「さっきはどうも。弱ってた連れをぼこぼこにしてくれて」
「気にしているのか？あれはほんのちょっとした挨拶に過ぎないよ」

「もう彼のこと放っておいてもらえない？ツァイのこともだ」
「ショウタ・・・？」

ジェレイドが眉をぴくりとあげた。
怪訝そうにショウタに声をかけたのはツァイだった。
ショウタはツァイのほうを向かず、ジェレイドの目をじっと見たままだ。
会場にいるときに感じたぞっとするような笑みが、いまは頭にくる。

ショウタは眉間にしわを寄せてジェレイドを睨みつけた。
ジェレイドはショウタの申し出に冷笑で答えた後、少年のまっすぐな瞳にこう言った。

「面白いことをいう。
なら、勝ちあがってきてもらおうか。君でもいいし、もちろんツァイでもいい。
そうすればそちらの条件を考えてやってもいい」
「じゃあ俺が君に勝ったら無条件で手を引いてもらう。つうかもう構わないで」
「願いは力を以って叶えればいい。それでは、リングで会おう」

踵を返し、ジェレイドは立ち去った。
その後ろ姿を延々と睨み続けたショウタは、彼が曲がり角を曲がったところでようやく、ふぅーとため息をついた。
そして、
「よし」
と一言だけ言った。
もちろん、よしではない。

「ふざけんな馬鹿。何やってんだよ」
「馬鹿じゃないのショウタ」

ラルゴとルーマから一喝。
三人のほうを振り向いたショウタに向けられたのは、ラルゴとルーマの冷たい視線と、珍しく不安そうな表情を浮かべるツァイの視線だった。
ラルゴがショウタに言う。

「お前さ、棄権とか放棄とかそういう考えはないわけ？
もう充分だろ。どうせ3人しか残ってないし、やり続ける必要がない」
ショウタはうなったが、納得するように首を縦に振った。
「試合としての価値はもうあんまり感じてない。
ただ、ツァイがこのままつらいまんまだとさ、マリもつらいだろうしさ。
あと、純粋にテレジーの敵は殺す」
「お前って・・・」
「ショウタ・・・私は別にどうってことない。
しかし、マリのことを案じてくれることには感謝するよ」
ツァイがぺこりと頭を下げる。
そして顔をあげた。その目には先ほどまでの不安が消えかけていた。

「元はといえば私の問題だ。
いつかいつかと先延ばしにしてきたつけをまさかここで払わされることになろうとは。
・・・しかし、ショウタ、ルーマ、試合が残っているのは私たちだけだが、やはり無理をさせたくはない。
いざというときは棄権してくれ」
そう言ったツァイに、ルーマはにこにこと笑顔で返す。そして、言った。
「ショウタの覚悟を聞いちゃったら僕だってそこそこ全力出さなきゃだよ」
「そこそこで全力って・・・」
ショウタは気合を入れると、ルーマに向かって笑って言った。
「打倒ジェレイドってことで！がんばろうよ」
ここまでなればツァイはもう呆れてしまった。
我ながら雑な考えだなぁとショウタは思いながらも、体の底から湧き出る闘志に後押しされてしまった結果だ。
「ははは・・・もう、変な流れになってしまったな」
「あー、俺も勝ちのこっときゃよかった」
「ラルゴの分まで頑張ってくるよ」

暫くするとスタッフがショウタを呼んできた。
次の試合が始まるらしい。
会場に行く前に、ツァイがマリの病室の扉をたたいた。
扉は開けず、ツァイは外から声をかけた。

「マリ、行ってくる。ゆっくり休んでいてくれ。後でまた来るから」

中から返事はなく、それでもツァイは納得するようにうなづくと、

ショウタたちとともに歩き出した。

55話　船外雑談・前編

ダニア国にて。

広すぎず狭すぎない部屋の中、テーブルの上には丸いガラスでできた水槽がある。
その水槽をじっと見つめるのは、この城から出ることができない女性、セラー・ドートロイ。
ゆらり、と水面が動くと、水槽の中に透明なガラス玉が入っていることが分かる。
静かに、白くて細い手が水槽に入る。
ゆっくりと取り上げたガラス玉はセラーの掌に乗るほどの大きさ。
垂れ落ちたしずくが水面に当たってぽちゃ、と音を立てる。
大きな深海色の瞳がそれをじっとみつめたあと、彼女は振り返った。

「ユピ、彼はどうでしたか？」

優しい声が彼の鼓膜に震える。
口をつけていたティーカップをテーブルの上に静かにおいて、ユピは足を組み直した。
あつらえた調度品が並ぶ塵ひとつない部屋に、ユピは相変わらず不似合いだった。
今日の寝癖は左側がひどい。

「んー、元気そうだったよ。思った以上に。
聞いて驚くなよ、セラー。テレジーのやつ集団行動してるんだ。
他人とまともな会話ができるとはあんまり思ってなかったんだよ、失礼だけどさ」

垂れ目が細められ、目じりにしわが浮かぶ。
さながら名があらわすように、まるで我が息子の話をするようなそぶりで。
それを聞いたセラーは、ガラス玉を両の手で大事そうに抱えながら、ユピの前に座った。
じっと大きな瞳がユピを見つめる。
感情のともらぬ表情、多くを語らぬ口だが、ユピにはセラーが何を言いたいのかなんとなくわかる。
付き合いが長く、
それ以上に彼女に特別な情を抱いているから。

「一番一緒にいるのは医者の女の子だよ。
ありがたいことにテレジーの体調を見てくれている。
テレジーもあの子には結構心を許してるんじゃないかなーって思う。
俺的にはお似合いだと思う。あの女の子、がちゃがちゃしてないし」

そこまでは聞いていない、と言わんばかりのセラーの視線に気づき、ユピははたと口を噤む。

「えー、ごほん。
他に誰がいるかだよね。
えーっと、情報屋の局長。俺が結界張り直したって言ったでしょ。
そこの人。
あと教会の主教の娘さんとその護衛のお姉さん。
うん、そこらへんはまぁまぁ訳ありそうな感じで旅をしているって感じだったね。
あ、あとね。
ちょっと普通じゃなさそーな子が二人いた」

ユピの発言にセラーが首をかしげた。
先を促すようなその動作に、ユピが少しだけ眉を寄せながら話す。
「あー、一人はね。フィオに名を奪われちゃった子だよ。
ほら、それはセラーが視ていたじゃないか。やっぱちょっと変わってた。
で、もう一人の子。以前俺もあったことがあった。
ショウタって子なんだけれど。
この前会った時はなんか違うなって感じたんだよ。
セラー、わかるか？」

ユピの問いに、セラーは首を横に振った。

「視たいと思って視られるわけではありませんわ。
それにわたくしはここから動けぬ身。
そしてあの子たちがわたくしのいるところに来るのはまだまだ先の話。
ただ、やはり気になるのは確か。
あの子とのかかわりはなんですの？」
「なんでもテレジーがシュヴァイリンから逃げる際使ったなんだっけ、あの魔術。
それでディタクミナ国フォルって田舎町で出会ったらしい。
あぁそうだ。
彼との出会いがテレジーを”星の記憶”に引きずり出したんだ。
シュヴァイリンではなく、テレジーを」

す、とセラーは瞳を閉じて、暫く黙った。
テレジーが”星の記憶”に関与している。それは望まなかったこと。
それについて思えば心がざわついた。

ユピはテレジーの願いを叶えるために協力している。
テレジーの願いはシュヴァイリンにかけられた呪いを解くこと。
しかしテレジーはその術がどういうものかを知らない。
そこを含め、知らぬことを明らかにするため、テレジーは2年間城を出ている。

約一年前、テレジーと出会ったユピはその旨を聞く前から、テレジーを知っていた。
テレジーがまだその名をもつ前から。
黙って彼に協力しているユピは多くのことをテレジーに告げないでいた。

テレジーのこと、シュヴァイリンのこと。
シュヴァイリンにかけられた術が意味すること。

それを知ることは酷であるが故の情け。
そして、来るべき未来に抗うためにテレジーを無知にしていた。
セラーは、ユピは、シュヴァイリンの術が完遂されることを望まない。
すなわち、テレジーをシュヴァイリンが殺すということを。

それは決して愛しきものを失いたくないという情からくるものだけではない。

セラーとユピは己の目的のためにテレジーを使っているといってもあながち間違いではない。
テレジーを失いたくないという延長線上にもっともっと大切なものが控えているから。
このまま単純に人が殺されるのを見たくないと言えればどれほど救われたか。

しかしそれは偽りになってしまう。この場にいる二人にそれは必要なかった。
共犯者は不安定で、最も気兼ねない。

ユピは懐から煙草を取り出すと、セラーに吸っていいか許可を得る。
セラーは短く、どうぞと言った。
長く煙を吐いた後、ユピはこめかみを押さえた。

「そもそもテレジーが”星の記憶”にかかわるなんて想定外のことじゃないか。
なんでこうも厄介事が重なってくるんだ」

苛立ちながら二本目の煙草に火をつけ、煙と同時に言葉も吐きだした。
そんなユピとは対照的に、セラーは何も言わず、黙って手元のガラス玉を手でもてあそぶ。
彼女の表情は眉ひとつ変わらない。
その理由を知っているユピは二本目の煙草を半分ほど吸い終わった後、はっと思って手を止めた。
不思議と、憤りが収まっていく。
彼は携帯灰皿に煙草を捨て、紅茶に口をつけた。
しばしの沈黙を経て、口火を切ったのはセラーだった。

「そういえば、貴方とあの子の出会ったいきさつを聞いていませんでしたね。
貴方がそこまで思い入れるには、もちろんいくつか理由はありますが、やはり直接出会ったことも一つの要因だと思いますわ。
うかがっても？」

回りくどいことをいうが、結局セラーは知りたいのだ。
17年自分の手元にいた人間が他者とどうかかわっていたのかを。
ユピは少しだけ目線を下げた後、セラーに笑顔を見せた。
へらりとした笑顔は、今日見た中で一番優しそうなものだった。

今から1年以上前。

ユピの家はコアッダ国島嶼部の一つ、ギーカ島にあった。
人口わずか100人足らず。のどかと言えば聞こえはいいが、実際ど田舎だった。
昔は小説家として何冊か本を出したこともあった彼だったが、それも今は休業中だ。
小高い丘の上、誰も近寄ってこないそこに白い一軒家を建て、彼は生活していた。

隠居生活をしていた理由は、わかりやすかった。
単純に外の世界がめんどくさい。

ここなら誰とも接することなく、一人と一匹、何の気兼ねもなく生きられる。
それはユピが長年わずらわしい世界にい続けていたが故の反発、だったのかもしれない。

たまに本土の街に買い物に行ったり散歩に出かけるが、偶然にも”ユピは決して同じ島の人間とは鉢合わせをしない”。
だから今日も一人と一匹で魚釣りに来た。
が、今日だけは違った。

ユピの肩の上に乗っていたウルルが耳をぴくり、とさせた。
そしてあっという間にユピの肩から飛び降りると、一目散にかけだしていった。
「あ、ウルルー、どこいくのさ」
やれやれ、とその場につりざおとバケツを置いて、ユピはウルルを追いかけた。
ウルルが立ち止まったところはボートの舳先の部分だった。
小さい島なので船着き場があるわけではない。
個々人の持ち物であるボートが無造作に浜辺に止められている。
そのボートの先をぐるっとまわると、人が倒れていた。
うつぶせに倒れ、足の先は波が打ち寄せるたびに濡れている。
砂まみれの青年を見て、ユピはしゃがんだ後、すぐには行動に移さず考えを巡らせる。

・・・はて、最近視た夢にあったかね

ユピはセラー同様、予知夢を見ることができる。
すべての未来を見ることができるわけではないが。
彼はここ数年、人とかかわって生きていないのでその力は弱まっている。
だから、こんな非常事態に出くわすのに視ることができなかったのだ、とユピは結論付ける。

なぜなら、ユピは”この島では人と出会わない”からだ。
そんな己の魔術を突破して現れた非常事態、この存在は自分に易か害か。

「ウルルー、この子、どこの子だろうねぇ」
「キュウ?」

「服は濡れてない。流されてきたわけじゃなさそうだ。だけど船もない。どうやってここに来たのか・・・」

「う・・・」

ふと、青年が呻く。
衰弱はしているが命に別条はなさそうだ。
「仕方ないか。
ウルル、彼を家に運ぼうじゃないか」
「キュウー」

どっこいしょ、となんとも爺くさい声を出し、ユピは肩に青年を担いだ。

青年が目を覚ました時、ユピはベッドの横に置いた椅子に座り、本を読んでいた。
なんとなく雰囲気で目覚めを察知すれば、後は一瞬だった。
跳ね起きる寸前のところを押さえつけたのは、透明な柱だった。
体の自由を奪われた青年は目をかっと見開き、ユピをにらんだ。

「当然でしょ。冷静に話をしたいからちょっとは落ち着いてくれよ」

席を立ったユピが青年を見おろす。
見開かれた目が、濃い紅色をしている。

なるほど、”ハシャナール”か。

「っ・・・！！」

青年は唸り声をあげると、両手の拘束を破壊した。
魔力で作られた透明な柱を打ち砕けるのは魔力だけ。
ユピは目の前の光景で彼の魔力の高さに驚いた。
「やるじゃん」
「っ・・・」
「いやいや、見くびっていた。
じゃあ俺も本気出させてもらおうか」

そーれ、とのんきに声を出した後、ユピは右手から剣を取り出す。
それを一回振り払えば、刃は鎖に変わった。
初めて見る魔術なのだろう、青年は一瞬動くことができず、それにあっさりと拘束された。
じゃらじゃらと鳴る鎖の先端がユピの剣につながり、彼はその剣を壁に刺した。
壁にくくりつけられたといってもいい青年は、今度こそ逃げられなくなった。

「っ・・・
話を聞きたいだけの割にはずいぶん手荒いな、貴様」
「本能さ。君は絶対大人しく話を聞いてくれはしない。
だったら穏便に話を進めるためには止むをえないね。
君は何者だ？どうしてここに来た？目的はなんだ？
答えられないのならその爪はぎ取るけれど」

どこが穏便だ、と睨む目にユピはふっと笑う。
暫くにらみ合いをしていてもよかったが、青年は目の前の人間に勝てないと悟ったのか、

黙って話し始めた。

「名はない。ここに来たのは魔術の発動による偶然。目的はあらゆるものから逃げるため」
「ふぅん、”ハシャナール”だから、研究所とか？」
「それもある」
「じゃあ何から逃げてんのさ」
「・・・兄から」
「は？」
「双子の兄がいて、そいつが俺を殺そうとしている」
「何、なんで？おやつとっちゃった？」
「・・・」
「うそ。冗談。
まぁ殺されかけてりゃ逃げざるを得ないよな。
じゃあ、なんで名前がないなんて言うのさ」
「・・・」
「名がないって言うより、名乗りたくないからそういうこと言ってんでしょ。
ただ、それじゃあ困るよね。俺が君を呼べない」
「呼ぶ必要はない」
「親指から剥ごうか？」

簡単に脅してみる。
青年は非常に不愉快そうに顔をゆがめた後、吐き出すように言った。

「　　・レント」
「・・・レント？」
「・・・」
「え、君ってもしかして、ダニアの王子？
兄って言っていたから、君は第二王子のほう？」

まずいな、とユピは心の中でつぶやいた。

彼のことはセラーから聞いて知っている。
ユピの中でユピの知っていることが一つにつながりかけていた。
1年ほど前、ダニアで自分と同じ”大罪人”同士でもめ事が起こったと聞いた。
リネは姿を消し、セラーは城から出られなくなった。
すべてはシュヴァイリン・レントに関わっているがため。
だとすると、いまここに、ユピの目の前にいる青年は・・・

「逃げてきたのか。
わかった。なるほど。合点がいった」
「・・・？」
「俺はセラーの知り合いだよ」

セラーの名を出せば、青年の顔から警戒心が緩んだ。
顔がすぅ、と大人しくなれば、年相応のまだ幼さを含んだ表情が見えた。
だが、ユピの表情だけは険しいまま変わらない。

ユピは鎖を消し、壁に刺さったままの剣を抜いた。
拘束が解けても、もう青年は逃げだすことはしなかった。
ユピは剣を仕舞い、青年に向かって言った。

「暫くここにいなさい。
ここは特殊な場所で安全だ。研究所の人間も、シュヴァイリンも来られない。
理由は、俺と話をすることがたくさんあるから。
大丈夫。害にはならないからさ。ね？」

「・・・」
「そんな顔しないでよー。何かあったらセラーにちくればいいからさ」
「・・・・」

最後に複雑そうな顔をしていたが、受け入れてくれたようだ。
ユピは静かに部屋を出て、階段を下りる。
階段の下で待っていたウルルを抱えあげると、キュウ、と小さく鳴いた。

「さて、これはつまり、そろそろ俺も外の世界に出ろっていうことだろう。
セラーと連絡が取れればいいんだけれど、あそこは通信系はすべてアウトだし・・・」

どうしたもんかな、と悩みながらも、ユピの表情はそこまで困ったものではなかった。
むしろ、そこには決心が含まれていた。

彼女が、セラーが長い時間をかけて緻密に練ってきた運命の一つが今手元にある。

知るべきことは、多すぎる。

56話　船外雑談・後編

ユピはその日のうちに、ウルルを使いに出した。
ウルルは頭のいい生き物で、ユピの言うことを大方理解している。
ユピはウルルの首に手紙をくくりつけ、ウルルにこう言った。

「海を渡り、大陸を横断してダニア国王都グーズに行くんだ。
会うべき人は、この手紙に宛てた人。わかるかい？」
「キュウー」

ご機嫌そうに鳴いたウルルはユピの手を離れ、丘をかけ下りて行った。
その後ろ姿を見送って、ユピは家の中に入った。

青年がやってきて三日も経ったが、青年は自ずと口を開くことはなかった。
家の中では好きに過ごしていいと言われたが、青年は一日の大半をあてがわれた部屋の中で過ごした。
無理もないとは思ったが、それでもユピは青年に話しかけていた。
確信めいたことをいきなり聞くわけにもいかないのは、青年の警戒心が強いから。
ユピには腐るほど時間があるので、焦るということを忘れかけてしまっている。
しかしそう悠長なことも言っていられないのだろう。
逃亡者である彼がいつまでもここにい続けるわけがない。

せっかくのチャンスを逃すわけにはいかない。
外界で何が起こっているのか、とか、この青年が何をひきつれてやってきたのか、とか。
警戒心がないわけではなかったからだ。

「　　」

ふと、ユピが名を呼ぶが、返事はない。
青年を無理やり一階に連れてきて、ソファに座らせて食事をとっていたさなかだった。
青年はぼーっと、緩慢にスプーンを口に運んでいた。
ユピが声をかけたのだが、青年は無反応だった。

ちなみにこれが最初ではない。
名を聞いてからユピは頻繁に声をかけていて、そのたびに名を呼んでいたのだが、こんな感じだ。
反応が悪い。
無視をしているとはまた違う。何故反応できていないのだろうか、とユピは徐々に思いはじめた。
もう一度名を呼べば、ようやく目をユピに向けた。

「・・・なんだ?」
「いや、呼んだだけだけど」
「・・・」
「ちょっと、そんなゴミを見るような目はしないでよ~。ごはんうまい?」
「まずくはない」
「まぁ城の御馳走に比べりゃ劣るさ」
「別に。そういうことを言いたいわけじゃない」

そうは言うが、青年は出された食事の半分しか食べなかった。
席を立ち、そのまま二階に上がって行った。
後ろ姿を見送った後、ユピも席を立った。
ウルルが帰ってくるにはまだ幾日か、かかりそうだ。
そろそろ確信めいたことを聞いておかないと、青年はいなくなってしまうような気がする。

あの子、俺にとってのなんだろうな。

ユピは青年のことを知らないわけではない。
セラーの居候する先に双子の王子がいる、という程度にしか聞いていないのだが。
彼らが生まれるよりもずっと前からユピは世俗から切り離されたところで生きていたので、誰がどこにいてどうとか、あまり詳しくなかった。
（もちろん、１０年近く前に一人仲間が増えたことなど知る由もない。）

ふと、気配を感じてユピが振り返ると、そこに青年が立っていた。
出会った時よりは顔色が良くなっているが、どこか暗い表情のままだ。
ちょっと驚いておののいたが、ユピはすぐに穏やかに笑って尋ねた。

「どうした？」
「・・・」
暫く彼は口を開かなかったが、ユピは催促しなかった。
結構待った後、ようやく彼は喋りだした。

「お前はそれなりの魔術師だと思う」

「ははっ。それなりね」
「俺はまじないにはあまり詳しくないが、お前はどうだ」
「そうだな。魔術よりもまじないのほうが専門だと思うよ」
「そうか・・・
お前と会ったのも一つの縁だと思う」
「どうした？」
「願いがある。叶えて欲しい」

一瞬伏せて、上げた瞳は心臓にずん、と来るほどまっすぐなものだった。
それに返すにはどうしたらいいのだろうか。
ユピにはわからなかった。
青年は話を続けた。

「別に、シュヴァイリンをどうしてほしいとは言わない。これは俺の問題だからな。
ただ、今不便に思っていることを解消してほしい」
「ふぅん。そう。で、何を不便に思っているのかな？」
「・・・名前」
「名前・・・か。詳しく聞かせてほしいな」

俺もそれは違和感を感じていたからね。

「俺はこの名前が気に食わない」
「好き嫌いで？」
「違う。
・・・お前にはわからないだろうが、俺はこの名前が違うと思う」
「違うねぇ」
「これは俺の名前じゃない気がする。その違和感を体にも感じて不便だ。

だから、この名前を消してほしい」

なんとも大逸れたことを言ったものだ。
ユピはふぅん、と息を漏らした後、青年の前からいったん離れる。
本棚からいくつか本を取り出し、テーブルの上に乗せて、言った。

「何を隠そう、俺もそれはうすうす感付いていた。
君は俺の声かけに反応しない。
無視じゃないよ。まぁ無視したい気持ちがあるかないかはここでの問題ではないね。
君、今までもそういうこと、たびたびあったでしょ」
ユピの問いかけに、青年は一瞬目を伏せた後、深刻な顔をして言った。
「あぁ。
俺の名前を呼ばれている気がしなかった。
放っておけばよいものの、ここ数年でその違和感が強くなってきた。
ここ数日でお前の魔力を見てから、もしかしたらとそれができるのではと思って」

ユピは一番古い本を取り出し、ざっとページをめくった。
半分ほどめくった後手を止める。
開かれたページに載っていたのは魔法陣と殴り書きのメモだった。
「恐ろしいね。君がここに来たのは偶然じゃなさそうだ」
「どういうことだ？」
「俺はそのまじないを知ってるからさ。
君の願い、叶えてあげられるよ」

青年の目が輝く。
期待に満ちた視線にユピは体の中がぎしり、と軋むような音をたて

た気がしたのを感じた。
ユピが感じていた青年に対する違和感、そして青年が感じている違和感。
青年の言葉から、結論は出た。

ユピは青年の体から名前を取り出すことにした。

「さて、それをする前に君はいくつか知っておかなきゃならないことがある。
これから話すことは難しいよ。だけど、理解しなければ君に術を施すことはできない」
「さっさと話せ」
「やれ、わかったよ」

ユピは本を片手に部屋の電気を消した。
開け放たれた窓はそのままに、青年をソファに座らせた。

「人間を構成する物は肉体、魂、心、そして名前だ。
これは”ハシャナール”である君や亜人種でも例外はない。
そのどれか一つでも欠ければ人を構成することはできない。
そうだね、　　でわかりやすく説明するよ。
まぁ見てわかるこれ、君。これが肉体だ。
次は心。傍若無人に俺に話しかける図太い性格であるそれだね」
「黙れ」
「名前ってのは個体として生まれてきたものに命を息吹かせるものと思ってくれればいい。
うーん、なんていうかね。生まれてから名がつけられなければその個人として成り立たない。
そして魂は肉体、心、名前をくっつけるような存在さ。
こうやって見ると魂ってのが重要かもしれないけれど、そうでもな

い。どれもこれも欠けることはだめなんだ。
肉体がなければそもそも人じゃない。
心がなければそれは人形と変わらないし、名前がなければ存在がわからない。
それだけ密接にかかわっているこの４つ。一つでも欠けたり、不自然なものだったりするとたちまちすべてはバランスを崩す。
君が感じている違和感はもしかしたらこの４つのバランスが悪いからかもしれない。
だが、バランスが悪いからといってそれを取り除くことがよいわけではない」

ユピは青年の反応を見ながらゆっくり話を続けていく。
こういう、概念の話をしても、青年はしっかり理解してくれているから助かる。

「たとえ話をしよう。
君を消す、ためにはどうしたらいいか。
まず一つ簡単なのは殺すことだ。これは肉体の破壊だ。
肉体が無くなれば魂、心、名前すべてが霧散する。
魂は異界へ、心は宙空へ、名前は他の存在に行ってしまう。
次は名を奪う。つまり君から　　っていう名前を消してしまうのさ。
そうすればその人物がその名で生きてきたすべてをなかったことにしてしまう。
君が普通の人間だったら、　　って名前を奪われれば、君は自分が誰かわからなくなるってことさ。
そんでもって次は心の破壊。一番わかりにくいかな。
さっき心のない人間は人形と同じって言ったよね。つまりそういうこと。
んでもって最も簡単にできないことは、魂の消滅。

生まれ変わることさえもできなくなる。
名前、心、魂をなくせば、肉体は遅かれ早かれ朽ち果てる。
つまり、一つでもなくなればすなわち”死”に直結するってこと」

青年の顔が険しく固まる。
先ほど簡単に自分の願いを叶えてくれると言った男。
この邪魔な名を消してくれると思っていた。そしてそれを可能だと言った。
その後にこの話を聞くとは思わなかった。
つまり、自分は死ぬ、そう言いたいのだろうか。
それとも、簡単ではないと言いたいのだろうか。
ことの重さがわからない。
もしかしたら自分はユピに試されているのかもしれない、と青年は思った。
こうやって脅してやはりやめると言わせたいのだろうか。
そう考えれば、名を捨てるという選択肢は自分にとってどれだけの重要性で存在しているのか。
青年が考えに没頭する前に、ユピは話を続けた。

「肉体の破壊以外はどう考えたって普通の人間にはできない。
だけどね、どういうわけかそういう恐ろしいことができるのがまじないさ。
魔術はいくつかに分類される。
基礎魔術、応用魔術、高等魔術、禁術。
その魔術は禁術の一つ。
かーなり危険なまじないってこと。
もともと俺の知り合いの女が持っていたえげつないまじないだよ。
人を殺す攻撃魔術よりもタチが悪いと思う。
その魔術で名を奪われた人間に暗示をかけて自分に都合よく動く人形を作っちゃうってことばっかりしてたな、あいつ。

とまぁ、いきさつはともかくだ。
禁術は施す方も施される方もかなりリスクが高い。
それでも君はやるのかな？
とまぁ、まじないのリスクに加えて死ぬかもしれないっていうどうしようもない可能性があるわけだが。
どれをとっても簡単にはいかないさ。
・・・さて、
ここまでがいわゆる一般論だったわけだけど」

ふわりと風が部屋の中に舞い込む。
ユピは青年の前に立つと、体を近づけた。
そして人差し指をとん、と青年の心臓のあたりにあてる。
何が言いたい、というようにユピの目を覗き込んだ青年に、ユピは至極真面目に答えた。

「君なら名を抜いたところで死なない、かもしれない」
「どうしてそう言える？」
「あせらせないでくれよ。
これは俺の勘なんだけれど、君はふつーの人間とはちょっと違う。
肉体、魂、心、そして名前のバランスが極めて悪い。
で、君の場合、名前がどうやら元凶っぽい。
名前が肉体、心とリンクしてないみたいだ。
酷いことを言うかもしれないけれど、その名前は君の肉体にも、心とも関係がないものだ。
本来ここまでバランスの悪い人間ってのはいないんだ。
言いかえれば、元々バランスを崩している諸悪の根源を取ることが、普通の人間の名前を奪うことほどの影響を与えるのかってこと。
とは言ったって、禁術を使うことに変わりはないし、君が生まれてからずっとその名を持っていたのなら、無関係とはいいきれない。
ここまで煮え切らないことを言ったけれど、ハッキリ言おう。

君に関してはかなり未知数だ。謎だ。どうなるかわからん。
それでもやる？」

青年はユピから視線を外す。
白い肌は青白く、吐き出す息はか細い。
顔色の悪さを気遣ってか、ユピは青年から離れた。
踵を返し、本棚に本を戻そうとしたとき、ぱしりと手首をつかまれた。
「それでも、いい」
「・・・君にはやるべきことがあるんだろう？」
「俺は死なない。と思う。
そんな気がする。だから、やってくれ」
「術に耐えられなくて意識が戻らなかったら？」
「海に投げ捨てろ」
「・・・ハハハ、恐ろしい決意だ」

再び見せた決意。
叶えてあげたい。強い衝動に駆られたユピは、そのまま青年を立たせた。
今までのシリアスさを砕くほど、にぃっと笑えば、彼はきょとんと困惑した。
「わかった。だいじょーぶ。
俺の腕を信じてくれ。俺は君の魂を信じる。
君ならこの禁術に耐えうるってね」
「そうか・・・頼む」
青年はぺこりと頭を下げた。
ようやく、すべて整った。

古い本に書かれていた魔法陣をユピはチョークを使って床一面に書いた。
その中心に青年を座らせ、ユピは魔法陣から出た。
本を床に置き、意識を集中させる。
すると、魔法陣が淡い青色に光った。
緊張した面持ちの青年が反射的に目をぎゅっとつぶった。
まじないを発動させながら、ユピは最後に言った。

「最後に大切なことを言っておく。
名を失うってことは両親からの縁を断ち切るってことを意味する。
すべての命は人と時間とつながっている、それがちぎれるということは、君が朽ちるとき、そのすべてが元の道にたどりつかないってことだ。
それが輪廻の輪から外れることなのか、死してなおの苦痛を味わうことになるのか、今の俺にはわからない」
「別に。今の生に必要のないことを案じるのは面倒だ」
「ははは、やっぱり君は図太い神経の持ち主だ。
さぁ、いくよ。ここからはおしゃべりは抜きだ。
さっき俺が渡したタオルを口にくわえて。舌を噛み切っては今までの覚悟も水の泡だからね」

青年はタオルを口に含んだ。
それを確認すると、ユピは両手を自身の胸の前でぱしんっと合わせた。
途端、光がいよいよ強くなった。
青年の紅い目が見開かれる。魔法陣から飛び出した光が大きくうねり、天井にあたる。
震えているのがわかるが、ユピはまじないをやめない。

このまじないはユピの知る女性から借りたものだった。
ユピは他人のまじないを借りることができる能力を持っていた。
昔、いざこざを起こし、借りるとは穏便な言葉だが、実際は奪ったにほかならない。
奪ったからといってすべて同じように使えるとは限らない。
ユピがそのまじないを使うためには、こうやって魔法陣を媒介にしなければならないし、膨大な魔力を必要とする。
じわり、とユピの額に、背中に汗が伝う。
持って行かれそうになる意識を無理やり引き留めるために、ユピは自身の唇をぎり、と噛んだ。
鉄の味が気持ち悪かったが、そんなことを言っている場合じゃない。

ユピはうねる光に手を向け、そのまま青年のほうに向ける。
まるでユピの動きに合わせるかのように、光が青年を飲み込む。
高濃度に圧縮された、まじないを施された魔力が青年に降り注いだ。

術者であるユピに、その衝撃は推し量れる。
青年はぎぎ、とタオルが悲鳴を上げるほど噛みしめた。
床に突っ伏し、床を素手でひっかくと、瞳と同じ色をした爪が欠けた。
どんなに苦しそうに悶えても、ユピは手を貸してやることができない。その魔法陣の中には入れない。

びりびりと、ユピの右腕にも痛みが走る。
だが、ここでユピが力を弱めれば、集中力を切らせば、制御されない魔力が暴走し、二人ともに危険が及ぶ。
ユピは己の体の衝撃よりも、目の前の青年に心の中で叫んだ。

耐えろ、絶対に。君は、生きなければならない。

突如、ばちばちっという電撃音が体に響いた。
まるで頭の上から落雷を受けたような衝撃に、ユピはまずい、と思った。
自分の意識が飛んだ。それをなぜか認識できたときには目の前が真っ白になっていた。
体が脱力するような感覚に、ユピは頭の中で叫んだ。やばい！と。

そのとき。

ふと、ユピの頭に映像が流れ込んできた。
その感覚は、先視と似ていた。
先視は視たいと思う場面を選べない。
はっとしたときには、どんどんと場面が変わって、でもそれはどこか違和感があって。

これ、過去だ・・・

ユピが思ったことは、どうやら口から出ていたらしい。
鼓膜が響いたとき、瞬きを一つした時、風景が元に戻っていた。

元いた部屋で、ユピは汗びっしょりでその場に立っていた。
息を荒げ、両手を膝についた。
そのとき、自身の右手を見た。まるでやけどをしたように真っ赤で、荒れていた。
痛みはないが、しびれが残っている。
もう魔法陣は光を失っていて、ユピはようやく中に足を踏み入れた。
部屋の中央で倒れる青年を起こすが、彼もとうに意識を失っていた。

「おい、おい、起きて」

ユピが数回揺さぶれば、青年はうぅ、と唸って身じろぎした。
だがすぐに目を開けて、ユピのほうを見た。

「・・・成功か？」
「わかんないけれど・・・」
「わかんないのかよ」
「でも・・・君が一番それを感じられるはず・・・」

ユピの腕から逃れた彼は、一回二回、深呼吸をした。
そして立ち上がり、目を閉じた。
暫くそのままで、だがすぐに変化は感じられたようだ。

「体が、軽い。
違和感が消えている気がする」
「よっしゃ。成功だ」

成功を実感した瞬間、ユピは大きくため息をついた。
どっと体に感じた重み。
久しぶりにこんなに体を酷使した。今日はもう何もしたくない。
青年は先ほどよりもどこかすっきりした顔をしていて、その顔が見られただけでもユピにとっては十分だった。
ふと、彼が目線を落とす。

「お前・・・手」
「んぁ？あぁ・・・まぁ仕方ないか。そんなに痛くないし」
気にしないでよ、と振る手は見ただけでも十分痛そうだった。
青年はきょろきょろと部屋の中を見渡す。
そして、目当ての物をガラス扉のキャビネットの中から取り出した。
それは救急箱で、青年はそれを持ってユピの前に腰を下ろした。

「どうしたの？」
「手当ぐらいはできる」
「・・・そっか。ありがとう」
普段は手袋をしているからか、日に当たらない白い手がユピの手を取る。
簡易的な応急処置をしている最中、青年は何もしゃべらなかった。
ただ、その目に罪悪感を滲ませていることが、ユピにとって気がかりだった。
口調からは想像がつかないが、この青年は思った以上に優しい。
きっと本当はもっと繊細な方に分類されるのだろう。
そう考えれば、この青年が背負っている物のつらさと過酷さがわかるような気がして、気まずい。

「ありがとう」
包帯を巻かれた右手をまじまじと見る。
決して綺麗に巻かれてはいないが、十分だった。
青年は立ち上がり、救急箱を元の位置に戻すと、再度ユピの元に戻った。
今度は腰を下ろさず、立ったまま。

「・・・ずいぶん世話になってしまったな。礼をいう。
お前がいたおかげで、さまざまなことが変わった」
「ほんとにね」

感謝の言葉を述べた青年は、律義に頭を下げた。
そこで終わらせることは、したくなかった。

「今すぐ出て行く、なんていうなよ？」
「・・・え」
「当然じゃない。ここまでしておいて、術が終わったらはいさよう

ならってのはずいぶん薄情だねぇ」
「それは・・・」
「気にしなくていいよ。負い目に感じて逃げるくらいなら最後の最後まで頼ってほしいものさ。
それにさ、君の新しい名前を聞かなくちゃ。
次会った時、君のことを呼べるようにね。
名前を定着させるまじないだってあるんだ。ついでだからセットで施してあげる」
「それはお前にとって」
「あぁ、こっちの方はそんなに大変なまじないじゃないから。禁術でもないよ。
安心して」

その言葉を聞いてほっとしたのか、ようやく青年はユピの前に座った。

「さて、名前かぁ・・・
何か名乗りたい名前、とかある？」
「別にない」
「いやいやいや、考えておこうよそこは。
君が名を抜いても肉体、魂、心のどれも影響を与えなかったのは奇跡に他ならないんだから。
このまま放っておけば最終的にどうなるかの保障はできない」
「・・・わかった。
じゃあお前につけてもらう」
「なんでだよぉ」
「めんどくさい」
「ひどっ。
しょうがないなぁー」

ユピはうーん、と唸りながら、手を顎にあてて考えた。
この目の前に座る青年にふさわしい名前・・・

「・・・君が今いること、半ば奇跡だよな。
いや、そうあるべくしてそうなった。と言っておいた方がいいよね。

それじゃ・・・君の名前は、”テレジー”。
古ニニ語で”奇跡”を意味する言葉、”テルジエ”からなんだけれど、いかがかな？」

テレジー、という音を数回口の中で繰り返した彼は、こくんと小さくうなづいた。
気に入ってくれたのが何よりもうれしい。
もうひとつ、ユピは名前を与えた。

「あのさ、この3日間で君の世話をしてきたけれど、
きっと俺に息子がいれば、こんな風に話をしたり飯を食ったりしていたのかなぁって、なんとなく思ったよ。
こんなに長く生きていれば、やっぱり家族の一人も欲しいと思っちゃうのかもね。
だから、君がよければでいいんだけれど、俺の名前、レナードスタンをもらってくれないか？」

テレジーの答えは、イエスだった。
「・・・俺は、これからテレジー・レナードスタン、と名乗る」
「ありがとう。君は優しいね。
それじゃ、右手を出して」
そう言われ、テレジーは右手を差し出した。
ユピはその手のひらの上に自身の右手の人差し指を乗せた。
ぽう、と温かな光が一瞬ともった後、テレジーの右手をユピは右手

で握りしめた。

「われ、承認したり」

ユピがそうつぶやくと、もう一度二人の手が光った。
その光が消えた後、ユピはテレジーの手を離した。
そして、

「気分はどうかい？テレジー」

声をかけた。
その時見せた反応は、まぎれもない、彼がテレジーであるという証拠だった。

それからさらに三日経った。
ユピの右手の怪我も治り、結局ウルルを待つことなく、テレジーは旅を再開させることにした。
その日、ユピがボートでテレジーをコアッダ国本土の港まで送った。

晴れの多いコアッダ国は、その日も天気がよく、少々温かすぎた。

「気をつけて。
俺も君のお兄さんにかけられた呪いのことを探ってみるよ」
「世話になりっぱなしだったな」
「気にしないでよ。
テレジー、また会えるからさ。それまで元気で」
「・・・あぁ」

軽く手を挙げて挨拶をしたのち、テレジーは駅の方に向かって歩き出した。
それから数分と待たず、ユピの足元に小さな影が飛び付いた。

「キュウっ！」
「ウルル、おかえり」

ユピはお使いに行っていたウルルを抱えあげた。
顎の下をなでてやれば、ウルルは嬉しそうにキュウと鳴いた。
そこには手紙がくくりつけてある。
それはユピが出した手紙の返事。

「御苦労さま。
さて、どうかな・・・」

かさかさと手紙を広げる。
神経質そうな細い字が手紙にぎっしりと書かれている。
久しぶりに手紙を出したが、セラーの字は昔と変わらなかった。
思わず苦笑してしまう。

内容は決して笑えないものだったが。

「・・・そうか。あの子、そういう出自か。
とすると・・・俺が名を抜いて、新しいものを与えても生きていられた理由がわかったな。
まだ書いてある・・・」

次に書かれたことを読むと、ユピの表情が固まった。
海を望む場所に置かれたベンチにふらふらと腰をかけ、目を覆った。

彼女が書いた事実はユピにはあまりにも重い内容だった。
何度も何度も読み返した後、心配そうにユピを見上げるウルルに声をかけた。
悲痛そうな面持ちで。
「ウルル・・・どうやら大人しくのんびりとした生活は終わりみたいだ」
そして、青く広すぎる海に目線をやった。
長い孤独の時間がようやく動き出したような気がした。

紅茶のお代わりを注いだセラーはそうですか、と一言だけ感想を述べた。

「あれから数回たびたび会ったよ。
やっぱり名前ってすごいよ。本当の家族のように思えてくる。
名字だけ変えなくってよかったよ。つながりっていうか、こういうのを縁って言うんだなぁと」
「名を変えなかったのはアイリーンだけですが、そういえば貴方も名字は変えていませんでしたね」
「あぁ。俺にはどうしても全部を捨てることができなかったからさ。
最初は、ただの思い付きだった。
けど、それをあの子は受け入れてくれた。優しい子だよ。ほんと。
その後にセラーからの手紙を読んだけれど、俺も決心がついたよ。
君の力になるってね」

へら、と笑ったユピ。

セラーが表情を自由に作れるのなら、どう返しただろうか。
静かに目を伏せ、落ち着いた声で話す。

「貴方があの子に会ったこと。それはあの子にとっていいこと。
一つの偶然ですが、それを幸運に導いたのは貴方の元ある力による
ものだと思いますわ。
感謝いたします」
「感謝されるようなことはしてないさ。
ただ、今後もそうであるとは限らない。どう転ぶかはわからない。
気は抜けないし、抜かない。そうだろう?」
「えぇ」

セラーがゆっくりとティーカップに口をつけた。
と、その時、
彼女の手の動きが止まる。
まるでセラーだけ時が止まった様に、彼女は微動だにしなかった。

「どうした?」

ユピが声をかけた。
時間にして5秒ほどだったが、ユピには長く感じた時間だった。
セラーがカップをテーブルに置き、手にしていたガラス玉を持ち上
げた。
わずかに中が揺らめいて、淡いピンク色に光ったと思ったらすぐに
それは消えた。

「セラー、何か視たんだな?」

その短い時間で、ユピは彼女が先を視たことに気付いた。
ただ、セラーの場合、特別未来に限ったことではないのだが。

「契約者一行、その中の一人。不思議だといっていた子。ルーマ・ミッドロア、ですね」
「あぁ」
「彼は単に名前を奪われ、記憶を失っているだけではありません。今目の前に立つ人物、それが彼の過去を知っています」
「それって、今後にどういう影響が？」

ユピの目をじっと見て、セラーは口だけを動かした。
その深海色の瞳に見つめられて、心臓を背中が激しく叩いたような気がした。
生唾を飲み込む音さえ部屋に響きそうだった。

「契約に支障が出る可能性が、ゼロではなくなったとでもいいましょうか」

ユピの目が見開かれる。
それは現時点で、よいとも悪いとも取れない知らせ。
先ほどまでの穏やかな部屋の空気が一変してしまった。
次の行動をどうするか逡巡するが、もう彼らにはあれほど有り余っていた時間がない。

満月まで、残りの日は少なかった。
今までの流れの転換となる、運命の日まで。

57話　朔

両手に握る銃に全弾装填し終わり、ルーマは目の前に立ちはだかったジェレイドを見た。

酷い話だ、と思いながら、ルーマは倒れた人物が担架で運ばれていくのを横目で見た。
それはルーマの相手としてリングに上がってきた人物だった。
試合開始からわずか5分だった。
ジェレイドが乱入してきて、ルーマの相手に手をかけた。
驚きを表した時には、相手は吹き飛ばされ、そのまま気を失った。

・・・もうこりゃなんでもありだな。

ルーマはジェレイドを見る。
こんな展開でもテンションを最高に上げている司会者と観客はなんて粋狂なことか。
この船には他に娯楽がないのだな、とルーマはなんとなく冷めた解析をする。

先ほどから一言も口を開かなかったルーマに、ジェレイドが冷笑を浮かべて話しかけた。

「君は、あのメンバーの中で一番若いのかな？」
「マリが一番年下だと思うけれど」
「しかし十分子供と思える年齢だろう。
ここまで勝ち上がったということは、それなりの経験をしてきたと見受けられる」

「どーも」

冷静な会話が繰り返される。
ルーマは未だ両手を下ろしたまま、ジェレイドと十分な間合いを取って立っている。
さて、棄権すべきか否か。
試合に臨む前は根拠のない気合いが満ちていたが、いざ目の前にするとなんとなくまずいことぐらいルーマにもわかる。

先に動いたのはルーマだった。
両手を挙げ、拳銃をジェレイドに向けて発砲する。
ルーマは早打ちが得意だが、百発百中というほどではない。
早打ちで数撃てば当たるだろう、がルーマの悪いくせだった。
ジェレイドはその弾をすべてよけた、が、一発だけ彼の左腕をかすった。
それを確認したルーマは背筋にひやりと冷たいものを感じた。
撃った数は二つの銃を合わせて２０弱。改造に改造を重ねた末にこれだけ装弾できるようになっている。
改造しておいてよかった、とルーマは胸をなでおろすと同時に、ポケットから弾を取り出す。
ジェレイドは撃たれた左腕をちらりと見る。
ルーマの想像通り、あまり彼はその傷に対して顔をゆがめることも関心を示すこともない。

・・・こんなのとどうやって渡り合えばいいんだよ

再び弾を詰め直し、ジェレイドが体を右にわずかに動かしたのをきっかけにルーマは右腕を挙げた。
数発ジェレイドに向けて発砲すると、そのままなぜか前に走りだした。

遠距離の武器を持っていながらあえて距離を詰めてきたルーマの行動に驚いたのだろうか、ジェレイドの動きが一瞬止まる。
さらに生まれた隙をルーマは見逃さず、着地の予想地点付近に連射する。
今度は手ごたえがあった。かすっただけでなく、わずかだが腕に傷をつけることに成功した。
ルーマは前進する勢いを殺さず、再度右腕を構えた。
今度はさせまいと、体のばねを生かしてジェレイドが右足でルーマの右手の拳銃を蹴りあげた。
かんっと音を立てて拳銃が宙に舞う。
誰もがくるくる舞う拳銃に目が行った。そのわずかの間だった。
ひゅんと空気を切る音がした。
ジェレイドが体を引くタイミングが遅ければ、首から血が噴き出していただろう。
拳銃を持たぬルーマの右手には小さなナイフが握られていた。
いつの間に出したのか、それともこれがねらいだったのか。
一瞬会場はしぃんとなったが、すぐに勇敢な少年に大きな声援と拍手が送られた。
今度はナイフを片手で持ちかえ、突きの姿勢を作るが、二度目のチャンスは訪れない。
ジェレイドは素早くしゃがむとルーマの足を蹴飛ばした。
そのままバランスを崩したルーマは後ろに倒れそうになり、とっさに両腕を自身の顔の前に出した。
運が良かったのか、ジェレイドの蹴りが入り、ルーマは場外に吹き飛ばされた。
もし腕を出していなかったら腹部を思いっきり蹴られて再起不能になってしまったかもしれない。

「おーっと！ルーマ君これは場外だー！カウント取るぞー！
ワーン、ツー！」

「ルーマ！大丈夫！？」

ショウタが大声で叫ぶ。
ふぅ、とため息をひとつついて起き上がったルーマは、一旦左手に握っていた拳銃をホルスターに仕舞う。
びりびりと両手が痺れている。折れていないことに関しては自分の体の頑丈さに感謝すべきだ。
カウント8でリングに戻ったルーマは、投げられた拳銃を足を使って拾い上げるとそれもホルスターに仕舞った。

「ルーマ、無茶すんなよー！！」
ラルゴの声が聞こえるが、ルーマは右手を挙げて答えただけだった。

目線はジェレイドに向けたままだった。
ふんっと鼻息を荒げると、ルーマはジェレイドに向かって話しかけた。
「やっぱ僕には荷が重いと思ったよ。
捨て身で攻撃してやっとのこと。これ以上僕には無理そうだ・・・」

あっさりとそう言い放つと、ルーマは両の掌を見つめた。
わずかに震えるそれ。感覚が麻痺していて、戻ってくるのに時間がかかりそうだ。
あきらめるのは簡単だが、そういうのは性に合わない。
ルーマはおそらく一緒に行動する人間の中で一番すばしこい。
いざというときは逃げられる。
そういう確信があった。

「ねぇ、ジェレイド。一つ聞いていい？」
ルーマが声をかける。
ぎりぎり反応できる距離で。

「なんだ？」
「なーんで僕の時にリングに上がってきたの？
ショウタと話をしていたからショウタのほうに上がってくると思ったし、そもそもツァイとは何かとありそうだったし。
僕と貴方は全然関係ないけれど。
あれ？もしかして僕もツァイの仲間だから一緒に倒しちゃおう的な？」

こっわーい、と茶化すように明るい声を出すルーマに、ジェレイドはふっと鼻で笑った。

「やれ、君もまた先ほどの少年同様子供らしくない子供だな。
まだあの倒れたお嬢さんのほうがかわいげがあった。
さらにいうと、先ほどの少年よりも、君のほうが小賢しい」
「・・・」
「手は動くようになったか？」
「・・・多少は」
「そうか。では拳銃を抜け。もしくはナイフを手に持て。
先ほどのように俺に向かってくればいい」

じり、とジェレイドが一歩足を出せば、二歩、ルーマは後ずさった。

テレジーの時と訳が違う、とルーマは感じた。
ジェレイドは自分を戦わせるためにここに上がってきたのか・・・？

数回ぎゅっと手を握っては開き、ルーマは感覚がほとんど戻ってきたことを確認すると、内ポケットから別の拳銃を取り出した。
これはルーマが改造した二丁拳銃ではなく、シンプルなスライド式のものだった。

片手だけで撃てるほど手が万全ではない。
かしゃんとスライドを引くと、両手でしっかりと握る。
そのまま狙うことはしない。構えもしない。

相手が何を考えてのことか探る。だがそんなことができるなんて奇跡が起こらない限りは不可能だ。

すっと、ジェレイドが構える。
反射的にルーマが拳銃をジェレイドに向けた。

ぴたりと時間が止まった、
それと同時か。ルーマの頭にぴしっと電気が走る。
まるで全身金縛りに遭ったかのようだ。体が動かない。
挙げた手を降ろせない。
音が全く聞こえなくなった。
最初ルーマは自分に何かの術がかけられたのではと思った。
だがジェレイドに魔術師としてのにおいを感じなかった。それは今でも変わらない。
なら今何が自分に起こっているのか、ルーマは地面に縫い付けられてしまったような自分の足からじわじわと這い上がってくるものを払うことはできない。
それはいいようのない恐怖だった。

ぽたり、と冷や汗がリングに落ちた。
同時に、ジェレイドの声が鼓膜を震わせた。

「こうして君と対峙するのも、久しいな」

そんな言葉絶対聞くんじゃなかった！
ルーマが心の中で叫ぶ。

こういう意味深なセリフは絶対に自分の過去にかかわっている。
そしてこの男が自分の過去にかかわっているということが、ものすごい嫌悪感となってルーマの体を走る。

気がついたときにはルーマは絶叫していた。
やはり何も聞こえなくて、ルーマは自分が喉が裂けんばかりに叫んでいることには気づかない。
ジェレイドに向けて発砲する。だが、そのジェレイドが見えない。
風景が脳に情報として届いてこなかったのだ。
一体何発撃ったのかわからないまま。

ルーマの体が吹き飛んだ。

会場の空気は二人の事情なぞ知らず、あのジェレイド相手に果敢に攻撃を仕掛けるルーマにわき上がっていた。
ショウタはルーマがヒステリーともとれる叫び方をした時、即座にラルゴのほうを見て、言った。
「あいつ！あいつきっとルーマの過去に関係ある！」
「うわっ、どうしたいきなり」
突然言い放った言葉にラルゴが驚く。
ショウタの横に立っていたツァイが心配そうにショウタを見た。
「それはまた、ショウタの勘なのか？」
「うん。だけど間違いじゃない。
ルーマ、どうするつもりだろう」

試合を続けるのか、ルーマは即座に起き上がると、ジェレイドめがけて走り出す。

そこにいつものあどけなさとか、幼い割にそつないしぐさというものはなく、見たまま必死さが受け取れた。
怪我は大したことなさそうなのだが、油断はできない。

ジェレイドの右腕がルーマのこめかみを殴ると、ルーマの体は再度吹き飛んだ。
さすがに次は起き上がるまで時間がかかり、カウント7でようやく立ち上がった。
ふらふらとして、息を切らしながらも、ルーマはジェレイドに向けた視線を外さない。
かちゃり、とスライドを引き、両手で拳銃を握り締めた。

一瞬の間の後、ルーマが意を決してジェレイドに声をかけた。
胃のあたりからせり上がる不快感を、唾をごくりと飲むことで無理やり押し込めて。

「ねぇ、僕のこと知ってるでしょ。
僕は自分のことを捜すために旅をしてる。
教えて。僕のこと、知ってること、すべて！」

迫るように言い放つと、ジェレイドの顔から笑みが消えた。
その変化を見て、ルーマは息をついた。
隠すつもりはないのだろうか、言ってくれるのだろうか。
こいつは自分にとって・・・いいやつなのだろうか・・・？

だが、ジェレイドはすぐに首を横に振った。
落胆を感じる暇もなく、ルーマは自分が宙に浮いていることに気付き、次に襲ってきたのは背中の痛みだった。

「すまないな。教えることはできない。

だが、ヒントを教えることはできるだろう。
聞こえていれば覚えておくがいい。
ウェイ国のトレローという田舎町。そこが君の出身地だ」

薄れてゆく意識の中、ルーマはそれだけを頭の中に刻み込んだ。

ウェイ国は以前、フィオとクリーマから聞いたキーワードだ。
トレローという田舎町。名前を聞いたがやはり覚えていない。
自分はそこで生まれたというのか。
いつ生まれて、誰から生まれてきたのだろうか。
どうして自分は名を奪われ、一人で生きて行かなければならなくなったのか。
その町はいまどうなっているのか。自分を知っている人たちはどうなってしまったのか。

目を閉じたとき、目じりに温かいものが伝った。

結果として、残ったのは3人だけになった。
ショウタ、ツァイ、オーレン。
途中何度かジェレイドが乱入しているせいで人数が奇数になってしまい、結局最後は3人で対戦することになった。
このまま一人勝ち上がれば、必然的にジェレイドと対決することになる。
ルーマを背負ったラルゴは、そのまま医務室に向かうことになった。

「俺、このまんまじゃ試合見れねぇな。

ついでにマリの様子も見てくる。お前らもあんまり怪我すんなよ」
「あぁ。ラルゴ、ルーマとマリを頼む」
「任せてよ。あいつぶっ飛ばすからさ」

ぶんぶんと両腕を振ってやる気満々のショウタとは対照的に、ツァイの表情は非常に複雑そうだった。
はたとそれに気付くと、ショウタは腕を下ろして、ツァイに声をかけた。

「ツァイには複雑だけど・・・うん、それは申し訳ないと思うけれど・・・その・・・」

ショウタの言いにくそうな言葉にツァイは首を横に振って力なく笑った。

「いや、いいんだ。ジェレイドの今の行動と私の過去は今やもう関係ない。
ショウタには悪いことをしたな。みんなにも。つらい思いをさせてしまった」
「そんなこと・・・」

ない、と強くいえなかったのは、今この場にいない人のことを思ってか。

そういえばテレジーはどうなったのだろうか。
この試合が終わったら見に行こう。
そう思い、ショウタとツァイはリングのほうに歩きだした。

58話　向き合う覚悟

なんだこの光景は、といいたいのはショウタだけだった。
ツァイの足とオーレンのつるはしの柄が激しくぶつかり合い、二人の力が反発する。
そういえば、自分はツァイとまともにやりあうことになるのだが、あまりそれは必要がない気がする。
それでもやらなければならないのだろうか。
ショウタはジェレイドをぶっとばすことだけを考えていたのですっかり忘れていたのだ。
今は半ばツァイを援護する形でオーレンに向かってナイフを振るうだけだ。

「ちょちょっと！俺かなり不利なんだけどー！」

オーレンが体をひねってショウタの突きを回避する。
が、すぐにツァイの腕が飛んでくるので休む暇もない。
司会者はいつの間にか応援席に移っていて、興奮する観客に混じって声援を送っている。職務放棄はなはだしい。

ショウタは逃げるオーレンを追いかけながら叫んだ。
「悪いとは思うけれど、俺は君に興味がないんだ！」
「男に興味持たれたって嬉しくないんだけど」
「俺はあんたを倒してジェレイドと一騎打ちする」
ショウタの宣言に、オーレンが鼻で笑う。
「へぇ、俺からすれば君は一行の中で一番ぱっとしないと思っていたけれど、そんなことできちゃうの？
手負いとはいえ、あのテレジーでさえ歯が立たなかった相手に？」

「たとえそうだとしても、俺だってやらなきゃならないことがある」

「理想も夢も目標も、現実の前じゃ意味ないよお子様。
命が惜しいならここで俺に倒されちゃった方が幸せさ」

ショウタが地面を蹴った直後、体に衝撃が走った。
オーレンに蹴飛ばされた彼はそのままリングの外まで飛ばされた。
だがすぐにショウタは立ち上がると、ツァイの攻撃を防いでいるオーレンめがけてナイフを投げた。
正確な投擲はオーレンの左肩にナイフを刺さるに至る。
ぐ、と唸った後、オーレンは小さなナイフを抜くと、そのままへし折った。
一応司会者は場外ならちゃんとカウントを取っているので、ショウタは慌ててリングの上に戻った。

「ショウタ、大丈夫か！？」
「うん。痛かったけど擦り傷程度だし」
「そうか。無理はするな」

ショウタの身を案じたツァイに励まされ、ショウタは再びオーレンに向き合った。
に、とショウタに向かって目を細めて笑うオーレンだが、息が乱れている。
さすがの彼も連戦続き、二人相手に疲労を隠しきれない。
だが、彼が笑ったのは意味がないわけではない。
笑顔、というよりは恍惚とした表情だ。

「あぁいい。実に興奮するなぁ。
一人でも二人でも三人でも、俺はぶっ飛ばしてみせるよ。
お前たちには俺の今の気持ち、わかんないだろ。

殺しちゃいけない、ばらばらにしちゃいけない。
こんな制約の元、でも最大限に俺は快楽を得るための努力をしてる。
すごいだろ」
「気持ち悪いよ」
「人生に楽しみがあっていいだろう。俺はこれが楽しみで生きてるようなもの。
そういや、ショウタ君、だっけ？君の楽しみって何？」

突然、ツァイの攻撃をよけながら、ショウタやツァイにつるはしを振り回しながら、オーレンはショウタに問うた。
いきなりなんだ、と心の中で思いながら、ショウタは懐からもう一本ナイフを取り出す。
がきん、と音を立ててつるはしとナイフという奇妙な組み合わせでつばぜり合いが起こる（つばはないが）。
オーレンがショウタの近くで再度繰り返した。

「お前さん、楽しみの一つもなく、何がしたいの？」
「楽しみって言うのは人生にとって必要なことなの？」
「生きがいっていうの知らないの？」
「あいにくだけど、それはすべてを取り戻してから味わうとするよ」

「ふぅーん・・・なるほどね。
君って何かなくしものでもしてるんだ」

ショウタの攻撃をかわしながら、つるはしを振ってオーレンは言った。
先端が服をかすめ、無理な体勢で避けたショウタは地面に倒れる直前に再度ナイフを投げる。
今度はそんな隙を与えず、オーレンがナイフを叩き落とした。
地面に手をつき、起き上がると、ショウタは最後の一本のナイフを

左足にくくりつけてあるポーチから取り出した。
そして、先ほどの会話に答えた。

「俺は記憶を失って何も覚えていない。
俺がどういう人間だったかも、覚えていないから、俺の楽しいことって言うのは正直わからない」
「あれま、大分冷めた考え方だね。
そういうのは記憶が必要なんだ？」
「お前にはわからないさ。すべてを失って頼りがない人間の心境なんて。
いいや、お前には普通の人の感情ってのもわかんないよ」
「言ってくれるね。
まぁあんまり人の感情って言うのに興味がないのは確かだ。
だけどさ、君の行動や考えって言うのはなんとなくわかったよ。
君が今はない、自分からいなくなってしまった記憶とやらに責任を押し付けているってことがね」
「なんだって？」

ショウタの手が止まる。一瞬、ぴり、と右手が痺れたような気がした。
胃のあたりから何かがせり上がってきそうだ。
ショウタはぐっと、それを抑え込みながら叫んだ。
本当は声に出すつもりではなかったが、気がつけば大声でオーレンに向かって言っていた。

「他人のお前に言われたくない！何も知らないお前に何がわかる！」

ショウタにしては珍しく荒げた語気に、ツァイが振り返る。
彼女の何か言いたげな視線に気を取られていると、左腕に激痛が走

った。
つるはしの先端に傷つけられた腕から鮮血が走り、ショウタは半ば反射的に体をひねり、オーレンから離れた。
ショウタの血がついたつるはしを振り回したオーレンは、激昂したショウタにあっさりとした口調で答えた。

「何も知らない？当たり前じゃん。
だって俺、君と出会ってそう時間も経っていないし、そもそも接点なかったでしょ。
俺のいうなんとなくわかるっていうのは俺が今まで生きてきて経験してきてその中で出会った数々の人との対話や付き合いから予想したまでのこと。
適当なことを言ったって当然だし、君に気を遣う義理が俺にはない。
そんなことにいちいち目くじらたてんなよ。お若いの。
ショウタ君にとってそれが本当に命よりも大切なものなら、何言われたってぶれちゃだめだろ？」

火を噴くような痛みを抑えつけながら、ショウタはオーレンの話を聞いた。
悔しいことに今言われたことに反論できるだけの冷静な頭脳が働かない。
だが、

「そうだね、何言われたってぶれちゃいけない。
お前はやっぱりむかつくし、お前になんやかんや言われていい気分はしないからな！
だからとりあえず、黙ってろこんにゃろー！」

やる気一発。

比較的おとなしい性格のショウタが時折叫ぶもんなので、ツァイが目を丸くする。
崩れた石板の石を掴むと、オーレンに投げつけた。
顔面めがけて飛んでくる石をつるはしではたき落としたオーレンに向かって、ショウタが突進する。
「ショウタ！」
ツァイが叫んでもショウタには聞こえていない。
何を無謀なことを。返り討ちにあってしまう。
「よっしゃこのままホームラン！」
オーレンが喜々と叫んだ。
そしてぶんっと思いっきりつるはしを振り回した。
しかし、そこに期待した手ごたえはなかった。
それよりも、さきほどまで自分に向かって走ってきていたショウタがいない。
気配がない。

次の瞬間、息を吸うぐらいの瞬間だった。
顎に強烈な一撃をくらい、オーレンは初めてショウタが下から現れたのを確認した。
声も出ず、そのまま吹き飛ばされた。
現役を退いているとはいえ元ハンター。こんなど素人相手に隙を見せるはずがない。
そしてそれはツァイにもわかっていたし、何よりオーレンの親友であり彼と手合わせしたラルゴでさえ分かっている。
なので、誰もが息をのむほど驚いてしまったのだ。
「オーレン！」
鎧の中のハイドラが叫ぶ。
その声が聞こえているのか聞こえていないのか。
オーレンはちかちかとする視界の片隅にショウタを見つけると、右腕を伸ばした。

振り回したつるはしに、決して闇雲に振ったわけではないそれだが、手ごたえを感じることはやはりなかった。
そして次は鳩尾に強い打撃を食らい、そのまま場外に吹き飛ばされてしまった。

どういうことだ。
オーレンの頭の中には混乱よりも怒りのほうが早くに回った。
己の身一つで裏の世界に飛び込んでいるオーレンには、ショウタが自分よりも格上とは思えなかった。
しかしこの動き、先ほどの人物と果たして同じか。
魔術か、とも思ったが確証はない。
それよりも、怒りが先に回ったのにはわけがある。
オーレンの悪い癖で、快楽主義に走るが故、相手を甘く見ることが多々ある。
だが、それだとしても決めるときには決めてきた。
今回を除いて。
目の前にいる少年、ショウタという少年はオーレンの予想をいくつも裏切ったのだ。

ツァイは驚きを隠せなかったが、冷静にショウタのほうを見た。
今までそんな動きを見せたことがなかった。
なのに、ショウタは誰よりも速く動いて見せた。
オーレンがつるはしを振るうわずかな瞬間に身をかがめ、彼の懐に入り、そのままオーレンの顎に蹴りを一発食らわせた。
彼の意識が戻るまでのコンマ何秒の間に体勢を整えると、次は鳩尾に一発。
鮮やかで無駄のないそれは、ハンターや殺し屋のそれに近い。
ショウタはただの考古学者だ。彼の記憶しているうちでは。
だがもしかしたら、特殊な訓練を受けてきた人間なのではないか、とツァイが勘繰る。

今のショウタの雰囲気は、いつもの彼の物ではなかったから。

「・・・ふぅ」

ひとつためいき。

ショウタが体の力を抜くと同時に、先ほどまでのぴり、とした空気が消え、元のショウタに戻った。

まるで先ほどだけ、別人が乗り移ったかのようだった。

「・・・な、なんということだ・・・

今の彼の動き、俺には速すぎて見えなかったー！見えなかったけれどなんかすごかったぞー！」

司会者がなんとも無責任なことをいう。

結局オーレンは気を失ってしまい、そのまま１０カウントで負けてしまった。

「すごい・・・俺、オーレンに勝っちゃったの？」

そのとき、なぜか伸した張本人が驚いてツァイに尋ねた。

「ショウタ、今の動きは一体どこで？」

「いや、俺にはよくわからないよ。

ただあいつにいわれたことにかちんときて、とりあえずぶんなぐるって思ってやっただけ」

「さーて！残るは知り合い同士！

ツァイとショウタの一騎打ちだー！」

司会者が煽れば会場も盛り上がる。

だが、この後のことはショウタもどうすべきか考えあぐねていた。

「ツァイ、俺、ジェレイドぶっ飛ばさないといけないから・・・」

だからツァイに降参して、と言おうとした。

しかし、そういう前に彼女がつかつかとショウタに歩み寄ってきた。

どうしたの？と聞く前にツァイはショウタの肩を押してぐいぐいと歩き続けた。

「ちょちょちょちょ？？？」
「ショウタ、すまない」
そのまま二人は場外に出てしまった。
そしてツァイはショウタの服の袖に彼女のナイフを一本、一本と壁に縫い付けた。
その数１０本。あっという間にショウタは身動きが取れなくなった。
「ツァイ！？どうして」
「すまない、決めたんだ」
それだけ言うと、ツァイはひとり、リングに戻った。
「おーっと、まさかまさか！カウントを取らせてもらうぞー」
「えぇー！？ちょちょっと！待ってよ！」
ショウタが慌てて腕を動かそうとするが、肩、袖としっかりと固定されてしまって抜くことができない。
そうこうしている間に１０カウントを取られてしまった。
「ざんねーん！ショウタアウトー！つまりこれはツァイの勝利というわけだ！
それじゃ最後の最後！いよいよジェレイドのおでましだー！」
「うそぉ・・・」
がく、と頭を垂れたショウタだったが、すぐに顔をあげた。
ツァイが何をしようとしているのか、ショウタにはすぐに理解できなかった。
それは自分が自分が、と先走っていたから忘れていたことだったのだが。
「あ・・・」

思わず声を漏らす。
ジェレイドとツァイが向き合っている。
ショウタの位置からは二人の表情をうかがうことができない。
彼女が今、何を思い、そこに立っているのかなんて、それこそさらにうかがうことができない。
今の今まで沈黙を守ってきたツァイが、何を思ってジェレイドの前にいるのだろうか。

長い沈黙を保った二人は、言葉も交わさず、間合いを取って構えた。

ジェレイドに話す代わりに、ツァイはショウタに声をかけた。

「ショウタ、お前がジェレイドと一騎打ちをし、テレジーや仲間たちを守ろうとしてくれたその決意、私に買わせてほしい」

ツァイの凛とした声に、ショウタは答えた。
「買わせてほしいも何も、もうやる気じゃないか。
それは・・・ツァイの過去に関することなの？」
「そう、だな。
私は私の責任で、ジェレイドのバカな真似をやめさせなければならない。
ずっと黙っていたのは、言う必要がないからで、無意味な情報を与えることは皆にとって気の毒だと思ったからだ。
ここで私がジェレイドと向き合うことは、私の過去の償いになるかもしれない。
すまない」

さっきからツァイは謝ってばかりだ、とショウタは思った。

そう思った時にはすでに試合が始まっていた。

お互いに武器は使わない。
激しい攻防、急所を交わし、相手に決定打を繰り出す。
実力は互角だった。一体どう勝負がつくかなんかわからなかった。
これを見れば、ショウタが残ったところでジェレイド相手に勝てるわけがなかっただろう。

そして、決着は運ともいえる一瞬だった。
ツァイの突きがジェレイドに当たり、とうとう彼が膝をついたのだ。

観客からの歓声にカウントがかき消されかけている。
お互い息は荒く、先ほどの攻撃が最大のチャンスだったといえた。

「くっ・・・さすがだな、ツァイ・リン」
はぁ、はぁと息を荒げながらジェレイドが言う。
彼女もまた今にも倒れそうなほどぼろぼろだったが、再度拳を構え、ジェレイドを睨みつけた。
ジェレイドは立ち上がることを放棄したのか、ツァイに話しかけた。

「俺との対峙が自らの罪の清算、と考えているようだな。
だが、俺にはわかる。
お前はそこらへんの殺し屋でもハンターでもない。
お前と俺は、同じだからな。
仲間を思い、仲間を守ろうとしているようだが、それがいったいどこまでできるのか。
俺と違うというのなら、見せてもらおう。
今後のお前に、その覚悟があるのなら」

会場が歓声に包まれる。
新たなチャンピオンに向けて、称賛の嵐が降り注ぐ。
彼女はその栄光に対し、笑顔一つ見せなかった。
司会者からのヒーローインタビューまがいのものも端的に受け流すと、ツァイはショウタのほうに向かって歩き出した。
そして、刺さったナイフをすべて抜いて、彼を自由にした。
一部始終を見て、聞いたショウタに対し、弱弱しく笑って。

「マリには黙っていてほしい」

とだけ言って。

59話　祭りの後に

「いててて・・・」
「動かないで。ちゃんと治療してあげるから」
「信用できないなー」
「私はちゃんとした医術学問所の卒業生なの。それくらいは信じてよ」

数々の擦り傷や打撲をつくったオーレンを甲斐甲斐しく治療しているのはハイドラだ。
ぶつくさ言いながらも、たどたどしく怪我を手当てしてくれるハイドラに、オーレンはサンキュ、と一言言った。

イベントが終わり、人々が会場を後にし、残ったのは運営者たちだけだ。片づけに入っていた。
医務室に行かず、適当につばつけときゃ治ると言ったオーレンに、ハイドラが手持ちの荷物からこうして治療をしているのだ。
リングが片づけられ、ただの円形劇場に戻ったそこは、次はオーケストラの演奏会の準備が始まっていた。

「ねぇオーレン」
ハイドラが声をかける。
「油断したの？」
「別に、そういうわけじゃないけどさ」
「ショウタ君より弱かったっけ？」
「俺でも怒るぜ？」
「わかってる、冗談だよ。
オーレンの腕っ節は、嫌だけれど認めてあげる。

じゃああのショウタ君は、なんだったんだろうね。
腕輪の力なのかしら。ううん、そういうのじゃないよね。彼の潜在能力？」
「どっちだってかまわないさ。
ただ、このままノーマークってのもなんだか癪だ。
まぁどうせ、今後あいつらを追っかける必要があるんだ。一応リーダーには報告しとこうぜ」
「そうね」

会場を出て、二人は船内を歩き出す。
「オーレンが試合に出ている間、ドゥドゥーさんから連絡があったわ。
ファドキアについたらシャリディン経由でダニアに向かえって」
「ダニアに？なんで」
「着いたら話すって」
「ふぅん、わかった」
くぁぁ、と大きくあくびをしたオーレンは、そのまま自室に入って行った。
それを見送ったハイドラは、暫く彼の扉の前に立ったままだったが、すぐに隣の自室に入った。
嫌な胸騒ぎは試合が終わった後も続いていて、どうも落ち着かなかった。
それでも自分は組織の末端なので頭のいうことを聞いて動くしかできない。
「テレジー君、大丈夫かな・・・」
ふと頭をよぎる彼の存在に、ハイドラのつぶやきはベッドに落ちた。

「ツァイ勝っちゃったの!?すごいじゃん!!おめでとー!!」
医務室のベッドに座ったルーマが手を叩いて称賛する。
ツァイは複雑な表情をもう消し去り、単純に自分をほめたルーマに喜びを示していた。
「ありがとう。これで当初の目的だった旅の資金を得ることができたな」
「あ、そういやそんな話だったっけ」
「おいおい、言いだしっぺがそりゃねーだろ。
あー、俺も試合みたかったな」
「僕を送ってくれたから見れなかったんだよね、ごめん」
「いいってことよ」

和やかな雰囲気の医務室に、少しだけ違和感。
マリが布団にくるまったまま、どこかもじもじとしているのにショウタが気付いた。
おそらく気まずくなってしまった空気を元に戻したいのだろう。
彼女は仲間の絆、と言うよりまだ幼く、仲良しであることにこだわる。
しかし、自分の感情をまだ素直に客観視できるほど大人ではない。
どうしていいかわからず、でも不仲であり続けることは嫌なのだ。
そんなマリに気づいてか、ツァイがにこりと笑顔を作る。
それはいつもマリに向けられているものだった。
その笑顔に安堵したのか、つられてマリも笑った。

ひとまず、先ほどのことは考えないようにしよう、と結論付けたのだろうか。
まぁ、マリが駄々をこね続けたところで、ツァイがジェレイドとの関係を喋らないのはショウタには分かり切っていた。
じゃなければ、先ほどの試合の後、ショウタに念押しをしないから

だ。

ツァイとジェレイドが、同じ・・・か・・・

ジェレイドが吐き出した言葉を思い返す。
それがツァイにとっていい意味を持たないのはわかった。
なら、今は黙っているのに越したことはない。
それに、短い付き合いだがショウタにはツァイがジェレイドと同じとは思えなかったからだ。
過去に何があったかは知らないが、今のツァイには関係ないから。

ふ、と、

そんなことを思った自分に、ショウタははっとした。
今の自分、そして、過去の自分。
オーレンが言ったこと、そして、テレジーが以前自分に言ったことも思い出す。

俺は、自分の失った過去と己の本質を同じにしている、のかな。

それが正しいのか正しくないのか、それはショウタに判断できなかった。

先ほどからショウタが黙っているものだから、ラルゴがどうしたよ、と声をかけたが、ショウタは首を横に振ってなんでもないとだけ答えた。
「みんな大丈夫そうだよね。
そろそろクインとテレジーのところに行こう?」
「そうだね」

クインの部屋のドアが開いた。
「おかえりなさい」
彼女が出迎えたのは、先ほど出て行ったテレジーだった。
不機嫌そうな顔で彼女を睨むと、黙ってソファに座った。
「私と一緒にいるのが嫌で出て行ったのでは？」
「あいつらが来るから、ここにいないとまたうるさいだろう」
クインの言葉にテレジーは否定しない。
半ば事実であったからだ。
「試合、どうでした？」
「あの女が勝った」
「ツァイさんが？さすがですね」

その報告に、クインは感嘆の声を表すが、すぐに眉を寄せた。
切なそうに陰ったその表情に、テレジーは目を細めて尋ねた。

「お前は、あの女と魔術師の娘、どちらがうらやましいんだ？」

クインは答えなかった。
そして、部屋にショウタたちが入ってくるまで一言も口を開くことはなかった。
その時の彼女はいつもと同じように穏やかに笑い、優しい声音で会話をしていた。
ふう、と鼻でため息をついたテレジーは、ふと自らの右の掌に目を落とした。
すっと一本、新しい傷跡が一つ。
ここからあふれた赤をクインに渡した。

ふと、テレジーは思う。
いつまでも、こうありつづけることはもうできない。
そしてそのタイムリミットは近いのかもしれない、と。
笑顔で会話をする誰にもそのことはわからない。
わかっているのは、クインだけなのだ。
そして彼女はひとつとして語らない。
今はまだ、こうであればいいのだとテレジーに言うように、クインはテレジーに微笑んだ。
その笑みを返すことはない。

心のうちに深く、渦巻くものを抱えたまま、船はファドキア国へ向かう。

60話　深雪のなか

かじかむ手を温めながら、ショウタは手のひらの中の探知機を見る。
弱弱しい反応から、このあたり、少なくても国内にそれらしい場所はないかもしれない。
到着して早々、外れを引くとやる気も下がるものだ。

「やっぱりだめそう？」
隣からマリが探知機を覗き見る。
「うん。
王立図書館に戻ろう。寒すぎる。ついでに今後についても話し合わなきゃ」

ファドキア国王都ルスィーヤ。
一年のほとんどを雪が埋め尽くすこの国は、昼間だというのに外は薄暗い。
痛みを感じるほどの冷たさではないが、ずっと外に出ていればじんと芯から体が冷えてくるのがわかる。
ダウンのコートのポケットに手を突っ込み、肩をすぼめて歩きだせば、マリが後ろから小走りでついてくる。
彼女もまた、ふわふわの毛がついたポンチョ型のコートに身を包み、耳当てをして防寒対策は万全だ。

まずはいつもの作業として、碑文探しを始めていた。
しかし探知機の反応からしてあまり期待はできないということが分かった。
後は図書館でファドキアについて調べている5人と合流してから今

後を考えよう、と、ショウタとマリは足早に歩く。

時刻は午後3時。温かいお茶でも飲みたい気分だ。
後ろでマリがへぷしっと小さなくしゃみをする。
レンガ畳の街中を歩く人々はこんな雪道でも慣れた足取りでそれぞれの目的地に向かっていた。
ほのかに灯るランプが雪を赤く染めている。

「そいや、マリってこの隣の国のシャリディンから来たんだよね。シャリディンは寒くないの？」
「うん。どっちかっていうと温暖。シャリディンとファドキアの間に大陸を二分するくらい長い山脈があって、寒波がそこを超えてこないから、て理由だった気がするけど」
「そうなんだ、まぁ確かに寒いとこって言ったらファドキアかダニアぐらいしか聞いたことないな。あんま寒さには慣れてない？」
「うん・・・寒いぃ」

ショウタがきょろきょろとあたりを見渡す。
目に留まったのは売店。そこで温かい飲み物を一つ買うと、ショウタはマリに手渡した。
「いいのぉ？」
「いいよ。俺が連れ出しちゃったしね。マリがいれば何か魔力を感知できるんじゃないかってさ。これは俺のおごり」
「ありがとぉ！」

屈託なく笑うその笑顔に、ショウタの顔もほころんだ。

次の曲がり角を曲がれば図書館まであと少し、というところに差し掛かった時だった。
フードを被ったロングコートの女性がうろうろしているのに気がついた。
深くフードを被っているので顔までは分からない。
なんだろう、と思ったがここは関わらないに越したことはない。
その理由は、

「あの、すみません、・・・あ、すみません・・・」

女性は自分の前を通る人に声を掛けまくっていたのだ。
何かを尋ねているが、うまくいっていないのか。
「ショウタ君、なんだろうね」
「うーん・・・」
もっと近くで確認しようとする。
すると、ようやく彼女が何を尋ね歩いているのかが把握できた。

「すみません、この国の方でしょうか？」
なんとも奇妙な質問だ。
そして、大体通行人が返す言葉はイエスだ。しかし彼女はその答えを望んでいないようだ。
ファドキアの人間だと知ると、残念そうにしているからだ。
一体どこのだれを捜しているというのだろうか。

「関わるのやめよう」
「そ、そうなの・・・？」
「そういうこと。マリ、こっち」

そう言ってショウタは早足で人ごみの中にまぎれて、不思議な女性

から遠ざかって通りを抜けた。
マリも走って後を追いかける。
後ろ目でちらちらと、よそ者を捜す女性を見ながら。

図書館の個室は、円形のテーブルと旧型のテレビが一つだけ置いてあった。
テーブルの上に山ほど資料を乗せていたが、今は誰も手をつけていない。
小休止に入っていて、テレビではノイズ交じりに夕方のニュースが流れていた。

「じゃあファドキアは望み薄いということでしょうか」
「そうなるね。西に進路をとりつつそれらしいところを当たって行きながらシャリディンを目指そう」

はぁ、と重たい空気がただよう。
ここ最近の不発に焦りではないがモチベーションの低下を感じてしまう。
ショウタの提案により西に向かってはいるが、果たしてそれも正しい選択かどうか。
ちなみにショウタはその西というキーワードを名も知らぬ大罪人の女性から言われて素直に従っているだけ。
確証がなく、ここまでうまくいかないと胡散臭く思えてくる。

ふと、テレビを見ていたルーマがボリュームを上げる。
何か興味深いことでもあったのか、と思い、全員の視線がテレビに向けられた。

「エニャールアイシャー王女は公務としてルスィーヤ南部を偵察中、護衛がわずかに目を離した隙にいなくなったとのことです。この件に関しペトラシュカフ国王は声明を・・・」

「王女が行方不明なんだって」

聞きなれぬ音の名前が多く、なんとも複雑な名前の王女だな、と第一印象はそう思った。

ニュースでは新年の挨拶か何かで国民の前に出て手を振っている王女と思しき姿の女性が映像として映っていた。

肩ほどまでもない黒髪にどこか幸薄そうな、弱弱しい笑み。

神経質そうな顔をしていた。

「王室にいて行き詰ったんじゃね？顔がストレスまみれじゃねーか」

適当なことをいうラルゴにテレジーがちらり、と目線を向ける。

それに気付いたラルゴが、あぁ、と一言。

「会ったことあるのか？」

と尋ねた。

あってないような内容にテレジーはめんどくさそうだったが、一応返事をした。

「一度だけな。あれは王女のいつもの顔だ」

「ストレスで逃げだしたんじゃないのかな、事件に巻き込まれたとか」

「だとしたら一大事ですね」

「早く見つかるといいねぇ」

ニュースの話題は比較的長めにこの件について触れていたが、内容が変われば彼らの話題もそこで終わった。

調査を明日に持ち越し、とりあえず宿を工面するため、図書館を後

にすることにした。

図書館で一緒に素泊まり宿について調べていたので、あとは管理人のいる所に出向き鍵をもらうだけだ。

「じゃあ買い出し組と鍵取りに行って部屋片付け組に別れよう」

ショウタ、テレジー、マリが鍵取りに、残りが買い出し組になり、一行は市場で一旦別れた。

ここ最近協調性を見せてくれるテレジーにマリが頻繁に懐くようになった。

お互い話題は魔術についてだのなんだのと、ショウタがあまり入れないような内容だが、それこそこうすれば兄妹のようだ。

なんだかんだで出会って時間がたってきて、彼でさえも仲間意識が芽生えてきたのだろう。

それはショウタにとってもなんとなく嬉しいことだった。

お遊びではないとは思っていても、雰囲気がよければそれだけで楽しい。

たとえ今うまくいっていなかったとしても、幸先良さそうに感じてしまうのは、楽観主義だろうか。

と、その時、

ばしっとショウタは左手を掴まれて、驚いて振り向いた。

何事か！と思ったら、そこには先ほど街かどで見かけたフードの女性がいた。

あれからずいぶんと外で人に声をかけていたのだろう、肩には雪が積もっていた。

そして、しどろもどろになりながら、か細い声でショウタに尋ねた。

「す、すみません！貴方達はファドキアの人でしょうか！？」

まずいことになったな、と思い、言葉につまる。
こういうのは基本面倒事だ。関わらないように、関わらないように・・・
しかし、
「そうだとしたらどうするつもりだ？」
まさかこういうときに口を開くとは思っていなかった人物が喋るもんだから、ショウタとマリの思惑は裏切られた。
テレジーが答えてしまい、それは女性を喜ばせることになってしまった。

「ほ、本当ですか！？国外の人ですね！旅の方ですね！
お願いがあります！金目のものならなんだってお渡しします！
どうか私をかくまってください！」

ほれみろ、言わんこっちゃない、とテレジーに訴えれば、彼もしまったといわんばかり。額を抑えてしまった。
立ち去ろうにもこの女性、がっちりとショウタの手を握ったままだ。
無理に引き離すのも気が引けて、うんとも言えぬこの状況に困り果ててしまった。
女性はショウタの手を握ったまま、裏路地に彼を引きこんだ。
緊張しているのか、声は震えたまま、彼女はゆっくりとフードを取った。
その顔を見て、テレジーの顔がぎょっとしたのをショウタとマリは見逃さなかった。

紫暗色の瞳と下がった細い眉、黒髪は結わえられていた。
誰だろう、とショウタとマリが思った時、テレジーがつぶやいた。

「ファドキア王女・・・」
「え・・・？」
「えぇえ！？」
「し、静かに！！」

叫ぶマリの口を慌てて彼女が塞いだ。
再び彼女はフードを被り、ショウタたちに懇願した。

「お願いします。貴方達の宿に私を連れて行ってください。
私も旅人の一人として、お願いします」
「な、何言っているんですか。えっと、王女様、こんなところにいていいんですか？」
ショウタが声を押し殺して尋ねる。
王女は首を横に振り、言った。
「事情は後でお話ししますから、お願いします」
お願いしますの一点張りで、どうしようもない。
ここにい続けるわけにもいかず、ショウタは寒さから来る頭痛にも似た痛さを感じながら、ひとまず彼女の手を引くことにした。

そんな光景を一人の少女と背の高い人物が目撃していた。

「あら、エナ王女とショウタさんたち。
うーん、何かあったのかしら。パイアロッテ、わかる？」
「アイリーンお嬢様、エニャールアイシャー王女は本日公務中に行方不明の状態です。
その彼女がショウタ様たちに何か特別な用事があるようです。
それはこの国の人間ではだめなご様子」

「ふぅん。大変ね。
よし！私も協力しよう！」

会話をしていたのは、”大罪人”のアイリーンと彼女につきそう白い仮面の男、パイアロッテだった。
アイリーンはふわふわのロングヘアーをなびかせながら、路地から出て、ショウタたちの後を追った。
パイアロッテはそんな光景を見送った後、一礼してその場から姿を消した。

「ラルゴ、久しぶりに会うなぁ。いつも通りで、いかなくちゃ」
少女の独り言は、誰に聞かれるわけでもなく、アイリーンはショウタたちの足跡をたどって走り去った。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

　ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n5589m/

Crash×Clash

2012年1月15日01時55分発行